東九州自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

－ 26 －

塔田琵琶田遺跡第４次（本文編）

福岡県豊前市久路土所在遺跡の調査

2016

九州歴史資料館

東九州自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

－ 26 －

塔田琵琶田遺跡第４次（本文編）

福岡県豊前市久路土所在遺跡の調査

2016

九州歴史資料館

序

福岡県では、平成19年度より、東九州自動車道（苅田北九州IC以南）に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。本報告書は平成24年度に行った、福岡県豊前市に所在する塔田琵琶田遺跡第4次調査の記録です。

塔田琵琶田遺跡は、開発により現在は水田の中に埋没していますが、本来は尾根状微高地の上に広がっていた、古墳時代前期・後期、古代の集落跡です。古墳時代後期の集落からは、「L字状カマド」と呼ばれる、朝鮮半島からの影響を受けたと考えられる特徴的な遺構が数多く出土しています。また、鎌や鋤先などの鉄器が多数出土し、あるいは滑石製の玉作りを行ってたことが判明するなど、注目される調査成果が上げられています。

本報告書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに、深く感謝いたします。

平成28年3月31日

九州歴史資料館

館長　**杉光　誠**

例　言

1．本書は、東九州自動車道建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県豊前市久路土所在の塔田琵琶田遺跡第4次調査の報告である。東九州自動車道（以下、「東九州道」とする）関係埋蔵文化財調査報告の第26集にあたる。

2．発掘調査と整理報告は、西日本高速道路株式会社（以下、「ネクスコ西日本（株）」とする）の委託を受けて、九州歴史資料館が実施した。

3．本書に掲載した遺構写真の撮影は小澤佳憲・城門義廣・細石朋希が、また遺物写真は北岡伸一が行った。空中写真の撮影は（有）空中写真企画に委託し、ラジコンヘリコプターによる撮影を行ったほか、同社の好意により無償で提供を受けた。

4．本書に掲載した遺構図の作成は小澤・城門・細石が行い、発掘作業員が補助した。

5．出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、小川泰樹・岡田諭の指導の下に実施した。

6．出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。

7．本書に使用した分布図は国土交通省国土地理院発行の1/50,000 地形図「椎田」・「中津」・「下河内」・「土佐井」を加筆改変したものである。また、本書に使用した調査区位置図は豊前市発行の1/2,500基本図を加筆改変したものである。

8. 本書で使用する方位は、世界測地系による座標北である。

9. 本書の執筆は小澤・細石・小林啓・岩橋由季、（株）パレオ・ラボAMS年代測定グループが担当し、総括のみ文中に執筆者を明示した。本書の編集は小澤が担当した。

目　次

Ⅰ　はじめに…… 2
1　調査の経過 …… 2
2　調査の組織 …… 6

Ⅱ　位置と環境…… 8
1　地理的環境 …… 8
2　歴史的環境 …… 9

Ⅲ　調査の報告…… 14
1　調査の概要 …… 14
2　Ⅰ区の調査成果 …… 15
（1）概要 …… 15
（2）竪穴住居跡 …… 15
（3）掘立柱建物跡 …… 139
（4）土坑 …… 142
（5）溝跡 …… 144
（6）その他の出土遺構 …… 146
（7）その他の出土遺物 …… 153
（8）小結 …… 195
3　Ⅱ区の調査成果 …… 196
（1）概要 …… 196
（2）竪穴住居跡 …… 197
（3）土坑 …… 242
（4）甕棺墓 …… 243
（5）その他の出土遺構 …… 245
（6）その他の出土遺物 …… 248
（7）小結 …… 251

Ⅳ　総括…… 252
1　竪穴住居跡出土炭化物の年代測定結果 …… 252
2　放射性年代測定結果の評価 …… 257
3　おわりに …… 259

挿図目次

第１図　　東九州自動車道の概略と調査地点（中津工事事務所管内分）…… 1
第２図　　調査地点位置図（1/5,000）…… 5

第 3 図　周辺遺跡分布図（1/50,000）……10
第 4 図　塔田琵琶田遺跡第 4 次調査遺構分布略図（1/600）……13
第 5 図　塔田琵琶田遺跡第 4 次調査Ⅰ区主要遺構分布図（1/300）……16
第 6 図　1 ～ 4 号竪穴住居跡実測図（1/60）……19
第 7 図　1 ～ 3 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……19
第 8 図　5･6・29 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）……21
第 9 図　5 号竪穴住居跡出土土器実測図その①（1/3）……22
第 10 図　5 号竪穴住居跡出土土器実測図その②（1/3）……23
第 11 図　7 ～ 9 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）……26
第 12 図　5 ～ 11 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……28
第 13 図　10 ～ 12 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）……30
第 14 図　7･10 ～ 12 号竪穴住居跡出土土器実測図（1 は 1/6、他は 1/3）……31
第 15 図　13 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）……32
第 16 図　14 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）……34
第 17 図　13 号竪穴住居跡出土土器実測図、14 号竪穴住居跡出土土器実測図その①（1/3）……36
第 18 図　14 号竪穴住居跡出土土器実測図その②（1/3）……37
第 19 図　15 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）……38
第 20 図　15 号竪穴住居跡出土土器実測図その①（1/3）……40
第 21 図　15 号竪穴住居跡出土土器実測図その②（1/3）……41
第 22 図　15 号竪穴住居跡出土土器実測図その③（1/3）……42
第 23 図　16･18 ～ 20 号竪穴住居跡・カマド他実測図（1/60･1/30）……43
第 24 図　17 号竪穴住居跡実測図（1/60）……44
第 25 図　16･17 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……45
第 26 図　21 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）……47
第 27 図　22 ～ 24 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）……49
第 28 図　18 ～ 24 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……50
第 29 図　25 ～ 28 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）……54
第 30 図　25 ～ 27 号竪穴住居跡出土土器実測図（1 は 1/6、2･3 は 1/4、他は 1/3）……55
第 31 図　30 ～ 33 号竪穴住居跡実測図（1/60）……57
第 32 図　34 ～ 36 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）……59
第 33 図　28･31 ～ 35 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……61
第 34 図　37･38 号竪穴住居跡実測図（1/60）……63
第 35 図　37･38 号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……64
第 36 図　36 ～ 38 号竪穴住居跡出土土器実測図（5 は 1/6、他は 1/3）……65
第 37 図　39･40･42 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）……67
第 38 図　39 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……68
第 39 図　41 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）……70
第 40 図　43･44 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）……72
第 41 図　40 ～ 44 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……73
第 42 図　44 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……74

第 43 図　45 ～ 47 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）……76
第 44 図　45･46 号竪穴住居跡出土土器実測図（9 ～ 11 は 1/4、他は 1/3）……77
第 45 図　48･49･100 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）……79
第 46 図　47･48 号竪穴住居跡出土土器実測図（9 ～ 11 は 1/4、他は 1/3）……80
第 47 図　50 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）……83
第 48 図　51 ～ 53 号竪穴住居跡実測図（1/60）……85
第 49 図　49 ～ 51 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……86
第 50 図　54･55･58･59 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）……88
第 51 図　52 ～ 55 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……89
第 52 図　56 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）……90
第 53 図　57 号竪穴住居跡実測図（1/60）……92
第 54 図　60･61 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）……93
第 55 図　56･57･60 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……94
第 56 図　55･60･61 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……96
第 57 図　62･68 号竪穴住居跡・カマド・土器埋納遺構実測図（1/60･1/30）……97
第 58 図　62 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……98
第 59 図　63･64･69 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）…… 101
第 60 図　62 ～ 64 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 102
第 61 図　65 ～ 67 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 104
第 62 図　65･68･69 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 106
第 63 図　70 ～ 73 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）…… 108
第 64 図　74･76･77 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）…… 110
第 65 図　75 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）…… 111
第 66 図　78 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）…… 113
第 67 図　70･74 ～ 76･78･79 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 115
第 68 図　79 ～ 81 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）…… 117
第 69 図　82 ～ 85 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 119
第 70 図　80 ～ 83 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 120
第 71 図　86･87･101 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）…… 122
第 72 図　84 ～ 86 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 123
第 73 図　87 号竪穴住居跡出土土器実測図その①（1/3）…… 124
第 74 図　87 号竪穴住居跡出土土器実測図その②、
88･89 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 125
第 75 図　88･89 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）…… 126
第 76 図　90･91 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）…… 128
第 77 図　92･94 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 131
第 78 図　93･95 ～ 97 号竪穴住居跡実測図（1/60･1/30）…… 132
第 79 図　90･92･93 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 133
第 80 図　98･99･102･103 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）…… 135
第 81 図　104 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 136

第 82 図　94 ～ 97、100 ～ 102、104 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 137
第 83 図　103 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 138
第 84 図　1 ～ 3 号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 140
第 85 図　1 ～ 3 号掘立柱建物跡出土土器実測図（1/3）…… 141
第 86 図　1 ～ 3 号土坑実測図（1/40）…… 143
第 87 図　1 号土坑、1･3 号溝出土土器実測図（1/3）…… 144
第 88 図　SX － 01 谷状落ち込み遺構出土土器実測図（1/3）…… 145
第 89 図　SX － 02 谷状落ち込み遺構出土土器実測図その①（6 ～ 11 は 1/4、他は 1/3）…… 147
第 90 図　SX － 02 谷状落ち込み遺構出土土器実測図その②（1/3）…… 149
第 91 図　SX － 02 谷状落ち込み遺構出土土器実測図その③（1/3）…… 150
第 92 図　Ⅰ区ピット出土土器実測図（1･12 は 1/4、他は 1/3）…… 151
第 93 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図その①（1 ～ 3 は 1/3、他は 1/4）…… 153
第 94 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図その②（1/3）…… 154
第 95 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図その③（1/3）…… 155
第 96 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図その④（1/3）…… 156
第 97 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図その⑤（1/3）…… 157
第 98 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図その⑥（1/3）…… 159
第 99 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図その⑦（1/3）…… 160
第 100 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図その⑧（281 は 1/6、他は 1/3）…… 161
第 101 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図その⑨（1/3）…… 162
第 102 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図その⑩（1/3）…… 164
第 103 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図その⑪（1/3）…… 165
第 104 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図その⑫（1/3）…… 166
第 105 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図その⑬（1/3）…… 167
第 106 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図その⑭（1/3）…… 168
第 107 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図その⑮（1/3）…… 169
第 108 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図その⑯（1/3）…… 170
第 109 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図その⑰（1/3）…… 171
第 110 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図その⑱（1/3）…… 172
第 111 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図その⑲（1/3）…… 137
第 112 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図その⑳（1/3）…… 174
第 113 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図その㉑（1/3）…… 175
第 114 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図その㉒（1/3）…… 176
第 115 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図その㉓（1/3）…… 177
第 116 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図その㉔（1/3）…… 178
第 117 図　Ⅰ区出土土製品実測図その①（1/2）…… 179
第 118 図　Ⅰ区出土土製品実測図その②（1/2）…… 180
第 119 図　Ⅰ区出土土製品実測図その③（1/2）…… 181
第 120 図　Ⅰ区出土土製品実測図その④、同ガラス製品実測図（118 は 1/1、他は 1/2）…… 182
第 121 図　Ⅰ区出土石器・石製品実測図その①（1/2）…… 183

第 122 図　Ⅰ区出土石器・石製品実測図その②（1/4）…… 184
第 123 図　Ⅰ区出土滑石製品等実測図その①（1/1）…… 185
第 124 図　Ⅰ区出土滑石製品等実測図その②（1/1）…… 187
第 125 図　Ⅰ区出土滑石製品等実測図その③（1/1）…… 188
第 126 図　Ⅰ区出土滑石製品等実測図その④（1/1）…… 189
第 127 図　Ⅰ区出土滑石製品等実測図その⑤（1/1）…… 190
第 128 図　Ⅰ区出土滑石製品等実測図その⑥（1/1）…… 191
第 129 図　Ⅰ区出土金属器等実測図その①（1/2）…… 193
第 130 図　Ⅰ区出土金属器等実測図その②（1/2）…… 194
第 131 図　4 次調査Ⅱ区遺構配置図（1/300）…… 196
第 132 図　105 ～ 107 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）…… 198
第 133 図　105･106 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 199
第 134 図　107 号竪穴住居跡出土土器実測図その①（1 は 1/4、他は 1/3）…… 200
第 135 図　107 号竪穴住居跡出土土器実測図その②（1/3）…… 201
第 136 図　108 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）…… 202
第 137 図　109 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）…… 204
第 138 図　110･111 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）…… 205
第 139 図　108 ～ 111 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 206
第 140 図　113･144 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）…… 207
第 141 図　114 ～ 116 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 209
第 142 図　112 ～ 114 号竪穴住居跡出土土器実測図、
　　115 号竪穴住居跡出土土器実測図その①（1/3）…… 210
第 143 図　115 号竪穴住居跡出土土器実測図その②、
　　116 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 211
第 144 図　117･118 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 212
第 145 図　119･121･122 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 213
第 146 図　117 ～ 119 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 214
第 147 図　123 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）…… 216
第 148 図　122･123 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 217
第 149 図　124･125 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 218
第 150 図　124･125 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 220
第 151 図　126 ～ 130 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 222
第 152 図　126･127 号竪穴住居跡出土土器実測図（6 は 1/4、他は 1/3）…… 223
第 153 図　129･130 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 224
第 154 図　131 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 225
第 155 図　131 号竪穴住居跡出土土器実測図その①（1/3）…… 226
第 156 図　131 号竪穴住居跡出土土器実測図その②（1/3）…… 227
第 157 図　131 号竪穴住居跡出土土器実測図その③（1/3）…… 228
第 158 図　132 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）…… 230
第 159 図　132 号竪穴住居跡出土土器実測図その①（1/3）…… 231

第 160 図　132 号竪穴住居跡出土土器実測図その②（1/3）…… 232
第 161 図　133 ～ 138 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 234
第 162 図　133 ～ 136 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 235
第 163 図　138 号竪穴住居跡出土土器実測図（1 は 1/4、他は 1/3）…… 236
第 164 図　139 ～ 141 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 237
第 165 図　142･143･145 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 238
第 166 図　140･142･144 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 239
第 167 図　132･138 号竪穴住居跡下層出土土器実測図（1/4）…… 240
第 168 図　4 ～ 6 号土坑実測図（1/40）…… 242
第 169 図　4･5 号土坑出土土器実測図（1/3）…… 243
第 170 図　1･2 号甕棺墓実測図（1/40）…… 244
第 171 図　1･2 号甕棺墓出土土器実測図（1/4）…… 244
第 172 図　1 号土器埋設遺構実測図（1/30）…… 245
第 173 図　1 号土器埋設遺構出土土器実測図（1/4）…… 245
第 174 図　Ⅱ区ピット出土土器実測図（1/3）…… 246
第 175 図　Ⅱ区包含層等出土土器実測図その①（1 ～ 3 は 1/4、他は 1/3）…… 247
第 176 図　Ⅱ区包含層等出土土器実測図その②（1/3）…… 248
第 177 図　Ⅱ区出土土製品実測図（1/2）…… 249
第 178 図　Ⅱ区出土石器実測図（9 は 1/3、他は 1/2）…… 249
第 179 図　Ⅱ区出土鉄器実測図（1/2）…… 250
第 180 図　分析結果（マルチプロット図）…… 254
第 181 図　暦年代較正結果その①…… 255
第 182 図　暦年代較正結果その②…… 256

表目次

第 1 表　東九州自動車道中津工事事務所管内における埋蔵文化財発掘調査地点一覧…… 3
第 2 表　塔田琵琶田遺跡群における既往の調査…… 4
第 3 表　放射性炭素年代測定試料と処理…… 252
第 4 表　放射性炭素年代測定・暦年較正の結果…… 253
第 5 表　樹種同定結果…… 257
第 6 表　調査区出土竪穴住居跡一覧その①…… 260
第 7 表　調査区出土竪穴住居跡一覧その②…… 261
第 8 表　調査区出土竪穴住居跡一覧その③…… 262
第 9 表　調査区出土土製品等一覧その①…… 263
第 10 表　調査区出土土製品等一覧その②…… 264
第 11 表　調査区出土石器一覧…… 265
第 12 表　調査区出土滑石製品・未製品一覧その①…… 266
第 13 表　調査区出土滑石製品・未製品一覧その②…… 267
第 14 表　調査区出土滑石製品・未製品一覧その③…… 268
第 15 表　調査区出土金属器一覧…… 269
第 16 表　調査区出土石器石材一覧…… 270

（下巻目次）

カラー図版１　東九州自動車道の建設予定地と調査地（上が北）
カラー図版２　調査地付近の微地形（上が北）
図版１　１上空より周防灘を望む（上が北東）２　上空より北東を望む
図版２　１上空より西を望む　２上空より北を望む
図版３　１上空より南を望む　２Ⅰ区上層（合成、上が北）
図版４　１Ⅰ区南西部遺構集中区（上が北）２Ⅰ区南東部遺構集中区（上が北）
図版５　１１号竪穴住居跡（北から）　２２号竪穴住居跡カマド（北から）
３３号竪穴住居跡（東から）
図版６　１４号竪穴住居跡（西から）　２５号竪穴住居跡（東から）
３５号竪穴住居跡カマド（東から）
図版７　１６号竪穴住居跡（北から）　２６号竪穴住居跡カマド（北から）
３７号竪穴住居跡（東から）
図版８　１７号竪穴住居跡カマド（東から）　２８･９号竪穴住居跡（北から）
３10･11号竪穴住居跡（南から）
図版９　１13号竪穴住居跡（東から）　２13号竪穴住居跡カマド（東から）
３13号竪穴住居跡カマド・煙道（南東から）
図版10　１14号竪穴住居跡（東から）　２14号竪穴住居跡カマド（東から）
３14号竪穴住居跡カマド・煙道（南東から）
図版11　１15号竪穴住居跡（東から）　２15号竪穴住居跡カマド（東から）
３15号竪穴住居跡カマド・煙道（南東から）
図版12　１12･16･17号竪穴住居跡（南から）　２18号竪穴住居跡（西から）
３18号竪穴住居跡カマド（南西から）
図版13　１19･20号竪穴住居跡（南から）　２19号竪穴住居跡カマド（南から）
３19号竪穴住居跡内埋納土器（蓋）検出状況　４同（容器）出土状況（いずれも南から）
図版14　１21号竪穴住居跡（南東から）　２21号竪穴住居跡カマド内土器出土状況（南東から）
３21号竪穴住居跡カマド完掘（南東から）
図版15　１22～25号竪穴住居跡（東から）　２22号竪穴住居跡カマド（東から）
３26･27･30号竪穴住居跡（南東から）
図版16　１26号竪穴住居跡カマド（南東から）２31･32号竪穴住居跡、２号土坑（西から）
３34号竪穴住居跡（東から）
図版17　１34号竪穴住居跡カマド（東から）　２35･36号竪穴住居跡（東から）
３37･38号竪穴住居跡（東から）
図版18　１37号竪穴住居跡カマド（東から）　２37号竪穴住居跡カマド・煙道（南東から）
３38号竪穴住居跡カマド（東から）
図版19　１38号竪穴住居跡カマド・煙道（南東から）　２39号竪穴住居跡カマド（東から）
３39･81号竪穴住居跡（東から）
図版20　１41･42号竪穴住居跡（東から）　２41号竪穴住居跡カマド（東から）
３41号竪穴住居跡カマド・煙道（南から）
図版21　１43～45号竪穴住居跡（東から）　２43号竪穴住居跡カマド（南東から）
３46号竪穴住居跡（北から）
図版22　１46号竪穴住居跡カマド（北から）　２47号竪穴住居跡（南から）

3　47 号竪穴住居跡カマド（南から）
図版 23　1　48･49･52･53 号竪穴住居跡（北から）　2　48 号竪穴住居跡カマド（北西から）
3　50 号竪穴住居跡（東から）
図版 24　1　50 号竪穴住居跡カマド（東から）　2　51 号竪穴住居跡（北から）
3　54 号竪穴住居跡（北から）
図版 25　1　55･60･61 号竪穴住居跡（南から）　2　55 号竪穴住居跡カマド（南から）
3　56･57 号竪穴住居跡（東から）
図版 26　1　61 号竪穴住居跡カマド（東から）　2　62･64 号竪穴住居跡（東から）
3　62 号竪穴住居跡カマド（東から）
図版 27　1　62 号竪穴住居跡埋設土器検出状況（北から）　2　同上（南東から）
3　62 号竪穴住居跡埋納土器（容器）検出状況　4　同左完堀状況
図版 28　1　64 号竪穴住居跡カマド（南東から）2　65 ～ 67･70･71 号竪穴住居跡（東から）
3　73 ～ 75･97 号竪穴住居跡（東から）
図版 29　1　75 号竪穴住居跡カマド（東から）　2　75 号竪穴住居跡カマド・煙道（南東から）
3　76･77 号竪穴住居跡（東から）
図版 30　1　76 号竪穴住居跡カマド（南から）　2　78 ～ 80 号竪穴住居跡（東から）
3　78 号竪穴住居跡カマド（東から）
図版 31　1　81 号竪穴住居跡カマド（南から）　2　82 号竪穴住居跡（北から）
3　83 ～ 85 号竪住居跡（南東から）
図版 32　1　86 ～ 88 号竪穴住居跡（東から）　2　87 号竪穴住居跡カマド（東から）
3　88･89 号竪穴住居跡（南から）
図版 33　1　88 号竪穴住居跡カマド（南から）　2　89 号竪穴住居跡カマド（南から）
3　90･91 号竪穴住居跡（南東から）
図版 34　1　94 号竪穴住居跡（東から）　2　95･96 号竪穴住居跡（北から）
3　102･103 号竪穴住居跡（東から）
図版 35　1　103 号竪穴住居跡（東から）　2　103 号竪穴住居跡カマド（東から）
3　1 号掘立柱建物跡（北から）
図版 36　1 号土坑（北から）　2　SX － 02 谷状落ち込み・下層遺構完掘状況（上が北）
図版 37　2･3･5 号竪穴住居跡出土土器
図版 38　5･ 7 ～ 10 号竪穴住居跡出土土器
図版 39　11 ～ 14 号竪穴住居跡出土土器
図版 40　15･16 号竪穴住居跡出土土器
図版 41　17･19･21 号竪穴住居跡出土土器
図版 42　21･26･31･33･34･36 号竪穴住居跡出土土器
図版 43　37･39･40･42 号竪穴住居跡出土土器
図版 44　44 ～ 47 号竪穴住居跡出土土器
図版 45　48 ～ 53 号竪穴住居跡出土土器
図版 46　54･56･57･60 ～ 62 号竪穴住居跡出土土器
図版 47　62･65･75･76･81 号竪穴住居跡出土土器
図版 48　81･84･86･87 号竪穴住居跡出土土器
図版 49　87･88 号竪穴住居跡出土土器
図版 50　89･90･93･94･96･97･101･103･104 号竪穴住居跡出土土器
図版 51　103 号竪穴住居跡、1 号掘立柱建物跡、1 号土坑、SX － 01･02 谷状落ち込み遺構出土土器

図版 52　SX － 02 谷状落ち込み遺構出土土器
図版 53　Ⅰ区ピット出土土器、Ⅰ区包含層等出土土器
図版 54　Ⅰ区包含層等出土土器
図版 55　Ⅰ区包含層等出土土器
図版 56　Ⅰ区包含層等出土土器
図版 57　Ⅰ区出土土製品・石器
図版 58　Ⅰ区出土石器・石製品・滑石製品
図版 59　Ⅰ区出土滑石製品・鉄器
図版 60　Ⅰ区出土鉄器
図版 61　Ⅰ区出土鉄器
図版 62　1　Ⅱ区（上が北）　2　Ⅱ区北東遺構集中部（上が北）
図版 63　1　Ⅱ区北西部遺構集中区（上が北）　2　Ⅱ区南西部遺構集中区（上が北）
図版 64　1　105･106 号竪穴住居跡（南から）　2　107 号竪穴住居跡（南から）
　3　107 号竪穴住居跡カマド（南から）
図版 65　1　108 号竪穴住居跡（東から）　2　108 号竪穴住居跡カマド（東から）
　3　108 号竪穴住居跡カマド・煙道（北東から）
図版 66　1　108 号竪穴住居跡床下検出の 1 号土器埋設遺構（北から）
　2　109 号竪穴住居跡（南から）　3　109 号竪穴住居跡カマド（南から）
図版 67　1　110･111 号竪穴住居跡（東から）　2　111 号竪穴住居跡カマド（東から）
　3　111 号竪穴住居跡カマド・煙道（南東から）
図版 68　1　112 ～ 114･144 号竪穴住居跡（南から）　2　113 号竪穴住居跡カマド（南から）
　3　113 号竪穴住居跡カマド（南西から）
図版 69　1　115･116 号竪穴住居跡（北東から）　2　117 号竪穴住居跡（北から）
　3　118 ～ 120･143 号竪穴住居跡（西から）
図版 70　1　122･123 号竪穴住居跡（東から）　2　123 号竪穴住居跡カマド（東から）
　3　124･142･145 号竪穴住居跡（東から）
図版 71　1　125 号竪穴住居跡（南から）　2　125･126 号竪穴住居跡（北から）
　3　126 ～ 128 号竪穴住居跡（西から）
図版 72　1　131 号竪穴住居跡（北から）　2　132･133･138･147 号竪穴住居跡（東から）
　3　132 号竪穴住居跡カマド（東から）
図版 73　1　132 号竪穴住居跡カマド・煙道（南東から）　2　133 ～ 135 号竪穴住居跡（東から）
　3　140･141 号竪穴住居跡、6 号土坑（南から）
図版 74　1　4 号土坑（西から）　2　5 号土坑土層（北から）　3　5 号土坑完掘状況（西から）
図版 75　1　1 号甕棺墓上層土器出土状況（西から）　2　1 号甕棺墓下層土器出土状況（西から）
　3　2 号甕棺墓（北から）
図版 76　105･107･113･114 号竪穴住居跡出土土器
図版 77　123･125 ～ 127･129･131 号竪穴住居跡出土土器
図版 78　131 号竪穴住居跡出土土器
図版 79　131･132 号竪穴住居跡出土土器
図版 80　132･136･138 号竪穴住居跡出土土器、1 号甕棺墓出土土器
図版 81　1･2 号甕棺墓出土土器、Ⅱ区ピット出土土器、Ⅱ区包含層等出土土器
図版 82　Ⅱ区出土土製品・石器・鉄器

第１図　東九州自動車道の概略と調査地点（中津工事事務所管内分）

Ⅰ　はじめに

1　調査の経過

東九州道の概要　東九州道は、福岡県北九州市を起点として、大分・宮崎・鹿児島の各県を結び、鹿児島市に至る総延長約 436km の高速自動車国道である。九州縦貫道、九州横断道、宮崎道と接続し、ほかの高速自動車道などとともに九州島において広域的な交通ネットワークを形成し、九州地域の総合的な発展を促すとともに、一般道の交通混雑を緩和し、沿道環境を改善して地域間交通を円滑化すること、また緊急時の代替路・迂回路機能などが期待され、計画された。

本道路の建設においては、既存の高速道路との共用部分以外では、椎田道路・宇佐別府道路・延岡道路など、各地において 1990 年代初頭から前半にかけて一般国道自動車専用道路の建設が先行した。その後、各自動車専用道路の間をつなぐように路線の建設が順次進められており、1999 年の大分米良 IC －大分宮河内 IC 間の開通を皮切りに、現在までに北九州 JCT －行橋 IC 間をはじめとする多くの区間で開通している。

県内における東九州道の工事進捗　福岡県内の東九州道建設についてはまず、1991 年にみやこ豊津 IC －椎田南 IC 間が国道 10 号線バイパス（自動車専用道路）として先行して開通した。東九州道（専用道路）としての開通部分は 2006 年の北九州 JCT －苅田北九州空港 IC 間が最も早く、その後未開通部分の建設が順次進められている。2013 年度には苅田北九州空港 IC －行橋 IC 間が、2014 年度には行橋 IC －みやこ豊津 IC 間が開通しており、2017 年度の椎田南 IC －豊前 IC の開通（予定）をもって、県内における東九州道の建設はすべて終了し、全線が開通する見込みとなっている。

東九州道建設に先立つ発掘調査　東九州道の整備計画策定からの文化財調査にかかる経緯については、先行する報告書に詳しく記載されている。本書では、椎田道路以南の建設予定地における発掘調査箇所と一覧を掲載するにとどめ（第 1 図・第 1 表）、詳細は割愛したい。以下では、本書で報告する塔田琵琶田遺跡第 4 次調査の着手までの経緯を簡単に見ておきたい。

既往の調査　塔田琵琶田遺跡は平成 10 年度に圃場整備事業に伴う試掘調査により見つかった遺跡である。この圃場整備事業に先立ち平成 11 年度に豊前市教育委員会により発掘調査が行われ、古墳時代前期・後期を中心とする集落遺跡であることが明らかになった（豊前市教委 2011）。このときの調査箇所は遺跡の広がる南北に細長い埋没微高地の北端部に近い箇所で、調査面積は約 6,000 ㎡ほどであり、遺跡のごく一部を調査したに過ぎないにもかかわらず、弥生時代後期から古墳時代後期にいたる集落跡が出土し、付近に大規模な集落が存在していた可能性が示唆された。特に、古墳時代後期の竪穴住居跡からはいわゆる「L 字状カマド」という特徴的な遺構が多く発見され、本地域における渡来系文物の集中的な発見が文献上の記録と関連づけられるとして注目を浴びた。

調査にいたる経緯　調査地の南側が東九州道の（仮称）豊前 I.C. 予定地となり、用地買収が進捗する中、ネクスコ西日本（株）から買収済み用地内の埋蔵文化財の包蔵の有無について確認するよう依頼があり、買収が終了した土地から順次試掘・本調査に着手することとなった。東九州道建設に先立つ付近における最初の試掘調査は平成 22 年 2 月 10 ～ 12 日･同 10 月 27 ～ 28 日の 2 回にわたって福岡県教育庁総務部文化財保護課によっておこなわれ、広い範囲において濃密に埋蔵文化財が包蔵されていることが判明した。これをうけて、ネクスコ西日本（株）・福岡県文化財保護課・豊前市教育委員会の三者は、（仮称）豊前 I.C. 用地内における発掘調査について協議を行い、平成 23 年

地点	遺跡名	所在地	対象面積（㎡）	試掘年度	調査面積（㎡）	調査年度	報告年度	既刊報告書番号	備考
2	石堂大石ヶ丸遺跡	築上郡築上町石堂	9027	H21 ～ 23	200	H23	H25	15 集	
3	福間菜切古墳群	築上郡築上町上ノ河内	16644	H21 ～ 23	1000	H22	H25	15 集	
4	頭無古墳群 西一町田遺跡	築上郡築上町上ノ河内	19420	H22				-	遺跡なし
5		築上郡築上町上ノ河内	2840	H21				-	遺跡なし
6	中村西峰尾遺跡	築上郡築上町上ノ河内・豊前市中村	26972	H22	15000	H23･24	H25	15 集	
7	中村山柿遺跡	豊前市中村	16579	H21･22	700	H22	H25	15 集	
8		豊前市中村・馬場	10354	H21				-	遺跡なし
9		豊前市中村・松江	42434	H24				-	
10		豊前市松江	9905	H23				-	遺跡なし
11		豊前市松江	26570	H21･23				-	遺跡なし
12	松江黒部遺跡	豊前市松江・四郎丸	14462	H21	600	H23	H25	15 集	
13		豊前市四郎丸	12986	H21･23				-	遺跡なし
14		豊前市四郎丸	2390	H21				-	遺跡なし
15		豊前市四郎丸	9735	H22				-	遺跡なし
16		豊前市四郎丸	10432	H22				-	遺跡なし
17	川内下野添遺跡	豊前市川内	15972	H21 ～ 23	3600	H22･23	H25	15 集	
18		豊前市川内	16040	H21 ～ 23				-	遺跡なし
19	鳥越下屋敷遺跡	豊前市鳥越	4963	H23･24	760	H24	H26	21 集	
20	大村湯福遺跡	豊前市大村	8762	H23･24	1300	H24	H26	21 集	
21		豊前市大村	0					-	遺跡なし
22		豊前市大村	0					-	遺跡なし
23		豊前市大村	0					-	遺跡なし
24	天地山遺跡	豊前市大村	6777	H20・22				-	遺跡なし
25	大村上野地遺跡 大村シトキ田遺跡	豊前市大村・荒堀	10527	H20･22・23	2600	H23 H24	H25	15 集 （H27 予定）	豊前市により調査
26	荒堀山田原遺跡	豊前市荒堀	21821	H21 ～ 24	1000	H22	H25	15 集	
27		豊前市荒堀	9823	H21･22				-	遺跡なし
28		豊前市大西	23122	H21 ～ 23				-	遺跡なし
29	塔田琵琶田遺跡 大西遺跡 西ノ原遺跡 時末遺跡 永久笠田遺跡	豊前市大西・永久・塔田・久路土	63733	H21 ～ 24	35000	H23 ～ H25	H26 ～ H27	22・26・27 集 25 集・市 34 集 25 集・市 37 集 24 集 24 集	一部豊前市により調査 一部豊前市により調査
30	久路土馬踏遺跡	豊前市久路土	9463	H23				-	遺跡なし
31	鬼木溝添遺跡	豊前市鬼木	12636	H23				-	遺跡なし
32	鬼木鉾立遺跡	豊前市鬼木	25256	H21・23	5500	H24	H26	21 集	
33	緒方古墳群 七ッ枝遺跡 春屋敷遺跡 道ノ本遺跡	築上郡上毛町緒方	12456	H20 ～ 23	3500	H20 ～ H22	H24	8 集	上毛町試掘
34	龍毛遺跡	築上郡上毛町緒方	11732	H20･21・23･24	5000	H21･24	H24	8 集	上毛町試掘
35	下尻高遺跡 ハカノ本遺跡	築上郡上毛町緒方・尻高	11517	H20･21	7200	H20･21	H24	7 集	
36	安曇山田遺跡	築上郡上毛町安雲	10135	H20	9400	H20			上毛町により調査
37	安曇山田遺跡	築上郡上毛町安雲・宇野	24970	H20･21		H20･21	H24	7 集	〃
38		築上郡上毛町土佐井	22252	H20				-	遺跡なし
39	土佐井西遺跡	築上郡上毛町土佐井	21860	H20 ～ 22	4400	H22･23	H25	16 集	
40	土佐井東遺跡	築上郡上毛町土佐井	13476	H20 ～ 22	600	H23	H25	16 集	一部上毛町により調査
41	土佐井小迫遺跡 唐原山城跡	築上郡上毛町土佐井	7887	H21･22･24	1500	H22･24	H25	16 集	
42	ガサメキ遺跡 穴ヶ葉山南遺跡	築上郡上毛町下唐原	33002	H21･22･24	4000	H22・24	H26 H25	23 集 16 集	一部上毛町により調査
43		築上郡上毛町下唐原	25215	H21･22･23				-	遺跡なし
44	大久保楢迫遺跡 （新池南古墳）	築上郡上毛町下唐原	13452	H22	7500	H22	H25	16 集	
45		築上郡上毛町下唐原	11997	H24				-	遺跡なし
46	皿山古墳群	築上郡上毛町下唐原・上唐原	23977	H22 ～ 24	12000	H23･24	H26	23 集	
47	四ッ塚山古墳群	築上郡上毛町上唐原	7193	H22･23	6600	H23	H27	28 集	
48	鏡迫古墳群	築上郡上毛町上唐原	4577	H25	2000	H25	H27	28 集	
49	榎町遺跡	築上郡上毛町上唐原	14250	H24	8940	H24・25	H27	28 集	
50	榎町遺跡	築上郡上毛町上唐原	4735	H23	1050	H24・25	H27	28 集	一部上毛町により調査

第１表　東九州自動車道中津工事事務所管内における埋蔵文化財発掘調査地点一覧

度より福岡県文化財保護課の組織改編により文化財の調査部門を所管することになった九州歴史資料館が主担当となって、次年度より発掘調査を開始することで合意した。

東九州道関連の最初の発掘調査（第２次調査）は、九州歴史資料館により平成 23 年４月 12 日より翌 24 年３月 27 日までの約１年間にわたって行われた。この結果、（仮称）豊前 I.C. 北側のほぼ全域に遺跡が広がる可能性が高いことが分かり、周辺の土地についても順次試掘・本調査を進める体制をとることとなった。平成 24 年１月～３月には、2 次調査Ⅰ区の東側に広がる（仮称）豊前 I.C. アクセス道路（県道犀川豊前線）の工事に伴う第３次調査が行われ、そしてそれに引き続き平成 24 年４月 11 日からは遺跡の南側において東九州道建設に先立つ第４次調査が行われることとなった。これが本報告分にあたる。

その後、Ⅱ区の北側にあたる豊前 I.C. アクセス道路の残り部分について、県京築県土整備事務所からの委託により平成 24 ～ 25 年度に九州歴史資料館が発掘調査を行い（第５次調査）、また南側の市道敷部分など買収が最後まで難航した一部の土地についても九州歴史資料館が平成 25 年度に発掘調査を行っている（第６次調査）。これらの調査により、塔田琵琶田遺跡群は推定される集落の広がりのうち東側と北側の一部を除くほぼ全域が調査されたものと考えられる。

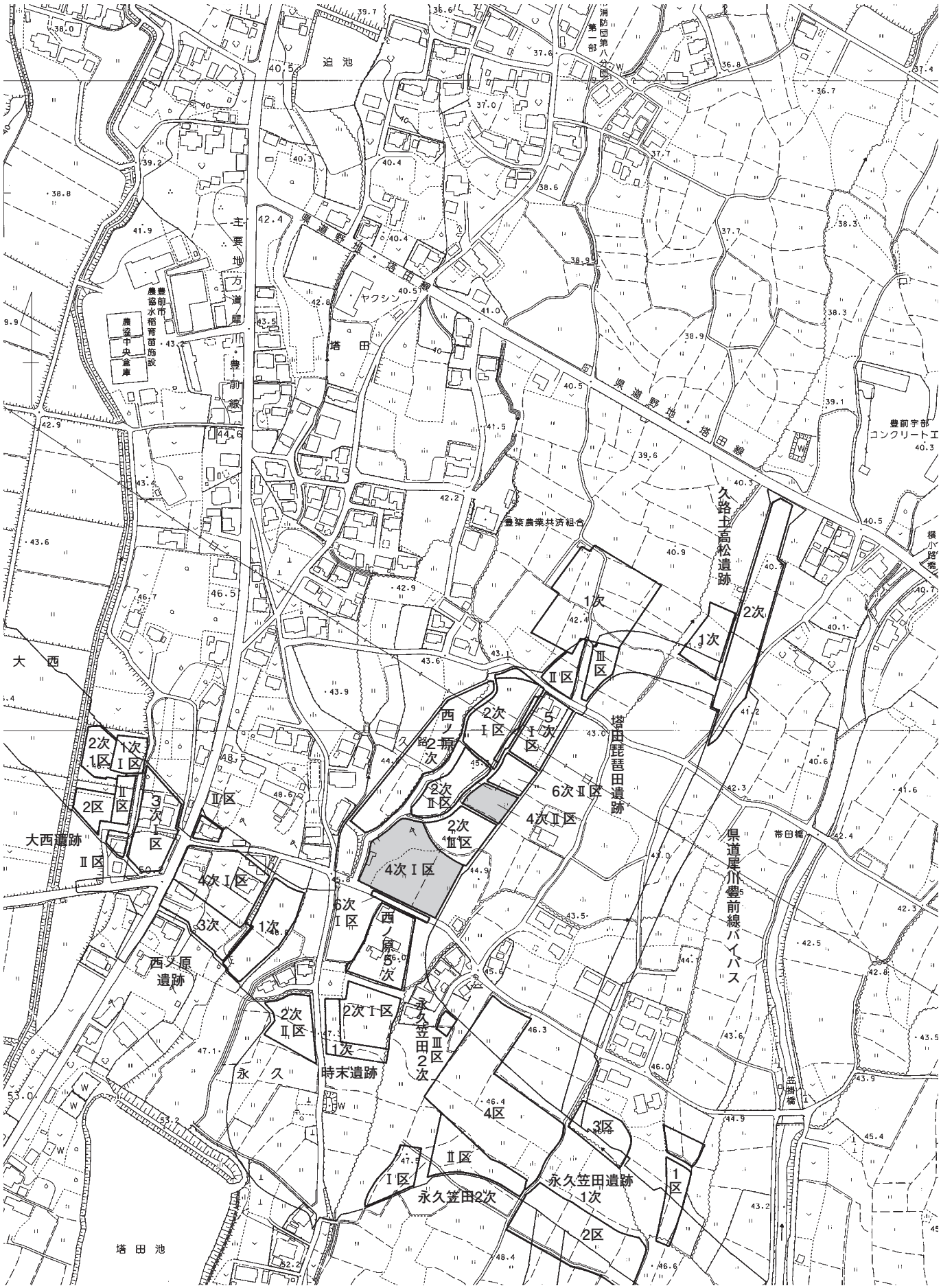
なお、第４次調査地から市道を挟んで南側については、豊前市教育委員会により平成 24 年度に「西ノ原遺跡第５次（D 区）」として発掘調査が行われ、またそこからさらに用水路を挟んで南側の筆については、九州歴史資料館が平成 23･24 年度に「時末遺跡第 1･2 次」として発掘調査を行っているが、これらの調査地からも北側で行われた塔田琵琶田遺跡第２～６次調査とほぼ同様の内容の遺構・遺物が出土している。微地形的に見てもこれら相互の間に断絶は認められず、古墳時代においてはこれらすべての範囲に一つの大規模な集落単位が広がっていたと推測される。よって、以下ではこれらの範囲を包括して「塔田琵琶田遺跡群」という名称を用いることとしたい。

遺跡名	調査次数	調査年度	調査原因	調査主体	報告
塔田琵琶田遺跡	第１次	H11	圃場整備	豊前市教育委員会	豊前市報 29 集
〃	第２次	H23	東九州道建設	九州歴史資料館	東九州道 22 集
〃	第３次	H23	県道犀川豊前線建設	九州歴史資料館	県報 252 集
〃	第４次	H24	東九州道建設	九州歴史資料館	本報
〃	第５次	H24 ～ 25	県道犀川豊前線建設	九州歴史資料館	県報 252 集
〃	第６次	H25	東九州道建設	九州歴史資料館	東九州道 27 集
西ノ原遺跡	第５次	H24	東九州道建設	豊前市教育委員会	豊前市報 37 集
時末遺跡	第１次	H23	東九州道建設	九州歴史資料館	東九州道 24 集
時末遺跡	第２次（Ⅰ区）	H24	東九州道建設	九州歴史資料館	東九州道 24 集

第２表　塔田琵琶田遺跡群における既往の調査

Ⅰ区の調査経過　調査は、第２次調査Ⅱ・Ⅲ区の南側隣接地をⅠ区とし、小澤を主担当として開始した。調査面積は約 3,420㎡である。この部分は、南に隣接する市道に面し、西半分がもと宅地で地山より最大 2m 程の盛土が施されていた一方、東側は水田・畑として利用されており、耕作土と水田床土を除去するとすぐに遺構面が見える状況であった。そこで、まず多量の排土が発生する西側の表土剥ぎを優先して前年度末より行い、４月 11 日より西半で人力を用いた調査に着手した。

Ⅰ区西半部は当初の予想通り遺構面が現地表よりも 2m 近く低い位置にあって、大きく削平されていて遺構の残りは非常に悪い状況であった。特に北半分は深部の地山である黄白色砂礫土が広く露出し、当初より削平の深さを思わせる状況であった。ただし、遺構面の直上には水田床土が人為的に貼られていて、削平が水田耕作に伴うものであることを物語っており、遺構面における撹乱のほとんどは水田耕作に伴う溝などで宅地造成の影響はほとんど見受けられなかった。



第２図　調査地点位置図（1/5,000）

遺構面がかなり削平され遺構の残存状況が悪かったため、西半部の調査は順調に進展した。遺構掘削を終えて空中写真撮影を行ったのが5月16日、その後図化・記録作成をした後に遺跡の北部に広がるSX－02谷状落ち込みとその下層遺構を掘りあげ、西側の調査は5月31日には終了した。

一方、西側の調査と並行して、重機により東側2/3程の範囲の表土剥ぎを進めていた。西側の空撮が終了し、記録作成と並行して5月17日より、東側の遺構検出に着手した。東側の遺構面は西側と比べて50cm～1mほど高く、遺構が比較的良好に遺存しているものと期待されたが、厚さ20cmほどの水田耕作土、10cmほどの厚さの床土を除去すると、礫を多く含む黄褐色砂質土が広がっており、ある程度の削平を受けている状況が垣間見えた。調査区の南東部から遺構検出を開始したが、地山の状況が礫混じりの上に、住居跡がいくつも切り合い、さらに下層には谷状落ち込みの埋土である黒色粘質土が広がるという状況に、調査は難航した。また、調査区の中央より北側には、表土剥ぎの指標としていた水田床土の下層にさらに古い時期の盛土が存在することが途中で判明し、表土剥ぎを一部やり直すことにしたものの、盛土中に多量の遺物が包含されていてその取り扱いに苦慮するなど、初期には調査が遅々として進まず、苦労した。しかし、9月中旬までにはおおよそ全域で遺構面を露出し、遺構検出も進んで全体像が把握できる状態になった。

9月中旬以降は、調査区南東部より検出した遺構を順次掘り下げ、記録作成を進めた。寒さも厳しい1月17日に、ラジコンヘリコプターを用いた空中写真撮影を行い、その後記録作成を行い、最後に谷状落ち込みとその下層の遺構を掘り下げて、年度末も迫る3月12日にⅠ区の調査を終了した。Ⅰ区で検出した主な遺構は、竪穴住居跡104棟、掘立柱建物跡3棟、土坑3基、溝3条、谷状落ち込み2箇所などで、ほかに多くのピットを検出した。これらの遺構群は古墳時代前期・後期・古代に属するが、古代の遺構は本調査区のみの検出であり注目される。出土遺物では、鉄器が多く出土したほか、古墳時代後期の滑石製玉作り関連遺物（未製品含む）が出土し、注目される。

Ⅱ区の調査経過　Ⅰ区の調査と並行して、Ⅱ区の調査を細石が主担当となって行った。Ⅱ区は、第2次調査Ⅲ区の北に接し、同Ⅱ区の東に用水路を挟んで隣り合う水田面で、面積は約580㎡である。Ⅰ区の表土剥ぎが完全に終了した9月より重機をⅡ区に移動して表土剥ぎを開始した。堆積状況はⅠ区東側とほぼ同様で、20cmほどの水田耕作土、10cmほどの床土を除去すると遺構面が露出したため、10月2日より遺構検出に着手した。地山の状況はⅠ区よりもかなり良好で、礫をほとんど含まない暗～暗黄褐色粘質土が広がっていたが、その分埋土と地山の区別が付きにくく、遺構検出はかなり難航した。Ⅱ区は遺構検出と住居跡の掘り下げを少しずつ同時に進めた。埋土の弁別が難しく、また切り合いが著しい状況の中調査は遅々として進まなかったが、ようやく2月22日にほぼすべての遺構を掘り終えてラジコンヘリコプターを用いた空中写真撮影をおこなった。その後、記録やだめ押しの掘り下げなどを行い、Ⅰ区の終了と同じく3月12日にすべての作業を終了した。

Ⅱ区で検出した主な遺構は、竪穴住居跡39棟、土坑3基、甕棺墓2基である。これらのうち、竪穴住居跡・土坑は古墳時代前期・古墳時代後期の所産で、甕棺墓は古墳時代前期に属する。出土遺物には、須恵器・土師器といった土器類のほかに鉄器があり注目される。

2　調査の組織

平成24年度（発掘調査）、25～27年度（整理・報告）に関わる関係者は次の通りである。

西日本高速道路株式会社九州支社	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
支社長	本間清輔	本間清輔	本間清輔	本間清輔 (～6.24) 北田正彦 (6.25～)
中津工事事務所長	三瀬博敬	三瀬博敬 (～6.30) 宗方鉄生 (7.1～)	宗方鉄生	宗方鉄生
副所長（技術担当）	小島二郎	小島二郎	小島二郎	
副所長（事務担当）	中村重俊	中村重俊	中村重俊	
副所長				中村重俊
総務課長	宇都良典	門田憲明	門田憲明 (～9.30) 内田伸博 (10.1～)	内田伸博
用地課長		岩田勲志 (7.1～)	和田　勝	和田　勝
用地第一課長	藤江　正	岩田勲志 (～6.30)		
工務課長	渡邉浩延 (～1.31) 本多正和 (2.1～)	本多正和	本多正和	本多正和
豊前工事長	川畑一弘	川畑一弘	川畑一弘 (～1.31)	
上毛工事長	荒平裕次	荒平裕次	大岡慶巳 (～1.31)	
豊前上毛工事長			大岡慶巳 (2.1～)	大岡慶巳

九州歴史資料館	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
総括				
館長	西谷　正	荒巻俊彦	杉光　誠	杉光　誠
副館長	篠田隆行	篠田隆行	伊﨑俊秋	伊﨑俊秋
参事				飛野博文
総務室長 (企画主幹)	円城寺紀子	円城寺紀子	塩塚孝憲	塩塚孝憲
文化財調査室長 (企画主幹)	飛野博文	飛野博文	飛野博文	吉村靖徳
文化財調査室長補佐 (企画主幹)	吉村靖徳	吉村靖徳	吉村靖徳	
文化財調査班長 (技術主査)	小川泰樹	小川泰樹	秦　憲二	秦　憲二
庶務				
総務班長	長野良博	長野良博	山﨑　彰	中村満喜子
調査・整理報告				
(文化財調査室)				
技術主査	小澤佳憲 (調査)		小川泰樹 (整理)	
主任技師				岡田　諭 (整理) 小林　啓 (整理・報告)
臨時調査員	細石朋希 (調査)	細石朋希 (報告)		
整理補助員				岩橋由季 (報告)
(学芸調査室)				
技術主査				小澤佳憲 (報告)

なお、発掘調査にあたっては、地元の方々、調査に参加された方々、豊前市教育委員会の関係者の方々など、多くの方より御協力を賜った。ここに記して感謝いたします。

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境

立地の概要　本書で報告する塔田琵琶田遺跡は、九州島北東部に位置し、行政区分としては福岡県豊前市に属する。福岡県では、しばしば行橋市・京都郡・築上郡・豊前市からなる県東部地域を、京都郡・築上郡の頭２文字をとって京築地域と呼び、この点からいえば京築地域の中央南寄りともいえる。

地形と地質　京築地域は、大分県中津・宇佐地域と一体化して幅のせまい海岸平野を形成している。この海岸平野は、北東は周防灘により遮られ、北は蔵持山－戸城山－障子ヶ岳と伸びて平尾台へと連なる山群、西・南側は英彦山系の支脈で南東に伸びる国見山－経読岳－八面山群と国東半島にそびえる両子山群により画されて一つの地域的なまとまりを形成しているが、その中でもさらにほぼ中央部を国見山から東へと広がる丘陵群によって南北に分断されて大きな二つの平野を形成する。北の京都平野は今川・祓川など、南の中津平野は佐井川・山国川・犬丸川・駅館川・寄藻川といった大小の河川群や海の開析・堆積作用により形成されたものである。地質的に見ると、北側に位置する京都平野東側の蔵持山・障子ヶ岳・平尾台などの山地の基盤層は石灰岩や花崗岩からなり、一方南側に位置する中津平野の西を画する国見岳・経読岳・八面山～国東半島といった山地の主な基盤層は阿蘇火砕流由来岩のほか大野・豊肥・九重火山岩類など、形成時期の異なる火山岩が複雑に入り乱れる。

遺跡の立地　塔田琵琶田遺跡は、豊前市の東側に位置する。豊前市は東西でその地形が大きく変化しており、西側は犬ヶ岳－国見山系から北東に向かって流出する何本もの小河川により刻まれた細長い谷と尾根筋が連続する丘陵地帯をなすのに対し、東側では岩岳川・佐井川といった比較的規模の大きな河川の解析・堆積作用により、扇状地が形成されている。

この扇状地帯は比較的広い平野を形成しており、特に圃場整備の進んだ昨今では平坦な土地が広域に広がっているように見える。しかし、その内部には細かい起伏が見られる。最もわかりやすいのは求菩提道（現在の県道32号犀川豊前線）が通る千束原台地で、周辺の水田地帯より５ｍほど標高が高い尾根上の台地が南北方向に長く伸び、その東西には谷地形がこれに平行してやはり細長く伸びている。千束原台地の西には大西台地・野田台地・大村台地・荒堀台地などの低台地が同じように南北に伸び、その間には細長い谷が形成されている。これらはいずれも市域東部で観察される谷地形が扇状地堆積物によって埋積して尾根状丘陵頂部との比高差が縮まったものと考えられ、付近における遺跡立地の好適地となっている。

こうした台地のうち、低地との比高差が小さいものは、比較的早くより水田化され、水田区画にその痕跡をとどめていたが、昭和50年代より本格化した圃場整備により、こうした微地形を反映した水田区画はその大半が失われてしまい、塔田・久路土の付近ではもうほとんど残されていない。しかし、ひとたび圃場整備時の盛土や水田耕作土を剥げば、そこには南北方向に細長く伸びる埋没低台地と小谷が東西に連続する基盤地形が現れてくる。

塔田琵琶田遺跡は、こうした微地形の中で埋没低台地上に立地する遺跡である。千束原台地の西側には、現在は用水路となっている小谷を挟んで併行して伸びる南北に細長い埋没微高地がある。

塔田琵琶田遺跡はこの微高地上に立地しており、古墳時代後期には隣接調査地である時末遺跡第1·2次調査地、西ノ原遺跡第5次調査地と同一の集落を形成していたと考えられる。

遺跡群の地質　以上の立地条件から、塔田琵琶田遺跡の基盤層は尾根状台地、そして市域東部の尾根状丘陵の基盤層と共通することがわかるだろう。すなわち、遺跡が立地する土地の地質は火山岩由来の赤土であり、内部にしばしば火山弾由来の腐り礫を含む。その上層は土壌化作用によって黒ボク化し、また下層には洪積世に形成された扇状地堆積物である砂礫層が広がっている。遺構は、付近の地名である「久路土（黒土）」の由来となった黒ボク土を切り込んで、しばしば下層の砂礫層にまで達している。

調査地の付近では圃場整備などによる削平はしばしば下層の砂礫層にまで及び、場所によっては遺構面に黄白褐色の砂礫層が広く現れている。砂礫層は非常に固く掘削が困難であるが、塔田琵琶田遺跡4次調査Ⅰ区ではしばしば遺構はこの砂礫層を掘り込んで形成されていることは驚嘆すべきことである。一方、北に位置する同Ⅱ区では、地山下層の砂礫層の深度がⅠ区よりも深いものとみられ、地山は黒ボク化した風化土からなり、比較的掘りやすい地山であったとみられる。ただし、削平度合いは両調査区ともさほど変わらないようで、遺構の残りはいずれもあまりよくない。

2　歴史的環境

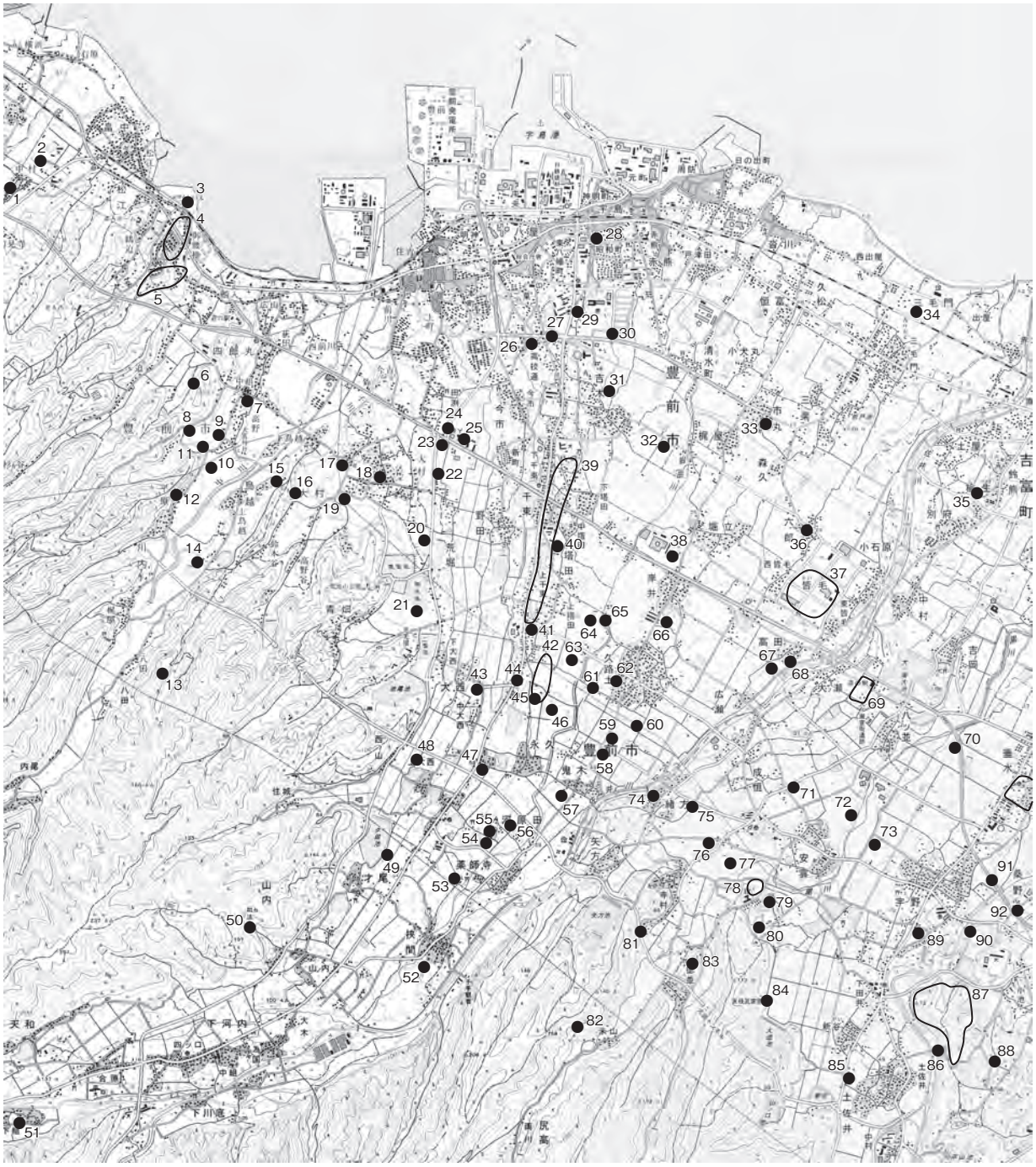
概要　本書で報告する塔田琵琶田遺跡がある福岡県豊前市は、福岡県の東部に位置し、令制下における旧国では、南に隣接する大分県の北部（宇佐郡、現在の中津市・豊前高田市の一部）とともに豊前国を形成していた。豊前国には田川・企救・京都（みやこ）·仲津・築城・上三毛（かみつみけ）・下三毛（しもつみけ）・宇佐の8郡があったことが知られ、塔田琵琶田遺跡はこのうち上三毛郡に所在する。

この地域における歴史的な環境については、本シリーズに繰り返し述べてきたところであり、概要はそちらを参照していただくこととし、ここでは前編（九州歴史資料館 2015）に引き続き古代以降の歴史についてみていこう。

古代の遺跡　古代の遺跡として最も注目されるのが官道であろう。遺跡の北側付近では、市域北部を東西に貫く現在の国道10号線バイパスとほぼ同じ位置を走っていたとされ、宇佐神宮への勅使が通っていたことから「勅使街道」とも呼ばれた。

この官道の南北沿線沿いでは、古代の集落跡がいくつか調査されている。岩岳川西岸では、大村台地・荒堀台地・野田台地といった南北に伸びる低台地上を官道が横断する付近においていくつかの集落のまとまりが認められる。大村台地では、官道の南側台地上に立地する大村天神林遺跡・大村石畑遺跡において7世紀後葉～8世紀代の集落跡が調査されている（豊前市教委 2007·2009）。ともに中世の集落跡により破壊を受けており遺存状況はよくないものの、竪穴住居跡が多く調査され、中には隅カマドを持つ小型の住居跡も見られる。付近は「梶屋」地名より大宝二年豊前国上三毛郡戸籍断簡に見える地名「加目（自の誤記か）久也里」、すなわち和名類聚抄の炊江郷に比定され、その成立期の集落の1つとも考えられよう。

大村台地の東に伸びる荒堀台地上では、古代官道推定地の北に隣接する荒堀雨久保遺跡・荒堀大保遺跡において古代集落が調査されている（福岡県教委 1992、丹羽 1993）。荒堀雨久保遺跡と荒堀



1 中村団後遺跡　2 中村ヒバル遺跡　3 灰ノ木古墳　4 黒部古墳群　5 黒峰尾古墳群　6 四郎丸窯跡　7 四郎丸畑原遺跡
8 川内下野添遺跡　9 川内南原遺跡　10 川内楠木遺跡　11 平原城跡　12 平原横穴墓群　13 山田城跡　14 鳥越今井野遺跡
15 鳥越下屋敷遺跡　16 大村湯福遺跡　17 大村天神林遺跡　18 大村道場遺跡　19 大村石畑遺跡　20 大村シトキ田遺跡
21 青畑向原遺跡　22 荒堀中ノ原遺跡　23 荒堀車地遺跡　24 荒堀大保遺跡　25 荒堀雨久保遺跡　26 今市向野遺跡
27 下原遺跡　28 昭和町遺跡　29 吉木穴井遺跡　30 吉木常末遺跡　31 吉木遺跡　32 吉木芦町遺跡　33 市丸遺跡群
34 三毛門放生田遺跡　35 楡生山古墳　36 六郎遺跡群　37 小石原泉遺跡　38 上毛条里遺跡　39 千束原古墳群　40 旭城跡
41 上塔田遺跡　**42 塔田琵琶田遺跡**　43 中大西遺跡　44 西ノ原･大西遺跡群　45 時末遺跡　46 永久笠田遺跡　47 永久遺跡
48 上大西遺跡　49 才尾平原遺跡　50 如法寺跡　51 大河内庄屋屋敷遺跡　52 挟間宮ノ下遺跡　53 薬師寺塚原遺跡
54 河原田四ノ坪遺跡　55 河原田善丸遺跡　56 河原田塔田遺跡　57 鬼木四反田遺跡　58 鬼木鉾立遺跡　59 久路土樋掛遺跡
60 久路土鐘鐔田遺跡　61 久路土幢遺跡　62 久路土六田遺跡　63 久路土高松遺跡　64 久路土芝掛遺跡　65 黒土城跡
66 黒土七夕遺跡　67 広瀬城跡　68 高田城跡　69 大ノ瀬官衙遺跡　70 池ノ口遺跡　71 原田遺跡　72 安雲城跡
73 安雲ハタガタ遺跡　74 緒方古墳群　75 七ッ枝遺跡　76 龍毛遺跡　77 ハカノ本遺跡　78 山田窯跡群　79 安雲山田遺跡
80 山田 1 号墳　81 尻高後椀遺跡　82 穴井横穴墓群　83 徳並横穴墓群　84 友枝瓦窯跡　85 土佐井ミソンデ遺跡
86 土佐井小迫遺跡　87 唐原神籠石　88 ガサメキ遺跡　89 宇野台古墳群　90 桑野題古墳群　91 宇野代遺跡　92 上桑野遺跡

第 3 図　周辺遺跡分布図（1/50,000）

大保遺跡は調査区が相互に隣接しており、本来は同一の集落を構成していたと考えられる。ともに7世紀後半～8世紀代の竪穴住居跡と掘立柱建物跡からなる集落を検出している。

官道の南側では永久遺跡がやはり大村台地上の集落として調査されている（豊前市教委1999）。7世紀末～8世紀代の竪穴住居跡と掘立柱建物跡からなる集落である。また、官道の北側ではやや東に位置する千束台地の北側端部付近で吉木遺跡が調査されている。やはり7世紀後半～8世紀代の竪穴住居跡と掘立柱建物跡からなる小規模な集落である。

また、岩岳川の東岸では官道よりやや南に下った県道野田線沿いにおいて古代の集落跡がいくつか調査されている。久路土幢遺跡・久路土六田遺跡は岩岳川東岸に形成された微高地上に広がる遺跡で（豊前市教委2008･2012）、本来は1つの集落を形成していたと考えられる。いずれも、7世紀後葉～8世紀代の竪穴住居跡と掘立柱建物跡からなる集落跡である。これらに対し、岩岳川と佐井川の間に広がる扇状地中位に位置する久路土鐘鐔田遺跡は、1棟の小型竪穴住居跡のほかは側柱建物跡を主体とする掘立柱建物跡からなる集落で、石帯を出土しており注目される（豊前市教委2010）。見てきたように豊前市域における古代前半期の集落の大半は、主柱穴配置が不明な小型の竪穴住居跡（しばしば隅カマドを伴う）を主たる居住施設とし、これに数棟の総柱の倉庫建物が伴うという構成を持つ。これに対し、久路土鐘鐔田遺跡や、さらに東に佐井川を挟んで隣接する上毛町域の8世紀代の集落では、しばしば竪穴住居跡を伴わず側柱建物跡が主たる居住施設と考えられる集落が見つかっており、これらの関係は興味深い問題を提供している。上毛町域には8世紀後半～9世紀代の上三毛郡衙に比定される大ノ瀬官衙遺跡が所在することから、官人層の集落と一般農民の集落といった対比も可能であろうが、出土遺物の様相を見るとそのような単純な図式では理解しがたい部分もある。たとえば、大村石畑遺跡・久路土幢遺跡では石帯が、荒堀大保遺跡・永久遺跡では緑釉・灰釉陶器や円面硯などが出土しており、8世紀代に竪穴住居に居住する集団の社会的位置については慎重に検討していく必要があろう。

また、付近はほ場整備前には条里制区割がよく残る地域として知られる（小田1993）。実際、久路土鐘鐔田遺跡・鬼木鉾立遺跡などの調査で条里制区割を示す溝が確認されているほか、久路土馬踏遺跡、久路土上柳遺跡、久路土慈光庵遺跡、久路土猿楽田遺跡、久路土門田遺跡、久路土二又遺跡などで古代から中世にかけての条里関連遺構や遺物の出土があり（豊前市教委2000）、また条里関連地名が各所に残されるなど、水田開発の歴史もたどることができる地域である。

平安時代の遺跡としては小石原泉遺跡が知られる（豊前市教委1998）。佐井川西岸の扇状地端部に形成された微高地上に立地する弥生時代～古代の複合大規模集落遺跡であるが、古代後半の遺構として、主に2×3～5間の側柱建物跡と2×2間の総柱建物跡計25棟から構成される12世紀頃の集落跡が発見された。輸入陶磁器類が多量に出土したという。

中世の遺跡　中世においては、各地で城館を中心とした村の広がりが形作られた。最もその様相が分かる地区として、遺跡の北西に位置する大村地区を挙げることができる。大村地区では、現在の大村小学校付近に大村城が築かれたことが知られる。『宇佐郡記』や『黒田家譜』などに記述が見られ、城井一族の支族山田氏の抱え城で、天正16年（1588）の宇都宮氏一族の廃絶に伴い廃城となった。この周辺では、大村石畑遺跡・大村天神林遺跡などで発掘調査が行われ、中世大村城と城下の集落の関連遺構が多く検出されている。

同様に、岩岳川西岸の上流部にはやはり中世の城館跡である（推定）薬師寺城跡が調査されてい

る（豊前市教委 2000）。またその隣接地でも、薬師寺塚原遺跡で平安時代後期～中世にかけての集落跡が発見されており、城館と集落の関係がうかがわれる資料である。

このほか、中世の城館跡とされる遺跡は、発掘調査こそされていないものの付近には多く点在する。多くが神社を近くに控えており、やはり古くからの集落が形成されていたものであろう。

近世の遺跡　近世～近代遺跡として付近で最も重要なのは、旭城跡であろう。1866 年の第 2 次長州征討において自ら小倉城に火を放ち敗走した小倉藩主を迎えるため、小倉藩の支藩であった新田原藩が現在の千束小学校付近に築いた城郭で、日本で最も新しい近世式城郭として知られる。また付近には小さいながら城下町が発達し、現在も当時の武家屋敷が残る。なお、いずれも近世末～近代初期に行われたこの旭城建設と宇島港の港湾整備の際に、千束丘陵上に広く展開していたとされる群集墳の千束原古墳群に用いられていた石室石材が抜き取られ、持ち去られたといい、これにより千束原古墳群は壊滅的な被害を受けて現在ではその影もない。

【参考文献】

小田富士雄 1993「二　豊前市域の条里遺制」豊前市史編纂委員会編『豊前市史　考古資料別冊』豊前市

九州歴史資料館 2015『塔田琵琶田遺跡 2 －豊前市久路土所在遺跡の調査報告－』東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告書－ 22 －

九州歴史資料館 2016『時末遺跡 1・2 次、永久笠田遺跡 2 次－福岡県豊前市永久所在遺跡の調査－』東九州道関係埋蔵文化財調査報告書－ 24 －

九州歴史資料館 2016『塔田琵琶田遺跡 6 次－福岡県豊前市久路上所在遺跡の調査－』東九州道関係埋蔵文化財調査報告書－ 27 －

九州歴史資料館 2016『塔田琵琶田遺跡 3・5 次、塔田五反田遺跡、塔田キカス遺跡』福岡県文化財調査報告書第 252 集

丹羽博 1993「6 荒堀大保遺跡」豊前市史編纂委員会編『豊前市史　考古資料別冊』豊前市

福岡県教育委員会 1992『荒堀雨久保遺跡－豊前警察署庁舎建設に伴う埋蔵文化財調査報告－』福岡県文化財調査報告書第 99 集

豊前市教育委員会 1998『小石原泉遺跡－豊前東部工業用地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査概報－』豊前市文化財報告書第 11 集

豊前市教育委員会 1999『青畑向原遺跡・永久遺跡－県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－』豊前市文化財報告書第 12 集

豊前市教育委員会 2000『豊前市内遺跡分布地図』

豊前市教育委員会 2000『久路土六田遺跡・薬師寺塚原遺跡－県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅡ－』豊前市文化財報告書第 24 集

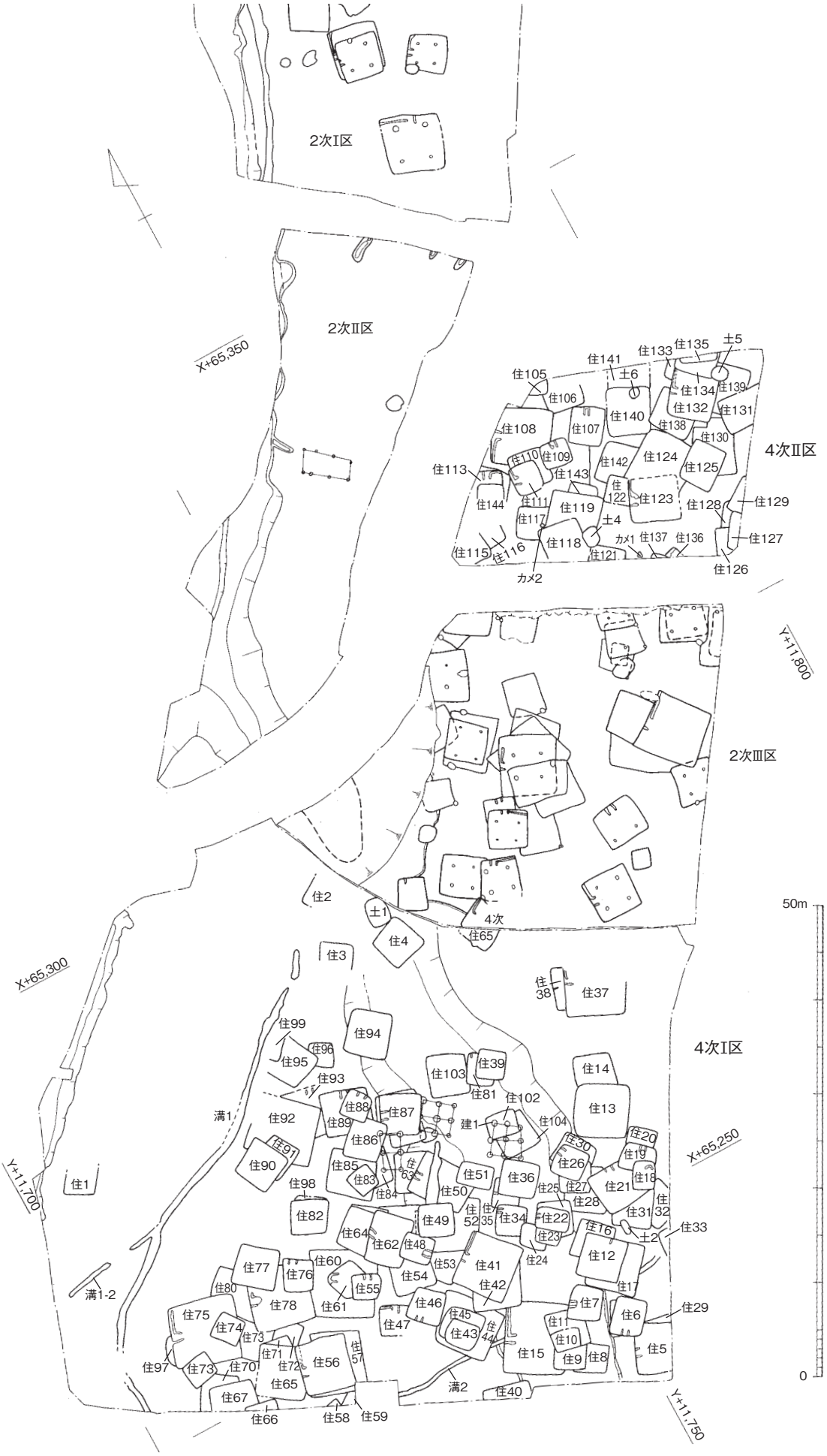
豊前市教育委員会 2007『大村石畑遺跡－県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅢ－』豊前市文化財報告書第 22 集

豊前市教育委員会 2008『久路土六田遺跡・薬師寺塚原遺跡－県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅡ－』豊前市文化財報告書第 24 集

豊前市教育委員会 2009『大村天神林遺跡－県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ－』豊前市文化財報告書第 26 集

豊前市教育委員会 2010『久路土鐘鐔田遺跡－県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅣ－』豊前市文化財報告書第 27 集

豊前市教育委員会 2012『久路土幢遺跡－県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅥ－』豊前市文化財報告書第 30 集



第４図　塔田琵琶田遺跡第４次調査遺構分布略図（1/600）

Ⅲ　調査の報告

1　調査の概要

調査地点の所在　塔田琵琶田遺跡は、福岡市豊前市久路土の西端部に位置する。付近は北に塔田、西に大西、南に永久と、いずれも久路土と境を接する部分にあたり、4 次調査地は久路土に位置するが、1 次調査地は塔田に位置し、久路土から塔田にかけて広がる遺跡である。第 4 次調査地はⅠ区とⅡ区に分かれ、Ⅰ区が豊前市久路土 114･115 － 1 ～ 5･116 に、Ⅱ区は同 94 にあたる。Ⅰ区の旧状は宅地と水田であったが、宅地部分ももと水田として利用されていた場所に厚く盛土を施していた。Ⅱ区の旧状は水田である。調査対象面積は全体で約 4,950㎡、そのうち道路敷や水路部分隣接地との干渉帯などの調査できなかった部分を除く実面積は、Ⅰ区が 3,420㎡、Ⅱ区が 580㎡で、計 4,000㎡を発掘調査した。

調査地点の周辺環境　調査地点は、豊前市の東に広がる広い穀倉地帯の中央部に位置する。既に述べたように、久路土地区とその周囲は条里地割が広く残された土地として知られ、現在も広がる水田としての開発は古代における条里制の施行にさかのぼる。調査地の付近でも圃場整備が行われる以前には部分的に条里地割が残されていたことが字図や圃場整備前の地形図より読み取れる。さらに、水田地割は埋没微地形をも反映しており、これによれば調査地点は南北に細長く伸びる尾根状の微高地の頂部から西側緩斜面にあたる。ただし、調査着手前にはすでに、圃場整備や宅地造成などの大規模な地形改変が行われており、このような旧地形の大半が覆い隠されていてほとんど把握できない状況であった。

遺跡の範囲　本地点は東九州道（仮称）豊前 I.C. の建設予定地にあたる。東九州道の計画路線は久路土地区付近においてはほぼ東西に走っており、従ってインターチェンジの予定地は路線の北側にこれに直交するように南北方向に伸び、長さ約 200m、幅約 90m ほどの略長方形の範囲に占地する。また、路線の南側には本線とインターチェンジを接続するためのループ予定地が半円状に突きだしていた。

インターチェンジ予定地の中には、西側 1/3 ほどの地点を南北方向に貫いて北に流出する用水路がある。この用水路は旧地形における谷部を流れており、用地付近の微地形はこの用水路を境に東西に大きく分かれる。うち西側は千束原台地の東側緩斜面の端部にあたり、弥生時代後期～古墳時代前期・古墳時代後期の集落跡である西ノ原遺跡の集落の周辺部が広がっていて、豊前市教育委員会により平成 22 ～ 23 年度に発掘調査が行われた。これに対し用水路東側には千束原台地よりも 5 ～ 7m ほど標高が低く、用水路よりも 0.5 ～ 1m ほど高い、東西幅 90 ～ 100m、南北長さ 500m ほどの埋没微高地が伸びており、この細長い微高地上のほぼ全域に古墳時代の集落跡を中心とする塔田琵琶田遺跡群が占地している。

調査区の設定　以下に報告する塔田琵琶田遺跡第 4 次調査においては、Ⅰ・Ⅱ区に分けて調査区を設定した。このうちⅠ区は、インターチェンジ北側のほぼ中央部側にあたり、平成 23 年度調査（塔田琵琶田遺跡第 2 次調査）Ⅱ・Ⅲ区の南側にあたる。調査区の旧状は宅地・水田で、南辺に沿って市道が東西に走っていた。Ⅱ区の発掘調査面積は 3,420㎡である。

また、Ⅱ区は第 2 次調査Ⅲ区の北側、同Ⅱ区と用水路を挟んで東側に隣接する水田面に設定した。調査面積は 580㎡をはかる。

2　Ⅰ区の調査成果

（1）概要

調査区の位置　Ⅰ区は、遺跡の中央やや南側にあたる3,420㎡の範囲である。塔田琵琶田遺跡の乗る尾根状微高地は大略南北方向に伸びており、その北端部には平成11年度に豊前市教育委員会が調査した第1次調査区、南端部には平成23年度に九州歴史資料館が調査した時末遺跡第1次調査区が位置する。4次調査Ⅰ区は、遺跡の広がりの南端部である時末遺跡1次調査区から北に約90mほどの位置にあたる。北には2次調査Ⅱ・Ⅲ区が隣接する。

土質　Ⅰ区の旧状は、東部2/3ほどと西部1/3ほどで大きく分かれており、西部が宅地、東部が水田であった。西部の宅地部分は東部の水田部分よりも50㎝ほど高く盛土が施されている状況であったが、表土剥ぎに着手すると西部の盛土厚さは約2mに達し、一方東部の表土は水田耕作土と床土で厚さがせいぜい30㎝ほどしかなかったため、表土剥ぎ後には一転して西側の遺構面が東側よりも1mほど低い状況が現れた。なお、東側は北に行くほどに遺構面のレベルが低くなっていた。

地山の状況は、遺構面が低い西側が著しい削平を受けているようで、すでに上層に存在したであろう黒ボク土や火山噴出物由来の風化土壌は完全に失われており、基盤層である白黄褐色の砂礫土が広く顔をのぞかせていた。一方東側は、西側と比べればまだ削平を受けておらず、かろうじて風化土壌を残しつつ部分的に基盤層である砂礫土が現れていた。

遺構埋土　遺構の埋土は基本的に削平前の地山上層である黒ボク土からなり、砂礫土の中における遺構の判別は比較的容易であった。しかし、遺構相互の埋土がきわめて類似していて切り合い関係にある遺構の弁別にはきわめて困難を伴った。また、東側の中央部には北西から南東方向にかけて最大幅20mほどの浅い谷状落ち込みが縦断しており、この埋土が上層の遺構埋土ときわめてよく似ていたため、付近での遺構検出も困難を伴う状況であった。

検出遺構　Ⅰ区で検出した主な遺構は、竪穴住居跡104棟、掘立柱建物跡3棟、土坑3基、溝3条である。このほか、谷状落ち込み遺構2基、ピット多数を調査した。これらの遺構の所属時期は古墳時代前期・後期・古代で、特に古墳時代後期の遺構が多い。

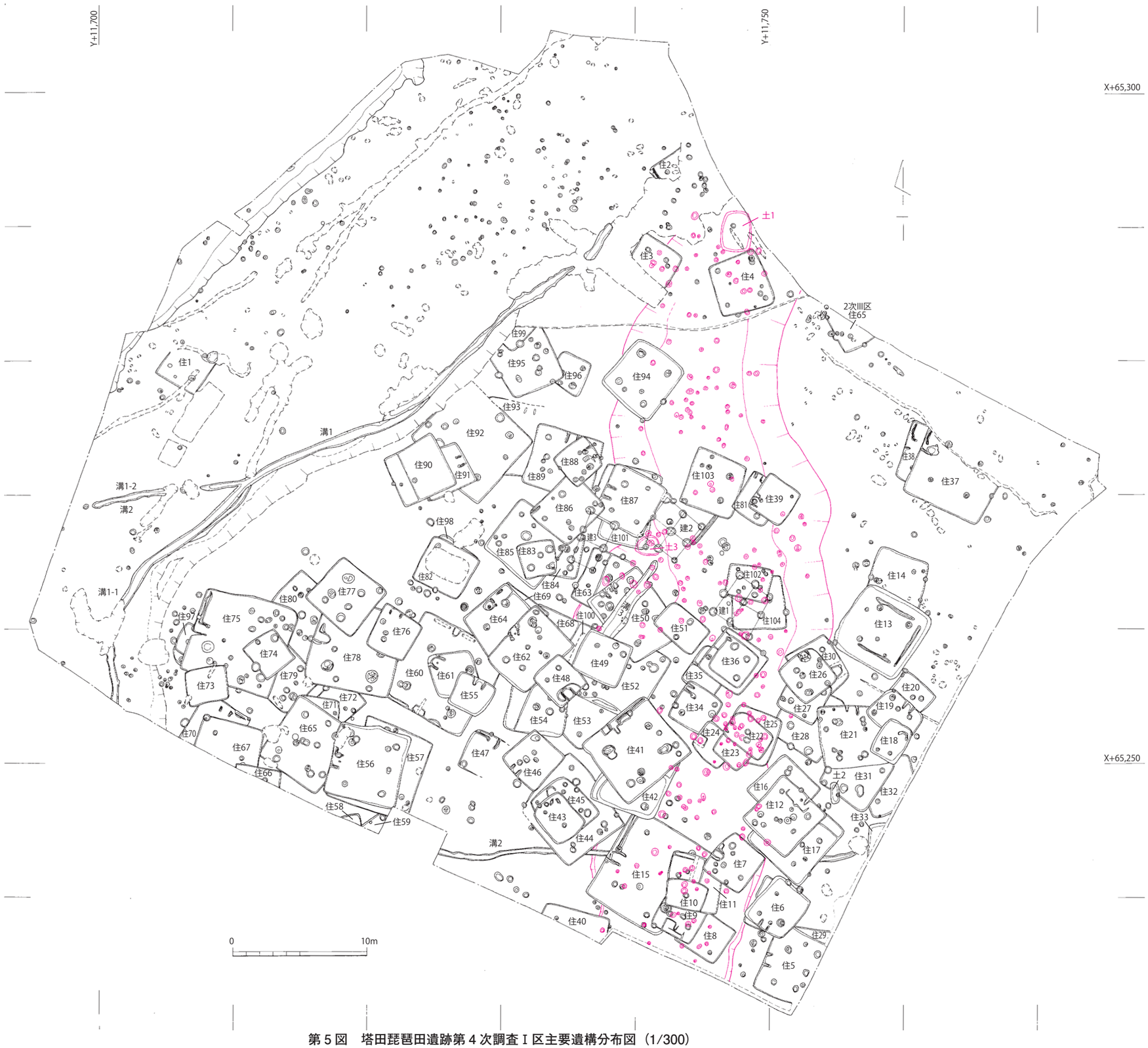
以下、個別の遺構について詳細を述べていこう。

（2）竪穴住居跡

調査区のほぼ全面から、計104基の竪穴住居跡を検出した。うちすくなくとも7基が古墳時代前期、41基が古墳時代中期後半～後期、38基が7世紀代以降（古代前半期）に属する。古墳時代後期の住居跡でカマドが確認されたかカマドを持つ可能性のある27基の住居跡のうち、9基がL字状カマドを持つ。また、古代の住居跡でカマドが確認されたかその可能性のある14基の住居跡のうち、9基が隅カマドを持つ。以下、個別に説明していく。

1号竪穴住居跡（第6図、図版5）

調査区西側の一段下がった遺構面で検出した。調査区西端の中央やや南よりに位置する。付近は大きく削平されていて、周囲には砂礫土からなるかなり深い部分の地山が露出していた。周囲にはピットのほかに明確な遺構は分布していない。住居跡の埋土は暗褐色粘砂質土でやや粘性が高く、西に隣接するSX－01落ち込み状遺構の埋土と一部区別しにくい状況であった。また住居跡の北



第５図　塔田琵琶田遺跡第４次調査Ⅰ区主要遺構分布図（1/300）

側 1/3 ほどは浅い段落ちにより削平されていて、北壁は完全に失われていた。ただし、床面から 4 本の主柱穴が検出され、その配置や残された三方の壁などから、南北 4.0m、東西 3.2m ほどの規模のやや長方形状を呈する竪穴住居に復元できる。南壁の中央部に内接型のカマドを付していたとみられ、壁から 45cmほどの位置の床面に直径 30cm弱の被熱変色部が認められた。支脚の痕跡は撹乱により破壊されており不明であるほか、袖なども削平が著しく検出できなかった。主柱穴はほぼ正方形に 4 本が配され、直径は 20 ～ 30cm、深さ 25 ～ 40cmほどをはかる。出土土器はわずかで時期の検討は難しいがカマドを持つ住居構造や土器の小片などからみて 6 世紀代の遺構か。

出土土器（第 7 図）

土師器（1）　1 は甑の把手である。短くやや上方に伸び、断面はほぼ正円形。内面はケズリ、外面はナデ調整を施す。

2 号竪穴住居跡（第 6 図、図版 5）

調査区西側の一段下がった遺構面で検出した。調査区北隅に位置する。中央部から東側にかけては水田の給排水溝などにより大きく破壊されており、西壁と南壁の一部のみが残されていた。これらの壁と 4 本検出された主柱穴から規模を復元すると南北長 4.0m、東西幅 3.4m のやや長方形状を呈する竪穴住居に復元される。かろうじて残された南壁の西半に沿って煙道が西に伸びており、南壁の中央部に内接型の L 字状カマドを付設していたとみられるが、カマドの本体は撹乱により破壊され失われている。付近には後述する SX － 02 谷状落ち込みが広がっていて本住居跡はその上面で検出されたが、埋土は地山である谷状落ち込み埋土に影響を受けたものとみられ黒褐色粘質土からなる。主柱穴はややいびつな方形に配置され直径 30cm、深さ 30 ～ 40cmほどをはかる。床面からわずかに浮いた状態で土器と炭化した木片が出土したが、いずれも本住居跡の廃棄時に埋土とともに包含されたものとみられる。出土土器から、6 世紀中葉の遺構か。

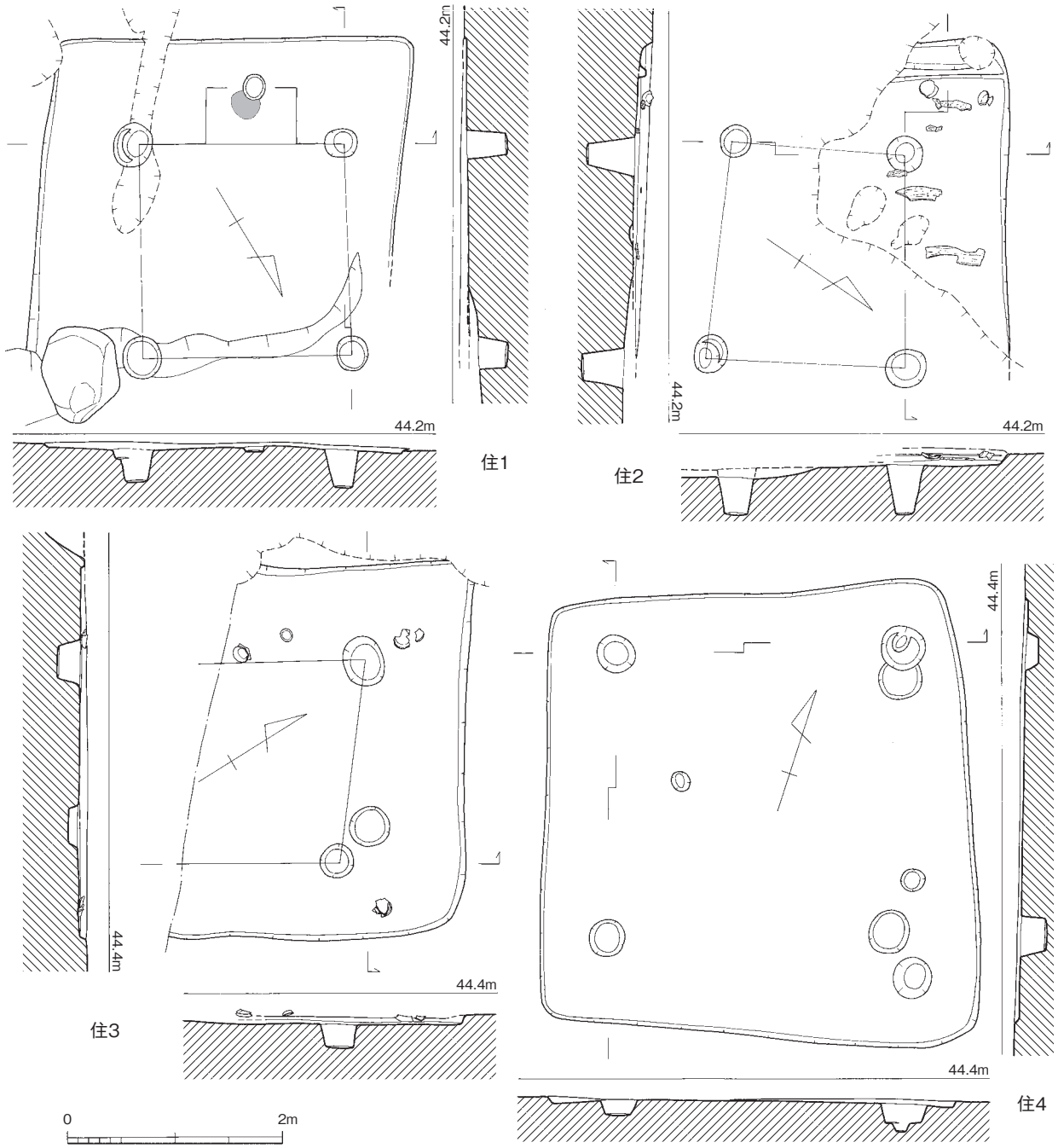
出土土器（第 7 図、図版 37）

須恵器（2）　2 はカエリを持つ坏身である。平坦で小さな底部から斜めに立ち上がり、カエリの上位はやや内傾しつつ外湾する。

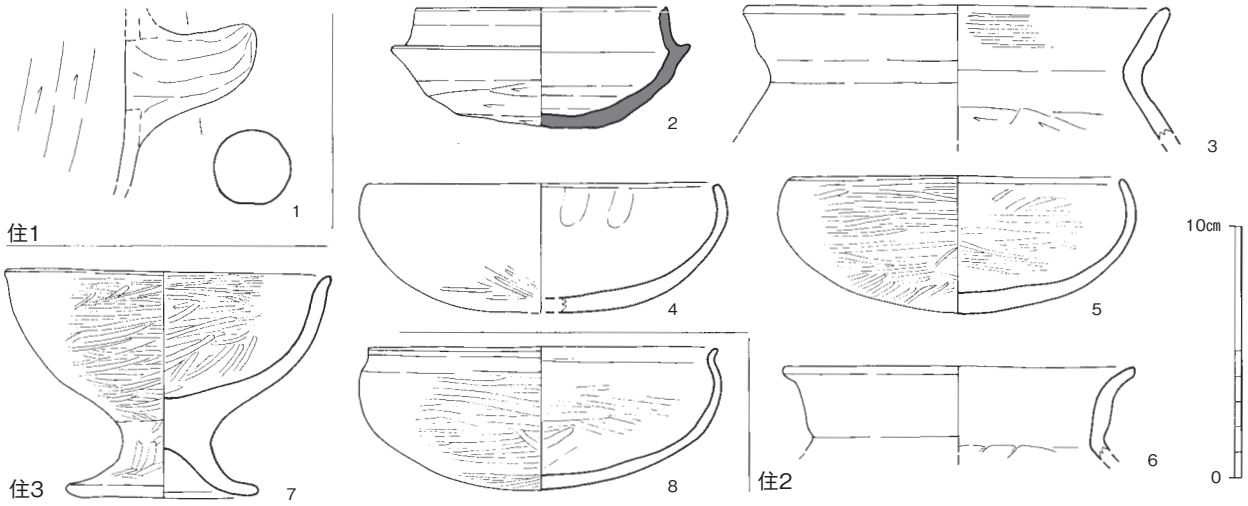
土師器（3 ～ 6）　3 は甕の口縁部片である。頸部はやや緩く口縁部は短く直線的に開く。胴部は長胴気味か。4･5 は椀である。丸底から内湾しつつ立ち上がり口縁部はややきつく内湾する。いずれも外面にミガキを施す精製品で 5 は内面もミガキ。6 は甕または短頸壷の口縁部片。頸部の締まりは緩く、口縁部は外湾しながら開く。

3 号竪穴住居跡（第 6 図、図版 5）

調査区西側の一段下がった遺構面で検出した。調査区北隅に位置する。北に 2 号住居跡が、東に 4 号住居跡が隣接する。中央から南にかけて試掘トレンチにより大きく破壊され、また東壁の一部も水田の給排水溝により部分的に破壊される。東壁沿いのおおよそ中央部に焼土の堆積が認められ、ここがカマドとなる可能性があるが確実ではない。床面からはいくつかのピットを検出し、そのうち主柱穴となる可能性のあるものを線で結んで示したが、いずれも深さ 20cm程度とやや浅く、確実ではない。床面には広く硬化面が形成されていた。出土土器には 6 世紀初頭の資料が見られ、焼土の堆積がカマドの痕跡とすれば整合性があることから、この時期の遺構としておきたい。



第６図　１～４号竪穴住居跡実測図（1/60）



第７図　１～３号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

出土土器（第 7 図、図版 37）

土師器(7･8)　7 は脚付椀。脚部は低く口縁部はわずかに外湾する。内・外面に丁寧なミガキを施す。8 は椀。半球形の胴部と短く外反する口縁部を持ち、内・外面ともに丁寧なミガキを施す。

なお、他に第 129 図 15 の鉄鏃が埋土中から出土している。

4 号竪穴住居跡（第 6 図、図版 6）

調査区西側の一段下がった遺構面で検出した。調査区北隅に位置する。西に 3 号住居跡が、また北東には 2 次 65 号住居跡が隣接する。住居跡はややゆがんだ正方形状を呈し、南北 4.36m、東西 4.04m の規模をはかる。残存深さは 5cm程度できわめて浅い。SX － 02 谷状落ち込みの上面で検出した住居跡であり、埋土は谷状落ち込みの埋土とよく類似していたため、床面については正しく検出しているかどうかやや自信がない。部分的に深く掘りすぎたと思われ、出土土器の一部は SX － 02 埋土に包含されていたものが含まれよう。床面からはいくつかピットを検出したが、主柱穴になるようなものは見つけられなかった。出土土器には土師器の小片が少量あるが図示できるものはない。SX － 02 谷状落ち込み埋没後の遺構であり古墳時代後期以降に位置づけたいが、カマドもなく詳細は不明。なお埋土中から第 130 図 40 の手鎌が出土している。

5 号竪穴住居跡（第 8 図、図版 6）

調査区の南東隅で検出した。付近は大きく削平されて比較的深い箇所の地山が露出しているようで、黄白色砂礫土の地山の中に暗褐色粘砂質土の埋土が現れていた。調査区外に伸びる東側 1/4 ほどを除きほぼ全形を確認した。北西コーナー部が 26 号住居跡に破壊される。また北に隣接する 29 号住居跡を大きく破壊している。床面からは部分的に礫が見え始めた段階で硬化面を確認し、合わせて主柱穴とみられるピットを検出できた。ピットは直径 50 ～ 60cmとやや大きいが、深さは 20 ～ 30cmと浅めである。また西壁の中央部に内接型のカマドを検出した。出土土器には 6 世紀中～後半と 8 世紀代の 2 者があるが後者はごくわずかで、本住居跡の時期は 6 世紀前葉に位置づけたい。

カマド（第 8 図、図版 6）

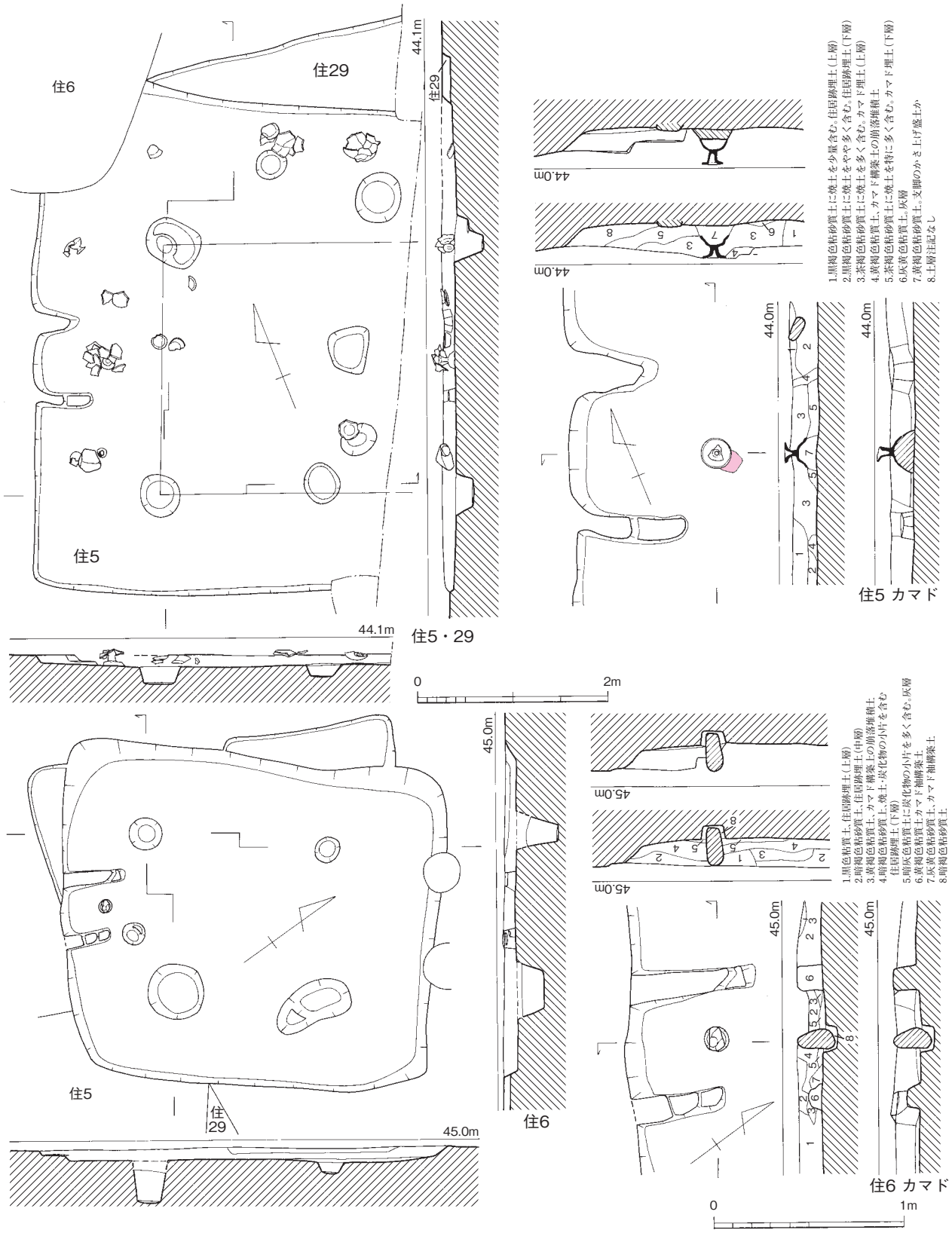
西壁の中央部から内接型のカマドを検出した。袖は壁と直交方向にまっすぐ伸び、袖間の距離は 65cmほど、袖の残存長さは左袖が長く 60cmほどをはかるが、支脚の位置からすると本来はさらに長く 90cm以上はあったものとみられる。袖間のちょうど中央、奥壁から 60cmほどの位置に高坏を逆さまに置いた転用支脚を検出した。床面を粘土により 5cmほどかさ上げしてその上に高坏を置いており、上面高さは床面から 18cmほどをはかる。高坏の全面にわずかに被熱変色部が形成されていた。カマド埋土は住居跡埋土とカマド構築粘土が混合したものを主体とし、最下層にはごく薄く灰層が残されていたことから、カマドの埋没は住居跡の埋没と期を一にして生じたと見られる。

出土土器（第 9・10 図、図版 37）

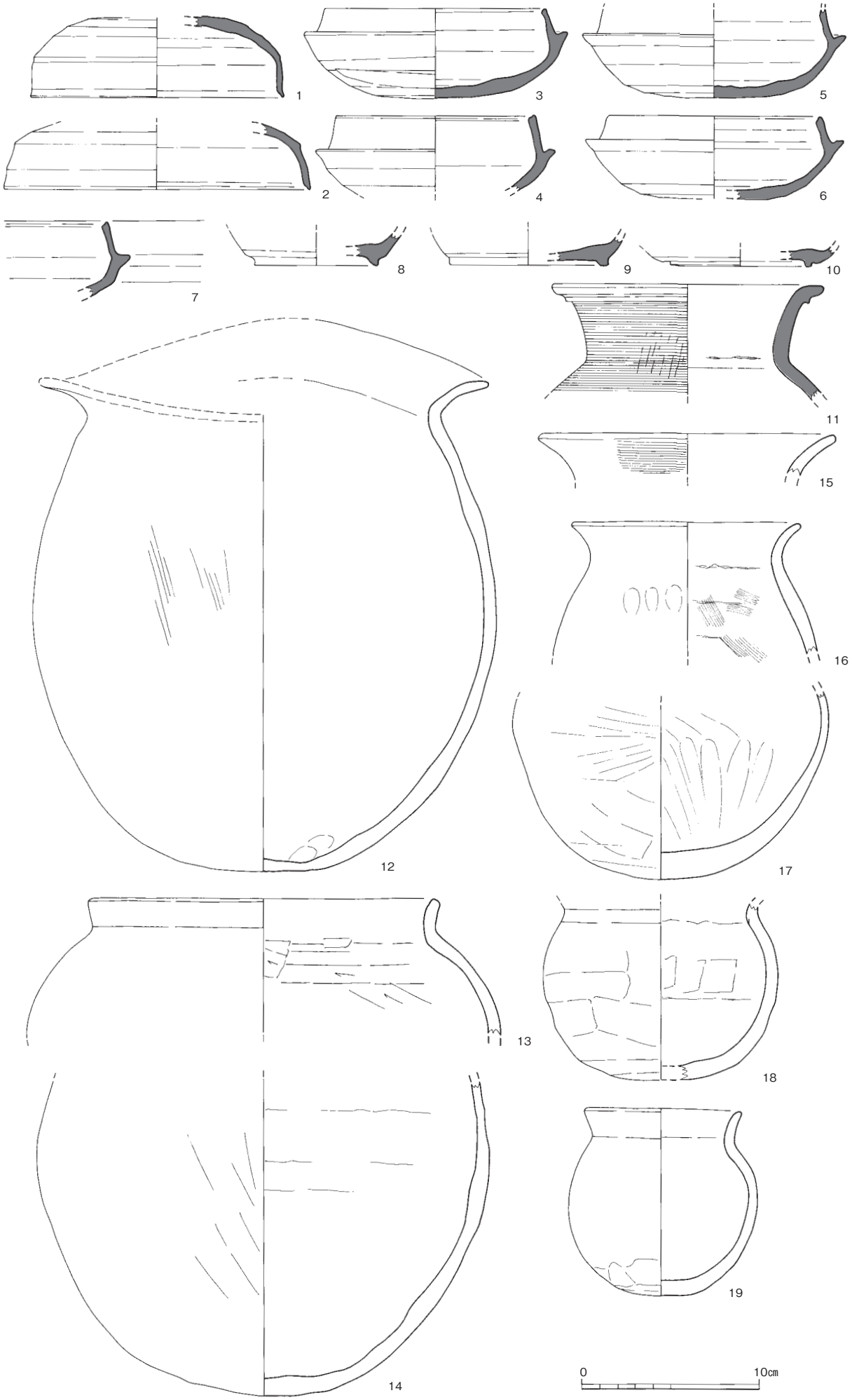
須恵器（1 ～ 11）　1･2 は段を有する坏蓋である。1 は天井部は平坦で方はやや斜めに下がり段以下は直線的に真下に伸びる。口縁端部は斜めに仕上げる。2 は口縁部がやや広がる以外は 1 と似る。3 ～ 7 はカエリを有する坏蓋である。うち 3 ～ 6 は略完形に図上復元でき、底～体部は湾曲していてカエリは強くつきだし、口縁部は内傾しながら伸びる。7 は口縁部のみの資料である。8 ～ 10 は高台を有する坏身の底部片である。小片で全形は不明。高台の断面形状は 3 者 3 様で、8 は外に開

き端部は丸く、9は外に開き端部がやや角張り、10は四角く収める。11は壷の口縁部片である。肩はあまり張らず、頸部はやや強く締まり口縁部は短く外反する。

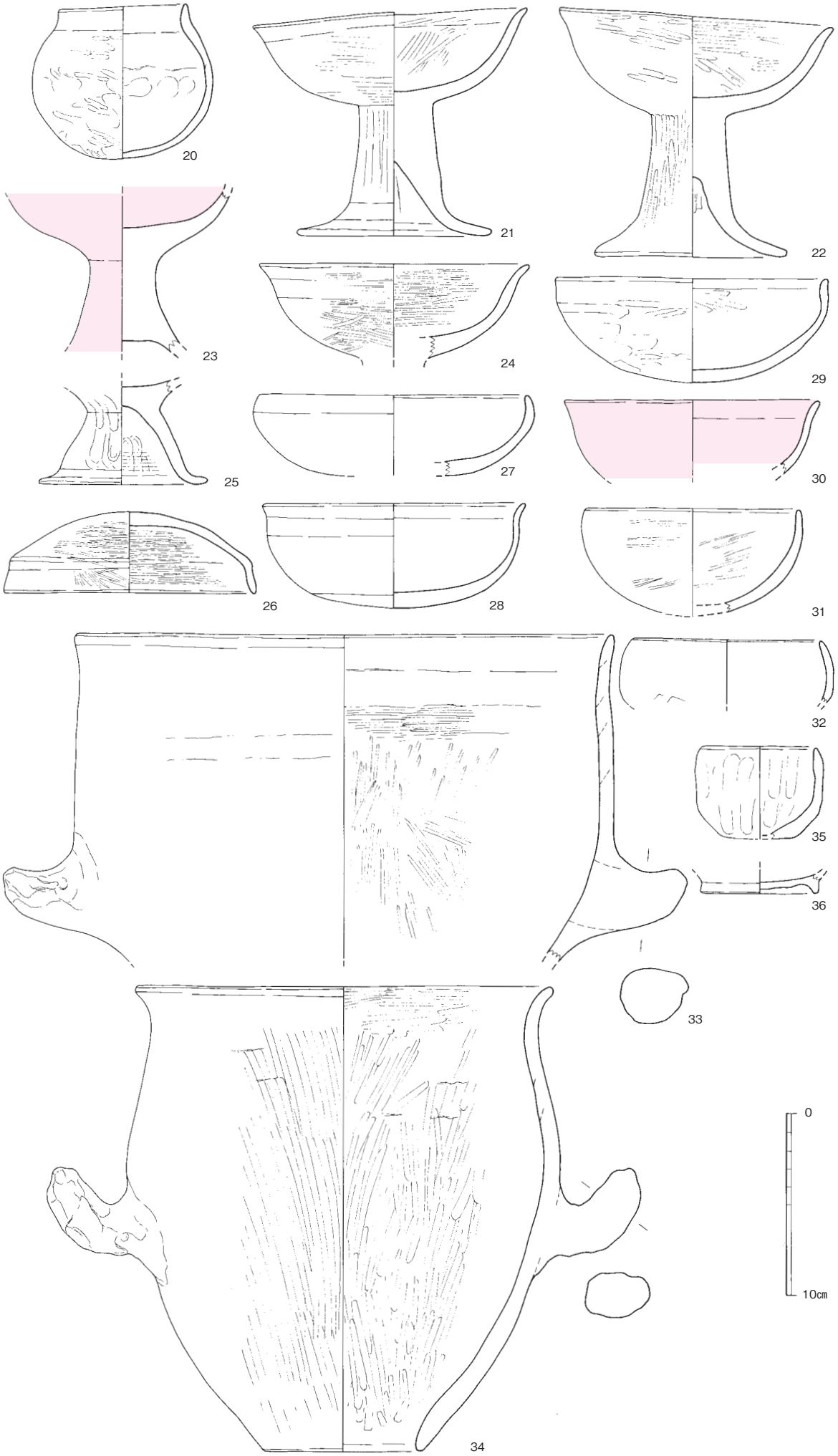
土師器（12～34）　12は甕である。ゆがみが大きいがほぼ全形に図上復元できる。体部はやや長胴気味で頸部は締まり悪く口縁部は外湾しながら強く開く。13は短頸壷の口縁部片か。頸部はや



第8図　5･6･29号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）



第９図　５号竪穴住居跡出土土器実測図その①（1/3）



第 10 図　5 号竪穴住居跡出土土器実測図その②（1/3）

や強く締まり口縁部は短く直立する。14 は甕または壷の胴～底部片。丸底球胴であろう。15･16 は小型の甕の口縁部片か。いずれも外湾しながら短く開く口縁部を持つ。17 は小型甕または壷の胴～底部片で、球胴丸底。内面に指ナデ痕跡をよく残す。18 は小型短頸壷の胴部片であろう。ややつぶれた球胴で内・外面に板ナデ痕跡をよく残す。19･20 は小型短頸壷である。球胴丸底で頸部は締まり悪く口縁部は短く伸びる。ともに外面底部付近に板ナデ痕跡を残し、20 は外面にミガキが認められる。21 ～ 24 は高坏である。いずれも坏部中位に明瞭な段を形成しないもので、器壁調整には丁寧なミガキがみられるものが多い。脚部は上 1/3 ほどが粘土により充填され、端部は強く外湾する。25 も高坏だが脚上位まで中空の資料。26 は須恵器模倣坏蓋である。内・外面に丁寧なミガキを施し黒色に仕上げる。27 ～ 32 は椀である。27 は扁平で口縁端部を内側に強く内湾させるもの、28 はやや平たい体部を持ち口縁端部を短く外湾させるもの、30 は体部湾曲が緩いもの、31･32 は半球形の器形を持つものである。33･34 は甑である。33 は底部が欠失する。胴部中位が強く張り、口縁部は直立して端部がわずかに外湾する。34 は底部全体が孔となるもので、胴部は緩やかに膨らみながら伸び口縁部は外湾する。ともに内面を丁寧なミガキ調整で仕上げる。

なお、他に埋土中から第 117 図 1 の棒状土錘が出土している。

6 号竪穴住居跡（第 8 図、図版 7）

調査区の南東寄りで検出した。5･29 号住居跡と切り合い関係にあり、両者を破壊する。当初、南北軸が本来よりやや東西に振れた住居跡として検出したが、掘り進めるうちに図示したような状況となったものであり、従って西・南側には当初想定していた住居跡の範囲に沿って一段掘り下げられた状態となっている。この範囲に別の竪穴住居跡が存在する可能性も検討したが、埋土や床面の状況からはこれを支持するような痕跡は認められず、本住居跡の検出ミスと判断するに至った。

住居跡の規模は最大で南北長が 3.86m、東西幅が 3.32m をはかり、平面形態はやや縦長の長方形プランである。残存深さは 10 ～ 15cmほどである。主軸を南西－北東方向に持ち、南壁の中央部に内接型のカマドを付設する。床面からは 4 つのピットを検出し、主柱穴と考えられる。うち 3 基は床面では検出できず、床面を 5 ～ 10cmほど下げたところで検出した。従って、床面には広く貼床が施されていたと考えられる。本住居跡に明らかに属する出土土器はごくわずかで図示できないが、当初 5 号住居跡と切り合い関係を誤認した状態で掘り下げていた際に付近から出土した遺物を 4 点ほど図示する。これらには 7 世紀中葉の資料が含まれ、本住居跡をこの時期に比定すれば切り合い関係上も齟齬はない。

カマド（第 8 図、図版 7）

南壁の中央に内接型のカマドを検出した。袖は壁とほぼ直交方向にまっすぐに 65cmほど伸びており、両袖のほぼ中央、奥壁より 35cmほどの位置に細長い石材を立てた支脚を検出した。支脚は床面レベルより約 15cm突出する。被熱変色部は認められない。カマドの埋土は住居跡の埋土にカマド構築粘土や焼土、炭化物などが混合したもので、最下層には灰層も見られる。

5･6 号竪穴住居跡出土土器（第 12 図）

須恵器（1･2）　1･2 は坏蓋である。ともに、カエリを有するもので口縁部径が小さい。つまみ部は欠損しており有無は不明。

土師器(3･4)　3 は椀の口縁部片。半球形を呈するものか。4 は甑の把手。断面形状が平坦な板状で、

強く湾曲しながら斜め上方に伸びる形状がやや特異である。

なお、他に埋土中から第121図12の黒曜石製打製石鏃、第129図25の鉄鎌が出土している。

7号竪穴住居跡（第11図、図版7）

調査区の南東寄りで検出した。11･17号住居跡と切り合い、これらよりも後出する。主軸を北西－南東方向にとり、西壁の中央部やや南寄りの位置に内接型のカマドを付設する。平面形態はややゆがみのある方形で、規模は長さ3.40m、幅3.42mをはかる。残存深さは20cmほどとして図示したが、うち5cmほどは貼床を掘りすぎたものであり、カマドの周囲のみ被熱変色部が認められ、正しい高さで把握することができた。床面からはいくつかのピットを検出したが、そのうち２つほどが位置や深さから見て主柱穴となり得るものである。出土土器から、7世紀後葉前後に位置づけられよう。

カマド（第11図、図版8）

西壁の中央部よりやや南側に寄った場所で内接型のカマドを検出した。袖は住居跡の壁と直交方向に90cmほど伸び、両袖の先端部には立石を埋め込む。立石の突出高さは15cmほどで、その上には長さ55cm、幅20cm、厚さ15cmほどの細長い石材を架けている。この架け石の下側と、それに対応する床面は被熱して赤変していた。また、床面の被熱赤変部に接して奥壁より35cmほどの位置に立石を用いた支脚が埋められていた。支脚の突出高さはわずか3cmほどであり、頂部が欠損しているため本来はさらに突出していたものとみられる。埋土は住居跡の埋土とカマド構築粘土の混合層で、最下層には薄く灰層が確認された。灰の掻き出しなどカマド廃絶に伴う行為を特に行わず、住居跡の埋没とともにカマドも埋没した様相がうかがえよう。

出土土器（第12図、図版38）

須恵器（5～8）　5･6はおそらく提瓶の肩部片であろう。いずれも強くすぼまり屈曲する頸部と直線的に開く口縁部下半が残る。7は高坏である。坏部は浅い半球形で脚部は外湾しつつ広がり、端部を下方に屈曲させる。8は長頸壷で、底部・口縁部が欠損する。肩部は強く張り、頸部は直立する。胴部最大径やや上に二条の沈線で区切って内部に櫛歯状の工具で刺突文を充填する。

なお、他に埋土中から第117図2～5の棒状土錘、第129図9の鉄鏃、同27の鉄鎌が出土している。

8号竪穴住居跡（第11図、図版8）

調査区の南東隅で検出した。東に5･29住居跡が、北に7号住居跡が隣接する。9･11号住居跡と切り合い関係にあり、これらに先行する。従ってまた、9･11号住居跡を破壊する7･10号住居跡よりも古い。付近はSX－02谷状落ち込みが下層にひろがる地点であり、この埋土である黒褐色粘質土と遺構埋土との区別がつきがたかった上に、いくつもの住居跡が重複していて、遺構の検出にはかなりの難を伴った。最終的に図示したように3.48×3.02mの規模をもつやや横長長方形の住居跡としたが、床面からは主柱穴となり得るピットも1基しか検出されず、カマドや炉跡等も不明であり、自信はない。また、ピットを探す過程で貼床の存在を想定してやや深めに床面を下げたため出土土器の中には下層遺構であるSX－02谷状落ち込みの土器も含まれる。出土土器から、6世紀中葉に位置づけたい。

出土土器（第12図、図版38）

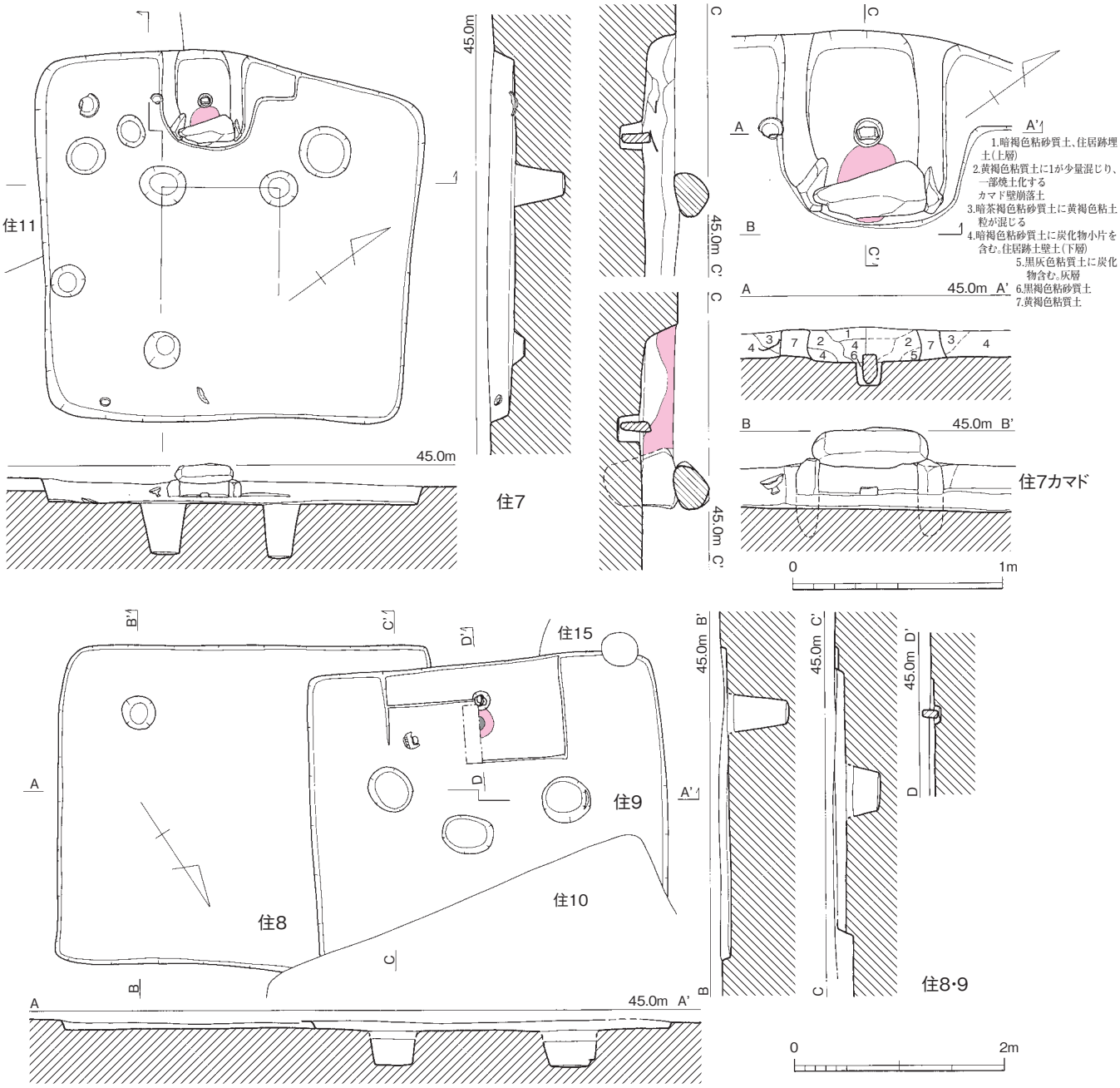
須恵器（9･10）　9は段を持つ坏蓋である。天井部は平坦に伸び、肩部は強く湾曲して外面に段を

形成する。口縁部はやや広がりながら伸び、端部は欠損する。10 は高坏の脚部片。坏底部が平坦で、坏部が皿状になるものか。脚は低く、強く外湾して端部をやや弱めに下方に屈曲させる。

土師器（11 ～ 16） 11 は甕の胴上位～口縁部片。胴部は長胴気味で頸部の締まりは悪い。12 ～ 15 は椀である。いずれもやや扁平な半球状で 13 のみ口縁端部をわずかに外湾させる。16 は高坏の坏部片。胴部中位に段はなく、口縁端部は反転して外湾する。

9 号住居跡（第 11 図、図版 8）

調査区の南東隅で検出した。8 号住居跡の西にあってこれを破壊している。またさらに西には 15 号住居跡があり、これをも切る。一方、北辺は 10･11 号住居跡により大きく破壊されて全く残っていない。南辺のほぼ中央部にカマドを付設しているが、住居跡が著しく削平されていて数cmしか残されていないため、カマドの袖を検出することができず、支脚とその前面の被熱赤変部をかろうじ



第 11 図　7 ～ 9 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

て確認したのみである。なお、カマドの周辺以外は床面をやや下げすぎており、本来の床面はカマドの付近に残るのみである。従って、出土土器には下層のSX－02谷状落ち込みの土器も含まれる。出土土器と切り合い関係から6世紀後葉頃に位置づけたい。

カマド（第11図）

南辺のほぼ中央部にカマドの付設痕跡を検出した。削平が著しく、残されていたのは支脚と支脚穴、床面の被熱赤変部のみである。支脚はカマドの奥壁に当たる南壁中央部から約30㎝の位置に立てられており、頂部の床面からの高さは8㎝ほどをはかるが、頂部は欠失しており、おそらく本来の高さはこれより高かったものとみられる。支脚の前面に被熱赤変面が形成されていた。赤変部は比較的焼けていない周辺部とよく焼けた中心部が認められる。当初、被熱部がカマド天井部の粘土（被熱部）が崩落したものである可能性を想定して支脚の前面にトレンチを設定したが、被熱部は上層のみで平坦に広がっており、これがカマド床面の被熱部であることを確認している。

出土土器（第12図、図版38）

須恵器（17）　17は長頸壷の胴部片である。肩が強く張り、最大径のやや上、肩部付近で二条の沈線の内部に矢羽根状の沈線をめぐらせる文様帯を持つ。胴部下半も比較的張り、底部に近くなって強く屈曲する。

土師器（18）　18は甕の口縁部片である。如意状に外湾する口縁部片を持ち、胴部はやや長胴気味になるか。

10号竪穴住居跡（第13図、図版8）

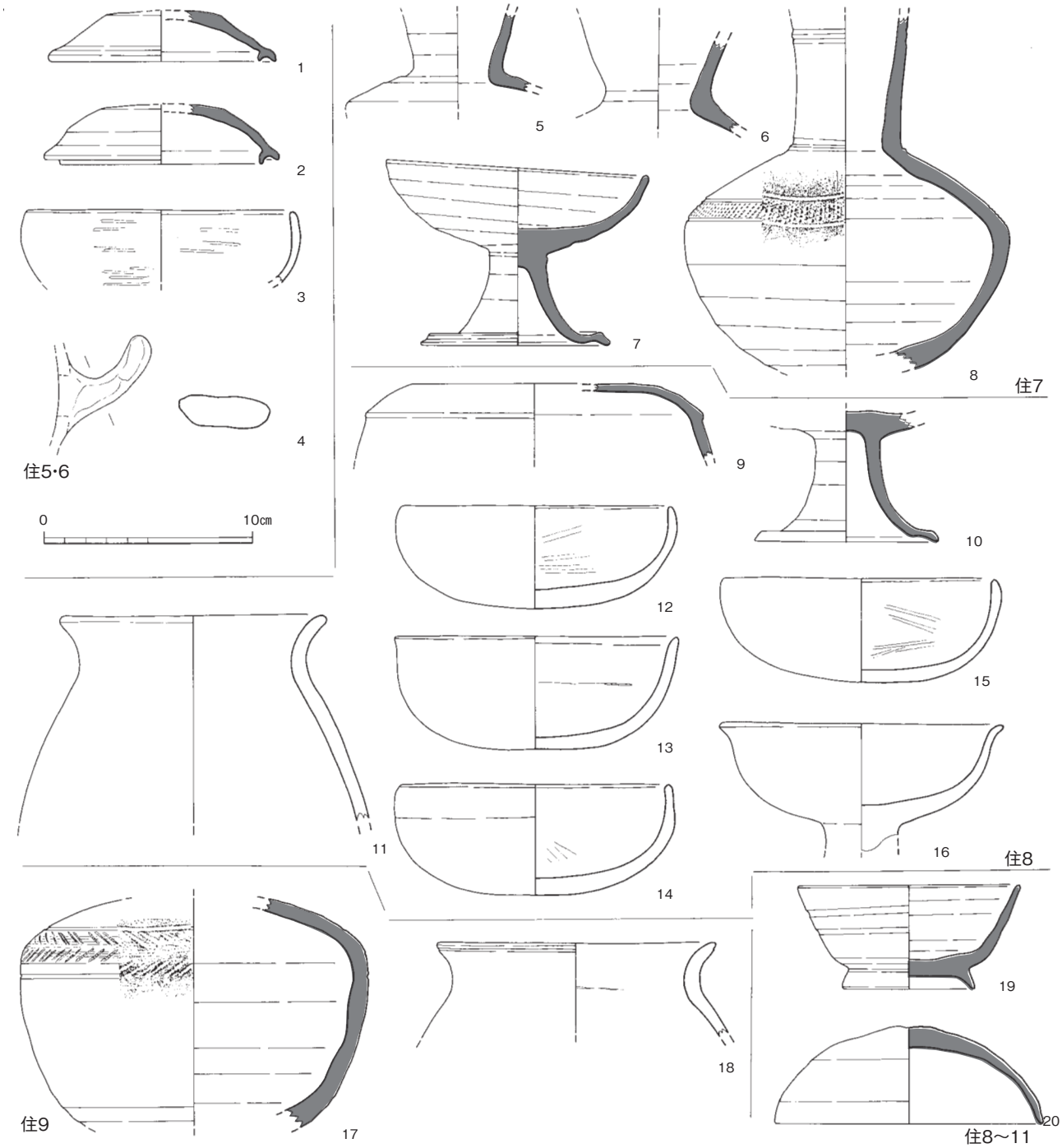
調査区の南東隅で検出した。11号住居跡の南側に重複するようにしてこれを大きく破壊しているほか、9･15号住居跡も破壊している。位置的には8号住居跡とも重複関係にあるが、9号住居跡を介しており直接的な切り合い関係にはない。検出当初は11号住居跡の埋土の一部と考えていたが、一段掘り下げて改めて検出したところ別の住居跡が切り合っているという認識に至ったものであり、東・北壁の一部を失ってしまった。平面形状は長方形で長軸を東西方向に取る小型の住居跡で、規模は東西長が3.00m、南北幅が2.04mほどをはかる。検出当初、南西コーナー部付近に焼土や炭化物の小片がやや集中している場所があり、カマドの可能性を想定して掘り下げたがはっきりとは確認できなかった。出土土器は図示したもののほかに11号住居跡として取り上げたもののうち新しい時期に属するものが本住居跡に伴う遺物であろう。検出に手間取った結果、本住居跡のみに属する出土遺物は確認できなかったが、8～11号住居跡出土遺物として取り上げたものが2点あり、図示する。最も新しい遺物として10の高台を持つ坏身があり、本遺構の所属時期を7世紀後葉と考えたい。

なお、土器以外の遺物としては第120図109･113の土玉2点が埋土中から出土している。

11号竪穴住居跡（第13図、図版8）

調査区の南東隅で検出した。8･9･15号住居跡を破壊しており、7･10号住居跡に一部を破壊されている。検出時に、本住居跡の北西四半部に黄褐色粘質土が長方形に広がっている状況を確認した。また、黄褐色粘質土の部分と北壁との間には黒褐色粘質土の埋土が幅30㎝ほど伸びていて溝状を呈していた。以上の状況を、北壁の中心部にカマドがあって北壁沿いに煙道が西に伸びている状況

であり、黄褐色粘質土はやや幅が広いが煙道構築粘土と考えた。しかし肝心のカマドを想定した部分は7号住居跡に破壊されていることもあり判然とせず、この想定が正しいかどうか判断できなかった。また東半部は10cmほど深く掘り下げているが、本住居跡の埋土と下層に広がるSX－02谷状落ち込みの埋土との差異が判然としないままに掘りすぎている可能性が高い。床面からは柱穴と判断できるピットも出土しておらず、この遺構が本当に住居跡であるかどうかはやや疑わしい。出土土器は5世紀代のものが大半を占めるが、SX－02谷状落ち込みの上層を掘りすぎておりそこから出土したもので、本住居跡に伴うものではなかろう。切り合い関係から7世紀前葉前後に位置づけておきたい。



第12図　5～11号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

出土土器（第 14 図、図版 39）

土師器（2 ～ 6）　2 は甕の口縁部片。強く外湾しながら開く。3 は高坏の脚部片。屈曲する部分以下が残る。4 は脚付椀か。脚部は低く、端部が強く湾曲する。5 は椀で、半球形をしていて口縁部がごくわずかに外湾する。6 は小型甕である。頸部の締まりは悪く口縁部は短く開く。球胴丸底。

8 ～ 11 号住居跡出土土器（第 12 図、図版 38）

8 ～ 11 号住居跡の検出時に、切り合い関係を把握するため数度にわたって遺構面を掘り下げた。このとき出土した土器を示しておく。

須恵器（19･20）　19 は高台を持つ坏身である。底部は平坦に伸びて強く屈曲し、口縁部まで直線的に斜めに開く。高台は外に張り端部を丸く収める。7 世紀後半の資料。20 は坏蓋である。やや低い半球状の器形で段を持たない。7 世紀初頭～前葉前後の資料か。

7･10･11 号住居跡出土土器（第 14 図）

7･10･11 号住居跡の検出時に、切り合い関係が判断できず遺構埋土の広がる範囲を数度にわたって掘り下げた。この時出土した土器を示す。

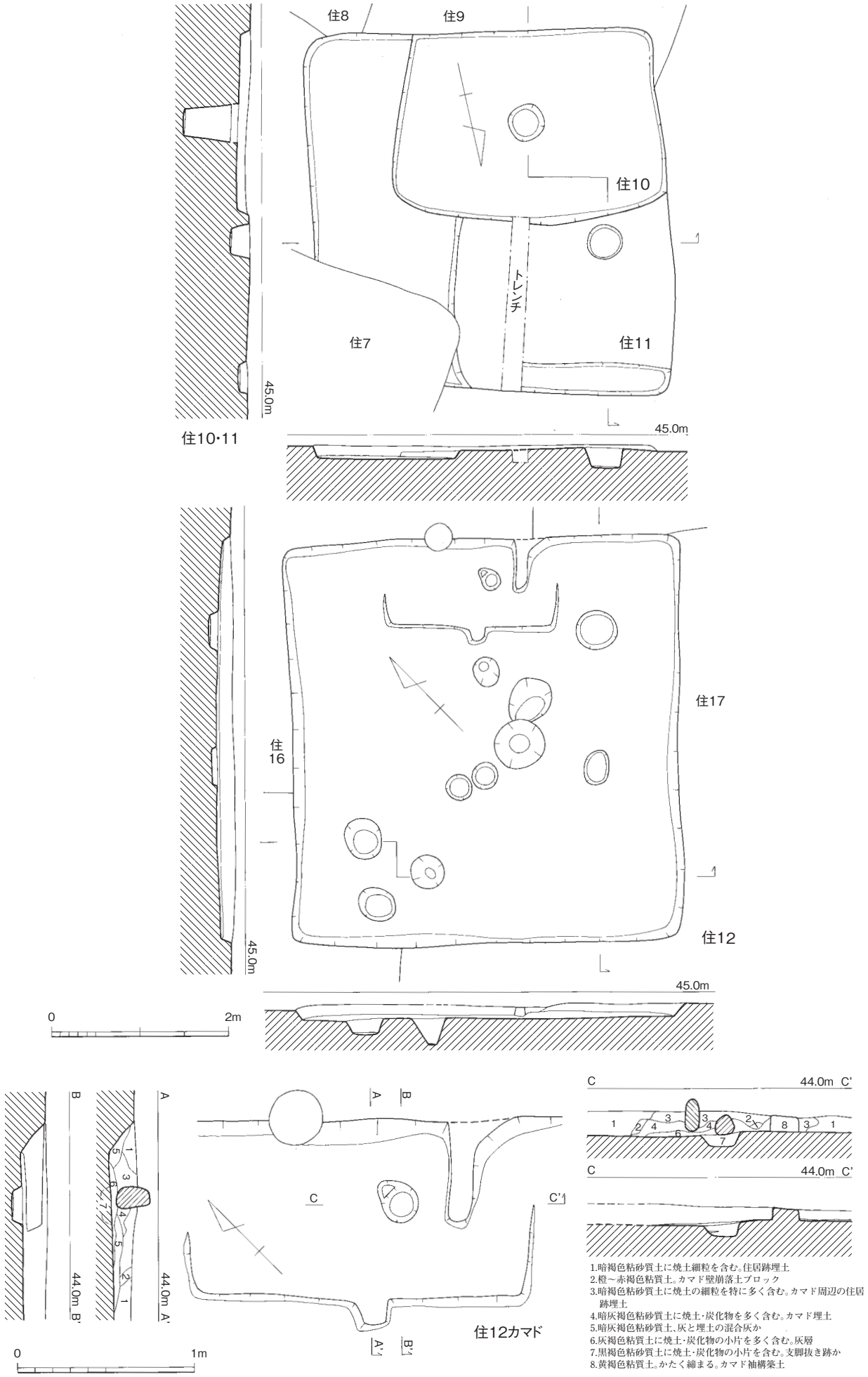
須恵器（1）　1 は大甕の口縁部片である。斜めに大きく開き口縁部下に沈線と短斜線からなる文様帯をめぐらせる。

12 号竪穴住居跡（第 13 図、図版 12）

調査区の南東寄りで検出した。南に 7 号住居跡が隣接する。16･17 号住居跡を破壊しており、これらより後出する。主軸を大略北東－南西にとり、北壁の中央部に内接型のカマドを付設する。カマド付近を残して先に住居の中央部付近を掘り下げたが、明確に埋土が変化したとの確証をつかめないままに掘りすぎてしまい、カマド付近を掘った結果残存深さが 10㎝弱であることが判明した。従って掘りすぎた 5㎝ほどはおそらく貼床だったものとみられる。平面プランはほぼ正方形で規模は南北長が 4.42m、東西幅が 4.22m ほどをはかる。床面から主柱穴を検出しようとして何度も検討したが、それらしいものを掘り下げてもしっかりとしたピットにはならず、結局主柱穴は 1 つも検出できていない。出土土器の新しいものを取れば 6 世紀後葉の住居跡か。主柱穴がはっきりしないことから、やや新しい時期の住居跡の可能性も残る。

カマド（第 12 図）

北壁の中央部から、内接型のカマドを検出した。慎重に調査したが左袖は検出できず、削平あるいは破壊されてほとんど残っていなかったものとみたい。右袖は奥壁から 55㎝ほどが壁と直交方向にまっすぐ伸びる。奥壁から 25㎝ほどの位置で直径 20㎝、深さ 5㎝ほどの小ピットを検出し、その直上に床面から数㎝浮いた状態で長さ 20㎝ほどの長楕円形の石が出土したことから、小ピットは支脚穴で、支脚として用いられた石材が抜かれた状態でカマド内に廃棄されたとみたい。支脚穴の位置から復元すると、燃焼部の幅は 50㎝ほどと推定される。明確な被熱赤変部分は検出できなかったが、カマドの埋土には焼土や炭化物、カマド構築粘土が多く含まれ、また最下層には灰層も残っていた。



第 13 図　10 ～ 12 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

出土土器（第 14 図、図版 39）

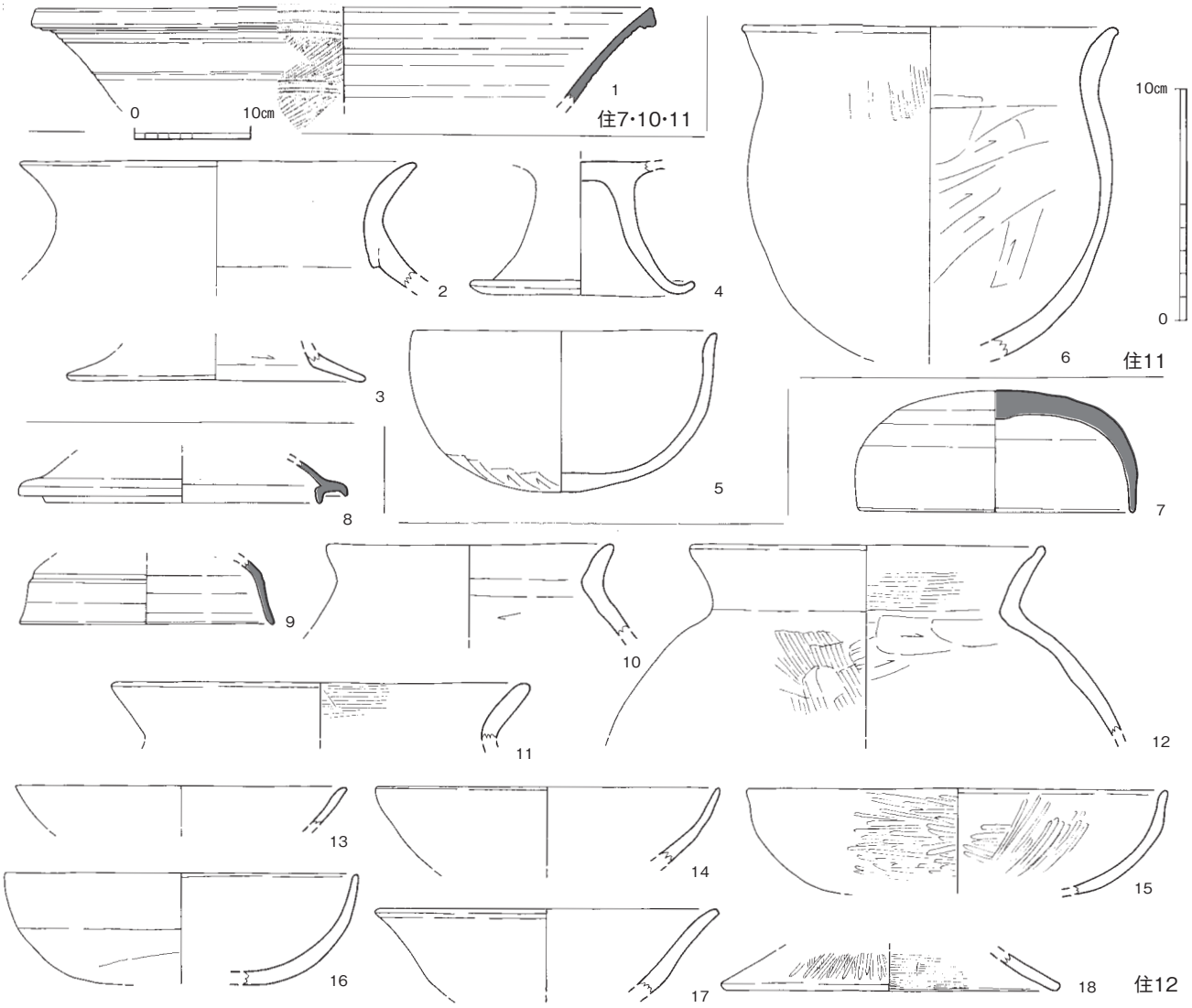
須恵器（8･9） 8 はカエリを持つ坏蓋の口縁部片で、カエリはしっかりしている。9 は坏蓋の口縁部片。肩部屈曲部に段を持つ。口縁部は斜めに直線的に伸び、口縁端部は斜めに仕上げる。

土師器（10 ～ 18） 10 は小型甕の口縁部片。頸部はやや締まり明瞭に屈曲する。口縁部は短く外反する。11 も甕の口縁部片か。わずかに外湾しつつ伸びる。12 は甕の胴上位～口縁部片。胴部は球形か。頸部は強く締まり口縁部はやや直立気味に開く。13 ～ 16 は椀。13･14 はやや直線的に開き、15･16 は胴部が強く屈曲する。17 は高坏の坏部片か。やや径が小さいが小片で自信はない。18 は高坏の脚部片。強く直線的に開く。

以上の資料は新旧混在しており、古いものは下層住居跡に属するか。

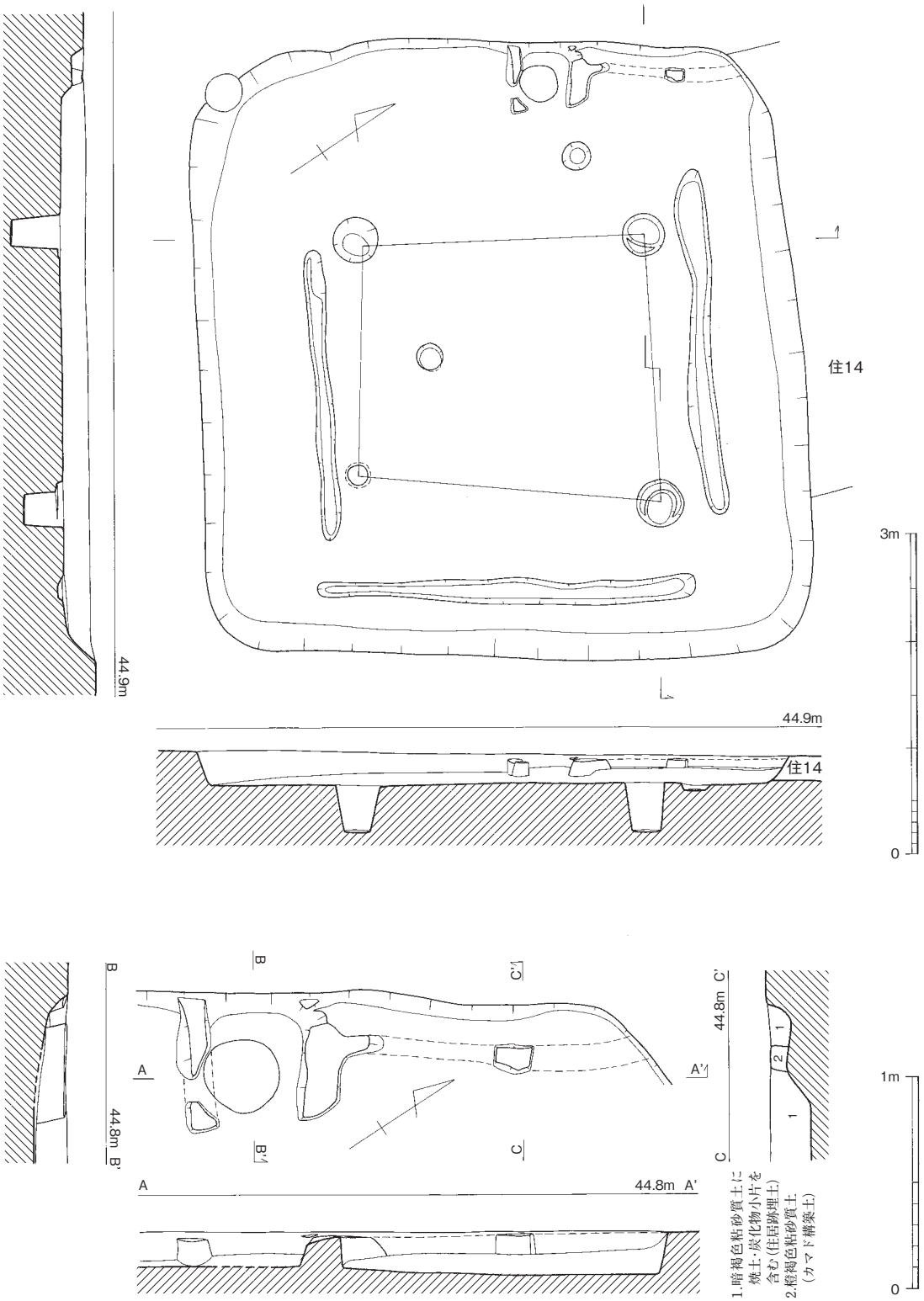
13 号竪穴住居跡（第 15 図、図版 9）

調査区東寄りの中央やや北側で検出した。14 号住居跡の南壁を大きく破壊する。南側に 18 ～ 21･26 ～ 28･30 号住居跡が重複する住居跡集中部があるが、切り合い関係はない。平面形態は主軸は西北西－東南東に取り、西壁の中央やや北寄りに内接型のＬ字状カマドを作り付ける。規模は東西 5.48m、南北 5.28m をはかる。床面からは 4 本の主柱穴を検出したほか、西側を除く 3 辺に平



第 14 図　7･10 ～ 12 号竪穴住居跡出土土器実測図（1 は 1/6、他は 1/3）

行して細い溝状遺構が検出された。住居壁からの距離が、南壁は100cm、東壁は40cm、北壁は70cmとそれぞれ異なるため、本住居跡に伴うものではなく下層に重複する住居跡の周壁溝かとも考えたが、重複する住居跡の主柱穴が検出できず、その可能性は低い。本住居跡に伴う何らかの施設の痕跡と考えたいが性格は明らかにできなかった。床面には広く貼床が施されており、カマドの周囲



第15図　13号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）

以外は10㎝近く掘り下げてしまっておりこの段階での検出なので、床面にはあらわれていなかった可能性が高い。なお、主柱穴の検出深さも貼床を除去した状態である。貼床上面では一部の主柱穴の芯部が見えており、おそらく柱痕であったろう。出土遺物から5世紀後葉に位置づけたい。

カマド（第15図、図版9）

西壁の中央北寄りに設置されたL字状カマドである。袖は住居内に向かって約50㎝ほどの長さで、西壁に直交して直線的に伸びる。燃焼部の幅は40㎝とやや小形のカマドである。燃焼部の中央を上層から掘り込まれたピットにより大きく破壊されており、支脚の有無・痕跡は不明。煙道部は燃焼部より一段高くなっているがこれは住居跡の床面と同様燃焼部の貼床も掘りすぎたためとみられるが、土層上で表すことはできなかった。煙道はカマド奥から西壁に沿って北に伸びているが、一部掘り飛ばしてしまうなどして記録は完全ではない。

出土土器（第17図、図版39）

土師器（1～19）　1･2は大・中型の甕である。球胴丸底で頸部はやや締まり口縁部は外湾しながら広がる。ともに器壁調整は胴部外面がハケ目、内面にケズリ。3･4は甕の口縁部片。頸部は強く締まり明瞭に屈曲して内面に稜を持つ。口縁部は外湾しながら広がる。5は小型の壷胴部か。やや扁平な球胴部と強く締まる頸部が残る。6･7は小型の直口壷の口縁部片か。口縁部はともにわずかに内湾しながら急激に広がる。8は二重口縁壷の口縁部片。口縁部は強く外湾しつつやや広がる。9は小型丸底の直口壷である。胴部は扁平で口縁部はやや外湾しながら広がる。10は中型の直口壷。胴部は扁平で口縁部はやや外湾しながら広がる。11～13は高坏の脚下部片。11は強く広がりつつ端部付近をやや外に屈曲させる。12は明瞭な屈曲部を持つ。13もおそらく12と同様の器形か。14は高坏の坏下部片。おそらく坏中位外面に稜を持つ。15～19は高坏の坏部片か。いずれも坏中位外面に明瞭な段を持ち、口縁部はわずかに外湾するものが多い。

なお、他に埋土中から第129図3の鉄鏃が出土している。

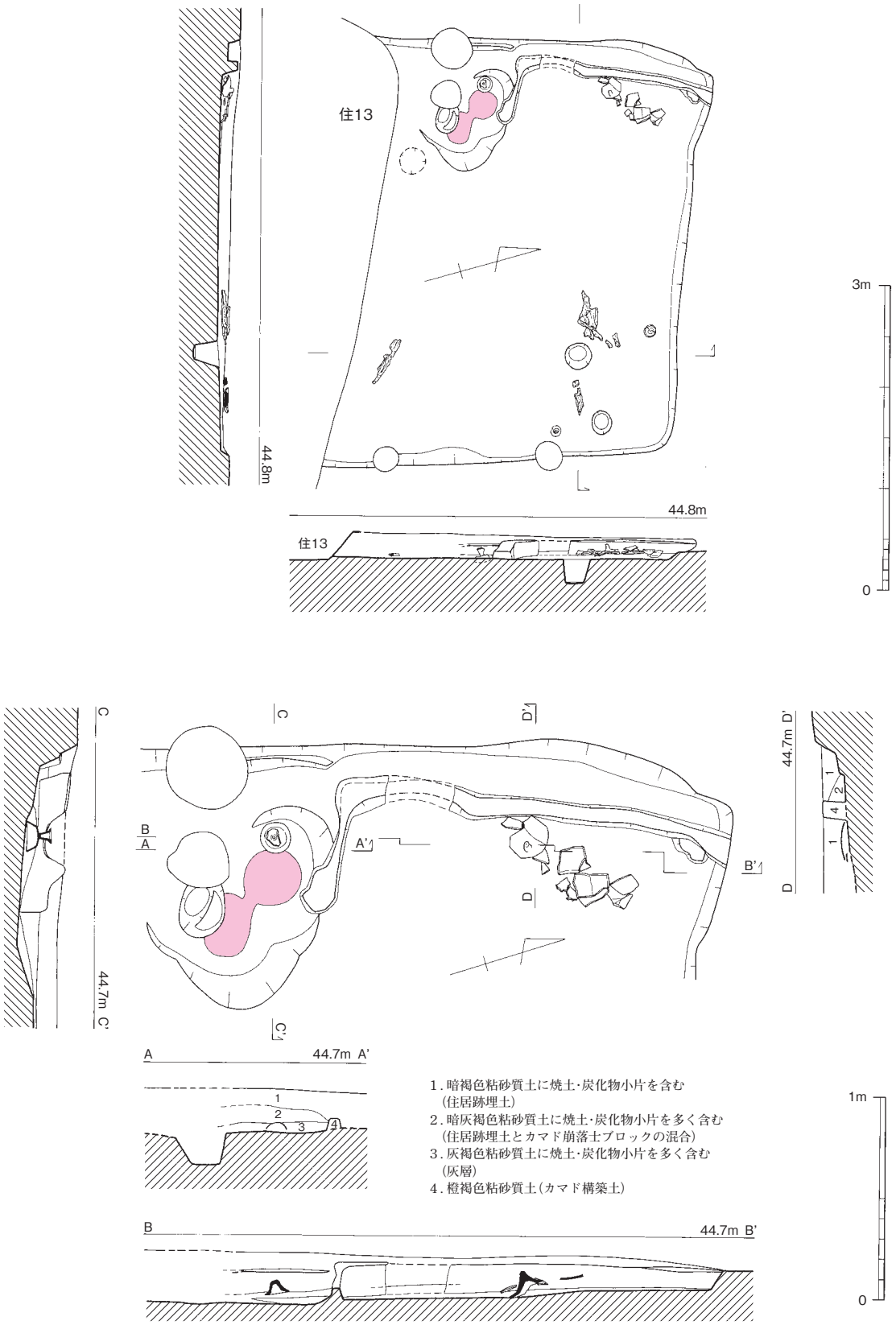
14号竪穴住居跡（第16図、図版10）

調査区東寄りの中央やや北側で検出した。14号住居跡に南壁を大きく破壊される。主軸方位は西北西－東南東に取り、西壁の中央部にL字状カマドを作り付ける。規模は東西3.96m、南北は南壁が14号住居跡により破壊されており不明だが、カマドが西壁の中央部に作られていると仮定してカマドの中心で北壁を折り返せば4.0mほどをはかることとなろう。なお、西壁と東壁が平行ではなくややゆがみがある平面形状だが調査時の不手際の可能性も否めない。主柱穴の可能性のあるピットが北東で1基検出されたが、ほかは見つけられなかった。床面には広く貼床が施されていた。出土土器と切り合い関係から、5世紀後半代に位置づけておきたい。なお埋土中から出土した炭化材3点を試料として年代測定を行った結果、4世紀中頃～6世紀中頃に比定されており、齟齬はない。埋土中からは床面からやや浮いた状態で多くの土器が出土しており、これらから13号住居跡の所属時期と大きな差がない5世紀後葉代に位置づけることができよう。

カマド（第16図、図版10）

西壁に内接型のL字状カマドを作り付ける。中央部を上層から掘り込まれたピットにより、また左袖を13号住居跡により破壊されていて残存状況は悪い。右袖は西壁と直交方向に、煙道構築粘土から直線的に60㎝ほど伸びていて、燃焼部の長さは奥壁から70㎝ほどをはかる。奥壁から40

cmの燃焼部内に高坏を逆位に置いており、その前面に被熱赤変部が形成されていることから、これが転用支脚と考えられる。カマド幅は右袖を支脚を中心に折り返せば60cm前後、焚口幅はやや狭く30cmほどとなろう。埋土最下層には灰層が認められる。煙道はカマド袖と同じ粘土を用いて西壁に沿って北に伸びており、煙道部最大幅は20cmほどをはかる。



第16図　14号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

出土土器（第 17･18 図、図版 39）

須恵器（23）　23 は高坏の脚部片である。外湾しながら強く広がり端部を下方に折り曲げる。7 世紀代の資料で小片であり、混入であろう。

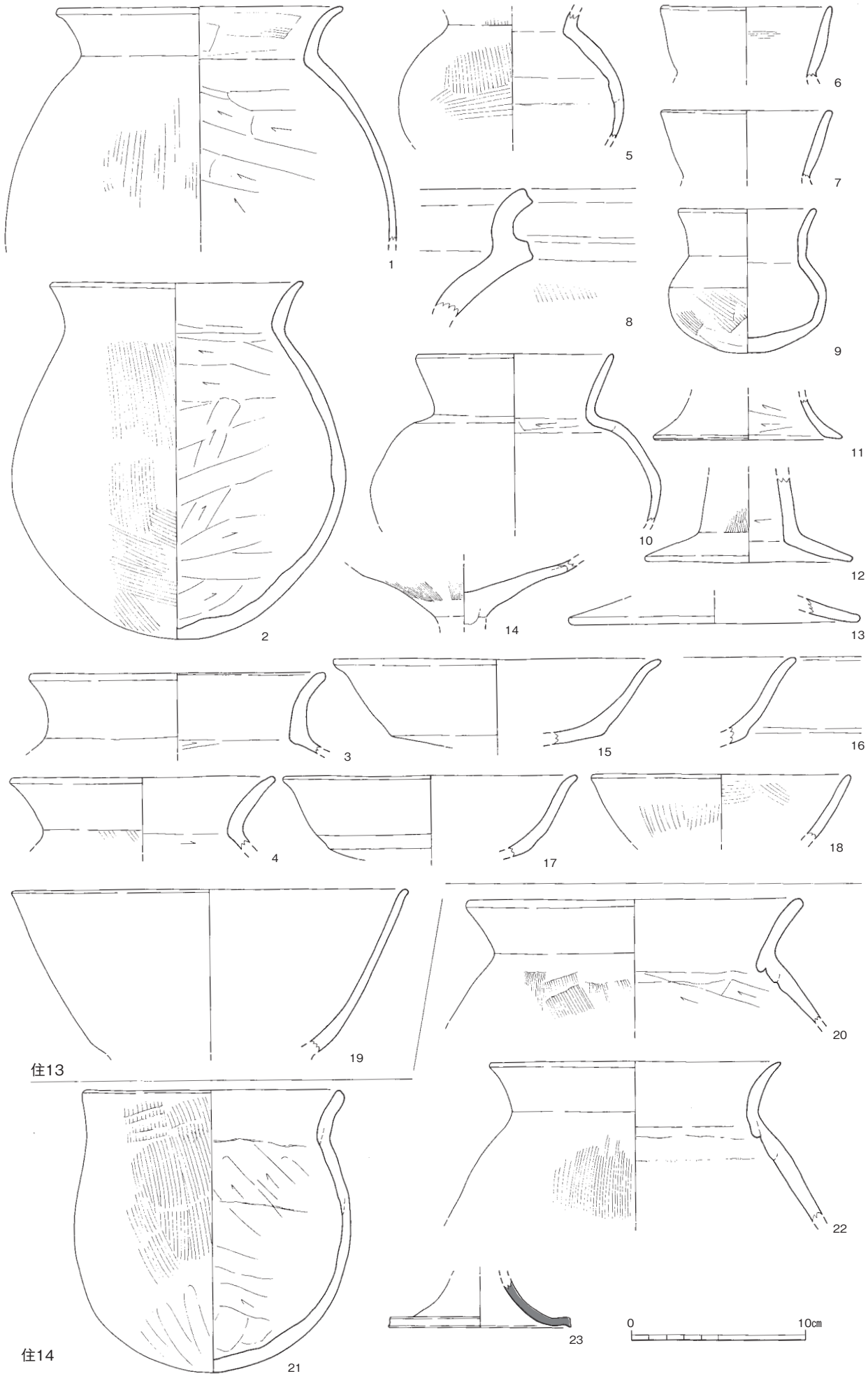
土師器（20 ～ 22･24 ～ 37）　20 ～ 22･26 は甕である。20 は大型の甕の口縁部片。頸部は強く屈曲して内面に稜を持ち、口縁部はわずかに外湾しながら開く。21 は中型甕である。球胴で頸部の締まりは弱く、屈曲部内面は緩やかに推移する。口縁部は短く直立気味に伸びる。22 は甕の胴上位～口縁部片。胴部はおそらくやや長胴気味になり、頸部の締まりはやや弱く内面は緩やかに推移する。粘土帯接合痕跡が明瞭に残る。26 は口縁部のみ残る中型甕で、頸部屈曲はやや明瞭で口縁部は外湾しながら開く。24･25 は甑である。ともにやや背が低い。24 は把手が失われており、下半部は球胴で底部は弱いレンズ状を呈し、径 3 ～ 4cmほどの不整形の円孔を中央に 1、周囲に 6 配する。25 は底部が欠失するが器形は 24 と類似する。口縁部はわずかに内湾気味に直立する。27 ～ 31 は高坏である。27 は脚端部のみ失われる。坏部はやや深く中位外面に明瞭な段を形成する。口縁部はわずかに外湾する。28 は坏部片。底面は平坦で中位で明瞭に屈曲し、口縁部はまっすぐ開く。29 ～ 31 は脚部片。いずれも、脚部はわずかに外湾しつつ直線的に開き、設置部は明瞭に屈曲して強く開く。27 の脚部とは形状が異なり、27 がやや古く位置づけられよう。32 ～ 37 は椀。32･33･35･37 は半球形でやや浅い。32 は口縁端部を斜めに切り外面をわずかに引き出す特徴を持つ。34･36 はやや平底気味で口縁部まで直線的に開く器形を持つ。以上のうち 27 がカマドの支脚に転用されていたものである。また、24･25 は煙道部東側に床面からやや浮いた状態で出土している。遺構図にはほかにいくつかの土器の出土状況を掲載しているが、取り上げ時に記録を残しておらず特定できない。

15 号竪穴住居跡（第 19 図、図版 11）

調査区東端の南寄りで検出した。7･9 ～ 11 号住居跡に東側を大きく破壊されているほか、北西コーナー部が 42 号住居跡により破壊されているが、42 号住居跡との切り合い関係は調査時の誤認で､本来は逆と考えられる。一方､2 号溝を破壊している。付近は SX － 02 谷状落ち込み部が広がっており、また東壁の大半を後出の住居跡に破壊されているため東壁の正確な位置を把握することができず、平面形状を正確に把握できなかった。ただし、床面から主柱穴と考えられるしっかりとしたピットを 3 基確認しており、主柱穴と壁との位置関係から規模を復元すれば、東西長は 7.8m の長さとなる。一方南北幅は両壁が遺存しており 7.44m をはかることが明らかである。一辺 8m 近い規模を持ち、本遺跡群の中でも規模の大きな大略方形の住居跡に復元できる。西壁の中央部に内接型のカマドを持つ。北に向かって西壁沿いを煙道が伸びるいわゆる L 字状カマドである。カマド袖の付け根部分付近以外の住居跡全体を 5cmほど掘りすぎており、本来の残存深さは 10cm内外と見られる。出土土器と切り合い関係から、6 世紀前葉に位置づけられる。

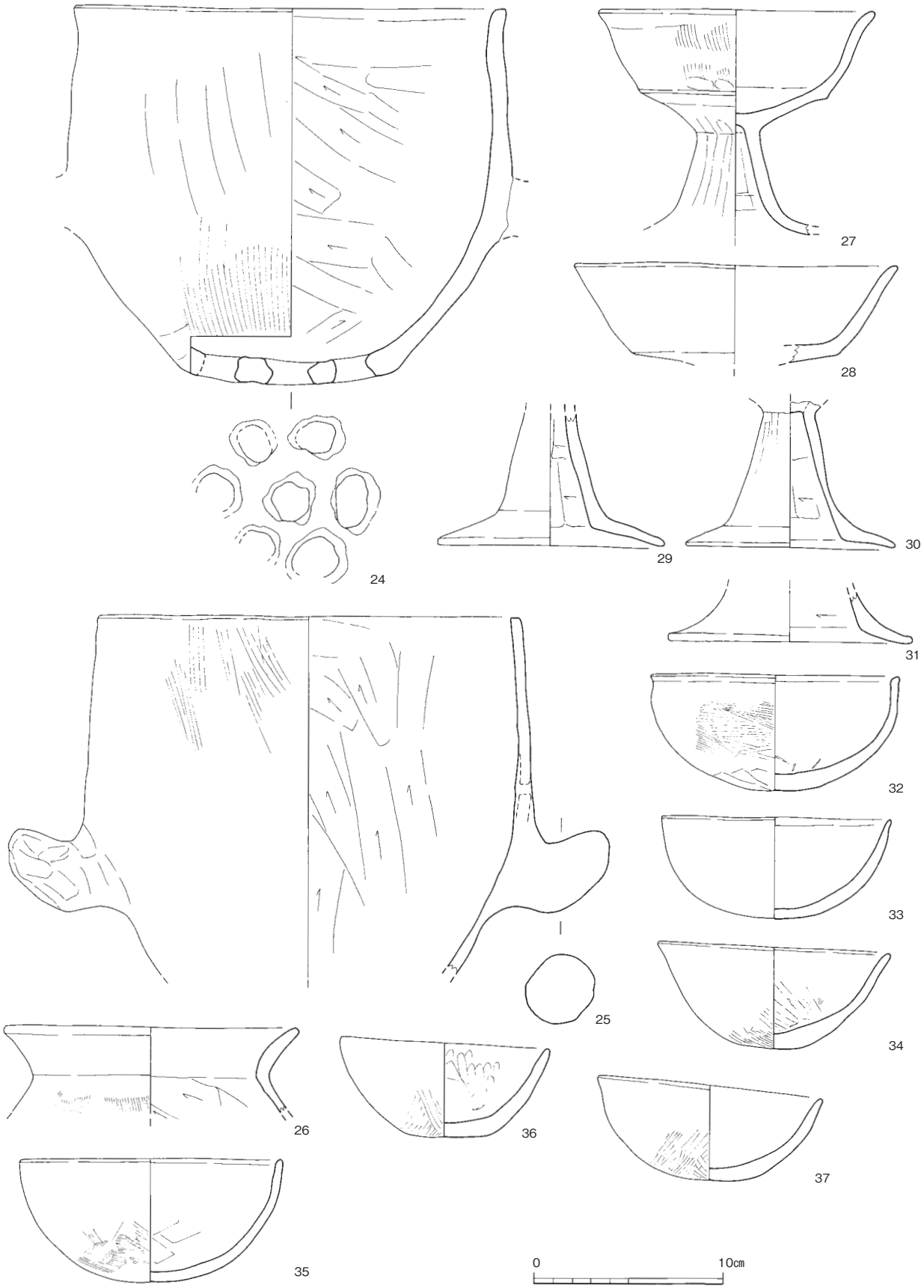
カマド（第 19 図、図版 11）

西壁の中央部に内接型のカマドを検出した。袖は西壁に直交方向にまっすぐと伸び、1.1m ほどの長さを測る。一方燃焼部の幅は 70cmほどで、かなり奥行きのあるカマドといえる。奥壁から 70cmほどの燃焼部中央で、小穴を掘って長卵形の石材を立てた支脚が遺存していた。支脚は床面から 20cmほど突出する。埋土は住居跡の埋土とカマドの構築粘土、焼土、炭化物の小片などが混合した

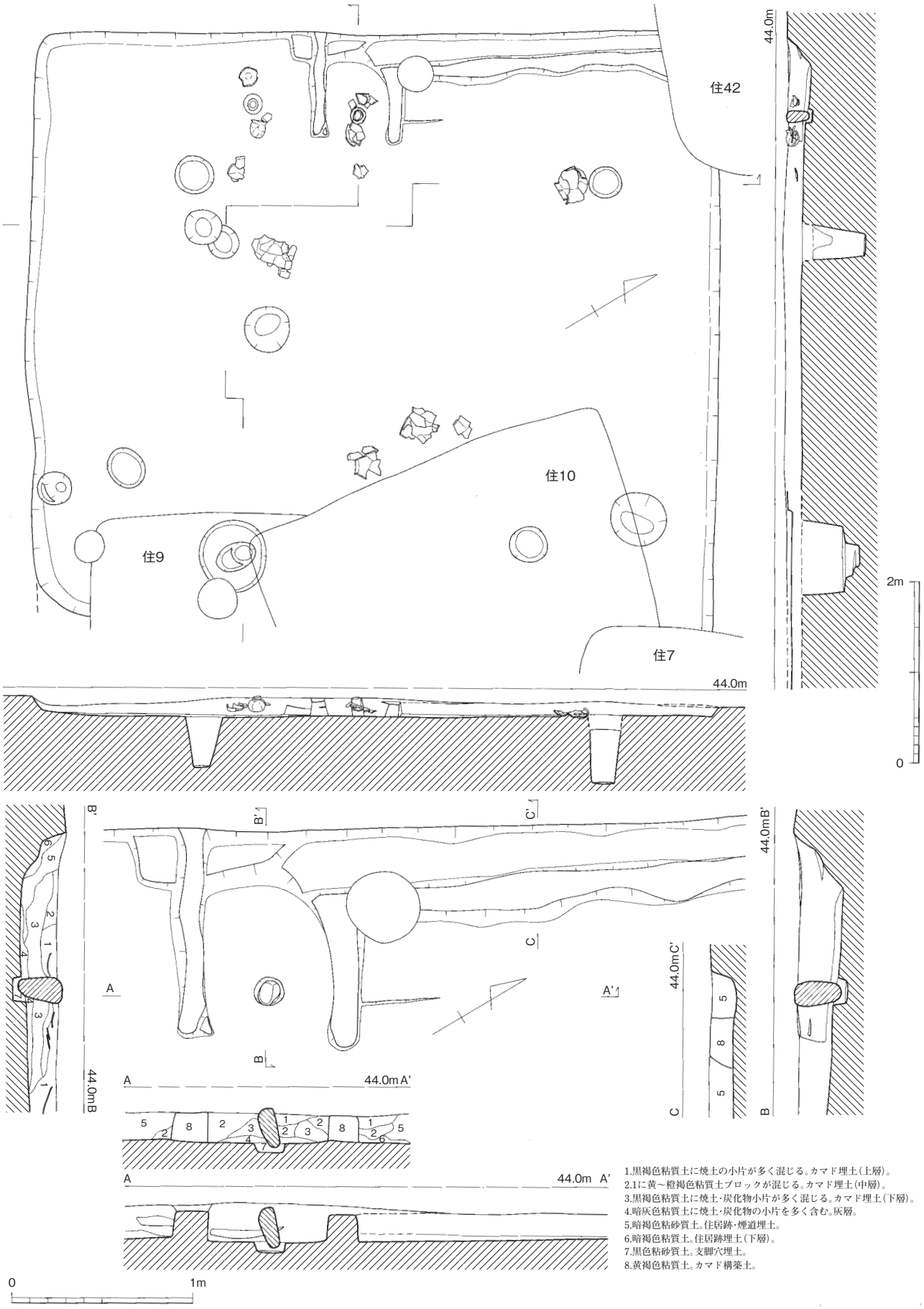


第 17 図　13 号住居跡出土土器実測図、14 号竪穴住居跡出土土器実測図その①（1/3）

様相を示し、最下層に灰層が遺存していることから、廃棄時に特段の破壊手続きを取ることなく住居跡とともに埋没したとみられる。右袖の付け根部分は住居跡の壁から30cmほど離れた部分で直角に曲がり、そのまま北に伸びて沿道の内側壁を形成している。煙道の幅は約20cm、底面レベル



第18図　14号竪穴住居跡出土土器実測図その②（1/3）



第19図　15号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）

は住居跡の床面レベルとほぼ同じであり、竪穴部を掘削し、整形した後にカマド構築粘土と同じ土で煙道を作り付けていることがわかる。

出土土器（第 20 ～ 22 図、図版 40）

須恵器（1 ～ 11）　1 ～ 6 は外面に段を有する坏蓋である。1 は天井部がやや水平で肩部は丸く、口縁部は直線的に下に伸びる。口縁端部は斜めに成形する。2 は天井部は遺存しないが肩部は緩やかに湾曲し、口縁部もわずかに内湾しながらやや広がる。口縁端部は斜め。3 は天井部から肩部にかけて緩やかに湾曲し、肩部は明瞭に屈曲して外面に段を形成する。口縁部はわずかに内湾しながら下方に伸びる。天井部外面に同心円状のタタキ具による痕跡が残る。4 も天井部から肩部まで緩やかに湾曲する。口縁部は内湾しながら伸びたあと端部をわずかに外につまむ。天井部外面に「×」印のヘラ記号が残り、内面には同心円状のタタキ具痕跡が残る。5 は天井部から口縁部にかけて緩やかに湾曲するものでやや新しい。6 は口縁部のみの資料だが、わずかに内湾しながら下方に開き端部を斜めに成形する。7 はカエリを有する坏蓋。8 は端部嘴状の坏蓋。いずれも小片で混入であろう。9 ～ 11 はカエリを有する坏身である。いずれも底部が遺存しないが、体部は強く湾曲し坏部は外に強く突き出る。口縁部は 9･10 が残り、ともにわずかに外湾しながら内側に伸びる。

土師器（12 ～ 37）　12 ～ 15 は大型甕で、図上で大略完形に復元できる。12 はやや尖底気味でわずかに長胴、13 はわずかに長胴、14･15 は球胴。いずれも口縁部は強く締まり内面には稜が形成される。口縁部は外湾しながら短く開く。13 の底部外面には「＋」印のヘラ記号が施される。16･17 は口縁部の締まりがほとんどない資料。いずれも小片である。18 ～ 22 は球胴の中・小型甕。いずれも頸部はやや強く締まるが内面に明瞭な稜を形成せず、口縁部は短く外湾する。22 は頸部の締まりが強く口縁部が直立気味で、壷と形容した方がいいかもしれない。23 ～ 25 は胴上位～口縁部が残る中・小型甕である。口縁部の締まりは悪く内面には稜を形成しない。口縁部は緩やかに外湾しながら直立気味に開く 23･25 と短い 24 があり、前者は壷と形容してもいいかもしれない。26･27 は壷または甕の底部片。ともに球胴丸底であろう。28 は甑の把手片。短くとがる。断面はほぼ正円形。29 は高坏である。坏部下半～脚端部が残る。脚部は緩やかに開き、端部付近で強く外湾するが明瞭な屈曲部は形成しない。30 は脚付椀。脚部径が小さく坏部の器高がある。31 ～ 37 は椀。いずれもやや扁平な半球形で、31・32 は口縁端部をわずかに外に引き出す特徴を持つ。

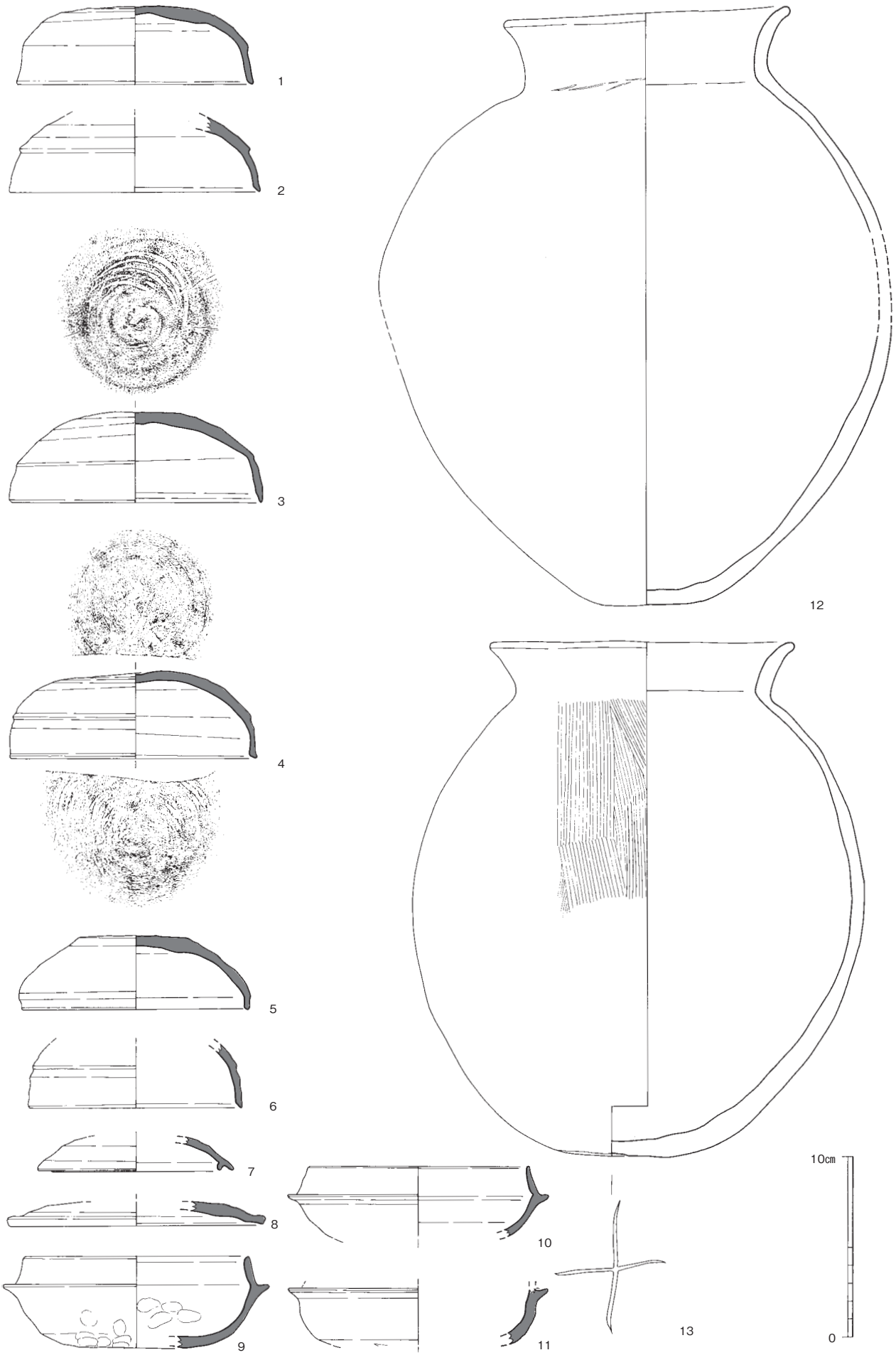
なお、他に埋土中から第 121 図 16 の姫島産黒曜石製スクレイパーが出土している。

16 号竪穴住居跡（第 23 図、図版 12）

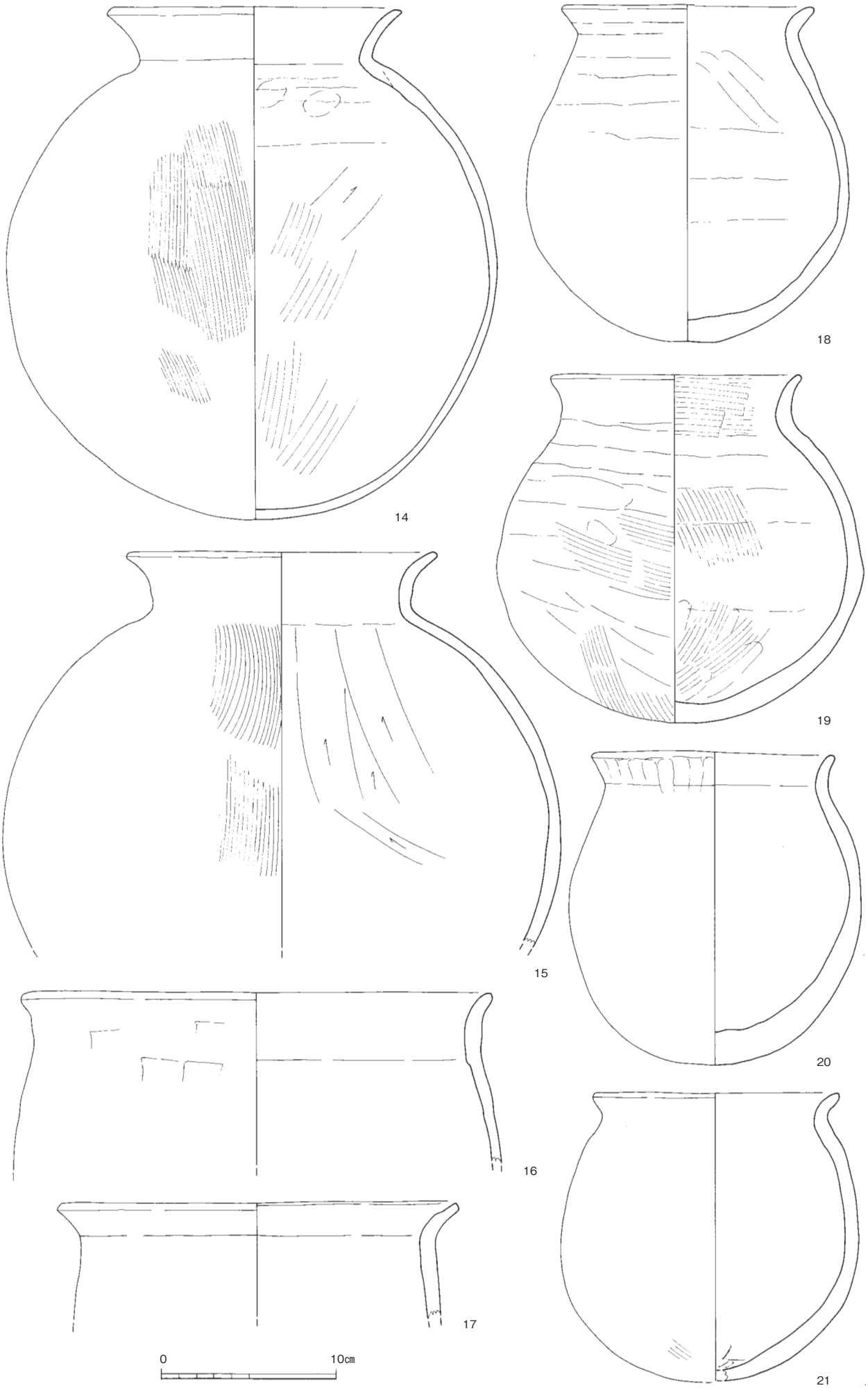
調査区の南東寄りで検出した。12 号住居跡に南東側を大きく破壊される。平面形態は略方形で主軸は北東－南西方向、規模は 3.76m × 3.74m をはかる。残存深さは 5㎝程度ときわめて浅い。北東壁の中央部付近に焼土と炭化物の小片がやや集中する場所があったが、著しく削平されていることもありカマドを検出するには至らなかった。床面からは数基のピットを検出したが、主柱穴と評価できるものはない。出土遺物はごく少ないが椀を 1 点図示する。根拠は弱いが 6 世紀後葉か。

出土土器（第 25 図、図版 40）

土師器（1）　1 は椀である。底部は平底で、体部は底部より緩やかに湾曲しながら立ち上がり、ごく浅い皿状を呈する。内・外面にミガキを施す。



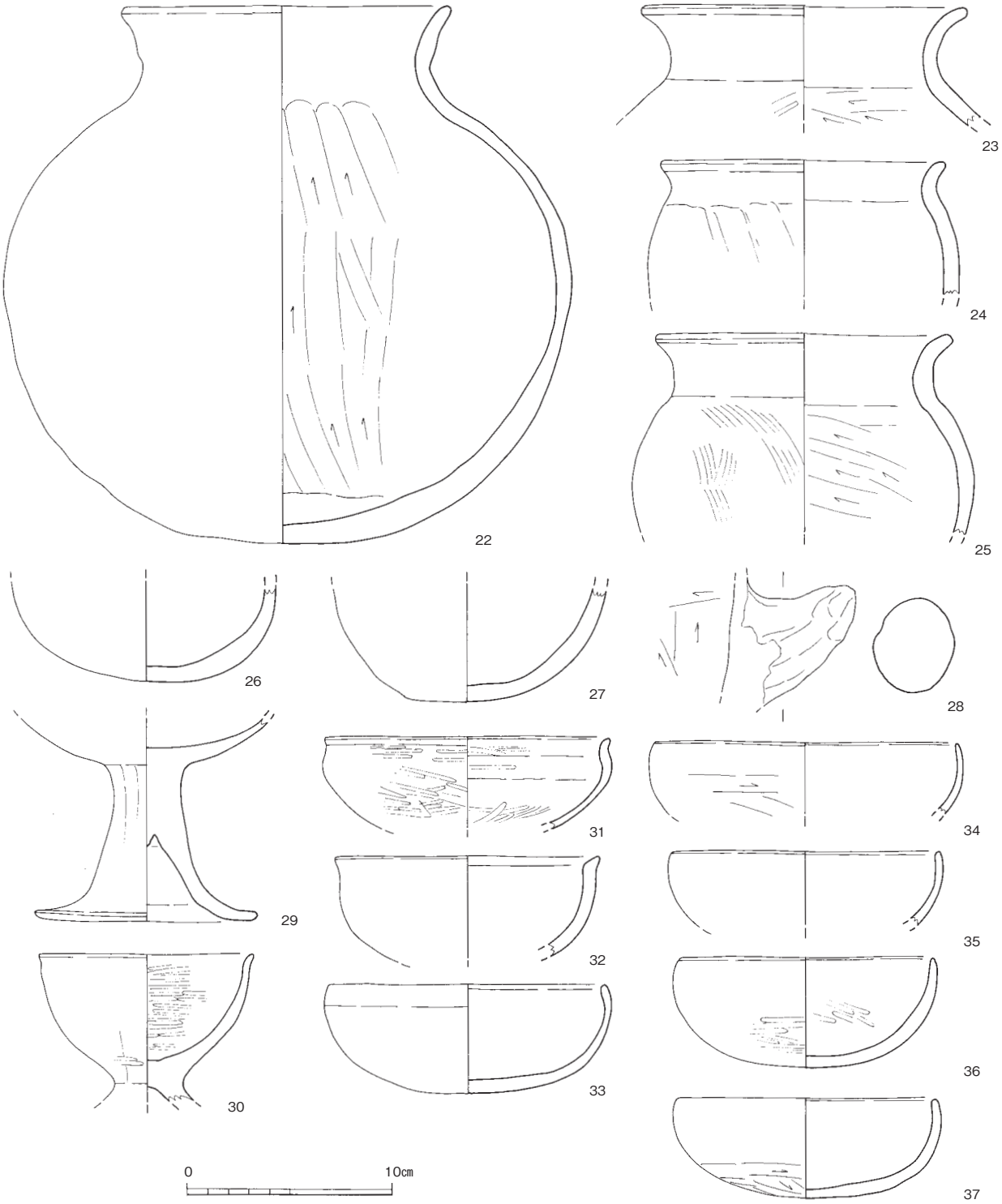
第 20 図　15 号竪穴住居跡出土土器実測図その①（1/3）



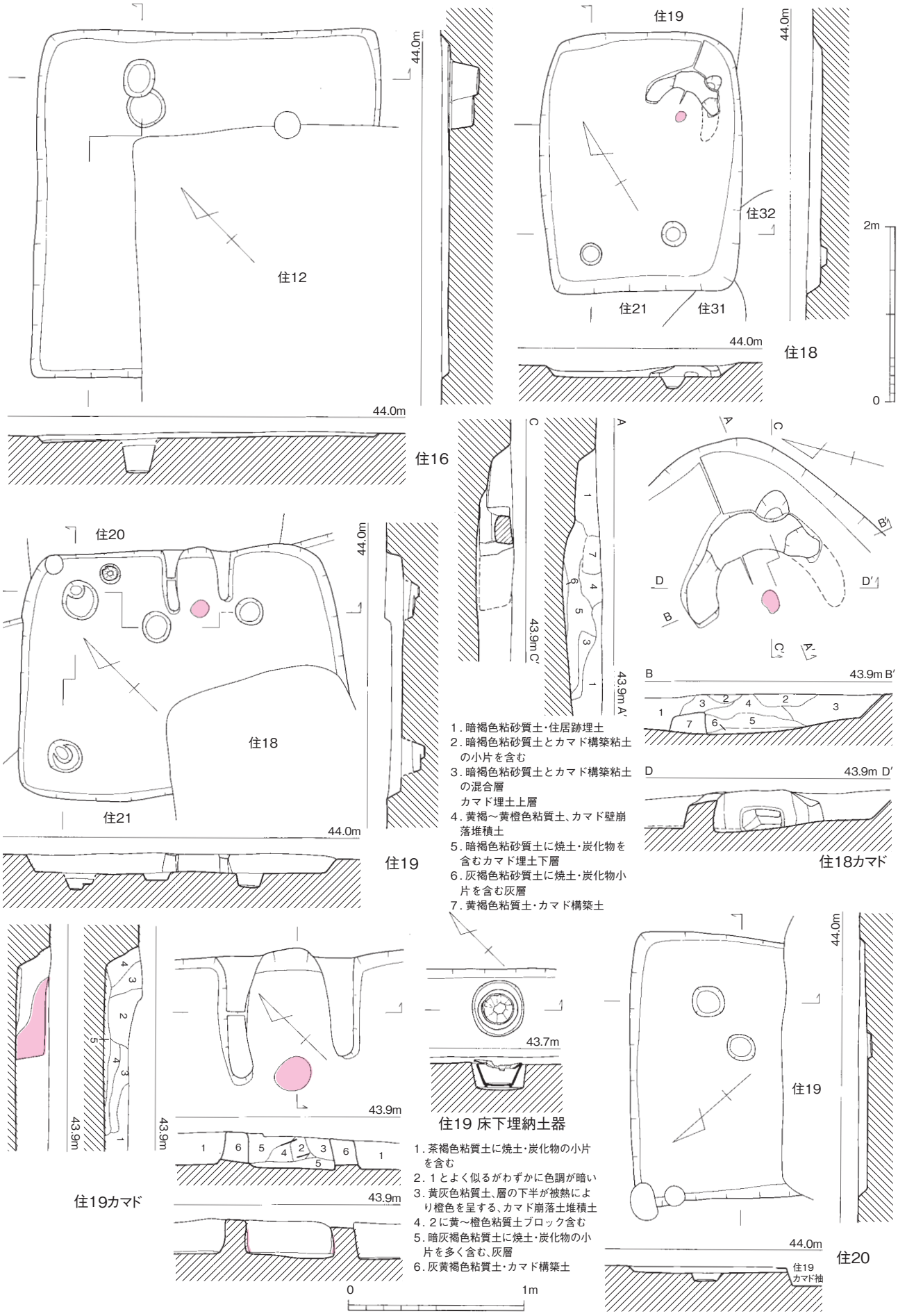
第 21 図　15 号竪穴住居跡出土土器実測図その②（1/3）

17 号竪穴住居跡（第 24 図、図版 12）

調査区の南東寄りで検出した。12 号住居跡に北西側を大きく破壊される。16 号住居跡とは近接していて部分的に重複する位置にあるが、間に 12 号住居跡を介していて直接的な切り合い関係にはない。平面形態は略方形で、主軸は北東－南西方向、規模は5.10m × 5.30m をはかる。北東辺に沿って幅 70cmほど床面が 10cmほど高い帯状部分があり、ベッド状遺構として調査したが、時期的にみてやや齟齬があり調査上の誤認と考えたい。主柱穴となりうる柱穴を床面より 4 つ検出した。深さが 20cm～ 50cmとやや浅いものも含まれ、やや自信がない。床面からはカマド、炉跡などは検出していない。カマドを持つ 12 号住居跡に切られており、これより古い。出土土器から 6 世紀中葉代



第 22 図　15 号竪穴住居跡出土土器実測図その③（1/3）



第 23 図　16･18 ～ 20 号竪穴住居跡・カマド他実測図（1/60･1/30）

に位置づけたく、本来はカマドがあったものが削平などにより失われたものとみたい。

出土土器（第 25 図、図版 41）

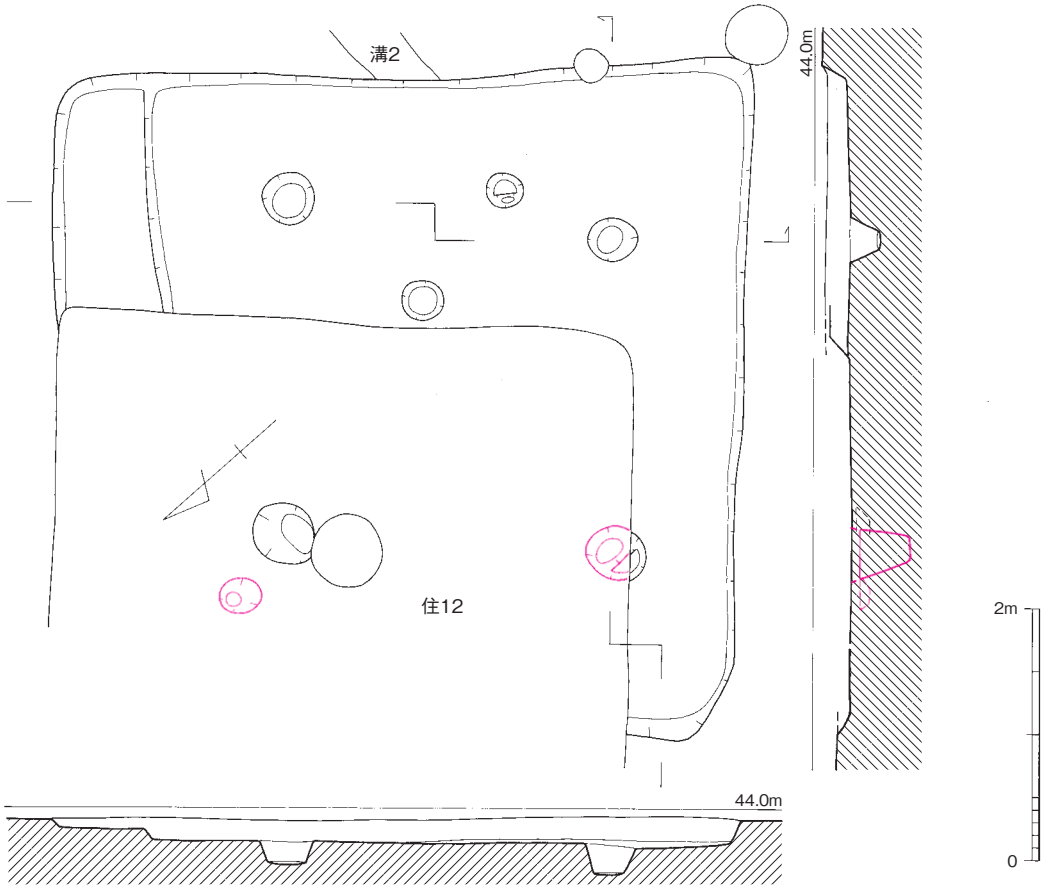
須恵器（2 ～ 4）　2 は高坏である。坏部は浅い半球形で脚は強く外湾しながら広がり、端部を下方に折る。3 は坏蓋である。天井部から口縁部にかけて緩やかに湾曲する。4 は高盤か。盤部は口径広く浅い。脚は短く、強く開く。2･4 は 7 世紀代の資料で、本来は上層 12 号住居跡に属するものか。

土師器（5 ～ 20）　5 ～ 11 は大・中型甕である。頸部が強く締まる 5･6･10･11 と、やや締まりが弱く長胴になると考えられる 7･8･9 がみられる。12 は小型の甕で、胴部が扁平につぶれる。14･15 は小型球胴の壷型土器。頸部は強く締まり口縁部は短く上方に開く。15･16 は鉢か。15 は口縁部が明瞭に屈曲して開く。16 は椀に近い。17･18 は椀。17 は口縁部が開き、18 は口縁部が内側に強く内湾する。19 は高坏の脚部片。接地部が強く屈曲して開く。20 は高坏の口縁部とした。器壁は薄く、緩やかに外反しながら開く。甕の口縁部片の可能性も残る。

なお、他に埋土中から第 117 図 6 の棒状土錘が出土している。

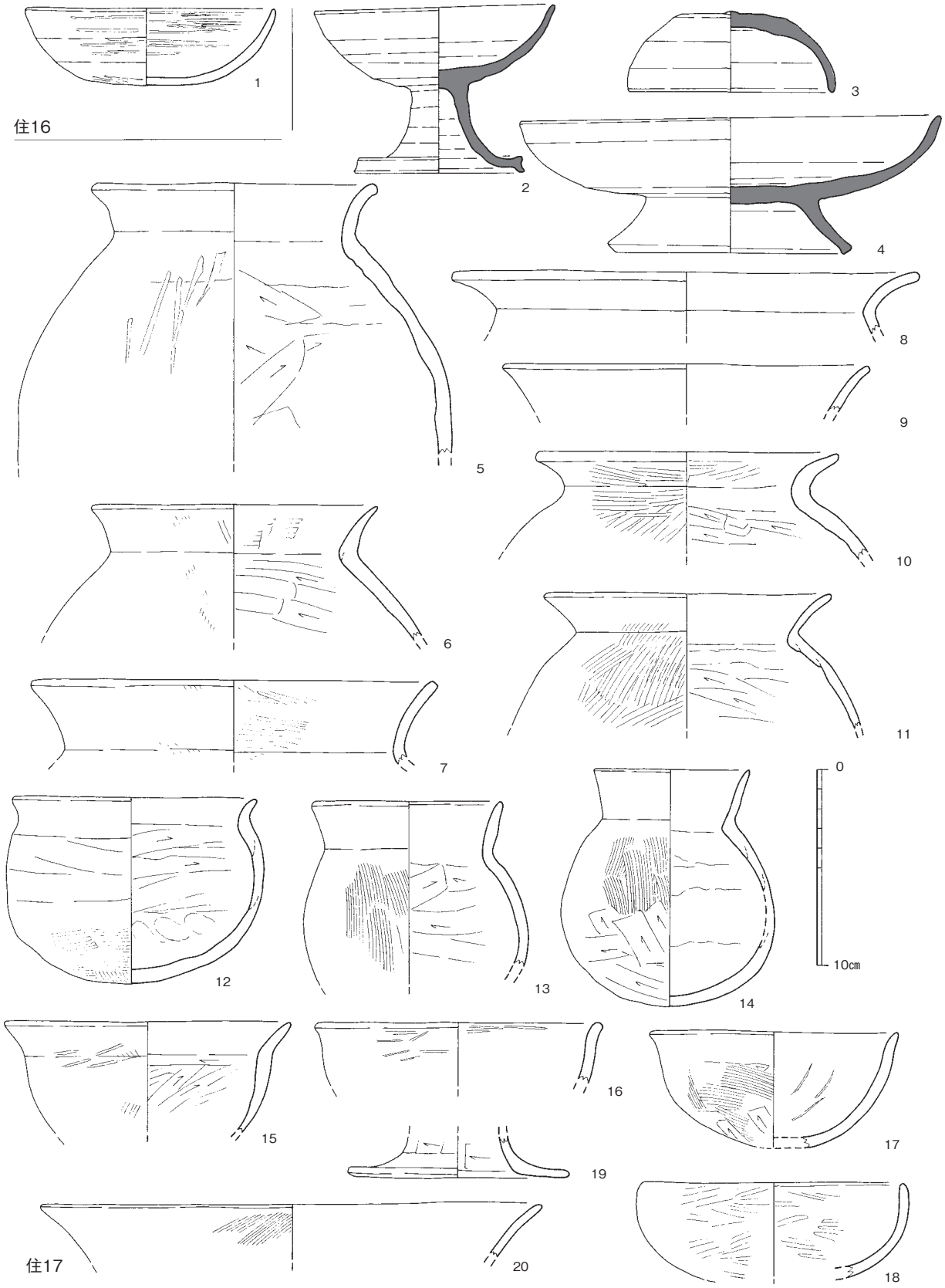
18 号竪穴住居跡（第 23 図、図版 12）

調査区東端の中央部で検出した。19･21･31･32 号住居跡と切り合い関係を持ち、これらのすべてに後出する。付近では数多くの住居跡が切り合っているが、その中で最も新しく位置づけられる住居跡である。平面形状は隅丸長方形で、主軸を北東－南西方向に持ち、北東コーナー部に内接型のカマドを作り付ける。規模は南北長が 2.70m、東西幅が 2.08m をはかる、小型の住居跡である。床面からは小ピットが検出されているが主柱穴とは評価しがたく、竪穴部外にも規則的に配列するよ



第 24 図　17 号竪穴住居跡実測図（1/60）

うな柱穴は認められない。残存深さはやや深く20cm弱が遺存していた。床面は中央部がややくぼみ、硬化面が形成されていて、その下に厚さ5cmほどの貼床が認められた。出土土器や切り合い関係から、9世紀代に位置づけられよう。



第25図　16･17号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

カマド（第 23 図、図版 12）

北東コーナー部からわずかに離れた位置に黄褐色粘質土を「へ」字状に盛ったカマドが検出された。右袖は調査時にやや破壊してしまい、本来よりもかなり短くなっているものと推測される。また住居跡の壁との間には本来煙道が存在したのであろうが、不注意により掘りすぎてしまい煙道部分の構造は未解明であるが、煙道の入り口部分は残っており、高さ 20cm、幅 40cmほどの暗渠状の空洞が粘土の下に作られている状況を確認した。支脚等は遺存していなかったが、燃焼部の中央に小さな被熱変色部を確認している。

出土土器（第 28 図）

土師器（1）　1 は皿である。底部は平たく、口縁部にかけて緩やかに内湾しながら広がる。口径 17.0cmをはかる。

19 号竪穴住居跡（第 23 図、図版 13）

調査区東端の中央部で検出した。18･20･21 号住居跡と切り合い、20･21 号住居跡を破壊して 18 号住居跡に破壊される。平面形態は横長の長方形で主軸を北東－南西にとり、北壁の中央やや東寄りに内接型のカマドを作り付ける。規模は南北長が 2.68m、東西幅が 3.48m をはかり、小型の住居跡である。残存深さは 20cmほどで、床面には広く硬化面が形成されており、その下の厚さ 5cmほどの貼床層を除去して 3 つのピットを検出した。配置は主柱穴にふさわしいが、深さが床面から 20cmほどしかなく、やや不安が残る。カマドの東側に須恵器の坏蓋と坏身を組み合わせた状態で床下に埋めた土器埋納ピットを検出している。出土土器や切り合い関係などから、8 世紀後葉に位置づけられよう。

カマド（第 23 図、図版 13）

北壁の中央やや東寄りに内接型のカマドを検出した。袖の長さは 65cmほどをはかり、わずかに開きながら伸びる。両袖の先端部に挟まれた燃焼部中位の床面に直径 20cmほどの不整円形状の被熱赤変面を検出した。従って支脚はこの北に位置していたことになるが、その痕跡等は全く確認できなかった。袖部は灰黄褐色粘質土で構築されており、埋土はこの粘質土と住居の埋土である茶褐色粘質土が混合したものであることから、カマドは住居の埋没と同じ過程の中で崩壊・埋没したことがわかる。最下層には比較的厚く灰層の堆積が確認された。

土器埋納ピット（第 23 図、図版 13）

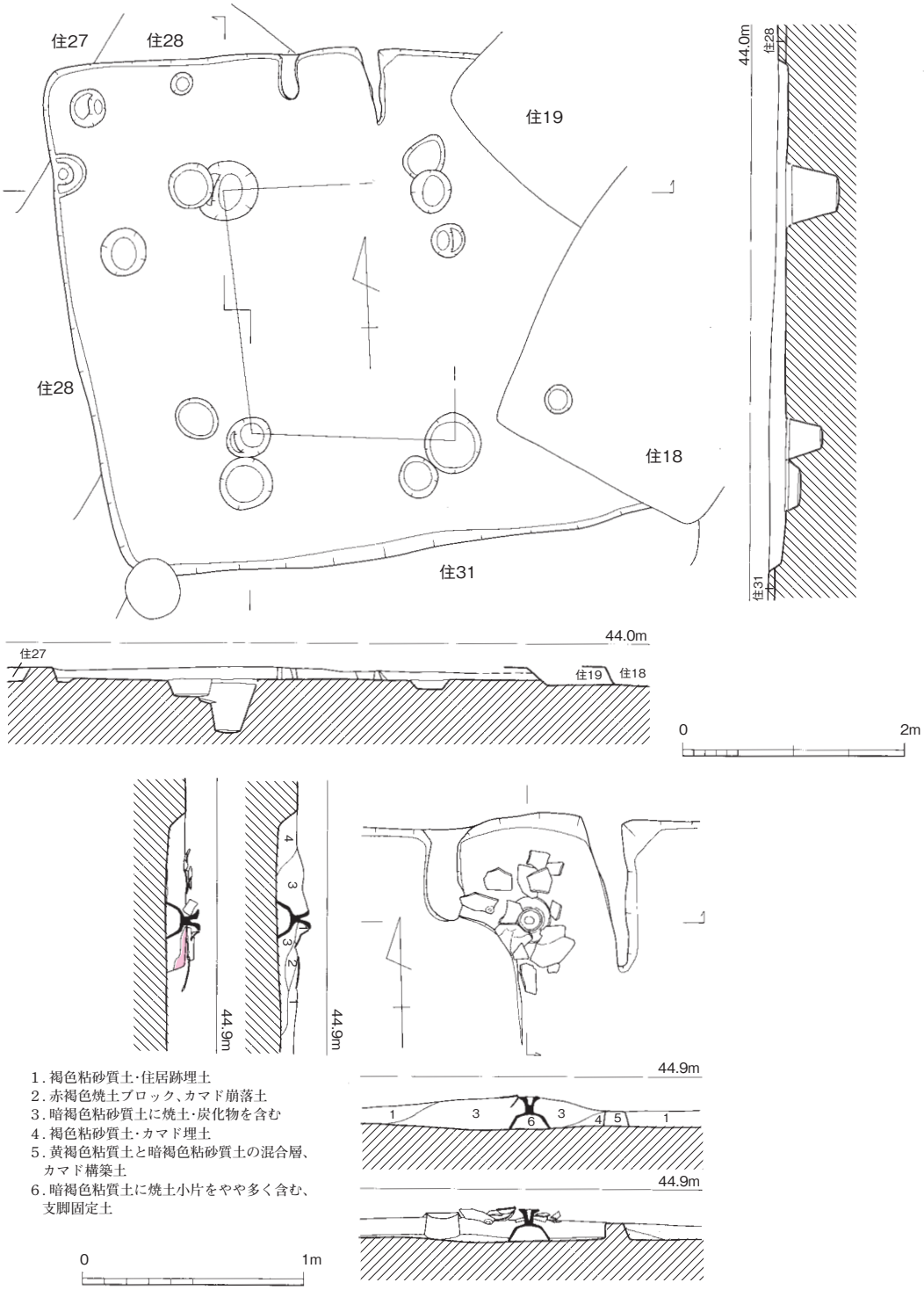
カマドの左袖から 50cm、北壁から 10cmの位置で検出した。検出層位は貼床除去時であるが、床面検出時にそれほど注意してピットを探していなかった場所でもあり、床面から掘削されたピットである可能性もある。ピットは検出面で直径 30cmほど、深さは検出状況で 14cmほどをはかる。埋納された土器は坏蓋と坏身の組み合わせで、検出時に蓋が落ち込んだ状態で露出したことから、検出面のレベルではわずかに土器がはみ出ていたことがわかる。このことから、本来のピットの深さは検出状況よりも深いものと推測される。貼床の厚さが 5cmほどあることから、貼床上層から掘削されたと考えれば辻褄が合う。土器（より大きな坏蓋）の直径が 17.4cmをはかることから、本ピットは埋納された土器のサイズよりやや大きな規模で掘られたものとみられる。検出時にすでに蓋は割れていて坏身の内部に土砂が多少流入していたが、流入した土器は坏身の容量の 1/3 ほどに過ぎず、固く締まらない状態で堆積しており、割れたのはおそらく調査時と見られる。流入土砂のほか

に内部には遺存物はなかった。出土土器から8世紀後葉の遺構であろう。

出土土器（第28図、図版41）

須恵器（2･3）　2は高台を持つ坏身である。底部は平坦で、高台上で強く屈曲し口縁部まで直線的に開く。高台の断面形は長方形で幅が狭い。3は端部嘴状の坏蓋である。天井部から緩やかに湾曲しながら口縁部に至る。これらは土器埋納ピットに埋納されていた土器で、坏身が下、坏蓋が上となっていずれも正位で組み合わされていた。

なお、他に埋土中から第121図29の砂岩製砥石、第128図18の鉄鏃が出土している。



第26図　21号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）

20 号竪穴住居跡（第 23 図、図版 13）

調査区東端の中央部で検出した。19 号住居跡に南側を大きく破壊される。主軸は北東－南西方向で、平面形状はおそらく東西に長い長方形とみられるが、南壁が失われていて確実ではない。規模は東西方向のみ判明し、2.90m をはかる。残存深さは 10cm程度と浅い。床面からはピットが 2 つ検出されたが、位置・深さ的に見て主柱穴たり得るものではない。出土土器は 6 世紀前葉に属するものがみられこの時期の住居跡であろう。

出土土器（第 28 図）

土師器（4･5） 4･5 は椀である。ともにやや扁平な半球状の底～胴部を持ち、口縁部はやや強く外湾する。

21 号竪穴住居跡（第 26 図、図版 14）

調査区東端の中央部で検出した。18･19 号住居跡に切られ、27･28･31 号住居跡を破壊する。東壁を 18･19 号により破壊されているため平面形は主柱配置からの推測であるが、略方形とみられ、主軸を略南北方向にとり、北壁のほぼ中央部に内接型のカマドを付設する。床面からはいくつかのピットを検出し、位置や深さなどからそのうちの 3 つを主柱穴候補として図示した。これらが主柱穴として正しければ、住居跡の規模は南北長が 4.52m、東西幅は推定で 4.40m ほどとなろう。なお、カマドの中位を基準として東西幅を復元すると 4.50m ほどとなるため、推定幅は中間を取って 4.45m としておく。出土土器や切り合い関係から、6 世紀中葉に位置づけられよう。

カマド（第 21 図、図版 14）

北壁のほぼ中央部に内接型のカマドを検出した。カマドは袖が奥壁と直交方向にまっすぐ伸び、左袖はやや残りが悪く、右袖の残存長は 60cmほどをはかる。奥壁から 40cm弱の燃焼部中央で高坏を逆位においた支脚を検出した。床面から支脚頂部（高坏底部）までの高さは 14cmをはかる。支脚の周囲には甑片が散乱しており、カマドに掛けられた状態でカマドが廃棄されたことを物語る。カマドの埋土は住居跡の埋土に袖の構築土（黄褐色粘質土）や焼土・炭化物が混入したもので、住居跡の埋没過程と同時にカマドが崩壊・埋没した状況を示す。ただし灰層は確認できなかった。

出土土器（第 28 図、図版 41）

須恵器（9 ～ 11） 9 は段を持つ坏蓋の口縁部片。直線的に下方にのび端部を斜めに仕上げる。10･11 はカエリを持つ坏身。カエリ部は外に突き出し、口縁部はやや内傾しながらわずかに外湾する。

土師器（6 ～ 8） 6 は高坏である。坏部は半球形で口縁部をやや外に湾曲させる。内・外面にミガキを施す。支脚転用品。7 は甕の口縁部片。やや長胴気味になるものか。頸部は強く締まり、口縁部は緩やかに外湾する。8 は甑。底部から緩やかに内湾しながら口縁部まで立ち上がる器形を持つ。把手の断面形は平坦でやや湾曲する。

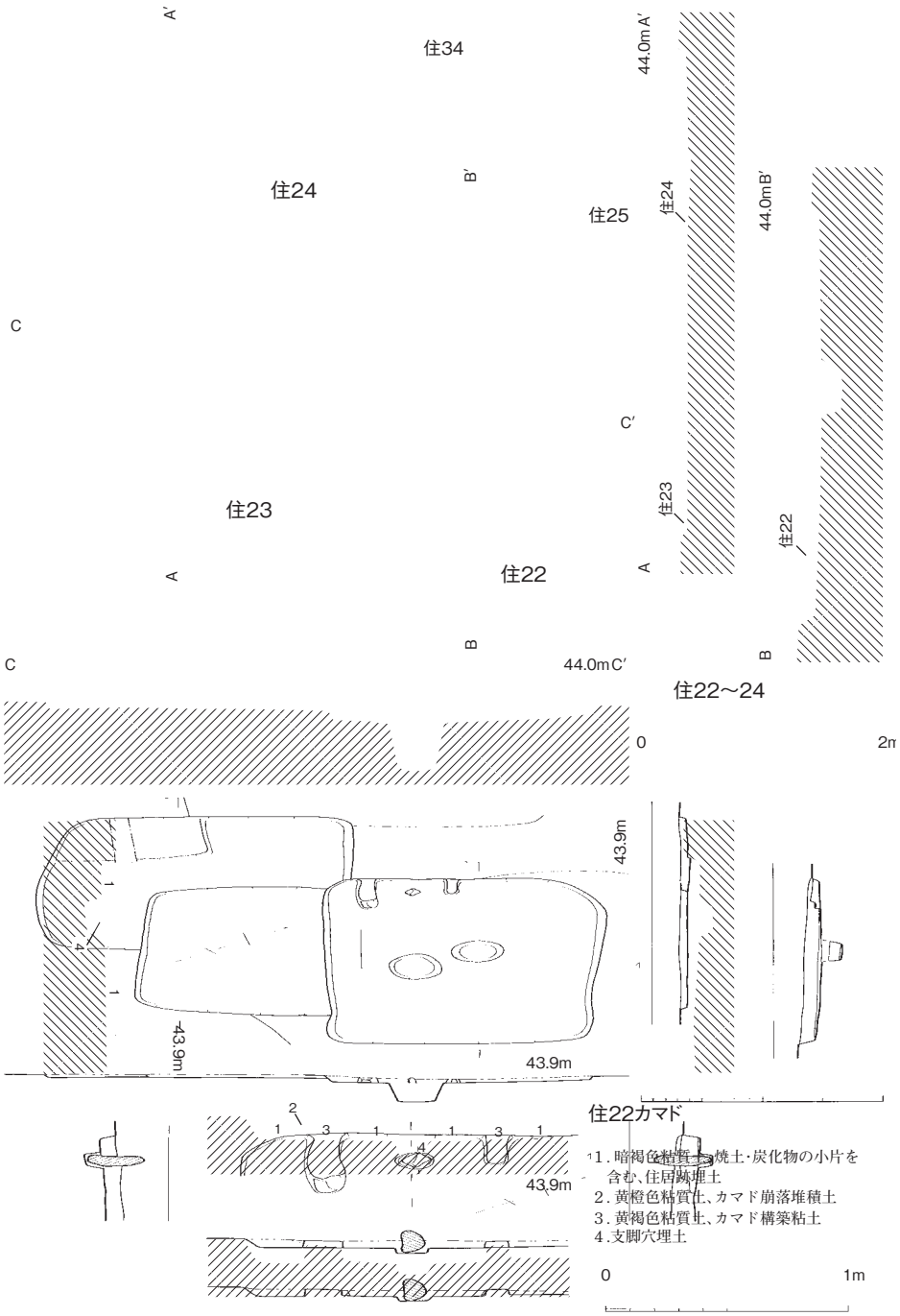
22 号竪穴住居跡（第 27 図、図版 15）

調査区東寄りの中央部やや南で検出した。南東に 12･16･17 号住居跡が、北に 36 号住居跡が隣接する。23 ～ 25 号住居跡と切り合い、これらよりも後出する住居跡で、付近で数多く切り合い関係を持つ住居跡群の中で最も新しいものの 1 つである。平面形状は北西－南東方向に長軸を持つ長方形で、西壁の南寄りに内接型のカマドを付設する。規模は東西長が 3.32m、南北幅が 2.14m で、小

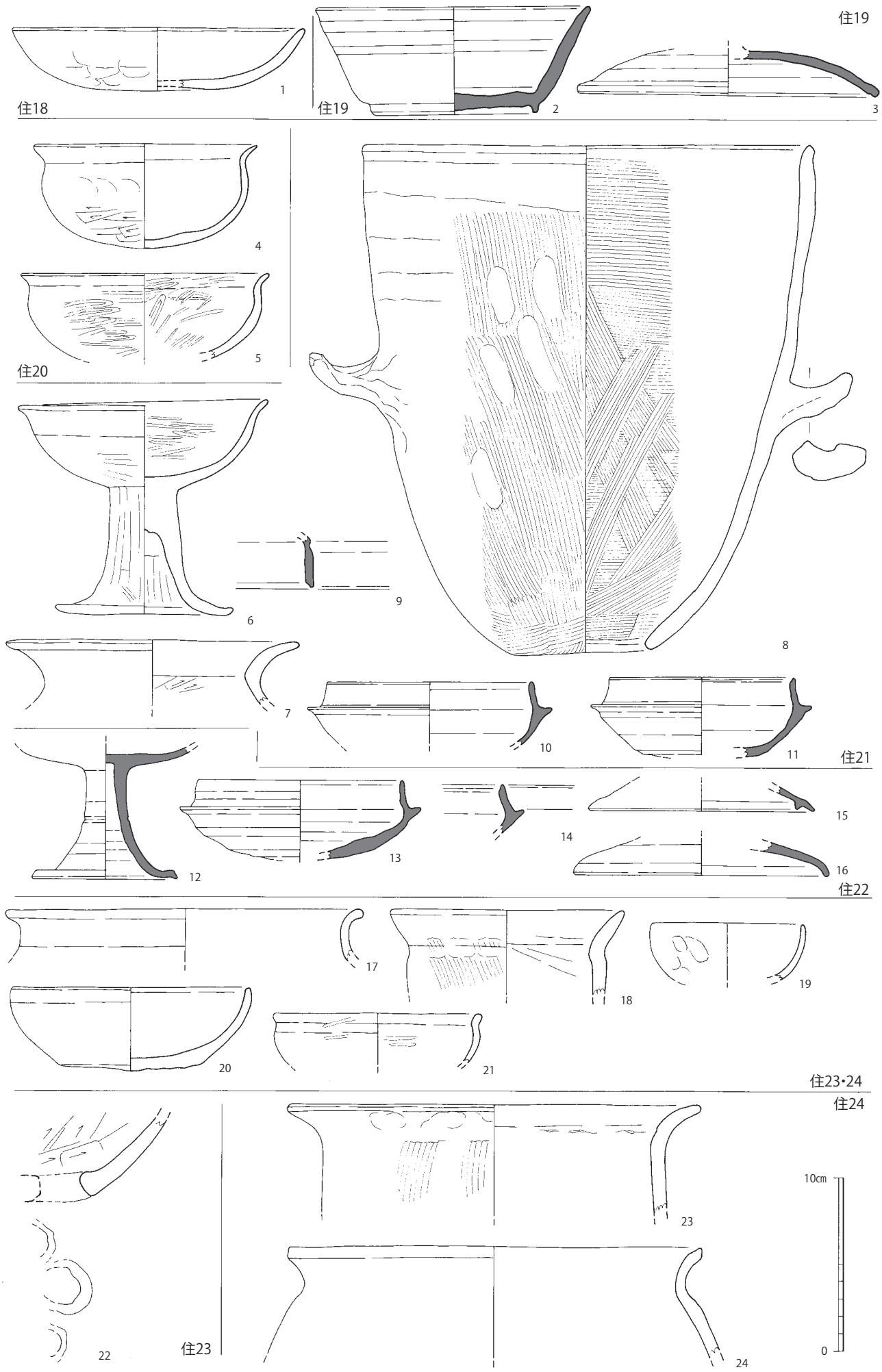
型の住居跡である。残存深さは10cm弱と浅く、床面は中央部がややくぼむ。床面からはいくつかのピットを検出したが、配置に規則性はなく主柱穴は不明である。出土土器から8世紀代の住居跡とみられ、切り合い関係・住居構造的にも齟齬はない。

カマド（第27図、図版15）

西壁の南コーナー付近に内接型のカマドを付設する。袖は西壁と直角について左袖が60cmほど直線的に伸びる。右袖は置存状況が悪く半分ほどしかない。焼却部中央に径20cmほどの小ピットを掘り立石を配して支脚とする。被熱赤変部は認められない。埋土は住居跡埋土とカマド構築粘土、焼土や炭化物の小片が混じり合う。灰層は認められなかった。



第27図　22～24号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）



第 28 図　18 ～ 24 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

出土土器（第 28 図）

須恵器（12 ～ 16）　12 は高坏である。坏底部はやや平たく、脚は高い。脚下方を強く外湾させて外に急激に開き、端部を下方に短く引き出す。13･14 はカエリを持つ坏身である。カエリは外に強く突出し、口縁部はやや短めにわずかに外湾しながら内傾気味に立ち上がる。15 はカエリを持つ坏蓋である。小片で口縁部のみ残る。16 も坏蓋である。やはり小片で口縁部のみの資料。

これらの出土土器には 6 世紀後半～ 8 世紀代まで幅がみられる。

23 号竪穴住居跡（第 27 図、図版 15）

調査区東寄りの中央部やや南で検出した。24･25 号住居跡を破壊し、22 号住居跡に北壁を破壊される。北壁が遺存しておらず形状や規模は推測に過ぎないが、おそらく小型の長方形住居跡になるのではないかと思われる。主軸方位は 22 号住居跡と同じく北西－南東方向で、やはり西壁の南側コーナー部寄りに内接型のカマドを付設していたものとみられるが、住居跡の残存深さが数cmときわめて浅いためにカマドもほとんど残されておらず、カマド構築粘土の残骸や焼土、炭化物などが散らばっているのが確認できたのみである。住居跡の規模は東西長のみ判明し 2.56m、南北幅は残存部分で最大 1.56m をはかる。出土土器はごくわずかで時期比定の手がかりとはならない。切り合い関係から、7 世紀後葉～ 8 世紀代の幅の中で考えたい。

出土土器（第 28 図）

土師器（22）　22 は甑の底部片である。直径 2cm強の不整形な円孔を複数開ける。混入品。

24 号竪穴住居跡（第 27 図、図版 15）

調査区東寄りの中央部やや南で検出した。34 号住居跡を破壊し､23 号住居跡により北東コーナー部付近を大きく破壊される。平面形状は小型の長方形で主軸方位を北西－南東にとり、規模は東西長が 2.68m、南北幅が 2.46m をはかる。西壁の南コーナー寄りに内接型のカマドを付設していたものとみられ、付近には焼土や炭化物の小片、カマド構築粘土の残骸が散らばっていたが、住居跡が著しい削平を受けていて遺残存状況が悪く、カマドそのものを検出することはできなかった。カマド付近を除いて床面を 5cmほど掘りすぎたものとみられ、下層の SX － 02 谷状落ち込みに属していたと思われる土器が出土土器中に散見される。これらを除いた出土土器から本住居跡は 7 世紀後葉に位置づけておく。

出土土器（第 28 図）

土師器（23･24）　23･24 は甕の口縁部片である。23 は頸部の締まりがないもので、バケツ状の胴部を持つものか。口縁部は緩やかに外湾しながら広がる。24 は頸部の締まりが緩いもの。口縁部は緩やかに外湾する。これらの資料は 7 世紀後葉に位置づけられよう。

23･24 号竪穴住居跡出土土器（第 28 図）

23･24 号住居跡の切り合い関係は遺構面では判然とせず、何回か検出レベルを下げながら検出を繰り返してようやく図示したように確定した。この検出レベルを下げる際に出土した土器をここで報告しておく。

土師器（17 ～ 21）　17 は甕の口縁部片である。強く湾曲しながら直立気味に立ち上がる。18 は小

型甕の口縁部片か。胴部はバケツ状になるか。口縁部は短く外反する。19 ～ 21 は椀である。19 は半球形、20 は平底、21 も半球形になるか。これらは 6 世紀代から 8 世紀代までやや幅があり、下層の SX － 02 谷状落ち込みからの混入品が含まれよう。

25 号竪穴住居跡（第 29 図、図版 15）

調査区東寄りの中央部やや南で検出した。28 号住居跡を破壊しており、22･23 号住居跡により中央部から西壁にかけてを大きく破壊されている。主軸方位は北北東－南南西にとり平面形状は大略方形、規模は南北長が 3.76m、東西幅が 3.64m をはかる。北壁の中央やや東寄りの壁際で焼土や炭化物がやや集中する箇所があり、カマドかと考えたが、住居跡自体の残存深さが数cmしかなく判然としなかった。中央部を大きく破壊されているために床面にはピットを検出することができず、主柱穴の配置については不明である。出土土器は少なく、古墳時代初頭のものがあるが、下層の SX － 02 谷状落ち込み遺構から混入した可能性もあり本住居跡の時期を示すものなのかどうか判断しがたい。切り合い関係から、7 世紀後葉以前であることだけはわかる。

出土土器（第 30 図）

土師器（1） 1 は大型の二重口縁壷の口縁部片である。頸部の締まりは弱く、口縁部は屈曲後ほぼ直立する。

26 号竪穴住居跡（第 29 図、図版 15）

調査区東寄りの中央部で検出した。東に 21 号住居跡が、北に 13 号住居跡が隣接する。27･30 号住居跡と直接的な切り合い関係を持っていてこれらを破壊するほか、28 号住居跡とも一部が重なり合う位置にあるが直接的な切り合い関係は不明である。主軸方位を北西－南東方向に有し、西壁の北側コーナー部寄りに内接型のカマドを付設する。住居跡の規模は南北長が 3.36m、東西幅が 3.2m をはかり、平面形状は大略方形である。残存状況は付近の住居跡と比べてかなり良好で、深さは 20cm以上が残っていた。住居跡の床面には広く硬化面が形成されており、これを追って床面を露出させたところ中央部がややくぼんでいた。硬化面の上からは柱穴は確認できず、貼床を 5cmほど下げて精査したところピットをいくつか検出したが、規則的に並ぶものはなく主柱穴の配置は不明である。出土土器は一部混入品とみられるものを除き 7 世紀中葉前後で、本住居跡もこの時期に比定できよう。

カマド（第 29 図、図版 16）

西壁の北側コーナー部付近に内接型のカマドを検出した。カマドの袖は西壁からこれに直交方向にまっすぐ伸びており、先端には石を配して袖を補強している。石を含んだ袖の長さは右袖で 70cm、左袖で 55cmほどをはかる。袖の先端の石の上にはカマド天井を補強する架石が乗せてあったものと思われるが出土時には 3 片に割れていた。これを復元して袖先端部の石に乗せると、三方を石に囲まれた焚口部の規模は幅 55cm、高さ 20cmほどの規模に復元される。奥壁から 20cmほどの燃焼部ほぼ中央に直径 20cm、深さ 6cmほどの小穴を検出した。支脚石を立てるためのピットである。支脚石はおそらく表土剥ぎ時に重機のバケットに引っかかって抜けたものと思われ、カマドの埋土に支脚石の痕跡が撹乱となって残されていた。カマドの埋土は住居跡の埋土に袖の構築土と同じ黄褐色粘質土のブロックや焼土・炭化物の小片などを含んでおり、住居跡の埋没と同じタイミングで埋没

したことがわかる。架石はこの埋没土の中にあって床面より浮いていることから、架石が割れたのも同じタイミングとみられる。最下層には灰層が掻き出されないまま残されていた。

出土土器（第30図、図版42）

弥生土器（2･3）　2は甕の底部である。わずかにレンズ状を呈し後期前半の資料か。3は壷の肩部である。頸部は強く締まり、口縁部外面に断面台形の突帯を一条めぐらせる。後期の資料か。

須恵器（4～8･10･11）　4～6はカエリを持つ坏蓋である。径は小さくカエリはやや退化しつつある。4はボタン状のつまみを持ち、5･6はつまみを持たない。7･8は坏身である。いずれも高台を持つものであろうが欠損して不明。胴部は緩やかに湾曲して口縁部はごくわずかに外反する。8は胴部中位に二条の沈線をめぐらせる。10･11は高坏の脚部片。これらは7世紀中葉の資料である。

土師器（9･12～22）　9は屈曲を有する高坏の坏部片。12～15は甕である。12･13は胴部が膨らみ長胴気味の資料であろう。12は頸部がよく締まり口縁部はまっすぐ開く。13は頸部の締まりが緩く口縁部は肥厚しつつ如意状に開く。14･15は頸部の締まりがごくわずかで、バケツ状に近い甕である。口縁部はともに短く、15はわずかに内湾しながら開く。16は二重口縁壷の口縁部小片でもとは大型品であろう。混入とみられる。17は高坏。坏部は半球形で器壁は薄く、脚部は上位のみ遺存するが中位に1条の沈線をめぐらせる。須恵器の形状を模倣したものか。18･19は坏である。底部は平底で、下半がやや強く湾曲して立ち上がる。高台は付さない。20は椀か。金属器模倣須恵器の碗に似るが土師質。21はミニチュア土器の椀、22はタコツボの底部片か。

なお、他に埋土中から第119図68の棒状土錘、第120図106の管状土錘が出土している。

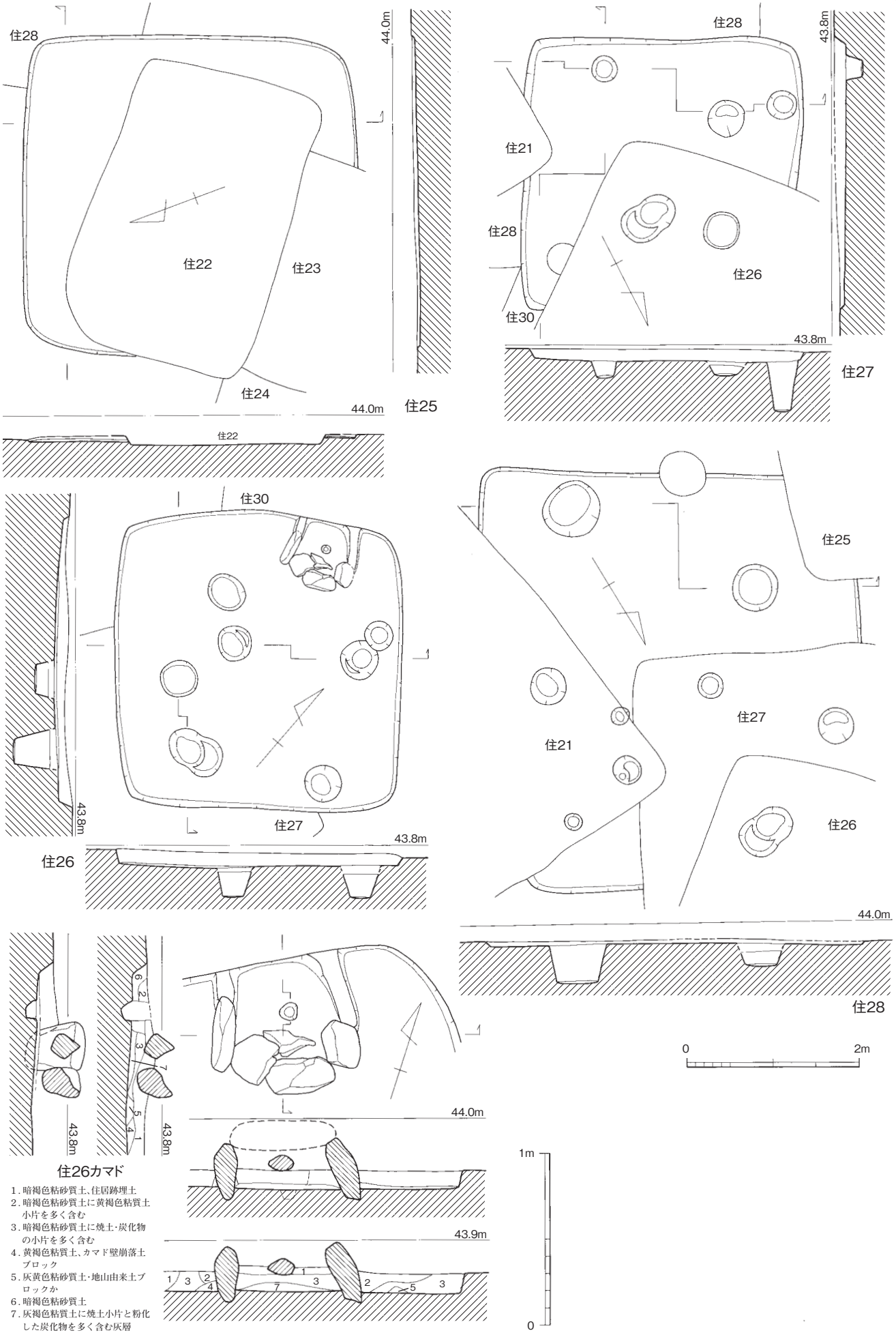
27号竪穴住居跡（第29図、図版15）

調査区東寄りの中央部で検出した。26号住居跡に北西コーナー部付近を大きく破壊され、28･30号住居跡を部分的に壊している。21号住居跡にも切られるものとして調査したが、切り合う部分はごくわずかであり、21号住居跡が6世紀代に位置づけられる一方、後述するように30号住居跡はカマドの位置から7世紀代以降に位置づけたく、切り合い関係を誤認した可能性が高い。主軸は大略北東－南西方向に持ち、平面形状は略方形で規模は南北が3.02m、東西が3.06mをはかる。残存深さは10㎝程度で、床面からはいくつかピットを検出したが主柱穴に相当するものは把握できなかった。また、カマドや炉跡も不明である。26号住居跡に破壊された北または西壁の中央部付近などにカマドが存在した可能性もあろう。出土土器には6世紀前半から8世紀代まで大きな幅があるが、切り合い関係より7世紀代、26号住居跡とほとんど同じ時期の所産としておきたい。

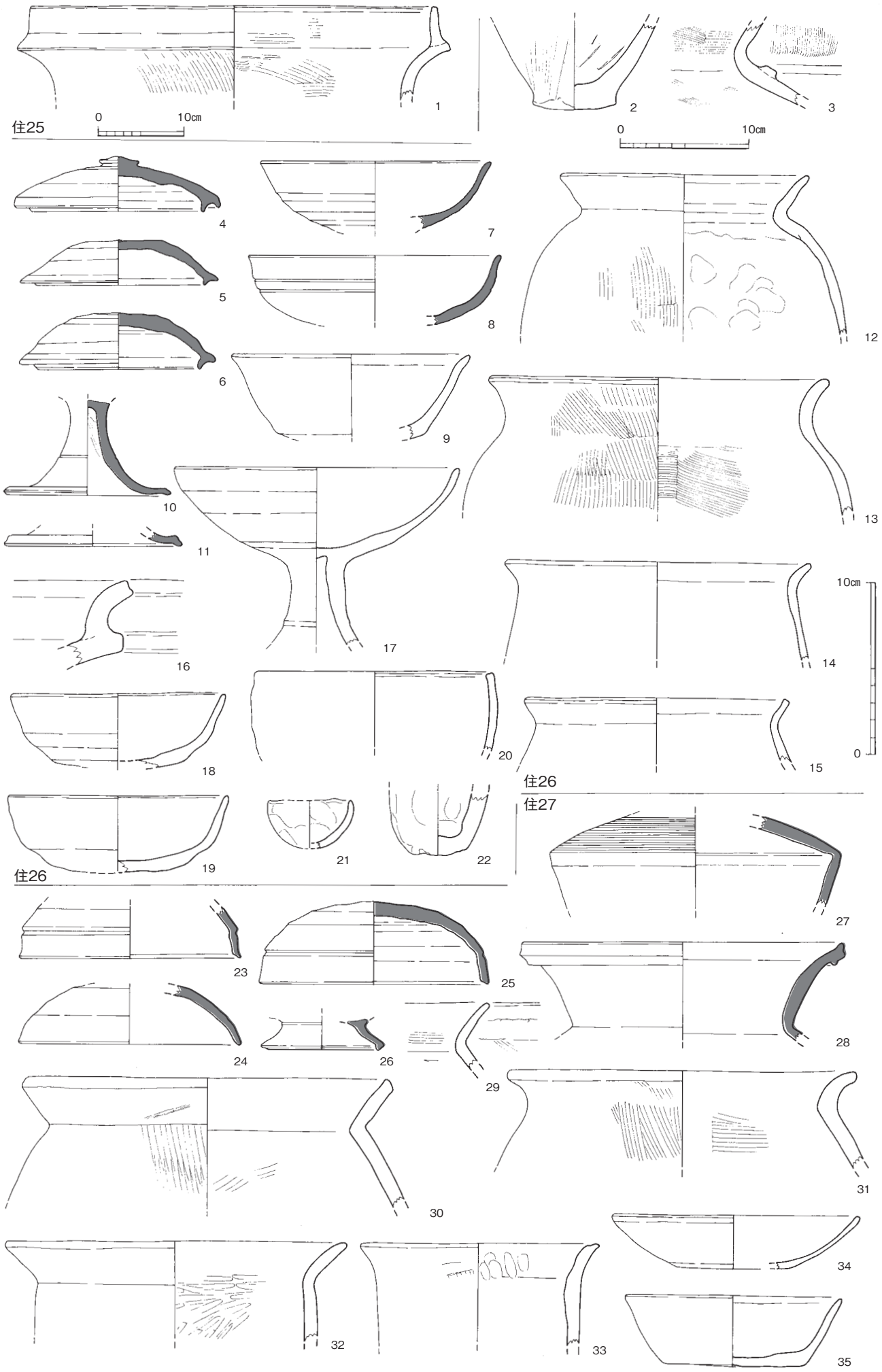
出土土器（第30図）

須恵器（23～28）　23･25は肩に段を持つ坏蓋の口縁部片である。ともに口縁は真下に伸び端部は斜めに仕上げる。25は天井部まで遺存し、丸い。24も坏蓋で、天井部から口縁部にかけて丸く伸びる。26は脚付器種（坏か）の高台部片である。高台は強く開きつつ細長く伸び、端部を内側に引き出す。27は長頸壷の肩部片。肩は強く張り明瞭に屈曲する。28は甕の口縁部片。頸部は強くすぼまり口縁部は外湾しながら大きく開く。

土師器（29～35）29･30は口縁部が「く」の字に屈曲する甕。胴部は長胴気味か。31は長胴で口縁部が肥厚しつつ如意状に開く甕。32はバケツ状の器形を持つ甕で口縁部は緩やかに開く。33は頸部の屈曲が不明瞭で緩やかに開く甕。34は皿か。底部はほぼ遺存しないが平坦か。口縁部にか



第 29 図　25 ～ 28 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）



第 30 図　25 ～ 27 号竪穴住居跡出土土器実測図（1 は 1/6、2･3 は 1/4、他は 1/3）

けて緩やかに湾曲しながら強く開く。35 は坏。平底で高台を付さない。

なお、他に埋土中から第 117 図 7 の棒状土錘が出土している。

28 号竪穴住居跡（第 29 図）

調査区東寄りの中央部で検出した。21･25･27 号住居跡に切られているほか 26 号住居跡とも重複する位置にあり、27 号住居跡を介していて直接的な切り合い関係はないがこれよりも古い。また 30 号住居跡とも切り合う可能性があるが、27 号住居跡により破壊されていて切り合い関係は不明である。主軸方位は大略北東－南西方向で、平面形状は略方形、規模は南北が 4.84m、東西はやや短く 4.28m をはかる。床面からはいくつかのピットを検出し、本住居跡を破壊する住居跡の床面から出土したピットも加えて主柱穴配置を検討したが、ふさわしい位置にあるピットは見当たらない。残存深さはきわめて浅く数cm程度、床面からはカマド・炉跡ともに見つからなかった。ほかの住居跡に破壊されて遺存しない北・西壁にカマドが付設された可能性もあろう。出土土器には 8 世紀代の遺物がみられるが上層からの混入と考え、切り合い関係から 6 世紀代中葉以前としたい。

出土土器（第 33 図）

須恵器（1･2） 1 は高坏の蓋である。天井部は水平に近く、低いつまみを付す。口縁部は天井より直角に折れて下に伸びる。2 は坏蓋の天井部片。低いつまみを付す。ともに 8 世紀の資料であろう。

土師器（3･4）3 は甕の胴上位片か。頸部の締まりは緩い。長胴か。4 は壷の肩部片か。頸部は強く締まる。内面に粘土帯接合痕跡を明瞭に残す。

29 号竪穴住居跡（第 8 図）

調査区の南東コーナー部付近で検出した。5 号住居跡に大半を破壊されるほか 6 号住居跡とも重複する位置にあって 5 号住居跡を介してこれより古いことが明らかであるが直接的な切り合い関係はない。主軸は北北東－南南西にとり、南側の大半が 5 号住居跡により失われているほか、東側も調査区外に伸びていて全容は不明で、北壁の 2.7m ほどの長さが残されるのみである。深さは 10cm 以下ときわめて浅く、床面からはピット等は検出されていない。出土土器は小片がわずかで図示できるものはない。切り合い関係より 6 世紀前半以前の所産。

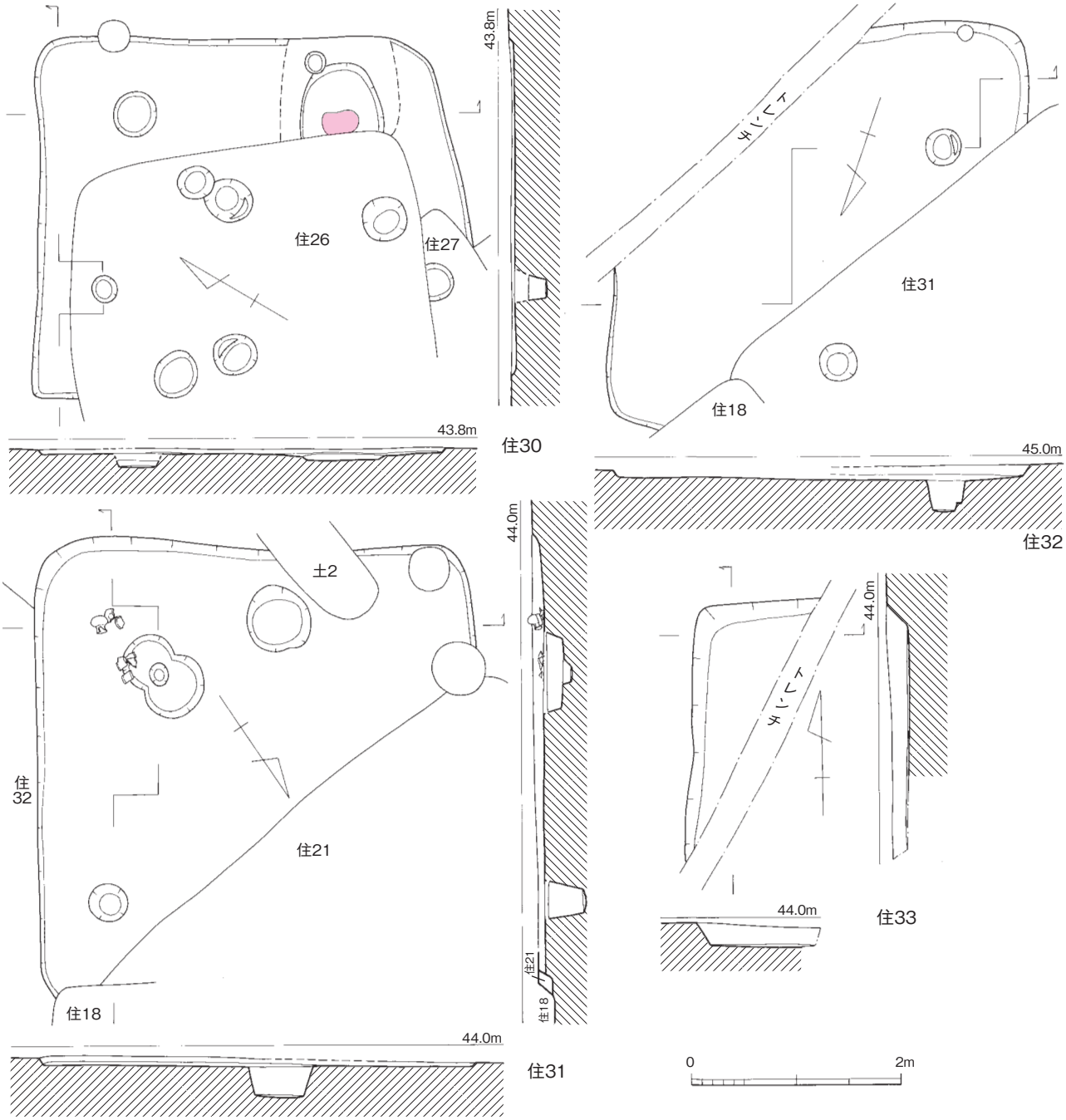
30 号竪穴住居跡（第 31 図、図版 15）

調査区東寄りの中央部で検出した。26･27 号住居跡に切られているほか、28 号住居跡とも部分的に重複する可能性があるが、重複部分が互いに 27 号住居跡に破壊されているために直接的な前後関係は不明である。平面プランはやや東西に細長い長方形で、北壁の東側コーナー部寄りにあたる壁際に焼土や炭化物などが集積する場所があり、精査した結果床面に被熱赤変部を検出できたため、袖などは全く残っていなかったがこの場所に内接型のカマドが作り付けられていたと認定することができた。このほか、床面からはいくつかのピットを検出し、本住居跡を大きく破壊している 26 号住居跡の床面で検出されたピットも含めて主柱穴の復元を試みたが、適当な位置にしっかりした深さを持つピットはなかった。出土土器は土師器・須恵器の小片のみで図示できるものはない。カマドの位置がコーナーに寄る点、主柱穴がはっきりしない点はこの地域では 7 世紀以降の竪穴住居跡の特徴であり、平面プランが方形であること、切り合い関係から 8 世紀代以降にはくだらないこ

とから、26 号住居跡より古い 7 世紀前葉に比定しておきたい。

31 号竪穴住居跡（第 31 図、図版 16）

調査区東端部のほぼ中央部に位置する。18･21 号住居跡に北西部を大きく破壊され、32 号住居跡の西半を大きく破壊する。また 2 号土坑に南壁の一部が破壊されている。平面形態は略方形で主軸方位は北北東－南南西をとり、規模は南北が推定で約 4.20m、東西は 4.06m をはかる。残存深さはきわめて浅く数cmほどである。床面の直上より数点の土器が出土したが、いずれも割れていて完形に復元できるものはなく、おそらく住居跡廃棄後の埋没初期に投棄されたものとみられる。床面からは数基のピットを検出し、うち 1 基を主柱穴の候補として図示したが深さがなく疑問も多い。出土土器から 5 世紀後葉に位置づけられ切り合い関係とも齟齬はない。



第 31 図　30 ～ 33 号竪穴住居跡実測図（1/60）

出土土器（第 33 図、図版 42）

土師器(5～8)　5は長頸壷でほぼ完形に復元できる。胴部はややつぶれた球状で頸部は強く締まり、口縁部は大きく開きながら直線的に伸びる。6 は高坏の坏部片。器高がやや高く大型。明瞭な屈曲部を有し、外面に段を形成する。7 は高坏の脚部片。接地部付近が強く外湾して水平に伸びるが屈曲部の稜はやや不明瞭。8 は椀である。半球形の器形で口縁端部を外側に短く引き出す。

なお、他に埋土中から第 129 図 26 の鉄鎌が出土している。

32 号竪穴住居跡（第 31 図、図版 16）

調査区東端部のほぼ中央部に位置する。18･31 号住居跡に西半分を大きく破壊され、また東側は一部が調査区外に伸びている。位置的に 21 号住居跡とも重複する部分がありそうだが 31 号住居跡により破壊されており遺構同士の直接的な切り合い関係はない。上記のように本住居跡は切り合いによる破壊や調査区外への広がり部分が多く全体形状をつかむのは難しいが、北東コーナー部と南西コーナー部という対角に位置する 2 つのコーナー部が把握できたためにおおよその形状を把握できる。平面形状は略方形で、規模は東西が 3.6m、南北が 3.8m ほどをはかろう。残存深さは 10cm 強で浅く、出土土器もわずかである。切り合い関係より 5 世紀後葉以前に位置づけられ、図示した坏蓋を 5 世紀後葉代とみればこの時期に比定されようが、出土土器が少なく自信はない。

出土土器（第 33 図）

須恵器（9･10）　9 は肩部外面に沈線を持つ坏蓋。口縁部はやや開きながら下に伸び端部はわずかに斜めに仕上げる。10 は高台を持つ坏身。底～体部は緩やかに湾曲し、高台は細くやや外に張る。

33 号竪穴住居跡（第 31 図）

調査区東端部の中央やや北寄りに位置する。西に 12･17 号住居跡が、北に 31･32 号住居跡がやや離れて位置する。大半が東側の調査区外に広がる遺構で、住居跡としてよいかどうか悩むところもあったが、遺物を包含する暗褐色の埋土を有し床面がある程度平坦であることから一応住居跡として報告しておく。規模は不明である。出土遺物より、5 世紀後葉代に位置づけられよう。

出土土器（第 33 図、図版 42）

須恵器（11）　11 は高坏の口縁部片。口縁端部はわずかに外湾しながら伸びる。中位に突帯を 2 条めぐらせ、下位の突帯下方に櫛描波状文を施す。

土師器（12 ～ 15）　12 ～ 14 は椀である。いずれも器形はややつぶれた半球形で器壁調整にミガキを用いる精製品である。12 のみ口縁端部を外に引き出す。15 は甑の把手。断面はややつぶれた形状。

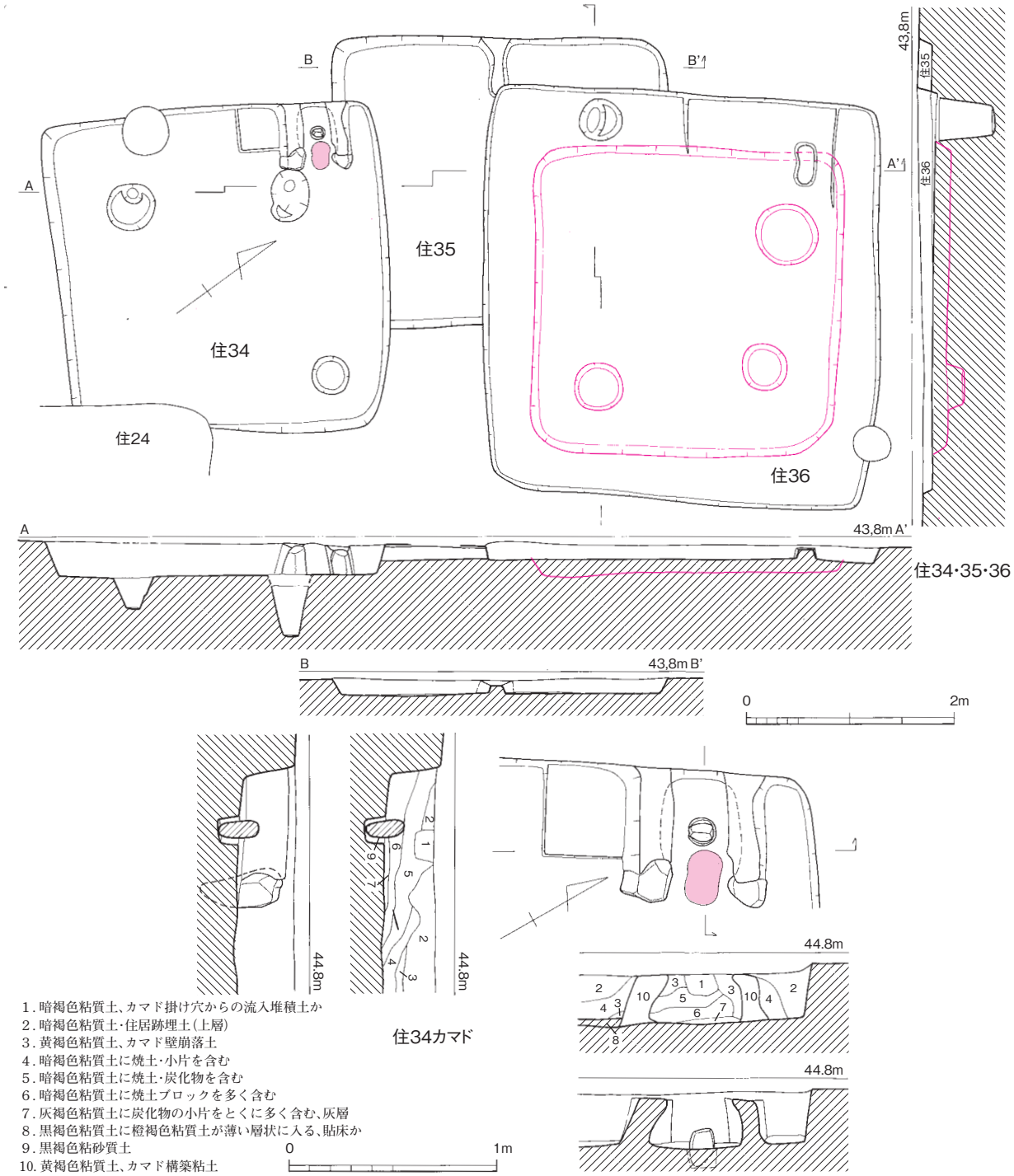
34 号竪穴住居跡（第 32 図、図版 16）

調査区中央部の南東寄りに位置する。南に 41 号住居跡が、北に 36 号住居跡が位置する。24 号住居跡に南東コーナー部付近を破壊され、35 号住居跡の南壁を大きく破壊する。主軸方位は大略北西－南東方向にとり、西壁の北側コーナー部付近に内接型のカマドを付設する。平面形状は大略方形で、規模は東西長が 3.02m、南北幅が 3.04m をはかる。残存深さは 40cm程度ありかなり良好な遺存状況であった。床面には広く硬化面が形成されていたがカマドの付近は不明瞭で、水平に床が伸びていると想定して掘削した結果カマドの左側で約 4cm掘りすぎてしまった。このことから、

床面は中央が深く周囲がやや浅くなっていたものと推測される。床面からは西壁側に２本のしっかりとしたピットを検出した。主柱穴と考えられる。ただしこれに対応する東側の柱列は出土しなかった。竪穴部外のおそらく竪穴部周堤上に掘り込まれ、削平により失われたものであろうか。出土土器から７世紀前葉に比定でき、切り合い関係とも矛盾しない。

カマド（第 32 図、図版 17）

西壁の北側コーナー部すぐ脇に内接型のカマドを検出した。カマドの残存状況は非常によく、袖の高さが最高で 45cmほど残されていた。袖は西壁に直交方向にまっすぐ伸びており、両袖ともに先端に立石を設置して袖を強化していて、石までを含めた袖の残存長さは 60cm以上をはかる。袖



第 32 図　34 ～ 36 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）

間の距離は内法で25cmほどと狭く、上に行くほどに内側に傾斜するように作られていた。奥壁から20cmのところで小穴を穿って石を立てて支脚としており、支脚の前面の床面には不整円形に被熱赤変面が形成されていた。また、袖の内壁にも主に支脚より前面側に被熱赤変部が広く形成されていた。カマドの埋土は主に住居跡の埋土である暗褐色粘質土に袖の構築土である黄褐色粘質土や焼土、炭化物などが混合しており、住居の埋没とともにカマドも埋没した様相を示すが、ちょうど掛け口の部分にあたる最上層には幅15cmほど、深さ10cmほどの暗褐色粘質土ブロックがあり、掛け口から埋土と同じ土が流入したものとみられる。この状況は、住居跡の埋没時に未だカマドがある程度その形状を保っていたことを示しており、最下層に灰層が形成されていたことと合わせ、カマドはほぼ使用時のまま埋没し、その途中で崩壊したものとみられる。

出土土器（第33図、図版42）

須恵器（17～24）　17･18は肩部外面に沈線をめぐらせる坏蓋である。ともに天井部から口縁部まで丸みを帯びた器形である。19･20はつまみを持つ坏蓋である。19は全形が判明し、口縁端部は嘴状に仕上げる。20は天井部付近のみの資料。21は端部嘴状の坏蓋でつまみの有無は不明。22･23は高坏の脚部片。ともに強く湾曲しつつ開き、端部を下方に屈曲させる。24は甕の胴部片か。肩はなだらかに下がり、胴部最大径がやや低い。胴部最大径やや上に二条の沈線で文様帯を区画し内部に年輪の浮き出た板状の施文具で連続短斜線をめぐらせる。

土師器（25～30）　25･26は甕の口縁部片。25は頸部が強く締まって明瞭に屈曲する。26は頸部の締まりが緩く口縁部は肥厚させつつ如意状に外反する。27･28は須恵器模倣坏身である。ともにカエリ部の突出は低く口縁部は内傾して短い。29･30は椀である。30は口縁端部を強く内湾させる。以上の資料は一部に7世紀後半～8世紀代のものを含むがおおよそ7世紀前葉前後に収まる。

なお、埋土中から他に第117図8の棒状土錘、第121図26の砂岩製砥石が出土している。

35号竪穴住居跡（第32図、図版17）

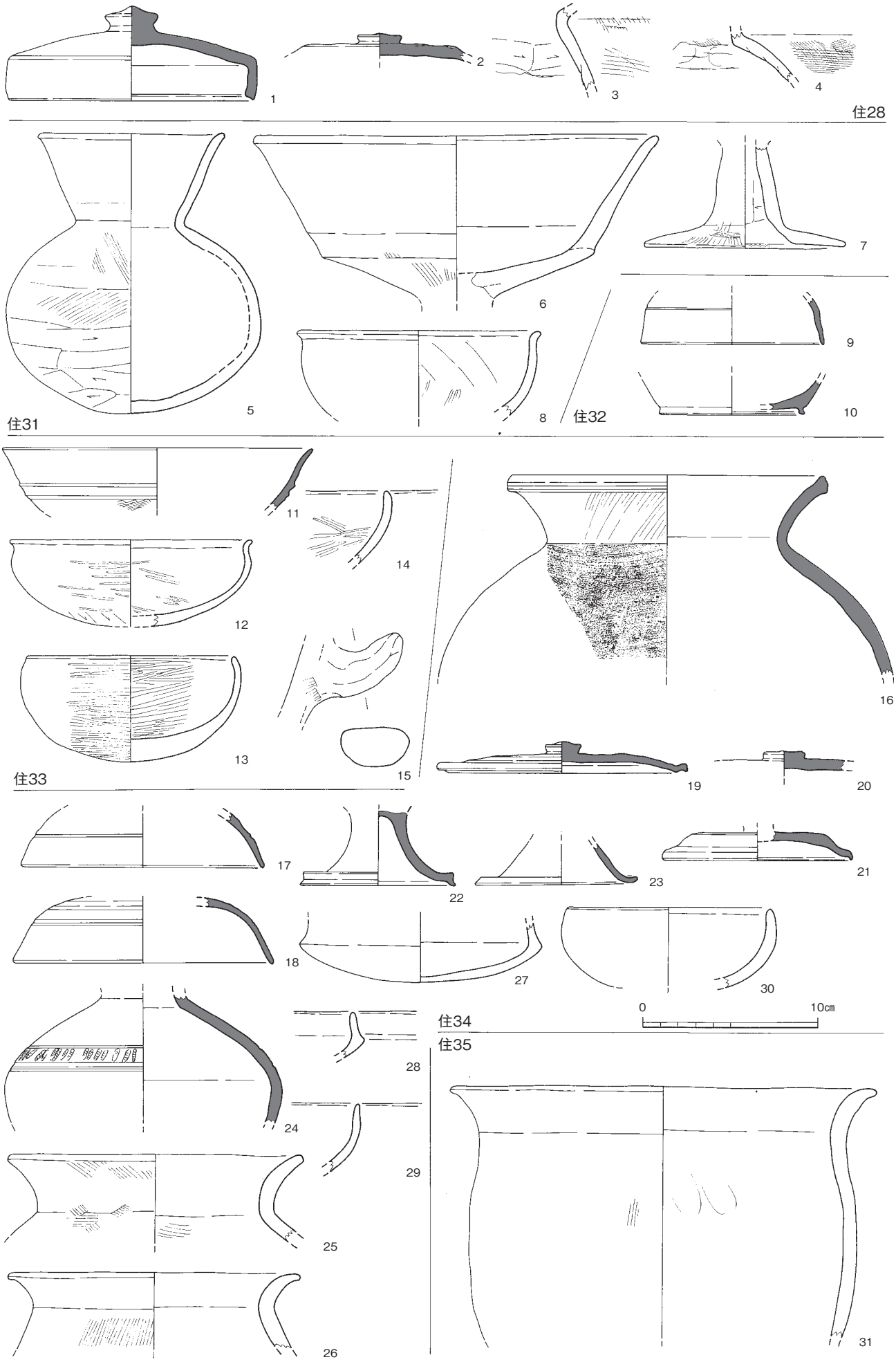
調査区中央部の南東寄りに位置する。34号住居跡に南側を、36号住居跡に北側を切られており残りは悪い。住居跡の平面形態や規模はかろうじて判明し、主軸を北西－南東に持つ幅広の小型住居跡で規模は東西長が2.58m、南北幅が3.02mをはかる。東壁の中央やや南寄りに焼土や炭化物が集中しており、注意しつつ掘ったところカマドを検出できたが、削平が著しく残存状況は悪く、右袖をかろうじて検出したにとどまる。袖は東壁に直交方向に約50cmほど伸びる。支脚や被熱赤変部は確認できなかった。出土遺物は少ないが、7世紀中葉前後に位置づけられる資料があり、切り合い関係とも矛盾しない。

出土土器（第33図）

土師器（31）　31は甕の胴中位～口縁部片である。長胴気味で頸部の締まりは緩く、口縁部は肥厚しつつ如意状に外反させる。

36号竪穴住居跡（第32図、図版17）

調査区中央部の南東寄りに位置する。北に1号掘立柱建物跡が隣接する。35号住居跡を破壊している。主軸方向は34･35号住居跡と同じく北西－南東方向で、西壁の中央北寄りに内接型のカマドを付設する。住居跡は深さ10cmほど掘っているが実際には6cm前後の深さだったようで、特にカ



第 33 図　28･31 ～ 35 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

マド付近は浅く、削平によりカマドの大半が失われたようで、右袖の一部を検出したに過ぎないが、付近には焼土や炭化物、黄褐色粘質土ブロックなどが散乱しており、ここにカマドがあったのは間違いない。住居跡の中央部を中心に20cmほど、下層遺構であるSX－02谷状落ち込みとは違う埋土が広がっており、住居跡の中央部が周囲よりもかなりくぼんでいた可能性があるが、貼床かもしれず明らかにすることができなかった。住居跡の平面形状は略方形で規模は東西長が3.40m、南北幅が3.42mをはかる。出土土器から8世紀前葉に位置づけられよう。

出土土器（第36図、図版42）

須恵器（1～5）　1～3は高台を持つ坏身である。1は平底から明瞭に屈曲して口縁部は直線的に伸びる。高台は細くやや丸みを帯びて伸びる。2は高台部付近のみの資料。高台断面は強く外に開く。3は底部付近の資料。平底で高台断面は幅広の四角形状を呈する。4は甕の胴上位～口縁部片。胴部はやや扁平な球状か。頸部は強く締まり口縁部はわずかに内湾させつつ短く開く。外面は縄目タタキ、内面は青海波紋が残る。胎土は一般の須恵器と比べやや軟質で色調が黄色味を帯び、器壁調整や器形からも半島産の陶質土器の可能性が示唆される。5は横瓶である。大型の破片を復元して図示したが自信はない。

37号竪穴住居跡（第34図、図版17）

調査区の北東隅部で検出した。38号住居跡の東側を大きく破壊する。調査区北端には水田造作に伴うと思われる段落ちが東西方向に伸びており、この段落ちによって北側半分弱が破壊されて失われている。主軸は西北西－東南東にとり、西壁にカマドを作り付ける。床面からは2基の主柱穴が検出されているほか、北側の段落ちで削平された部分からも主柱穴と考えられる柱穴が2基検出されている。規模は東西が6.44m、南北は上述の主柱穴の位置から推測すると6.0mほどとなる。遺存深さは15cm程度である。出土土器から5世紀後葉に位置づけられる。

カマド（第35図、図版18）

西壁に内接型のL字状カマドを作り付ける。カマドの位置は主柱穴との位置関係から見て中央よりもやや北側に寄っている。左袖の残りは比較的よく、西壁から約90cm、やや湾曲しながら伸びていて、先端には立石を配して補強とする。右袖は調査時にやや掘りすぎたこともあり残りは悪いが、やはり西壁から95cmの位置に立石を配していて袖を補強していたとみられる。燃焼部の幅は60cmほどをはかる。燃焼部床面の両袖石間に広く被熱赤変部が形成されており、その西側に高坏の坏部が床面からやや浮いた状態で横転していた。支脚に転用された可能性が高いが、脚部が遺存していないことから考えて逆位に置かれたものと推測される。燃焼部は住居跡床面より一段低くなっており、最下層に灰層が厚く堆積していた。その上層に住居跡の埋土とカマドの崩落土が同時に落ち込んだような形で堆積しており、カマドの埋没と住居跡の埋没はほぼ同時だったと考えられる。煙道は右袖の付け根から北に向かって伸びており、遺存状態は悪いが幅約10cmの粘土で作られた壁により形成される。

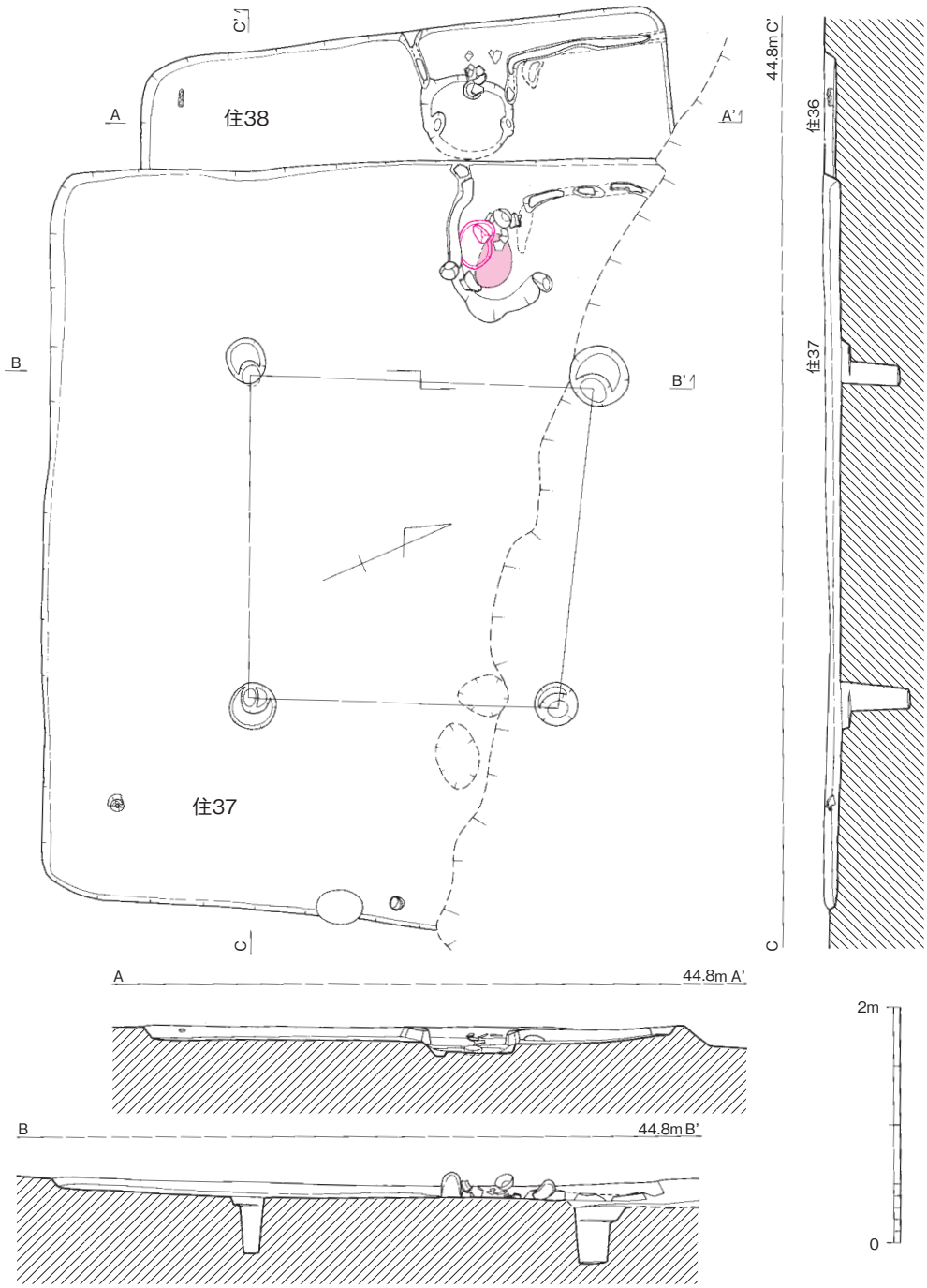
出土土器（第36図、図版43）

土師器（6～11）　6は小型の短頸壷。胴部は扁平で頸部の締まりは緩く、口縁部は短く外湾する。7は椀。やや深い胴部を持ち口縁部は直立する。8も椀。浅めの胴部を持ち、底部から口縁部にかけて緩やかに湾曲しながら伸びる。9～11は高坏の坏部片である。いずれも坏中位の外面に段を

形成するもので、9 は屈曲が不明瞭だが 10･11 は明瞭に屈曲する。9･11 はやや坏部が浅いもので、口縁端部はわずかに外湾する。10 は坏部の深いもので口縁部にかけて直線的に伸びる。10 はカマド内から出土しており、転用支脚か。以上の資料は 5 世紀後葉に位置づけられよう。

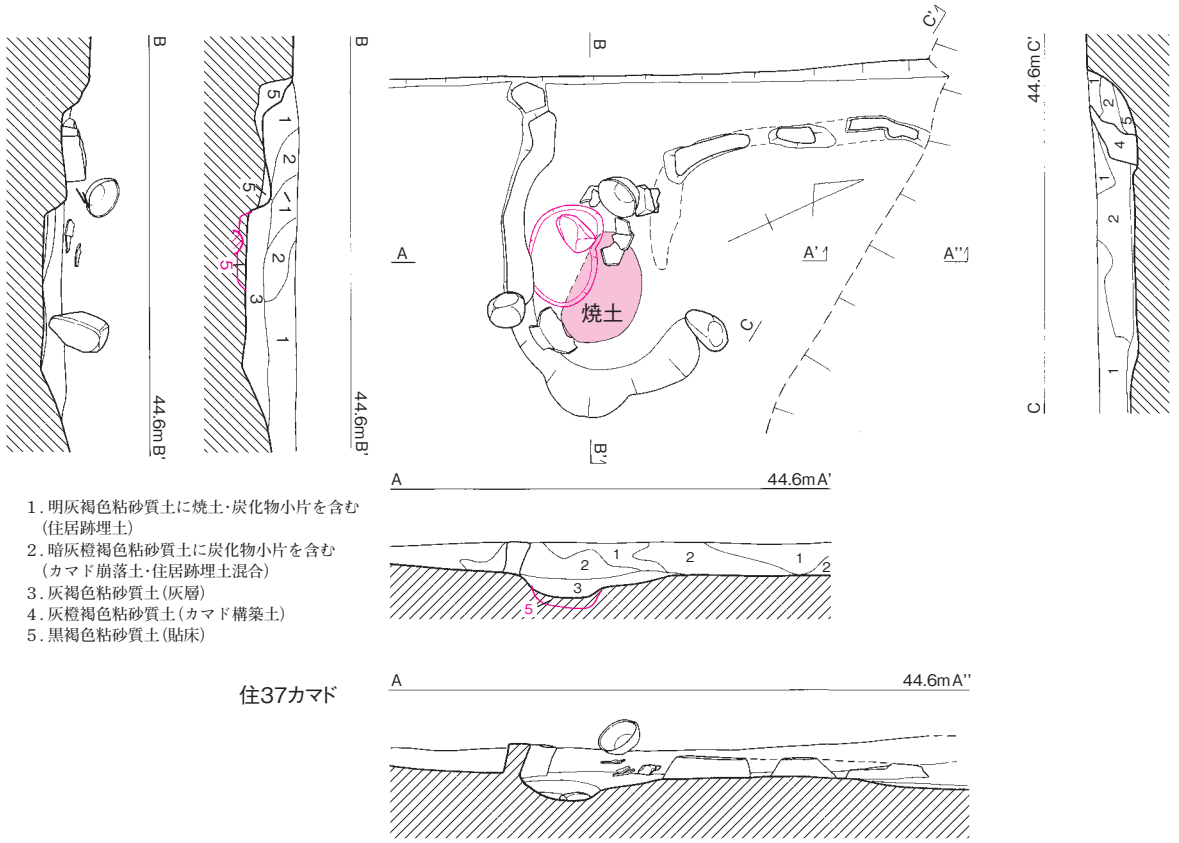
38 号竪穴住居跡（第 34 図、図版 17）

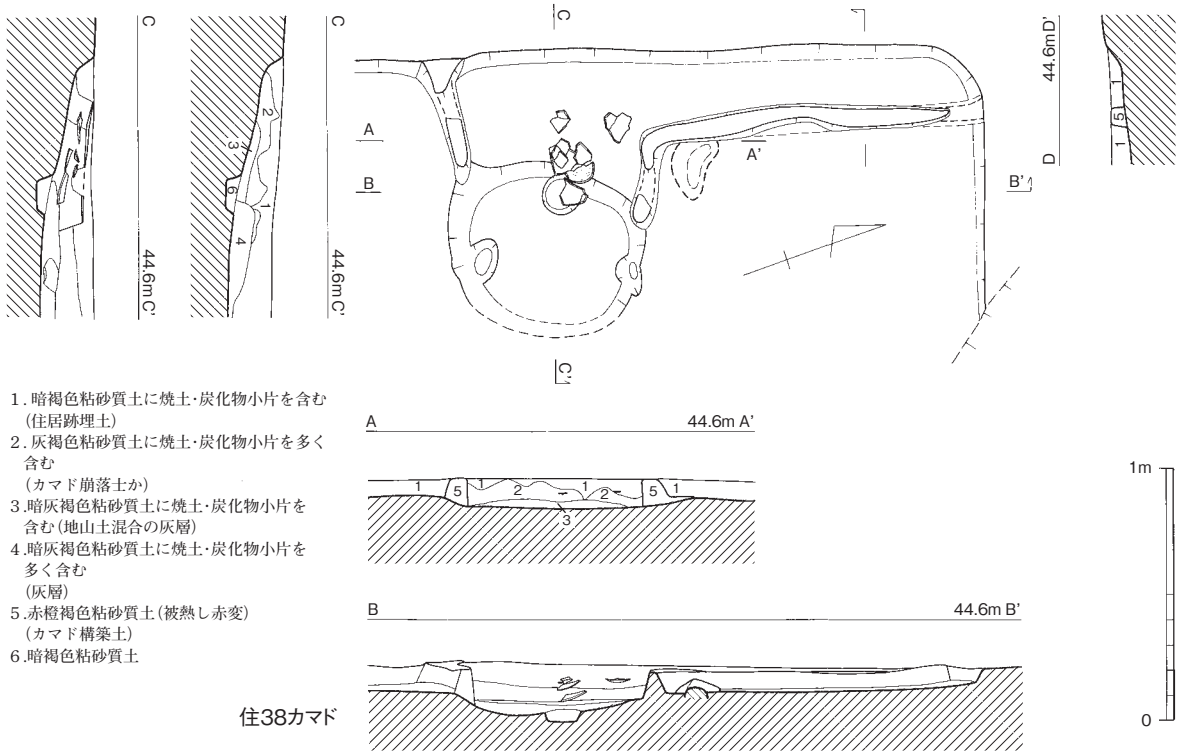
調査区の北東隅部で検出した。37 号住居跡によって東側を大きく破壊される。西壁の中央やや北寄りに L 字状カマドを作り付ける。主軸は 37 号住居跡とほぼ同じ西北西－東南東で、規模は南北幅のみ判明し 4.32m をはかる。主柱穴は、本住居跡を破壊する 37 号住居跡の下層も含め、精査



第 34 図　37･38 号竪穴住居跡実測図（1/60）

したものの検出することができなかった。遺存深さは37号住居跡よりやや浅く10cm前後を測り、東側に向かってやや床面が傾斜する。出土土器や切り合い関係、住居跡の構造などから、5世紀後葉に位置づけたい。





第35図　37･38号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

カマド（第35図、図版18･19）

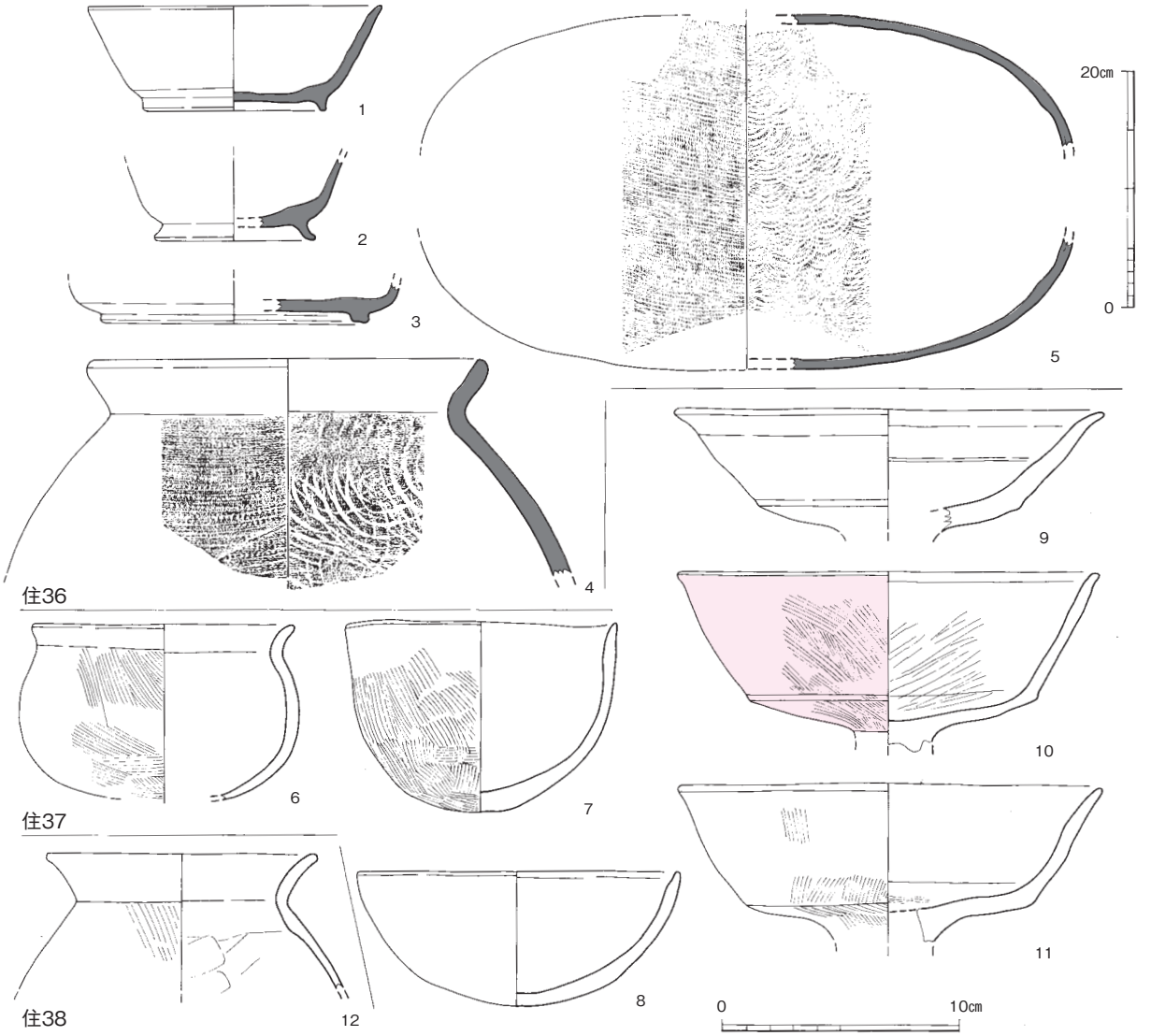
西壁の中央やや北寄りにＬ字状カマドを作り付ける。袖の遺存状況はあまりよくなく、左袖が西壁より長さ40cmほど、右袖が60cmほど伸びる。ただし両袖の延長線上、西壁より80cmの位置にそれぞれ小ピットがあり、これがおそらく袖補強石の抜け跡と考えられることから、本来のカマド燃焼部は西壁より80cmの位置まで伸びていたと考えられる。幅は70cm弱をはかりやや大型のカマド。燃焼部中央に小ピットがあり、支脚穴と考えられる。支脚はすでに抜き取られていた。カマド内から小型の甕型土器が出土しているが床面から浮いた状態であり廃棄時に投棄されたものか。カマド埋土は最下層に灰層が堆積し、その上にはカマド構築粘土と炭化物を含む層が堆積しており、早い段階でカマド天井部が崩落したとみられる。

出土土器（第36図）

土師器（12）　12は小型の甕の胴上位～口縁部片。頸部はやや強く締まり、口縁部は緩やかに湾曲しながら開き端部は四角く収める。胴部はやや長胴気味か。

39号竪穴住居跡（第37図、図版19）

調査区の北東寄りで検出した。東に37･38号住居跡が、西に103号住居跡が位置する。89号住



第36図　36～38号竪穴住居跡出土土器実測図（5は1/6、他は1/3）

居跡と切り合い関係を持ち、本住居跡が後出する。下層にSX－02谷状落ち込みが広がっていて、その埋土である黒色粘質土が本住居跡の埋土とよく似ていたために区別がつけがたく、床面をやや下げすぎてしまった。特にカマド前庭部では下層に包含されていたと考えられる土器が露出しており、最大で10cmほど掘り下げてしまったものとみられる。主軸を略東西方向にとり、西壁の南コーナー部側にカマドを作り付ける。竪穴部の規模は東西2.74m、南北2.92mを測り平面形状は大略方形である。出土土器は古いものが多いが、カマドの形状などから8世紀代に位置づけておきたい。

カマド（第37図、図版19）

西壁の南側、コーナーから北に20cmほどの所に、東に開口するカマドを作り付ける。袖が西壁にとりつくタイプのカマドで、両袖共に礫を3石ずつ埋め込んでそれを粘土で被覆しながら袖の基礎部を構築していたとみられるが、南袖に用いられた石は表土剥ぎの際に重機で引っかけてしまい失われており、抜け跡を図示している。カマドの規模は袖間が50cm、袖の長さは70cmほどを測る。床面には薄く変色した被熱部が形成されており、その直上に灰層が堆積していたが、その下層から土器が出土したために部分的に掘り下げてしまい、下層の土器が露出してしまった。本住居跡の下層にはSX－02谷状落ち込み遺構があり、これに包含される遺物であるが、写真や記録には出土状況を残している。

出土土器（第38図、図版43）

土師器（1～20）　1･2は大型の甕。1は球胴で頸部が強く締まり、内・外面に明瞭な稜を形成する。口縁部は直立する。2はやや長胴気味の球胴で口縁部は強く締まり頸部は湾曲するが内面に稜がない。口縁部は如意状に外湾する。3は甕あるいは壷の口縁部片。頸部は強く締まり明瞭に屈曲する。口縁部はわずかに内湾しながら上に立ち上がる。4は甕の口縁部片。頸部の締まりはやや緩く口縁部はわずかに外湾しながら上に伸びる。5は手づくねの甕か。底部は平底で胴部はほとんど膨らまず、頸部の締まりも緩い。口縁部はわずかに外湾しながら開く。6は小型甕の口縁部片。頸部は強く湾曲し口縁部も外湾しながら開く。8～10は椀。8は口縁部がわずかに外湾する。11･12は脚付椀の脚部か。11は内湾しながら下がり端部は反転して外湾する。12は「八」字状に開く。13･15～20はミニチュア土器。13･15･16は頸部の締まりが弱いが壷か。17～20は椀か。14はタコツボで体部中央に1孔を穿つ。

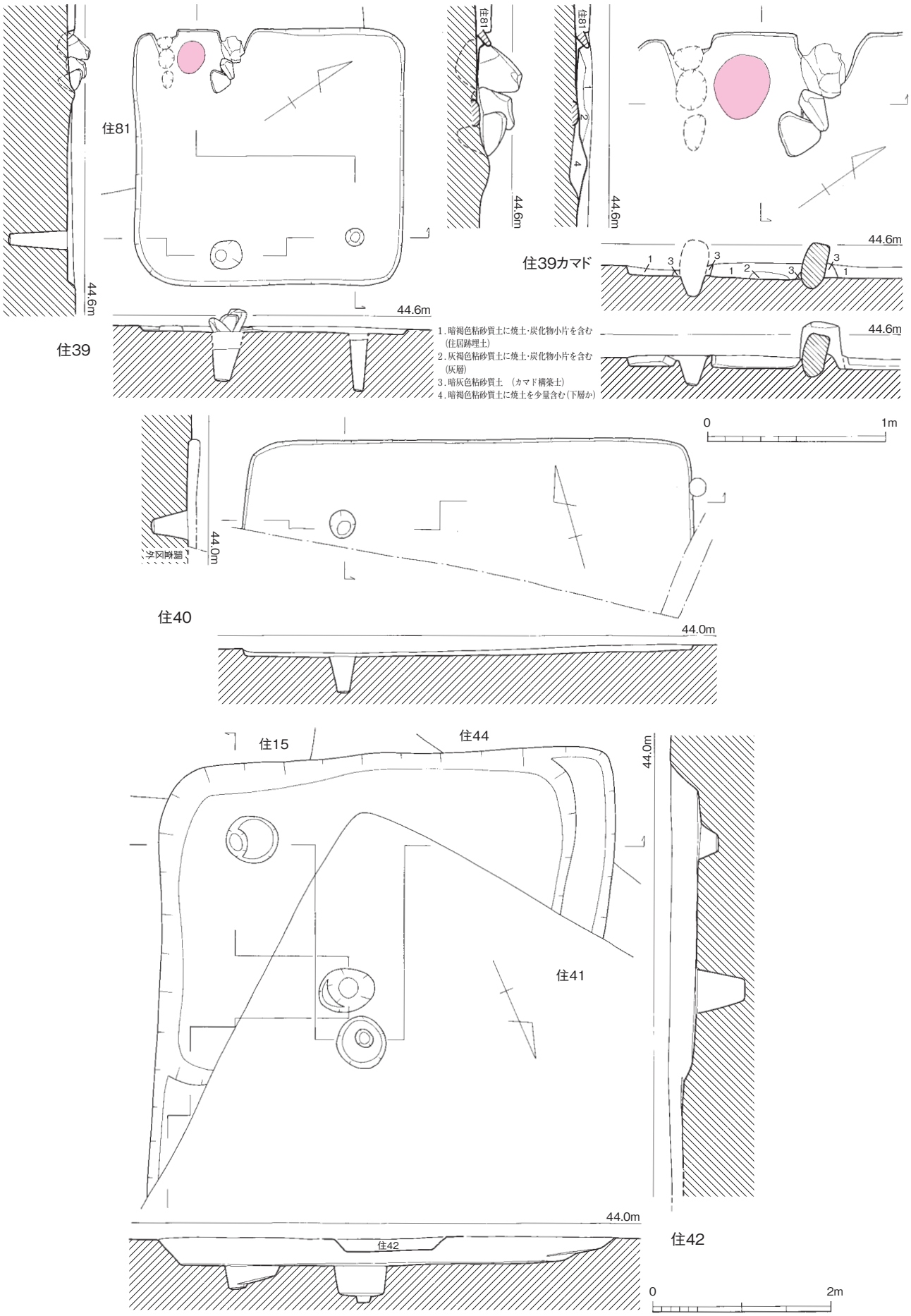
なお、他に埋土中から第121図4の姫島産黒曜石製の打製石鏃が出土している。

40号竪穴住居跡（第37図）

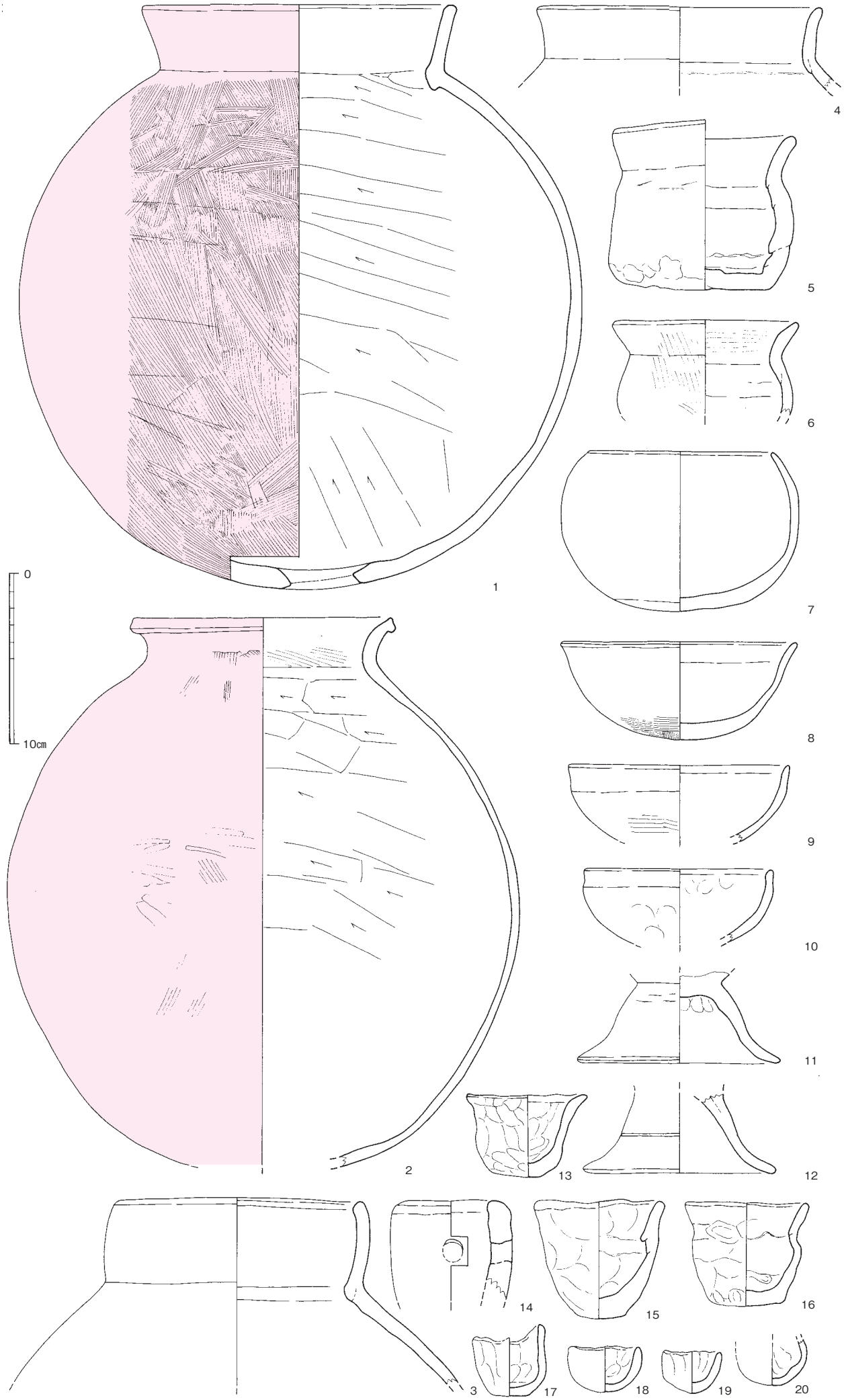
調査区南端部の中央東寄りに位置する。南側の調査区外に住居跡の大半が広がっていて、約1/3を調査できたに過ぎない。残存深さは10cm弱ときわめて浅く、出土土器も少ない。床面からはピットを1基検出し、主柱穴となる可能性があるが、それ以外のピット等は発見できなかった。出土土器は土師器ばかりでわずかであるが、図示した資料からは古墳時代前期に位置づけられようか。

出土土器（第41図、図版43）

土師器（1･2）　1は長頸壷である。胴部は扁平で丸底を持つ。頸部は強く締まり、明瞭に屈曲していて内・外面に明瞭な稜を持つ。口縁部は直線的に斜め上方に長く伸び、口縁部はごくわずかに外湾する。底部～胴部過半を板ナデ、胴部上半以上を丁寧なミガキにより仕上げる精製品。2は椀である。浅い半球形で口縁部はやや強く内湾する。



第 37 図　39･40･42 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）



第 38 図　39 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

なお、他に埋土中から第129図23の鉄鎌が出土している。

41号竪穴住居跡（第39図、図版20）

調査区のやや南東寄りに位置する。南に15号住居跡が、北東に34号住居跡が隣接する。42号住居跡を大きく破壊するほか、52･53号住居跡とも切り合い関係を持ちこれらを破壊する。主軸を北西－南東方向に持ち、北壁の中央部に内接型のＬ字状カマドを付す。煙道は東に伸びる。規模は南北長が5.54m、東西幅は6.00mをはかり、やや幅の広い長方形状を呈する竪穴住居跡である。残存深さは本来10cm程度であり、カマドの周囲のみは本来の床面をとどめて検出できたが、そのほかの範囲は明確な硬化面が形成されていなかったこともあって主柱穴を探しながら掘り下げすぎてしまった。厚さ10cm前後の貼床が竪穴部床面全域に施されていたのであろう。掘りすぎた床面からは4基のピットを検出した。うち3基は住居跡の平面形を一回り小さくした長方形に配され、掘方もしっかりしており、主柱穴と判断できる。出土土器に図示できるものはない。切り合い関係から、6世紀後葉以降に位置づけられ、カマドの構造からこれに大きく後出しないとみられる。

カマド（第39図、図版20）

竪穴部の北辺中央部に内接型のカマドを付設する。煙道が北壁沿いに東へと伸び、北東コーナー部より外に配される、いわゆるＬ字状カマドである。両袖は北壁と直交方向に並行してまっすぐ約65cm伸びる。両袖の中間、奥壁より40cmの床面に小穴を掘って縦長の石材を立て、これが支脚となる。支脚の位置から、袖の長さは本来もう20cmほど長かったものとみられる。支脚からやや離れた前庭部に不整形の被熱赤変面が形成されていた。ただしその右半分ほどは掘り飛ばしてしまった。埋土はカマド袖構築粘土と住居跡の埋土の混合層からなり、焼土や炭化物の小片を含む。住居跡の埋没と同じ過程の中で崩壊・埋没したものとみられる。最下層には灰層が残存していた。煙道は右袖の付け根部分より右に伸び、幅約15cm、長さ2.7mほどの規模を持ち、カマド袖と同じ黄灰色粘質土を積み上げて作られているが、東壁と接する部分で不明瞭となっていた。付近は貼床が見られなかったことから、もとより浅くなっていた可能性があろう。

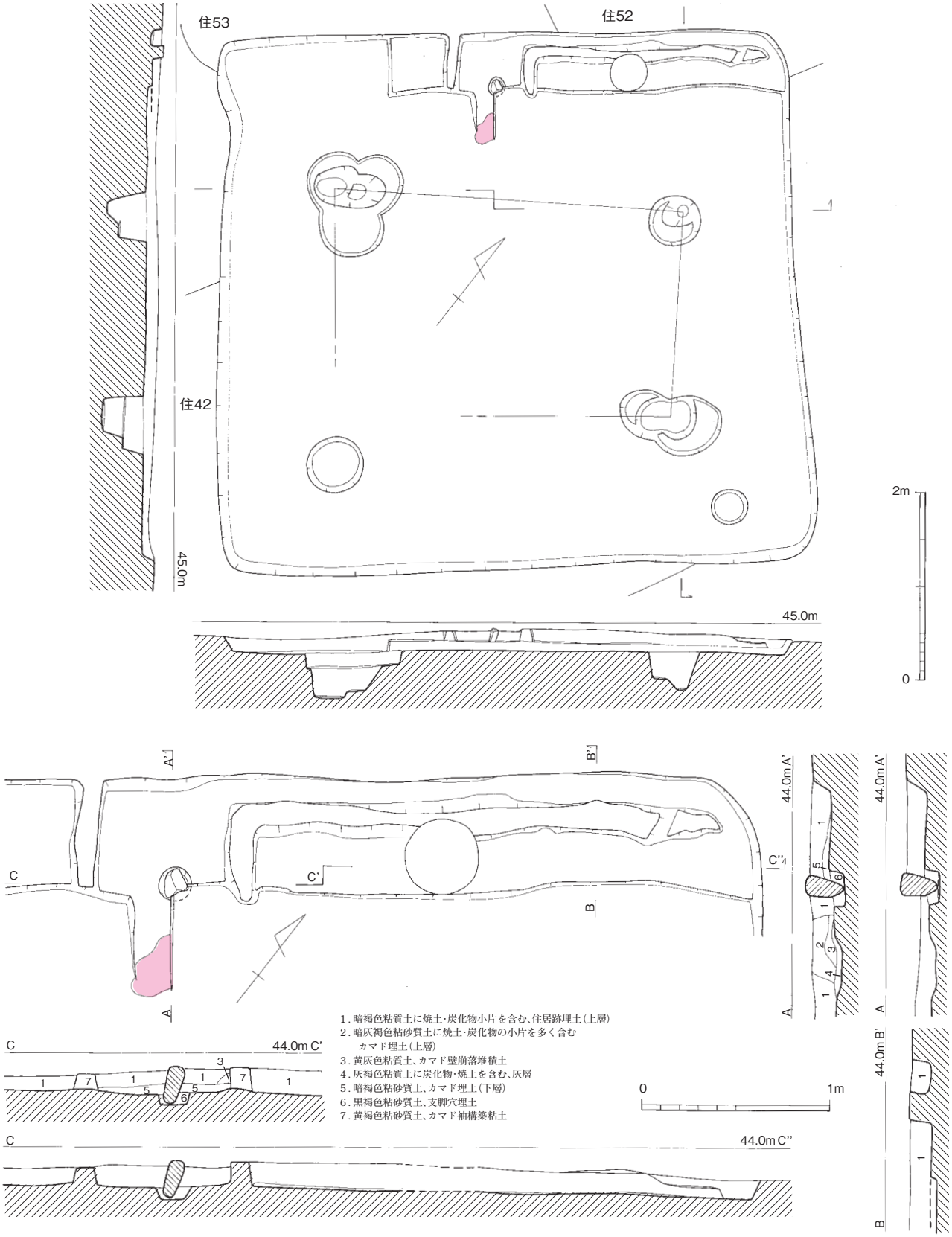
42号竪穴住居跡（第37図、図版43）

調査区のやや南東寄りに位置する。41号住居跡により中央から北側にかけて大きく破壊され、また15･44号住居跡を切るものとして調査したが、15号住居跡との切り合い部分はSX－02谷状落ち込みが下層に広がる箇所で切り合い関係自体が明確に確認できたわけではなく、また44号住居跡は残存状況がきわめて悪い住居跡で検出面においてほとんど床面が現れていたため、これらの切り合い関係については本来とは逆の形で調査したものであろう。主軸は西北西－東南東にとり規模は東西が4.74mをはかる。南北の規模は北壁が大きく破壊されていて不明であるが4.4m以上が残っており、おそらく4.6m前後とみられる。北壁と西壁に掘り込みによりベッド状遺構を形成しており、西壁沿いのものは幅が40cm程度ときわめて狭く、北壁のものは1m以上をはかるものとみられる。住居跡の床面から1基のピットを検出し、また本住居跡を破壊する41号住居跡の床面からもいくつかのピットを検出したが、いずれも深さや位置から見て主柱穴とは評価しがたい。カマドや炉跡等は検出できなかった。出土遺物や住居跡の構造などから、6世紀中葉に位置づけたい。

出土土器（第 41 図）

須恵器（3 ～ 5） 3･4 はカエリを持つ坏身である。3 は底部が平底、4 は丸底である。口縁部形状はよく似ていて、ともにわずかに外湾させながら短く内側に伸びる。5 は高坏の脚部片。「八」の字状に開いてきて接地部付近でさらに強く外湾し、端部は下に折れる。

土師器（6） 6 は甕の胴上位～口縁部片。胴部は球胴か。頸部は強く締まり内面に明瞭な稜を形成



第 39 図　41 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）

する。口縁部は緩やかに外湾しながら開く。

43 号竪穴住居跡（第 40 図、図版 21）

調査区南側のやや東寄りに位置する。東に 15 号住居跡が、北に 41 号住居跡が隣接する。45 号住居跡の南側を大きく破壊し、44 号住居跡とも重複していてこれを破壊している。平面形状は小型の隅丸長方形で主軸方位を北西－南東にとり、北東コーナー部に内接型のカマドを付設する。竪穴部の規模は南北長が 3.40m、東西幅が 2.62m をはかる。残存深さはかなり浅く 10㎝程度である。床面からはいくつかのピットを検出しているが規則的な配置ではなく主柱穴とは考えがたい。出土土器から、7 世紀中葉前後に位置づけたい。

カマド（第 40 図、図版 21）

北東コーナー部に内接型のカマドを付設する。カマドは竪穴のコーナー部より中心に向かって放射状に開きながら短く伸びる両袖からなり、両袖の先端部には立石を配して袖部の補強としている。両袖の壁側と竪穴部の壁との間には 20㎝ほどの空間があり、また両袖の壁側端部も 20㎝ほど離れている。この両袖の壁側端部の空間が煙出しと考えられるが、ここから煙道がどのように伸びて住居外へと排出されるかを解明することはできなかった。また、床面上に支脚や被熱赤変面等も確認できなかった。ただし、袖の先端部上半はよく焼けて赤変していた。カマド内部の堆積土層は住居跡の埋土とカマド袖の構築土である黄褐色粘質土、焼土などの混合層で、竪穴部の埋没とともにカマドが崩壊、埋没したものとみられる。

出土土器（第 41 図）

須恵器（13･14） 13･14 はともに坏蓋である。天井部は平坦で、肩部に段はない。口径が小さく直径 10㎝内外である。

縄文土器（15･16） 15 は内外を貝殻条痕で調整して外面に沈線を施したもの。16 は沈線で囲んだ内部を縄文で充填するもの。いずれも混入である。

なお、他に埋土中から第 129 図 32 の鉄刀子が出土している。

44 号竪穴住居跡（第 40 図、図版 21）

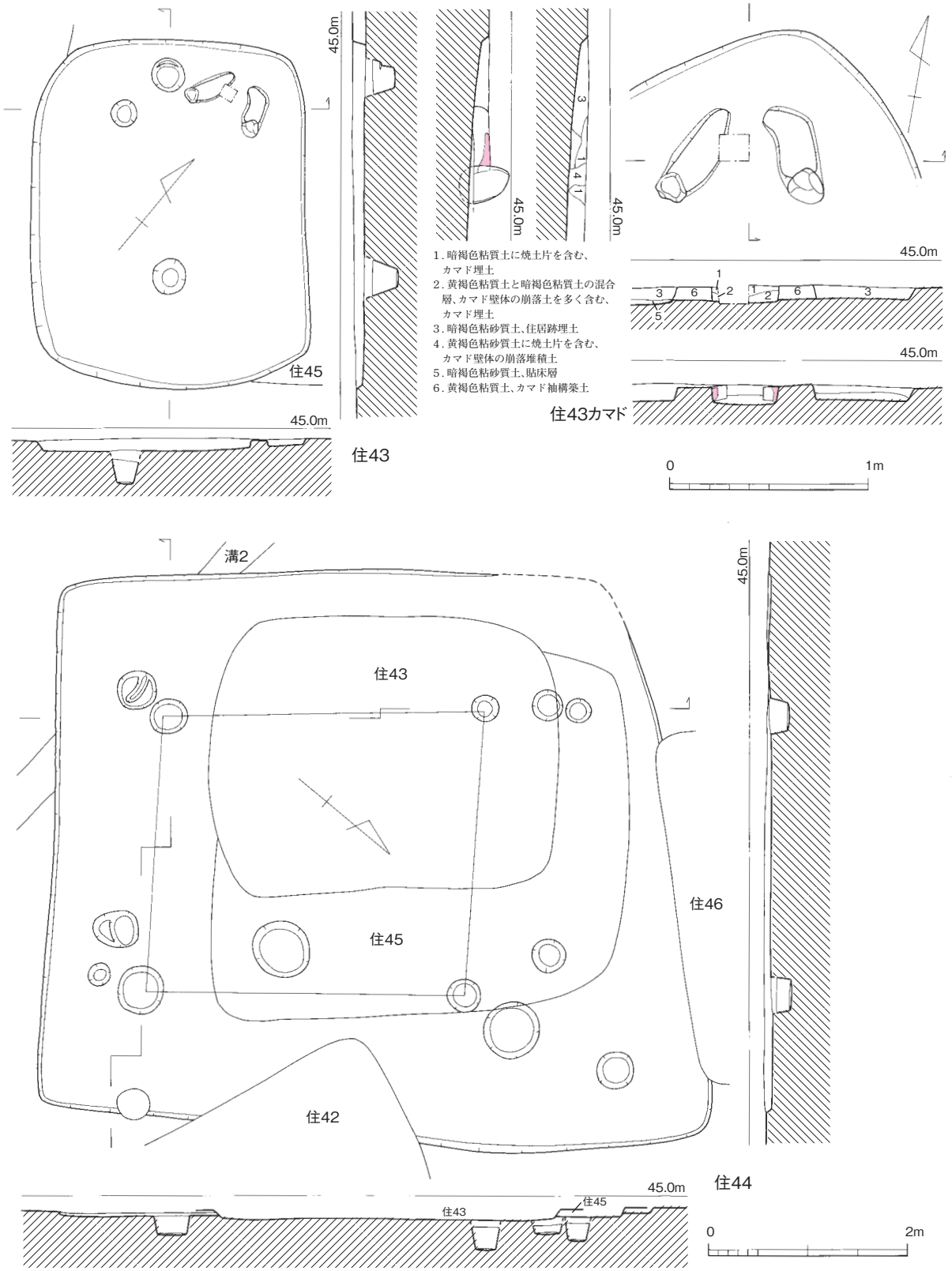
調査区南側のやや東寄りに位置する。43･44 号住居跡に中央部を大きく破壊される。46 号住居跡に北西壁を、42 号住居跡により北東壁の一部を破壊される状況として検出したが、本住居跡の遺存深さが極めて浅く下層の 42･46 号住居跡を検出面で線引きしてしまった可能性が非常に高く、本来の切り合い関係はそれぞれ逆であろう。また 2 号溝を破壊しており、これより後出する。

住居跡の主軸は北西－南東方向に持ち、規模は南北が 6.68m、東西が 5.64m のやや南北に細長い住居跡として検出したが、残存深さが数㎝ときわめて浅く、また特に北西壁が大きく破壊されていて付近の検出は困難を伴い、住居跡の形状や規模、特に南北の長さについてはやや自信がない。床面からはいくつかのピットを検出し、また本住居と重複しこれを破壊する 43･45 号住居跡の床面から検出したピットも含めて 4 本の主柱穴を復元したが、いずれもやや浅く自信がない。また、炉跡やカマドは確認できなかった。出土土器からは 7 世紀前葉に位置づけられよう。

出土土器（第 42 図、図版 44）

須恵器（1 ～ 5） 1 ～ 3 は坏蓋である。いずれも天井から口縁部まで緩やかに湾曲するもの。1 は

口径が小さく、やや新しく位置づけられよう。2·3は器形もよく似る。4は高坏の脚部。「八」の字状に緩やかに広がり、わずかに下端部をとがらせる。おそらく台形となるであろう透かしを入れる。5は平底の甕の底～胴部片。底部は平底でわずかに上げ底状を呈し、指頭圧痕が多く残る。胴部はやや肩がある形状で、外面に縄目タタキを施し、内面には車輪状タタキが残る。焼成がやや甘く、胎土がわずかに黄色みを帯びていてほかの須恵器とは特徴が異なる。器形や器壁調整からみても舶



第40図　43·44号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60·1/30）

載品で半島産の可能性が高い。

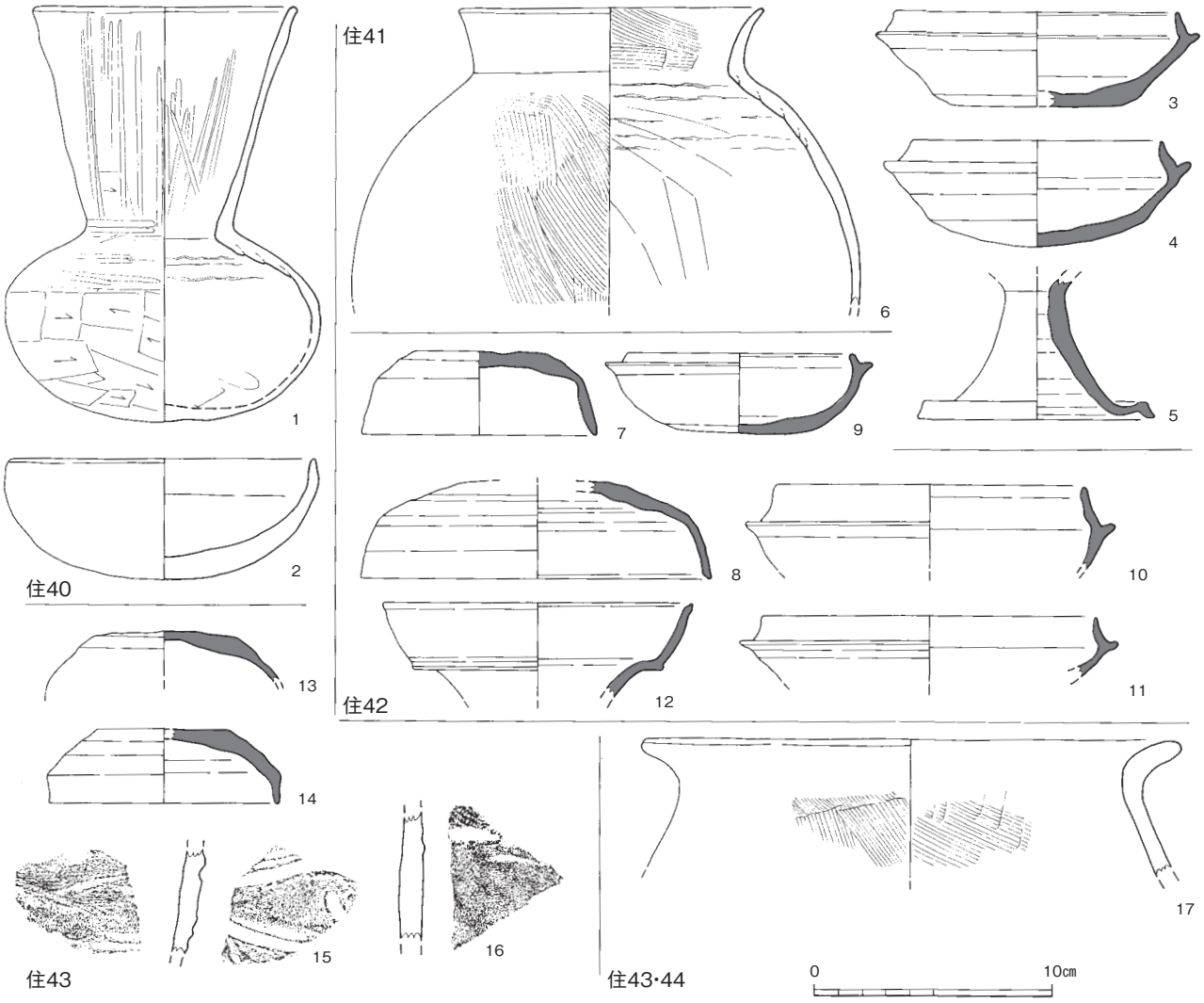
土師器(6 ～ 12)　6 は長胴の甕。底部に焼成後の穿孔を施す。頸部は強く締まり口縁部は外湾する。内面にやや特徴的な青海波紋がよく残り、外面は横方向のハケ目を密に施してタタキ痕跡を消す。一般的な甕の器壁調整技法とはやや異なるが器形的には大きな違和感はない。7 も甕の胴上位～口縁部片。胴部はおそらく長卵形で頸部の締まりは緩い。口縁部は如意状に緩く外反する。8･9 は小形の甕。8 は球胴で頸部は緩く締まり口縁部は如意状に外反する。内面に青海波紋を残し外面は平行タタキのちハケ。9 も同様の器形だが器壁調整にタタキ痕跡は認められない。10 ～ 12 は坏または椀。10 は平底で坏に近い。11･12 は椀で、器高が低い。

なお、他に埋土中から第 130 図 42 の鉄ヤリガンナが出土している。

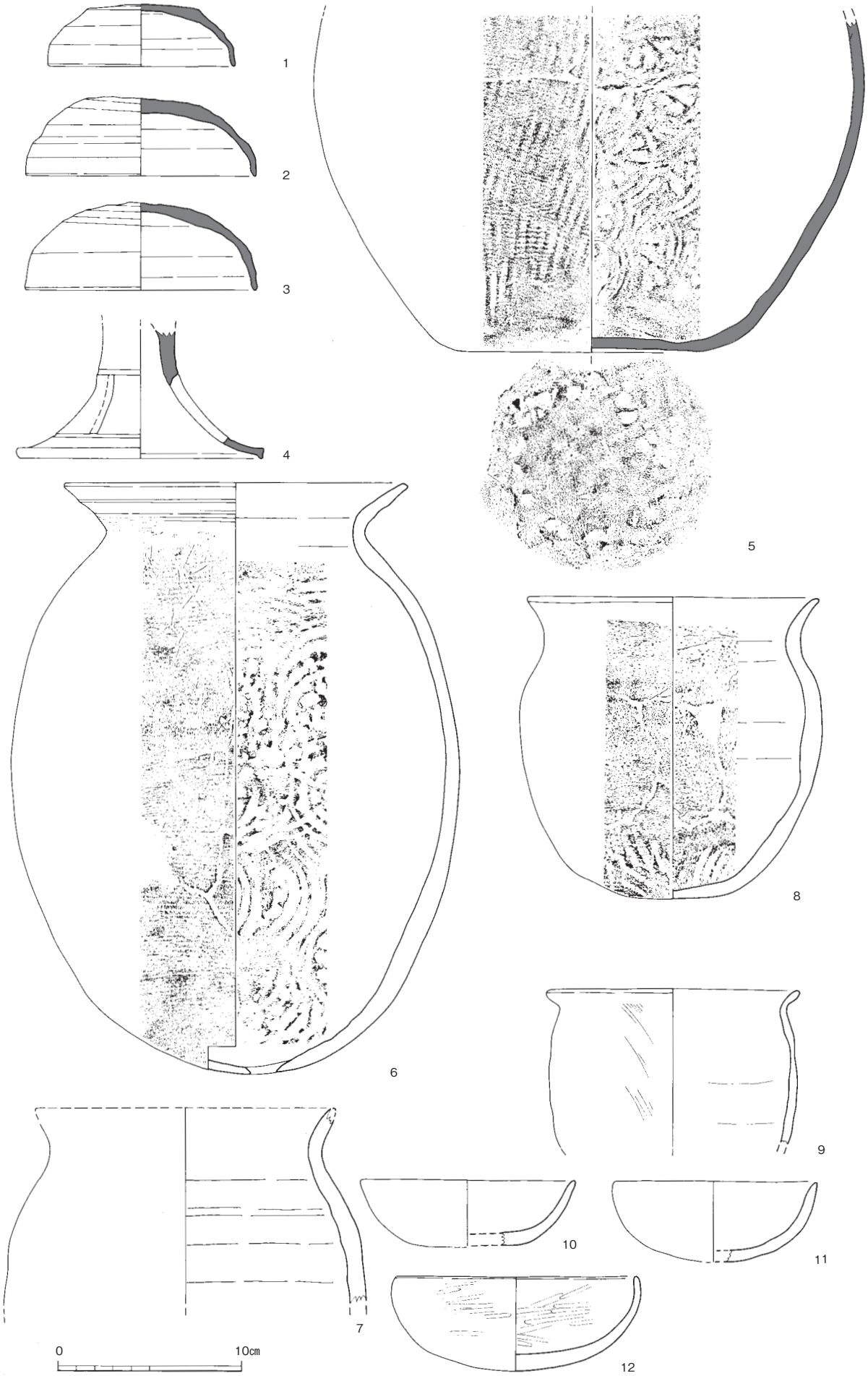
43･44 号住居跡出土土器（第 41 図）

43･44 号住居跡の切り合い関係精査中に出土した土器を 1 点図示しておく。

土師器（17）　17 は甕の口縁部片である。頸部の締まりは悪く口縁部は肥厚しつつ如意状に外反する。7 世紀代の資料か。



第 41 図　40 ～ 44 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第 42 図　44 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

45 号竪穴住居跡（第 43 図、図版 21）

調査区南側のやや東寄りに位置する。43 号住居跡に南側を大きく破壊され、44 号住居跡の中央部を大きく破壊する。主軸を大略北西－南東方向にとる小型の住居跡で、平面形態は隅丸方形状を呈し、規模は南北長が 4.08m、東西幅は 3.50m をはかり 43 号住居跡より一回り大きい。北辺のほぼ中央部に内接型のカマドを付設する。残存状況は悪く、残存深さは数cm程度である。本住居跡とこれを大きく破壊する 43 号住居跡の床面から検出したピットのうち、規則的に配列する 4 つを主柱穴として図示した。深さがよくそろっており 4 本主柱の竪穴住居跡と考えられる。出土土器や切り合い関係から、7 世紀中葉に位置づけておく。

カマド（第 43 図）

北壁の中央部に内接型のカマドを付設する。袖は全く残っておらず、両袖の先端部に補強のために立てた石が2つ残されていた。また、その石の間には住居跡の埋土である暗褐色粘砂質土に混じって黄白色粘質土（カマド構築土）ブロックや焼土、炭化物などを含む埋土が堆積しており、最下層には灰層も遺存していたことから、ここがカマドの燃焼部であると判断できた。炭化物混じりの土を掘り下げたところ住居跡の床面よりも一段くぼんだ状態となり、これがおおよそカマド燃焼部の範囲を示すものとみられる。推定される袖の長さは住居壁より 70cm、燃焼部幅は 50cmほどをはかる。袖は埋没時に破壊されたものとみられる。

出土土器（第 44 図、図版 44）

須恵器（1 ～ 5） 1･2 は坏蓋で肩部外面に段を持つもの。天井部は平坦で、口縁部はわずかに内湾しつつ広がる。端部は斜めに仕上げる。3 はカエリを持つ坏身として示したが、坏蓋でもいいかもしれない。カエリは退化しつつあり口縁部がごく短い。4 は瓹の胴部片か。肩が張らず胴部最大径がやや下に来る。底部には脚がつくか。胴部最大径付近に沈線を二条めぐらせる。5 は瓹の口縁部片。口縁部は直線的に開き、頸部上位に櫛描波状文をめぐらせる。

土師器（6 ～ 8）6 は椀である。やや浅い半球形で口縁端部をごくわずかに外湾させる。器壁調整は内・外面ともにミガキ。7 は高坏の脚部片。脚端部を明瞭に屈曲させる。8 は甑の口縁部片か。直立気味に立ち上がりわずかに内湾する。

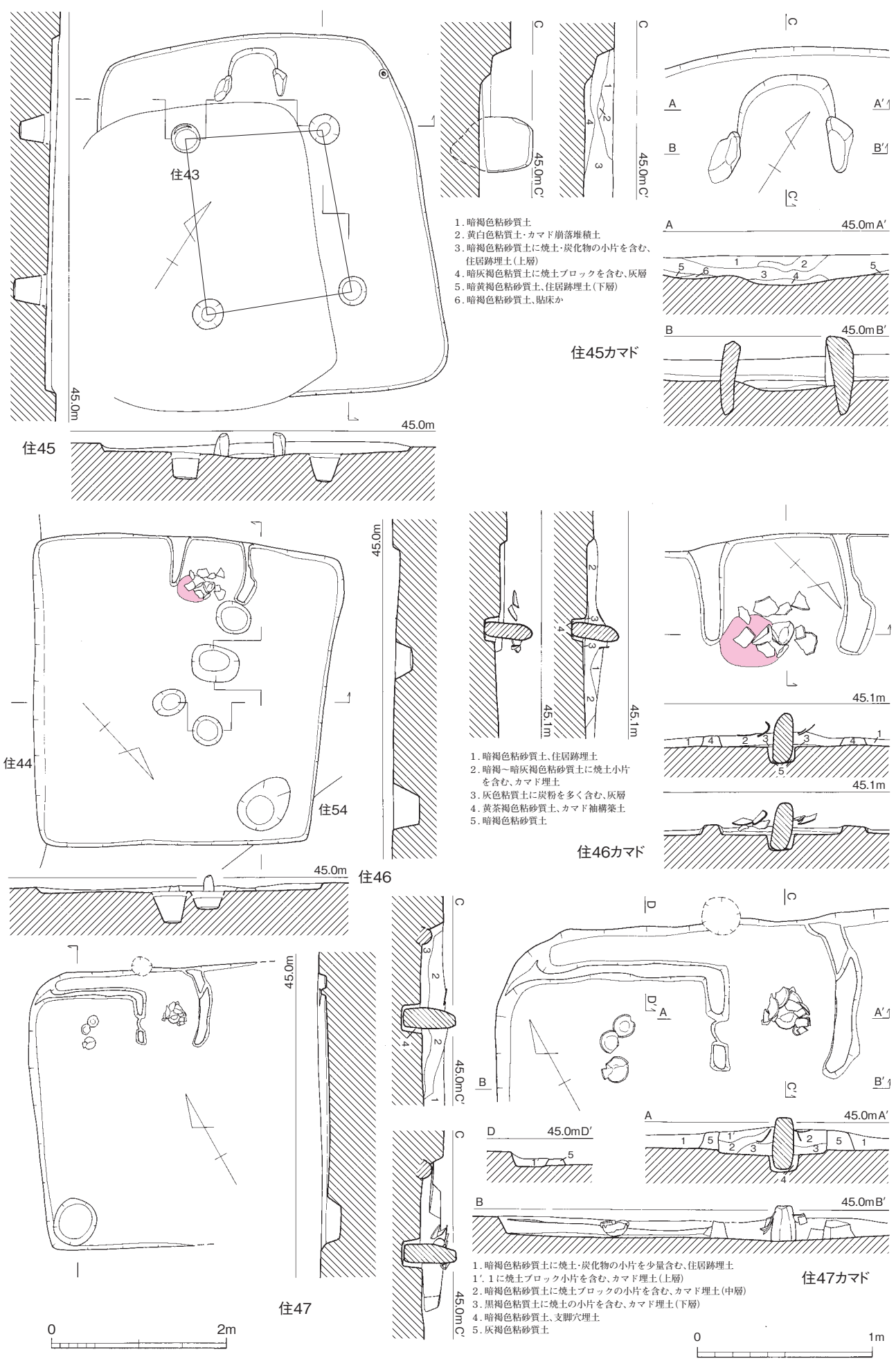
以上の資料群は 6 世紀前半と 7 世紀中葉の 2 時期のものが含まれる。

46 号竪穴住居跡（第 43 図、図版 21）

調査区南側のやや東寄りに位置する。47･54 号住居跡と切り合い関係を持ち、これらより新しい。一方 44 号住居跡との切り合い関係は誤認で、本住居跡が古いとみられる。主軸方位は大略南西－北東方向に持ち、南壁のほぼ中位に内接型のカマドを付設する。平面形状はほぼ正方形で、規模は南北長が 3.48m、東西幅が 3.40m をはかる。残存深さはきわめて浅く、数cm程度である。床面からはいくつかのピットを検出したがいずれも主柱穴に相当するようなものではなく、主柱穴は不明である。出土土器にはやや時期幅があるが、切り合い関係も考慮に入れて 6 世紀後葉に位置づけたい。

カマド（第 43 図、図版 22）

南壁のほぼ中央に内接型のカマドを付設する。南壁にカマドがつく住居跡は本調査区では比較的珍しく、ほかに 6 号住居跡が見られる程度である。カマドは残存状況がよくなかったがかろうじて両袖と支脚を検出できた。袖はやや弧を描きながら奥壁より 65cmほど伸びる状況で検出した。袖



第 43 図　45 ～ 47 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

間の距離は内法で65cmをはかる。両袖の中間、奥壁より45cmほどの燃焼部床面に小穴を穿ち石を立てた支脚を検出した。支脚の周囲には甕・高坏がつぶれたような状態で散乱していた。カマドの埋土はカマド袖構築粘土や焼土・炭化物を含むもので、最下層には灰層もごくわずかに堆積していた。埋土や土器の出土状況から、本カマドは甕がかけられた状態で住居跡とともに埋め戻される途中で崩壊・埋没したものと考えられる。

出土土器（第44図、図版44）

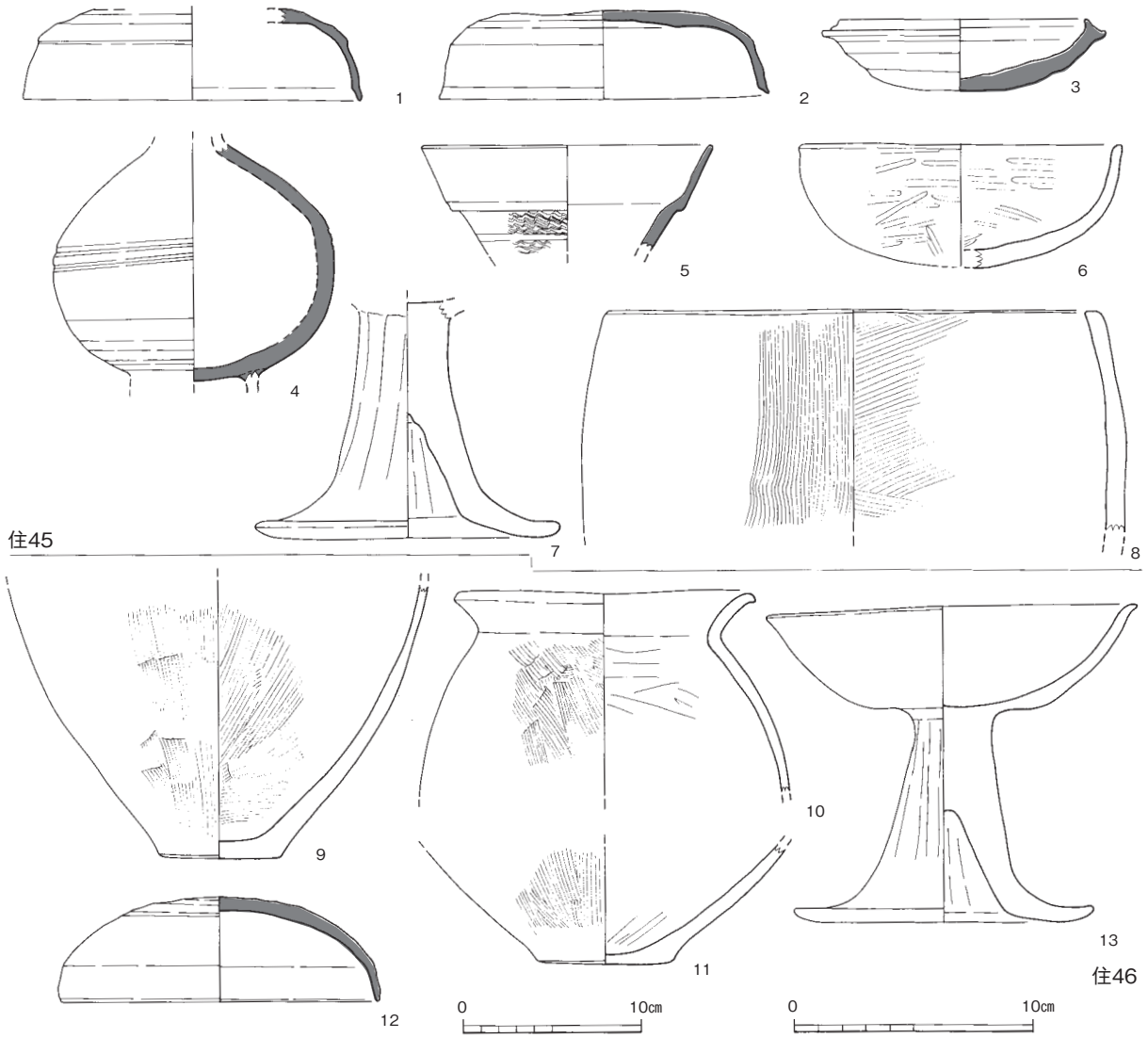
弥生土器（9～11）　9～11は甕である。9･11が底部片で、ともにわずかにレンズ状底化しつつある資料。10は胴上位～口縁部片である。口縁部は「く」の字に反転する。いずれも後期の資料。

須恵器（12）　12は坏蓋。天井部から口縁部にかけて緩やかに湾曲する。

土師器（13）　13は高坏である。坏部は浅い半球状で段を持たず、口縁部がごくわずかに外湾する。脚部は接地部付近が肥厚しつつ屈曲し、端部がわずかに上に引き上げられる。

47号竪穴住居跡（第43図、図版22）

調査区南側のほぼ中央部に位置する。北東コーナー部を46号住居跡に破壊される。主軸を北北東－南南西にもつ住居跡である。東壁が削平によって完全に失われており、全体的に残りは悪い。



第44図　45・46号竪穴住居跡出土土器実測図（9～11は1/4、他は1/3）

北壁に内接型のＬ字状カマドを付設する。竪穴部の規模は南北長が判明しており、3.08m をはかる。東西幅は、カマドが北壁の中央に位置すると仮定して折り返すと 3.12m に復元でき、平面形状は略方形とみられる。床面からはピットが１基検出されたのみで、位置や深さから主柱穴とは判断できず、主柱配置は不明である。カマドの左側から土師器の碗が数個体出土した。ほぼ床面直上の出土で、本住居跡の廃絶時を示す資料の可能性がある。また、カマドの内部からも、埋没時にカマドに掛けられていた可能性のある甕が出土している。これらの出土土器や切り合い関係から、6 世紀中葉に位置づけたい。

カマド（第 43 図、図版 22）

北壁のほぼ中央に内接型のカマドを付設する。袖が奥壁より垂直方向にわずかに内湾しながら伸び、袖の残存長さはよく残る右袖で 85㎝の長さを測る。袖間の距離は内法で最大 62㎝。燃焼部の中央、奥壁より 50㎝の位置に小穴を穿ち立石を配して支脚とする。また左袖の奥壁側は奥壁に接せず直角に左に折れてそのまま住居跡の西壁まで伸び、煙道を形成している。煙道部の幅は約 15㎝をはかる。支脚の周囲には床面から浮いた状態で甕の破片が出土し、おそらくカマドに掛けられた状態でつぶれたものとみられる。カマドの埋土は住居跡の埋土にカマド袖構築粘土（灰褐色粘質土）や焼土、炭化物を含み、住居跡の埋没と同時に堆積したことがわかる。灰層は認められなかった。

出土土器（第 46 図、図版 44）

土師器（1 ～ 12）　1 ～ 5 は甕。1 は大型品で、頸部が鋭く屈曲し、口縁部はわずかに外湾しながら開く。2 ～ 5 は中・小型品で、頸部の締まりはやや緩く、口縁部はわずかに肥厚しながら如意状に開く。6 ～ 8 は椀。6･7 は浅い半球形で口縁部がやや強く内側に湾曲する。8 は深い。9 は直口壷。胴部は扁平で、頸部は強く締まるが屈曲は甘い。口縁部は外湾しながら上に伸びる。10 は壷の胴部片か。球胴部のみ残る。11･12 は椀または鉢。丸底で口縁部はわずかに外湾する。11 が浅く 12 は深い。

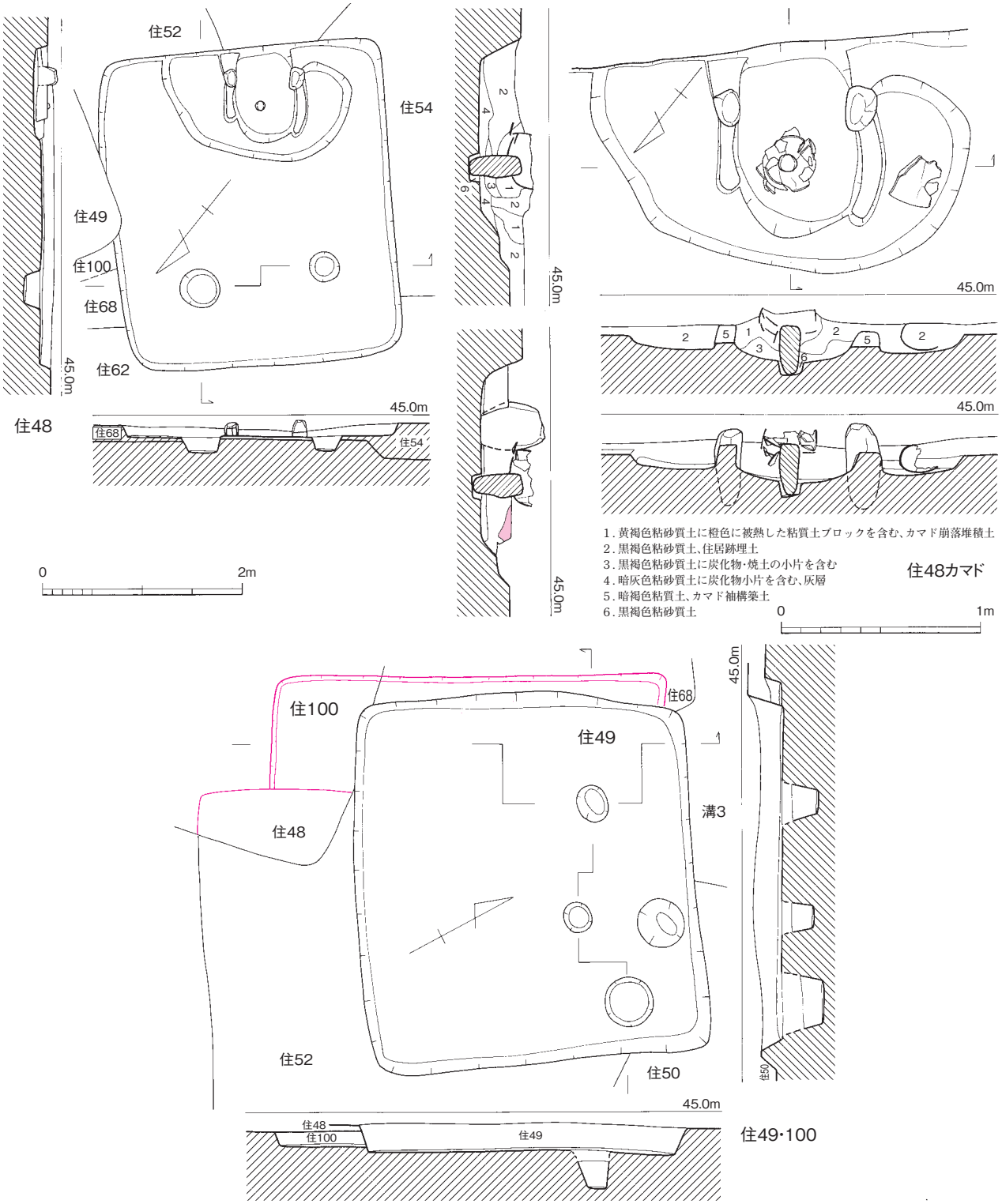
48 号竪穴住居跡（第 45 図、図版 23）

調査区の中央やや南寄りに位置する。付近は非常に多くの竪穴住居跡が切り合いつつ密集する地区で、本住居跡も多くの切り合い関係を持つ。まず本住居跡に切られておりこれより古いことが明らかな住居跡として、52 ～ 54･68･100 号住居跡がある。また本住居跡を破壊しておりこれより新しく位置づけられる住居跡として 49 号住居跡が挙げられる。62 号住居跡との切り合い関係であるが、調査時には本住居跡が新しいものとしたが、出土遺物や住居跡の構造などは逆の関係を示唆する。遺構図面上は修正できないため調査時の見解のまま掲載するが、本来の切り合い関係は 62 号住居跡が新しいものと訂正したい。48 号住居跡は、主軸を南東－北西に持つ大略方形の小型住居跡で、南東壁のほぼ中央部に内接型のカマドを付設する。南東壁にカマドを持つ住居跡は本例のみでありきわめて珍しい。住居跡の規模は東西長が 3.02m、南北幅が 2.76m をはかる。壁の残存深さは 10㎝程度である。床面からは 2 基のピットを検出した。並んでいて深さも比較的そろっており主柱穴となる可能性があるが、確実ではない。出土土器から、5 世紀後葉に位置づけられよう。

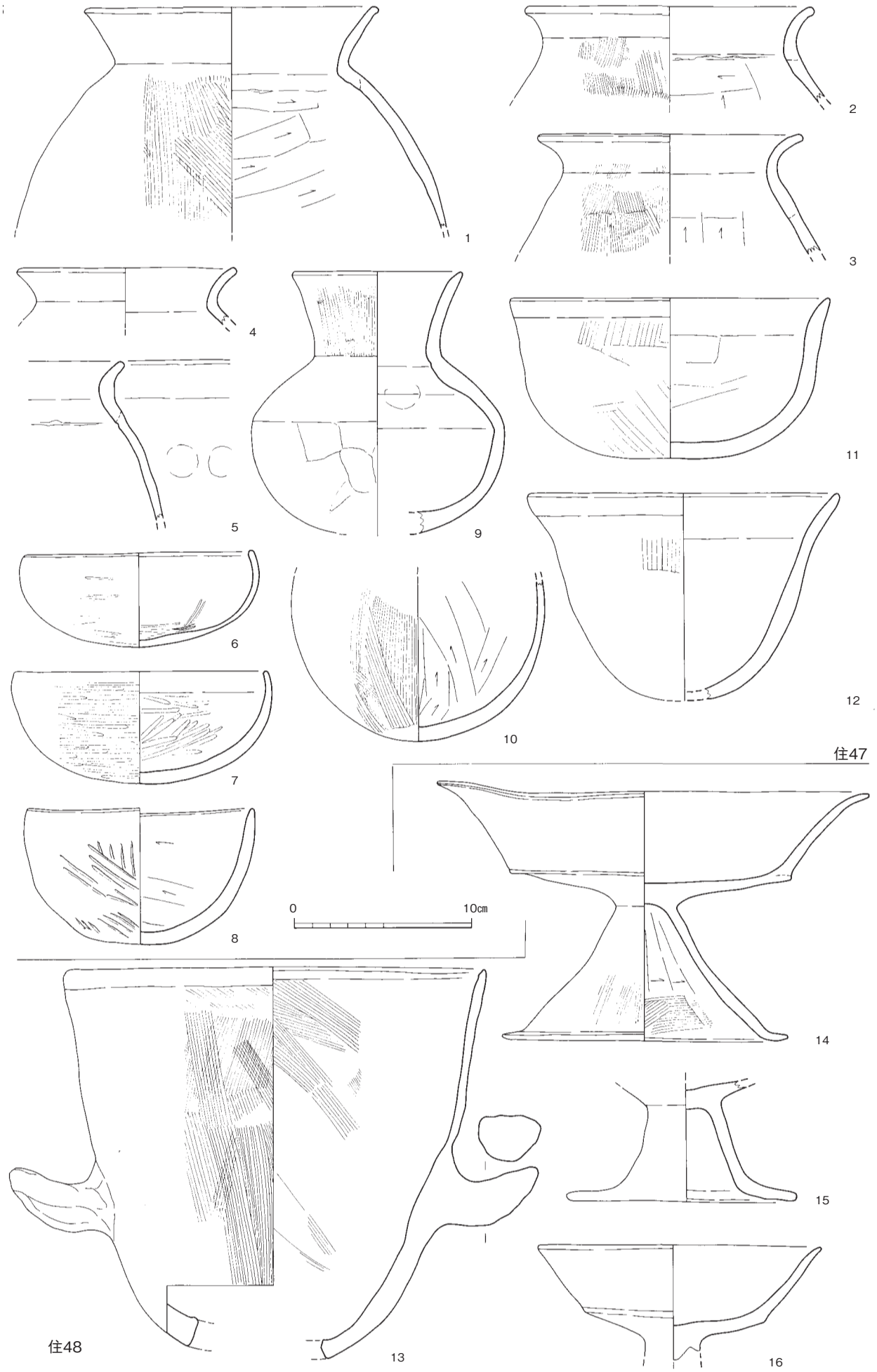
カマド（第 45 図、図版 23）

南東壁の中央に内接型のカマドを付設する。袖は緩く内湾しながら長く伸びており、住居壁からの最大残存長さは 85㎝ほどをはかる。カマド袖の周囲が 5㎝ほど住居跡の床面よりも下がっており、カマドの燃焼部はそこからさらに 7㎝ほど深くなる。付近は住居跡が著しく重複する箇所で、カマ

ド付近の下層住居跡がかなり深いものであり、埋土が柔らかいためにカマドを使用しながら維持する過程で掘り下がってしまったものとも考えられよう。カマドの燃焼部幅は60cmほどで、そのほぼ中央部、奥壁より50cmほどの位置に小穴を穿ち立石を配して支脚とする。支脚の存在から、掘り下がったカマド床面が（最終）機能面であることは疑いない。両袖の中位、奥壁から約20cmの位置に袖補強のための立石が袖中に配されていた。この位置のみに補強石材を用いる例は珍しい。カマド埋土は住居跡の埋土にカマド袖構築土である暗～黄褐色粘質土や焼土、炭化物などが混ざっ



第45図　48・49・100号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）



第 46 図　47･48 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

たもので、住居跡の埋没とカマドの崩壊が同時期に起こったことを示す。床面直上には灰層も堆積していた。また、支脚の周りには甕の下半がほぼ完形で残されており、カマド右袖の右横には甑の大片がほぼ床面直上から出土した。これらはカマドで用いられたものであり本住居跡の時期を示すものと考えてよいだろう。以上の状況から、本カマドは甑を取り外したあとそのままの状態で住居跡の埋め戻しと一連の過程の中で崩壊・埋没したと理解することができよう。

出土土器（第 46 図、図版 45）

土師器（13 ～ 16）　13 は甑。底部は欠失するが複数穿孔か。口縁部は直線的に開く。把手は断面がややつぶれており、斜めに湾曲する。14 ～ 16 は高坏。14 は全形がわかる資料である。脚は強く開き端部をごくわずかに外湾させる。坏部底面は平坦で、中位で明瞭に屈曲して口縁部は外湾しながら強く開く。15 は脚部の資料。接地部が明瞭に屈曲して開く。16 は坏部の資料。口縁部はまっすぐ開き端部のみわずかに外湾させる。なお、カマドから出土した甕は所在不明で報告できない。

なお、他に埋土中から第 119 図 97 の管状土錘が出土している。

49 号竪穴住居跡（第 45 図、図版 23）

調査区の中央やや南寄りに位置する。非常に多くの住居跡が密集する中にあり、南に 48 号住居跡が隣接する。48･50･52･68･100 号住居跡、3 号溝を破壊しており、これらよりも新しい。付近の遺構の切り合いの中で最も新しく位置づけられる。平面形状は略方形で主軸は北北東－南南西にとり、規模は南北が 3.24m、東西が 3.50m をはかる。残存状況は比較的良好で、深さは約 20㎝をはかる。床面からはいくつかのピットを検出したが、主柱穴にふさわしい位置にあるものはない。また、カマドが検出されなかった。出土土器は 7 世紀前葉を主体として 8 世紀代の資料も見られ、切り合い関係から 8 世紀以降の遺構と考えられる。

出土土器（第 49 図、図版 45）

須恵器（1 ～ 7）　1 ～ 3 は坏蓋である。いずれも肩部の段が退化しつつあるもので、天井部は丸みを帯び、肩部は緩やかに湾曲して口縁部に至る。4 は提瓶の胴部片である。肩に半鐶状の耳がつく痕跡が残る。5･6 はカエリを有する坏身。ともに口縁部がかなり短くなっているもの。5 は小片で形には自信がない。7 は高台付の坏身の底部片。底部は平坦で高台断面形は四角形。

なお、他に埋土中から第 130 図 55 の鉄塊系遺物が出土している。

50 号竪穴住居跡（第 47 図、図版 23）

調査区のほぼ中央部で検出した。北に 2 号掘立柱建物跡が隣接する。49･51 号竪穴住居跡、3 号溝跡に破壊され、52･63 号竪穴住居跡を破壊する。主軸を北西－南東方向にとり、平面プランは縦に長い長方形状で、西壁の中央部に内接型のカマドを付設する。残存状況は良好で、壁の深さは 25 ～ 30㎝程度を測る。床面からは多くのピットを検出し、うち比較的掘方がしっかりしていて深いピットを主柱穴候補として検討したが、その結果、4 本セットの主柱穴群を北側と南側の 2 セット示すことができた。もとより本住居跡はほかの住居跡とは異なり平面形状が縦長の長方形状を呈しておりやや不審があったため、3 号溝跡により破壊されている部分より北を 50A 号、南を 50B 号として土器を取り分けていた。相互の切り合い関係が不明なまま掘り下げたため、出土土器の一部は相互に混ざり合ってしまっているものと考えられるが、全体的な傾向を見ると 50A 号住居跡

の出土遺物には7世紀代に下るものが含まれる一方、東側の50B号住居跡出土品はやや古く6世紀代後半のものが多い。以上より、本住居跡は50A号と50B号の2つの住居跡の切り合いを一括して掘り下げてしまったものと判断したい。以下、それぞれ個別に報告する。

50A号竪穴住居跡

東西幅が4.34m、主柱穴の位置から南北長を推定すると4.00mほどの規模を持つ略方形の竪穴住居跡である。北壁の中央やや西寄りに内接型のカマドを付設する。63号住居跡を切り、3号溝跡により破壊される。床面には広く貼床が施されており、調査時に5～10cm下げすぎていてカマドの周囲のみ本来の高さを維持している。50B号住居跡との先後関係は切り合い上は不明だが、出土土器より7世紀後葉に位置づけたい。

カマド（第47図、図版24）

北壁の中央やや西寄りに内接型のカマドを作り付ける。袖は北壁から直交方向に70cmほどまっすぐ伸び、両袖の先端に立石を埋めて補強とする。カマド床面は本来は周囲よりやや下がっていたものと思われる。支脚穴はなく支脚の状況は不明だが、袖間に被熱硬化面が形成されていてその西側に接する位置に土器転用支脚があったのではなかろうか。カマド埋土は最下層に灰層が堆積し、その上に住居跡の埋土に炭化物が混合した層、そしてカマド構築粘土の崩落土層があり最上位に住居跡埋土がかぶることから、カマドが崩落してから住居跡が埋没したことがわかる。

出土土器（第49図、図版45）

須恵器（8･9）　8･9は坏身である。ともに高台を有する坏身であろうが8は底部が欠損する。口縁部は斜めに直線的に開き、端部をわずかに外湾させる。9は高台が残り、外に強く張り端部が角張る。

土師器（14）　14は椀である。平底気味で浅く、口径が広い。内・外面を丁寧なミガキで調整する。

50B号竪穴住居跡

東西幅が4.24m、南北長を主柱穴配置より復元すると4.08mほどと推定される略方形の竪穴住居跡である。52号住居跡を破壊し、49･51号住居跡、3号溝跡により破壊される。50A号住居跡とも切り合い関係を持つが、切り合い上の直接的な先後関係は不明である。出土土器からは6世紀後葉に位置づけられる遺構であったものと考えたい。50A号住居跡とほぼ同規模で、床面の高さも同じである。床面からは4本の主柱穴と考えられるピットを検出した。

出土土器（第49図、図版45）

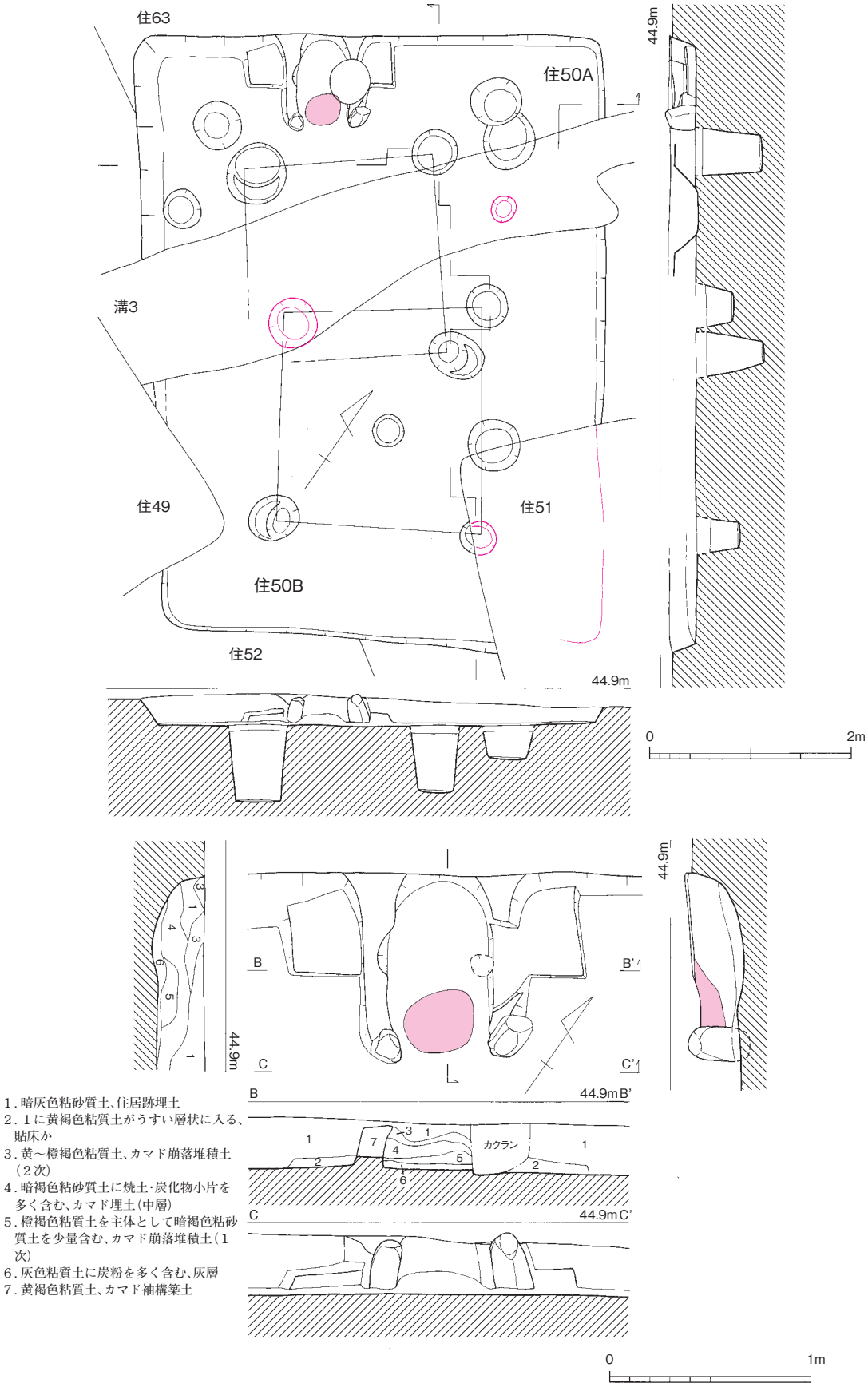
須恵器（10・11）　10は甕の口縁部片である。やや外湾しながら強く開き口唇部を丸く収める。口唇部下に断面半円形の突帯をめぐらせる。11は長胴甕。肩がやや張り、頸部は強く締まり、口縁部はやや直線的に開く。外面は丁寧なハケ目調整によりタタキ痕跡を消すが、内面に円形の当て具痕跡を残す。青海波紋は認められない。

土師器（12～13）　12･13は甕の口縁部片。頸部の締まりは緩く、口縁部は肥厚しつつ如意状に外反する。

なお、他に埋土中から第117図10･12～14の棒状土錘が出土しているが、A･Bのどちらに属するかは不明。

51 号竪穴住居跡（第 48 図、図版 24）

調査区の中央部やや東寄りで検出した住居跡である。50 号住居跡の北東コーナー部を破壊しておりこれに後出する。北東には 1 号掘立柱建物跡が隣接しているが切り合い関係はない。主軸を北



第 47 図　50 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）

東－南西にとる隅丸長方形の平面プランを持つ小型の住居跡で、規模は南北長が3.58m、東西幅が2.36mをはかる。残りは悪く、残存深さは10㎝未満である。床面のほぼ中央に、東・西壁際に2つのピットが並んで検出され、主柱穴の可能性があるが他に類例もない。カマドや炉跡などは確認できなかった。出土土器や切り合い関係などから、9世紀代の遺構とみたい。

出土土器（第49図、図版45）

須恵器（16･17）　16は平底の壷の底部片。底部はややゆがみがある。17はカエリを持つ坏身の口縁部片。小片で、混入品か。

土師器（18･19）　18は土師質の皿。底面はヘラ切りで平坦。口縁部はごく短い。19は甕である。バケツ状の器形で底部は丸底、口縁部は短く外反する。

なお、他に埋土中から第129図16の鉄鏃が出土している。

52号竪穴住居跡（第48図）

調査区のほぼ中央部で検出した。41･48～50号住居跡、3号溝跡に切られ、53･100号住居跡を破壊する。多くの住居跡に破壊されていて全形はやや不明瞭な部分があるが、主軸を北東－南西にとるおおよそ方形の住居跡に復元される。規模は南北長が5.28m、東西幅が5.22mをはかる。床面からは多くのピットを検出したが、主柱穴と考えられるものは見つけられなかった。南壁の中央部に最大幅30㎝ほどの不定形の段が形成されており、出入り口の階段とも考えたが、段が低すぎて難しい。廃棄時の壁の崩壊痕跡かもしれない。出土土器や切り合い関係などから、6世紀中葉代の遺構と位置づけておきたい。

出土土器（第51図、図版45）

土師器（1～11）　1･2は甑である。ともに口縁部が緩やかに外湾するもの。1は把手までが遺存する。横に突き出る把手で断面形はわずかにつぶれる円形。3～5は甕の口縁部片。いずれも小片だが、肥厚しながら如意状に外湾する。6は小型特殊器台の脚部で、直線的に「八」の字に開き外面を細かい横方向ミガキで調整する。混入品か。7はタコツボで、手づくね品。体部中位に1孔を穿つ。8～10は椀。いずれも内外器壁を細かいミガキで仕上げる。8は口縁部が強く内湾するもの、10は逆に外湾するもの。11は手づくねの椀。

53号竪穴住居跡（第48図）

調査区のほぼ中央部で検出した。41･48･52号住居跡に大きく破壊されていて全形は不明であるが、主軸を略北東－南西方向に持つ住居跡である。54号住居跡とは、本遺構が切られるものとして調査したが、出土土器からは逆の関係がうかがえる。ともに上層の遺構群に大きく破壊されていることから、遺構検出時に切り合い関係を間違えたものとしたい。正確な規模は不明だが、やや浅いが主柱穴の可能性のあるピットを床面より2基検出しており、これと壁の位置から南北長が推定すると、約4.0mとなろう。東西幅は不明である。残存深さは15㎝程度と比較的浅い。出土土器や切り合い関係から、5世紀後葉頃に位置づけておきたい。

出土土器（第51図、図版45）

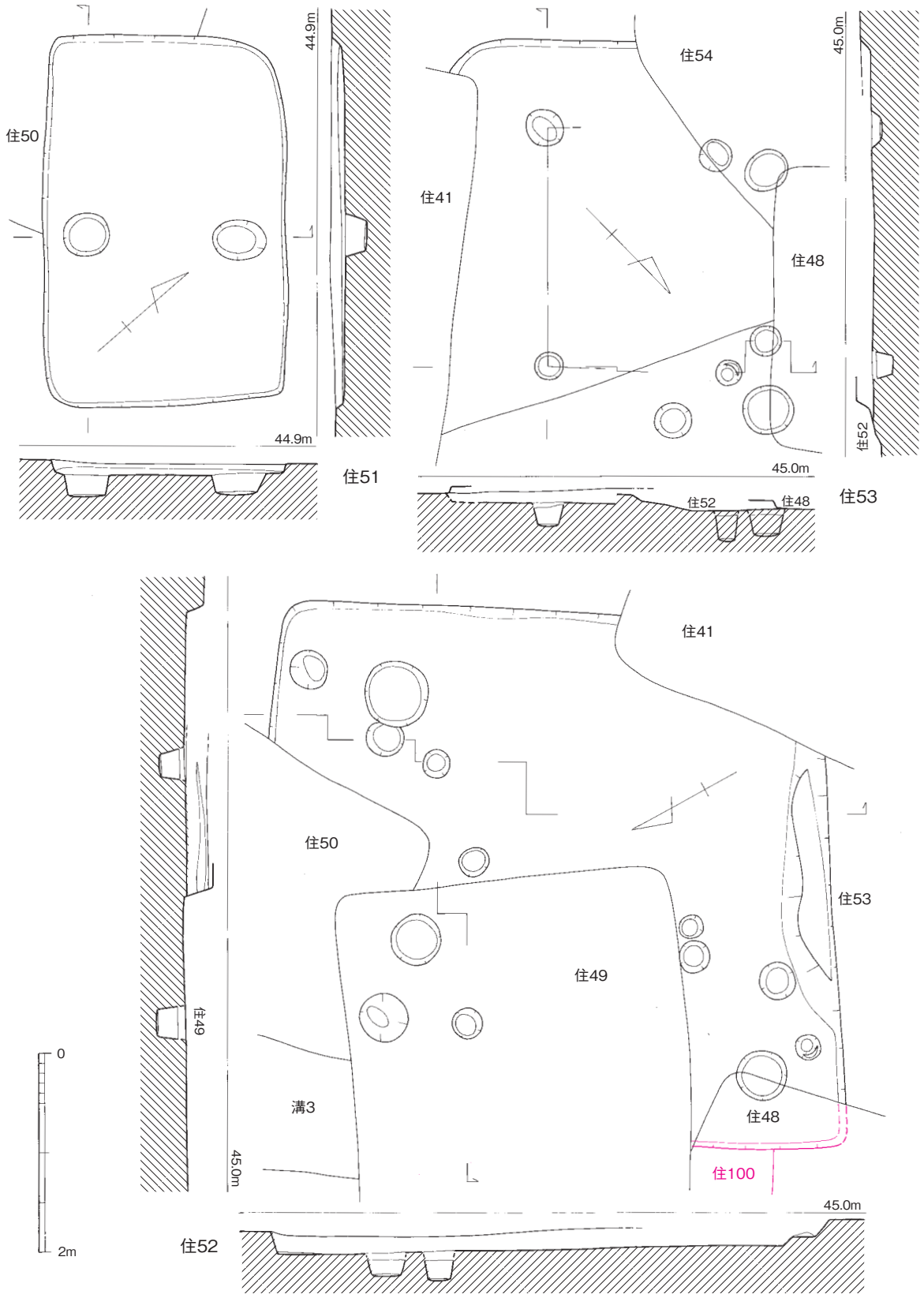
縄文土器（12）　12は内外ナデ調整後外面に沈線で直・曲線を描くもので、後期の磨消縄文土器。

土師器（13･14）　13･14は高坏の坏部片。坏部は深く、中位で明瞭に屈曲する。外面にははっきり

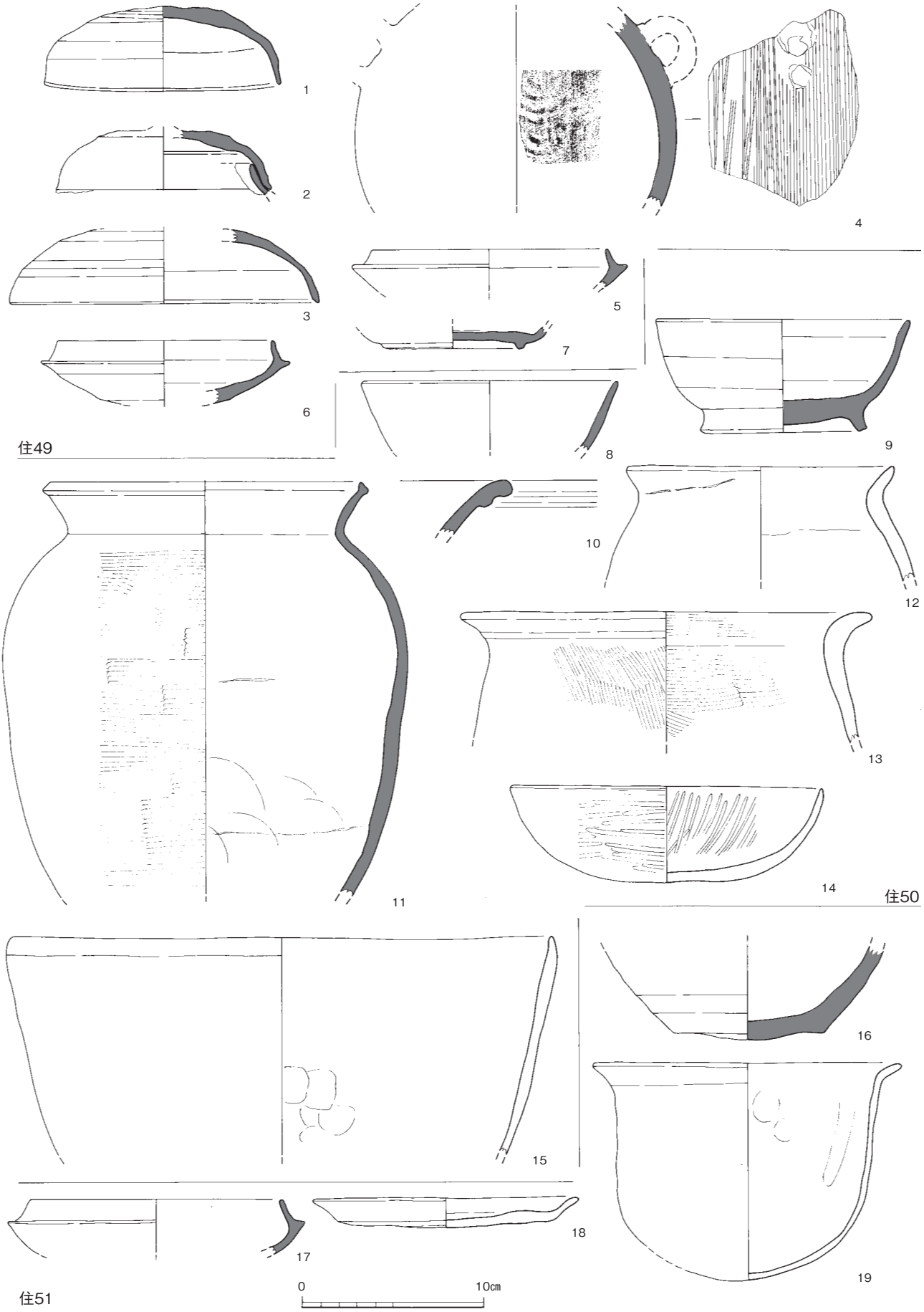
とした段がみられる。口縁端部はわずかに外湾させる。5 世紀後葉の資料。

54 号竪穴住居跡（第 50 図、図版 24）

調査区のほぼ中央部で検出した。46･48･62 号住居跡に切られる他、上述のように 53 号住居跡に



第 48 図　51 ～ 53 号竪穴住居跡実測図（1/60）



第 49 図　49 ～ 51 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

も切られるものとして報告する。ただし、遺構図は修正できないため調査時の所見のまま示す。多くの住居跡に各所を破壊されていて全形はやや不明瞭な部分があるが、おおよそ東西方向を長軸とした平面プランが長方形の竪穴住居跡と考えられ、規模は東西長が 4.42m、南北幅が 3.56m ほどの規模をはかる。西側の壁際にベッド状遺構と考えられる一段高い床を掘り残して造成しているが、南壁際と北壁際で幅が大きく異なり、南側では 80cmほどなのに対し北壁際では 130cmほどをはかる。調査時の誤認の可能性もあろう。床面からはいくつかのピットを検出したが、主柱穴と評価できるものはない。出土土器はわずかで時期を特定できるものに乏しいが、53 号住居跡に後出すること、ベッド状遺構を持つことから、5 世紀前葉に位置づけておきたい。

出土土器（第 51 図、図版 46）

弥生土器（16） 16 は袋状頸部を持つ器台である。脚は中位より強く外湾する。頸部は複合口縁状に屈曲する。頂部は円孔があく。

土師器（15） 15 は甕の胴上位～口縁部片。胴部は球形で頸部はやや強く締まり屈曲する。口縁部はわずかに外湾する。古墳時代前期末～中期前半の土器か。

55 号竪穴住居跡（第 50 図、図版 25）

調査区中央やや南寄りで検出した小型の方形竪穴住居跡である。60･61 号住居跡と切り合い関係を持ちこれらよりも後出する。平面形態はやや胴張りの不整方形で、規模は南北長が 2.40m、東西幅が 2.80m をはかる。北壁のほぼ中央部に石材を袖に多く用いた内接型のカマドを作り付ける。残存深さは 20cm程度で比較的良好な残存状況である。床面からはピットを全く見つけることができなかった。出土土器にはやや古いものが多いが、後述する 55･60･61 号住居跡群検出時の出土遺物には、7 世紀後半以降の資料が散見される。本住居跡がこれらの住居跡群の中で最も新しく位置づけられること、また小型で新しい時期の住居に多い形態であることなどを重視して、本住居跡を 8 世紀代に位置づけたい。

カマド（第 50 図、図版 25）

北壁のほぼ中央部に内接型のカマドを作り付ける。袖は住居跡の壁からほぼ直角方向に並行して伸びており、残存長さは 50cm程度、燃焼部の幅も 50cm程度を測る。左右の袖にそれぞれ 2 つずつ石材を用いており、その隙間を（灰）黄褐色粘質土で埋めて袖を形成している。燃焼部床面には支脚等は認められなかったが、支脚があったと思われる位置から左手前にかけて被熱赤変面が形成されており、おそらく土器などの移動できる支脚を用いていたものとみられる。なお、被熱赤変面を検出したことで本住居跡の床面を確定できた。カマド周囲の一段高く掘り残した部分が本来の床面高である。そのほかの部分は、貼床を掘りすぎてしまったものと考えられる。

出土土器（第 51 図）

土師器（17 ～ 25） 17 ～ 22 は甕の口縁部片。いずれも頸部の締まりが弱く口縁部はやや直線的に伸びつつわずかに外湾する。22 は口縁部が如意状に外反する。23 は鉢。半球形の胴部と短く外反する口縁部を持つ。24 は椀。口縁部が短く外反する。25 はタコツボか。

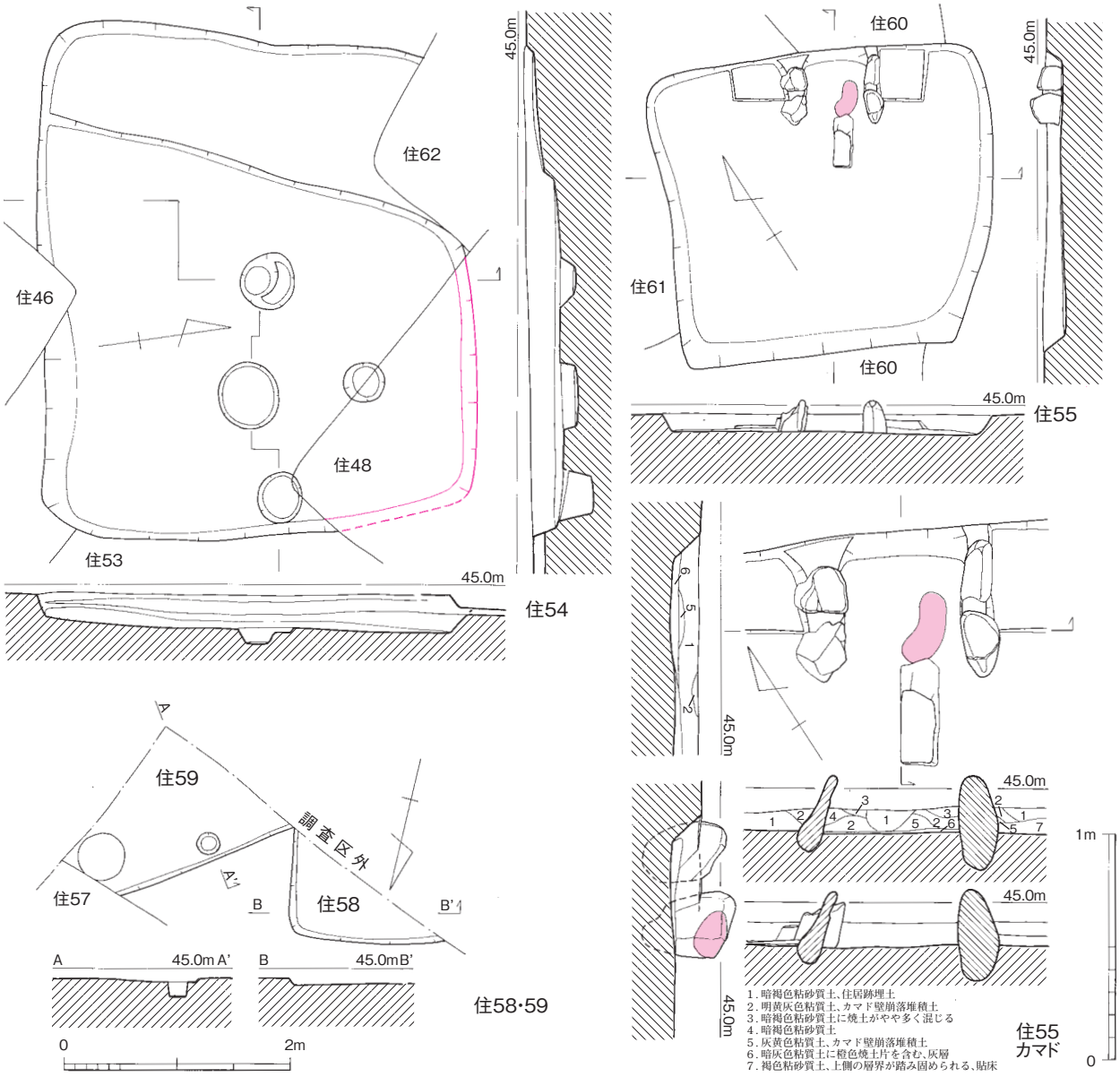
56 号竪穴住居跡（第 52 図、図版 25）

調査区西寄りの南隅で検出した。57 号住居跡と重複していて大きくこれを破壊するほか、65 号

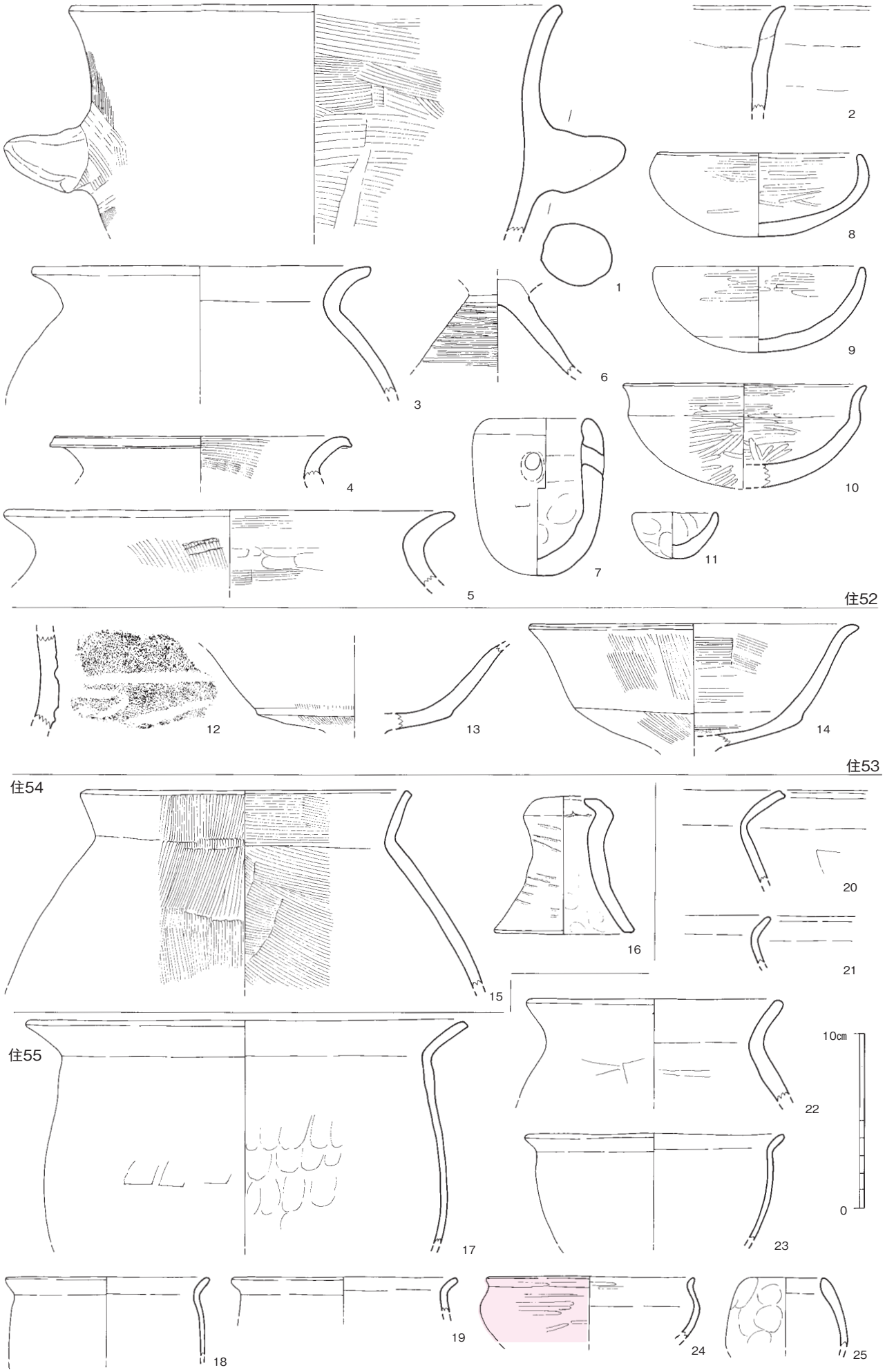
住居跡の東壁も破壊している。また72号住居跡とも切り合い関係にありこれに後出する。主軸方位を西北西－東南東にとる方形住居跡で、西壁の中央部に内接型のＬ字状カマドを付設する。規模は東西長が5.26m、南北幅が5.30mをはかる。残存深さは比較的浅く、10cm程度の深さが残されるのみである。特に北壁ラインについてはややゆがんだ形状で調査しているが、付近は地山に礫が多く見られ住居跡の形状を誤認した可能性がある。また、西壁の北寄りは撹乱により大きく破壊されている。床面からはピットをいくつか検出し、比較的しっかりとした掘方で規則的に配列する4つを主柱穴として提示する。これらは南東の１つを除きいずれも貼床を下げた状態で初めて検出したものである。床面には広く硬化面が形成されていて、検出は比較的わかりやすかった。出土土器から本住居跡は7世紀前葉に位置づけられ、切り合い関係上においても齟齬はない。

カマド（第52図）

西壁のほぼ中央部に内接型のカマドを付設する。右袖は後世のピットにより大きく破壊されていてほとんど遺存していないが、左袖は比較的よく残されており、壁と直交方向に約60cmほどを検出した。支脚の位置から考えて、本来はさらに長く伸びていたものとみられる。燃焼部幅は85cm

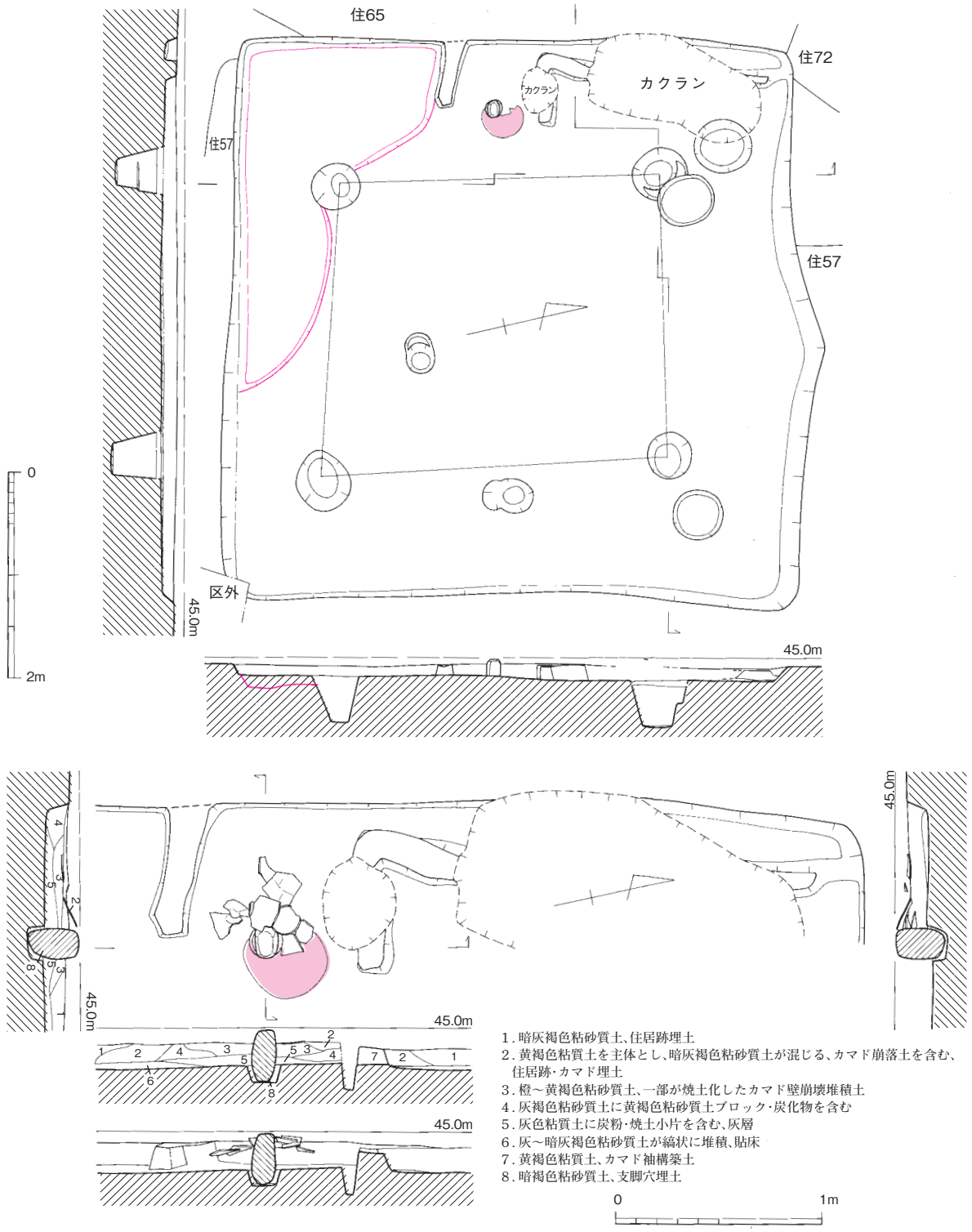


第50図　54･55･58･59号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）



第 51 図　52 ～ 55 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

ほどをはかりかなり大型のカマドである。燃焼部床面のほぼ中央、奥壁から55cmほどのところに小穴を穿ち、立石を配して支脚とする。支脚の周囲には甑の破片が床から浮いた状態で散布しており（第55図－5）、おおよそ完形に復元できた。右袖の付け根は壁につかず10cmほど離れたところで直角に右に折れて、西壁に並行して伸びて北壁へと接して煙道を形作る。煙道の幅は15～20cmほどをはかる。カマドの埋土は住居跡の埋土に黄褐色粘質土（袖構築粘土）や焼土、炭化物を多く含み、住居跡の埋没と同時に崩壊・埋没したことがわかる。最下層には比較的厚く灰層が堆積して



第52図　56号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

いた。

出土土器（第 55 図、図版 46）

須恵器（1･2）　1 は坏蓋である。天井部は丸く、肩部が強く屈曲するが外面に稜はみられない。口縁部はわずかに内湾しながら開き気味に伸び、端部は丸く収める。2 は坏身である。口縁部付近のみの資料。カエリを有し、口縁部は強く湾曲しながら短く伸びる。

土師器（3 ～ 6）　3 は甕の胴上半～口縁部片。胴部は膨らみ頸部はやや締まる。口縁部は緩やかに外湾しながら開く。4 は椀の口縁部片。肥厚させながらやや強く内湾する。5 は甑。底部を欠損する。胴部から口縁部にかけて緩やかに膨らみながら広がり、口縁部は緩く外湾する。把手は斜め上方に短く伸び、断面はつぶれた楕円形状を呈する。6 は手づくねの椀。口径が小さく器高が高い。

なお、他に埋土中から第 121 図 2 の姫島産黒曜石製の打製石鏃が出土している。

57 号竪穴住居跡（第 53 図、図版 25）

調査区西寄りの南隅で検出した。56 号住居跡に大きく破壊されているほか、59 号住居跡とも切り合っていてこれに後出する。残存深さはきわめて浅く、また主要部分を 56 号住居により大きく破壊されていて検出には困難を伴った。結果的に北壁と南壁でコーナー部分が対応していないが、本来の形状は不明である。おおよそ北北西－南南東に主軸を持つ方形住居跡で、南北長は 6.04m をはかる。東西幅は北壁側で 5.18m、南壁側で 6.10m をはかる。床面からはいくつか小ピットを検出したが主柱穴となり得るものは見当たらなかった。出土土器や切り合い関係から、6 世紀代に位置づけておきたい。

出土土器（第 55 図、図版 46）

土師器（7）　7 は椀である。底部は平たく、体部から口縁部にかけて強く湾曲しながら立ち上がる。器壁調整は丁寧なナデ。6 世紀代の資料か。

58 号竪穴住居跡（第 50 図）

調査区西寄りの南端部で検出した。北に 56 号住居跡が隣接するが切り合い関係は持たない。また、東に 59 号住居跡が隣接していて、位置的に切り合い関係を持つはずであるが調査区外にあたり直接的な前後関係は不明である。遺構の大半が南側の調査区外に広がっていて全形は不明であるが、方形プランの竪穴住居跡として報告する。北東コーナー部のみ、南北約 85㎝、東西約 130㎝ほどの範囲を調査した。残存深さはきわめて浅く 10㎝弱である。出土土器はごくわずかで図示できるものはない。

59 号竪穴住居跡（第 50 図）

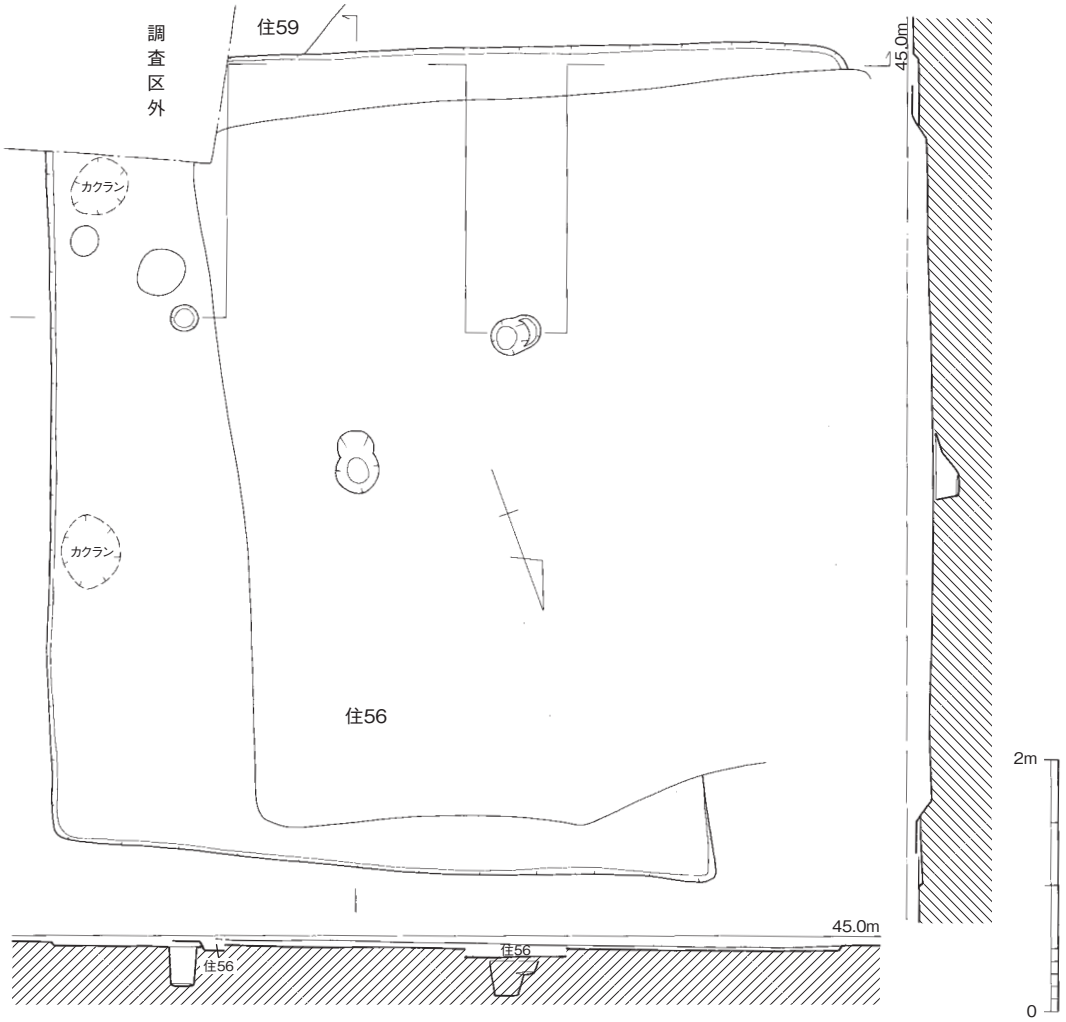
調査区西寄りの南端部で検出した。西に隣接する 58 号住居跡とともに、大半が調査区外に広がっていて全形が不明な住居跡である。57 号住居跡と切り合い関係にあり、本住居跡が先行する。北西側の一辺のみが現れている状況であり、全形や規模などは不明である。残存状況は悪く遺存深さは 5㎝程度で、本当に住居跡としてよいのかやや疑わしい。出土土器はごくわずかで図示できるものはなく、所属時期も不明。

60 号竪穴住居跡（第 54 図、図版 25）

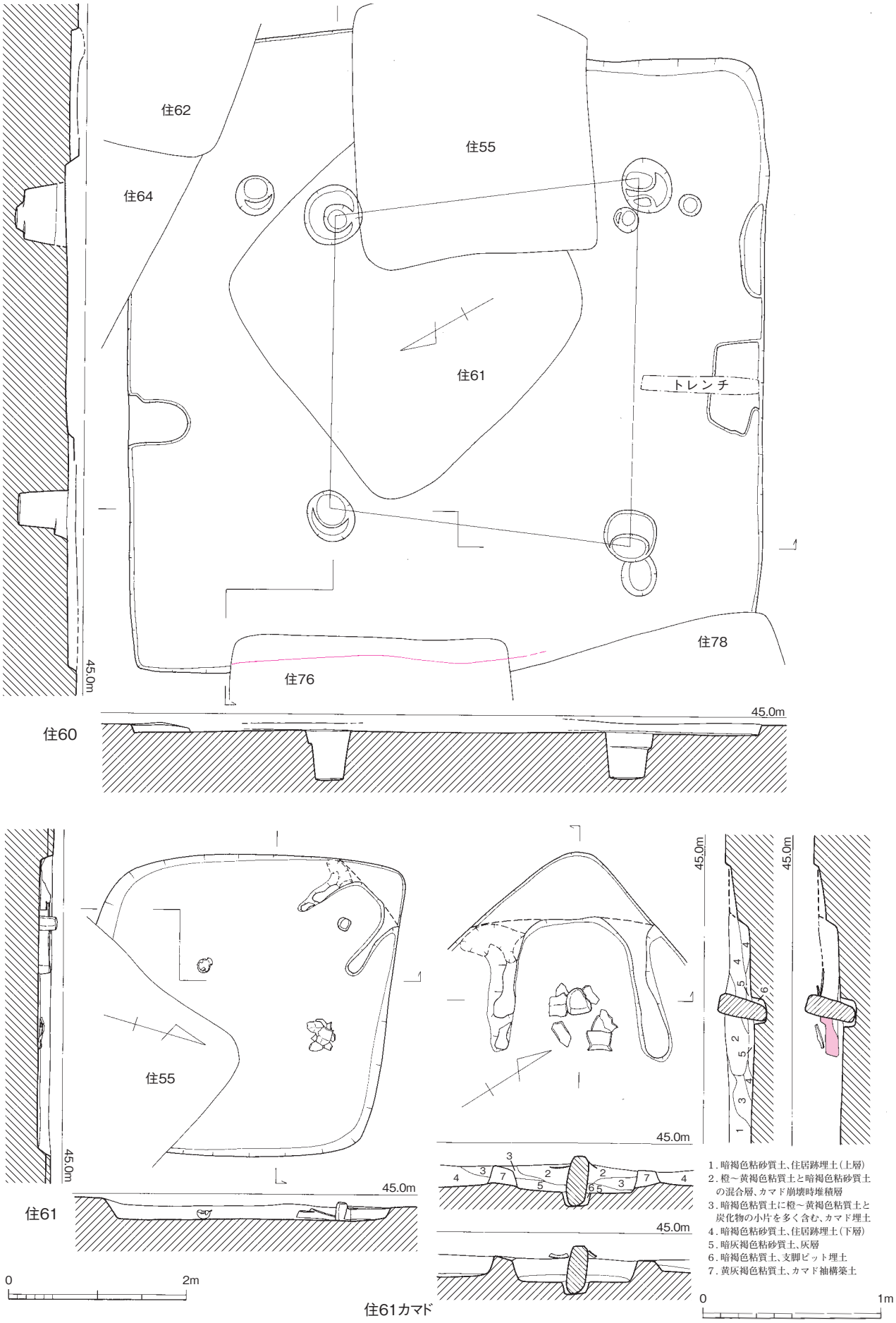
調査区中央やや南西寄りで検出した。南に 56･57 号住居跡が隣接する。55･61･62･64･76･78 号住居跡に切られる。平面プランは大型の方形で主軸方位は大略北東－南西にとり、規模は南北長が 7.02m、東西幅が 6.96m をはかる。残存深さは 20cm前後で比較的残りはよい。床面の広い範囲に硬化面が形成されていたため、床の検出は比較的容易であった。硬化面中に地山由来の黄褐色粘質土が弧状に分布する範囲があり、掘り下げたところそれよりもやや広い範囲が主柱穴となった。おそらく柱穴埋土が踏み固められて沈み込み、複数回にわたり土が補填された状態を示すものとみられるが、土層では明確に把握できなかった。また、柱痕跡も明確に把握できていない。ほかに、貼床をはがした状態で検出したものも合わせ、4 基を主柱穴として示している。南壁・北壁のそれぞれほぼ中央部にあたる床面上に不定形の粘土塊があり、焼土や炭化物を含まないためカマドとは考えられず、出入り口施設とも考えたが、床面からの高さが 10cm程度しかなく、また断ち割ってみると床面よりやや浮いているようにも見えたことから、住居廃棄時の埋め戻し土の中に地山由来粘土のブロックが含まれていたものと解釈したが、念のため図示している。出土土器や切り合い関係などから、5 世紀後葉に位置づけておく。

出土土器（第 55 図、図版 46）

須恵器（12） 12 は肩部に段を作り出す坏蓋である。天井部は平坦で、肩部は緩やかに湾曲し、肩



第 53 図　57 号竪穴住居跡実測図（1/60）



第 54 図　60･61 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）

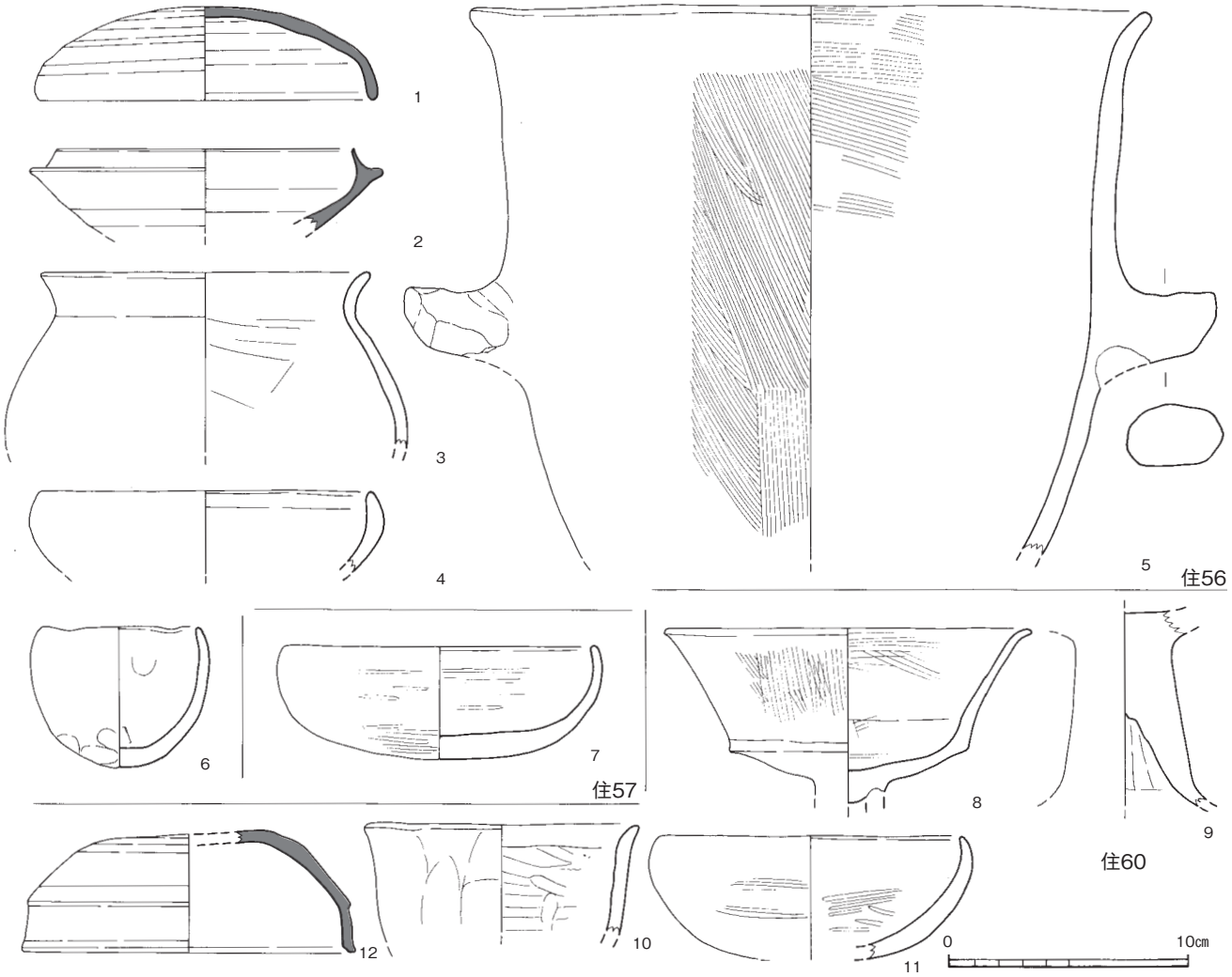
部下方、口縁部との境界に段を作り出す。口縁部は直線的に下に伸びて端部は斜めに仕上げる。

土師器（8 ～ 11）　8 は高坏の坏部片。坏部は深く、体部中位で明瞭に屈曲して外面に稜を形成する。口縁部は開きながら伸びて端部をやや強く外湾させる。9 は高坏の脚中位片。緩やかに開き、下方で明瞭に屈曲する。10 は鉢か。口縁部のみの資料で全形は不明。11 は椀。底部は丸く、口縁部は強く内湾する。

以上の資料のうち須恵器坏蓋や土師器の高坏などは 5 世紀後葉に比定できよう。

61 号竪穴住居跡（第 54 図、図版 25）

調査区中央やや南西寄りで検出した。60 号住居跡と完全に重複していて、本住居跡が一回り小さいため、60 号住居跡の範囲の中に収まっている。また、南東部の 1/3 ほどが 55 号住居跡に破壊されている。平面プランはややゆがんだ小型の隅丸方形で主軸方位を東北東－西南西にとり、北西コーナー部に内接型のカマドを付設する。規模は東西が 3.22m、南北が 3.18m をはかる。床面は硬化面がよく発達し、下層には 5cmほどの貼床が見られる。床面からはピット等が検出されず、主柱穴については不明である。床面のほぼ張り付いた状態で甕などが、またカマド支脚付近からも甕がつぶれた状態で出土した。これらの出土土器はおおよそ 6 世紀中葉代に位置づけられ、本住居跡の所属時期もこの頃に比定できる。



第 55 図　56･57･60 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

カマド（第 54 図、図版 26）

北西コーナー部に内接型のカマドを付設する。コーナー部はほかの箇所と違い三角形状に竪穴部を掘り残しており、その長辺に直交する方向に袖を突出させる。袖の長さは 70cmほどで、支脚の位置から見てほぼ全体が残っているとみられる。袖間の距離は奥壁側がやや狭く 60cm弱、先端部は 75cmほどでやや広がる。両袖の中央、奥壁から 40cmほどの燃焼部床面に小穴を穿ち立石を配して支脚とする。支脚の周囲には床面からやや浮いた状態で甕形土器がつぶれており、おそらくカマドに掛けた状態でカマドとともに廃棄されたものとみられる。床面には被熱赤変面は認められないが、両袖の内側、支脚より前面側に被熱赤変部が認められた。カマドの埋土は住居跡の埋土にカマド袖構築粘土である黄灰褐色粘質土ブロックや焼土、炭化物などが混ざり、最下層には灰層も認められることから、住居跡竪穴部の埋没と軌を一にして崩壊・埋没したことが読み取れよう。

出土土器（第 56 図）

土師器(1 ～ 5)　1 ～ 5 は甕である。1 ～ 3 は大型の甕。1 は球胴で頸部が強く締まり明瞭に屈曲する。口縁部は緩やかに外湾しながら開く。2 は底部片で丸底球胴。3 はやや長胴気味のもの。頸部の締まりはやや弱く、口縁部は肥厚しながら外湾する。4･5 は中・小型の甕。いずれも球胴で頸部の締まりは緩く、口縁部は肥厚させながら短く外湾する。

55･60･61 号住居跡出土土器（第 56 図）

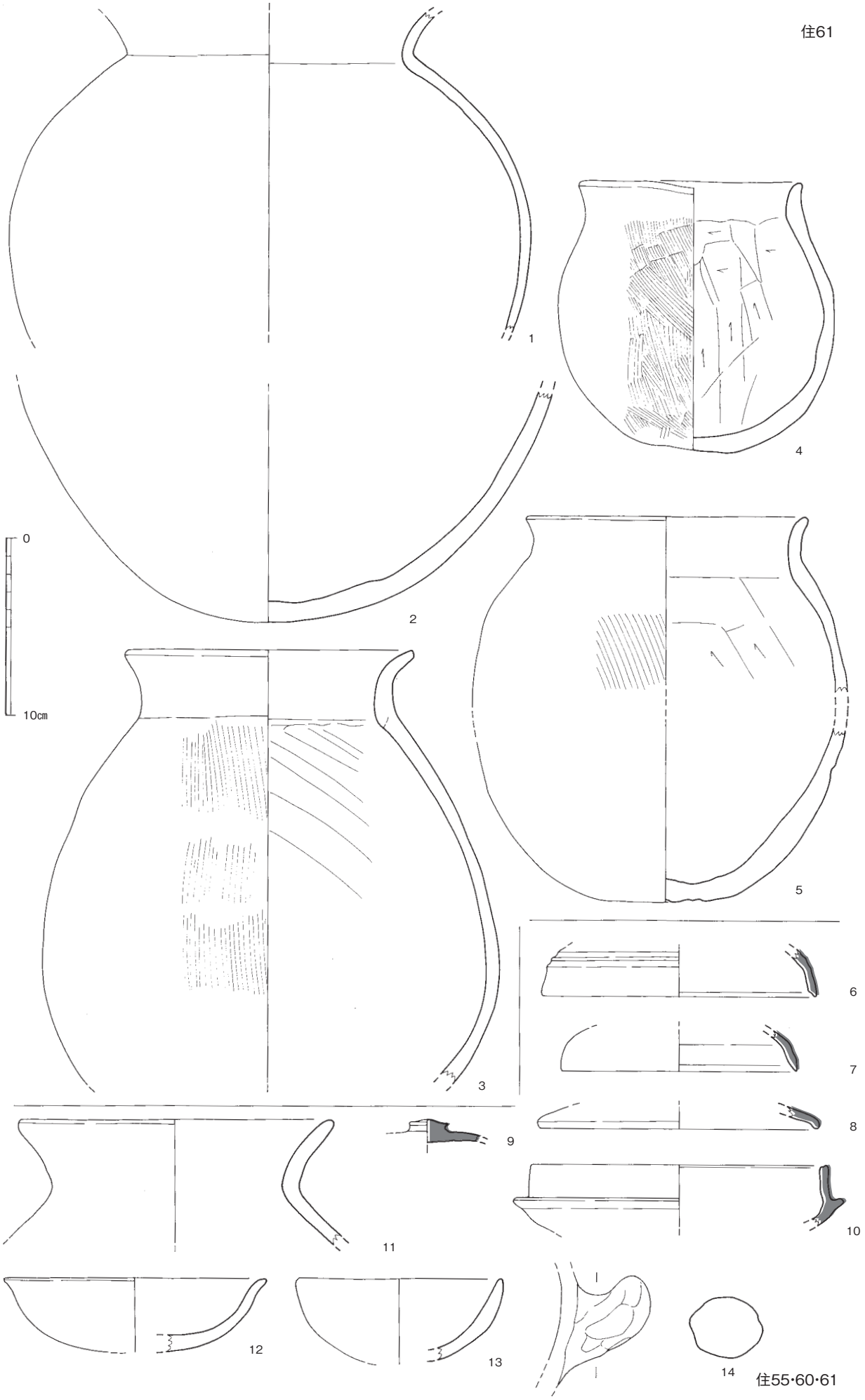
55･60･61 号住居跡の遺構検出時に、切り合い関係が把握しづらく、面的に検出面を下げたときに出土した土器である。

須恵器（6 ～ 10）　6 ～ 8 は坏蓋。6 は肩部に段を持つ坏蓋の口縁部片で、端部を斜めに仕上げる。5 世紀後半代の資料で本来 60 号住居跡に属するか。7 はおそらく天井部が丸い坏蓋であろう。肩部は低く、明瞭に屈曲して斜め下方に伸びる。6 世紀後半代の資料。8 は端部嘴状の坏蓋。9 は低いつまみを持つ坏蓋。これらは 7 世紀後半～ 8 世紀段階の資料。10 はカエリを有する坏身。

土師器（11 ～ 14）　11 は甕の口縁部片。頸部はやや強く締まり湾曲する。口縁部は強く開く。6 世紀後半代か。12･13 は椀。12 は浅く、口縁部がわずかに外反する。13 は半球形の器形。14 は甑の把手片。

62 号竪穴住居跡（第 57 図、図版 26）

調査区のほぼ中央部で検出した。54･60･64･68 号住居跡を破壊する。48 号住居跡に東辺を切られるものとして調査したが、出土土器からこれを訂正し、本住居跡が新しいものとする。ただし図面は調査時に作成しており修正できないためそのまま図示する。注意されたい。主軸方位は北西－南東で、西壁のほぼ中央部に内接型のカマドを付設する。平面形態はやや南北に長い長方形で、規模は東西長が 4.02m、南北幅が 5.34m をはかる。残存状況は比較的よく 10cm以上の深さが残されていた。床面には広く硬化面が形成されており、硬化面上からはピット等の掘り込みは確認できなかった。貼床を 5 ～ 10cm下げていくつかのピットを検出し、中には比較的掘方の深くしっかりとしたものもみられたが、配置が不規則で主柱穴と評価できるものはない。住居跡のほぼ中央部の床面直上に、高坏と甕を組み合わせて小ピットの中に埋納した土器埋納遺構を検出している。出土土器には 6 世紀末の資料と 8 世紀代の資料があるが、新しい方を取って（特に土器埋納遺構出土土器）8

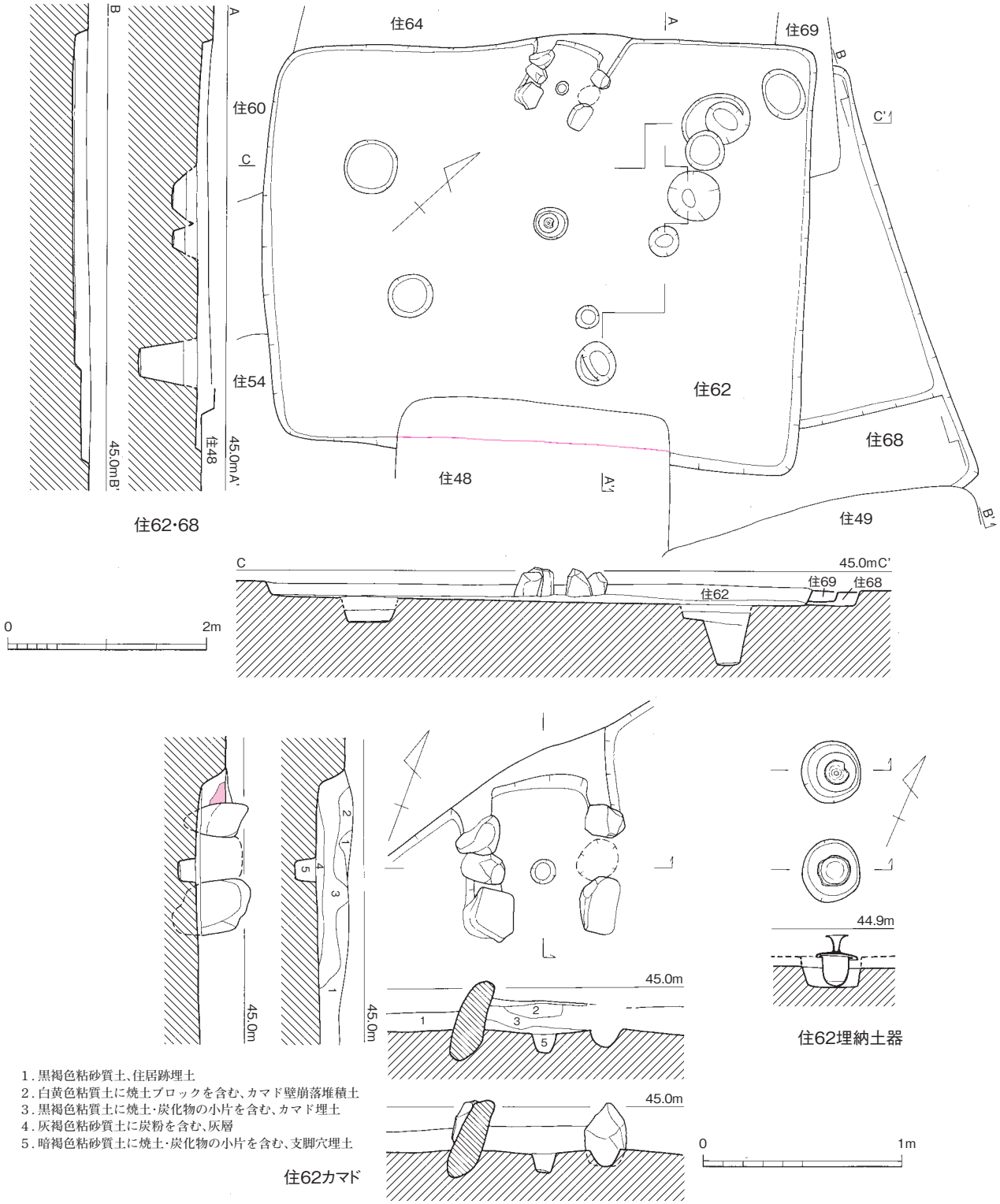


第 56 図　55･60･61 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

世紀代の住居跡と理解したい。

カマド（第57図、図版26）

西壁のほぼ中央部に内接型のカマドを付設する。カマドの袖は住居跡西壁と直交方向からやや南に傾いた形で住居跡の南東コーナー部方向に向かって伸びており、ほかのカマドとはやや異なる点が注意される。住居跡の平面形態が横長長方形である点と合わせ調査区内では他に類例がなく、2つの住居跡が切り合っているものを1つの住居跡と誤認したものとも考えた（1つはカマド付近を

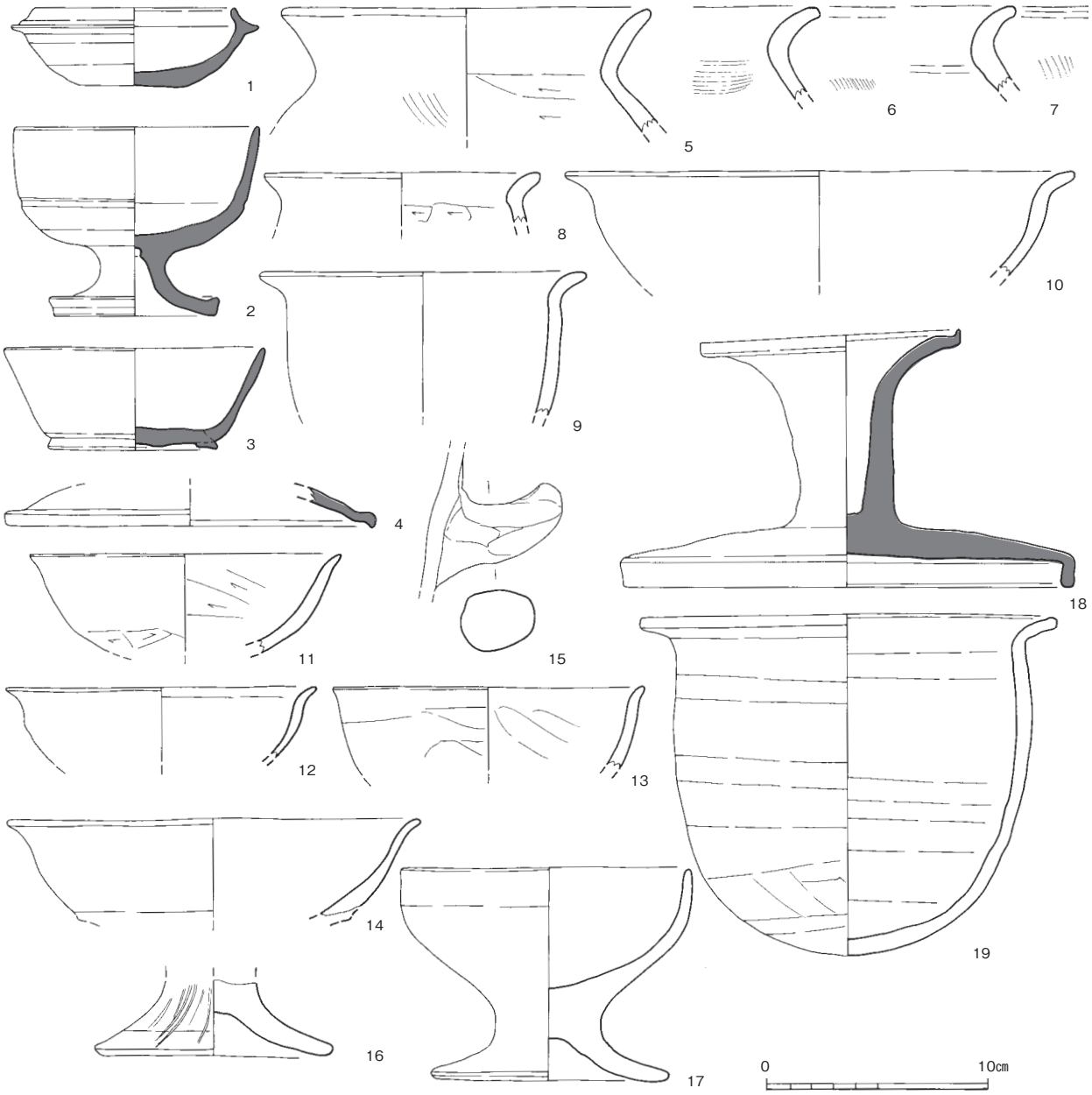


第57図　62·68号竪穴住居跡・カマド・土器埋納遺構実測図（1/60·1/30）

含みつつこれより南側の住居跡で、隅カマドを持つもの、もう一つはカマドより北側で、南側の住居跡に切られているもの）が、住居跡の床面が同じ高さで、硬化面も自然につながることから、ここでは１棟の住居跡として報告することとした。カマド袖には左右それぞれ３つずつの石材が使われており（うち、右袖の中位に用いられていた石材は、調査時に不注意により除去してしまった）、それらをつなぐようにして白黄色粘質土が配されていた。袖の長さは左右ともに 70 ～ 75㎝と同じ程度で、特に右袖の根本付近の住居壁をかなり前方に出すように作ることで、カマドの形状を整えている。燃焼部の横幅は内法で 50 ～ 55㎝程度である。奥壁から約 35㎝ほどの床面中央部に小穴を穿っており、おそらく支脚石を立てたものとみられる。埋土は住居跡の埋土にカマド袖構築粘土や焼土、炭化物を含み、カマドが住居跡の埋没とともに崩壊・埋没したことを物語る。最下層には灰層の堆積も認められた。

土器埋納遺構（第 57 図、図版 27）

住居跡竪穴部のほぼ中央、カマドの正面約 1m ほどの住居跡床面上（貼床上）に高盤を逆位にし



第 58 図　62 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

て置いてあり、これを取り上げたところ下層に小型の甕形土器の口縁部が見えたため、床面を多少下げて遺構検出を行ったところ、直径30cm弱の小ピットの中に甕形土器を正位で配置してある状況が確認できた。貼床上では掘り込みを確認できなかったが、状況から判断して住居跡の床面（貼床上）に小ピットを穿ち、甕を置いて高坏を蓋としてかぶせたものであろう。高坏を床面に置いたまま生活したとは考えがたく、住居跡の廃絶時にこれらを埋納したものであろう。高坏の坏（皿）部と甕の口縁部は接していて、甕内部は9割ほどが空洞であった。ただし内部には水分が堆積した痕跡が認められ、若干の泥以外に遺存物等は認められなかった。

出土土器（第58図、図版46）

須恵器（1～4･18）　1はカエリを持つ坏身。底部は平底で体部はやや強く湾曲する。口縁部は退化して低い。7世紀前半。2は脚付碗。碗部は深く、口縁部は直線的に斜めに伸びる。脚は強く外湾しながら開き端部正面をわずかに引き上げる。3は高台を持つ坏身。底部は平坦で、端部で明瞭に屈曲する。口縁部は斜めに直線的に広がる。高台断面形は低くやや外に踏ん張る。4は坏蓋で口縁端部が嘴状を呈する。以上の3点は7世紀末～前半の8世紀資料。18は高盤である。盤部は底面が平坦で、口縁部は短く直立する。脚部は「八」の字状に開き端部を下方に折り曲げる。19と組み合わさって土器埋納遺構より出土した。8世紀代の資料か。

土師器（5～17･19）　5～8は甕の口縁部片。いずれも肥厚しながら如意状に開く。9･10は鉢。9はやや深く、10は浅い。口縁部はごく短く外反する。11～13は椀。体部はやや浅く、口縁部が短く外反する。14は高坏の坏部片か。口縁部のみの資料。体部屈曲部外面に弱い段を形成する。口縁部は反転してわずかに外湾する。15は甑の把手片。やや長く伸び断面はわずかにつぶれる。16･17は脚付椀。16は脚部片、17は全形を復元できる。脚は強く開く。椀は半球状で口縁部を強く内湾させる。19は甕。丸底で胴部はバケツ状。口縁部は強く外に折り曲げる。内・外面に水平方向の凹凸をよく残す。粘土帯接合痕跡か。在地的な土器ではない。大宰府遺跡群などで出土する甕と関連があるものか。18と組み合わさり土器埋納遺構より出土した。

63号竪穴住居跡（第59図）

調査区のほぼ中央部で検出した。50号住居跡に東側の半分ほどを破壊される。また3号掘立柱建物跡とも切り合い関係を持ち、これより古い。主軸方向を北東－南西方向に持ち、規模は南北長のみ判明して4.26mほどをはかる。東西幅は少なくとも3.4mほどあり、北東コーナー部付近をかろうじてその形状から推定するとすれば、3.5mほどになろうか。床面からは多数のピットを検出したが、いずれも主柱穴とは評価しがたい。出土土器や切り合い関係から、古墳時代前期後半頃に比定できよう。

出土土器（第60図）

土師器（1～7）　1～5は甕である。1は胴上位～口縁部の資料。胴部は球胴で頸部は強く締まり明瞭に屈曲する。口縁部は外椀しながら開く端部上面をわずかに上に引き出す。2･4･5は口縁部片。2は頸部が強く湾曲し口縁部は短い。4･5は1と同様の器形。3は胴上位のみが残る。頸部は強く締まる。内面に粘土帯接合痕跡をよく残す。外面に鋭い工具による刻み線を4条付すが意図は不明。6は高坏の口縁部片。坏部中位外面に段を形成し、口縁部はわずかに内湾しつつ伸びる。端部は反転して短く外湾する。7は球胴の直口壷。以上は前期後半頃の資料。

64 号竪穴住居跡（第 59 図、図版 26）

調査区のほぼ中央部で検出した。62 号住居跡に東側を大きく破壊されている。一方、60･68 号住居跡を破壊していてこれより新しい。また間に 68 号住居跡を介しているが 68 号住居跡とも一部が重複する位置にある。主軸を北西－南東方向にとり、西壁のほぼ中央部に内接型の L 字状カマドを付設する。竪穴部の規模は東西長が 3.3m 以上、南北幅は 4.42m をはかる。床面には硬化面が形成されており、その硬化面と下層の貼床を除去した結果いくつかのピットを検出したが、本住居跡の主柱穴と考えられるピットを見つけることはできなかった。出土遺物と切り合い関係から、7 世紀中葉頃の住居跡であろう。

カマド（第 59 図、図版 28）

西壁のほぼ中央に内接型のカマドを検出した。残存状況はかなり悪く、左袖は全く検出できなかったほか、右袖も一部が破壊されていて残りは悪い。袖の長さは右袖が奥壁から 90cmほどをはかり、支脚穴（後述）の位置からこれがほぼ旧状をとどめるものと判断される。燃焼部は住居跡床面より 10cm弱下がっており、そのほぼ中央、奥壁から 55cmほどの位置で直径 10cmほどの小穴を検出した。支脚穴と考えられる。支脚穴が存在することから、燃焼部床面は調査で検出した一段下がった状態が機能状態であったと判断できる。右袖は奥壁に接さず、約 15cm離れた位置で直角に右に曲がり、そのまま住居跡の西壁に並行して伸びる。本来はそのまま伸びて北壁に接していたものと思われるが、調査では部分的に伸びる帯状の盛り上がりを調査できたに過ぎない。煙道を形成する壁であったと考えられる。カマドの埋土はカマド構築粘土である黄褐色粘質土や炭化物、焼土を多く含み、住居跡の埋没と同時にカマドが崩壊した状況を示す。最下層にはやや乱れた灰層も認められた。

出土土器（第 60 図）

須恵器（8 ～ 11）　8 は大甕の口縁部片。器壁はやや薄い。口縁端部は丸く収め直下に断面半円形の突帯を回す。9 は甕の口縁部片。頸部は強く締まり湾曲する。口縁部は短く外湾し、端部内面を上につまむ。10･11 はカエリを持つ坏蓋。径が小さい。11 はもとつまみを付したものか。

土師器（12 ～ 16）　12 は高坏の脚部。小型品。接地部で急激に屈曲して外に伸びる。13 ～ 16 は甕。いずれも頸部は緩やかに締まって外湾する。口縁部は肥厚させつつ如意状に外湾する。

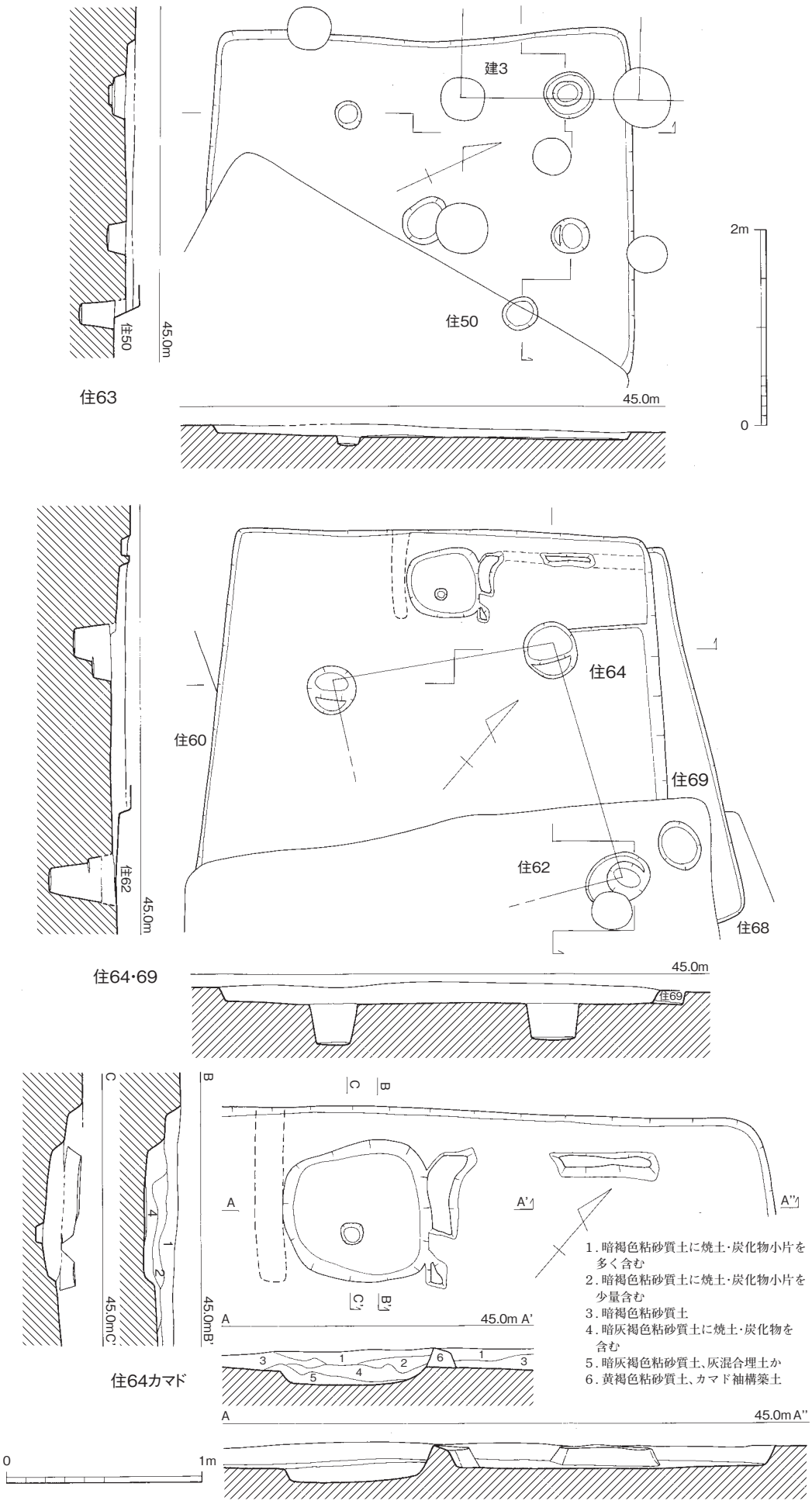
なお、他に埋土中から第 117 図 11 の棒状土錘が出土している。

62･64 号住居跡出土土器（第 60 図）

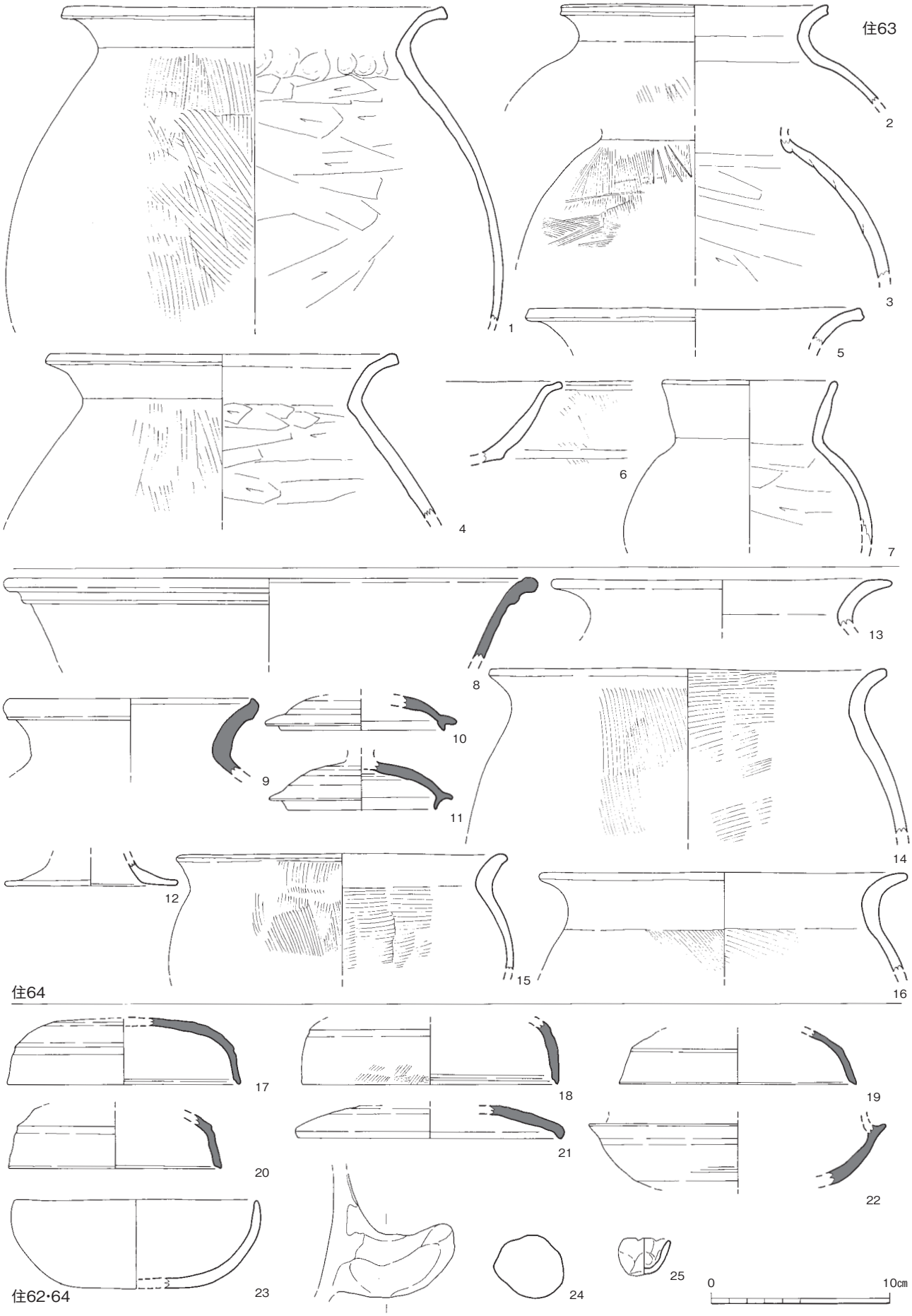
62･64 号住居跡の外形や切り合い関係は遺構検出面ではやや把握しづらく、何回か検出面を下げることで関係を把握した。この、検出面を下げる際に出土した土器をここで紹介しておく。

須恵器（17 ～ 22）　17 ～ 20 は肩部に段を持つ坏蓋。17 はおおよその全形が判明し、天井部は平坦出方部は緩やかに湾曲し、口縁部はわずかに開きつつ直線的に伸びる。口縁端部は斜めに仕上げる。18 ～ 20 は口縁部のみが残る資料。おおよその形状は 17 と共通する。これらは 6 世紀前半代に属し、混入品か。12 は端部嘴状の坏蓋。天井部から緩やかに下がる。径がやや小さい。8 世紀段階の資料。22 はカエリを有する坏身。6 世紀段階の資料か。

土師器（23 ～ 25）　23 は椀。底部は平坦で体部は緩やかに湾曲する。7 世紀段階の資料か。24 は甑の把手。25 はミニチュア土器で椀か。



第 59 図　63・64・69 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）



第 60 図　62 ～ 64 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

65 号竪穴住居跡（第 61 図、図版 28）

調査区西側の南端部で検出した。東に 56 号住居跡が隣接していてこれに東辺を大きく破壊される。南西コーナー部は 67 号住居跡に破壊される。北側で 71･72･79 号住居跡と切り合い関係を持ち、これらよりも後出する。主軸を北西－南東にもつ方形プランの竪穴住居跡で、規模は東西長が 5.26m、南北幅が 5.46m をはかる。西壁のほぼ中央部の壁際で、焼土や炭化物の小片、黄褐色の粘質土などが集中して散布しており、カマドの存在を疑ったが、著しく削平されていて明確な痕跡を把握することはできなかった。床面からはいくつかのピットを検出したが、そのうち 3 本が規則的に配列し、深さもしっかりしていることから主柱穴と判断した。南東の主柱穴は数度にわたって探したがはっきりしない。出土土器より 6 世紀中葉頃に比定できよう。

出土土器（第 62 図、図版 47）

須恵器（1 ～ 3）　1 は肩部に段を持つ坏蓋。肩部で屈曲し、口縁部は開きつつ直線的に伸びる。口縁端部は段を形成する。2･3 はカエリを持つ坏身。底部は平坦で、体部は強く湾曲し、カエリは斜めに突出する。口縁部は外湾しつつ内傾する。

土師器（4 ～ 15）　4 は脚付椀の脚部片。強く外湾しつつ広がる。5･6 は須恵器模倣坏身。5 は口縁部、6 は大略全形が判明する。カエリ部の突出は弱く段状になる。口縁部はごくわずかに外湾しつつ内傾する。7 ～ 12 は椀または皿。7 は口径が大きい。口縁端部はわずかに外反する。8 は皿か。立ち上がりの湾曲が緩い。9 は平底で、口縁部が強く内湾する。10 ～ 12 は半球形の器形。10 は口縁端部が反転する。11･12 は底部から口縁部まで緩やかに湾曲しながら伸びる。13 ～ 15 は甕。13 は頸部の締まりがごく緩いもの。14 は頸部が強く湾曲するもの。15 は頸部が屈曲して内面に稜を形成するもの。いずれもやや長胴気味で口縁部は緩やかに外湾し、13･15 は中位を肥厚させる。

66 号竪穴住居跡（第 61 図、図版 28）

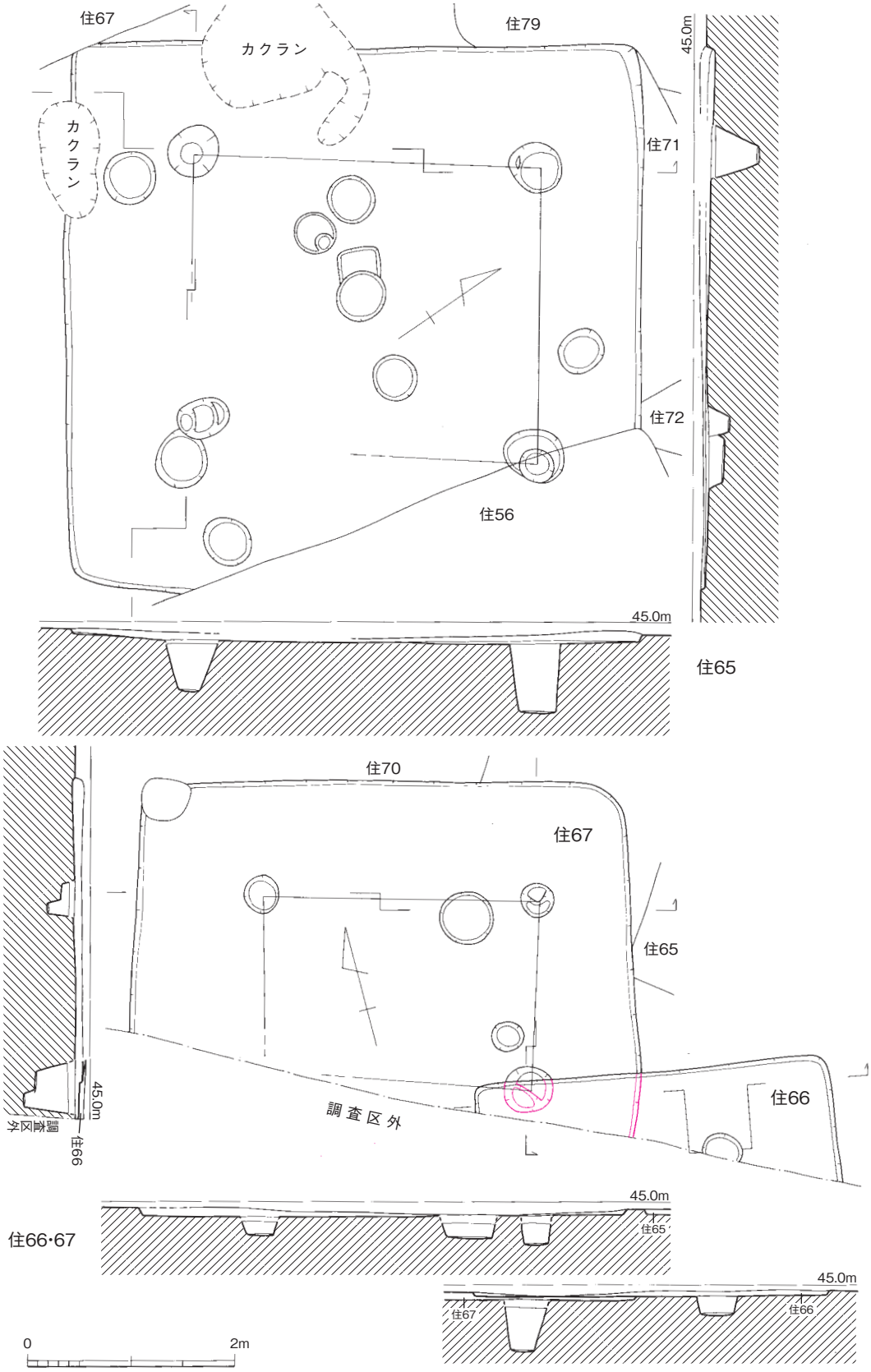
調査区西側の南端部で検出した。67 号住居跡と切り合い関係にありこれを破壊する。住居跡の大半が南側の調査区外にあり、調査区内では北壁と北東コーナー部を把握できたのみである。規模は東西幅のみ判明し 3.38m をはかる。床面からはピットを検出したが主柱穴ではなかろう。残存深さはきわめて浅く残りは悪い。出土土器は土師器片がごくわずか出土するのみで図示できる資料はない。切り合い関係から、6 世紀前葉以降の住居跡である。

67 号竪穴住居跡（第 61 図、図版 28）

調査区南西端部に位置する。66 号住居跡に南東部を破壊され、70 号住居跡を大きく破壊する。65 号住居跡と切り合い、本住居跡が後出するものとして調査したが、切り合い部はごく一部であり自信はない。南側の一部が調査区外に広がっている。主軸方位は北北東－南南西で規模は東西幅が 4.80m をはかる。南北長は主柱穴の可能性のあるピットの位置から推測するとおおよそ 4.2m ほどとなり、これが正しければやや東西に幅広い長方形プランの住居跡となろう。床面からはいくつかピットを検出しており、うち 3 基を主柱穴となり得るものとして図示したが、やや深さの浅いものもあり疑問は残る。出土土器はごくわずかで図示できるものはないが、埋土中から第 129 図 8 の鉄鏃が出土した。切り合い関係から、6 世紀前葉以降に位置づけられる。

68 号竪穴住居跡（第 57 図）

調査区のほぼ中央部で検出した。南側の大半を 62 号住居跡に破壊されるほか、48･49･69 号住居跡にも切られておりこれらより古い。さらに 64 号住居跡とも一部が重複する位置関係にあるが、69 号住居跡を介していて直接的な切り合い関係は把握できていない。主軸を略北西－南東にとる



第 61 図　65 ～ 67 号竪穴住居跡実測図（1/60）

（長）方形プランの竪穴住居跡で、東西幅のみ判明し 4.26m をはかる。東壁沿いに幅 90㎝、高さ 5 ㎝ほどの削り出しベッド状遺構を付設する。主柱穴は把握できなかった。出土土器はごくわずかで、椀の口縁部片を 1 点図示するが、これでは時期は判断できない。ベッド状遺構を持つ住居構造から古墳時代前期に位置づけたい。

出土土器（第 62 図）

土師器（16） 16 は椀の口縁部片。ごく小片で径は復元できない。口縁部をわずかに肥厚させながら内湾させる。器壁はミガキにより調整する。

69 号竪穴住居跡（第 59 図）

調査区のほぼ中央部で検出した。62･64 号住居跡に南側を大きく破壊されており、北壁と東西壁のごく一部を残すに過ぎない。68 号住居跡を破壊しておりこれより新しい。主軸は 62 号住居跡と大略同じで北西－南東方向にとり、規模は東西幅のみ明らかで 3.76m をはかる。残存深さは浅く 10㎝前後である。62･64 号住居跡の下層より本住居跡の主柱の可能性のあるピットを 3 基検出している。いずれも深さがあり掘方もしっかりしている。このピットの位置から南北長を推定すると、おおよそ 4.9m ほどとなる。これが正しければ平面プランは南北に長い長方形で 4 本主柱の住居跡となろう。出土土器はごくわずかだが須恵器の坏蓋を 1 点図示する。6 世紀代の資料で、本住居跡をこの時期に比定しても切り合い関係上齟齬はないが、やや根拠としては弱いか。

出土土器（第 62 図）

須恵器（17） 17 は坏蓋である。小片で、天井部は欠失する。肩部は緩やかに湾曲し、口縁部まで伸びる。口径が小さい。

70 号竪穴住居跡（第 63 図、図版 28）

調査区の南西端部で検出した。67 号住居跡に南東部を大きく破壊されるほか、北西コーナー部を 73 号住居跡に切られる。南側は調査区外に広がっていて南壁は検出できていない。主軸方位は大略北西－南東で、北壁中央部に内接型の L 字状カマドを持つ。規模は判明する東西幅が 3.76m をはかる。南北長は検出部分で 4.0m でありこれ以上の規模になろう。住居跡は著しく削平されていて残存状況は悪く、壁の高さは残っているところでも 5㎝程度である。床面には広く硬化面が形成され、その下層には 5㎝程度の貼床が施されていた。硬化面上でも貼床除去後でも、床面からピットは検出されず、主柱穴配置は不明である。出土土器はごくわずかで、6 世紀代とみられる土師器の椀を 1 点図示するが、時期比定の根拠としては弱い。カマドを持つ住居構造や切り合い関係などから、一応 6 世紀代としておきたい。

カマド（第 63 図）

北壁の中央部に内接型のカマドを検出した。住居跡が著しく削平されているためカマドの残りはきわめて悪い。左袖は付け根部分が失われ、右袖付け根から東に伸びる煙道部分も撹乱等により破壊されて残りは悪い。左袖の遺存状況から、カマドの袖は少なくとも奥壁から 80㎝以上伸びており、袖間の幅は 60㎝程度をはかることがわかる。床面には明瞭な被熱赤変面は形成されておらず、支脚痕跡も認められない。遺存深さがきわめて浅く埋土の記録はないが、床面直上にごく薄く灰層が遺存していた。煙道は北壁沿いに東に伸びておそらく東壁に接していたものとみられるが削平によ

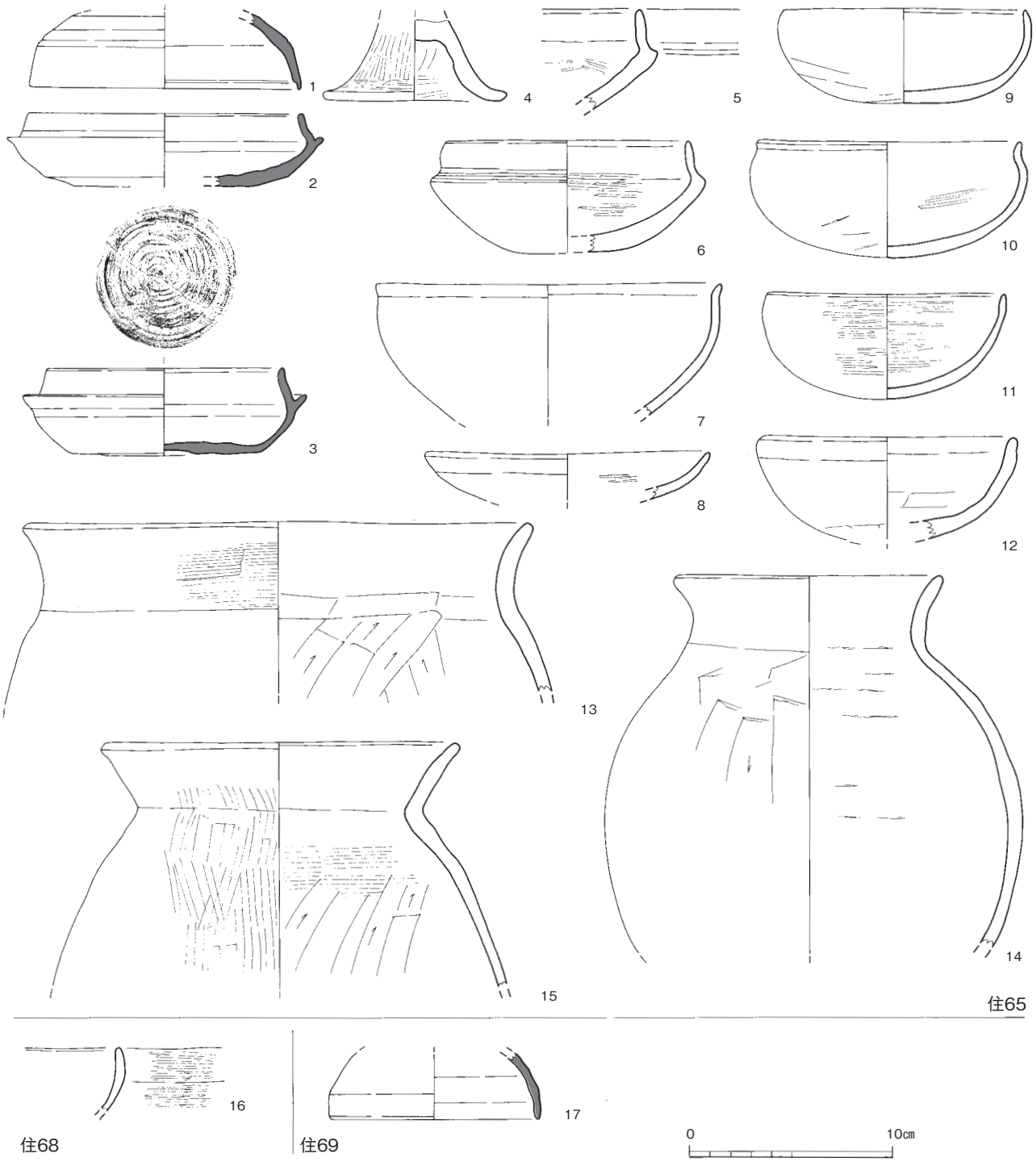
り失われて判然としない。

出土土器（第 67 図）

土師器（1）　1 は椀である。ほぼ全形がわかる資料で、底部はやや平底気味、口縁端部は強く内湾する。器壁を丁寧なミガキで仕上げる。

71 号竪穴住居跡（第 63 図、図版 28）

調査区南西側で検出した。65･79 号住居跡に切られ、72 号住居跡を切る。ごく一部しか残っておらず全形は不明である。北東コーナー部のみが遺存しており、規模や平面形態は不明である。遺存



第 62 図　65･68･69 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

深さは浅く残りは悪い。出土遺物も乏しく図示できるものはない。切り合い関係から、6 世紀中葉以前に位置づけられよう。

72 号竪穴住居跡（第 63 図）

調査区南西側で検出した。56･65･71･78 号住居跡により破壊されていてほとんど原形をとどめない。主軸方位は北西－南東で、南北幅のみ判明し 2.82m とかなり小型の住居跡とみられる。遺存状況は悪く、最大深さは 5㎝前後である。床面は中央部がくぼみ硬化面が部分的に形成されていた。主柱穴に相当するピットは認められなかった。出土土器はほとんどなく、時期は不明。切り合い関係から 6 世紀中葉以前と考えられる。

73 号竪穴住居跡（第 63 図、図版 28）

調査区の南西端部で検出した。70･75 号住居跡を破壊しておりこれらより新しい。主軸方位を北北西－南南東にとる小型の隅丸方形の竪穴住居跡で、北西コーナー部付近に焼土や炭化物が集中しており、ここに隅カマドが存在した可能性が高いが、削平により痕跡はほぼ失われてしまっていた。基本的に削平が著しく残存状況はきわめて悪く、東辺は硬化面を点的に把握して復元している。このため規模は推定で、南北長が 2.46m、東西幅は 3.00m をはかる。床面からはピットを 1 基検出したが主柱穴は不明である。出土土器は乏しく図示できるものはないが、須恵器の小片が含まれる。切り合い関係などから 7 世紀代以降に位置づけておく。

74 号竪穴住居跡（第 64 図、図版 28）

調査区の南西部で検出した。75･79･80 号住居跡を破壊して作られた小型の方形住居跡で、主軸方位は北西－南東方向にとる。規模は南北が 2.82m、東西が 3.62m をはかる。残存状況は悪く壁の深さは 10㎝内外である。床面には硬化面が形成されており、その下層には 10㎝弱の厚さを持つ貼床が施されていた。これをはがした状態で数基のピットを検出したが､その配置には規格性がなく、どれも主柱穴とは評価しづらい。出土土器や切り合い関係、住居構造などを総合的に判断し、7 世紀前葉頃に位置づけておきたい。

出土土器（第 67 図）

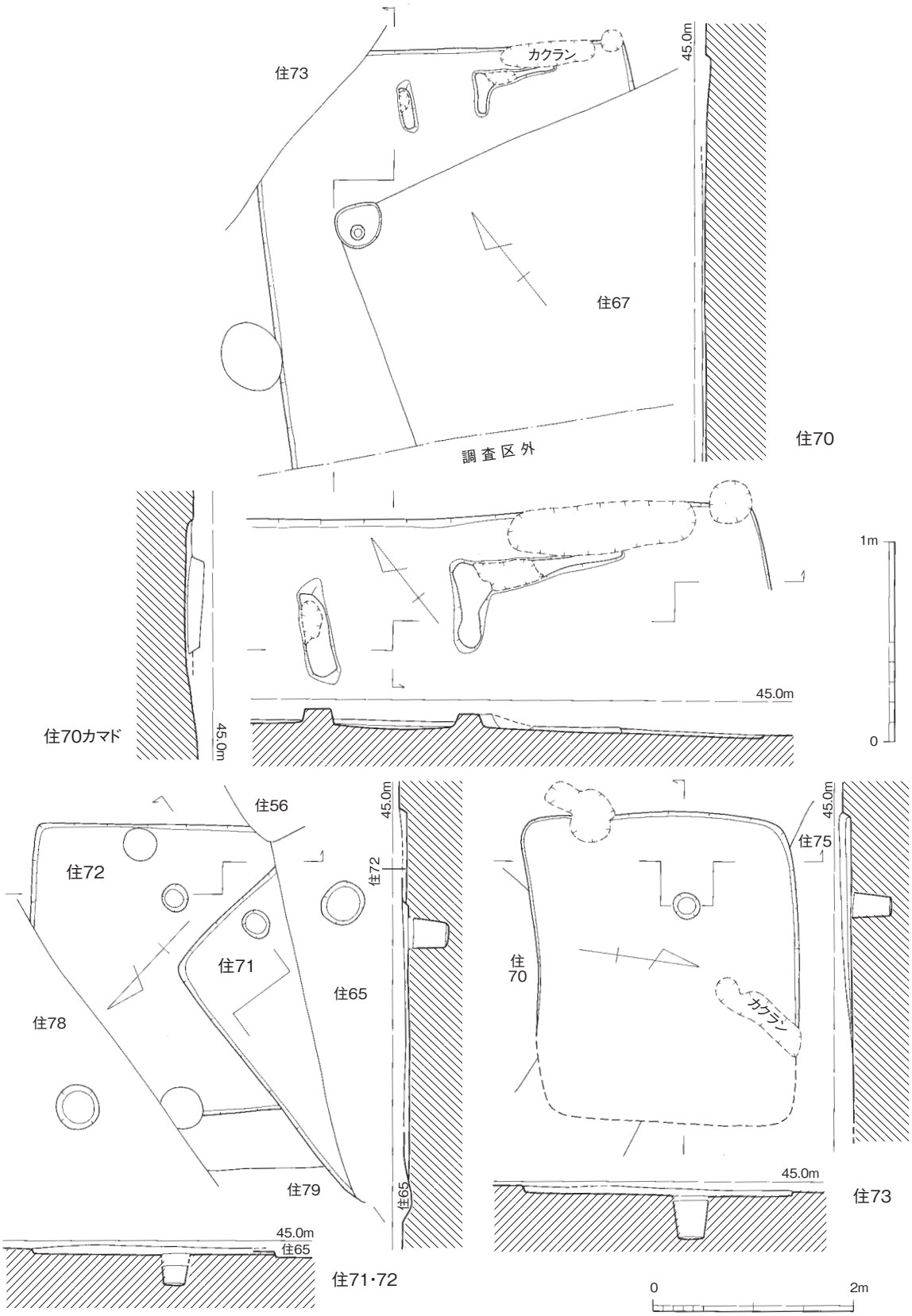
土師器(2 ～ 4)　2 は須恵器模倣坏身。底部は緩やかに湾曲する。カエリ部外面は突出せず段となる。3 は脚付椀の脚部。外湾しながら強く開く。4 は小型の甕あるいは鉢の胴上位～口縁部片。胴部はやや扁平な球胴、頸部はやや強く締まり口縁部は短く外湾する。

なお、他に埋土中から第 121 図 21 の安山岩製スクレイパー、第 129 図 31 の鉄刀子が出土した。

75 号竪穴住居跡（第 65 図、図版 28）

調査区の南西端部で検出した。73･74 号住居跡に破壊され、79･80･97 号住居跡を破壊する。主軸方位を西北西－東南東にとる方形プランの大型住居跡で、西壁の中央部に内接型の L 字状カマドを付設する。竪穴部の規模は、東西長が 6.94m、南北幅は 6.86m をはかる。床面にはカマド前を中心に広く硬化面が広がっており、その下層には地山の礫層とそれを平坦にするための貼床が見られた。貼床を除去してピットを検出した結果、数多くの小ピットを調査したが、いずれも深さや位置

などから主柱穴と評価するのは難しいものばかりであった。出土土器や切り合い関係などから、6世紀後葉に比定できる。



第 63 図　70 ～ 73 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）

カマド（第 65 図、図版 29）

西壁の中央部に内接型のカマドを設ける。左袖は住居跡西壁に直角につき、やや内湾しながら伸びる。右袖も左袖とほぼ対称形に伸びるが、住居跡西壁から約 20cmほど離れた位置で直角に右に折れ、そのまま西壁と並行して伸びて煙道の東壁を形成する。煙道東壁は住居跡北壁付近まで伸びるが北壁に接合しておらず、付近の詳細な構造は不明である。両袖ともに先端部には立石を配しており、その上に架けたであろう横長の石材がカマド前面に転がっていた。カマド燃焼部の幅は最も広い部分で 65cmをはかり、中央やや東寄りに不整円形の被熱赤変面を形成する。支脚痕跡は認められず、土器などの置き支脚を使用したものとみられる。カマド埋土は住居跡の埋土にカマド袖構築粘土である黄褐色粘質土ブロックや焼土などが混ざったもので、住居跡の埋没と同時に崩壊・埋没したことがわかる。中央部には円柱状に暗褐色粘砂質土が堆積しており、最下層には灰層が厚く堆積していた。中央部の円柱状の堆積物は下層の灰層を押しのけるように堆積していることから、おそらく床面直上にあって灰層に埋もれていた支脚などを埋没の途中で抜き取ったあとに住居跡の埋土が流入したものとみたい。

出土土器（第 67 図、図版 47）

須恵器（5 ～ 7） 5 はカエリを有する坏身。底部はやや平底気味で、体部は緩やかに湾曲する。カエリ部で強く屈曲して、口縁部は短く外反しながら伸びる。6 は平底の坏の底部片か。7 は高坏の脚部片。強く開き端部がやや肥厚する。坏部が半球状を呈するものか。

土師器（8 ～ 14） 8･9 は甕。いずれも口縁部が肥厚しながら如意状に開くもの。10 は甑の把手。断面が扁平。11 は小型の椀として図示したが、須恵器模倣坏蓋の可能性もある。口縁部付近でやや屈曲する。12 ～ 14 は手づくねのミニチュア土器で、椀あるいは甕を模倣したもの。

なお、他に埋土中から第 129 図 10 の鉄鏃、同 30 の鉄刀子が出土した。

76 号竪穴住居跡（第 64 図、図版 29）

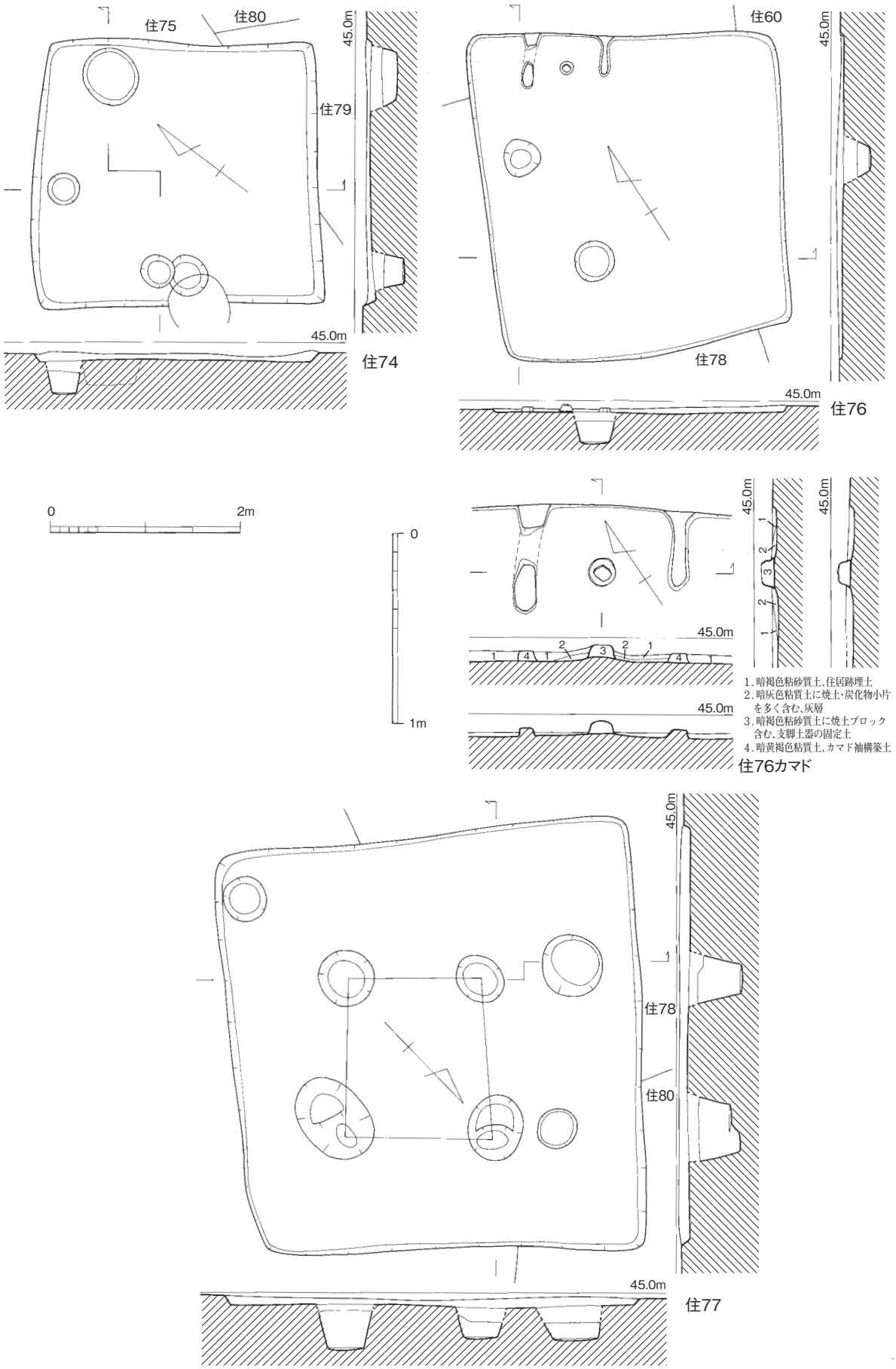
調査区の南西寄りで検出した。60･78 号住居跡と切り合い関係にありこれを切る。主軸を北東－南西にとる小型の住居跡で、北壁の西寄りに内接型のカマドを付設する。残存深さは 10cmほどで、床面は平坦でいくつかのピットを検出したが、主柱穴と評価できるものはない。カマドの位置がコーナー側に寄る住居構造からはやや新しい（7 世紀代以降の）住居跡である可能性を感じさせるが、出土遺物からは 6 世紀中葉に位置づけられる。切り合い関係上は齟齬はない。

カマド（第 64 図、図版 30）

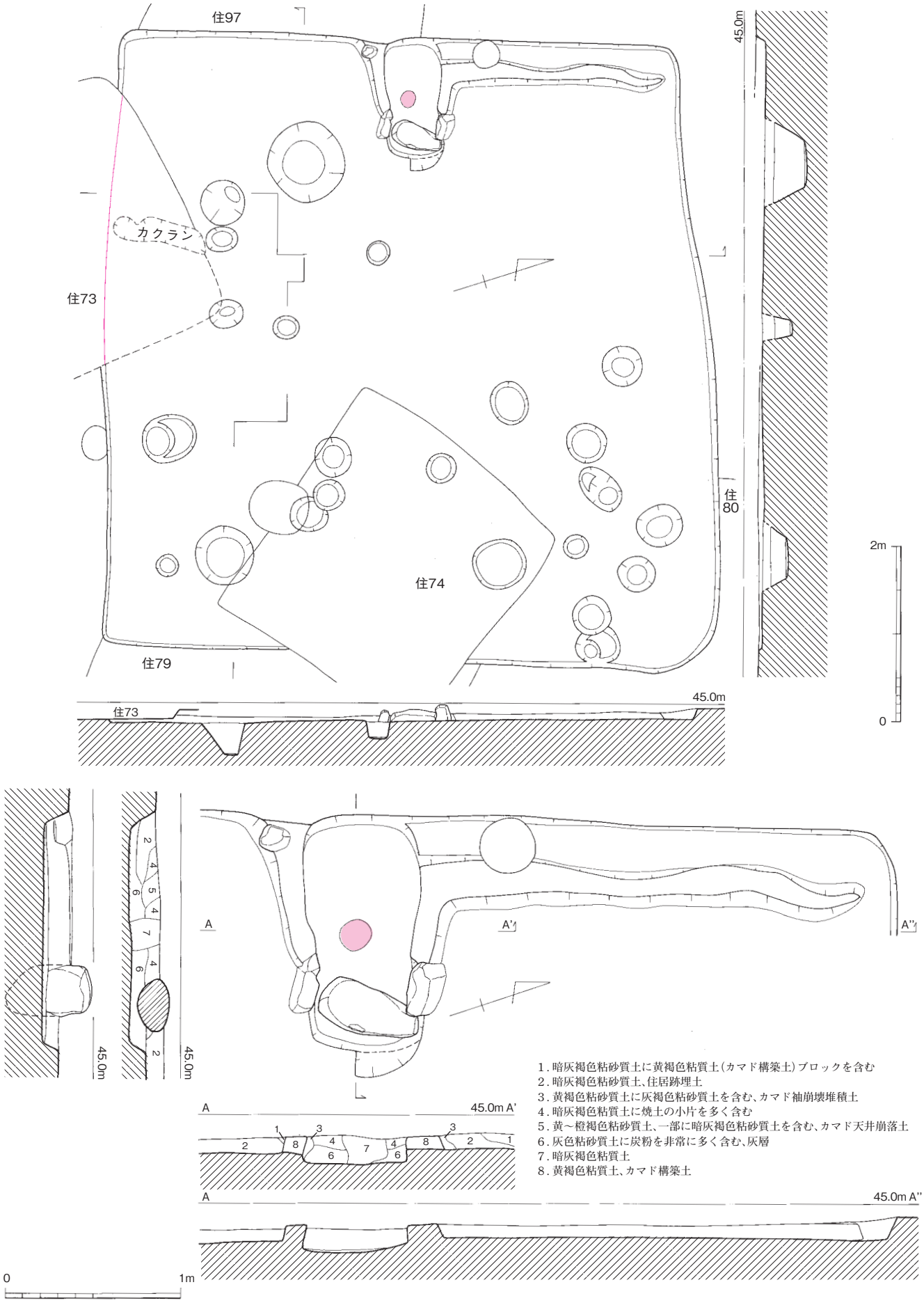
北壁の西寄りに内接型のカマドを付設する。袖は北壁と直交方向に直線的に伸びていて約 55cmが確認され、後述する支脚の位置からこの長さがほぼ旧状をとどめていると判断される。燃焼部の幅は 70cm程度で、やや幅広い。燃焼部の中央、奥壁から 30cmほどの位置に高坏が逆位で置かれていた。脚部は削平により失われており坏部のみが出土したが、これが支脚と考えられる。残存深さが浅いため埋没過程については明らかにしがたいが、最下層には灰層が残されていた。

出土土器（第 67 図、図版 47）

須恵器（15 ～ 17） 15 は坏蓋である。天井部は丸く、肩部で強く屈曲する。肩部外面の段は退化している。口縁部はわずかに外半しながら斜めに開き、端部を斜めに仕上げる。17 はカエリを持つ坏身。底部は遺存しないが丸底か。緩やかにカエリ部まで湾曲する。カエリ部外面は外に強く突



第 64 図　74･76･77 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）



第 65 図　75 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）

きだし、口縁部は直線的に内側に倒れながら伸びる。

土師器（18 ～ 21）　18 ～ 20 は椀である。18 は半球形の体部を持ち、口縁部は短く外反する。器壁調整は外面が板ナデ、内面はヘラミガキ。19 は口縁部が残る。体部は緩やかに湾曲し、口縁部はやや強く内湾する。内面を丁寧なヘラミガキで仕上げる。20 はやや浅い椀。底部は平底気味。緩やかに湾曲して立ち上がり、口縁部はわずかに外湾させる。21 は甕の頸～口縁部片。頸部は強く締まり、口縁部はやや長めに外湾しつつ伸びる。なお、転用支脚の可能性が高いとしたカマド中出土の高坏は整理時に所在不明となり報告できない。

77 号竪穴住居跡（第 64 図）

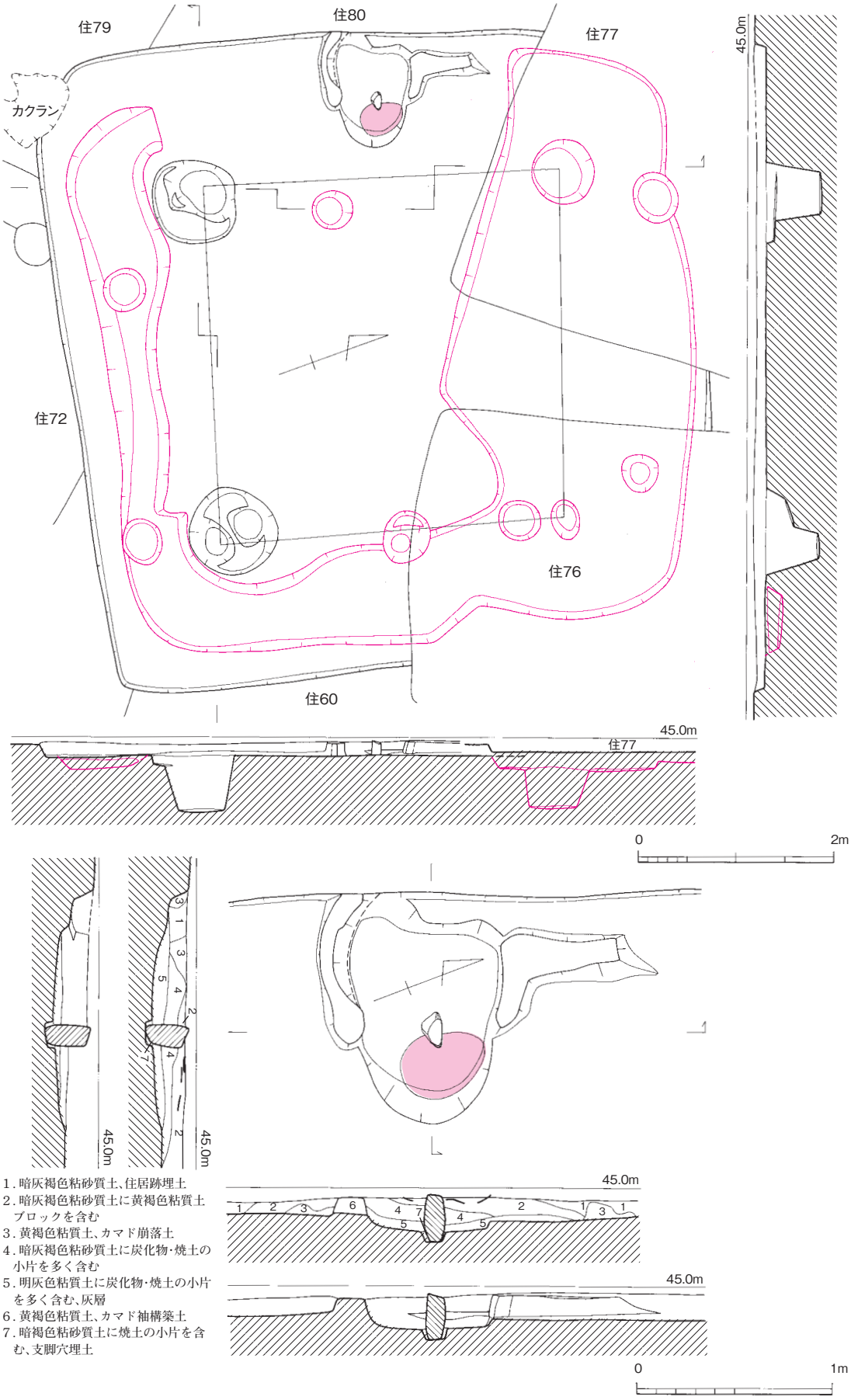
調査区の南西寄りで検出した。76 号住居跡の西に並んでおり、78･80 号住居跡を破壊していてこれより新しいことがわかる。主軸を略北西－南東にとり、平面形状は方形で、西壁のほぼ中央部に焼土や炭化物の集中地点がありカマドが付設されていたと推測されるが遺構としては確認できなかった。規模は東西長が 4.14m、南北幅が 4.22m をはかる。住居跡は大きく削平されており残存深さは 10㎝内外である。床面には硬化面が形成されており、硬化面の間から基盤層に含まれる玉砂利が顔をのぞかせる状況であった。床面には地山の砂礫層の隙間に貼床が施されていて床面上における柱穴検出は難航し、貼床と地山を合わせて 10㎝以上下げてようやく主柱穴 4 本を確認した。出土遺物は少なく､図示できる土器はないが､埋土中から第 130 図 51 の鉄滓（椀形滓）が出土した。切り合い関係から、7 世紀前葉以降であろう。

78 号竪穴住居跡（第 66 図、図版 30）

調査区の南西寄りで検出した。76･77 号住居跡に切られ、60･72･79･80 号住居跡を切る。平面形態は略方形で主軸を西北西－東南東にとり、西壁の中央部に L 字状カマドを付設する。特に北壁側を大きく破壊されていて北西・北東コーナー部が確認できなかったが､規模はかろうじて判明し、東西長が 6.46m、南北幅は 6.38m をはかる。床面には広く硬化面が形成されており、南東・南西の主柱穴は抜き跡として検出したのち壁面の色を見つつ上端を広げていった結果図示したような形となった。北西・北東の主柱穴は貼床をはがして検出した床下掘り込みの床面で検出した形となったため、上部が失われたものとみられ、柱穴の径がかなり小型化している。西壁を除く各壁沿いに 5 ～ 10㎝ほどの深さを持つ床下掘り込みが認められた。出土土器から 6 世紀前葉頃に位置づけたい。

カマド（第 66 図、図版 30）

西壁の中央部に内接型のカマドを検出した。左袖は西壁に直角に付き、内湾しながら 70㎝ほど伸びる。右袖も左袖と対称形を描いて伸びるが、西壁に接する前に直角に右に曲がって西壁と並行に 70㎝ほど伸びて煙道を形成する。そこから先は削平や撹乱などにより失われていて不明である。カマド燃焼部の平面形状は楕円形状を呈し、一段掘り下がっていて、その中央部、奥壁から 50㎝ほどの位置に小穴を穿ち立石を配して支脚としている。支脚の前面には不定形に被熱赤変面が形成されている。カマドの埋土は住居跡の埋土にカマド構築粘土である黄褐色粘質土や焼土、炭化物を含み、住居跡の埋没と同時に崩壊、埋没したことが読み取れる。最下層にはやや厚めに灰層が堆積していた。



第 66 図　78 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）

出土土器（第 67 図）

須恵器（22） 22 はカエリを持つ坏身である。底部からカエリ部までは緩やかに湾曲しながら伸びる。カエリ部で強く屈曲し、口縁部は外湾しながら内傾し短い。

土師器（23 ～ 26） 23 は甑の口縁部片。胴部から口縁部にかけて緩やかに外湾しながら広がる。外面に指頭圧痕が水平に並び、粘土帯接合痕跡か。24 は小形の甕。球胴で頸部の締まりは弱く、口縁部はわずかに肥厚しながら如意状に外湾する。25･26 は椀。25 は口縁端部がやや強く内湾するもの、26 は逆に外反するもの。

なお、他に埋土中から第 119 図 96、第 120 図 100 の管状土錘 2 点が出土している。

79 号竪穴住居跡（第 68 図、図版 30）

調査区の南西寄りで検出した。80 号住居跡を破壊しており、これより新しい。一方、65･71･74･75･78 号住居跡に破壊されておりこれより古い。主軸は北東－南西にとり、西壁は完全に失われているが、南北長はかろうじて判明し、3.74m をはかる。東西幅は 3.4m 以上が残っていることは明らかであるが規模は不明である。床面には硬化面の形成が認められ、貼床を除去した下からいくつかのピットを検出したが、主柱穴と評価できるものはない。出土土器と切り合い関係から、6 世紀前葉頃に位置づけておきたい。

出土土器（第 67 図）

土師器（27 ～ 30） 27 は椀の口縁部片。口径が狭く器高が高いものか。28 は小形の甕の口縁部片。頸部の締まりはやや弱く、口縁部は肥厚しながら短く如意状に外湾する。内・外面を丁寧なヘラミガキで仕上げる。29 はミニチュア土器で椀。30 は甑の胴部片。やや膨らむ。把手は横に長く伸びる。

80 号竪穴住居跡（第 68 図、図版 30）

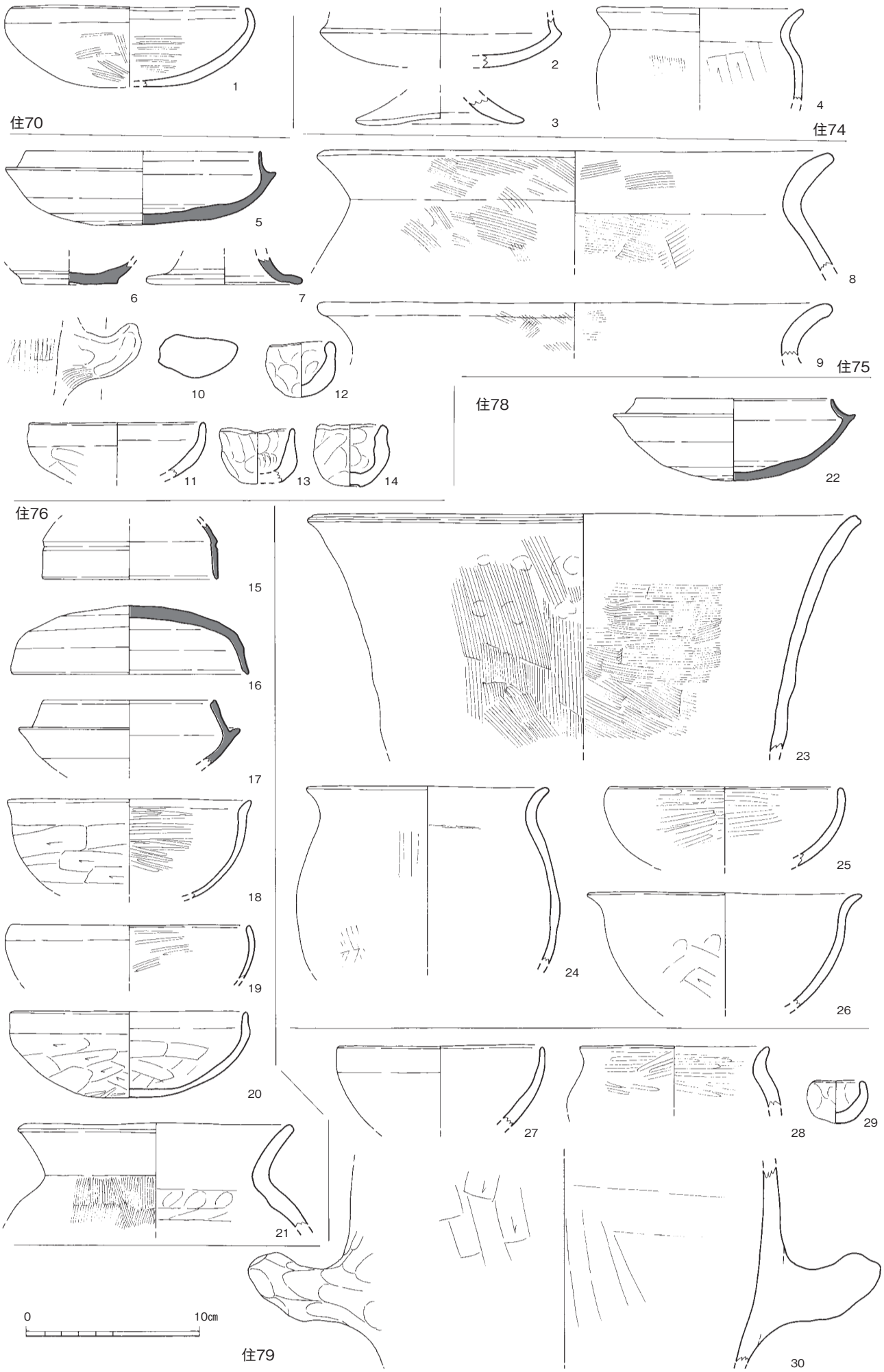
調査区の南西寄りで検出した。75･77 ～ 79 号住居跡に切られており、これらに先行する。主軸を略北西－南東にとり、西壁の中央部に焼土や炭化物が集積する範囲があって、カマドが存在したと考えられるが、明確な遺構としては把握できなかった。隣接する竪穴住居跡も含めて床面からいくつかのピットが検出され、そのうち 3 基を主柱穴として図示した。地山が堅固な砂礫層でピットの掘方はしっかりしており、深さもある。竪穴部の規模は、南壁を 79 号住居跡に、東壁を 78 号住居跡に完全に破壊されていて判然としないが、主柱穴の位置からおおよその規模を復元すれば東西長が 5.0m、南北幅が 5.2m ほどになろう。出土土器や切り合い関係から、6 世紀前葉に位置づけたい。

出土土器（第 70 図）

土師器（1 ～ 6） 1 は甑か。胴部上半から口縁部まで、わずかに内湾しながら立ち上がる。2 は甑の把手片である。断面形状は扁平。3 ～ 6 は椀である。3･5 は口縁部が強く内湾するもの。5 は口径が大きいが、小片のためやや自信がない。4 は口径が反転して外反するもの。6 は浅めの半球形の器形である。

81 号竪穴住居跡（第 68 図）

調査区の北東寄りで検出した。39 号住居跡と切り合いを持ち、これを大きく破壊する。主軸を北東－南西方向に持つ方形プランの小型住居跡で、北壁の西寄りに内接型のカマドを付設する。付



第 67 図　70･74 ～ 76･78･79 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

近は下層にSX－02谷状落ち込みが広がる場所で、埋土との区別がつきにくく、本住居跡もやや深く掘りすぎてしまったが、本来の残存深さは数cm程度ときわめて浅いと見られる。出土した土器群には古墳時代前期・後期・8世紀代のものが含まれるが、古墳時代の遺物は下層のSX－02谷状落ち込み遺構の埋土中から混入したものと思われ、住居跡の構造などからみても本住居跡の所属時期は8世紀代であろう。

カマド（第68図、図版31）

住居跡北辺の西側コーナー付近に内接型のカマドを検出した。コーナーに近い側の左袖はコーナー部から約25cm離れた位置から南に40cmほど伸びる。燃焼部幅約40cmを介して、右袖も北辺から南に約50cm伸びる。袖内には1～2個の立石を埋めて補強とする。北壁から40cmほど南の燃焼部中央に被熱硬化面が形成される。支脚・支脚穴とも検出されなかった。埋土は最下層に灰層が形成され、その直上にカマド袖構築粘土がほとんど混ざらない住居跡埋土が堆積しており、カマドは崩壊することなく住居埋土中に埋没したとみられる。

出土土器（第70図、図版48）

須恵器（7）　7は盤か。底部は平坦で広い。やや外に張る高台を付す。

土師器（8～22）　8～11は甕。8･11はバケツ状でわずかに膨らみを持つ胴部と、ほとんど締まらない頸部を持ち、口縁部は如意状に外反する。9は小片で、「く」の字に屈曲する口縁部を持つ。10はおそらく8と同様の器形を持つ甕の口縁部片。12は高坏。坏部は深く、体部で明瞭に屈曲して外面に段を作る。口縁部はまっすぐ伸び端部をわずかに外反させる。脚は緩やかに直線的に開き、接地部付近で明瞭に屈曲して開く。13は直口壷の口縁部片。14～18は椀。14･15は半球形の胴部を持つもの。16はやや深く口縁部が短く外反する。短頸壷としてもよいか。17は半球形の器形で口縁部がわずかに外湾する。18は口縁部のみの資料だが、直立気味に開く特徴的な器形。19は高台を付さない坏。平底で口縁は直線的に開き、器高が低い。20～22は手づくねのミニチュア土器。20は椀、21･22は甕か。

なお、他に埋土中から第122図30の台石が出土した。

82号竪穴住居跡（第69図、図版31）

調査区中央西寄りで検出した。中央部を撹乱により大きく破壊されている。98号住居跡と重複していて、本住居跡が新しい。主軸を北東－南西にとる方形プランの住居跡で、規模は南北が3.60m、東西が3.78mをはかる。残存深さは10cm程度で、床面には部分的に硬化面が認められたが、中央部を大きく破壊されているために主柱穴等は把握できなかった。出土土器より、7世紀前葉頃に比定される。

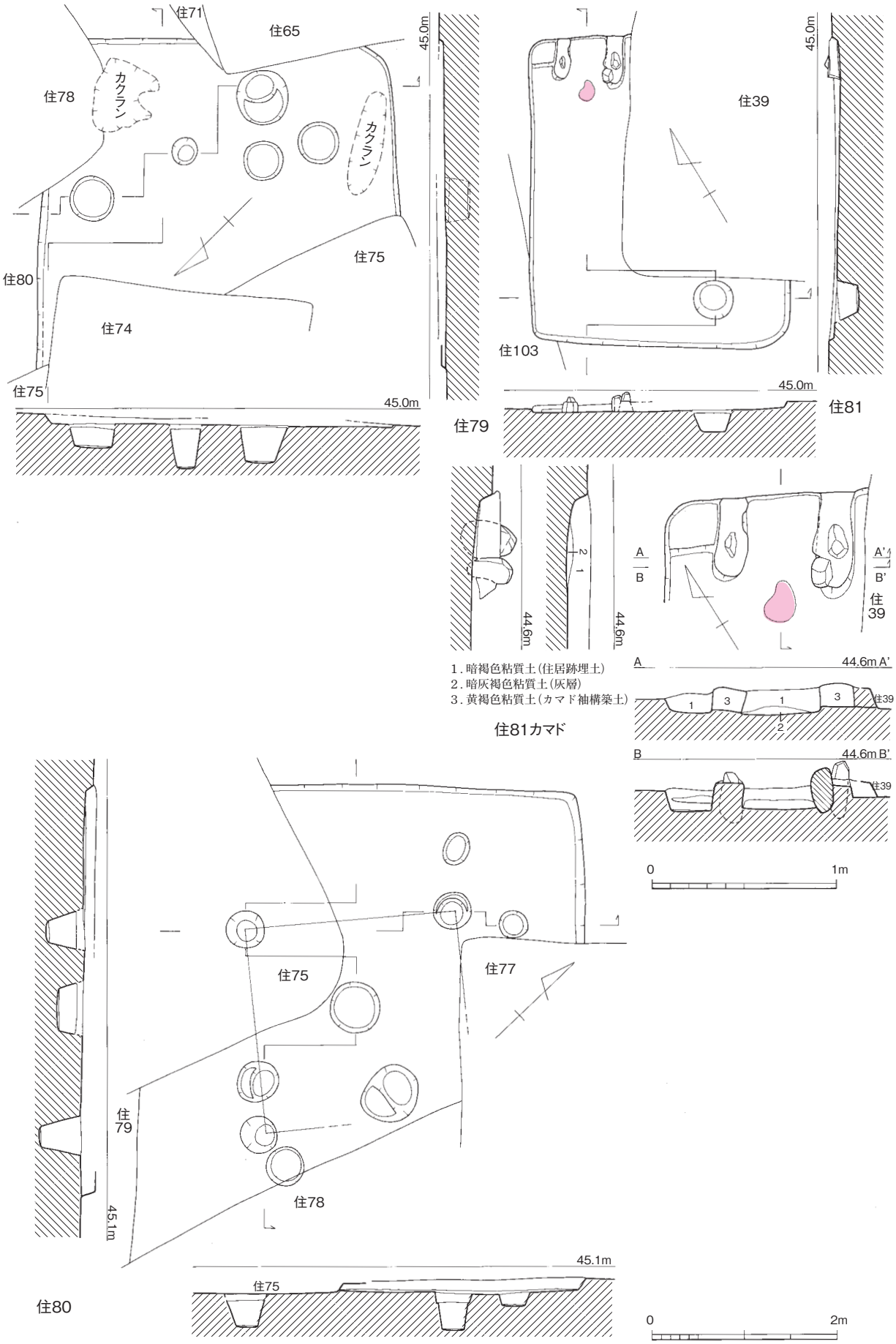
出土土器（第70図）

須恵器（23）　23はカエリを持つ坏身。口径が小さく、カエリ部は退化していて口縁部が短い。

土師器（24･25）24は小型の壷の口縁部片。頸部は明瞭に屈曲し、口縁部は短く開く。25は甑の口縁部片。やや内湾しながらまっすぐ立ち上がる。内面にケズリ痕跡が残る。

83号竪穴住居跡（第69図、図版31）

調査区の北西寄りに位置する。84･85号住居跡と切り合い関係にあり、これらより後出する。主



第 68 図　79 ～ 81 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）

軸を東北東－西南西に持ち、大略正方形を呈する小型の住居跡である。東辺の中央部に焼土や炭化物の集積を確認したが、カマドとしては認識できなかった。ここにカマドがついていた可能性もあるが、東側にカマドがつく住居跡は本調査区内ではきわめて少なく、やや疑問も残るところである。規模は東西が 2.54m、南北が 2.48m をはかる。住居跡はかなり深く削平されていて残存深さは 5cm 程度であった。床面には部分的に硬化面が形成されており、硬化面とその下の貼床を 5cmほど掘り下げたレベルでいくつかのピットを検出したが、規則的に配列されず主柱穴とは評価できない。出土土器と切り合い関係から、5 世紀前葉以降に位置づけておきたい。

出土土器（第 70 図）

土師器（26 ～ 29）26･27 は甕の口縁部片。如意状に湾曲しながら開く。28 は小型の短頸壷の口縁部片か。口縁部が強く外湾する。器壁をヘラミガキで調整する。29 は直口壷の口縁部かと考えたがやや自信がない。

84 号竪穴住居跡（第 69 図、図版 31）

調査区北東寄りで検出した。83･85･86 号住居跡、3 号掘立柱建物跡に切られ、これらよりも古い。主軸は北北東－南南西にとり、規模は南北長が 3.22m をはかり、東西幅は西壁が大きく破壊されていて不明だが 1.8m 以上の規模を持つ。床面中央やや北寄りで、床面直上に焼土や炭化物の集積があり、床面に被熱赤変面が形成されており、炉跡とも考えたが、炉跡にしばしば認められる皿状の掘り込みは見つからず、やや評価に苦しむところである。出土土器や切り合い関係から、5 世紀前葉頃に位置づけたい。

出土土器（第 72 図、図版 48）

土師器（1 ～ 4）　1 は甕の口縁部片。頸部が強く湾曲し、口縁部は外湾しながら開く。2 は高坏の口縁部片か。小片で形は不安がある。わずかに内湾しながら開く。3 も高坏。外面に段を形成し、口縁端部はわずかに外湾する。は直口壷。体部は扁平で、口縁部はわずかに外湾する。いずれも 5 世紀前葉頃の資料か。

85 号竪穴住居跡（第 69 図、図版 31）

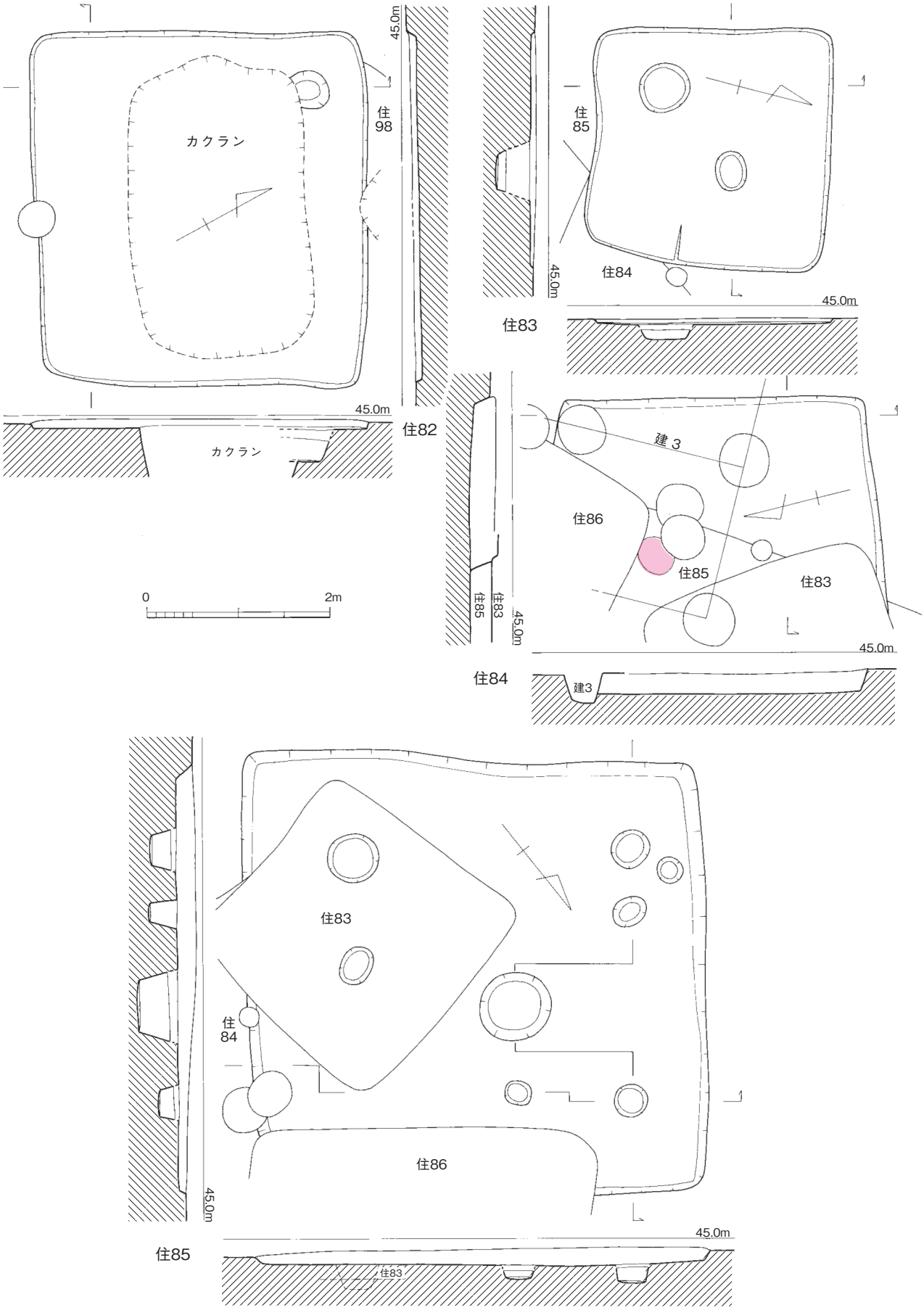
調査区北東寄りで検出した。83･86 号住居跡に切られ、84 号住居跡を切る。平面プランは大略方形で主軸は北東－南西にとり、規模は南北が 4.50m、東西が 4.78m をはかる。残存深さは比較的深く 20cm弱ほどが残されていたが、カマドや炉跡等は検出できなかった。86 号住居跡に破壊された北壁に炉跡が付設されていたかもしれない。床面には貼床が施されており、5 ～ 10cmほど掘り下げたレベルからいくつかのピットを検出したが、規則的に配列するものはなく主柱穴と評価できるものはない。出土土器は乏しいが、切り合い関係から 7 世紀前葉以前に位置づけられる。

出土土器（第 72 図）

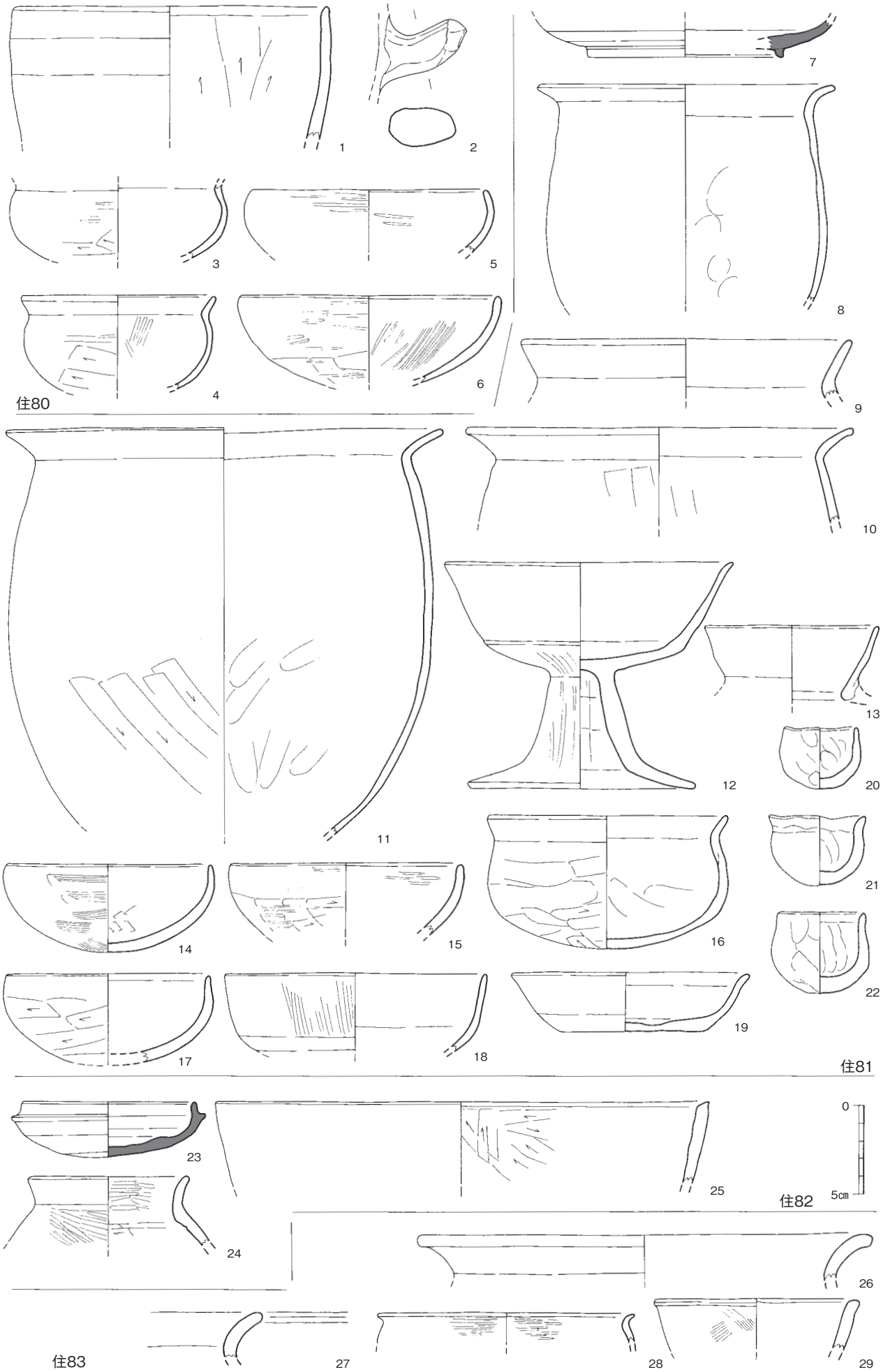
須恵器（5）　5 は大甕の口縁部片。頸部は外湾しながら開き、口縁部はややとがらせる。口縁部下に突帯を 1 条めぐらせる。

86 号竪穴住居跡（第 71 図、図版 32）

調査区北西寄りに位置する。84･85･87･89 号住居跡、2 号掘立柱建物跡を破壊し、88 号住居跡に



第 69 図　82 ～ 85 号竪穴住居跡実測図（1/60）



第 70 図　80 ～ 83 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

破壊される。平面プランは略長方形で主軸を北西－南東に持ち、規模は東西長が 3.66m、南北幅が 4.28m をはかる。西壁の南寄りに、西壁に沿って土堤状に粘土を積んだ遺構が残されており、L 字状カマドの煙道部とみられることから、西壁のおそらく中央に内接型のカマドが付設されていたものとみられる。実際、カマド想定部付近には焼土や炭化物が多く散乱していた。しかし、遺構としてのカマドはすでに削平されて検出することができなかった。床面には硬化面が広く形成されており、貼床も見られた。貼床を 5cm前後下げたレベルでいくつかのピットを検出したが、主柱穴と評価できるものはない。出土土器や切り合い関係などから、7 世紀前葉の遺構とみたい。

出土土器（第 72 図、図版 48）

須恵器（6） 6 は端部嘴状の坏蓋。つまみの有無は不明。

土師器（7 ～ 10） 7 は甕の口縁部片。頸部で強く屈曲して、口縁部は外湾しながら伸びる。5 世紀前半頃の資料の混入品か。8 は坏。底部は平坦で外面は未調整のまま。9 は甕の胴上位～口縁部片。胴部はやや長胴。口縁部は肥厚させながら如意状に外反させる。10 も甕の口縁部か。頸部は明瞭に屈曲し口縁部は直線的に開く。

87 号竪穴住居跡（第 71 図、図版 32）

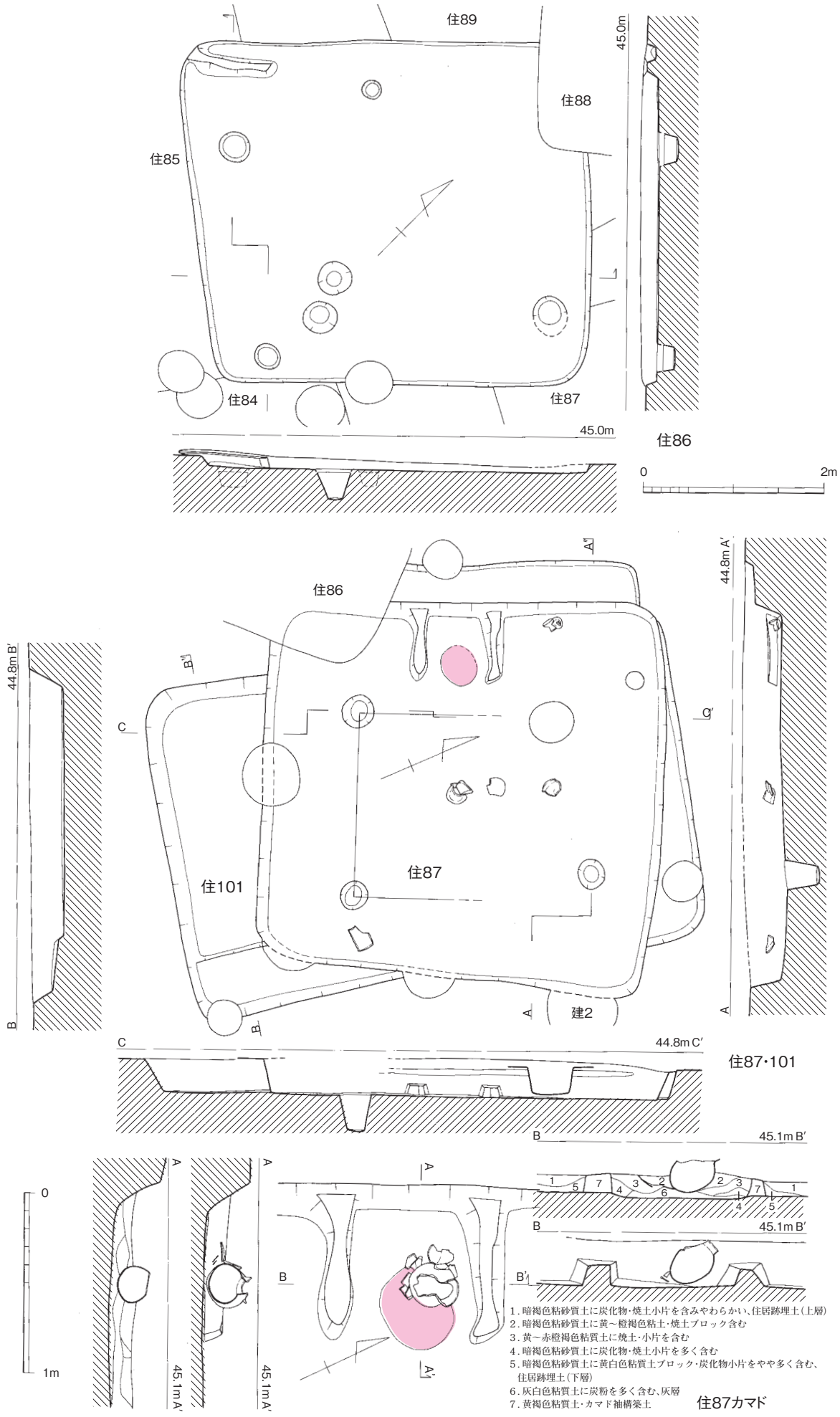
調査区の北西寄りで検出した。101 号住居跡を破壊し、86 号住居跡、2･3 号掘立柱建物に破壊される。平面形態は大略方形で主軸は西北西－東南東に持ち、規模は東西長が 3.92m、南北幅が 4.22m ほどをはかる。検出当初は西壁を本来より 30cmほど広く設定していたが、10cmほど下げた段階で誤認に気づいたため、西壁には段が作成されているが遺構とは認定していない。また、検出当初は 2 号建物跡が先行すると考えており本住居跡を先に掘り下げたが、土層を再検討した結果切り合い関係が逆であるとの認識に至ったという過程があり、図の整合性に不備が残った。西壁の中央部に内接型のカマドを付設する。住居跡の残りはかなりよく、30cm程度の深さがあった。床面には広く硬化面が形成されており、硬化面上から検出できた 3 基のピットを主柱穴として図示した。北東の主柱穴は不明である。出土土器や切り合い関係から、6 世紀後葉に位置づけたい。

カマド（第 71 図、図版 32）

西壁の中央部に内接型のカマドを検出した。上半部は崩壊しており、住居跡の掘り始めにはカマドが存在するとは認識していなかったが、一段ずつ掘り下げると徐々に黄褐色の粘質土が姿を現してカマドを認識するに至ったもので、土層図は上層部分を作成できなかった。袖は西壁と直交方向についてほぼ直線的に 70cmほど伸び､燃焼部の幅は内法で 65cmをはかる。中央にほぼ完形の甑（第 73 図－ 10）が床からわずかに浮いた状態で置かれていたが、支脚等は見つからなかった。支脚穴も検出できなかったので、おそらく土器転用支脚をカマドの廃棄時に持ち去ったものか。床面には不定形に被熱赤変面が形成されていた。カマド埋土は住居跡の埋土にカマド構築粘土である黄褐色粘質土や焼土、炭化物の小片が多く混じり、住居跡の埋没と同時にカマドも破壊され、埋没したことがわかる。

出土土器（第 73･74 図、図版 48）

須恵器（1 ～ 4） 1 は肩部外面に段を持つ坏蓋。天井は平坦で、肩部は緩やかに屈曲する。口縁部は斜めに開き端部は丸く収める。2･3 はカエリを持つ坏身。カエリ部は外に突きだし、口縁部は反転して斜め上方に伸びるが長くない。4 は高坏の口縁部片。口縁部はわずかに内湾しながら開く。



第 71 図　86・87・101 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

外面に小さな三角突帯を１条回す。小片で、混入品か。

土師器（5 ～ 25） 5 ～ 7 は中・小型の甕。頸部はやや強く締まり、口縁部は外湾しながら開く。8 は大型の甕の口縁部。屈曲して反転し、外湾しながら開く。9･10 は甑。ともに底部は大きな１孔を穿ち､把手を２つ付す。バケツ型の器形で口縁部はわずかに外湾する。9 は器高が高く､10 は低い。11 は壷あるいは甕の肩～口縁部片。頸部は強く締まり口縁部は外湾する。12 ～ 14 は甕または壷の胴部片。12 は扁平で頸部が強く締まる。15･16 は高坏。坏部は屈曲せず半球形に開き、口縁部をわずかに外湾させる。脚部は少しずつ開き、下部で屈曲する。17 ～ 23 は椀。17 ～ 19･21 は口縁部がわずかに内湾する。20 は口縁部まで緩やかに湾曲する。22･23 は口縁部がわずかに外湾するもの。

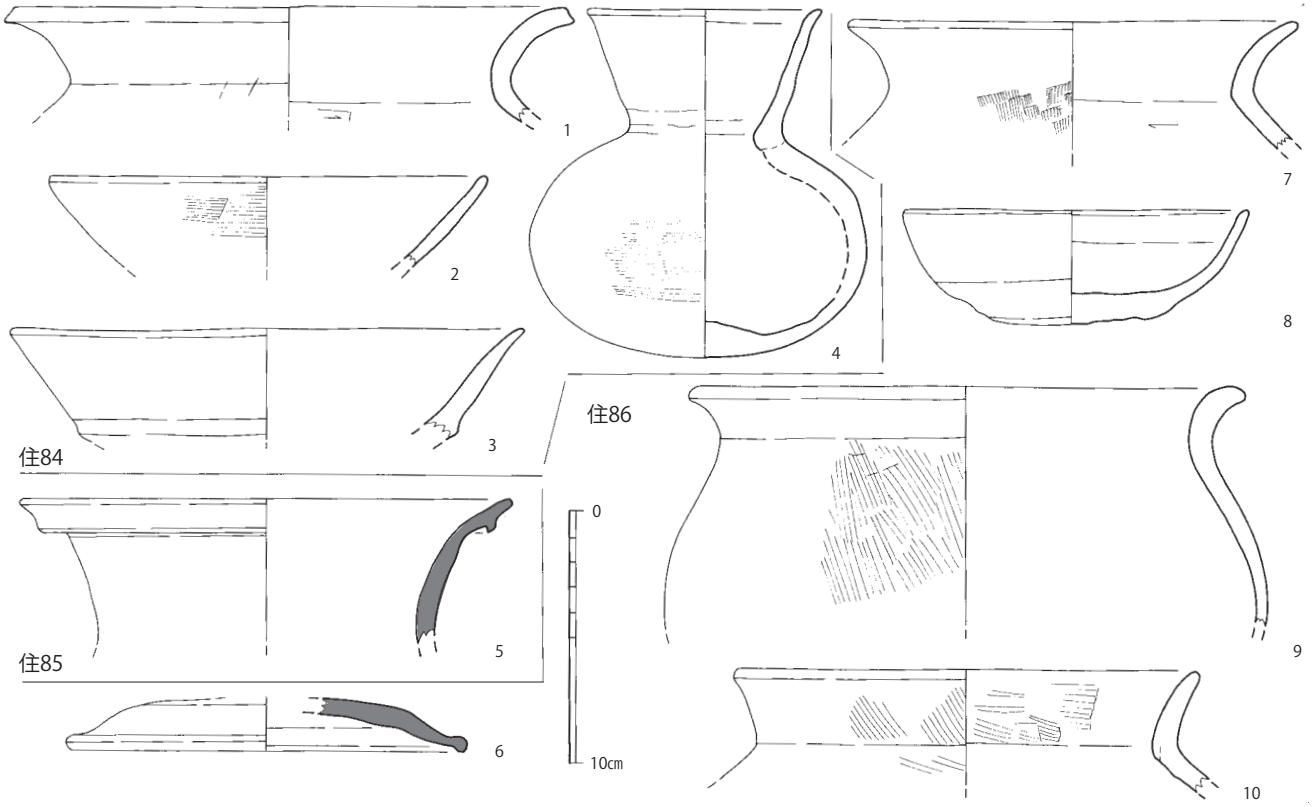
なお、他に埋土中から第 129 図 34 の鉄刀子が出土した。

88 号竪穴住居跡（第 75 図、図版 32）

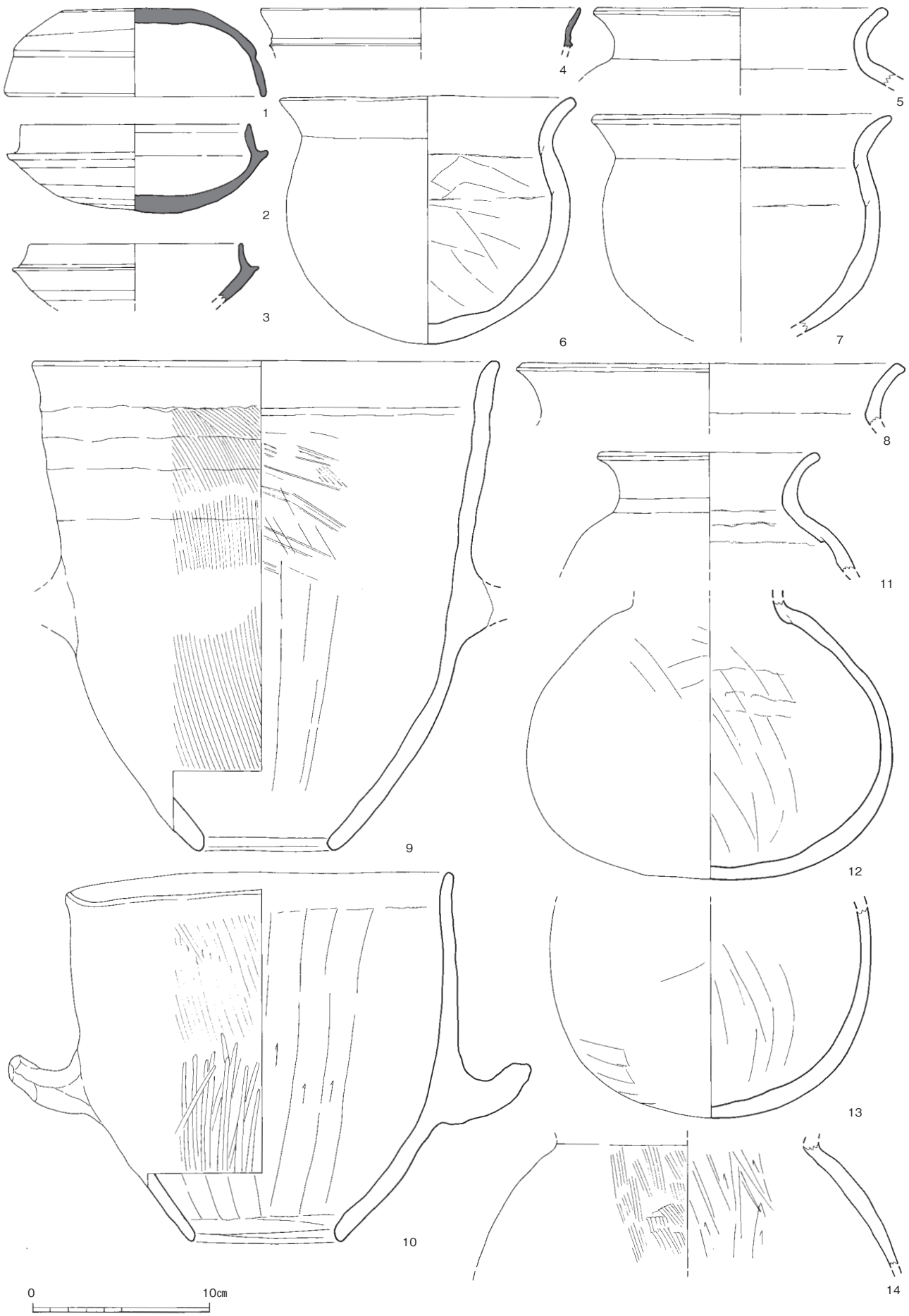
調査区の北西部で検出した。86･89 号住居跡と切り合い、これらより後出する。平面形態は小型の略方形で、主軸を北東－南西にとり、竪穴部の規模は南北長が 2.88m、東西幅が 2.72m をはかる。北壁の中央部に内接型のカマドを付設する。壁の残存深さは最大 15㎝程度で、北西コーナー部に向かって削平が進んでいる。床面には基盤層である砂礫層の凹凸をなくすように薄く貼床が施してあり、竪穴部中央を中心に硬化面が認められた。貼床を下げたレベルでいくつかのピットを検出したが、配置は規則的ではなく主柱穴とは評価しがたいものばかりである。出土土器や切り合い関係から、8 世紀代に位置づけておきたい。

カマド（第 75 図、図版 33）

北壁のほぼ中央部に内接型のカマドを検出した｡左右の袖にはいくつかの石材が用いられており、その石材の間をつなぐようにして黄褐色粘質土により壁を構築していた。壁の残存長さは 55㎝ほ



第 72 図　84 ～ 86 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第 73 図　87 号竪穴住居跡出土土器実測図その①（1/3）

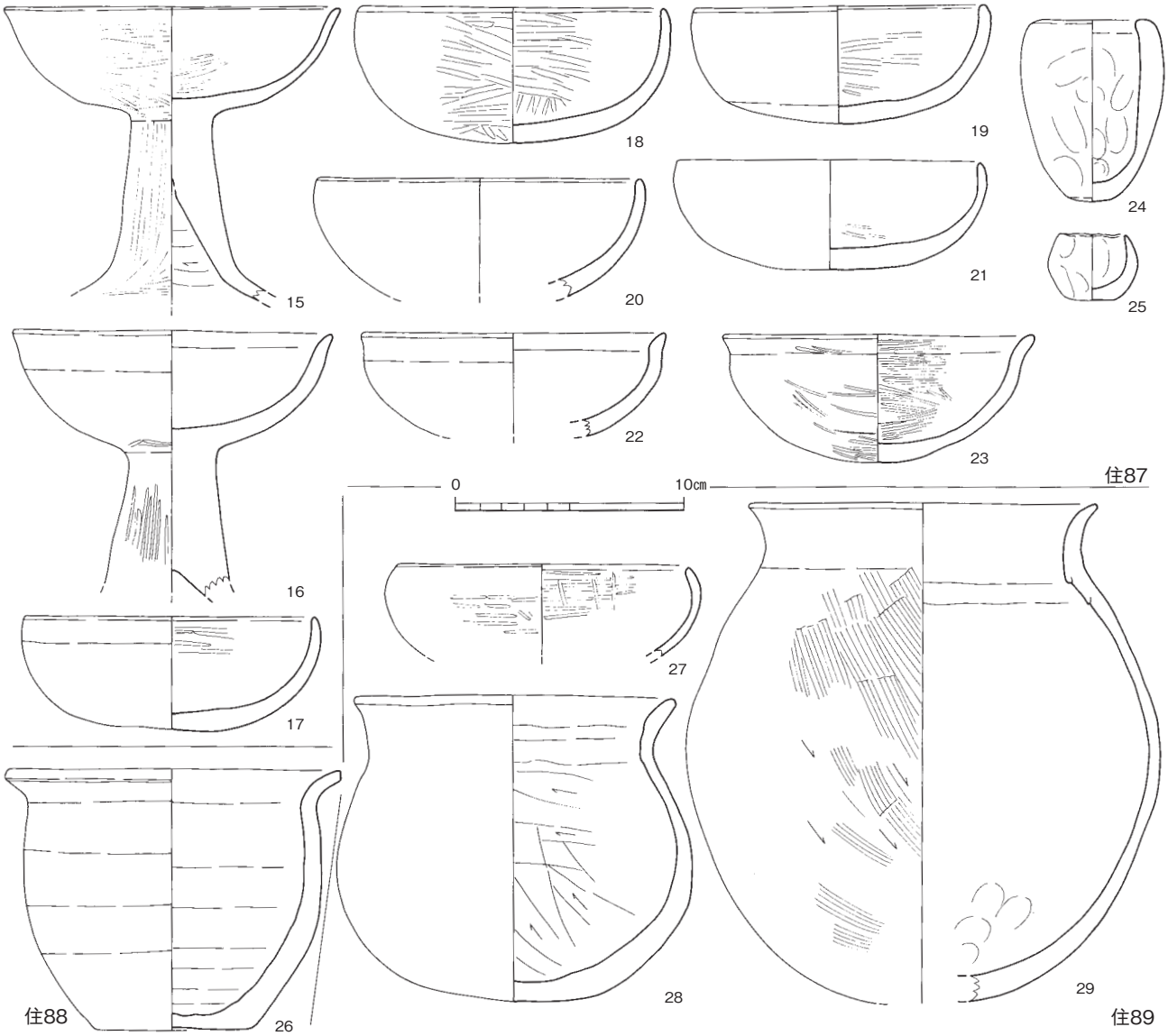
どで、燃焼部幅は60cmほどをはかり、やや小型のカマドである。床面からは支脚・被熱赤変面などを検出できなかった。埋土はカマド壁体の崩落土と焼土・炭化物が住居跡の埋土と混然となって堆積した状況で、住居跡の埋没と同時に崩壊・埋没した状況がうかがえる。最下層には灰層も残されていた。

出土土器（第74図、図版49）

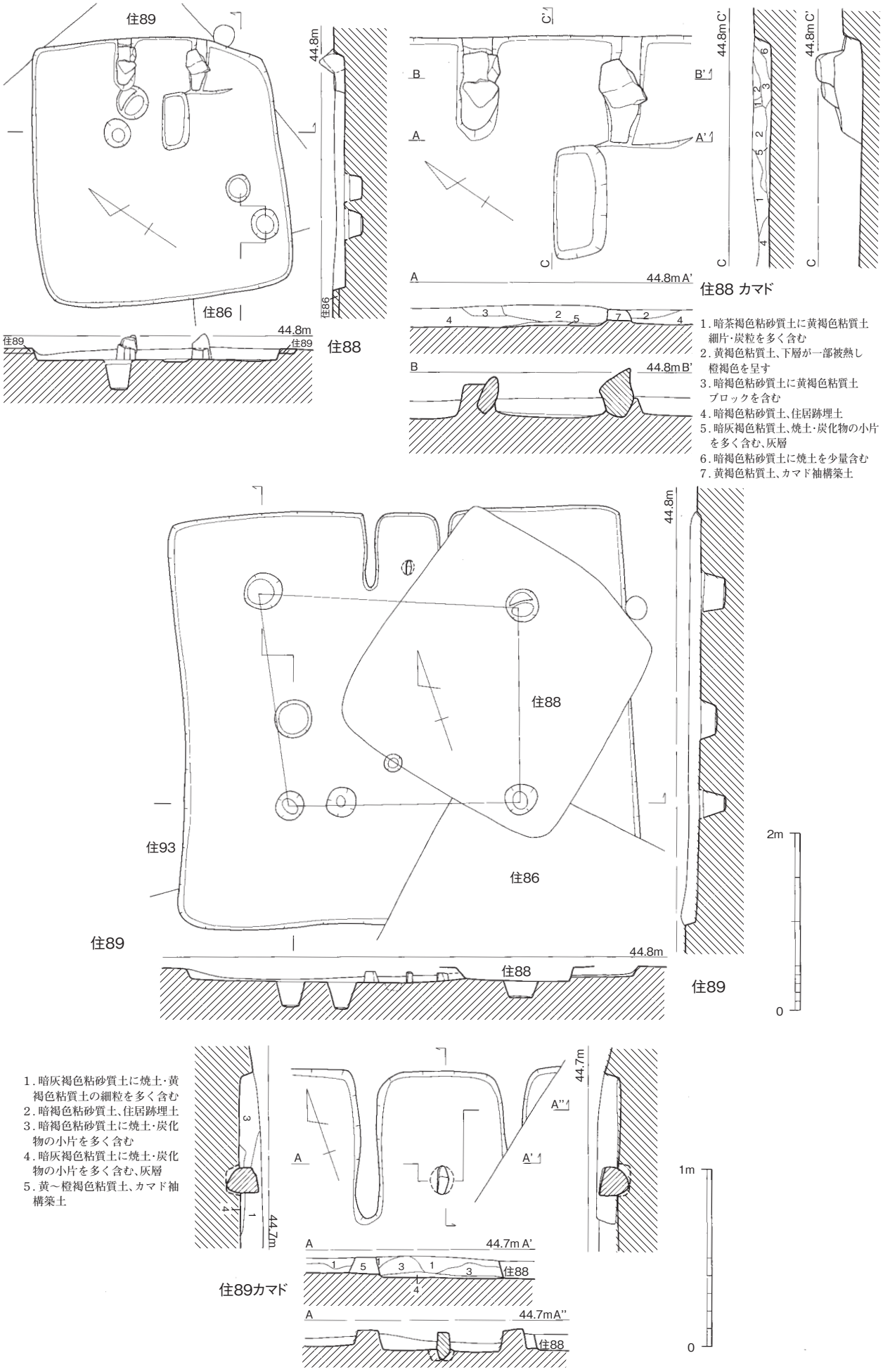
土師器（26） 26は甕。平底で特徴的な土器である。口縁部は短く外湾する。内・外面に水平方向の凹凸が多くみられる。おそらく半島系の遺物であろう。

89号竪穴住居跡（第75図、図版32）

調査区の北西部で検出した。86･88号住居跡に大きく破壊される一方、93号住居跡を破壊している。竪穴部の平面形状は大略方形で、主軸を北北東－南南西にとり、規模は南北長が4.52m、東西幅が4.96mをはかる。北壁の中央部に内接型のカマドを付設する。かなり削平されていて残存状況は悪く、壁の深さは残っている部分で10cm未満である。床面には広く貼床が施され、その上面には硬化面が広く認められた。貼床を下げたレベルでいくつかのピットを検出でき、本住居跡を破



第74図　87号竪穴住居跡出土土器その②、88･89号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第 75 図　88･89 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）

壊する 88 号住居跡の床面下から検出されたピットを合わせて 4 つのピットを主柱穴として図示した。いずれも掘方がやや浅く若干不安が残るが、竪穴内の位置は規則的である。出土土器や切り合い関係から、6 世紀後葉に位置づけておく。

カマド（第 75 図、図版 33）

北壁の中央部に内接型のカマドを検出した。左袖はほぼ完存し、奥壁から直交方向に 70cmほど伸びる。右袖もこれに並行するように伸びているが、先端部は 88 号住居跡に破壊されて失われている。燃焼部の床面幅は 65cmほどをはかる。両袖のほぼ中間、奥壁より 50cmほどの位置で、石を立てた支脚が出土した。支脚穴は本来存在したものであろうが、不注意で検出できず記録に残せていない。埋土は埋土に焼土や炭化物を含み、住居跡の埋没と同時に埋没したことがうかがわれるが、埋土中にカマド構築粘土である黄～橙褐色粘質土がほとんど見当たらず、カマド自体は大きく崩壊しないまま埋没し、その後削平により失われた可能性がある。最下層には灰層も残されていた。

出土土器（第 74 図、図版 50）

土師器(27 ～ 29)　27 は椀。口縁部が強く内湾する。28･29 は甕。28 は小型の甕で、器形は巾着袋状。29 はやや長胴気味の球胴で頸部が緩やかに締まり、口縁部は肥厚させながら如意状に外湾する。6 世紀後葉頃の資料か。

90 号竪穴住居跡（第 76 図、図版 33）

調査区の北西部で検出した。南に 82･98 号住居跡が位置する。91･92 号住居跡を破壊しておりこれに後出する住居跡である。平面形態は略方形で、主軸は北東－南西方向に持ち、規模は東西が 4.10m、南北が 4.06m をはかる。残存深さは比較的浅く、深い部分で 15cm程度が残されていた。西壁沿いに幅 110cmほど、高さ 5cmほどが削り出しのベッド状遺構状に調査されたが、出土土器や切り合い関係上から本遺構は古墳時代後期以降のものであり、この時期の住居跡に通常ベッド状遺構はつかないことから、調査時の誤認の可能性が高い。91 号住居跡の南壁に近いので、91 号住居跡の壁を誤認した可能性もあろう。床面には貼床が施されていたようで、床面からはピットが検出できなかった。一段下げた状態で砂礫層からなる地山を検出し、そのレベルでいくつかのピットを検出したが、主柱穴と評価できるようなものはない。出土土器には古いものと新しいものが混在するが、他遺構との切り合い関係上整合的な新しい資料をとり、7 世紀前葉に位置づけたい。

出土土器（第 79 図、図版 50）

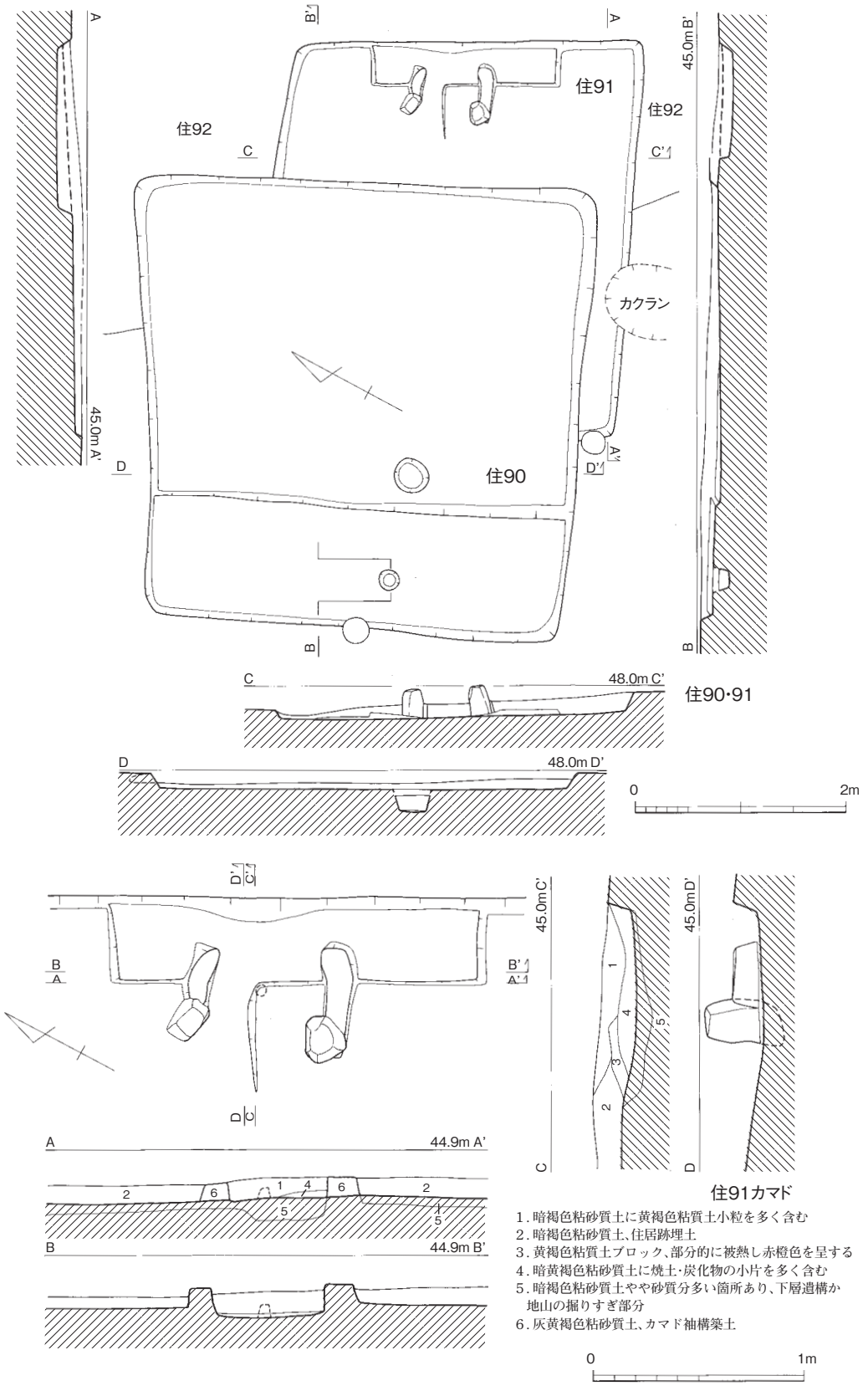
須恵器（1･2）　1 はカエリを持つ坏身。底部は平坦でカエリは突出し口縁部は低く短い。2 は甕の口縁部片。頸部は強く締まり、口縁部はやや立ち気味に伸びる。

土師器（3 ～ 11）　3 は甕の口縁部片。頸部は強く締まり湾曲する。口縁部は短く開く。4 は小型甕の口縁部片。頸部は緩く締まり、口縁部は肥厚しながら如意状に外湾する。5 は球胴の直口壷。口縁部はわずかに内湾しながら開く。6 は二重口縁壷の退化したものか。頸部は強く締まって湾曲する。口縁部は強く内湾しながら上に立ち上がり、弥生時代後期に残存する袋状口縁壷の退化様相に近い形状を示す。9 ～ 11 は手づくねのミニチュア土器でやや大型。10 は甕、11 は椀か。

なお、他に埋土中から第 119 図 83･86 の管状土錘 2 点、第 121 図 1 の姫島産黒曜石製の打製石鏃が出土した。

91 号竪穴住居跡（第 76 図、図版 33）

調査区の北西部で検出した。90 号住居跡に破壊され、92 号住居跡を破壊する住居跡である。平面形態は略長方形で、主軸方位は北東－南西にとり、規模は東西長が 3.60m、南北幅が 3.24m をは



第 76 図　90･91 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）

かる。東壁の中央部に内接型のカマドを付設する。床面には 10 ～ 20㎝ほどの厚さに広く貼床が施されており、上面に狭い範囲に硬化面が認められた。硬化面上からも貼床下からもピットは検出されず、主柱配置は不明である。出土土器はごくわずかで図示できるものはない。切り合い関係から、7 世紀初頭～前葉に位置づけられる。

カマド（第 76 図）

東壁の中央部に内接型のカマドを検出した。カマドの残りは比較的悪く、特に奥壁との接点で両袖ともに明確な袖が検出できなかった。両袖ともに先端部には立石を配している。おそらく横架材も石を用いたものであろう。床面には被熱赤変面の形成がまったく認められず、灰層もなく、また付近には貼床が厚く施されていたため、右半分についてはかなり掘りすぎてしまった。また、この際に支脚と考えられる立石を除去してしまったが、奥壁から約 30㎝ほどの燃焼部中央に立石が認められた。埋土は住居跡の埋土にカマド構築粘土である黄褐色粘質土や焼土・炭化物が多く混じり、住居跡の埋没とともにカマドが崩壊・埋没した状況がわかる。

92 号竪穴住居跡（第 77 図）

調査区の北西部で検出した。90･91 号住居跡に南側を壊され、93 号住居跡を東側で壊す。また、調査区西側の段落ちにより、西壁が大きく削平されて失われている。平面形状は略方形で、主軸方位は北西－南東にとり、規模は東西長が 6.78m、南北幅が 6.24m をはかる。西壁のほぼ中央部に焼土や炭化物などが集積する場所があり、おそらくカマドが存在したと考えられるが、付近の削平が著しく、また段落ちで一部が失われていることもあり、明確な遺構としては把握できなかった。床面には広く硬化面が形成されており、硬化面と貼床を除去したレベルでいくつかのピットを検出したが、主柱穴と考えられるピットは南西コーナー部付近の 1 基のみである。地山が堅固な砂礫層で深いピットを掘削できなかったためかもしれないが、ピットの埋土に地山由来の砂礫土が詰まっており検出し損ねたのかもしれない。出土土器や切り合い関係から、7 世紀初頭に位置づけておく。

出土土器（第 79 図）

須恵器（12･13） 12 は坏蓋。天井部は丸く、肩部はやや強く湾曲し口縁部に至る。13 はカエリを持つ坏身。器高は低く口縁部は斜めに短く伸びる。

土師器（14 ～ 17） 14 は須恵器模倣坏身。底部は丸い。カエリは突出せず段状になる。15 は甕の口縁部片。頸部は強く締まって湾曲し、口縁部は強く外湾しながら開く。16 は直口壷か。体部は扁平で、頸部は直線的に開く。17 は高坏の口縁部片か。口縁端部はわずかに外湾する。以上の資料は一部古相を呈するものを除き 7 世紀初頭に位置づけられよう。

93 号竪穴住居跡（第 78 図）

調査区の北西部で検出した。89･92 号住居跡に東西壁を大きく破壊されており、また削平が著しく残存状況は非常に悪い。特に北壁は貼床部が断続的に確認できるのみで壁ラインは推定であり、東壁は推測すら不可能な状況であった。主軸方位は東南東－西北西にとり、北壁沿いに内接型のカマドを付す。柱穴配置との位置関係から考えておそらくほぼ中央にあたると考えられる。平面形状は略方形と推測され、規模は南北が 5.72m、東西がカマドの中心から折り返して復元すると 6.48m をはかり、やや東西に細長い住居跡となろう。床面には貼床が施され、その上面には硬化面が広がっ

ていて、貼床を除去したレベルでいくつかのピットを検出した。うち2本が南側の主柱穴と推定される。出土土器から6世紀後葉頃に位置づけたい。切り合い関係上も大きな矛盾はない。

カマド（第78図）

北壁の中央部にカマドを検出した。住居跡の推定ラインと袖残存部分・支脚の位置関係から、内接型のカマドとみられる。当初は別の住居跡のカマドと考え、カマド調査の主軸方位をやや斜めに設定していたが、本住居跡のカマドであることが明らかになったため、やや図面に差し障りが出てしまった。袖は左右とも残りが悪く、特に削平が著しい北壁寄りで未検出となっているが、図上で復元すると北壁から直交方向に100cm近く伸びる。やや長すぎるとも考えられるが、支脚の位置からみても袖の南端部は妥当と考えられ、北壁の位置が図示したものよりもやや南側なのかもしれない。袖間の距離は内法で60cmほどをはかり、そのほぼ中央部に小穴を穿ち立石を配して支脚とする。埋土にカマド構築粘土（黄褐色粘質土）や焼土・炭化物を含み、住居跡の埋没とカマドの崩壊・埋没が軌を一にしたものであったことがわかる。最下層には灰層の堆積も認められる。

出土土器（第79図、図版50）

土師器（18～26）　18は小型甕の胴上位～口縁部片。頸部は強く締まり、口縁部はわずかに肥厚しながら強く外湾する。19は小型丸底壷の胴部片で、混入品か。20は鉢か。口縁部が肥厚してわずかに外湾する。21は高坏の坏部片か。小片で径は自信がない。混入品か。22～24は高坏の脚部片。「八」の字状に開き接地部が肥厚しつつ屈曲する。25･26は手づくねのミニチュア土器で椀か。

94号竪穴住居跡（第77図、図版34）

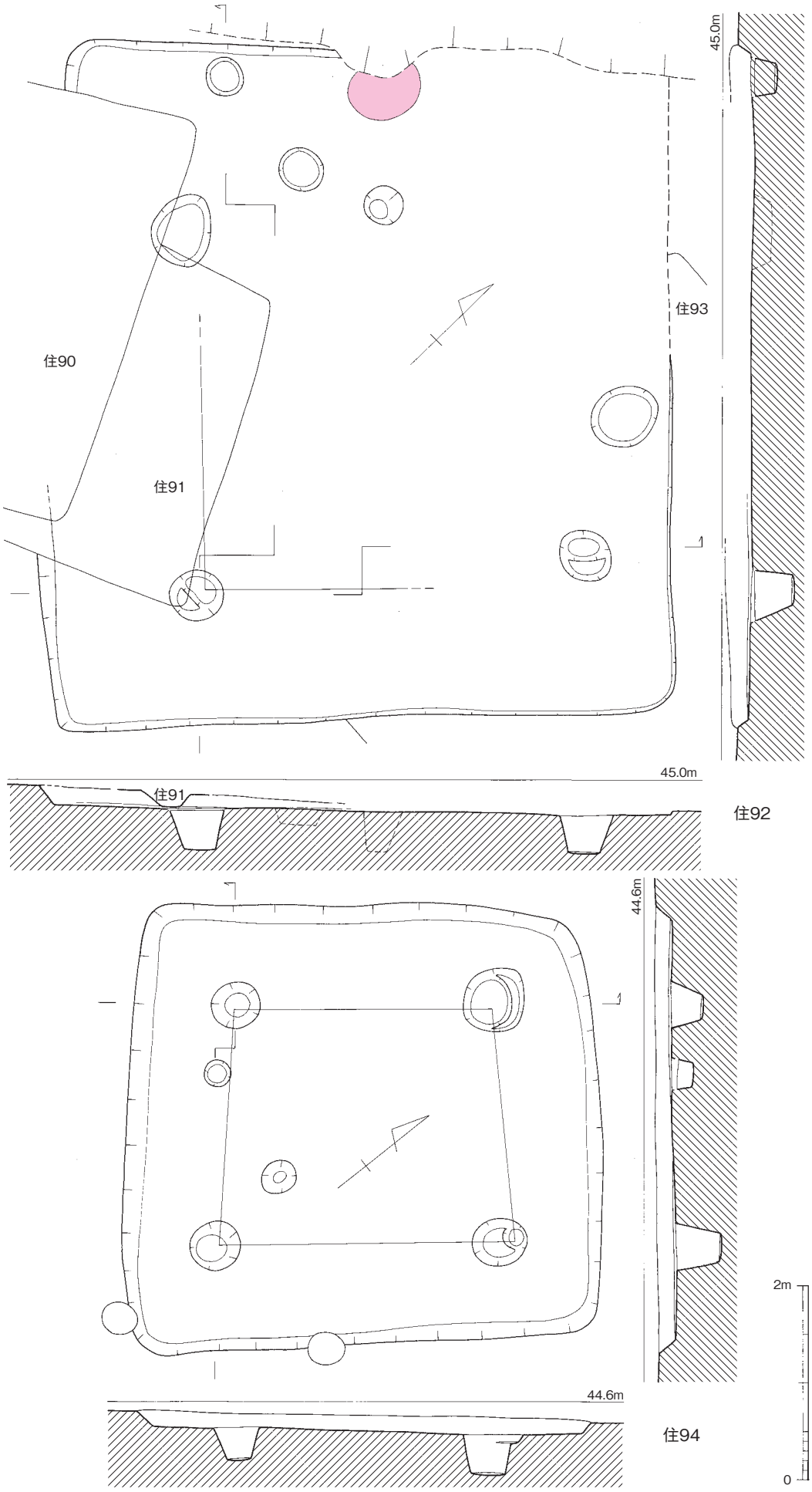
調査区北西部で検出した。北に3号住居跡が、西に96号住居跡が隣接する。平面形態は略方形で主軸方位を北東－南西にとり、規模は南北長が4.32m、東西幅が4.2mをはかる。北東壁の中央部に炭化物や焼土が集中して分布する地点があり、おそらくカマドと考えられるが、遺構として検出することはできなかった。床面には貼床が施されていてその上面には硬化面が形成されており、硬化面上から3基の、貼床下から1基の主柱穴を検出した。いずれも深さが30cm前後あってしっかりした掘方を持つ。他の遺構との切り合い関係はない。出土土器から6世紀後葉に位置づけられる。

出土土器（第82図、図版50）

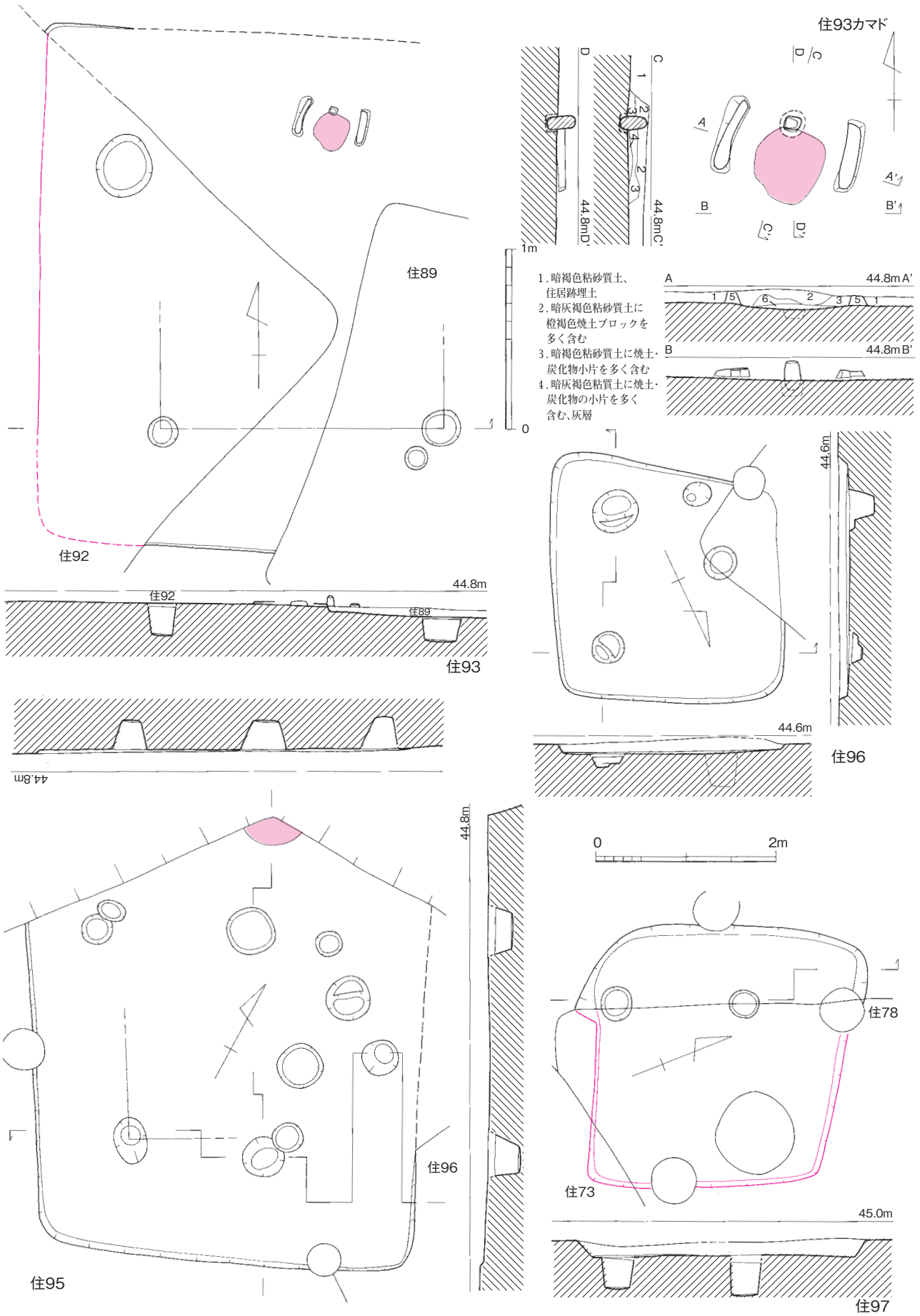
須恵器（1･2）　1は肩部外面に段を持つ坏蓋。天井は平坦で肩部は緩やかに湾曲する。口縁端部は斜めに仕上げる。2はカエリを持つ坏身。底部は平坦。口縁部は短く外湾しながら内傾する。

土師器（3～14）　3は須恵器模倣坏蓋。肩部で強く湾曲する。4～6は須恵器模倣坏身。カエリ部は段状になり、口縁部はやや短く外湾しながら内傾する。7は椀として提示したが須恵器模倣坏蓋の可能性もある。底部は丸底で口縁部下でやや強く湾曲する。8･9はタコツボ。やや小さいか。10は不明土器。11～13は甕の口縁部片。11･13は頸部の締まりが緩い。12は頸部が強く締まる。いずれも、口縁部をやや肥厚しつつ如意状に外反させる。14は鉢の口縁部片か。内湾しつつ立ち上がり、口縁端部を外湾させる。

なお、他に埋土中から第121図18の安山岩製スクレイパーが出土した。



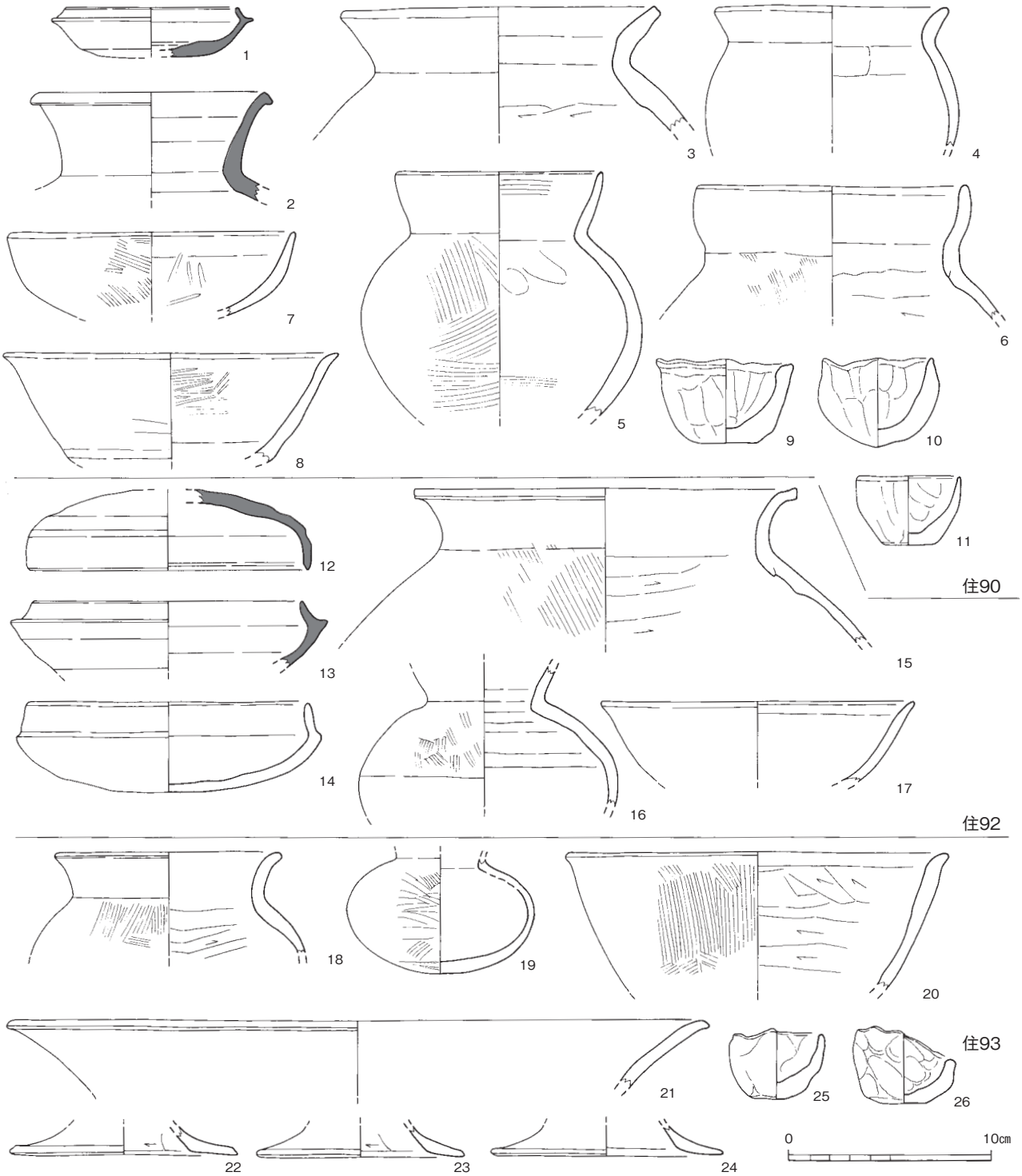
第 77 図　92・94 号竪穴住居跡実測図（1/60）



第 78 図　93･95 ～ 97 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）

95 号竪穴住居跡（第 78 図、図版 34）

調査区の北西部で検出した。96 号住居跡を切り、99 号住居跡に破壊される。北西側が段落ちにより削平されており全形は不明だが、削平されている北壁の推定ラインのやや内側に炭化物や焼土の集中地点があり、これがカマドの痕跡であるとすれば、平面形状は略長方形で規模は東西長が推定で 5.24m、東西幅が 4.36m をはかることになろう。床面には貼床が施されその上面に硬化面が形成される。硬化面上あるいは貼床下層からいくつかのピットを検出したが、主柱穴の候補となり得るのは図示した南西コーナー部の 1 基のみである。出土土器から、7 世紀前葉に位置づけられよう。



第 79 図　90･92･93 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

出土土器（第 82 図）

土師器（15･16）　15 は小型甕の胴上位～口縁部片。胴部はやや長胴気味か。頸部の締まりは悪い。口縁部は外湾しつつ伸びる。16 は須恵器模倣坏身。口縁部はやや短い。

96 号竪穴住居跡（第 78 図、図版 34）

調査区北西部で検出した。95 号住居跡に切られていてこれよりも古い。平面形状はややゆがみの大きな小型の略方形で、規模は南北が 2.56m、東西が 2.42m をはかる。残存深さは 15㎝前後である。床面には貼床が見られ、その下層からいくつかの小ピットを検出したが、規則的に配列し主柱穴と考えられるものはない。出土遺物に時期をはっきり示すものはない。切り合い関係から、7 世紀前葉以前に位置づけられる。

出土土器（第 82 図、図版 50）

土師器（17）　17 は手づくねの土器でゆがみが大きい。逆三角形状の器形で、製塩土器か。

97 号竪穴住居跡（第 78 図、図版 28）

調査区の南西端部で検出した。75 号住居跡の西に隣接し、これに大きく破壊されているが、本住居跡の床面が深くかろうじて全形を把握できた。主軸は西北西－東南東にとり、平面形状はややゆがみのある小型の方形で、北辺の中央部にカマドを付設していたものとみられるが、炭化物や焼土の集積が残されていたのみでカマド自体は検出できていない。深さは比較的深く、最大 20㎝程度をはかる。規模は東西長が 2.72m、南北幅が 2.86m をはかる。床面からいくつかのピットが検出されているが、主柱穴と評価できるものはない。出土土器に時期を判断できる資料はない。切り合い関係から、6 世紀後葉以前となる。

出土土器（第 82 図、図版 50）

土師器（18･19）18･19 は手づくねのミニチュア土器で椀か。

なお、他に埋土中から第 120 図 114 の土玉が出土している。

98 号竪穴住居跡（第 80 図）

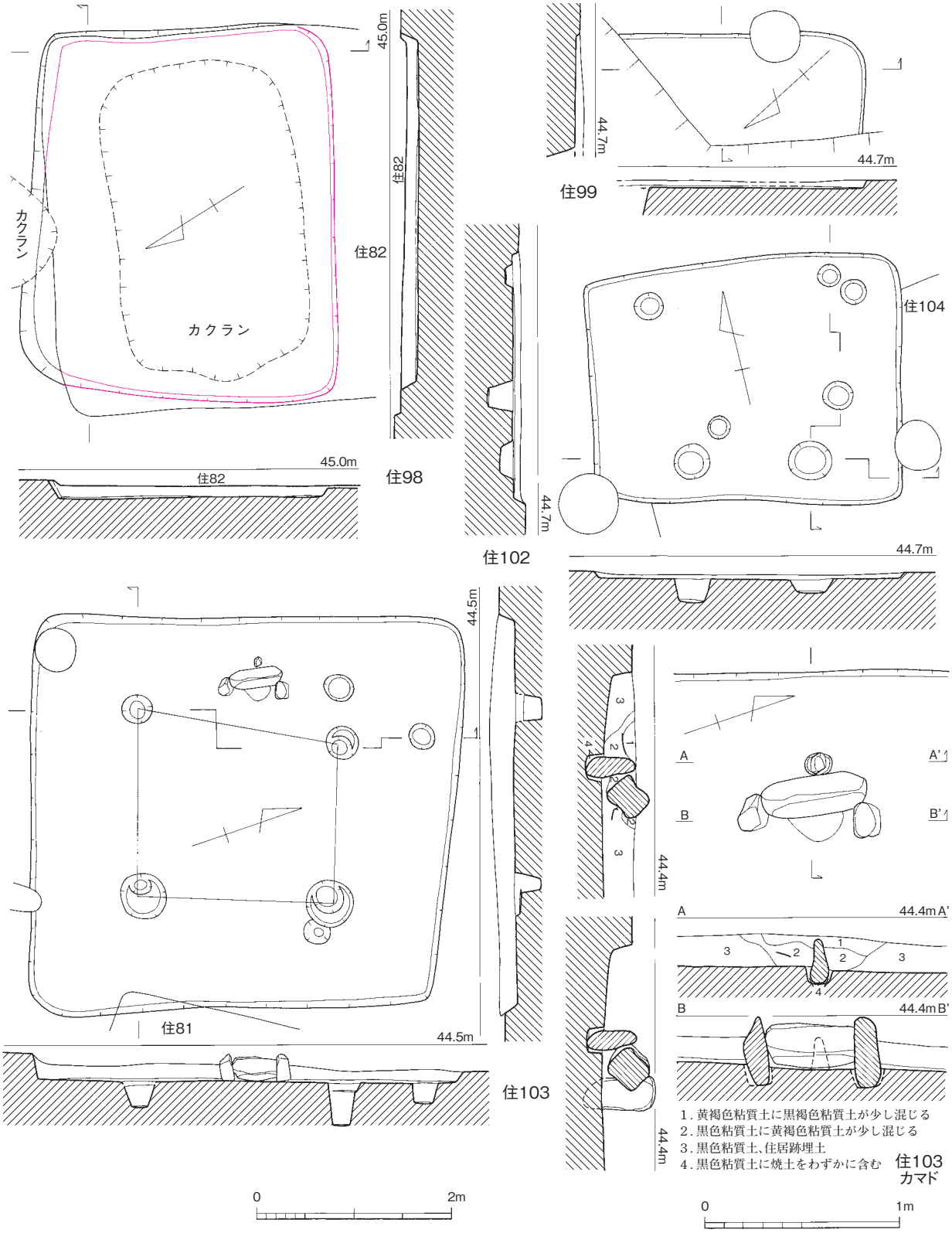
調査区中央西寄りで検出した。82 号住居跡とほぼ重複しており、これに大きく破壊されている。また中央部を撹乱により大きく破壊されている。主軸方位を北東－南西にとり、規模は南北が 3.04m、東西が 3.72m でやや東西に長い長方形状を呈する。残存深さは 10 ～ 15㎝程度で浅い。床面からは主柱穴などのピットは検出されていない。出土土器はごくわずかで図示できるものはない。切り合い関係から、7 世紀前葉以前となる。

99 号竪穴住居跡（第 80 図）

調査区の北西部で検出した。95 号住居跡を破壊している。調査区北・西の段落ちで削平されており残存状況は悪く、南壁と東壁のそれぞれごく一部ずつが残されているのみである。残存規模は東西が最大で 1.1m、南北が 2.5m ほどをはかる。出土遺物はごくわずかで、図示できる土器はない。6 世紀後半に比定される 95 号住居跡よりも新しい。

100 号竪穴住居跡（第 45 図）

調査区の中央部で検出した。48･49･52･68 号住居跡に切られていて、残存状況は非常に悪い。検出できたのは南壁と北壁の一部と西壁の全体で、平面形状はおそらく（長）方形、規模は南北のみ判明して 3.82m をはかり、主柱穴等は不明である。古墳時代前期に比定される 68 号住居跡に切られることから、これより古く位置づけられるが、出土土器とは齟齬があり疑問が残る。



第 80 図　98･99･102･103 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）

出土土器（第 82 図）

土師器（20）　20 は椀である。浅く、口縁部がわずかに外湾する。

101 号竪穴住居跡（第 71 図）

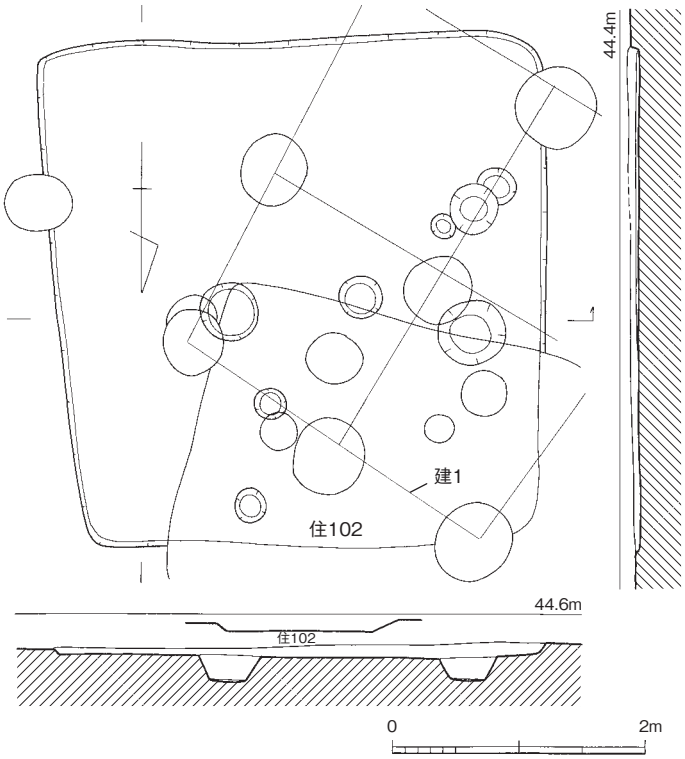
調査区の北西寄りで検出した。87 号住居跡、2･3 号掘立柱建物に破壊されておりこれらより古い遺構である。主軸方位を北東－南西に持つ長方形プランの住居跡で、規模は南北長が 5.58m、東西幅が 3.34m をはかる。東壁の南側に幅 50cmほどのベッド状遺構を掘り残して作っているが、東壁の全面に沿うかどうかは不明である。住居跡の中央部が 87 号住居跡により大きく破壊されているため詳細は不明な部分が多く、主柱穴や炉跡なども不明である。ベッド状遺構を持つことから古墳時代前期の遺構としたいが出土土器に乏しく断言できない。

出土土器（第 82 図、図版 50）

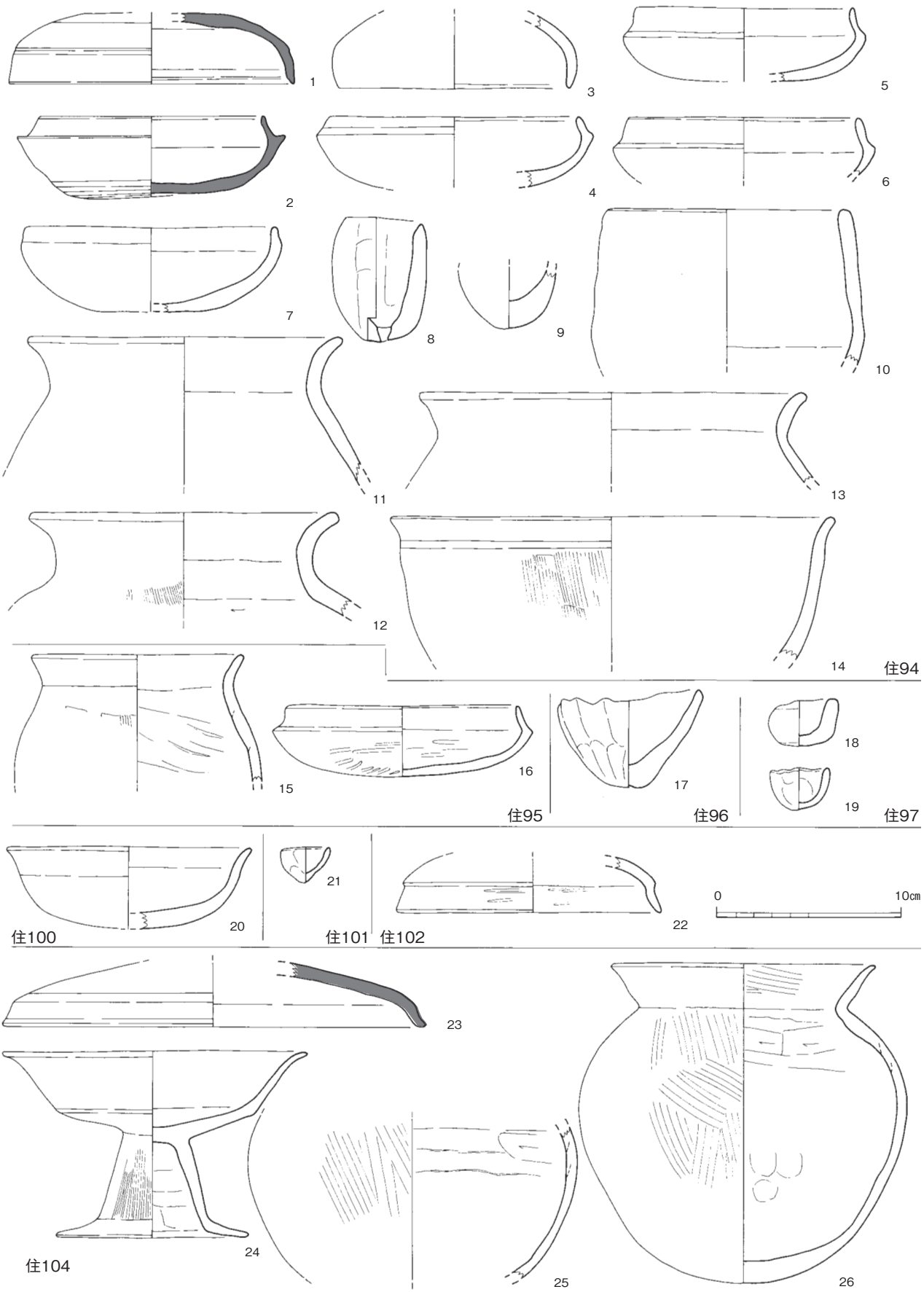
土師器（21）　21 は手づくねのミニチュア土器で椀か。

102 号竪穴住居跡（第 80 図、図版 34）

調査区中央部北東寄りで検出した住居跡である。36 号住居跡の北に隣接し、104 号住居跡と切り合ってこれを大きく破壊する。また 1 号建物跡とも重なり合っており、この下層にあたるが、本住居跡は SX － 02 谷状落ち込みの掘り下げ中に把握したため 1 号建物跡との直接的な切り合い関係は把握できなかった。検出面は谷状落ち込み SX － 02 下層上面にあたり、谷の下層埋没後、上層堆積前に掘られた遺構か。平面形状は小型の長方形で主軸を大略東西にとり、規模は東西 3.06m、南北 2.48m をはかる。床面からは多くのピットを検出したが、主柱穴と評価できるものはない。出土土器や切り合い関係などから、6 世紀後葉代に位置づけたい。



第 81 図　104 号竪穴住居跡実測図（1/60）



第 82 図　94 ～ 97、100 ～ 102、104 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

出土土器（第 82 図）

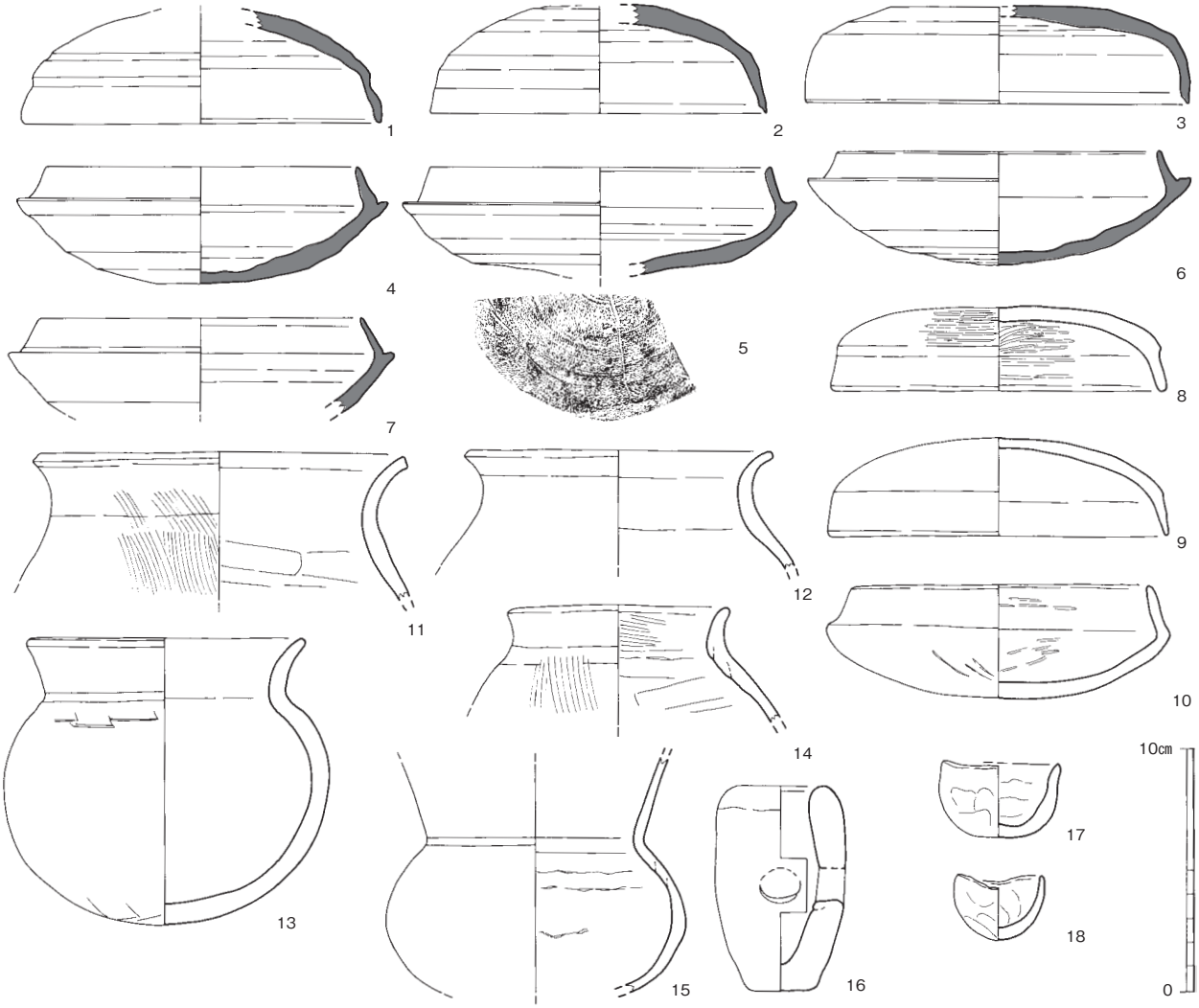
土師器（22）　22 は須恵器模倣坏蓋。肩部の段が明瞭。口縁部はやや外湾しながら開く。

103 号竪穴住居跡（第 80 図、図版 35）

調査区の北東寄りで検出した。東に 39･81 号住居跡が、西に 87 号住居跡が隣接する。本住居跡も谷状落ち込み SX － 02 の掘り下げ中に発見したもので、102 号住居跡と同じく SX － 02 下層堆積後、上層堆積前に形成された遺構と考えられる。平面形状は略方形で主軸方位は大略東西方向にとり、規模は東西長が 3.88m、南北幅が 4.18m をはかる。西壁のほぼ中央部に内接型のカマドを付設している。床面からはいくつかのピットを検出し、そのうち略方形に並ぶ 4 つのピットを主柱穴として図示した。81 号住居跡に壊されることから 8 世紀代以前であることは確実で、出土土器から 6 世紀中葉に位置づけておきたい。

カマド（第 80 図、図版 35）

西壁のほぼ中央部に内接型のカマドを付設したものとみられるが、遺構として検出できたのは、両袖の先端部に配された立石と原位置から転がり落ちた横架材、そして石を立てた支脚のみである。カマド埋土には、本調査区出土カマドに頻繁に用いられる袖構築材である黄褐色粘質土が含まれるにもかかわらず、カマド袖は全く残されていなかったが、これは石材を残して他が完全に廃棄、



第 83 図　103 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

除去されて埋め戻されたためなのだろうか。袖の下層には埋土と区別をつけがたい黒色粘質土が用いられたのかもしれないし、あるいは使用中に床面が下がっていったため袖の下層が地山のSX－02埋土である黒色粘質土で形成され、調査時に気づかずに飛ばしてしまったのかもしれない。やや疑問が残るところである。カマド袖の長さは立石先端部までで75cmをはかり、燃焼部幅は40cmとやや狭い。支脚は奥壁から40cmの位置に小穴を穿って配される。燃焼部の支脚前面には被熱赤変面が形成されていた。

出土土器（第83図、図版50･51）

須恵器（1～7）　1～3は肩部に段を有する坏蓋。段はかなり退化して不明瞭。口縁部は斜めに仕上げる2･3ととがらせる1がある。4～7はカエリを持つ坏身。丸底で、カエリ部外面は大きく突出する。口縁部はわずかに内湾しつつ内傾する。

土師器（8～18）　8･9は須恵器模倣坏蓋。器高は低い。天井部はやや平坦で､肩部に段を作り出し、口縁部は短く伸びる。内・外面をヘラミガキで調整する。10は須恵器模倣坏身。底部は丸底でカエリ部外面は段状。口縁部はわずかに内湾しながら内傾する。極めて細いヘラ状工具でミガキ調整を施す。11～14は甕か。いずれも頸部の締まりが緩く、口縁部は肥厚しつつ如意状に外反するものが多い。15は小型の直口壷か。体部は扁平な球状で頸部はやや強く締まって屈曲し､口縁部はまっすぐ立ち上がる。16はタコツボである。体部に1孔を穿つ。細い。17･18は手づくねのミニチュア土器。17は甕、18は椀か。

104号竪穴住居跡（第81図）

調査区中央部北東寄りで検出した。102号住居跡に大きく破壊されているほか、1号掘立柱建物跡とも切り合う位置にあるが、本住居跡は谷状落ち込みSX－02の埋土を完全に除去した状態で初めて検出できたもので、1号建物跡との直接的な切り合い関係は不明。平面形状は略方形で主軸は南北にとり、規模は南北が3.98m、東西が3.82mをはかる。床面からはいくつかのピットを検出したが、主柱穴と評価できるものはない。また、炉跡やカマドの痕跡も把握できなかった。出土土器から古墳時代前期後半の遺構か。

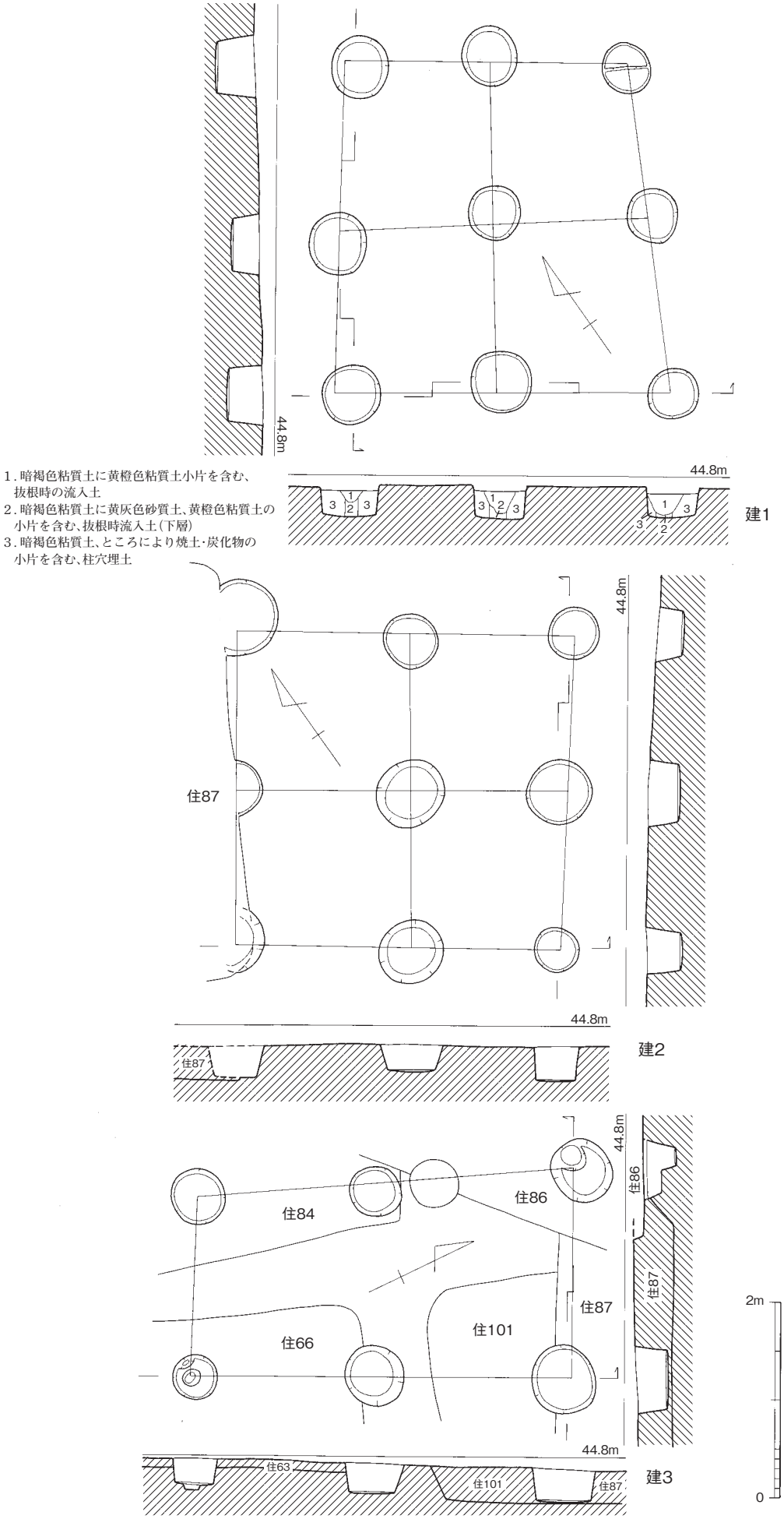
出土土器（第82図、図版50）

須恵器（23）23は坏蓋。天井は緩やかに湾曲し、口縁部は下方に屈曲して端部を外に引き出す。混入品か。

土師器（24～26）　24は高坏。坏部外面に明瞭な段を形成し、口縁部は緩やかに外湾する。25は壷の胴部片か。26は甕。球胴で頸部は屈曲し、口縁部は開く。

（3）掘立柱建物跡

調査区の中央部からやや北寄りにかけて計3棟の掘立柱建物跡を検出した。いずれも古墳時代後期～古代の遺構である。2棟が2×2間の総柱建物跡で、もう1棟もその可能性があるものとして調査したが、周辺遺構の切り合い関係が激しいこともあり検出できたのは1×2間の建物跡であった。以下、個別に説明を加えていく。



第 84 図　1 ～ 3 号掘立柱建物跡実測図（1/60）

1 号掘立柱建物跡（第 84 図、図版 35）

調査区の中央部北東寄りで検出した。SX － 02 谷状落ち込みの上面で検出した遺構で、102･104 号竪穴住居跡と重複しているが、両住居跡が谷状落ち込みの中層以下で検出されているため直接的な切り合い関係としては把握できていない。2 × 2 間の総柱建物で、主軸方位を北東－南西にとり、柱配列にはややゆがみがあるが、おおよその規模は南北が 3.34 ～ 3.40m、東西が 2.70 ～ 3.32m をはかる。柱穴は直径 50 ～ 60㎝と大きい。土層を見ると埋土の下層に柱根の形状を保った柱抜き跡が確認でき、直径約 15㎝をはかる。出土土器はやや時期幅があるが一番新しいものを取れば 7 世紀中葉になろうか。

出土土器（第 85 図、図版 51）

須恵器（1 ～ 3） 1 ～ 3 はカエリを持つ須恵器の坏身である。1 はやや新しく、口縁部が短い。2･3 は口縁部がやや直線気味に内傾しながら立ち上がるもので古墳時代後期の資料。

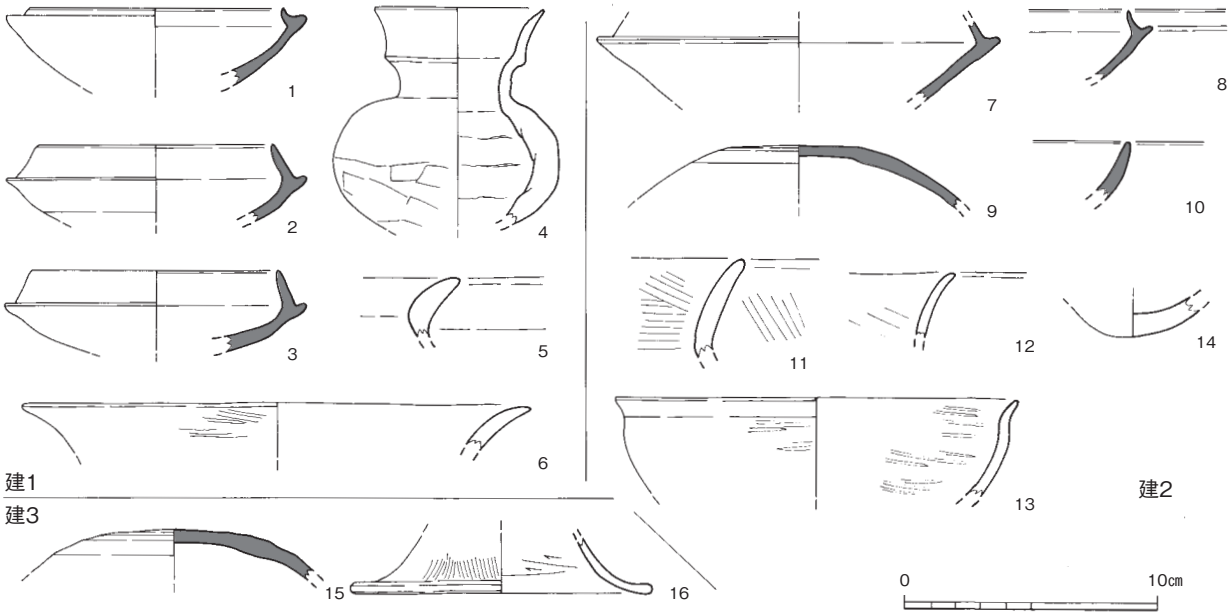
土師器（4 ～ 6） 4 は小型の二重口縁壷。扁平な丸底で体部内面に粘土帯接合痕跡をよく残す。古墳時代前期～中期の資料。5 は甕の口縁部。小片だが肥厚しつつ如意状に外反し、7 世紀以降の甕の特徴を持つ。6 は甕の口縁部片か。小片で全形は不明。

2 号掘立柱建物跡（第 84 図）

調査区の中央部やや北寄りで検出した。87･101 号住居跡を切る。検出当初は 87 号住居跡に切られる遺構として調査していたが、半裁して土層を検討した結果切り合い関係が逆という結果になった。このため、西側の 3 つの柱は形状が損なわれてしまった。主軸方位はおおよそ 1 号建物跡と同じで北東－南西方向をとり、2 間× 2 間のほぼ正方形の総柱建物で、規模は南北が 3.34m、東西が 3.30 ～ 3.40m をはかる。柱穴は直径 50 ～ 60㎝をはかる。出土土器にはやや時期幅があるが新しい時期の資料を取って、7 世紀後半代に位置づけたい。

出土土器（第 85 図）

須恵器（7 ～ 10） 7･8 はカエリを持つ坏身。ともに口縁部は退化して短くなるか。6 世紀末頃の資料。



第 85 図　1 ～ 3 号掘立柱建物跡出土土器実測図（1/3）

9 は坏蓋の天井部片。緩やかに湾曲しながら下がる。10 は坏身の口縁部片。7 世紀後半の資料か。
土師器(11 ～ 14)　11 は甕の口縁部片。わずかに外湾しながら上に伸びる。12 は直口壷の口縁部片か。小片で自信がない。13 は椀の口縁部片。やや浅い半球形の胴部を持つもので、口縁端部は短く外反する。14 は手づくねの小型土器の底部片で、タコツボか。

3 号掘立柱建物跡（第 84 図）

調査区の中央やや北寄りで検出した。2 号建物跡の南西に隣接する。63･84･86･87･101 号住居跡を切っており、これらより新しい。主軸方位を北北東－南南西にとる 1 × 2 間の建物跡として調査したが、西側にもう 1 間分存在した可能性も否定できない。多くの住居跡が切り合う付近であり、すでに失われたか調査時にはっきりと把握できなかった可能性はあろう。ここでは一応 1 × 2 間の建物跡として報告する。規模は長軸が 3.80 ～ 3.84m、短軸が 1.86 ～ 2.30m でややゆがみが大きい建物である。柱穴はいずれも直径 50 ～ 60㎝と大きい。土層において柱痕跡等は確認できなかった。出土土器の中に時期を決定づけるものはやや乏しく、切り合い関係から時期を決定するとすれば 8 世紀以降に位置づけられることになろう。

出土土器（第 85 図）

須恵器（15）　15 は坏蓋。天井部が丸くつまみはつかない。肩部に段を持つものか。

土師器（16）　16 は高坏の脚部片。器壁は薄い。接地部に近いところでやや強く外湾して広がる。

（4）土坑

調査区内から 3 基の土坑を検出した。分布に規則性はなく、形状に共通性は乏しい。うち 2 基が古墳時代前期の遺構、1 期が古墳時代後期以降の遺構である。以下、個別にみていく。

1 号土坑（第 86 図、図版 36）

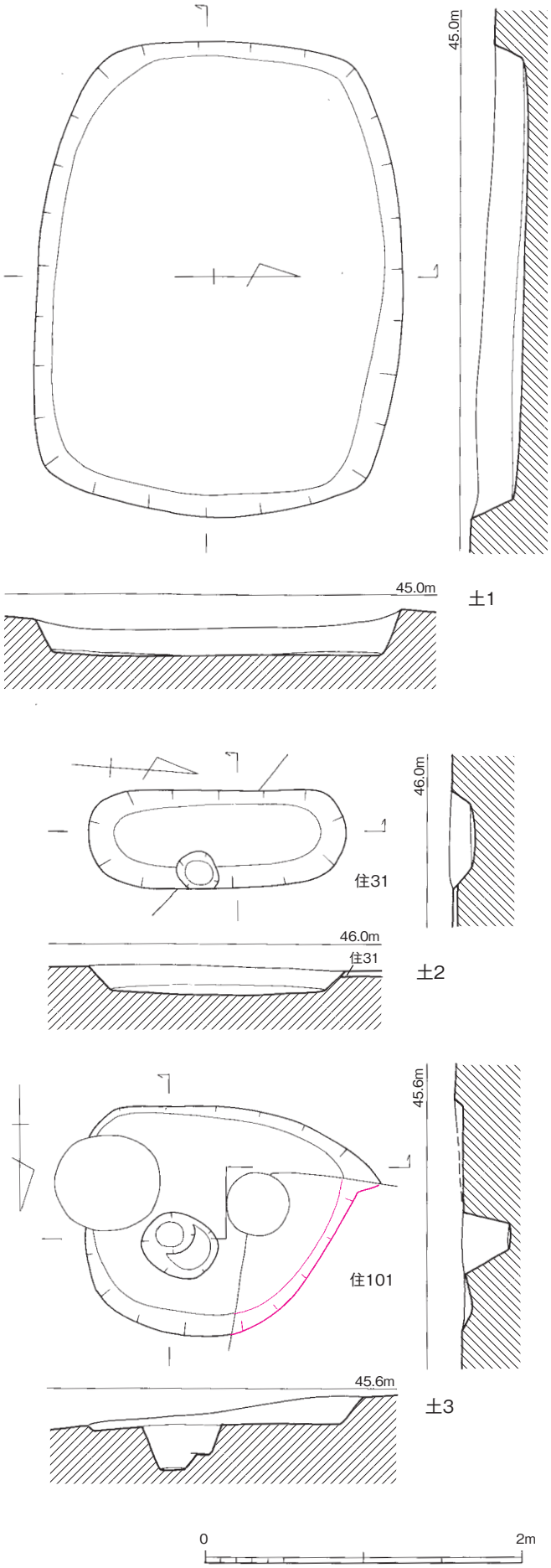
調査区西側の段落ち下部で検出した。調査区の中では北西端部に位置し、南に 4 号住居跡が隣接する。ただし検出層位は 4 号住居跡とは異なり、SX － 02 谷状落ち込み下層の除去後である。平面形状は隅丸長方形で、長軸を東西方向にとり、規模は埋土は谷状落ち込み下層とほぼ同じ黒灰色粘質土で、単層であった。出土土器から、古墳時代前期前半に位置づけられるが、SX － 02 下層で検出したことと整合する。出土炭化物の C14 年代測定を行っている（後述）。

出土土器（第 87 図、図版 51）

土師器（1･2）　1 は高坏で略完形に復元できる。坏部は深く、体部中位で屈曲する。口縁部は緩やかに外湾しながら開き、端部を四角く収める。脚部は上半部が円柱状で粘土を充填する。下半部は強く開き、開く部分に 3 孔をうがつ。2 は小型甕の底～胴部片。底部はやや尖底気味の丸底、体部は球胴。器壁外面には平行タタキ痕が一部に残り、その上からハケ目調整を施す。内面にはケズリ工具のようなやや鋭い工具で強くナデたような痕跡が残る。ケズリに近い調整か。

2 号土坑（第 86 図）

調査区の東端、中央よりやや南寄りで検出した。南に 12 号住居跡が、北に 21 号住居跡がそれぞ



第 86 図　1 ～ 3 号土坑実測図（1/40）

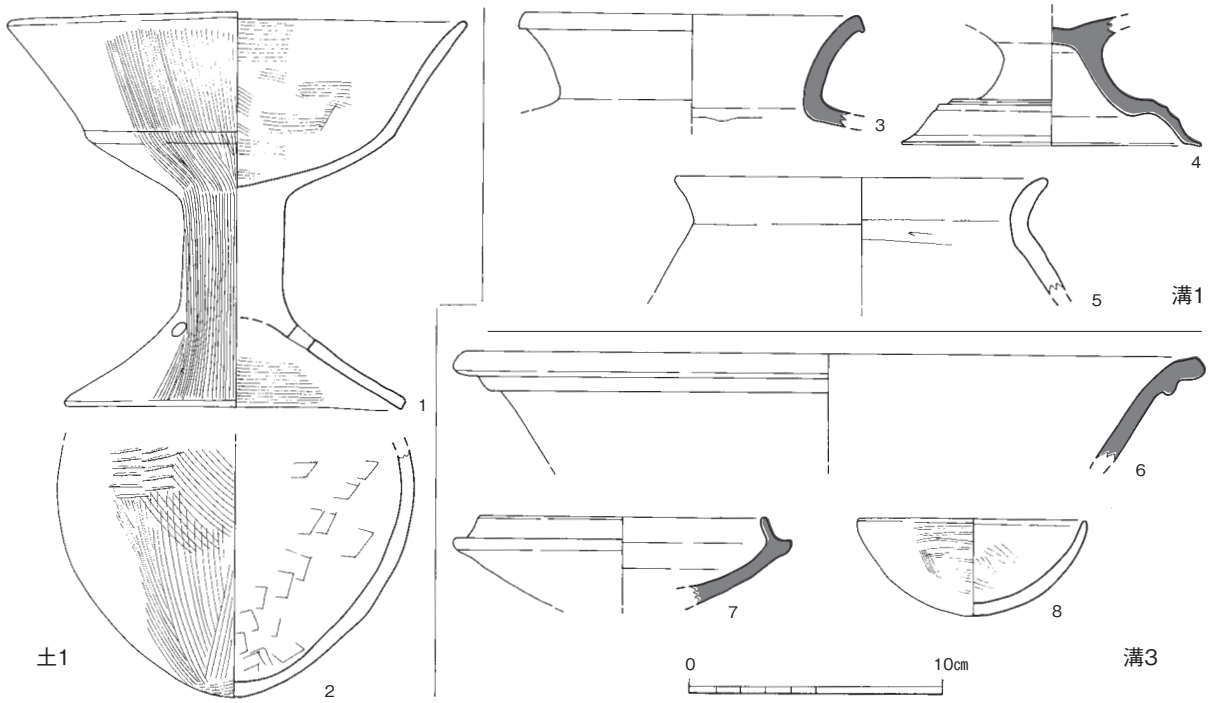
れ位置する。31 号住居跡と切り合い、その南壁を破壊している。平面形状はやや細長い小判状で主軸を大略南北方向にとり、規模は検出面で長軸が 1.60m、短軸が 0.62m をはかる。底部は船底状で、最も深い中央部付近で 16cmほどをはかる。埋土は暗茶褐色粘砂質土の単層で分層できない。出土土器は乏しく、図示できるものはない。31 号住居跡に後出することから、5 世紀後半以降の遺構と判断できるが、それ以上の絞り込みはできない。

3 号土坑（第 86 図）

調査区の中央北寄りで検出した。SX － 02 谷状落ち込み遺構の上層を掘りあげた下から検出したが、付近では下層の堆積が見られないため、SX － 02 谷状落ち込み下層との関係は不明である。101 号竪穴住居跡と切り合い関係を持ち、これよりも古い。また 2 号建物跡とも重複していて本遺構が古い。かなり削平されていて本来の形状をとどめていない部分も多いが、平面形状は不整長楕円形で長軸を略東西方向に持ち、規模は検出面で長軸が 1.84m、短軸が 1.42m をはかる。底部は平坦で最も深い中心部で深さ 20cmほどをはかる。中心やや北東寄りにピットが検出されたが、本土坑に伴うものかどうかは定かではない。土坑の埋土は黒褐色粘質土で分層できず、ピットの埋土も同質であった。出土土器は土師器のみで小片ばかりであり図示できるものはない。101 号住居跡が古墳時代前期の遺構の可能性があり、これに先行する遺構か。

（5）溝跡

調査区内から 3 条の溝状遺構を検出した。うち 1 号溝は埋没時期が中世期以降にまで下るもので、字図に残る旧水田の形状におおよそあうことから、水田の給・排水路と考えられる。ほかはともに古墳時代後期の遺構であろう。以下、個別に説明していく。



第 87 図　1 号土坑、1･3 号溝出土土器実測図（1/3）

1号溝（第5図）

Ⅰ区西側の段落ちの東側境界部に沿って走る溝である。上層は撹乱となっており、旧水田区画に沿って走っていることから、おそらく近代まで水田の給排水路として機能していたものと考えられる。下層は堅固な埋土であり、中世の土器が多く出土していることから、掘削は中世にさかのぼるものとみられる。全長は約50mほどで大略南西から北東に向かってうねりながら伸びる。幾度か掘り直しされていたものとみられ、中央部と南部で枝分かれして再び合流する状況が見られたが、土器を区別して取り上げていないので先後関係は不明である。また、南部で枝分かれして西に伸びる支溝があり、これを1－2号溝として掘っているが、基本的に埋土は共通であり、枝分かれ部における埋土の検討からも同時期に埋没したと見られた。図示した出土土器は古墳時代のものだが、他に近世陶器の小片がみられることから、埋没は近世以降であると考えられる。

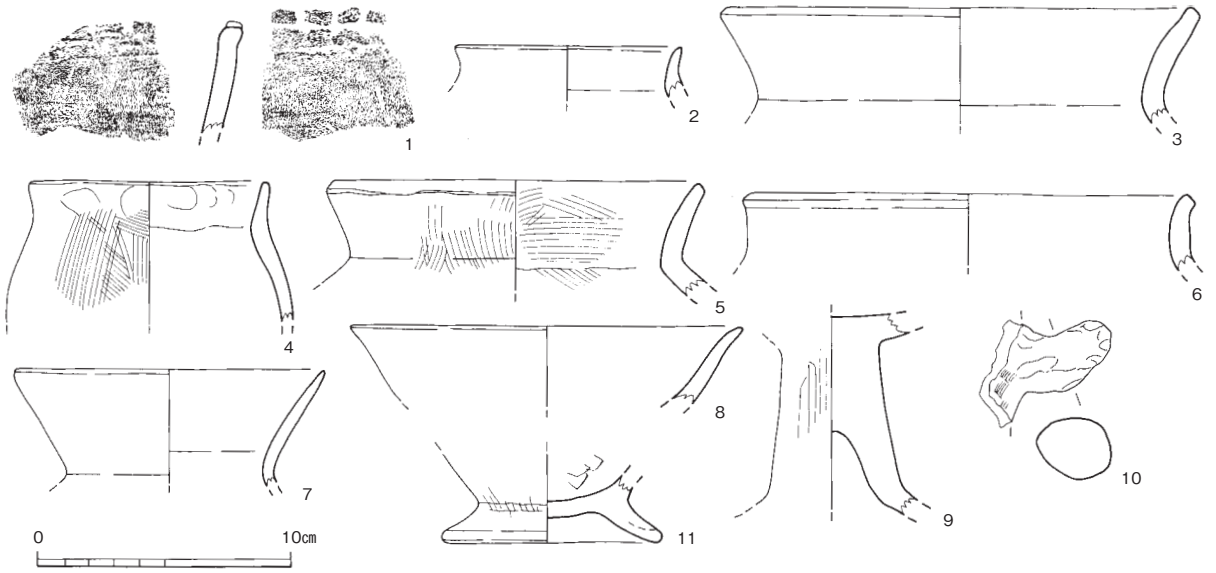
出土土器（第87図）

須恵器（3·4）　3は壷の口縁部片。頸部は強く締まり屈曲する。口縁部は短く外湾する。4は高坏の脚部。脚は強く開き、中位で大きく下方に屈強する特徴的な器形を持つ。脚端部は外に細く引き出す。

土師器（5）　5は小型の甕の口縁部片。胴部はやや長胴気味で頸部の締まりは悪い。口縁部は肥厚させつつごく短く外反する。

2号溝（第5図）

調査区の南東部を西から東へと伸びる細い溝である。15·17·44号住居跡により切られていることが明らかであるほか、付近の7·11·33号住居跡などもこの溝の上層にあたるとみられる。SX－02谷状落ち込み遺構の下層よりは新しいが、上層は付近では削平されていてほとんど認められず、両者の関係は不明である。埋土は黒褐色粘質土で、単層である。出土土器はわずかで図示できるものはない。切り合い関係からは5世紀後半代以前に位置づけられるが、SX－02下層埋没後の掘削であり、5世紀後半の谷下層埋没直後の遺構とみたい。



第88図　SX-01谷状落ち込み遺構出土土器実測図（1/3）

3 号溝（第 5 図）

調査区のほぼ中央部で検出した。50 号住居跡を切り、49 号住居跡により切られるものとして調査したが、50 号住居跡の新しいもの（50 A 号）が 7 世紀後葉に位置づけられる一方、49 号住居跡出土土器の多くは 6 世紀後半～ 7 世紀前半代のものであり、49 号住居跡と 3 号溝の切り合い関係を誤認した可能性も否定できない。幅 1m ほどの浅い溝で、検出した長さは 7m ほどである。埋土は暗褐色粘砂質土で、土器を比較的多く包含していた。出土土器はやや時間的な幅を持つが、6 世紀末以降の資料を含む。切り合い関係から、古代の遺構としておきたい。

出土土器（第 87 図）

須恵器（6･7） 6 は大甕の口縁部片。口縁部は強く開く端部をわずかに外湾させる。口縁端部は丸く収め、直下に断面半円状の突帯を回す。7 はカエリを持つ坏身で、カエリは退化して低く短い。

土師器(8) 8 は小型の椀。底部がやや尖底気味になる。内・外面に細いヘラ状工具でミガキを施す。

（6）その他の出土遺構

谷状落ち込み遺構

調査区内から浅く幅の広い谷状の埋没地形を検出した。ひとつは調査区の西端部を調査区の形状に沿って大略南北に走るもので、2 次調査Ⅰ・Ⅱ区で検出した SX － 04 谷状落ち込み遺構の南側延長部分である。もう一つは調査区の北西側から南東側に向かってやや湾曲しながら斜めに走るもので、2 次調査Ⅲ区で検出した SX － 04 谷状落ち込み遺構枝分かれ部の南側延長部分である。

SX － 01 谷状落ち込み（第 5 図）

調査区の西側端部を、調査区の端部に沿って南北に走る溝状落ち込みである。調査区内では東側の落ち際を検出している。2 次調査Ⅱ区で検出した SX － 04 の延長であり、現在も用水路が流れる小谷を形成する落ち込みとみられる。埋土は黒褐色粘質土を主体とし、土器を包含する。出土遺物には縄文土器から古墳時代後期の土器までが含まれ、最終埋没は古墳時代後期であろう。

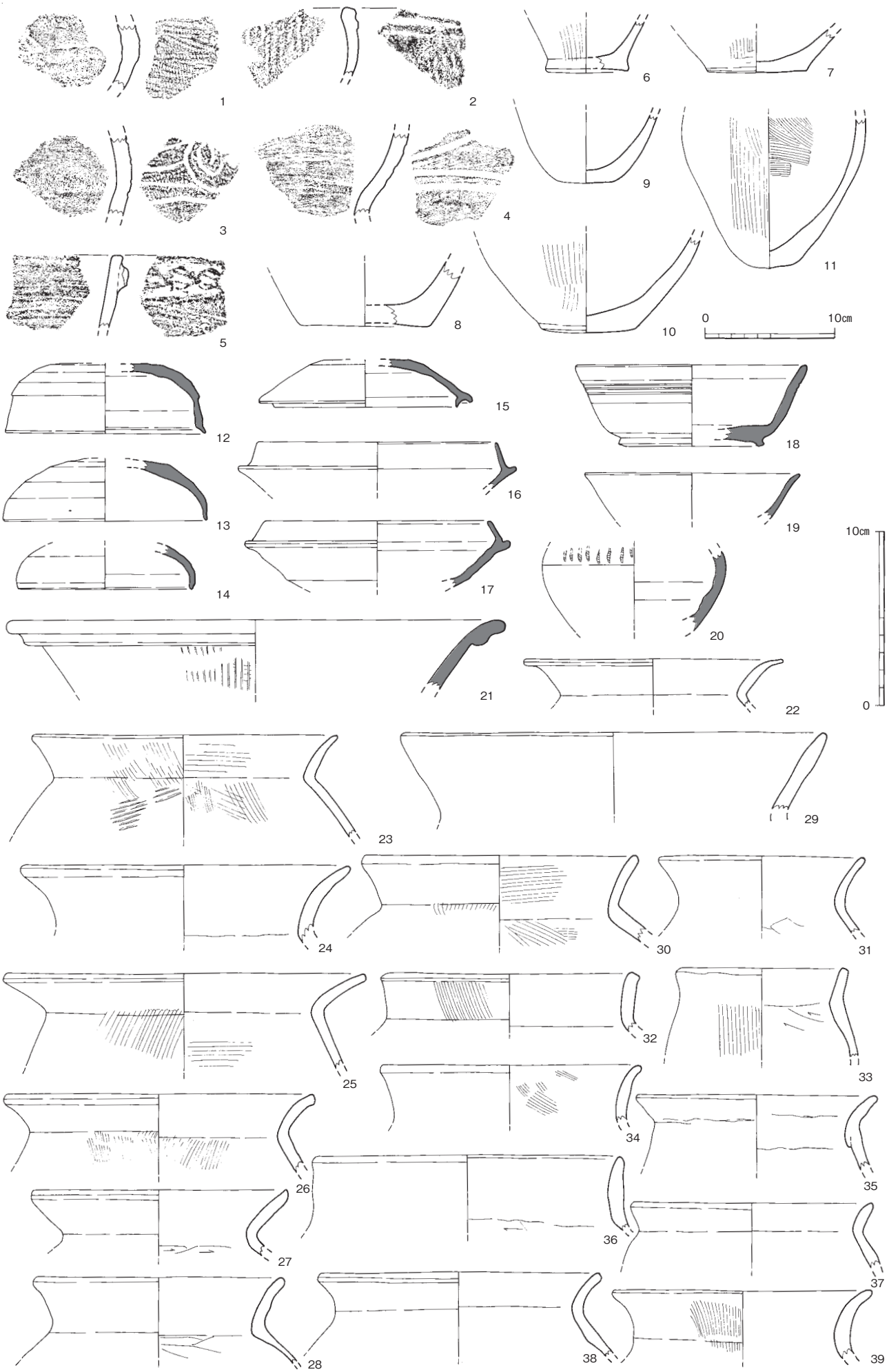
出土土器（第 88 図、図版 51）

縄文土器（1） 1 は口唇部に刻目を施す深鉢の口縁部片。後期阿高式系の土器か。

土師器（2 ～ 10） 2・4 は小型の壷の口縁部片か。頸部のしまりは緩く、口縁部はわずかに外湾しながら上に短く伸びる。3・5・6 は甕の口縁部片。3・5 は頸部がやや強く締まり口縁部は若干外湾しながら開く。6 は口縁部のみの資料で、短く直立する。7 は直口壷の口縁部片。頸部は強く締まり口縁部は強く開きつつ直線的に伸びる。8 は高坏の坏部片。段より上の資料で、口縁端部をわずかに外湾させる。9 は高坏の脚部片。やや開きながらまっすぐ下に伸び、屈曲して開くところまでの資料。10 は甑の把手片である。付け根がややすぼまり斜め上方に伸びる。

SX － 02 谷状落ち込み（第 5 図、図版 36）

調査区の東側を南北に貫く落ち込み遺構である。長さは検出分で約 100 m、最大幅は中央部で約 35 m、深さは最も深いところで 50㎝程度をはかる。2 次調査Ⅲ区で検出した SX － 04 谷状落ち込みの南側延長部分にあたり、同Ⅱ区で遺跡の西を南北に流れる谷状落ち込み（今次調査区 SX －



第 89 図　SX － 02 谷状落ち込み遺構出土土器実測図その①（6 ～ 11 は 1/4、他は 1/3）

01 谷状落ち込みの下流部分）に合流する。南は第 6 次調査 I 区にまで及んでいる。断面形状は浅いかまぼこ状を呈し、人為的な遺構ではなく自然地形と考えられる。埋土はおおよそ 2 層に分けられ、下層が黒灰色粘質土、上層が黒色粘質土で、いずれも遺物を包含するが、特に上層には多量の遺物を包含する。堆積状況から常時流水があったとは考えにくく、おそらく降雨時にはぬかるみとなる半乾燥の低湿地のような状況であったのではないかと推測される。上層からの混入品もみられるが、基本的に下層出土土器は古墳時代前期まで、上層出土土器は古墳時代後期までの遺物を含む。ただし、掘削時に上・下層をはっきり認識して出土土器を分別することができなかったので、ここでは一括して紹介する。

上層中から、滑石を用いた玉作り関連遺物を多く出土した。出土層位は検出面から約 10㎝程度掘り下げるまでの間に最も多く集中し、平面的には 41 号住居跡の北側直径 10m ほどの範囲と 1 号建物跡の北側同じく直径 10m ほどの範囲の大きく 2 箇所に集中して出土する傾向が見られたため、41 号住居跡北側の分布範囲を「A 区」、1 号建物跡北側の分布範囲を「B 区」として取り上げた。このほか、付近の上層包含層を人力で掘り下げている間にも多くの玉作関連遺物が出土しており、それらはいずれも包含層中の出土として一括して取り上げている。これらの玉作り関連遺物は、出土層位から古墳時代後期の所産と考えられる。

出土土器（第 89 ～ 91 図、図版 51･52）

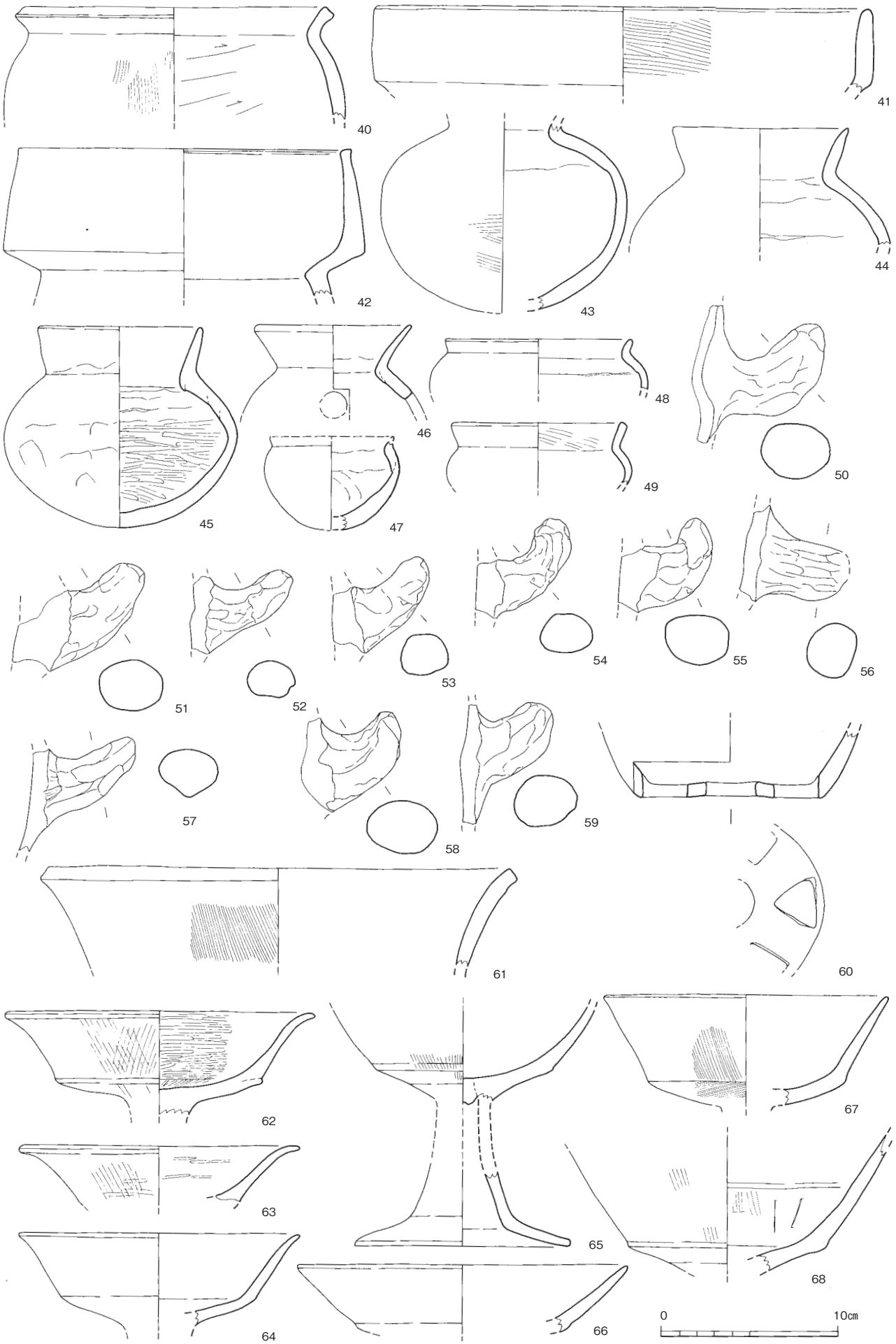
縄文土器（1 ～ 5） 1・2 は外面に縄文を施すもの。3 は外面の器壁全面に縄文を施し、その上から沈線で直線・曲線を描く。後期磨消縄文土器のたぐい。4 は沈線で直線を描き文様とする。5 は口縁端部やや下に刻目突帯文を巡らせる深鉢で縄文時代晩期。

弥生土器（6 ～ 11） 6・7 は平底の土器の底部で弥生時代中期の資料か。6 は甕、7 は壷か。8 ～ 10 はいずれも甕の底部片で、底・胴部境がやや不明瞭となりレンズ状底化しつつあるもの。後期前半～中葉の資料。11 は丸底の甕の胴～底部片。後期末の資料。

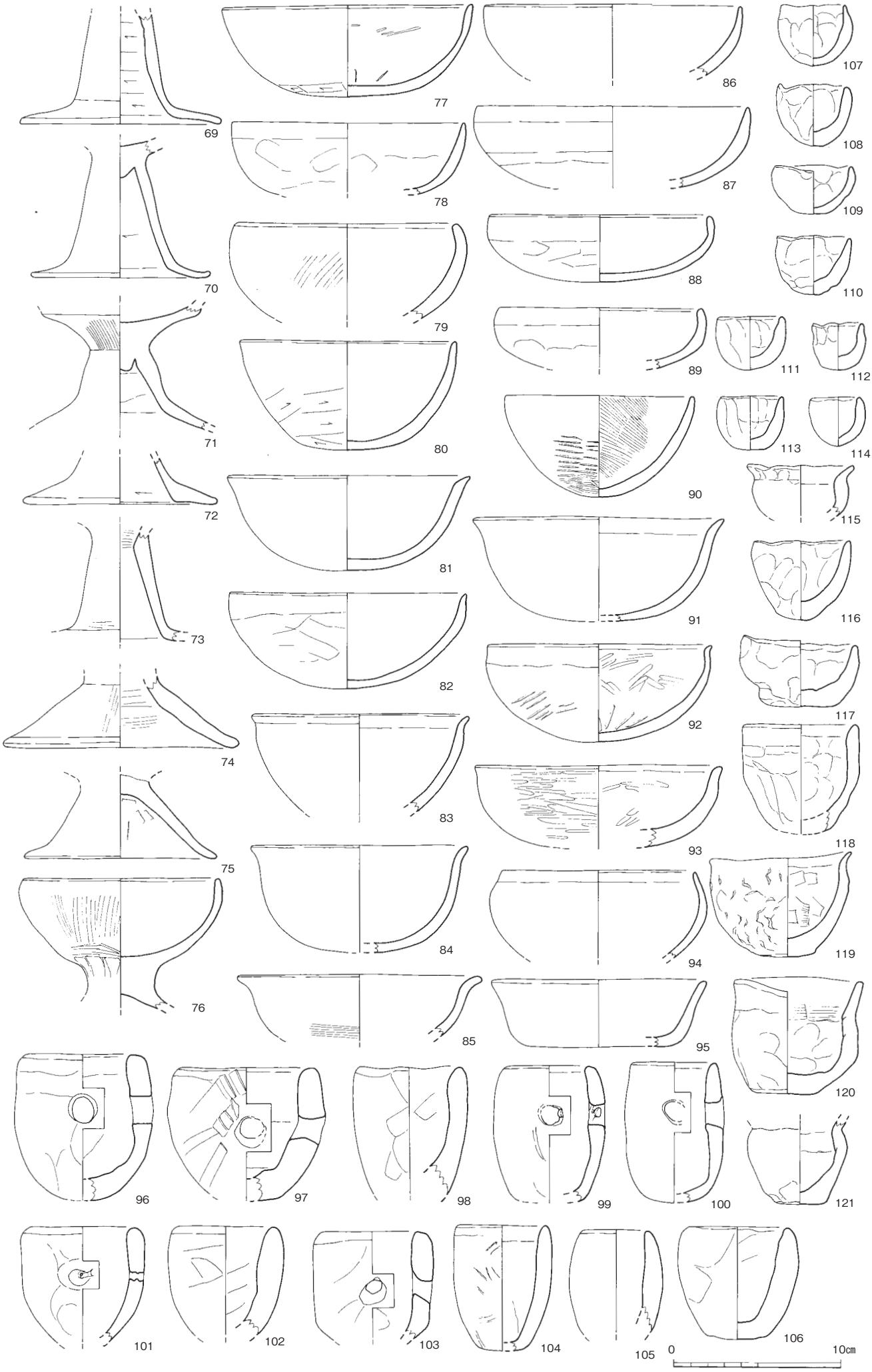
須恵器（12 ～ 21） 12 は肩部に段を有する坏蓋。天井部は平坦で、肩はやや強く湾曲し、口縁部との境に段を持つ。口縁部はわずかに開きつつ直線的に伸び、端部を斜めに仕上げる。13・14 も坏蓋で、天井部から口縁部まで緩やかに湾曲するもの。14 は口縁端部を強く内湾させる。15 はカエリを有する坏蓋で、天井部はやや平坦、口縁部付近まで斜めに直線的に伸びる。カエリは退化しつつある。16・17 はカエリを持つ坏身。いずれもカエリの突出部は強く、口縁部は内傾しつつやや短く伸びる。18 は高台を持つ坏身。底部は平坦で口縁部は斜めに直線的に開く。高台部断面形は外にやや踏ん張る。19 もおそらく高台を持つ坏身であろう。口縁部のみの資料で、わずかに外湾しやや新しい。20 は甕の胴部片。肩部がやや張り、胴部最大径付近の外面に短斜線の連続を一周させる。21 は大甕の口縁部片。強く開き、端部を丸く仕上げ、端部直下に丸い突帯を一周させる。

土師器（22 ～ 121） 22 ～ 40 は甕。22 ～ 29 は頸部が強く締まり明瞭に屈曲するもの。口縁部はわずかに外湾しながら強く開く。29 は頸部のしまりが緩く口縁部は直線的に開く。30 ～ 34・36 は口縁部がやや直立気味に伸びるもの。頸部のしまりは緩いものが多い。35・37 ～ 39 は頸部のしまりが緩く口縁部がやや肥厚しながら如意状に外湾するもの。やや長胴のものが多い。40 は球胴で頸部がやや強く締まり口縁部がごく短く外反する。

41 ～ 49 は壷。41・42 は二重口縁壷の口縁部片。いずれも口縁屈曲部より上が直線的に真上に伸びる。43 はやや扁平な球胴の壷胴部。44 ～ 46 は直口壷。球胴あるいはやや扁平な胴部を持ち、頸



第 90 図　SX － 02 谷状落ち込み遺構出土土器実測図その②（1/3）



第 91 図　SX － 02 谷状落ち込み遺構出土土器実測図その③（1/3）

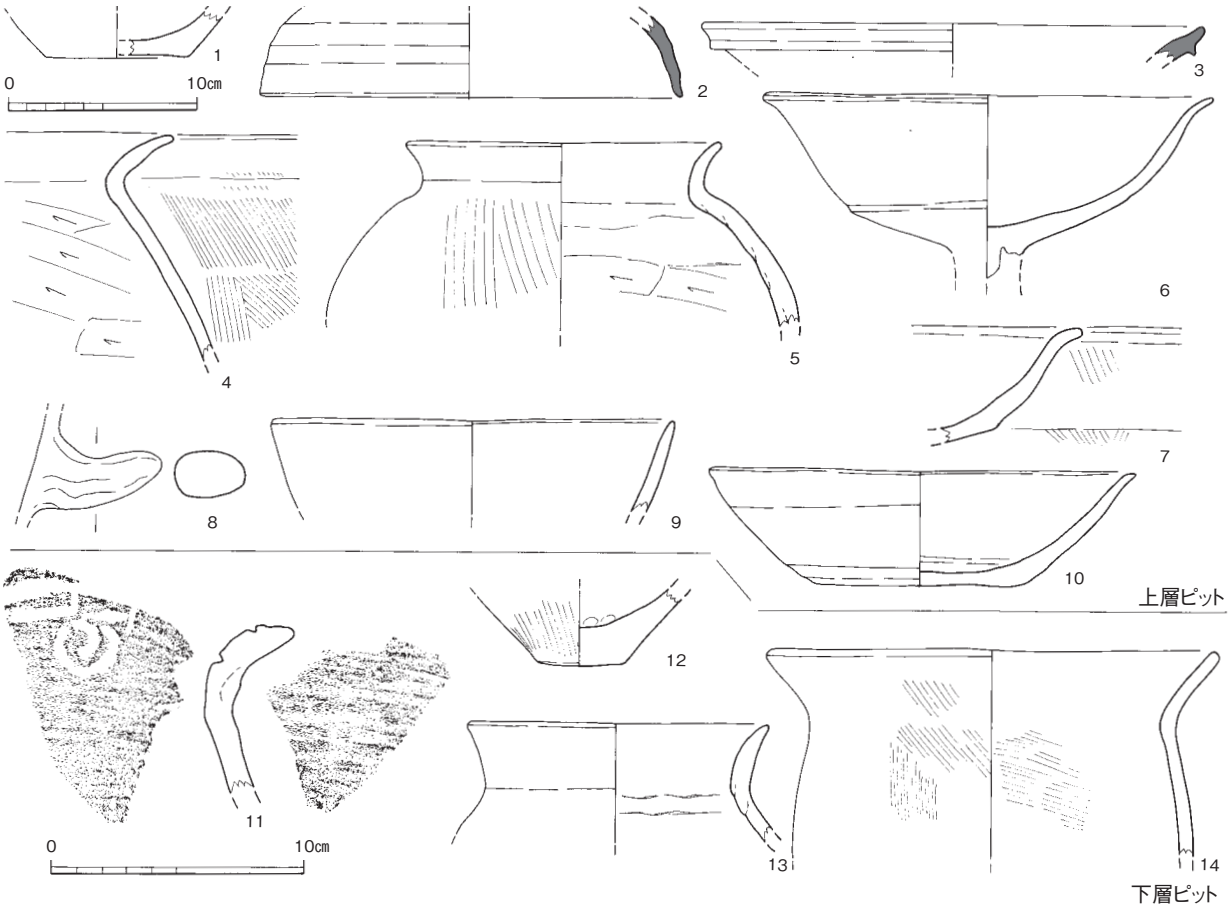
部は強く締まる。口縁部は直線的に強く開く。46 は胴部に円孔を 1 つ穿つ。47 ～ 49 は短頸壷。いずれも小型品。胴部は扁平で、頸部はやや締まり、口縁部は短く開く。

50 ～ 61 は甑。50 ～ 59 は把手。いずれもわずかに湾曲しながら斜め上方に伸び、外面に指ナデの痕跡をよく残す。断面形状はややつぶれた円形を示すものが多い。56 は短く直線的にやや下方に突き出すやや特異な形で、断面は円形に近い。60 は甑の底部片。平底で、中央に円孔を 1 穿ち、その周囲に三角形・方形の穴を配する特徴的な形態を持つ。同様の甑底部は半島でも中部地域に多く見られる。61 は口縁部片。口縁部は緩やかに開く。

62 ～ 73 は高坏。62 ～ 68 は坏部片。すべて坏部中位が明瞭に屈曲し、外面に段を形成するもの。62 ～ 64 は口縁部が緩やかに外湾する。62・63 は器壁調整にミガキを用いる。66・67 は口縁部が直線的に開くもの。66 は坏部が浅いが、65・67・68 は深い。69 ～ 73 は脚部片。いずれも脚が直線的に伸びつつ緩やかに開き、設置部に近い箇所で明瞭に屈曲して強く開く。71 は脚の高さが低い。72 は屈曲部が肥厚して接地面積が多い。

74・75 は脚付器種、おそらく脚付椀の脚部片。高さは低く、「八」の字状に強く開く。76 は脚付椀の椀部片。椀は半球形で口縁部がやや強く内湾する。

77 ～ 95 は椀または坏。やや浅い半球形のもの、底部が平坦で口縁部に向かい体部中位でやや強く屈曲するもの、浅い皿状のものなどがある。口縁端部は斜めに仕上げわずかに外に引き出す 77・81 ～ 83・91 ～ 94、外に強く引き出す 84・85、強く内湾させる 79・89・90 などがある。88・89 は須恵器模倣坏蓋の可能性もあろう。95 は平坦な底部と直線的で低い口縁部を持ち高台を持たない古代の坏身である。



第 92 図　Ⅰ区ピット出土土器実測図（1･12 は 1/4、他は 1/3）

96 ～ 106 はタコツボである。いずれも手づくねで作られ、器壁は厚く表面に指頭圧痕や指ナデ痕を多く残す。体部中位に 1 孔を穿つ。

107 ～ 121 は手づくねのミニチュア土器。107 ～ 114 は小型の椀型土器で、口縁部をわずかに外反させる 107 は甕のミニチュアの可能性がある。115 ～ 117 はやや大きめのもので、115 は鉢のミニチュアか。118 ～ 121 はミニチュア土器としては大型で、118・119 は甕または鉢、120・121 は壷のミニチュアか。

なお、他に第 120 図 101 の管状土錘、同 118 のガラス小玉、第 129 図 1･12 の鉄鏃が出土しており、また多くの滑石製品・未製品が出土した（後述）。

ピット（第 6 図）

調査区内の各所から多くのピットが出土した。深さや径は多様である。複数が組み合って何らかの遺構を形成していたものと考えられるが、調査時に復元できなかったため、個別の報告はしない。ここでは、上層ピット・下層ピットに分けて出土遺物を報告する。

Ⅰ区上層ピット出土土器（第 92 図、図版 53）

Ⅰ区で検出されたピット群のうち、SX － 02 谷状落ち込み掘削前に検出したものを上層ピットとする。出土土器には弥生～古代のものが含まれるがほとんどは古墳時代後期のもので小片が多い。

弥生土器（1）　1 は甕の底部片か。平底で薄く、中期末前後のものか。ピット 207 出土。

須恵器（2・3）　2 は肩部外面に段を持つ坏蓋。口縁部のみ残るが、やや強く開く。口縁端部はごくわずかに外湾させる。ピット 305 出土。3 は甕の口縁端部片か。強く開き、端部やや下に断面三角形の突帯を巡らせる。ピット 208 出土。

土師器（4 ～ 10）　4・5 は甕の胴上位～口縁部片。ともに頸部が強く締まり口縁部は外湾しながら開く。5 はやや直立気味に開く。6・7 は高坏の坏部片。いずれも中位外面に段を有するが、6 は屈曲が極めて弱く外面の段は沈線状に作り出す。7 ははっきりとした段がみられる。ともに口縁端部は外湾させる。8 は甑の把手。やや湾曲させながら斜めに伸ばす。9 は直口壷の口縁部片か。わずかに外湾させつつ直立気味に伸びる。10 は坏。底部は平坦で高台を持たない。口縁部は斜めに伸びて端部をわずかに外に引き出す。

Ⅰ区下層ピット出土土器（第 92 図、図版 53）

Ⅰ区 SX － 02 谷状落ち込み遺構を完掘した後その下層で検出したピット群を下層ピットとする。出土遺物の多くは縄文時代～古墳時代前期に属し、一部に古墳時代後期のものを含む。上層ピットの掘り残しを含んでいる可能性がある。

縄文土器（11）　11 は波状口縁の深鉢で、貝殻条痕で器壁調整した上から沈線で文様を描く。後期阿高式系の資料か。

弥生土器（12）　12 は甕の底部片。わずかにレンズ状底化しており後期中葉の資料か。

土師器（13・14）　13・14 は甕の口縁部片。13 は頸部のしまりが緩やかで口縁部は肥厚しながら緩やかに湾曲する。やや新しく古墳時代後期の資料。14 は長胴で口縁部が「く」の字に外反するもの。

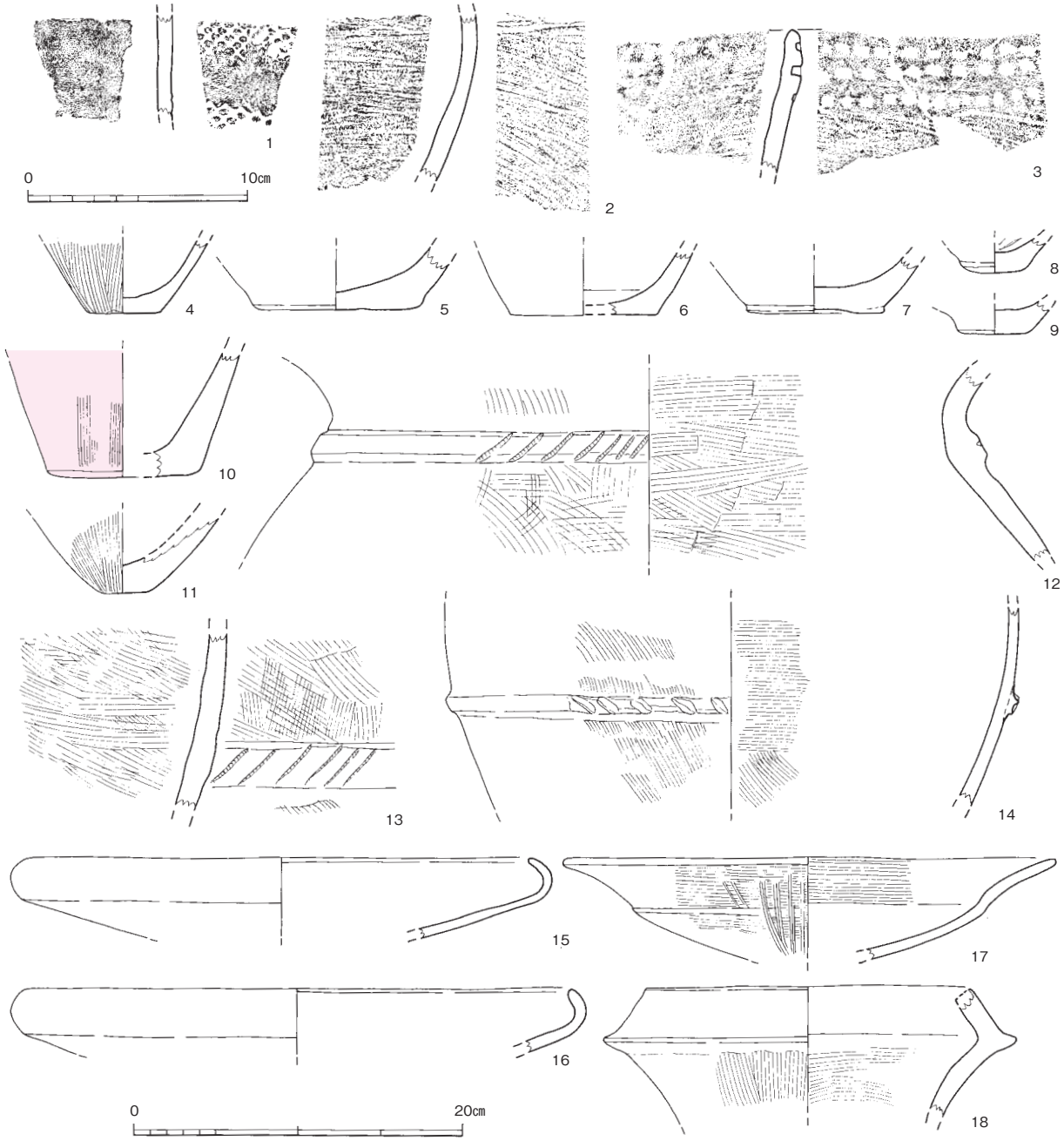
（7）その他の出土遺物

Ⅰ区包含層等出土土器（第 93 ～ 116 図）

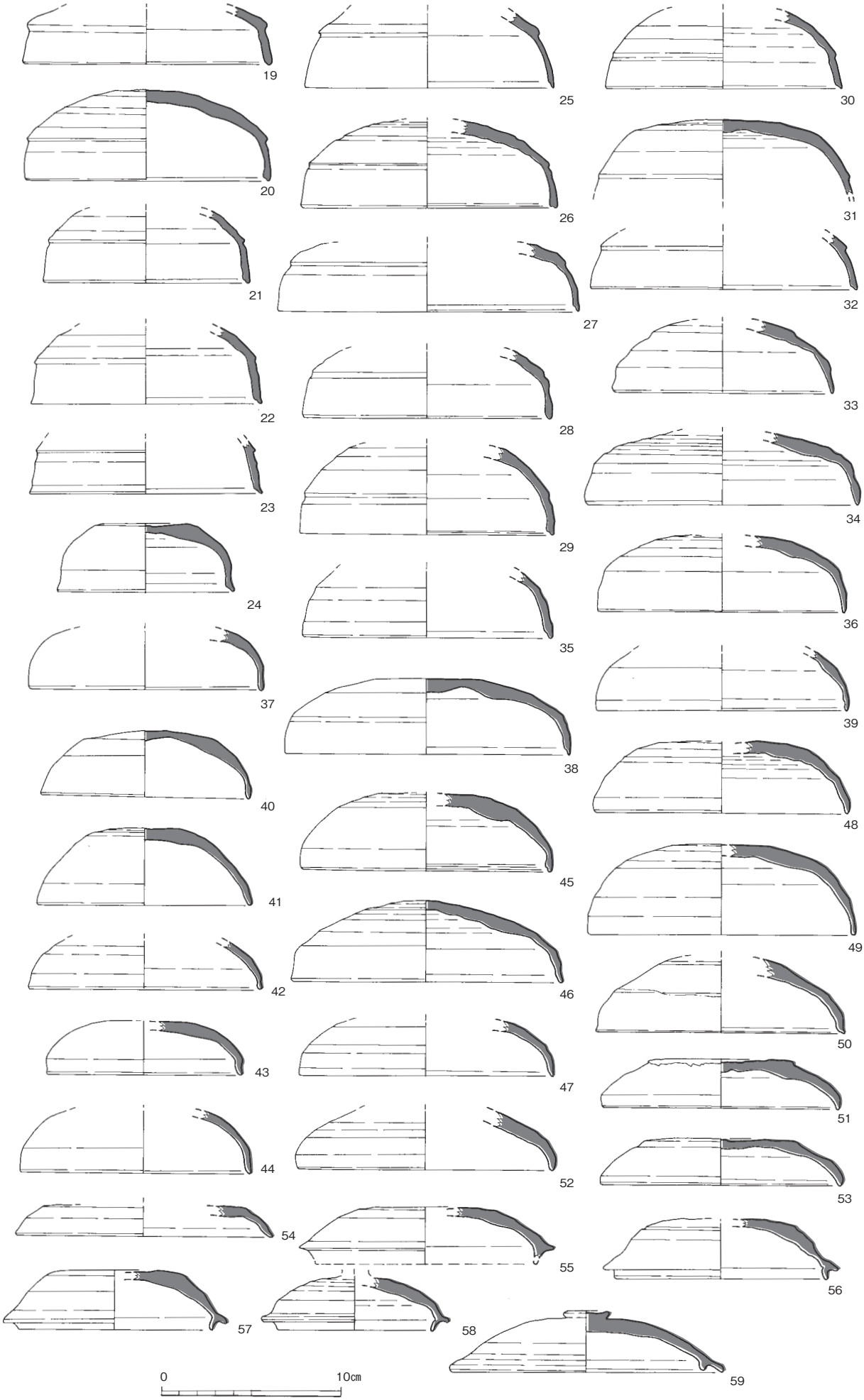
Ⅰ区で遺構検出中、撹乱内あるいは表土剝ぎ時などに出土した土器を報告する。

縄文土器（1 ～ 3）　1 は押型文土器。山型文を連続させる。2 は貝殻条痕で内外を調整した深鉢の胴部片。3 は深鉢の口縁部片で、外面に四角形の非貫通孔を約 5㎜間隔で 3 周させる。

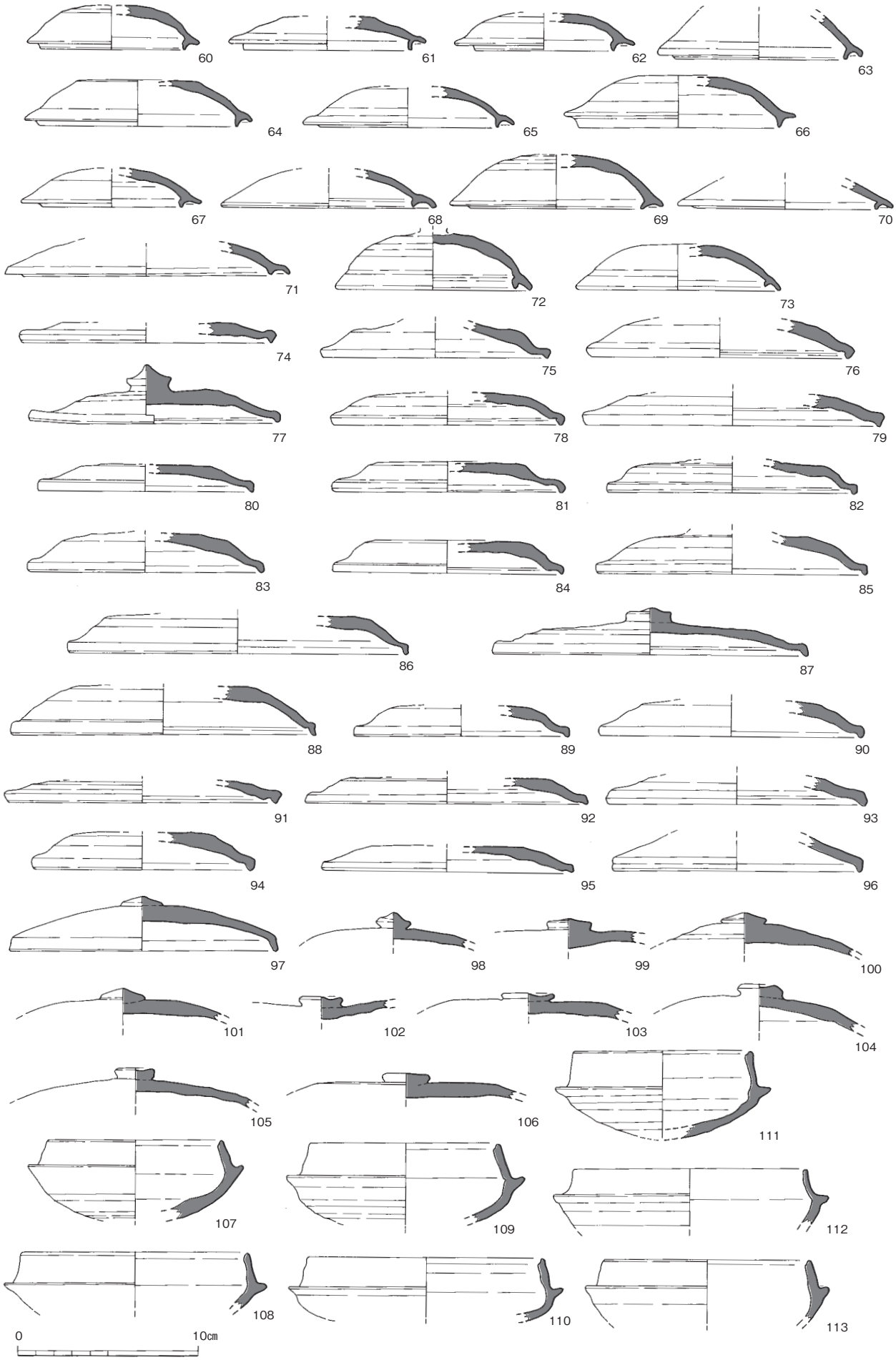
弥生土器（4 ～ 18）　4 ～ 11 は甕の底部片。いずれもレンズ状底化しており、後期の資料である。12 は大型甕の頸部片か。頸部やや下方に断面低台形の突帯を 1 周させ、年輪の浮き出た板状工具で短斜線を刻む。13・14 は大型甕の胴部下位か。ごく低い突帯の上に短斜線を刻む。14 も突帯を 1 周させ刻目を施す。15・16 は袋状高坏の口縁部片。ともに斜めに立ち上がり口縁端部を強く内湾させる。17 は有段高坏。坏底部は緩やかに内湾しながら広がり、段の上位は逆に緩やかに外湾する。18 は複合口縁壷の口縁部片。口縁端部は失われる。



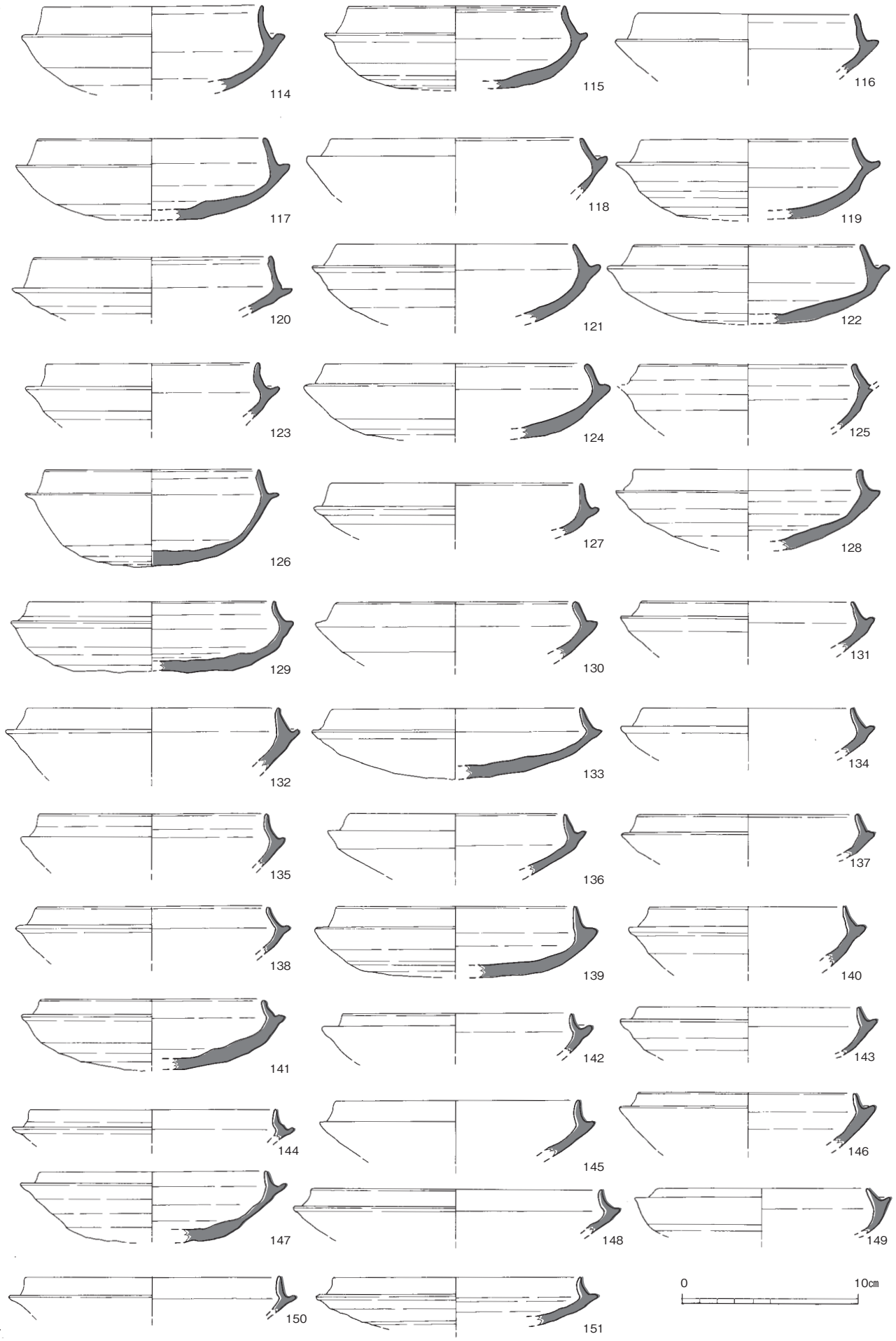
第 93 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図その①（1 ～ 3 は 1/3、他は 1/4）



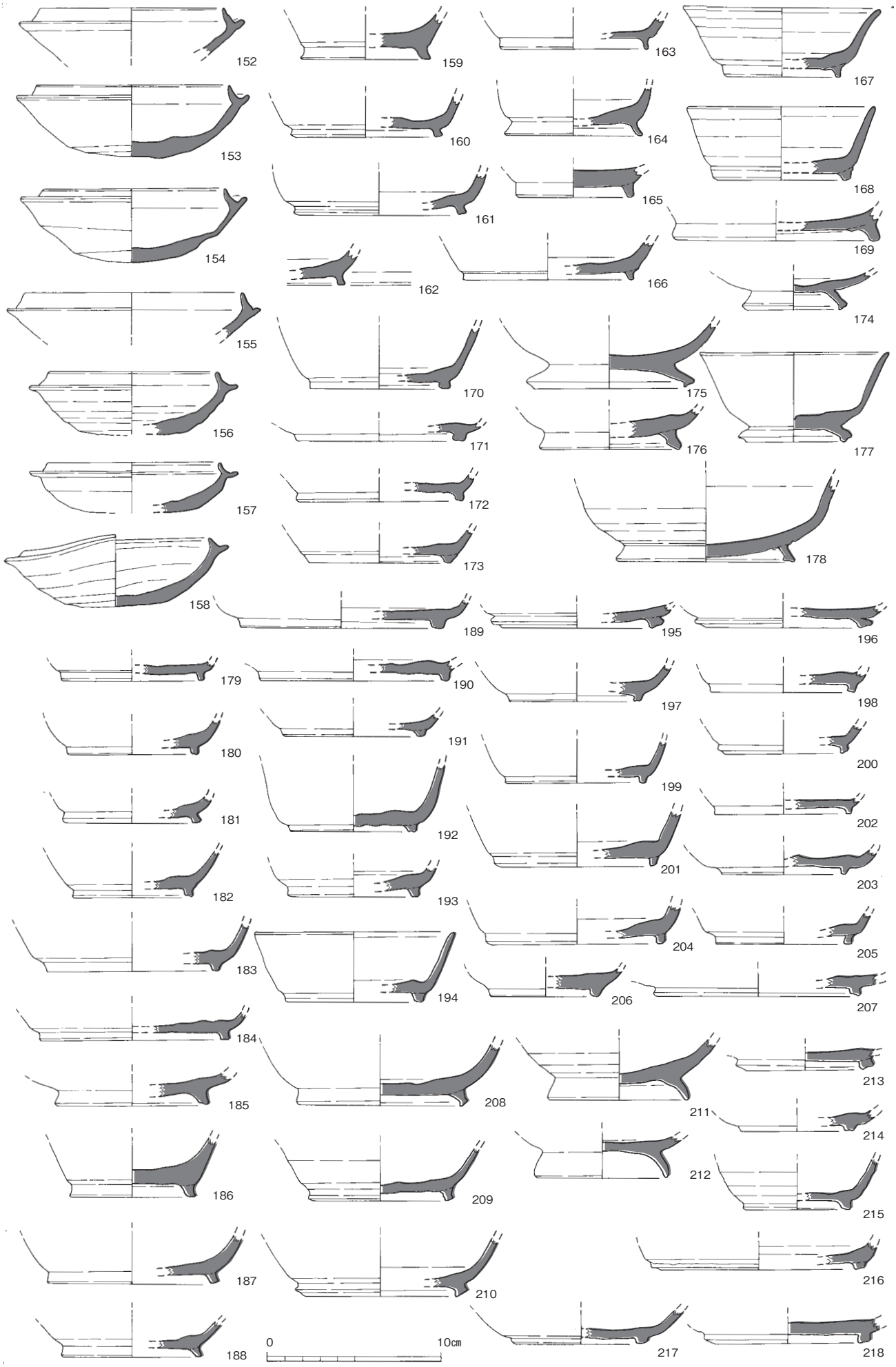
第 94 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図その②（1/3）



第 95 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図その③（1/3）



第 96 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図その④（1/3）



第 97 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図その⑤（1/3）

須恵器（19 ～ 314）　19 ～ 106 は坏蓋である。19 ～ 37 は肩部に段を有する坏蓋。天井部が残るものは丸く湾曲するものが多いが 24 のように平坦なものもみられる。口縁部は直線的に開く 19・21 ～ 24 のようなものと、わずかに内湾しながら開く 20・25 ～ 33 のようなものがみられる。口唇部は斜めに処理をするものが多いが、33・34 のように丸く収めるものもみられる。38 ～ 54 は段が退化して失われた坏蓋。天井部から口縁部まで丸みをおびて緩やかに伸びる 36 ～ 50 が古く、天井部が平坦で器高が低くなる 51 ～ 54 は新しい。口縁端部をわずかに外湾させる 42・43・46・50 が特徴的である。54 ～ 73 は口縁部にカエリを有する坏蓋である。口縁部が下に突き出る 54 ～ 58 のような形態から、口縁部が短くなりカエリ部が斜め下に伸びる 71 ～ 73 のようなものまでを含む。59 のようにつまみを持つものもあるが大半はつまみを持たない。73 ～ 97 は口縁部が嘴状となる坏蓋である。天井部は平坦で、肩部から一度屈曲して再び反転し、口縁部が水平に伸びる 73・77・80 ～ 86 のようなものと、天井部からなだらかに下り口縁部に至る 96・97 のような資料がある。つまみは 77 で中央がとがるものが、87・97 でボタン状の低いものが確認できるが、多くは欠損していて有無・形状が不明。98 ～ 106 は口縁部を欠失し、天井部・つまみ部が残る資料。宝珠状のつまみやボタン状のつまみが認められる。

107 ～ 229 は坏身。107 ～ 158 はカエリを有する坏身である。口縁部がやや内側に傾斜しつつ長く伸びる 107 ～ 126 のような資料が古く、口縁部が強く外湾しながら短く伸びる 129 ～ 151 のような資料が新しい。152 ～ 158 は口縁部が退化して低くなる。159 ～ 218 は高台を持つ坏身で高台部断面形状が明らかなもの。高台の断面形状にはいくつかのバリエーションがあり、外に強く張り端部をとがらせる 159 ～ 162、同じく外に張りつつ端部を丸く収める 163 ～ 169、付け根を細くして接地部が平坦な 170 ～ 172、外に強く張りつつ内側端部をつまんで下に引き出す形状の 174・175、同じく外側端部を引き下げる 176 ～ 178、四角く収める 179 ～ 207、外に強く張りつつ内湾する 211・212 などのものがある。219 ～ 225 はおそらく高台を持つであろうが欠失する坏身である。坏部形状は半球状に丸い 220、口縁部が直線的に伸びる 221 などのバリエーションを持つ。226 ～ 229 は高台を持たない坏身で、底部が平坦なもの。底部縁辺で明瞭に屈曲し、口縁部は直線的に開く。

230・321 は椀で、金属器を模倣したものであろう。

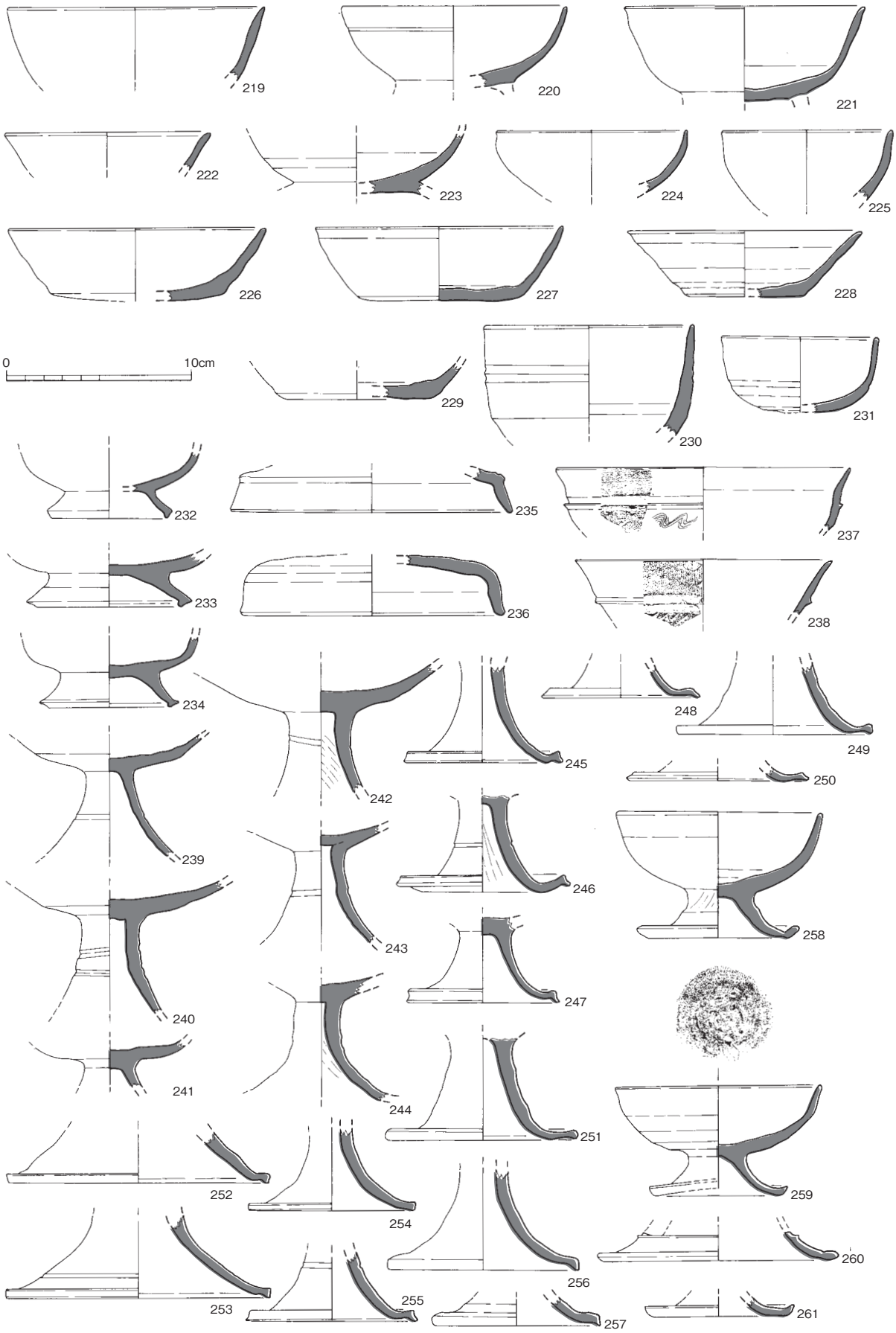
232 ～ 234 は脚付器種で、おそらく椀か。脚は「八」の字状に強く開き、端部を上下に引き出して肥厚させる。

235･236 は高坏の蓋であろう。天井部は平坦で、肩部で明瞭に屈曲し、口縁部は斜め下に伸びる。

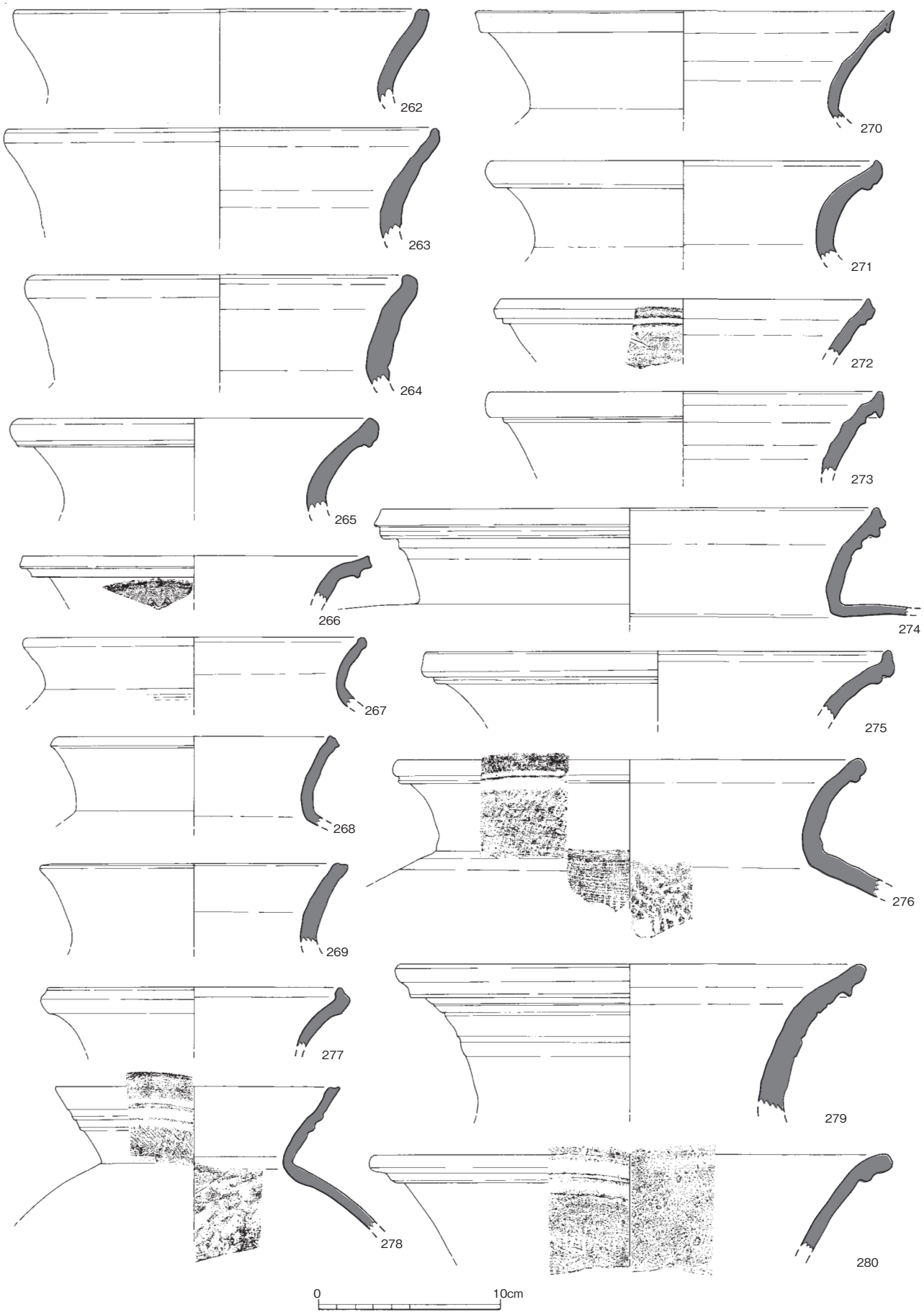
237 ～ 261 は高坏である。237・238 は口縁端部が外湾するもので古式。いずれも口縁部下に断面三角形の突帯をまわし、その下に櫛描波状文を巡らせる。239 ～ 244 は坏底部から脚上部までが残る資料。多くは脚上位に 1 条の沈線を回す。245 ～ 257 は脚端部が遺存するもの。「八」の字状に開きながら伸びていき、下方でやや強く外湾する。外湾度が顕著なものでは接地部より反転して斜め上方に向かうものもある。端部は程度の差はあるがいずれも下方につまみ出す。258・259 は低脚高坏である。坏部は半球状を呈し、脚は低く強く開く。脚端部をわずかに上方に摘み上げる点で先述の高坏とは異なり、その点から見れば 260・261 も同じ器種であろう。

262 ～ 264 は短頸壷の口縁部片か。頸部屈曲はやや不明瞭で、口縁部はわずかに開きつつ立ち上がり、端部を内側にわずかにつまむ。

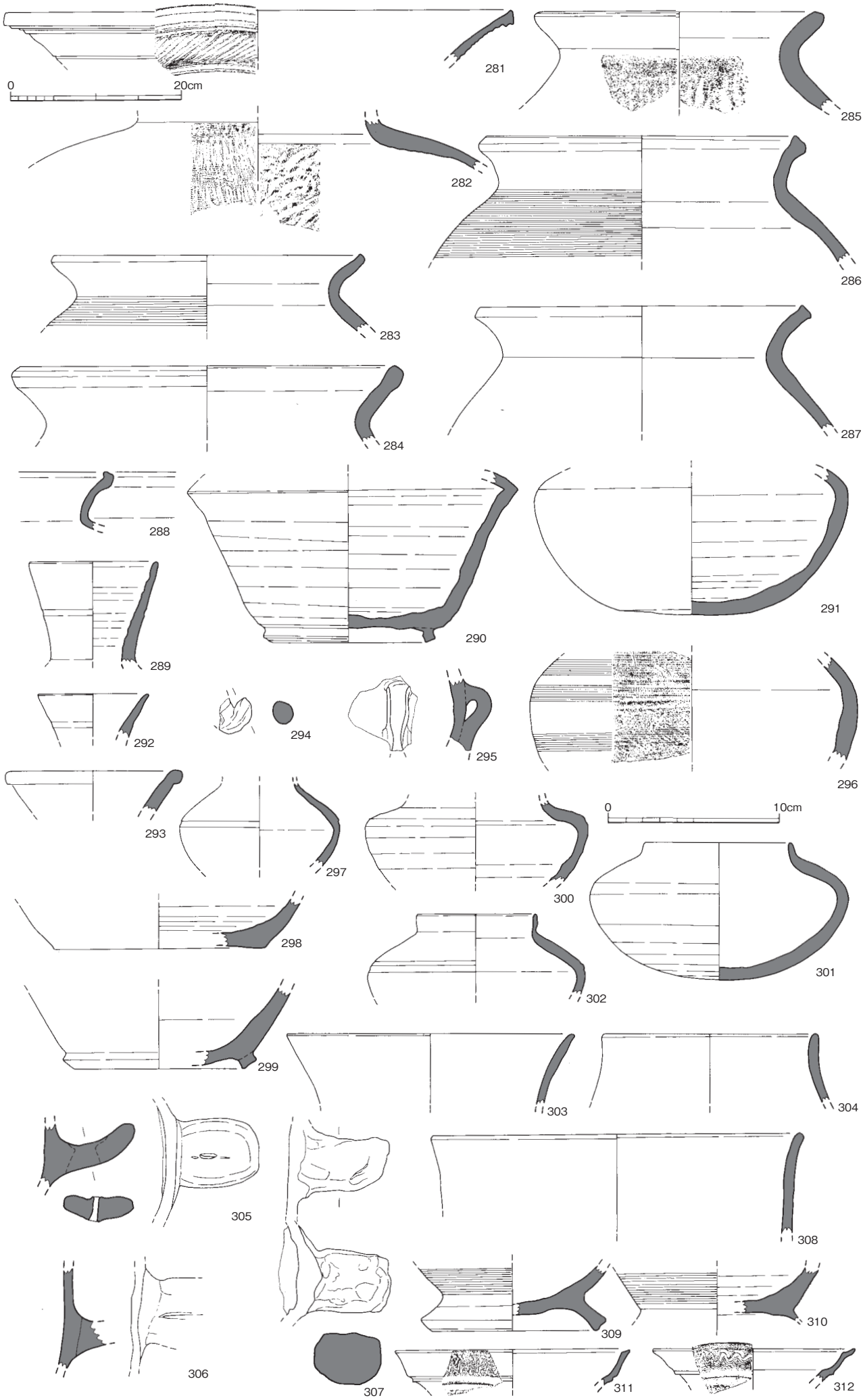
265 ～ 282 は大甕で、265 ～ 281 は口縁部、282 は肩～頸部の破片。頸部が残るものは強く締まる。



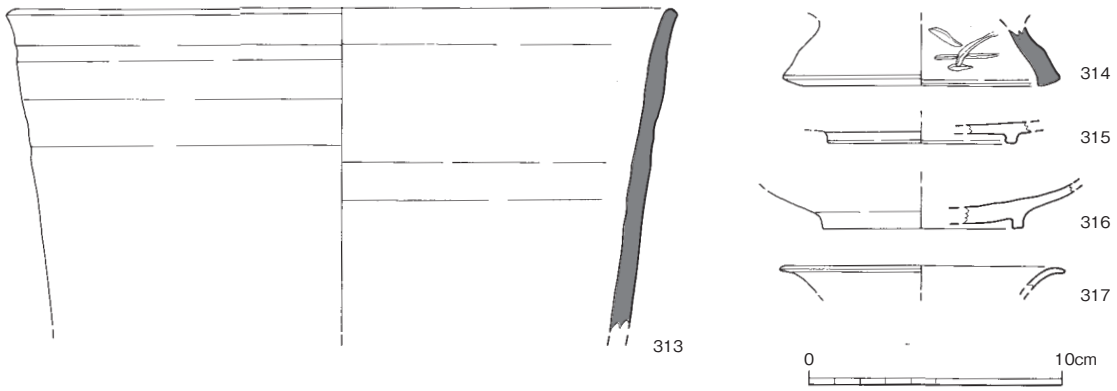
第 98 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図実測図その⑥（1/3）



第 99 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図実測図その⑦（1/3）



第 100 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図実測図その⑧（281 は 1/6、他は 1/3）



第 101 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図実測図その⑨（1/3）

口縁部は丸く収め、下部を突帯状に膨らませるものが多いが、257 のように内側につまみ出すものもみられる。266・278 は口縁下部外面に櫛描波状文を巡らせる。272 は口縁下部外面に「×」印を刻むが、連続するかは不明。281 は口縁下部外面に短斜線を連続させる。

283 ～ 287 は甕か。頸部のしまりや湾曲がやや緩く、口縁部が短い。やや長胴気味になるものか。288 もやや小型の甕であろう。肩は張り、頸部は強く締まって屈曲する。

289 ～ 304 は壷である。289 ～ 291 は長頸壷か。289 は口縁部片で、上方に伸びつつ開く。290・291 は胴部片である。290 は肩が強く張って明瞭に屈曲し、高台を持つことからやや新しい資料であろう。292 ～ 295 は提瓶か。292・293 は口縁部片。294・295 は肩部のつまみ。296・297 は壷の胴部片で器種不明。298・299 は長頸壷の底部片であろうか。298 は平底、299 は高台がつく。300 ～ 302 は短頸壷であろう。扁平な胴部と短い口縁部を持ち頸部はよく締まる。303・304 は器種不明だが直口壷の類か。

305 ～ 308・313 は甑。305・306 は中央にスリットを貫通させる把手。308 は断面形状が四角形に近い把手。308･313 は胴上位～口縁部の資料で、直線的に開きわずかに口縁部を外反させる資料。これらはいずれも、胎土が黄色味をおび焼成がやや甘い特徴を持ち、一部資料は形状も朝鮮半島の資料と類似することから、半島産の資料である可能性がある。

309・310 は高台がつく大型の器種であるが器種不明。311・312 は甕の口縁部片で、ともに口縁部外面に櫛描波状文を施す。314 は脚付椀の脚部か。脚部内面に天地を逆転させて「大」あるいは「天」のような文字をヘラ書きする。

陶磁器等（315 ～ 317）　315・316 は緑釉の皿か。317 は同じく緑釉の段皿の口縁部か。ともに胎土は黄白色できめ細かく、やや軟質。釉は黄緑色を呈し残りは悪い。

土師器（318 ～ 711）　318 ～ 355 は壷。318 ～ 335 は二重口縁壷である。318 は大型品で屈曲部径が 48.5㎝をはかる。319 は屈曲部外面が大きく突出するが内面には湾曲が認められず、頸部径も細い。326 ～ 328・330 ～ 332 は、口縁部の立ち上がりが外開きになるもので新しい様相を持つ。329 は口縁部が内湾しながら立ち上がり、やはり変容を受けているものか。333 ～ 335 は屈曲部の外面に形成されるべき段が不明瞭になり、口縁部が短く変化するもので大きく変容しており、特に 335 は二重口縁とはやや呼び難い形状となっている。336 ～ 341 は直口壷。口縁部は基本的にやや開き気味に直線的に伸びるが、336・337 は二重口縁が退化したような湾曲をもつ。342 ～ 344・346 ～ 347 は直口壷の頸部が短くなったものか。頸部は強く締まり頸部は短くやや外湾する。348 は球胴で頸部が閉まり口縁部は上に伸びる。345・349 ～ 351 はやや長胴気味で頸部のしまりは緩く、口

縁部はごく短い。352・353 は頸部のしまりが非常に緩く口縁部は如意状に外反する。これらは甕とすべきかもしれないが一応ここでは短頸壷としておく。354・355 は口縁部が内湾・あるいは外湾しつつ上に伸びるもので直口壷の変容か。354 は二重口縁壷の影響を受けている可能性があろう。356 ～ 368 も甕とすべきかもしれないが口縁部の立ち上がりが上方に伸びるため短頸壷として紹介しておく。胴部はおそらく球胴あるいはやや長胴気味であろう。頸部は強く締まり、口縁下半は上に立ち上がるが、強く外湾して開いていく。

369 ～ 488 は甕。369 ～ 392 は、頸部が強く締まって明瞭に屈曲し、しばしば「く」の字に折れ曲がるもので、口縁部はやや外湾しながら開く。胴部はやや長胴気味のものと球胴で内面を削り込むものがあり、前者は在地系の長胴甕の系譜、後者は布留甕の系譜をひくものであろう。382 は口縁部がわずかに内湾し端部を四角く収めており布留式の甕。393 ～ 436 は頸部のしまりがやや緩く、頸部は明瞭に屈曲せず、口縁部は外湾しながら広がるもの。古墳時代後期の資料であろう。438 ～ 470 は頸部が強く締まらず、口縁部はしばしば肥厚させながら強く外湾しつつ短めに伸びるもので、7 世紀以降の資料であろう。473 ～ 488 は頸部が明瞭に屈曲しつつ口縁部が肥厚しながら外湾するもの。

489 ～ 536 は甑である。489 ～ 493・495 ～ 498 は胴上位～口縁部の資料である。いずれも胴部はわずかに内湾しつつ直線的に広がり、口縁部は緩やかに外湾する。器壁調整は様々だがしばしば板ナデやミガキなどの甕には一般的ではない調整痕跡が認められる。494 は把手を欠損するが他はおおよそ前掲が判明する資料。499 ～ 503 は底部片。499・500 は大きな 1 孔をあける。501・503 は直径 2㎝ほどのややゆがみのある円孔をいくつか開けるもの。502 は直径 5㎜ほどの小さな穴を多く開けるもの。いずれも小片で全形は不明。504 ～ 536 は把手片。形状は様々であるが、わずかに上方に湾曲しつつ斜めに伸びて端部をとがらせ、断面形状が丸いものが多い。510 ～ 516 は断面形状が平坦な板状を呈するもので、特に 512・516 は特徴的な断面形状を持つ。535・536 は上側の中央に非貫通溝を掘るもの。半島にしばしば類例がある。

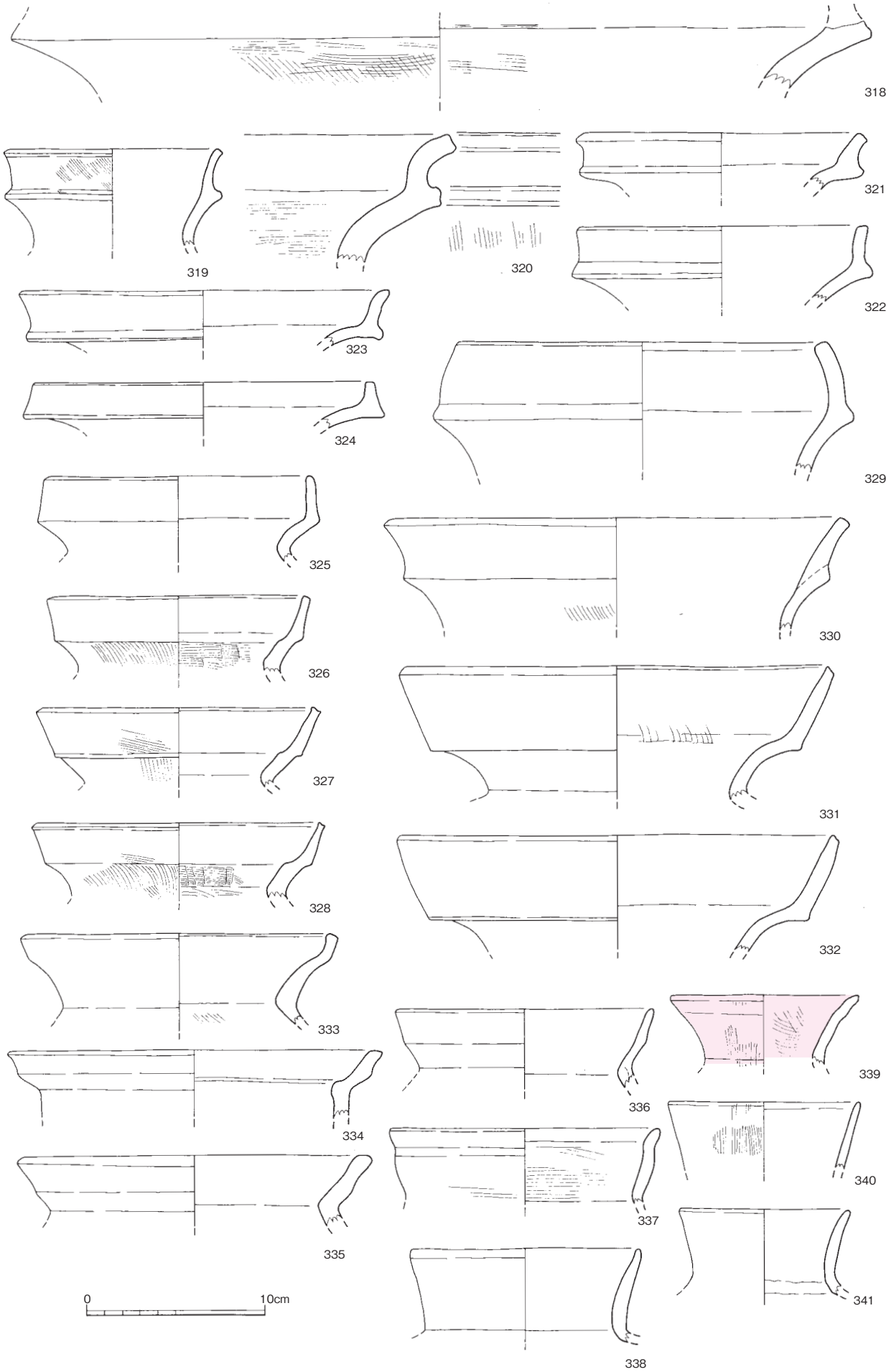
537 ～ 582 は高坏。537 ～ 545 は坏部形状がわかる資料。537 は坏部中位の段直下が強く湾曲しており、鉢の可能性もある。544 は坏部高が低く皿状を呈するもので、体部中位は屈曲せず緩やかに立ち上がる。546 は坏部が半球状を呈するものでやや浅い。それ以外は坏部中位で明瞭に屈曲して外面に段を持ち、口縁部は直線的に広がる。口縁端部を外湾させる 538・543 などと、直線的あるいはわずかに内湾させる 539・542 などの形態がみられる。547 ～ 582 は脚部片。547・548 は脚部高が高く、まっすぐ伸びる。549・550・568 は坏部直下から強く開く。他は少しずつ開きながら下方に伸び、接地部付近で強く外に開くもので、明瞭に屈曲するもの、明瞭に屈曲して肥厚させるもの、やや緩やかに湾曲させながら開くものなどがある。

583 ～ 588 は脚付椀の脚部片か。外湾しながら強く開くものが多いが 585 は内湾させつつ開く。

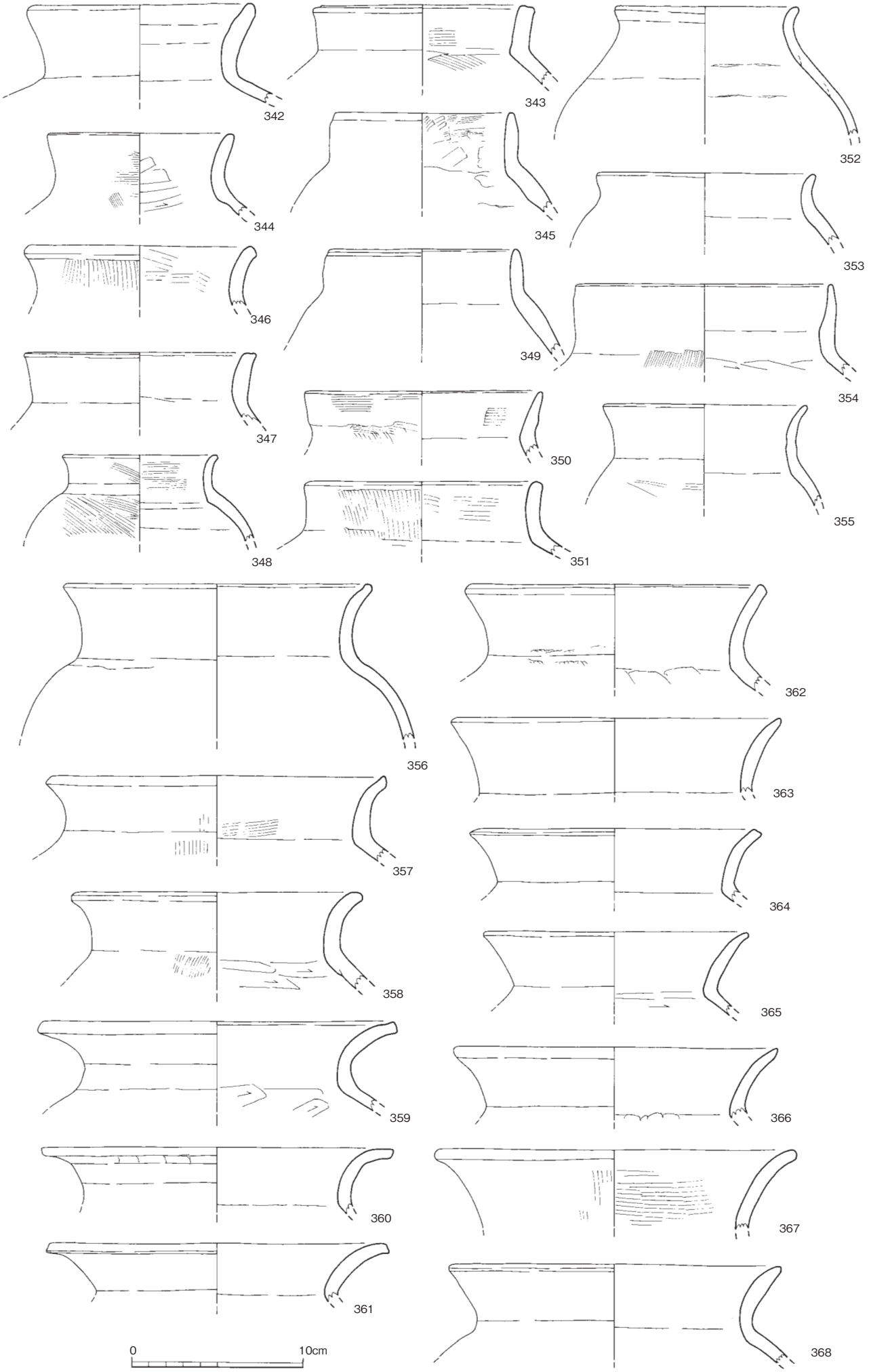
589 は鉢か。胴上位から口縁部のみの資料で全形は不明。口縁部は短く外反する。

590 ～ 638 は椀。590 ～ 603 はすり鉢状の器形で口縁端部が外反する。604 ～ 608 はつぶれた半球状の器形で、口縁端部がごく短く強く外湾する。609 ～ 637 は、器高の高低はあるが総じて底部から口縁部まで半球状に湾曲しながら立ち上がるもの。口縁端部を強く内湾させるものが散見される。

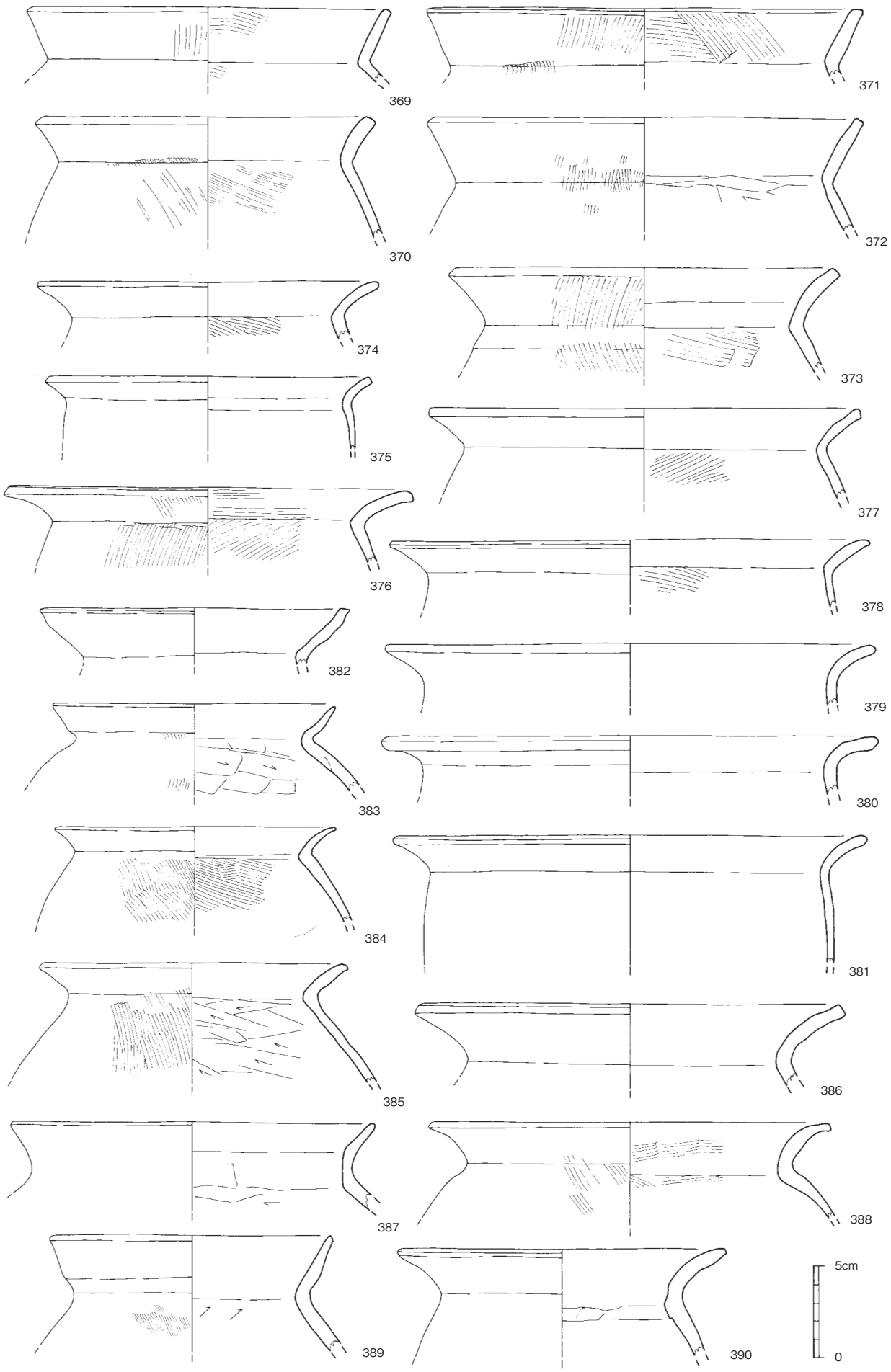
639 ～ 648 は小型の壷である。胴部は総じて球状あるいは扁平な球状を呈し、口縁部は短く外反



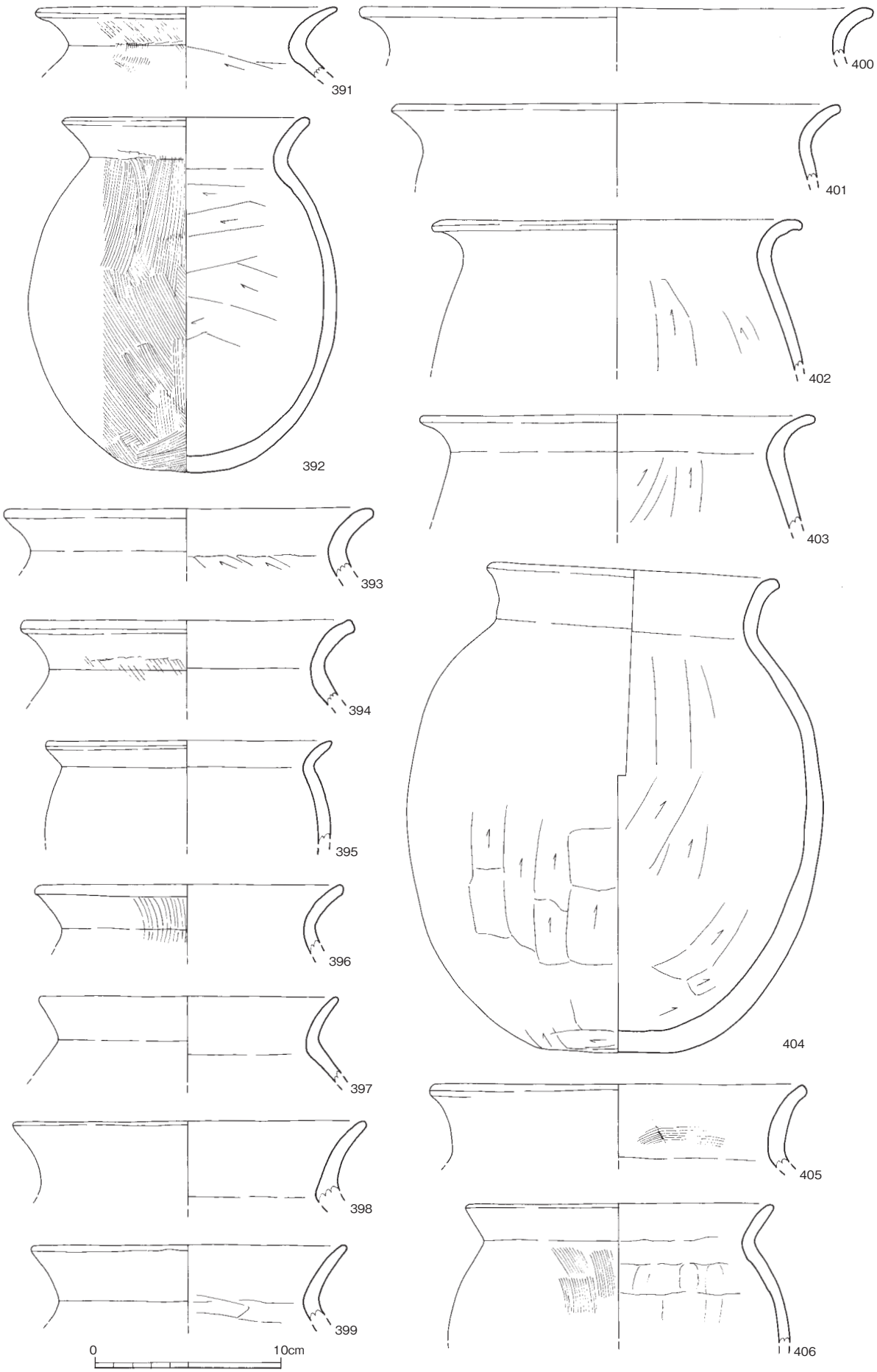
第 102 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図実測図その⑩（1/3）



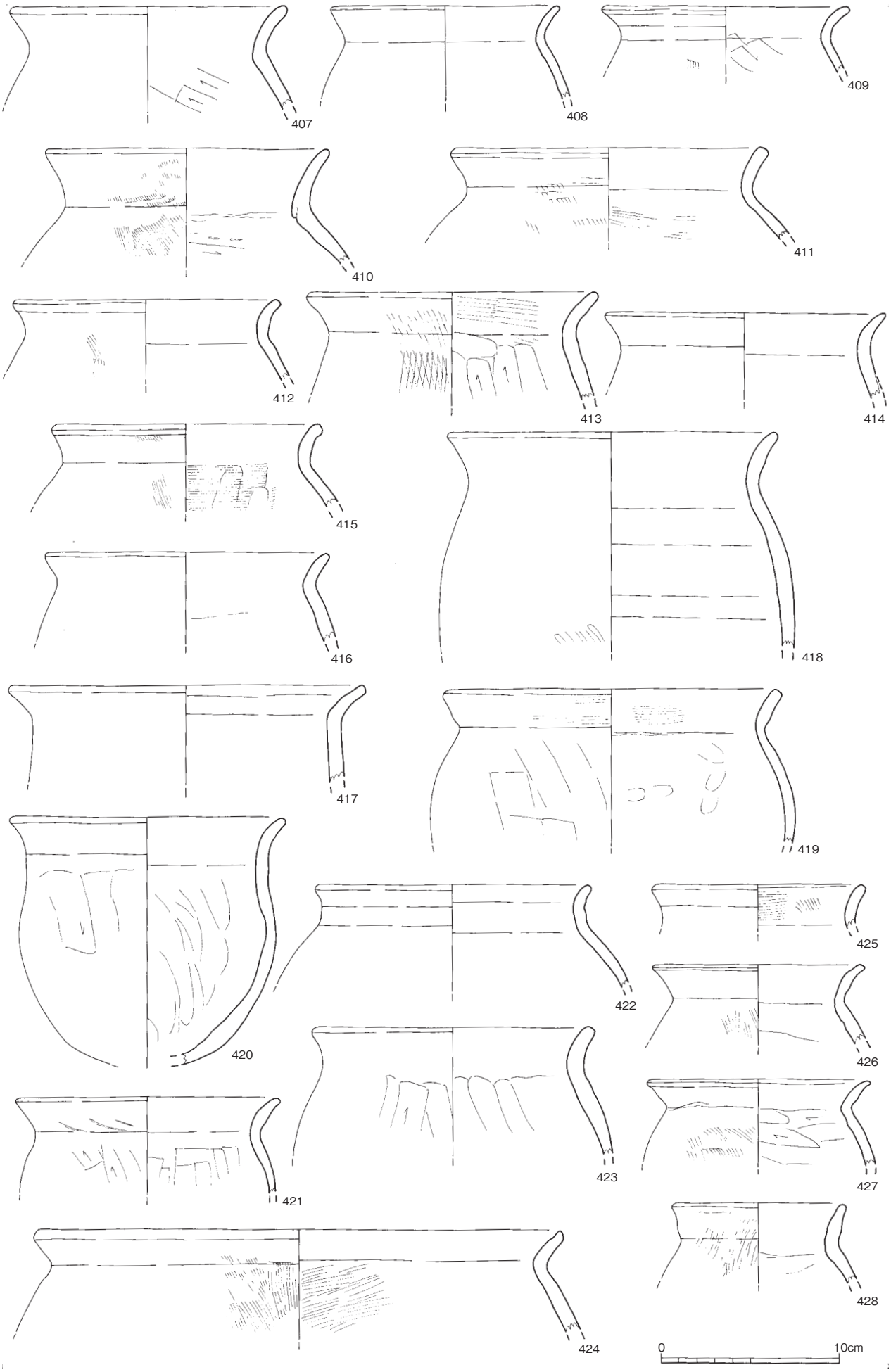
第 103 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図実測図その⑪（1/3）



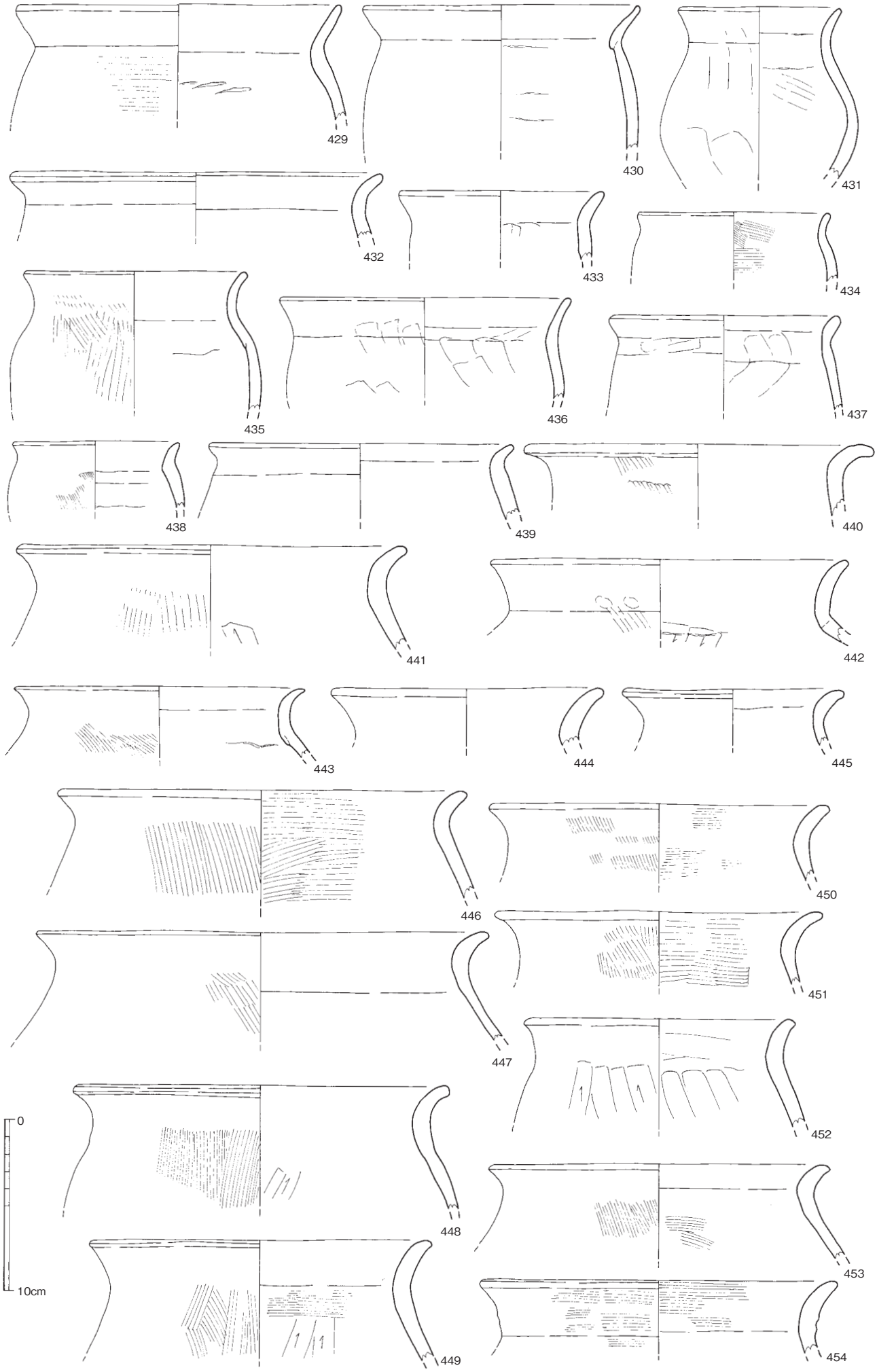
第 104 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図実測図その⑫（1/3）



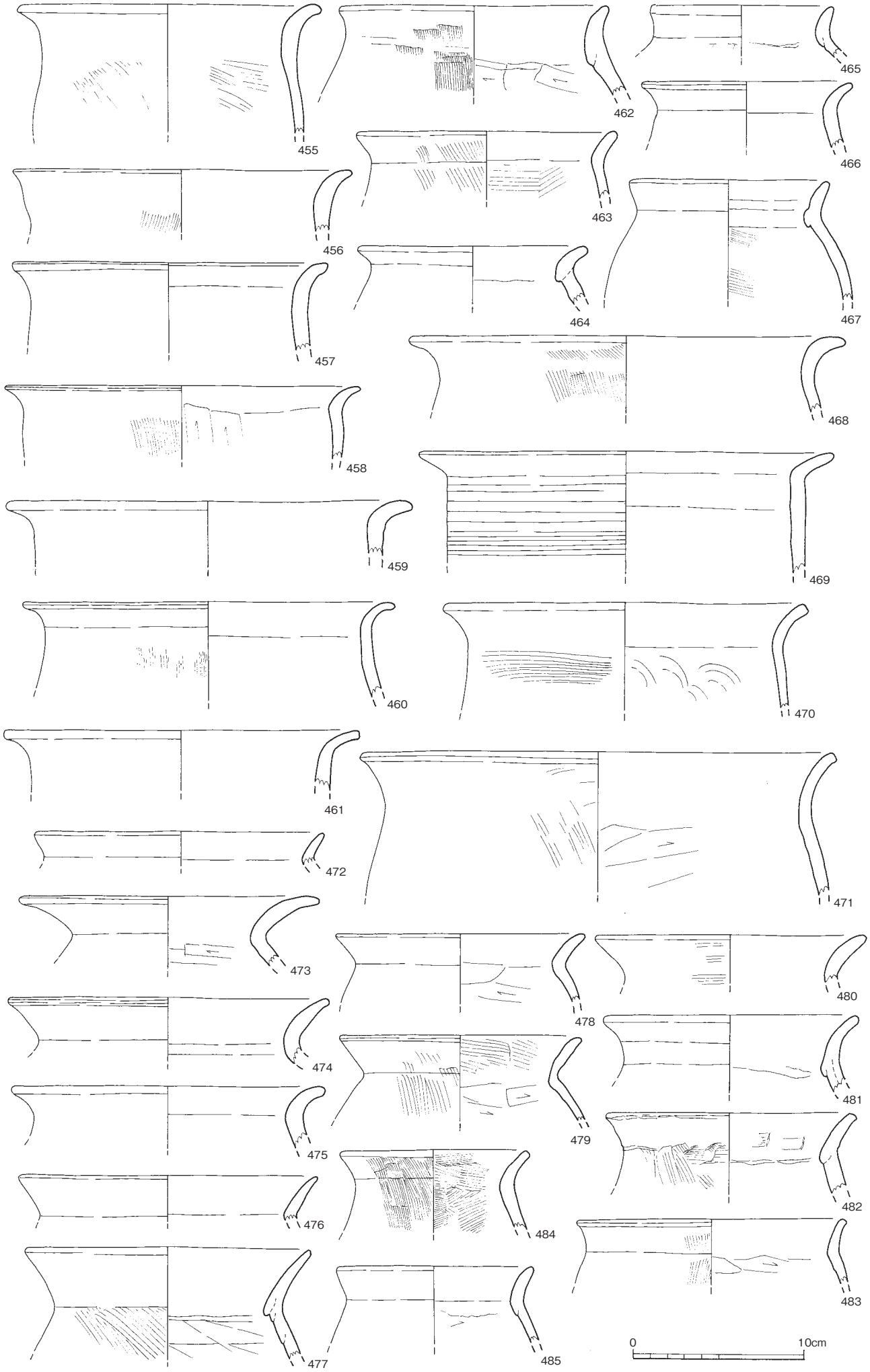
第 105 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図実測図その⑬（1/3）



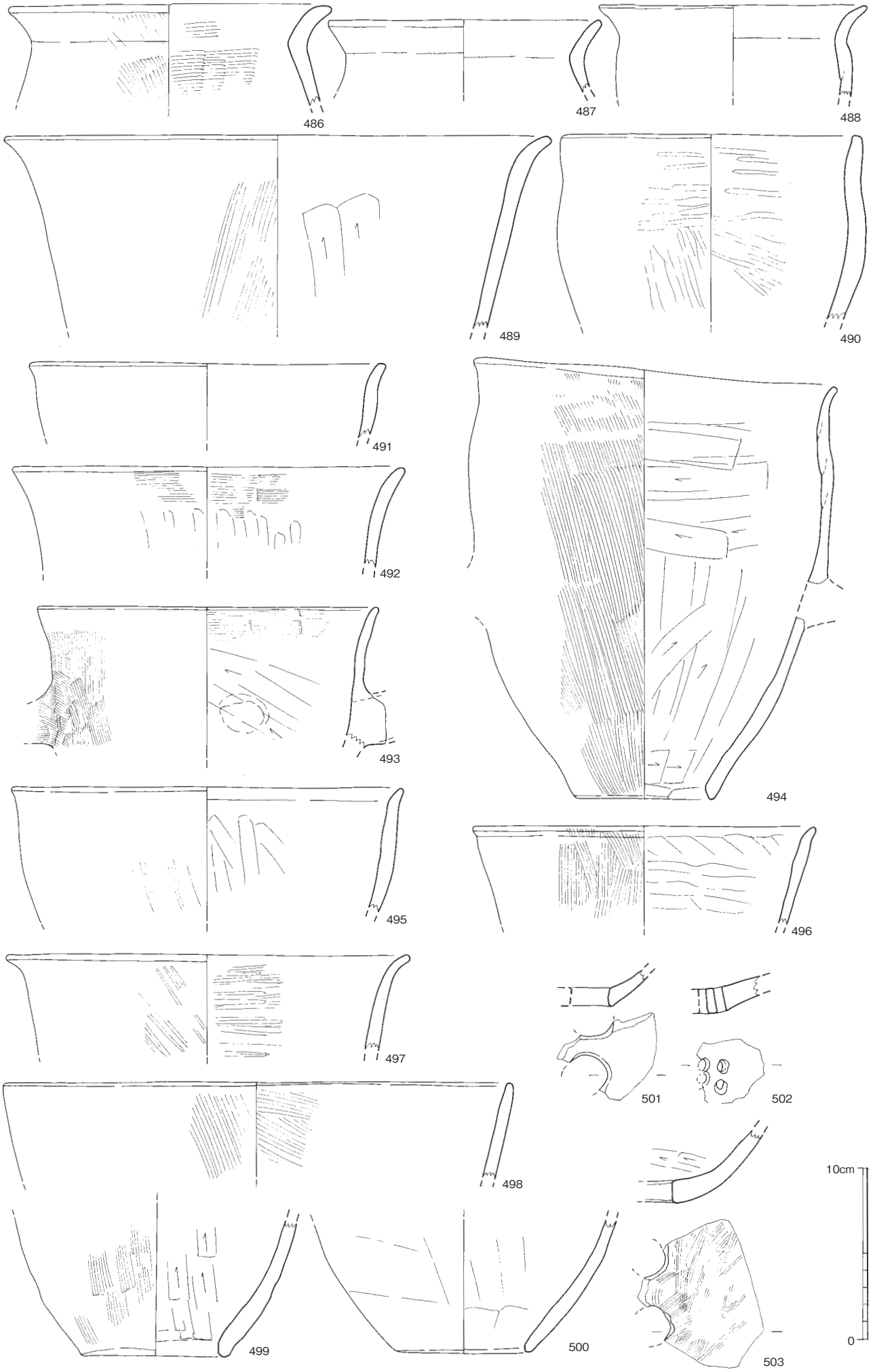
第 106 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図実測図その⑭（1/3）



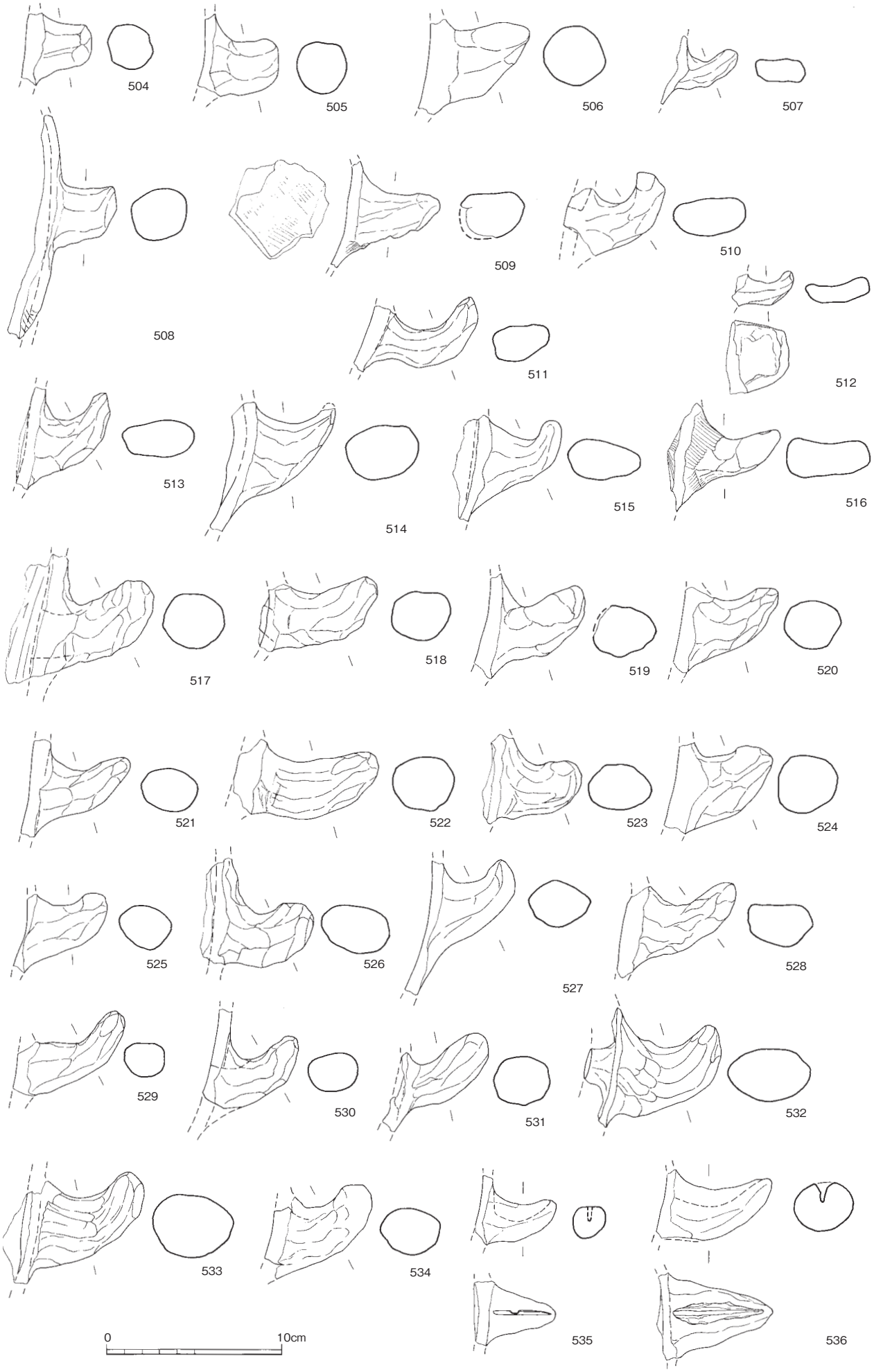
第 107 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図実測図その⑮（1/3）



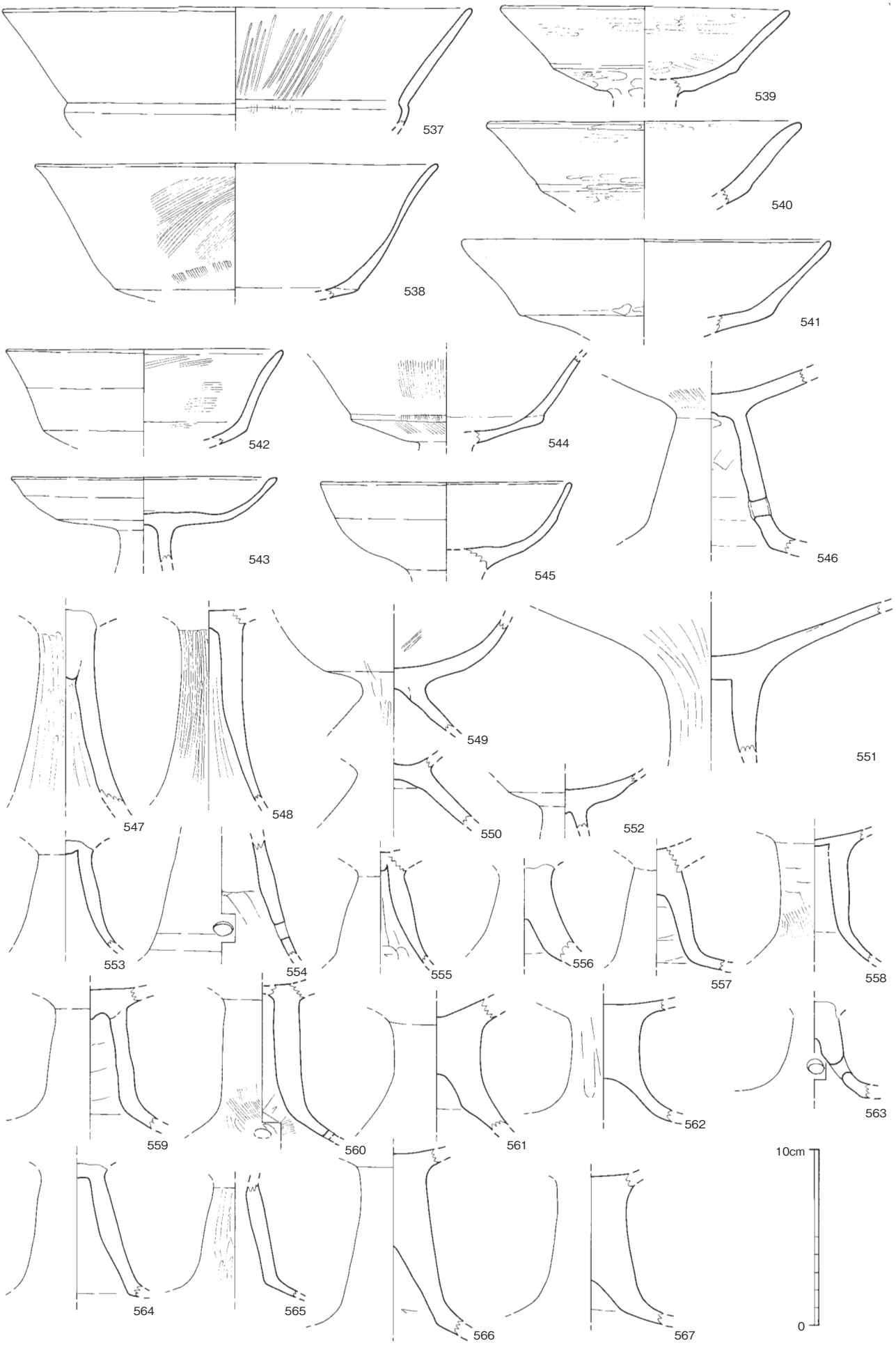
第 108 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図実測図その⑯（1/3）



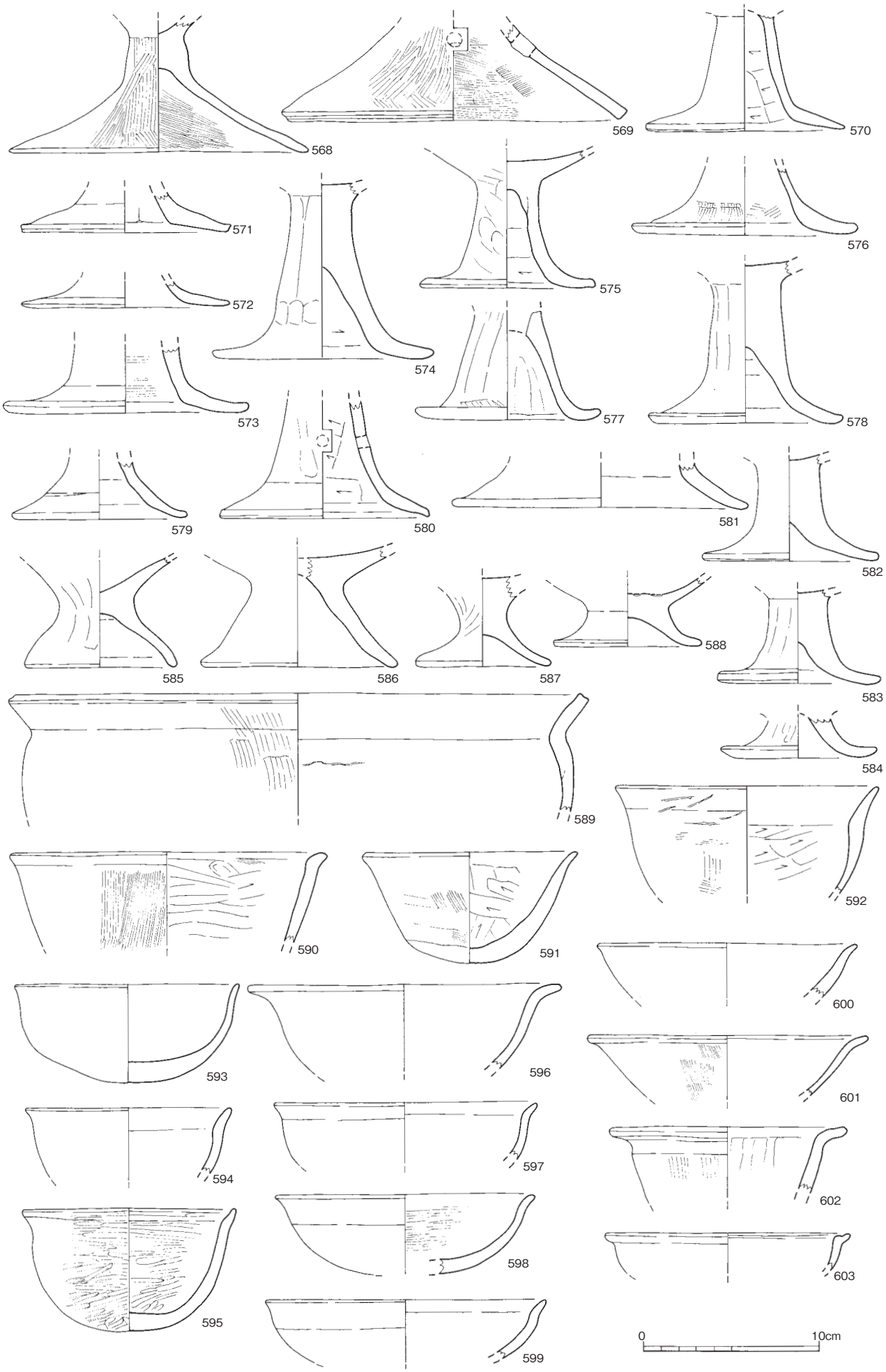
第 109 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図実測図その⑰（1/3）



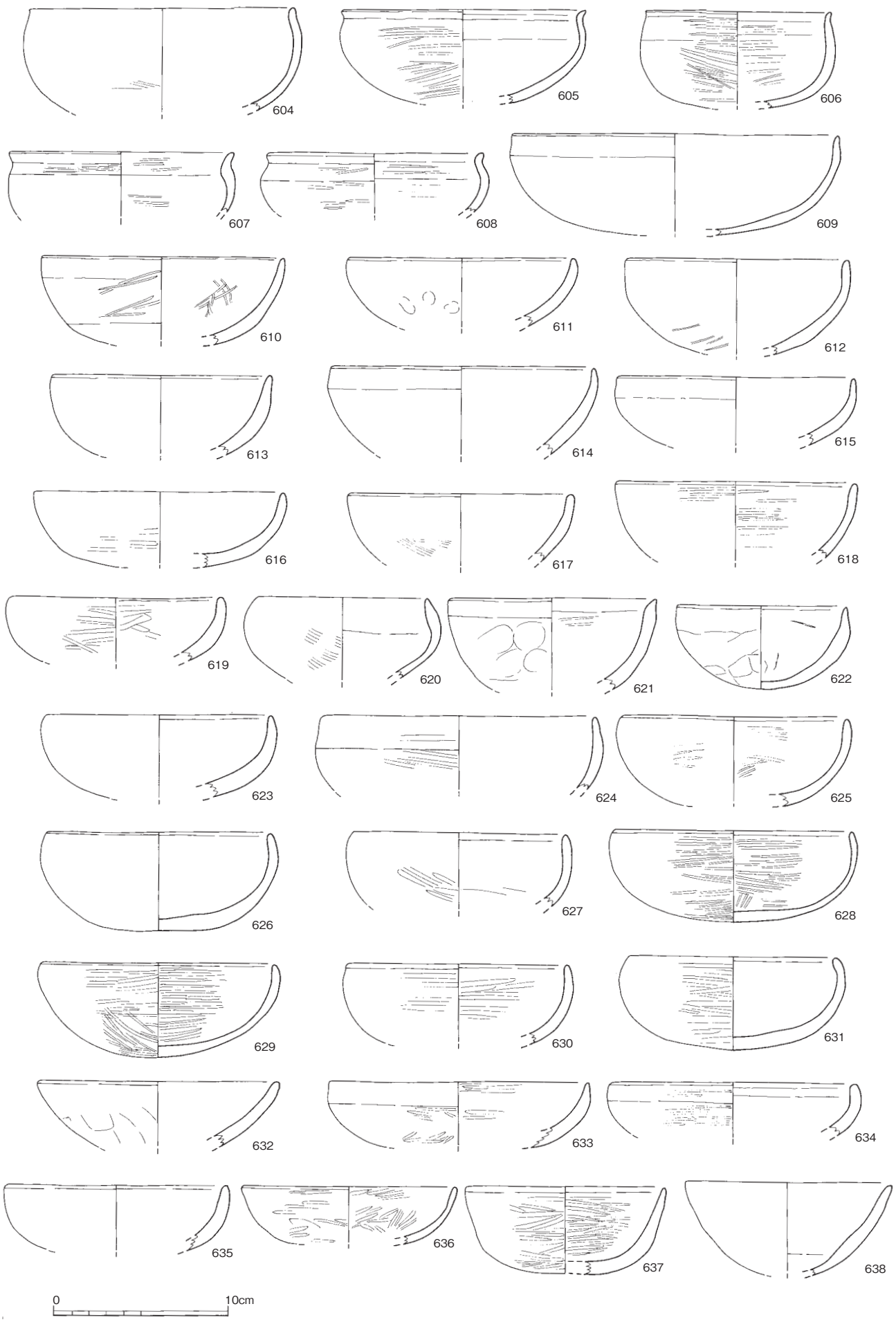
第 110 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図実測図その⑱（1/3）



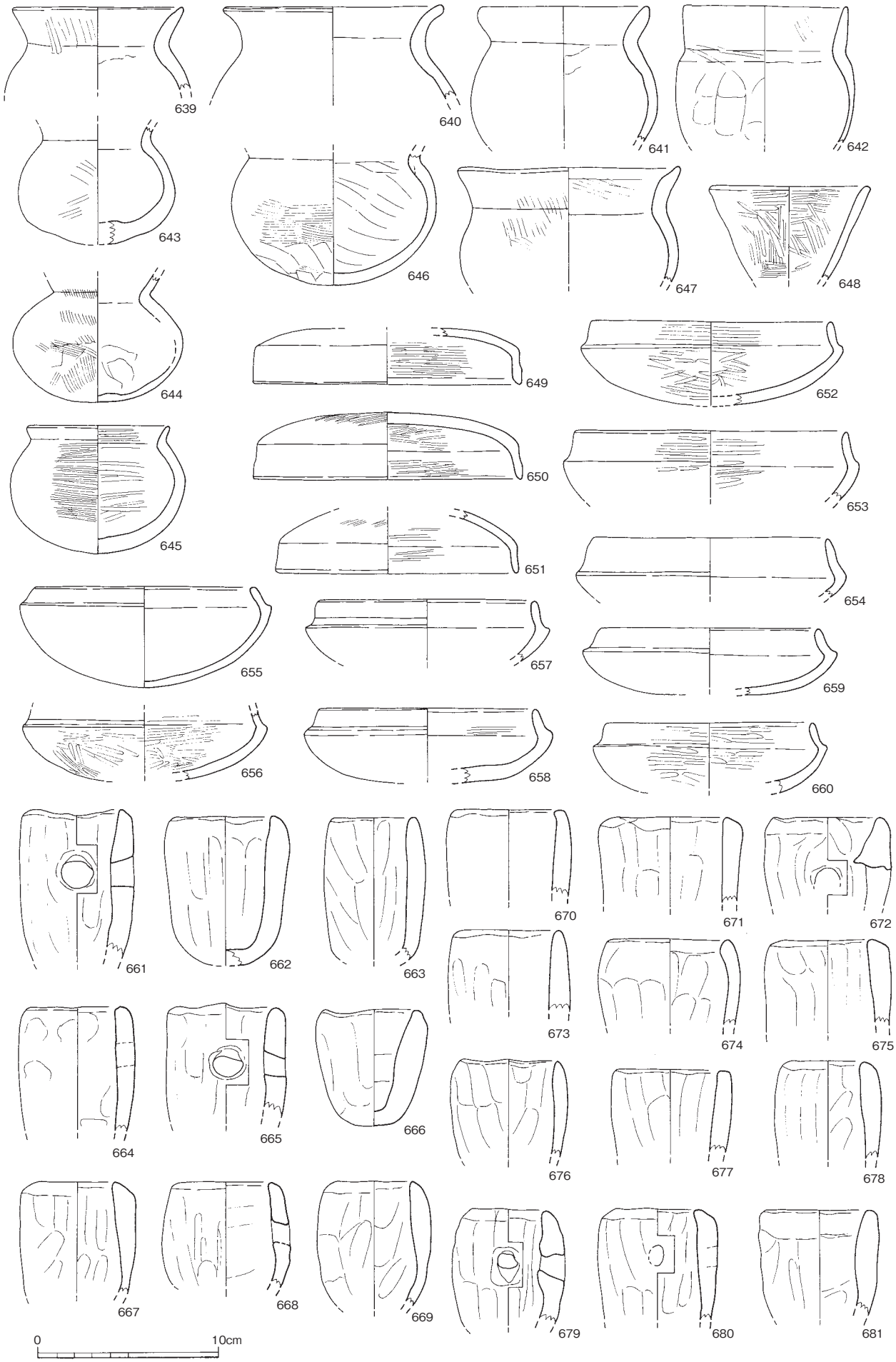
第 111 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図実測図その⑲（1/3）



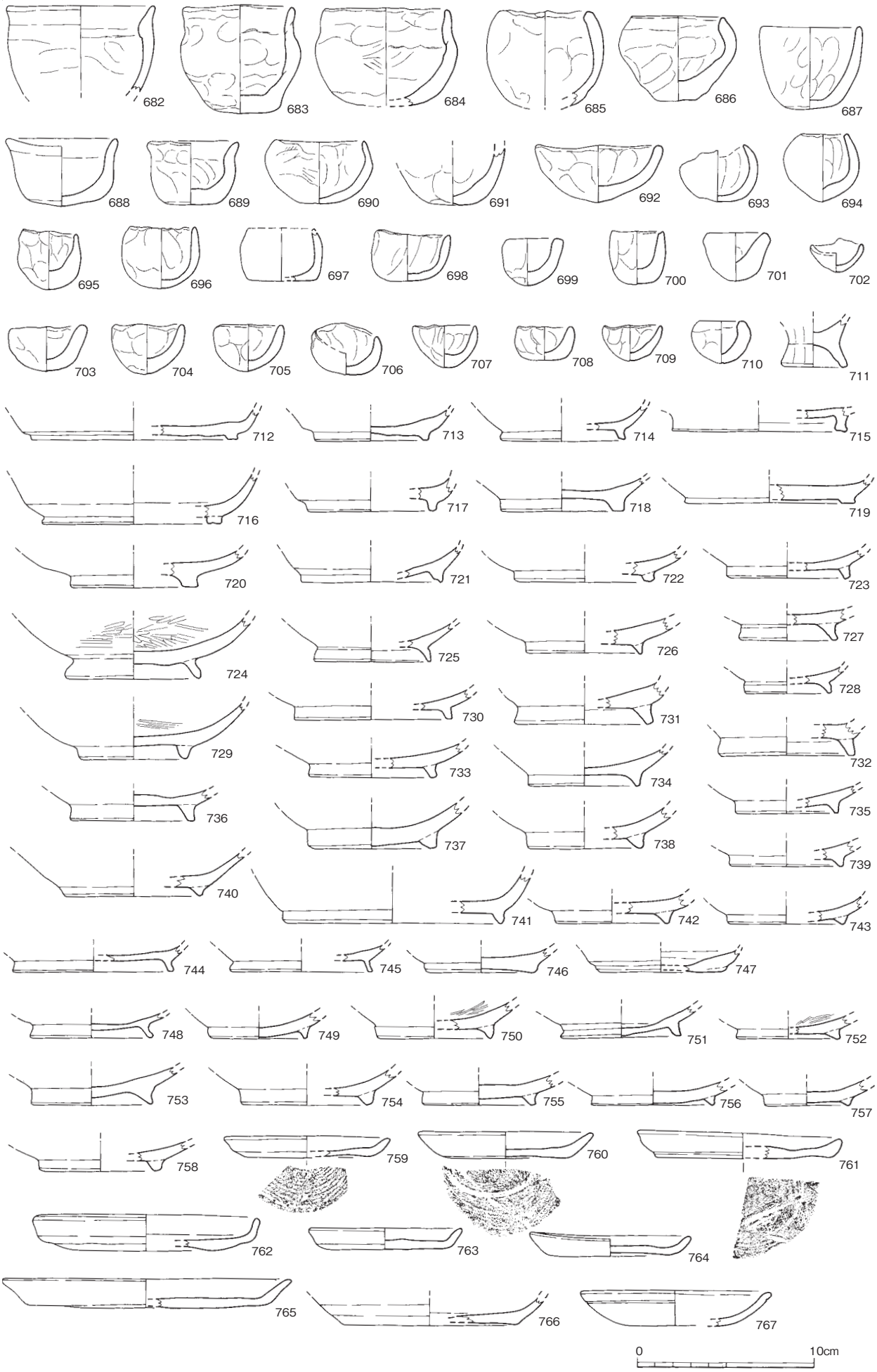
第 112 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図実測図その⑳（1/3）



第 113 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図実測図その㉑（1/3）



第 114 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図実測図その㉒（1/3）



第 115 図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図実測図その㉓（1/3）

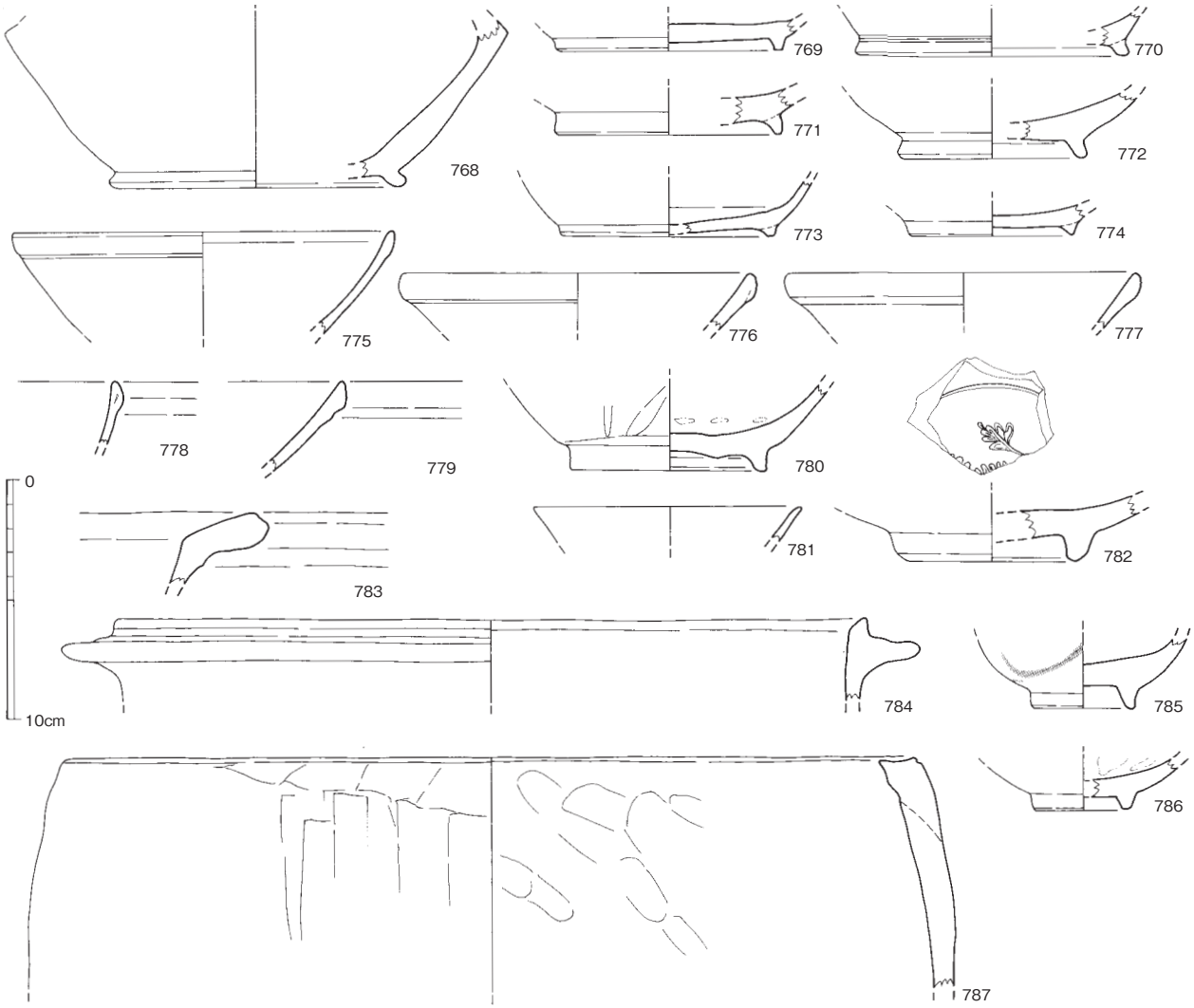
するものが多いが648は直口壷型になる。

649～660は須恵器模倣坏である。649～651は坏蓋。天井部から肩部までは緩やかに湾曲し、肩部は明瞭に屈曲する。652～660は坏身。底部から体部にかけて緩やかに湾曲しながら立ち上がり、口縁部下で屈曲して反転し、口縁部は内湾しつつ内傾する。調整にミガキを用い、黒色に仕上げるものが多い。

661～681はタコツボ。小片のため不明なものが多いが、基本的に体部中位に1孔を穿つものであろう。手づくねで、指頭圧痕や指ナデ痕を器壁によく残す。

682～711は手づくねのミニチュア土器。682～687はミニチュア土器にしてはやや大型のもので、682～684は甕、687は椀か。688～692はそれよりやや小さいもので、688・689は甕、690～692は椀か。693～711は小型のもの。693～696は甕を模したもの、711は脚付椀を模したもの、ほかは椀を模したものか。

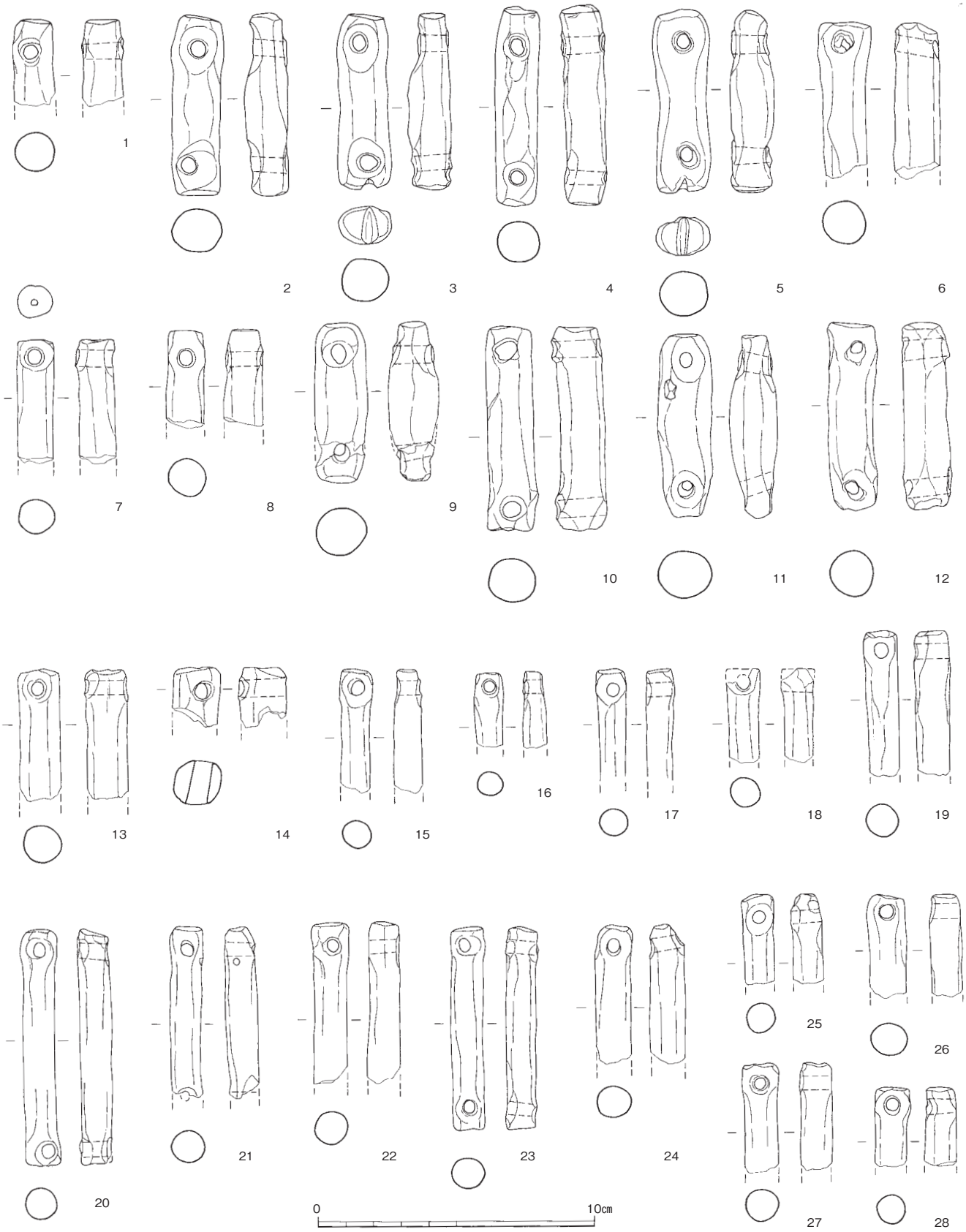
土師質土器（712～767） 712～758は高台を持つ坏または椀。高台の断面形状は、四角く収めるものが712～723、細長く、端部を丸く収めるものが724～736・744・745、三角形状を呈するものが737～749で、古代から中世にかけての資料であろう。746・747は高台を持たない坏または皿の底部片。748～757は内面を黒色に仕上げるもの、758は両面を黒色に仕上げるもの。高台部断面形状は上述の黒色に仕上げない一群と同様のバリエーションを持つ。



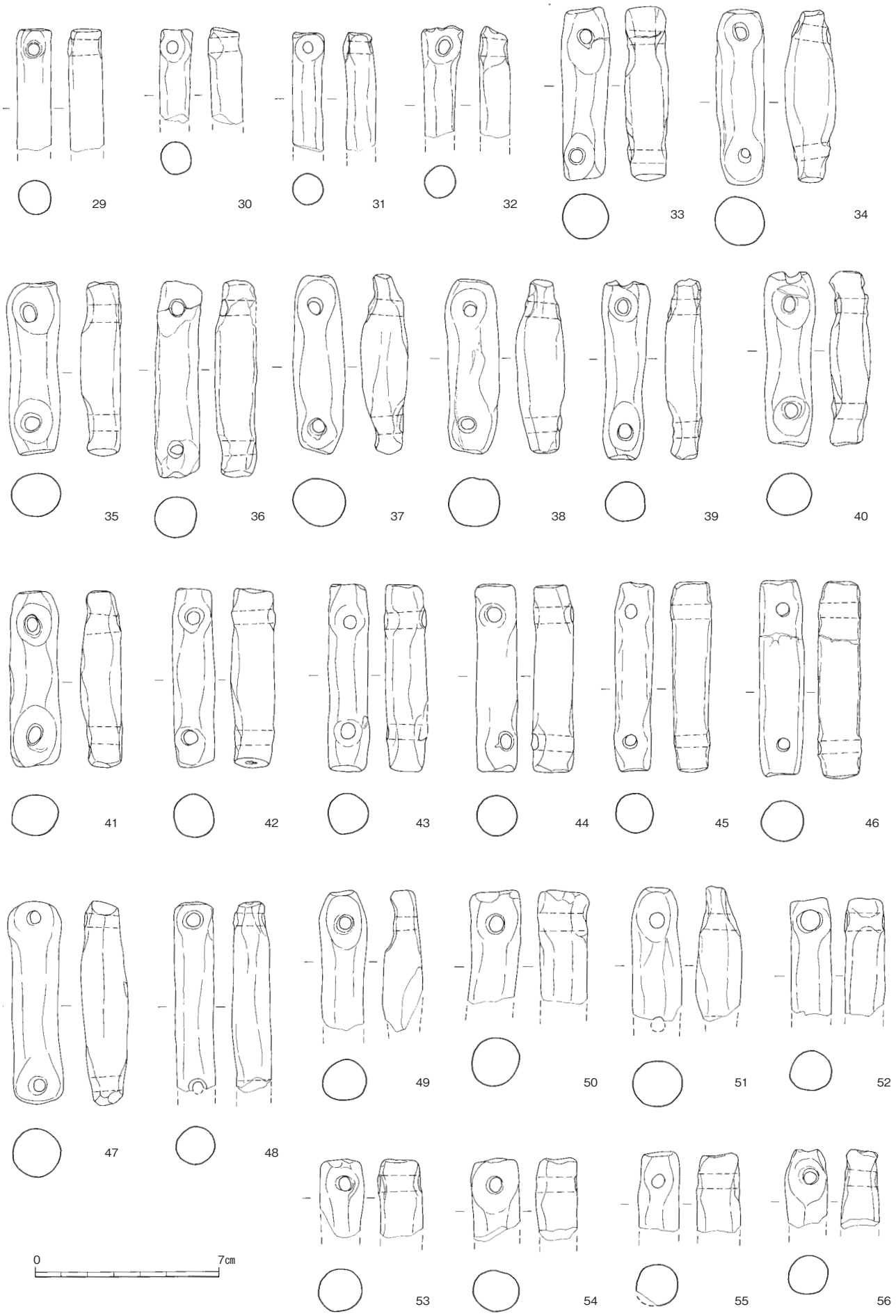
第116図　Ⅰ区包含層等出土土器実測図実測図その㉔（1/3）

759 ～ 767 は土師質の皿。底部は平坦で、口縁部はごく短い。底部外面を回転糸切りで切り離し、しばしば板ナデ仕上げを施す。767 は器壁の内外両面を黒色に焼成する。

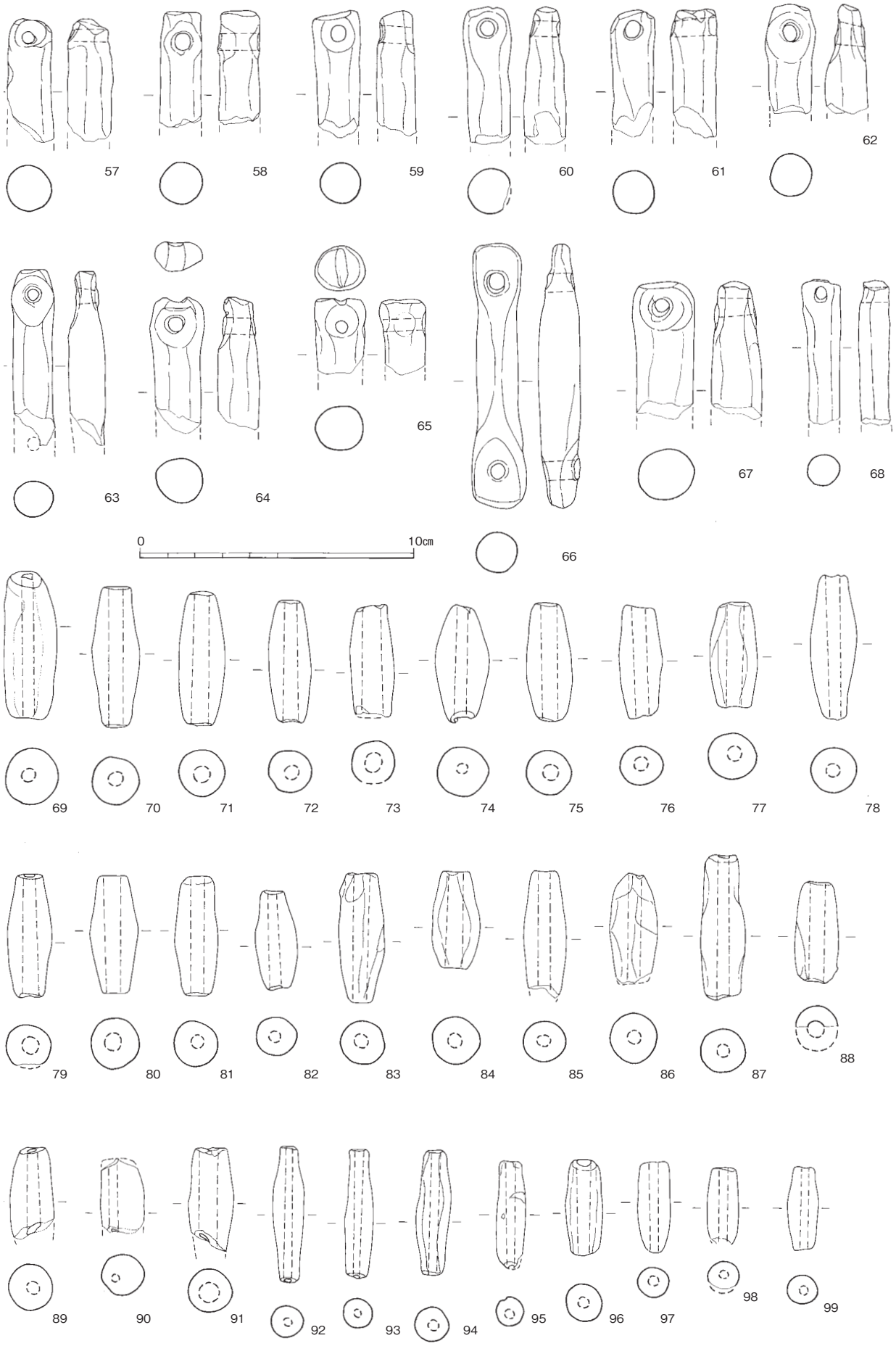
瓦質土器（768 ～ 774）　768 は壷の底～胴部片か。底部は失われるが断面丸で外に張る高台がつき、



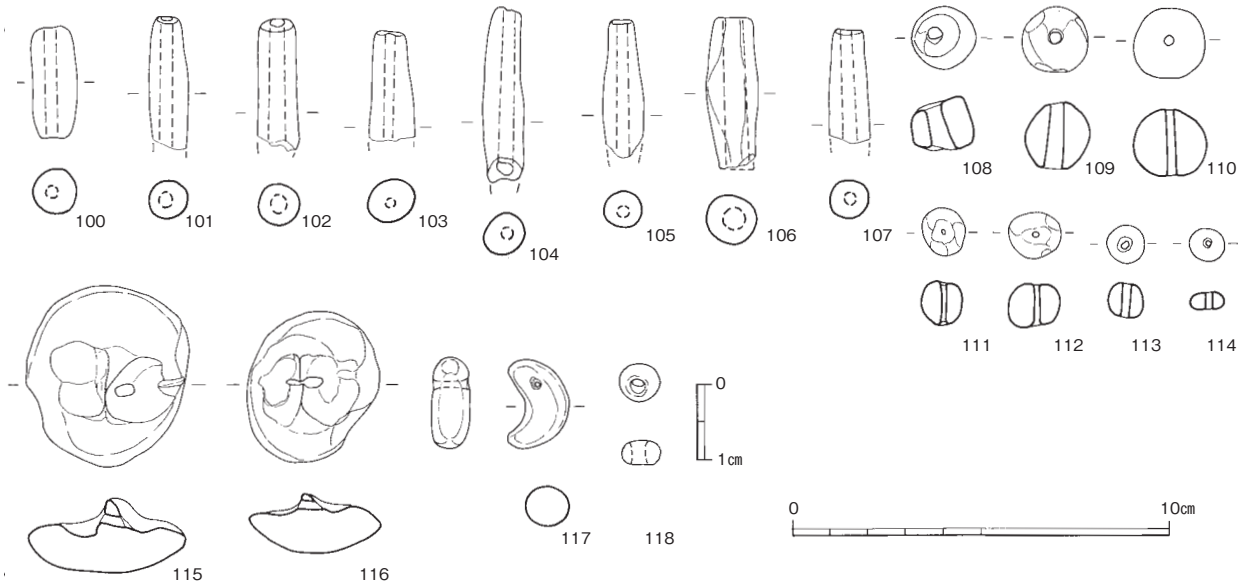
第 117 図　Ⅰ区出土土製品実測図その①（1/2）



第 118 図　Ⅰ区出土土製品実測図その②（1/2）



第 119 図　Ⅰ区出土土製品実測図その③（1/2）



第 120 図　Ⅰ区出土土製品実測図その④、同ガラス製品実測図（118 は 1/1、他は 1/2）

肩部が強く張って明瞭に屈曲する。769 ～ 774 は坏または椀。底面が平坦なものと丸いものに分かれる。

陶磁器等（775 ～ 787）　775 ～ 779 は白磁碗。いずれも口縁端部を肥厚させる。780 ～ 782 は青磁碗。780 は外面に蓮弁を彫る。782 は見込みに花弁文を彫る。783 は素焼きの鉢の口縁部片。784 は釜。785・786 は小椀で、785 が肥前系の陶器、786 は高取系の陶器か。787 は火鉢の口縁部片か。

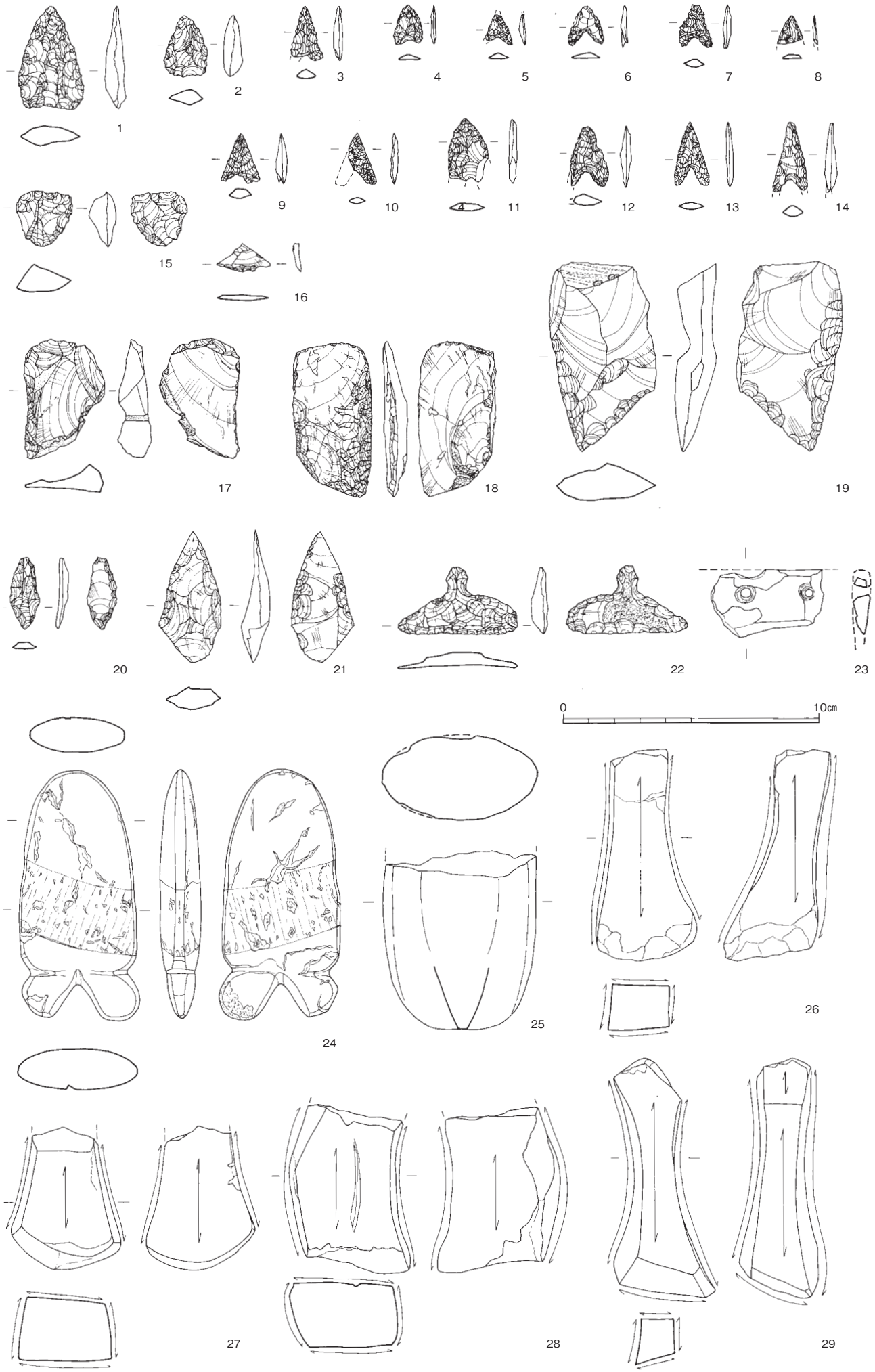
Ⅰ区出土土製品等（第 117 ～ 120 図、第 5 表、図版 57）

Ⅰ区から出土した土製品等を一括して報告する。漁具としては棒状土錘が最も多く、ほかに管状土錘がある。また装飾品として土玉（丸玉・勾玉）、その他として土製模造鏡も出土している。

土錘（1 ～ 107）　1 ～ 68 は棒状土錘である。量が多く形状はよく類似するため、個別の説明はしない。大きさ・重さ・出土遺構などの情報は一覧表（第 5 表）を参照されたい。大きく分けると、直径 1.5 ～ 2cm程度の太いものと、直径 1cm前後の細いものがあり、太いものが圧倒的に多い。長さは太いものの大半が 6 ～ 7cmをはかり、その多くは成形が粗雑で指ナデ・指オサエ痕を多く残す。両端部に径 5mm前後の孔をあけるが、その付近が強く指で押されてゆがんでいるものが多い。片頂部に溝を彫りこむものとして 3・5・39・40・56・64・65 などがあるが、全体の中では少数派である。すべて土師質である。69 ～ 107 は管状土錘である。大半は細長い紡錘状で、長さは長いもので 5.5cm、短いもので 3.5cm程度をはかる。最大直径が 1.5cm～ 2cmをはかるやや太めの一群と、同じく 1cm前後のやや細めの一群があり、前者の量が多い。量が多く形状はよく類似するため、個別の説明はしない。大きさ・重さ・出土遺構などの情報は同じく一覧表（第 5 表）を参照されたい。

土玉類（108 ～ 114・117）　108 は臼玉か。直径 1.75cm、厚さ 1.4cmをはかり、やや歪みが大きいが断面形状は四角形を志向する。中央に径約 3 mmの孔を穿つ。109 ～ 113 は丸玉である。109・110 はやや大きく直径 1.8cm前後をはかる。111 ～ 113 はやや小さい。114 は平玉。平面形状は円形で厚さが薄い。117 は土製勾玉である。比較的丁寧なつくり。詳細は一覧表（第 5 表）を参照されたい。

その他（115・116・118）　115・116 は土製模造鏡である。115 は最大径 4.7cm、116 はやや小さく 3.9



第 121 図　Ⅰ区出土石器・石製品実測図その①（1/2）

cmをはかるが、ともに平面形状は歪みが大きい。鏡面側は強い丸みをおびる。鏡背部を指でつまんで紐を作り、径2mmの孔を穿つ。ともに遺構検出中の出土。118は濃青色を呈するガラス小玉。

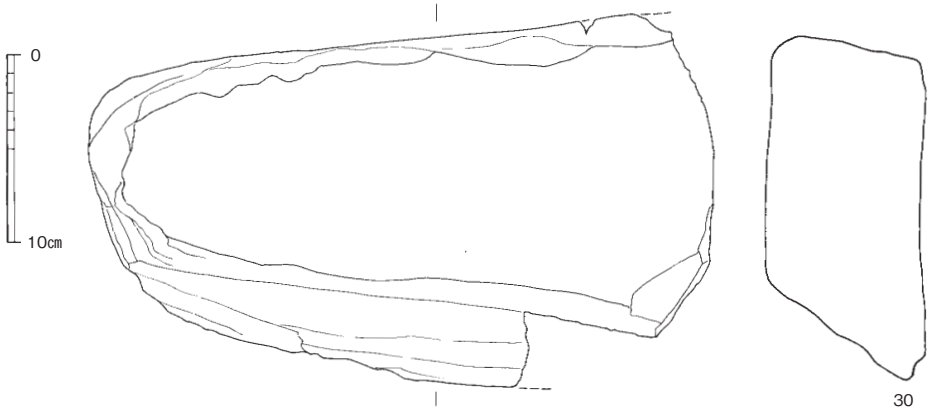
Ⅰ区出土石器（第121・122図、第6表、図版57･58）

Ⅰ区の各遺構、あるいは包含層等から、若干の石器類が出土した。以下にまとめて報告する。

打製石器（1～22）　1～14は石鏃である。1は無茎の石鏃である。全長が4cmと大きい。姫島産黒曜石製。90号住居跡出土。2は石鏃の未製品か。先端がとがっておらず、厚みもある。姫島産黒曜石製。56号住居跡出土。3は凹基鏃で片脚が一部欠損する。姫島産黒曜石製。包含層等出土。4は刃部がやや丸みを帯びる凹基鏃。姫島産黒曜石製。39号住居跡出土。5～7は平面形が正三角形に近い凹基鏃。5は片脚が一部欠損する。5は安山岩製、6・7は黒色の黒曜石製で腰岳産か。いずれも包含層等出土。8は剥片鏃の頂部片。腰岳産黒曜石製。包含層等出土。9・10・12～14は平面形状が細長い二等辺三角形状を呈する凹基鏃。10は片脚が欠損する。9・10・14は姫島産黒曜石製、12・13は黒色の黒曜石製。いずれも包含層等出土。11は剥片鏃で、平面形状が五角形に近い形状を呈する。片脚が欠損する。姫島産黒曜石製。包含層等出土。15～21はスクレイパーである。15は姫島産黒曜石製で、平面形は三角形状を呈し、うち2面に刃部を作り出す。16は大きく折損していて刃部の一部のみが遺存するものであろう。黒色の黒曜石製。17は大きめの剥片の1辺に刃部を作り出す。腰岳産黒曜石製。以上は包含層等出土。18は平面略長方形の剥片に刃部を作り出すもの。姫島産黒曜石製。94号住居跡出土。20は小型の剥片を加工する。錐の可能性もある。包含層等出土。21は尖頭器形で2辺に刃部を作り出す。安山岩製。74号住居跡出土。22は横型石匙でほぼ完形品。刃部長は4.5cmをはかる。安山岩製。28号住居跡出土。

磨製石器（23～25）　23は石包丁。背に近い一部のみが残存する。1.7mm間隔で貫通部径5mmの穴を2孔開ける。孔の断面形状は鼓型を呈し、開口部径は最大8mm。厚さは7mmほどをはかる。24は用途不明石器。長楕円形の一方の端部に耳を2つ作り出すような形状を持つ。刃部は研ぎだされておらず、トロトロ石器の一種か。中央に太い石英の節理が入る花崗岩製で、節理を利用して文様のようにしているように見える。包含層等出土。25は磨製石斧である。刃部は蛤刃。片岩製。包含層等出土。

砥石（26～29）　26はもと棒状の砥石の4面をしっかりと使いこんで研ぎ減りした形状。花崗岩質砂岩製で仕上げ砥か。34号住居跡出土。27も棒状砥石で大きく折損する。4面を用いる。花崗



第122図　Ⅰ区出土石器・石製品実測図その②（1/4）

第 123 図　Ⅰ区出土滑石製品等実測図その①（1/1）

岩質砂岩製で目は細かい。包含層等出土。28はやや目の粗い砂岩製の砥石で、4面を用いる。包含層等出土。29は砂岩製の砥石で比較的目は細かい。棒状で4面をよく使いこむ。19号住居跡出土。

台石（30） 30は台石で、上面を平坦に成形し、擦痕が認められるがやや摩耗していて不明瞭。一部を欠損する。長さ約34cm、幅約19cm、厚さ約8.5cm、重さは約6kgをはかる。片岩製か。

滑石製品（第123～127図、第7～9表、図版58･59）

Ⅰ区からは多くの滑石製の可能性が高いと考えられる製品・未製品が出土した。可能性が高いと述べたのは、大半はわずかに透明感があり、脂肪光沢を持つ白～黄白・緑白色味を帯びた色調の石材で、滑石と判断出来るものであるが、一部にこれとはやや違う特徴を持つ石材が用いられたものが含まれるからである。具体的には、白色系であるが透明感がなくやや硬質な石材や、黒色を呈し鈍い光沢を持つ石材を用いたものが見られる。これらが滑石ではないと判断する根拠もないため、ここではこうしたやや特徴の異なる石材も含め、総じて滑石（未）製品として報告しておく。本来であれば石材の鑑定を行う必要もあろうが、本稿では省略した。いずれこうした作業を行う必要もあろう。

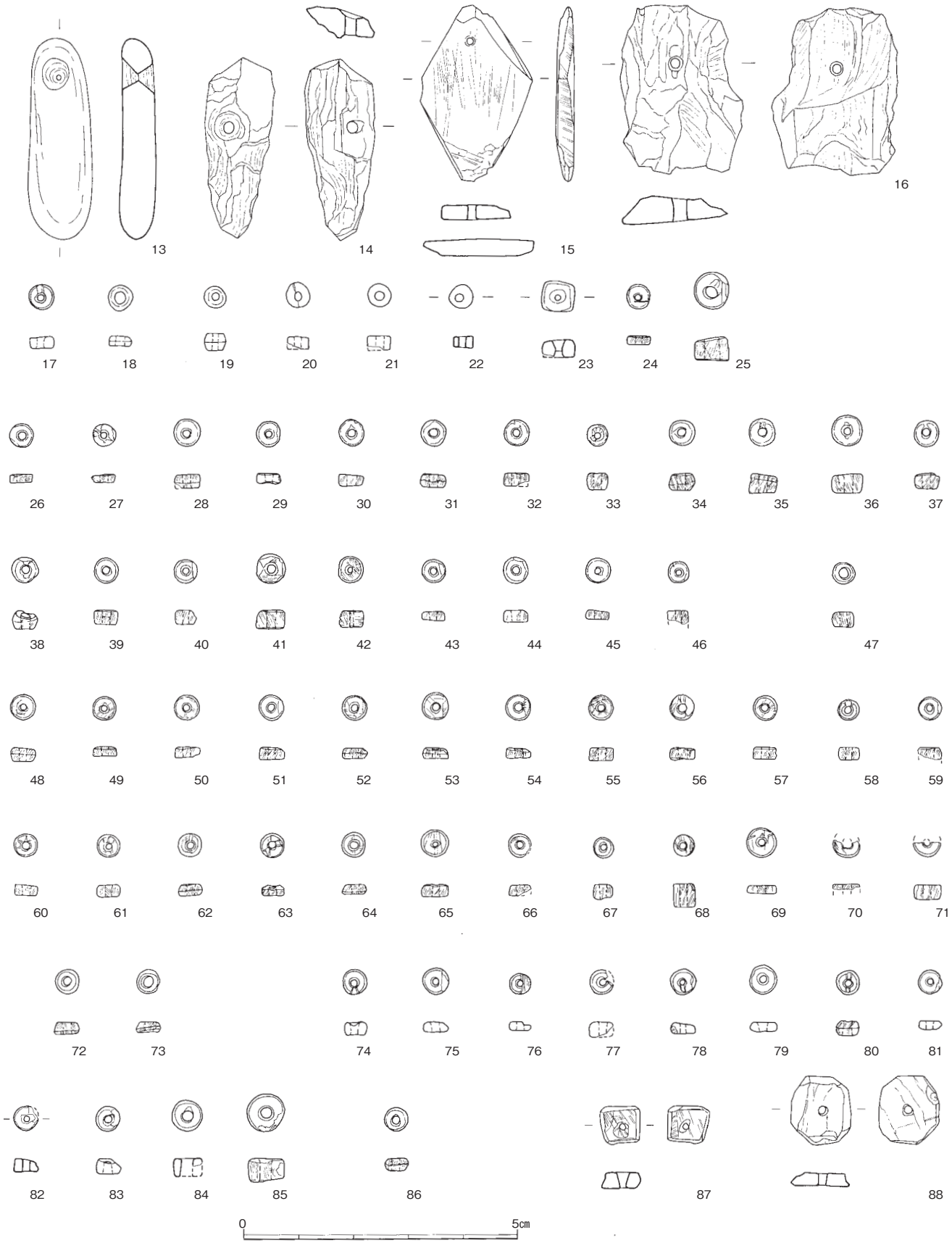
これらの多くは遺構検出時に出土したものであるが、遺構から出土したものの大半はSX－02谷状落ち込み遺構の埋土上層中に含まれ、SX－02上層に掘り込まれた住居跡埋土中から出土したものも多い。製品としては臼玉の数が群を抜いて多く、そのほかに勾玉・垂飾などの装飾品、剣形模造品や有孔円盤などの祭祀関連とされる遺物、紡錘車といった道具系の遺物がみられる。注目されるのはその中に未製品が含まれることで、板状の加工品も多く出土することから、本遺跡で玉類の生産を行っていたことは明らかである。以下、大まかに種類別に分けつつ、個別の遺物について述べていくが、未製品を製品とともに紹介していくので注意されたい。なお、SX－02上面にあたる場所で遺構検出中に出土したものについては、102号住居跡と39号住居跡の間の直径6mほどの略円形の範囲と、103号住居跡からその北側にかけての直径約8mほどの範囲に分布が集中する傾向があり、前者を包含層Ａ区、後者をＢ区として取り上げを行った。

紡錘車（1～4） 1は略完形品､2～4は半分ほどの残欠である。1～3は断面が台形状となるもの、4は上面と下面がほぼ同じ径をもち中央がやや膨らむ断面形状を持つ。穿孔部は、1が上・下面ともに開口部がわずかに広がるが、他はまっすぐに穿孔が施される。4は側面中位に断面Ｖ字状の沈線が掘られる。1はSX－02谷状落ち込み出土、2はピット208出土、3･4は遺構検出中の出土である。

勾玉（5～7） 5は鈍い光沢のある黒色石材で製作された板状の勾玉である。鉄製利器による削り成形を施す粗製品で､左側面は調整痕が少ない。筒状の細い穿孔部をもつ。鉄錐による片側穿孔か。39号住居跡から出土した。6は勾玉の頭部片。左側面は先端部のみで残りが悪い。孔からは条線ともとれる浅い溝が頸部に向かって伸びる。復元するとおよそ3～3.5cm大の勾玉となろう。断面鼓状の両側穿孔を施しており、内部に回転痕がみられる。遺構検出時の出土である。

有孔円盤（8～12） いずれも中央付近に円孔を一つ穿つ有孔円盤である。平面形状はいずれも円形を志向しつつ一部にゆがみや欠けがみられる。8はやや大型の品で直径8cmほどをはかり､他は4.8～5.5cmの大きさを持つ。厚さはそれほど変異幅がなく、0.7～1.0cmをはかる。8･10は遺構検出中の出土、9はSX－02谷状落ち込み出土、11は包含層等出土、12は39号住居跡出土。

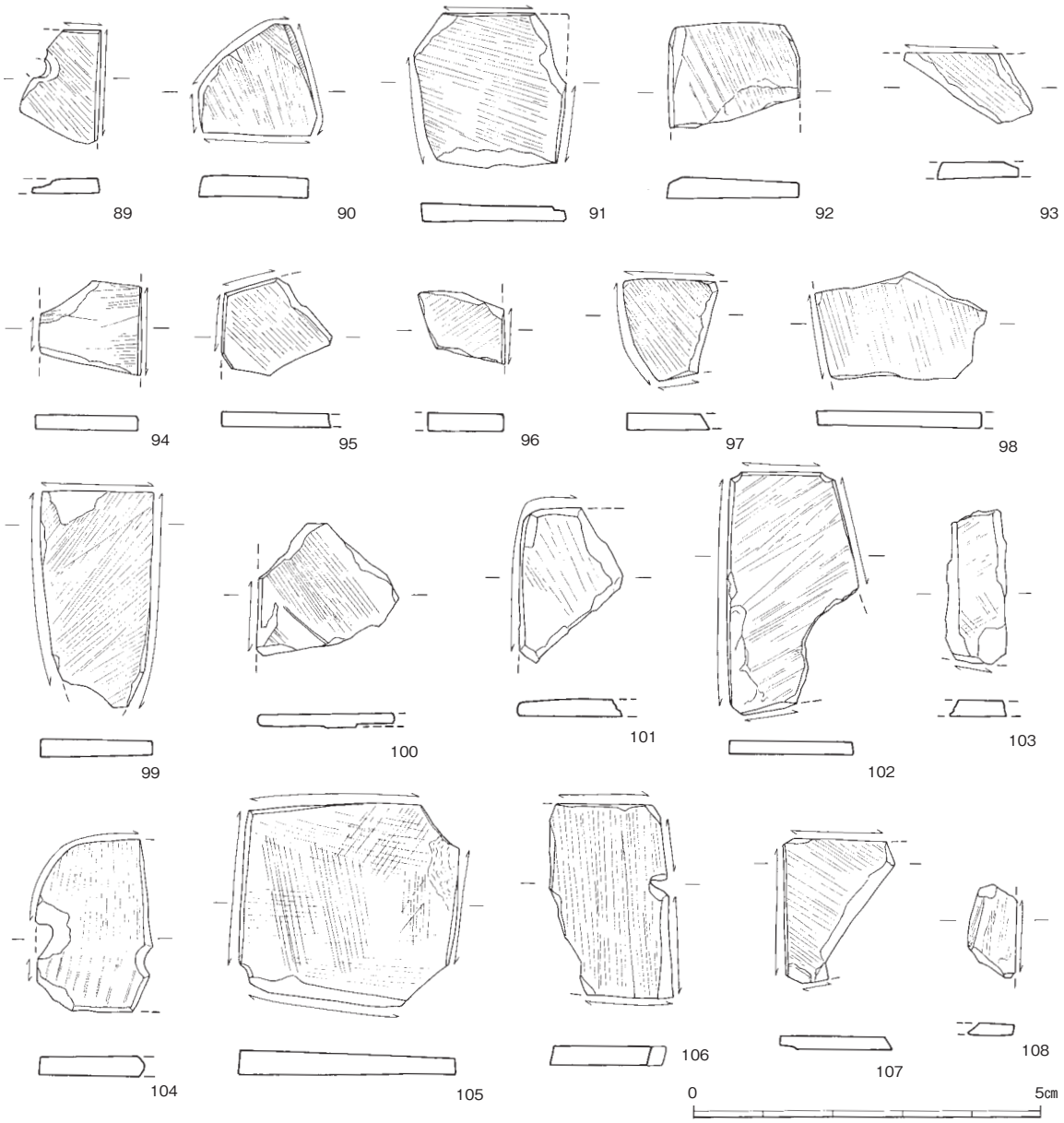
垂飾等（13 ～ 16） 13 は垂飾である。薄い青灰色の地に紺色のもやがかかる。表面は丁寧に磨かれており光沢がある。石材は不明。断面鼓形の両側穿孔を施し、内部に錐の回転痕が残る。14 は垂飾の未製品か。全長 3.3cmほどの細長い滑石片で、中央やや上位に筒状の穿孔を施す。前面に剥



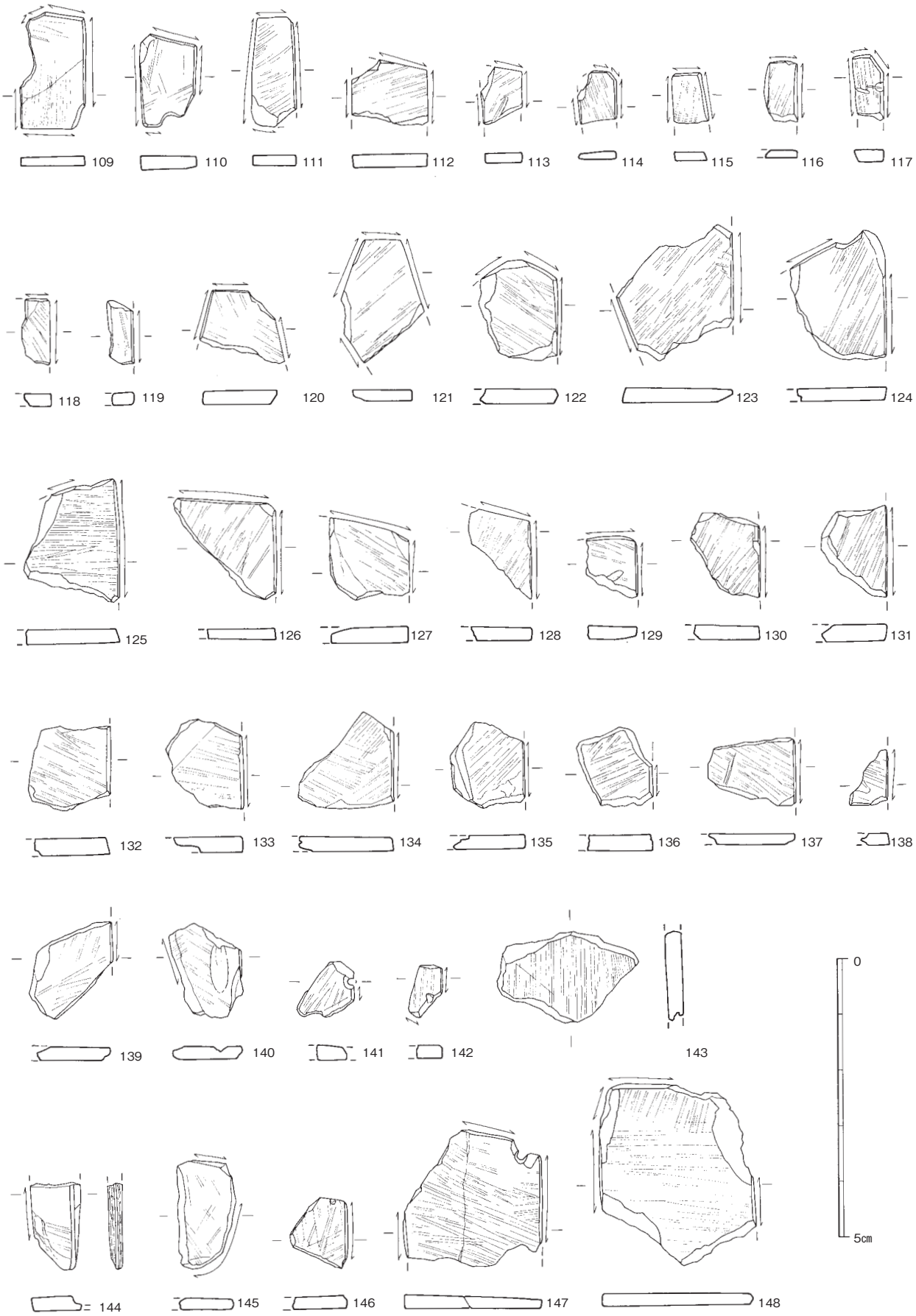
第 124 図　Ⅰ区出土滑石製品等実測図その②（1/1）

離痕が残り研ぎは認められない。15 は剣形模造品である。平面形状は菱形で、頂部に断面筒状の穿孔を施す。両面と 4 側面に丁寧な研磨を施す。上・下端と側辺の一部が欠損する。16 は剣形模造品あるいは垂飾の未製品であろうか。平面形状は不整形な長方形状を呈し、中央やや上位に断面筒状の穿孔を施す。全面に剥離痕跡をよく残し、研磨面は認められない。13 ～ 15 は遺構検出中の出土、16 は 81 号住居跡からの出土。

臼玉（17 ～ 88） 17 ～ 22 は、Ⅰ区の竪穴住居跡埋土中から出土した臼玉である。いずれも直径 3.5 ～ 4.5㎜の大きさの円盤状で、断面形状は中央部に稜を持つ 19 以外は薄い円筒状を呈する。孔は断面筒状で直径 1 ～ 2mm 程度をはかる。17 が 81 号住居跡、18 が 102 号住居跡、他は 103 号住居跡からの出土。23 は方玉あるいは臼玉の未製品か。一辺が約 6㎜の隅丸方形状を呈し、厚さは 3㎜と他の臼玉よりも厚い。孔は断面形状が鼓形を呈し両側からの穿孔である。103 号住居跡からの出土。24･25 は、包含層Ａ区から出土した滑石製の臼玉である。25 は直径 6㎜、厚さ最大 4㎜をはかる大型のもので、孔径も他に比べ大きい。26 ～ 47 は包含層Ｂ区出土の臼玉である。それぞれ平面径は直径 3.5 ～ 5.0㎜程度の円形で、顕著な差は認められない。厚さにはやや幅があり、薄いものは 2.0

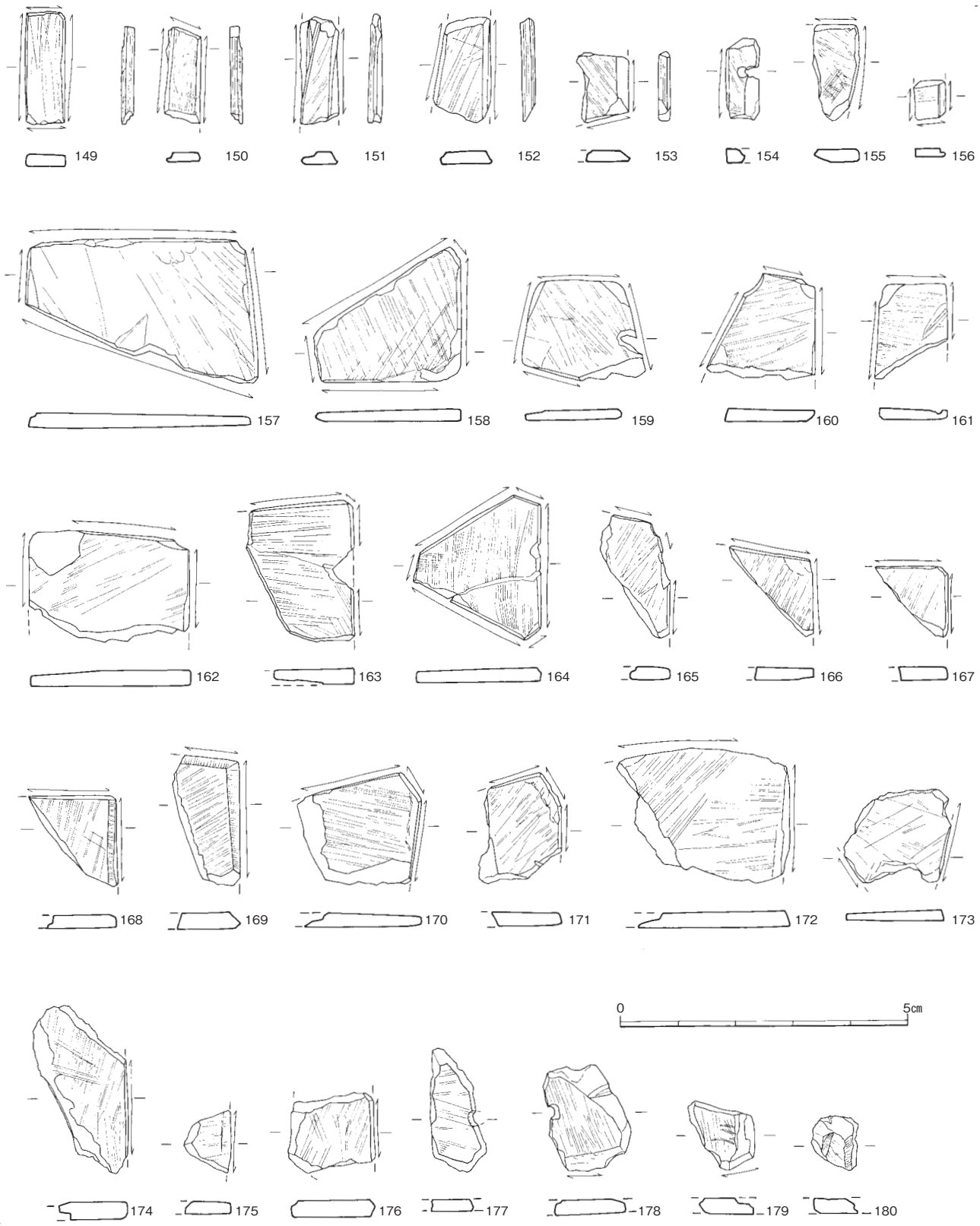


第 125 図　Ⅰ区出土滑石製品等実測図その③（1/1）



第 126 図　Ⅰ区出土滑石製品等実測図その④（1/1）

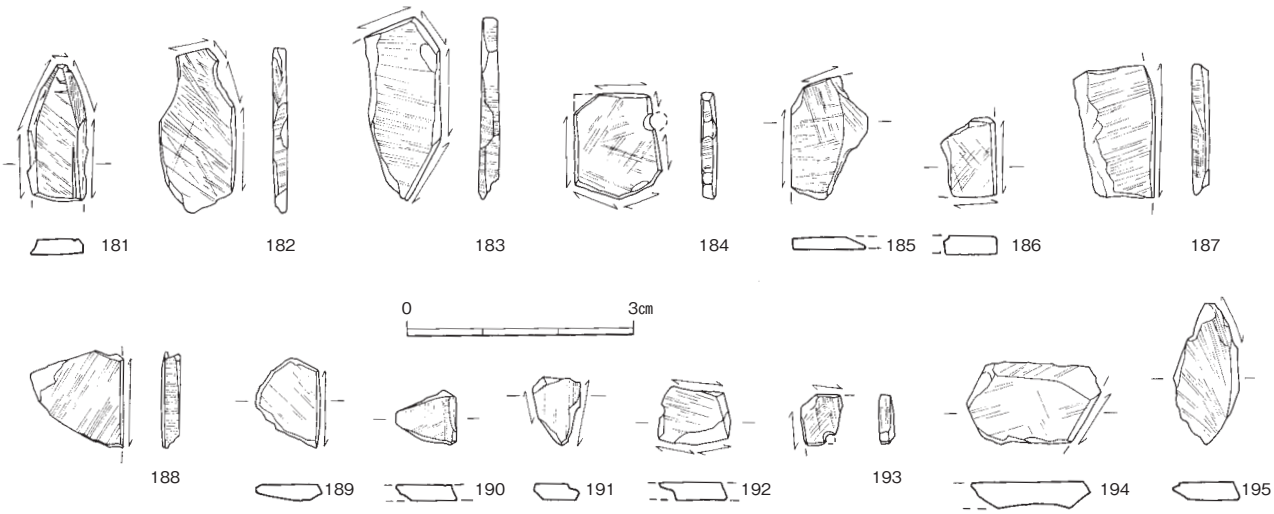
mm程度、厚いものは4mmほどのものがある。47は黒色で鈍い光沢を持つ石材で作られている。48～73はSX－02谷状落ち込み出土の臼玉である。いずれも平面形状は円形で、直径は4.0～5.0mmをはかる。厚さは51以外は薄く、2.0～3.0mm程度。51は厚さ4.1mmで細長い管状を呈する。72･73は黒色で光沢を持つ石材を用いたもので側面に明確な稜線をもち、算盤玉形を呈する。74～86は検出時に出土した臼玉である。うち85は径6.0mmを超える大型のもの。86は鈍い光沢をもつ黒色



第127図　Ⅰ区出土滑石製品等実測図その⑤（1/1）

石材を用いた臼玉で、側面に明確な稜線をもち、算盤玉形を呈する。87･88は臼玉の未製品であろう。87はSX－02谷状落ち込み出土で、7.0㎜×7.3㎜の正方形をなし、厚さは3.0㎜で両側から孔を穿つ。穿孔部は製品に比べ外径が歪で、稚拙な感を受ける。失敗品であろうか。側面は一辺が研磨されているが他はやや磨滅した破面であった。うち2面はそれぞれ片側に直線的な条線が確認できる。割り取りの際の罫書きの可能性を考えたい。88は22号住居跡から出土した黒色石材製の臼玉未製品である。平面形状は隅丸方形で一辺が1.2㎝ほどの大きさを持ち、臼玉を作るにはやや大型である。中央に穿孔を施し、上・下面ともによく研磨される。厚さは2.5㎜とやや厚めである。

板状加工品（89～195）　89～195は滑石製の板状加工品である。出土遺構の種別ごとにまとめて報告する。89～101は竪穴住居跡の埋土中から出土したものである。89～96が87号住居跡出土、97～99が94号住居跡出土、100･101が103号住居跡出土である。いずれも厚さ2.0～3.0㎜程度の板状で、両面を一方向の研磨により平滑に磨いている。図示したものは1辺以上が研磨により直線状になっているものである。89･92など一部に直角の角を残すものがあり、92･94などは両側面が平行になっていて、基本形状は長方形をとるものとみたいが、90･91･99などのように両側片が併行しないものや95などのようにコーナー部が直角とならないものも多くみられる。102～108・181～195は遺構検出中に出土した板状加工品である。102は一部を欠損するが平面形状が台形状を呈する。105は一辺が3.0㎝近い略正方形状を呈する大型の破片である。183･195は全体形状が細長い菱形となるように側辺が磨かれているようにもとることができ、剣形模造品の未製品の可能性もある。104･184･193には側辺あるいは破断面に穿孔の痕跡が認められ、割り取る際に施されたものか、あるいは有孔製品を作ろうとして孔を開ける際に失敗して割れたものであろう。109～143は包含層A区から板状加工品である。いずれも厚さ2.0～3.0㎜ほどの薄い板状で、両面を研磨により磨いて平滑に仕上げる。109～111は多少歪ではあるが4辺全てが直交方向に側面研磨されている長方形の板状素材である。112～119は3辺に側面研磨痕が認められる資料のうち長方形状を呈するもので、幅が10.0㎜以下のものである。細いものでは幅5㎜程度のものがみられる。特に116は接する2辺が直交方向に側面研磨され、また他の1辺は線状に伸びる割れ面の上に傾斜をもった白色面をもつ。この白色面は滑石表面を鉄製利器で削った際に生じるものと類似しており、角度を異にして下部に走る割れ面からも、割り取りの際の施溝の痕跡である可能性が高い。144～



第128図　Ⅰ区出土滑石製品等実測図その⑥（1/1）

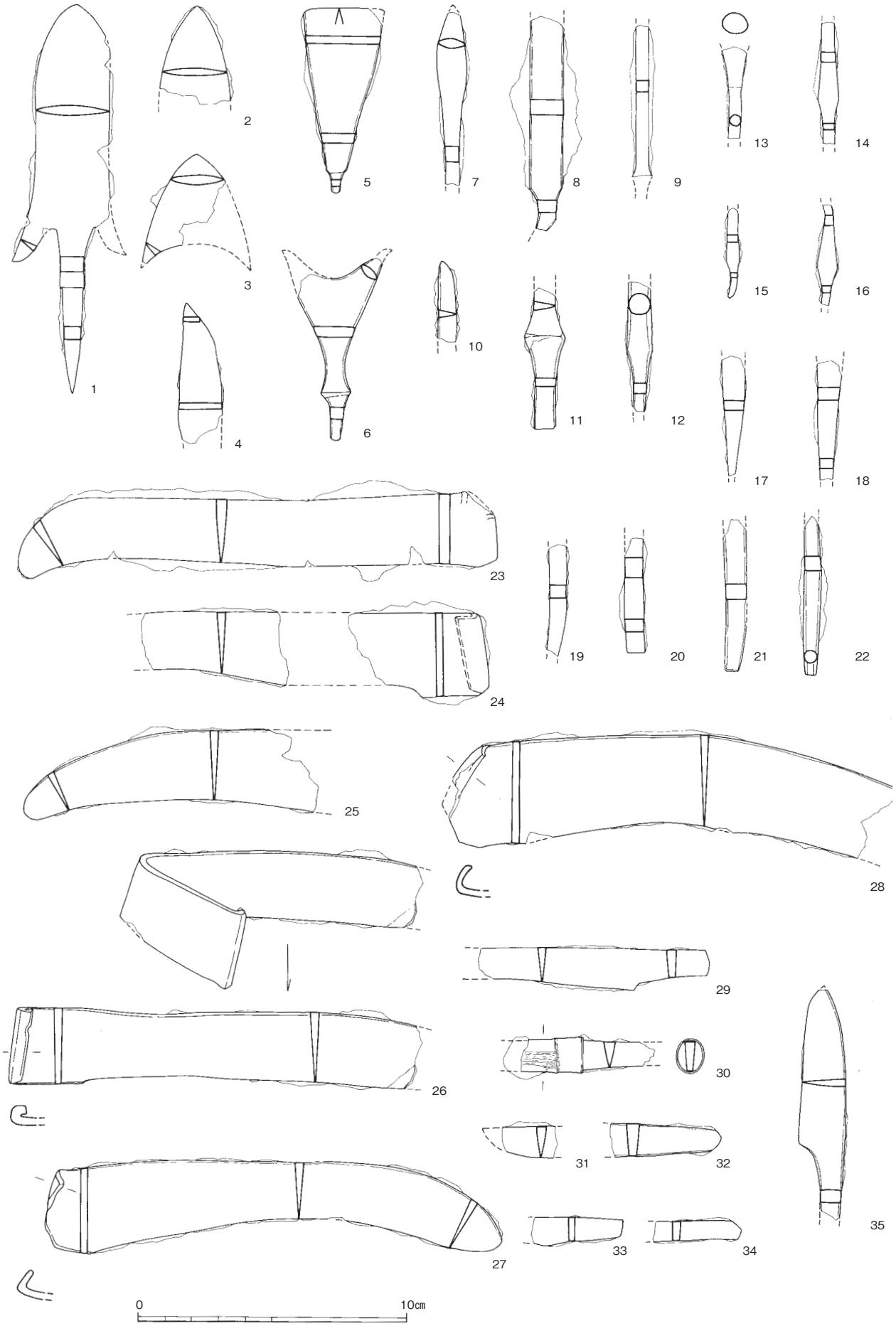
148は包含層Ｂ区から出土した板状加工品である。やはり厚さ2.0～3.0㎜の板状で両面を丁寧に研磨する。中でも147･148は比較的大型の板状加工品で、短辺2.5㎝程の長方形を指向し、３辺が直交方向に側面研磨されている。144は図示した右側の１辺が段をなしている。上段の面は白色化しており、やや傾斜がつく。また水平方向への極細の条線も確認でき、割り取りの際の施溝痕と考えられる。下段は施溝ののちに割りとられたとみられる破面が直線的に伸びている。149～180はSX－02谷状落ち込みの埋土中から出土したものである。大半が上層からの出土で、包含層Ａ区・Ｂ区と重複する範囲から出土したものが多いが､土質が粘性で水分を多く含み､掘り下げに難を伴ったため、出土位置を記録しないまま取り上げている。いずれも厚さ2.0～3.0㎜ほどの板状を呈し、両面を丁寧な研磨により平坦に仕上げる。149～152は幅1㎝以下の長方形状を呈する破片である。一方、158～160･164･170などは３側面が研磨された状態で残されている中でコーナー部が直角にならず平面形状が長方形状を呈さない資料であり、特に164は正三角形の各先端を折った様な形状になっており、特異な資料といえる。また150･152は片側面に段が形成されており、特に150は下段が折り取られた状況を示していて、割り取りの際の施溝痕跡とみられる。169･176は片側面の断面が三角形状にとがっていて、上下から施溝され、擦り切りにより割り取られた痕跡とみられる。

Ｉ区出土金属器（第129･130図、第10表、図版59～61）

Ｉ区から出土した金属器を一括して報告する。ほとんどが鉄器で、武器･農具･工具がみられる。また鉄滓も多くはないが出土し、中には椀形滓も含まれることは注意すべきであろう。ほかに銅製の指輪が１点あるが遺構検出中の出土であり時期は不明で、新しいものである可能性も否めない。

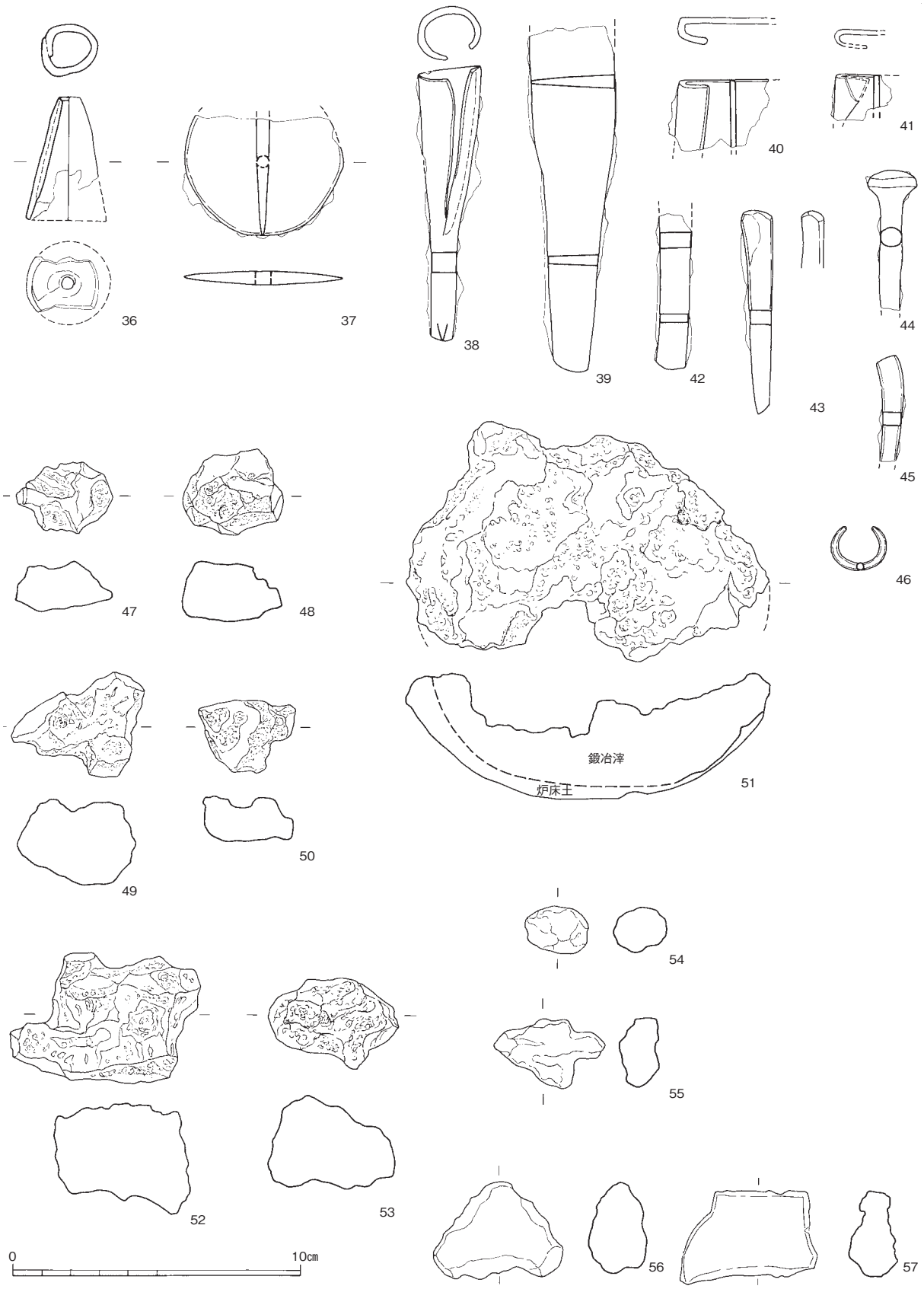
鉄製利器（1～22・39）1～22は鏃であろう。1は腸抉柳葉鏃。茎は末端がとがり断面正方形。関をはっきりと作り出し、箆被部も断面方形を呈する。鏃身部は逆刺を除き8.5㎝、含めると9.6㎝をはかる大型品で、左右の抉部の深さがやや異なる。SX－02谷状落ち込み遺構出土。2は大型の鏃の先端が遺存するもの。厚さは3㎜ほどありしっかりとしたつくり。包含層等出土。3は凹基鏃である。基部は緩やかに湾曲する。最大幅は推定で4.2㎜をはかる。5は方頭鏃。刃部幅は推定で約4㎝をはかる。茎は一部しか遺存しない。断面方形。包含層等出土。6は雁又鏃。茎の断面は一辺約5㎜の方形、関をしっかりと作り出す。鏃身部長は推定で5.5㎝ほどをはかる。包含層等出土。7は長頸鏃で関を持たない。茎は断面が１辺5㎜以上をはかる正方形でしっかりとしたつくり。包含層等出土。8は鏃身部の下半のみが遺存するものか。刃部形状は不明。10は片刃鏃の先端部である。75号住居跡出土。9・11～22は鏃の関付近から茎までと推定されるものである。9・11～16は関を残すもの。17・18は無関の鏃か。19～22は茎部か。9は７号住居跡出土、12はSX－02谷状落ち込み出土、15は３号住居跡出土、16は51号住居跡出土、18は19号住居跡出土、ほかはいずれも包含層等出土。39は短刀の柄付近か。茎の断面形状は長方形で刃部側がわずかに細い。関は不明瞭だがかろうじて認められる。刃部は幅2.9㎝をはかる。包含層等出土。

鉄製農・工具等（23～38、40～46）　23～28は鉄鎌である。いずれも緩やかに内湾する内側に刃部を研ぎだし、柄側は小さく折り返す。全長が判明するものが数点あり、23は17.8㎝、27は17.1㎝をはかる。22はやや直線的な形状を持つ。26は折り曲げられた状態で出土しており、出土した状態の図と伸ばして元の形を復元した想定図を掲載している。23は40号住居跡出土、25は６号住居跡出土､26は31号住居跡出土､27は７号住居跡出土､ほかは包含層等出土。29～34は刀子。



第 129 図　Ⅰ区出土金属器等実測図その①（1/2）

29･30 は茎と刃部の一部が、31 は刃部が、23 ～ 34 は茎部が遺存する。30 は茎の周りを木質が覆っており、一部その上から金属が覆っている。木柄と柄元金具が装着された状態で出土しているのであろう。30 は 75 号住居跡出土、31 は 74 号住居跡出土、32 は 43 号住居跡出土、34 は 87 号住居跡



第 130 図　Ⅰ区出土金属器等実測図その②（1/2）

出土、ほかは包含層等出土。35 は鋏の刃部か。当初刀子と考えたが、刃部が直線的で背部が湾曲することから鋏と判断した。刃部長は 5.8cmをはかり関が明瞭に成形される。包含層等出土。36 は鐸か。鉄板を曲げて一周させ円錐を形作り、一部が合わさるように成形される。頂部はふさがれない。包含層等出土。37 は紡錘車。直径 5.5cmをはかる円盤状で一部が欠損する。厚さは中央が厚く 5 ㎜ほどを測り、周囲がやや薄い。中央に直径 5㎜の円孔を穿つが、錆に覆われて表面では確認できず X 線画像で確認した。包含層等出土。38 は鑿か。着柄部は袋状を呈し内径 1.7cmほどを測る。茎部断面形は長辺 1.0cmほどの長方形状を呈ししっかりとしたつくり。刃部は平面形状がやや丸みをおびて鋭く研ぎだされる。全長 9.5cmをはかる完形品。包含層等出土。39 は短刀の柄部片。包含層出土。40・41 は手鎌であろう。いずれも小片で全形は不明だが、折り返し部が遺存する。40 は 4 号住居跡出土、41 は包含層等出土。42 はヤリガンナの茎か。44 号住居跡出土。43 ～ 45 は釘として報告する。43･45 は断面形状が方形で太い。ともに頭部が残る。44 は断面形状が丸く、頭部がしっかりと作りだされており、やや新しいものか。いずれも包含層等出土。46 は指環か。銅製で最大直径 3 ㎜ほどの円棒を丸めた形状。包含層等出土。

鉄滓等（47 ～ 57） 47 ～ 57 は鉄滓あるいは鉄素材となり得る鉄塊である。重さや出土遺構は一覧表（第 10 表）を参照されたい。特徴的なものとして 51 の碗形滓がある。直径 13cm弱を測る歪んだ碗状を呈し、外側に炉床土と考えられる土質部分の癒着が見られる。77 号住居跡出土。

（8）小結

以上、Ⅰ区の調査成果を見てきた。簡単に概括しておきたい。

竪穴住居跡は、一部分のみの調査を含め計 104 棟を検出した。このうち、出土遺物などからおおよその時期がわかるものが 86 棟ある。内訳を見ると、古墳時代前期の住居跡が 7 棟、古墳時代中～後期（5 世紀後葉～ 6 世紀末）の住居跡が 41 棟、古代前半期（7 世紀～ 9 世紀代）の住居跡が 38 棟である。古墳時代前期の遺構は本調査区では比較的少ないが、古墳時代前期の遺構は本調査区より北東側、4 次調査Ⅱ区や 5 次調査Ⅰ区で多く検出されており、集落の立地にやや違いが見られる。5･6 次調査の報告を踏まえて、集落の立地やその移動について詳細に検討する必要があろう。

一方、これまで報告してきた他の調査区では全く出土していなかった古代の竪穴住居跡が検出されたのは大きな成果である。小型の長方形プランの竪穴住居跡で、隅カマドを持つものが標準的な形態の住居跡となる。京築地域、特に豊前市周辺ではしばしば同様の竪穴住居跡を持つ古代の集落跡が出土しており、本調査区で出土した古代集落もこれらに連なるものであろう。なお、一方では東九州自動車道に先立つ発掘調査でも同じ古代前半期でありながら掘立柱建物を主体として竪穴住居がみられない例がままみられる。これらの集落構成の差が何を意味するのか、今後の大きな課題となろう。

その他、出土遺物では滑石製品・未製品、多数の鉄器、また少数ではあるが半島系とみられる形態的特徴を持つ須恵器・土師器などが注目される。

3　Ⅱ区の調査成果

（1）概要

調査区の位置　Ⅱ区は、南北に細長くのびる遺跡のほぼ中央部に位置し、埋没微高地のほぼ頂部にあたる580㎡の範囲である。西には用水路を挟んで第2次調査Ⅱ区が、南には同Ⅲ区が隣接する。また、北側に隣接する水田面についてはその北半分を平成24･25年度に第5次調査として、南半分を平成25年度に第6次調査として発掘している。

本調査区は細長い微高地の中でも地山が最も高まっている地点である。西の2次調査Ⅱ区は調査前にすでに著しく削平されていたが、遺構面は本調査区よりも1mほど低かった。東側は試掘・本調査が全くなされていないため状況は不明な部分が多いが、字図や圃場整備前の地割と田面標高などから、やはり本調査区の地山よりもやや下がっていることが推測される。

土質　Ⅱ区の旧状は水田であり、遺構面は水田耕作土と床土を除去するとすぐに露出する状況で、現地表下約30㎝でほぼ水平に広く確認された。地山の状況は、Ⅰ区とは異なり基盤層下部にあたる砂礫層はほとんど露出しておらず、上層にあたる風化土壌が広がっていた。色調は暗茶～暗黄茶褐色を呈し、遺構埋土との区別は比較的容易であった。

遺構埋土　遺構の埋土は基本的に削平前の地山上層である黒ボク土からなり、遺構の判別は比較的容易であった。しかし、遺構相互の埋土がきわめて類似していて切り合い関係にある遺構の弁別にはきわめて困難を伴った。また、全体に著しい削平を受けて遺構の残りはあまり良くなく、数㎝しか壁が残らない竪穴住居跡などもあって検出には苦労を伴った。

検出遺構　Ⅱ区で検出した主な遺構は、竪穴住居跡39棟、土坑3基、甕棺墓2基である。このほか、ピット多数を調査した。これらの遺構の所属時期はおおよそ古墳時代前期・後期で、特に古墳時代後期の遺構が多い。

第131図　4次調査Ⅱ区遺構配置図（1/300）

以下、個別の遺構について詳細を述べていこう。

（2）竪穴住居跡

Ⅱ区からは、計39基の竪穴住居跡を検出した。うち、27基が古墳時代前期、10基が古墳時代中期後葉～後期、1基が古代初頭に属するものと推測され、古墳時代中期後葉～古代初頭の住居跡11基のすべてがカマドを持つ。また、カマドの形状が判明する10基のうち8基がL字状カマドである。以下、個別の遺構について説明を加えていく。全体的に住居跡同士の重複が激しいため、新しい遺構に破壊されていて残りはよくなく、住居跡の調査に苦慮した。このため、いくつかの住居跡については切り合い関係を誤認するなどして本来残されていたはずの壁を破壊してしまい記録が残せないようなことも起きた。また、全体的に著しい削平を受けていて残りが悪く、住居の全体像を把握できなかったり、出土遺物に恵まれず時期比定にやや難を伴う住居跡も散見される。ここでは、以上のような悪条件の中で行われた調査の中で、できる限りの情報を得ようと努力した結果を虚飾なく披瀝するのでご理解いただきたい。なお、112･120号竪穴住居跡は欠番である。

105号竪穴住居跡（第132図、図版64）

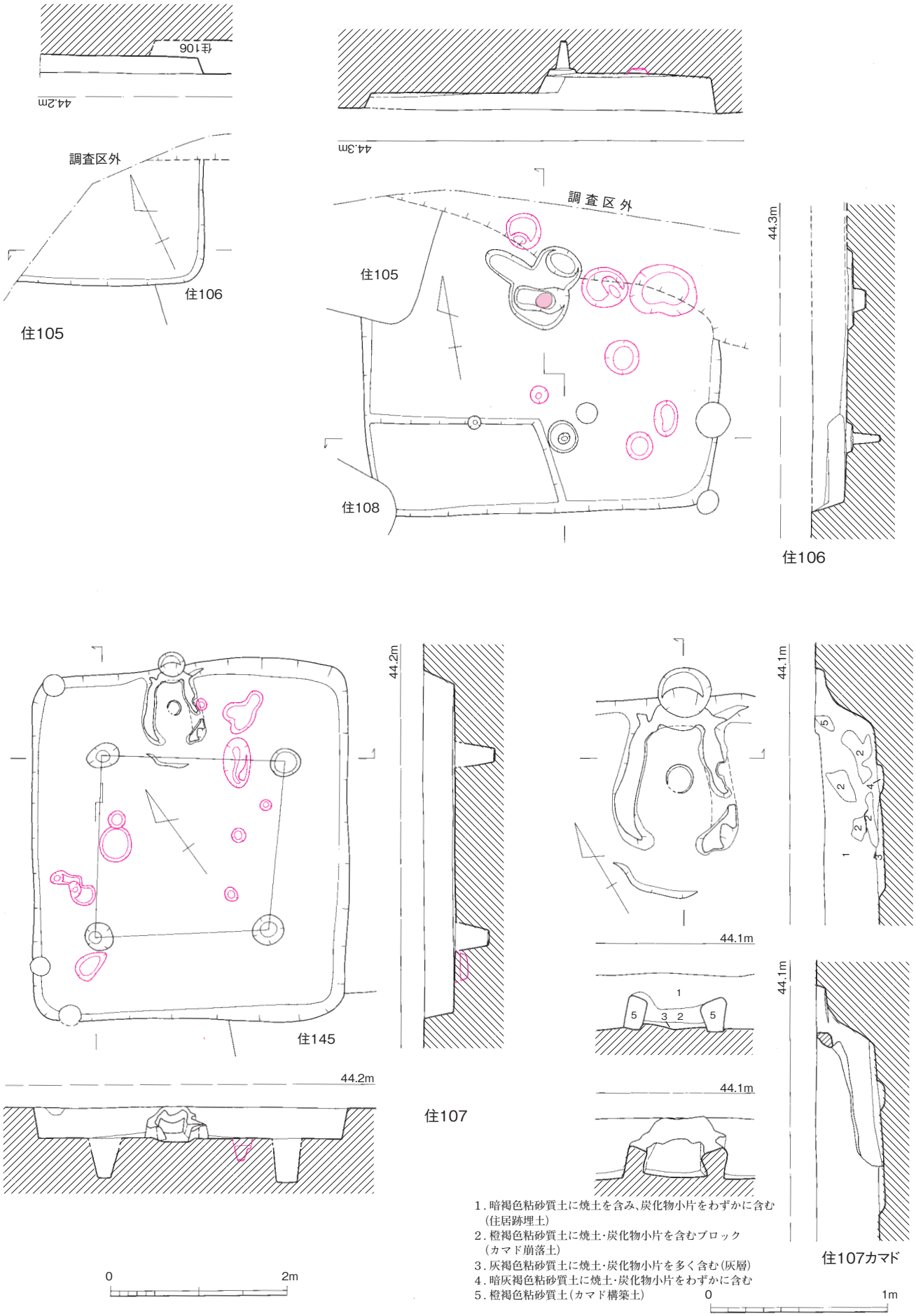
調査区北端に位置する竪穴住居跡で、北側は大きく調査区外へと伸びており、南隅のみ確認された。106号住居跡を切り、北側を後世の撹乱によって破壊されている。規模や主柱穴、屋内の遺構の有無については不明である。検出状況での大きさは南壁が2.0m、東壁が1.4mほどである。軸を南北にとると東へ30度ほどふれる。残存する壁の深さは20㎝以上で、貼床をもち、埋土は暗褐色粘砂質土の単層であるが、土器は下方から比較的多く出土した。床下掘り込みの有無は不明である。出土土器から古墳時代前期後半の遺構と考えられる。

出土土器（第133図、図版76）

土師器（1～3）　1は甕の口縁部片。頸部は明瞭に屈曲し、口縁部は直線的に外反する。端部をわずかに上方に湾曲させる。2･3は椀。2はやや手づくね感の残る椀で、口縁部は波打ち、指頭圧痕が残る。3は手づくねの椀。底部がやや尖り、器壁は分厚い。

106号竪穴住居跡（第132図、図版64）

調査区北隅に位置する竪穴住居跡で、北側のおよそ半分を後世の撹乱によって破壊されていた。西壁の北部・南部をそれぞれ105・108号住居跡に切られる。南壁西側にベッド状遺構をもち、直上に硬化面を形成する。住居跡の中心部付近で、底に被熱硬化面をもつ2重の土坑が検出された。おそらくは炉と考えられる。軸は東西にとるが、北に10度ほどふれている。東西に3.84ｍを測り、残存する壁の深さは約40㎝である。南北の長さは撹乱による破壊及び調査区外へ伸びているため不明であるが、中央の土坑を炉として被熱硬化面を中心に南北の幅を復元するならおよそ4.6ｍとなり、横長の方形プランをなす。またベッド状遺構は床面から20㎝ほどの高さで、埋土に似た暗褐色の盛土で構築されている。柱穴と考えられるピットがベッド状遺構の脇に掘り込まれており、位置から考えて2本主柱の住居が想定される。対応する北側の柱穴は調査区外に存在する可能性が高い。貼床をもち、埋土は単層である。古墳時代前期後半の遺構であろう。



第 132 図　105 ～ 107 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）

出土土器（第 133 図）

土師器（4 ～ 6） 4 は甕の口縁部片。頸部は明瞭に屈曲し、口縁部は外湾しながら開く。5 も甕か。頸部の締まりは緩く、口縁部は直立気味に短く伸びる。6 は椀である。底部は尖底で、体部はわずかに内湾しつつ直線的に開く。

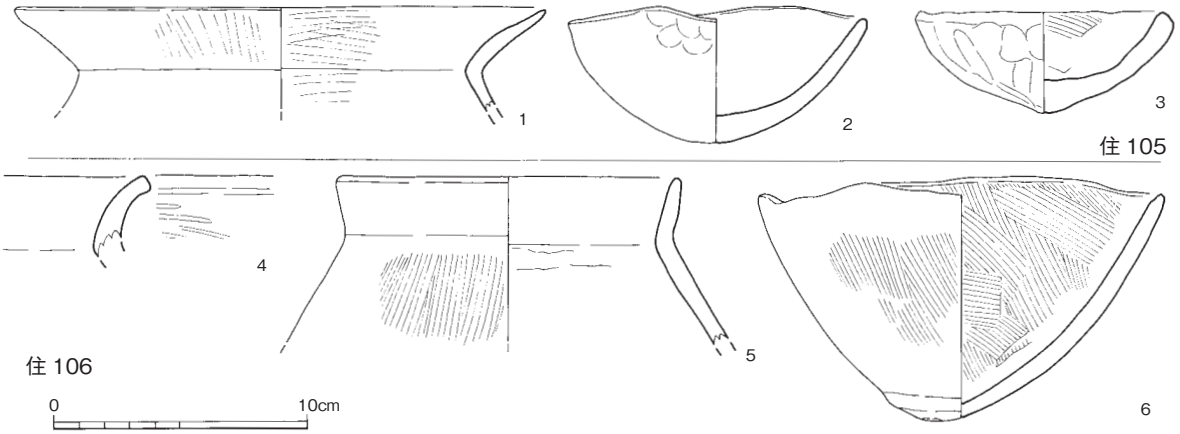
なお、他に埋土中から第 121 図 12 の黒曜石製打製石鏃が出土した。

107 号竪穴住居跡（第 132 図、図版 64）

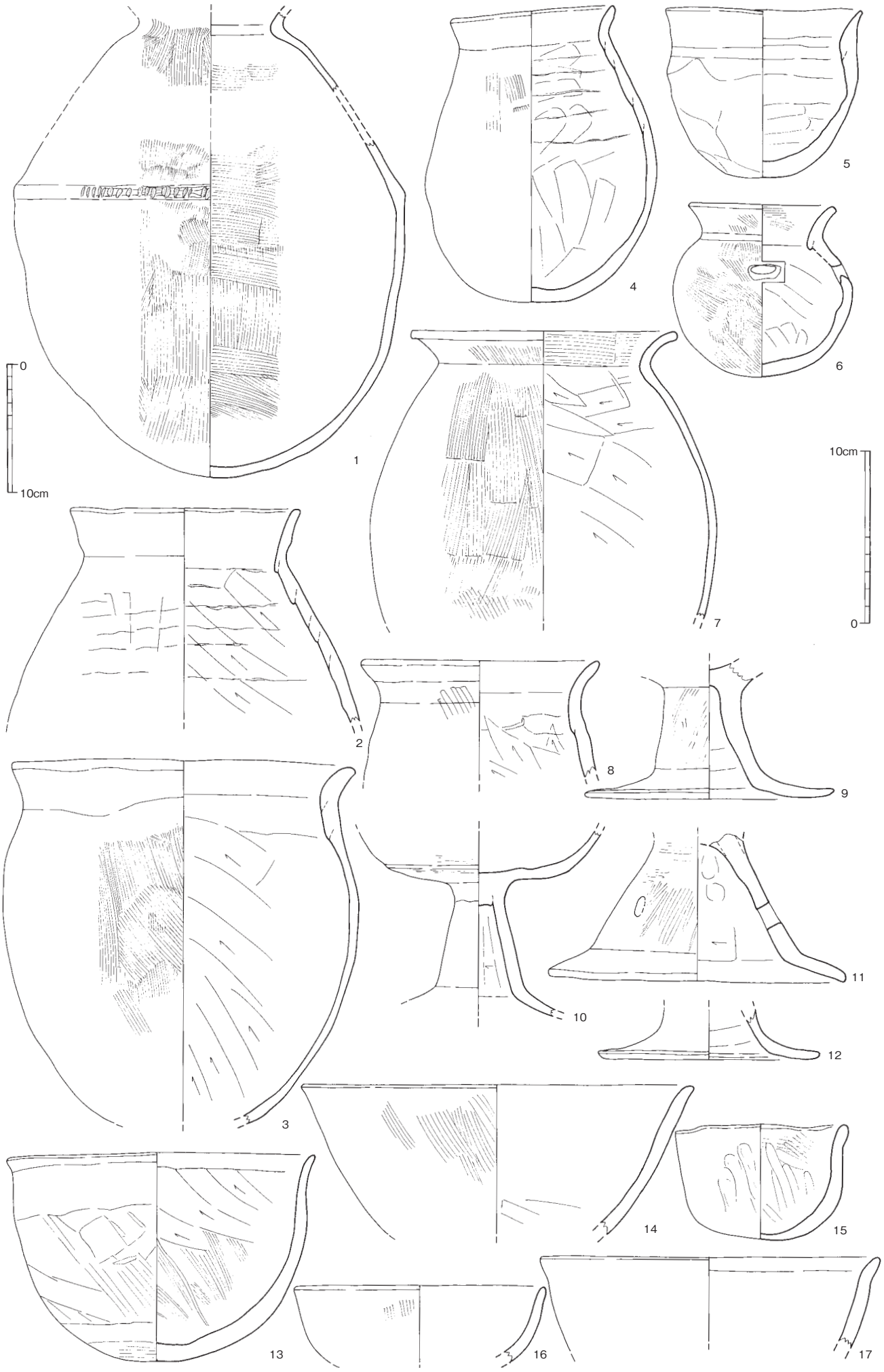
調査区の中央やや北寄りに位置する竪穴住居跡で、南隅で 145 号住居跡を切る。主軸は南北にとるが、東に 35 度ほどふれている。長さは南北に 3.76 m、幅は東西に 3.42 mとおよそ正方形に近いプランとなる。残存する壁の深さは約 35cmである。北壁中央に内接型のカマドをもつ。柱穴と考えられるピットは 4 箇所で確認される。貼床をもち、直上に硬化面を形成する。埋土は単層ではあるものの緩やかな質の変化が認められ、上方ほど地山の黄灰色土に類似した土となっている。そのため当初は極めて残りの悪い住居跡と判断した。しかし北壁中央にわずかに粘土塊があり、それを切るかたちで後世のピットが確認された。ピットの壁面を観察したところ、下方に埋土と考えられる暗褐色土が確認できたためこれをさらに掘り下げ、カマドおよび本来の床面を検出した。埋土中にはカマドの右方から住居跡東隅にかけて大石が多数流入していた。

カマド（第 132 図、図版 64）

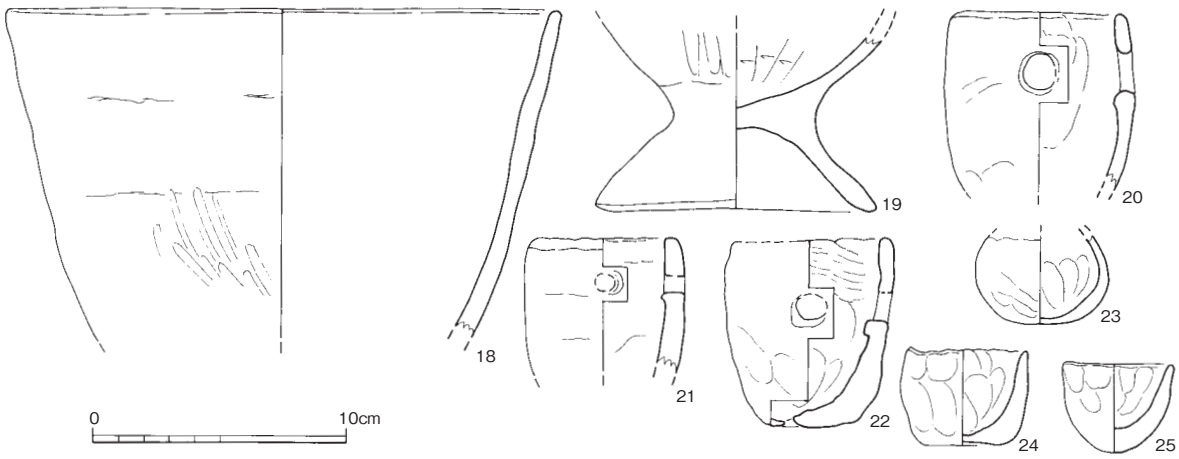
住居跡の北壁中央に付設された内接型のカマドである。住居が深く残存しているためカマドの残りも良いようで、当初北壁中央で確認されたピットは、位置的にみて、カマドから直上に伸び住居外へ抜ける煙道である可能性が高い。ただし、煙道を構成する壁体のうち、粘土で作られた住居側については、土層で見る限り崩落しているようなので、一部が崩れつつピット状に埋土が残されていたと考えるべきであろう。ピットに切られている粘土は下方の両袖へと伸びており、正面から見て玉葱形のカマドが復元できる。右袖は左袖に比して崩落が激しいが、すぐ右方に大小の石が確認でき、これらの流入によるものと考えられる。カマド内部の前方は床を 4cmほど掘り下げている。また支脚石の抜き痕らしき痕跡が内部中央で検出され、その前方には被熱硬化面が確認された。さらにカマド内部からは手捏ねのミニチュア土器が出土しており、廃棄時に祭祀が行われた可能性がある。カマド内部の幅は約 40cmで、残存する袖の長さは約 75cmである。カマド埋土は 3 層に分かれ、上から埋土、カマド崩落土、灰層である。灰層は支脚穴より前方、床の掘り込み内に堆積し、その



第 133 図　105･106 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第 134 図　107 号竪穴住居跡出土土器実測図その①（1 は 1/4、他は 1/3）



第 135 図　107 号竪穴住居跡出土土器実測図その②（1/3）

上に所々埋土とカマド天井部であったと考えられる崩落土が堆積する。縦断土層をみると、奥壁から約 40cmの位置で、カマド壁崩落土の見られない箇所があり、掘り下げ時には径 20 ～ 30cmほどの略円形にカマド壁崩落土のみられない範囲が広がる状況が認められた。おそらく掛け口であろう。灰層の存在からカマド内部の清掃は行われず、また埋土がカマド内部に入り込んでいることや流入した石により右袖のみ崩壊していることからカマド本体は意図的に直接破壊されることはなく、住居跡埋没時に一度に流入した土によって真上から押しつぶされたとみるのが妥当であろう。

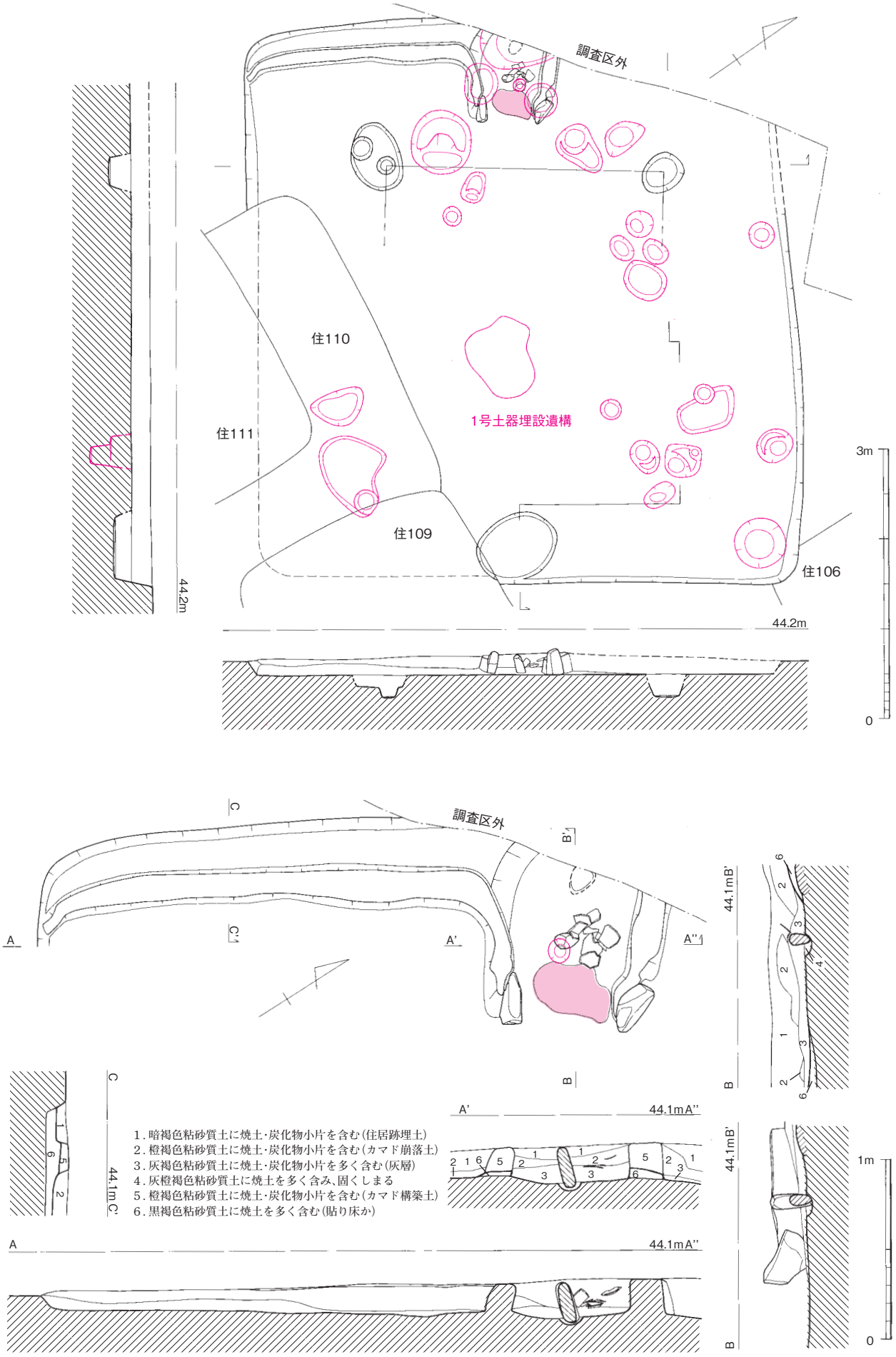
出土土器（第 134･135 図、図版 76）

土師器（1 ～ 25）　1 は甕の底～頸部片。胴部は長楕円形で胴部最大径付近に刻目突帯をめぐらせるが、かなり退化していて低い。頸部は強く締まる。2 ～ 5･7･8 も甕。2･4･8 は長胴で頸部の締まりが緩い甕。口縁部はやや直線的に開く。ともに体部内面に粘土帯接合痕跡をよく残す。3 は体部がバケツ状を呈する甕。頸部の締まりは緩く、口縁部は肥厚しながら開く。5 は小型甕。球胴で、口縁部は肥厚しながら短く開く。6 は球胴の壷。頸部は強く締まり口縁部は外湾しながら開く。胴部上位に焼成後の穿孔を施す。9 ～ 12 は高坏。9･11･12 は脚のみが残る。9 は上位の開きは緩く、接地部で明瞭に屈曲して外に長く伸びる。11 は坏下位より強く開き、やはり接地部付近で屈曲する。脚中位に 3 孔を穿つ。12 は脚端部の資料。強く湾曲するが湾曲部に稜は認められない。10 は坏下位～脚上位の資料。坏下位は体部外面に段を形成するが弱く、屈曲も不明瞭。脚部下位の屈曲は明瞭。13 は鉢。やや深い。丸底で口縁部は弱く外湾する。外面は板ナデ、内面は指ナデを主な調整とする。14 は鉢あるいは高坏の坏部。口縁部は斜めに開き端部をわずかに外湾させる。15 は手づくねの椀。16 は椀。底部はやや平坦か。口縁端部はわずかに外反する。17 は鉢あるいは椀の口縁部片。18 は甑。体部中位から口縁部まで直線的に開く。19 は脚付椀か。脚部は「八」の字状に強く開く。20 ～ 22 はタコツボ。口径がやや小さい。体部中位に 1 孔を穿つ。23 ～ 25 は手づくねのミニチュア土器。23 は甕、24･25 は椀か。これらの多くは 6 世紀中葉に位置づけられ住居跡の時期もこの頃か。

なお、他に埋土中から第 177 図 2 ～ 4 の把手状土製品、第 178 図 9 の磨製石斧、第 179 図 2 の鉄製鋤先が出土している。

108 号竪穴住居跡（第 136 図、図版 65）

調査区の北西部に位置する竪穴住居跡で、東隅で 106 号住居跡を切り、109・110 号住居跡に南



第 136 図　108 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）

隅を切られるものとして調査したが、出土土器は本住居跡が新しい様相を示し、切り合い関係を誤認していたものであろう。西壁中央にＬ字状のカマドをもつ。また東壁の中央、カマドと対面する位置に深さ約 20㎝の壁際土坑が確認され、これは住居の出入口に伴う可能性がある。主軸は東西にとるが、北に 35 度ほど振れる。長さは東西に 6.16 m、幅は南北に 5.76 mを測り、およそ正方形のプランとなる。壁の残存する壁の深さは約 20㎝である。主柱穴と考えられるピットが西側で２つ検出され、東隅・南隅においても１つに特定できないものの主柱穴の可能性をもつピットが複数確認されている。4 本主柱の構造を持つものであろう。埋土は暗褐色粘砂質土の単層で貼床をもち、直上に硬化面を形成している。出土土器から、6 世紀後葉に位置づけておきたい。

カマド（第 136 図、図版 66）

住居跡の西壁中央に付設されたＬ字状のカマドである。煙道は向かって左、南方向へと伸び、住居跡の床面よりも高い位置に構築されている。住居外へと自然に伸ばすために煙道周辺のみ住居の床を高くしていたものと考えられる。両袖の先端には袖石をもち、支脚石がカマド中心の原位置で確認された。被熱硬化面は支脚石の前方に広がっている。カマド内部の幅は約 65㎝、袖の長さは 115㎝ほどを測りやや大型の感がある。カマド埋土は３層に分かれ、上から埋土、カマド崩落土、灰層である。灰はカマド内部に厚く堆積しており、その上に天井部と考えられる崩落土が重なる。壁体の崩落土は支脚石のやや後方に間隙をみせ、ここが掛け口であったことを窺わせる。カマド内部の整然とした堆積状況、及びカマド周囲に崩落土が広がっている状況を踏まえると、住居廃絶時にカマド内の清掃は行われず、住居跡埋没時に流入土の土圧で押し潰された可能性が高い。またカマド右袖の右方、崩落土下より灰の薄い堆積が検出された。カマド使用時に清掃で掻き出したものか。ところで確認された支脚石の掘方は非常に浅く、支脚が立つとは考えがたい。灰層の不自然なほどの厚さや、断面観察において構築粘土が袖上方のみにみられること、その粘土の境界が土器の出土するレベルとほぼ一致することを考えても、支脚石は下 1/3 から半分ほどが埋まっていた、つまりカマド内部の床がより高かったことが想定しうる。しかし被熱硬化面自体は下方で検出されているため齟齬が見られ、疑問が残るところである。

出土土器（第 139 図）

縄文土器（1）　1 は深鉢の口縁部片か。直立する。内・外面に縄文を施し、外面には断面カマボコ状の突帯を貼り付けてその上に刻み目を施す。

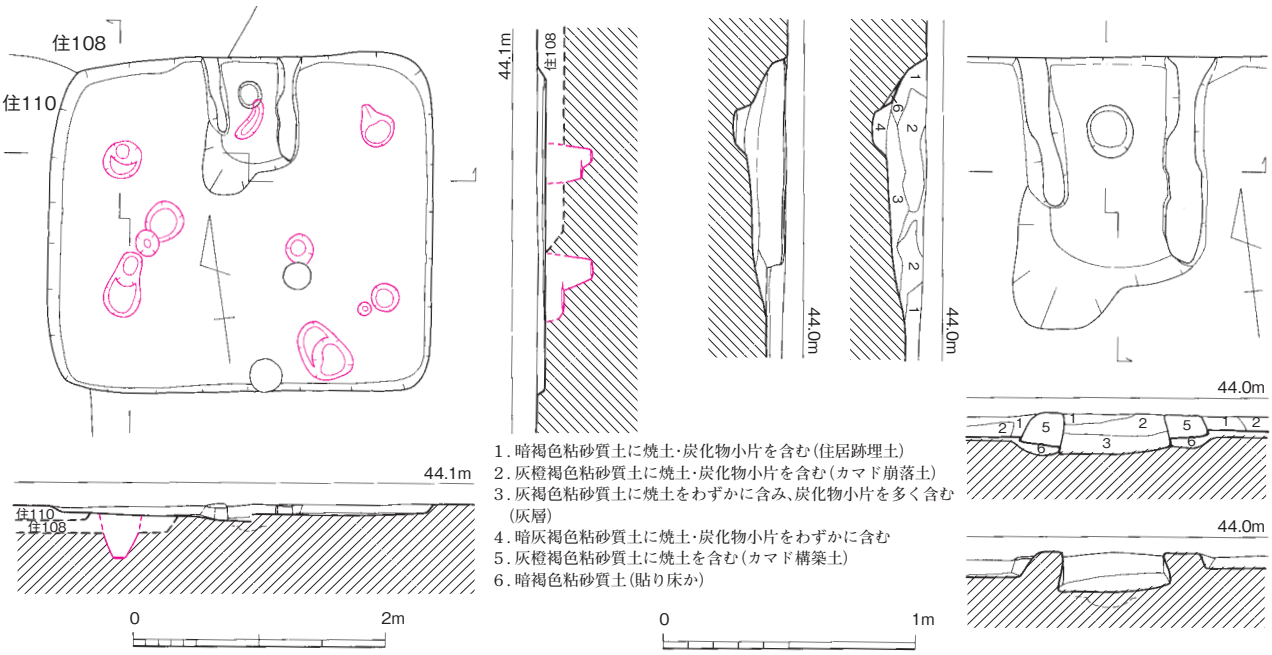
須恵器(2 ～ 7)　2 ～ 4 は坏蓋。天井部から肩部にかけて緩やかに湾曲し､肩部外面の段は退化する。口縁部は斜めに仕上げる。5･6 はカエリを持つ坏身。カエリ部は外に強く突出し、口縁部は斜めに伸びる。6 は口縁部の伸びが小さい。7 は瓹の頸部片か。段の下に櫛描波状文を廻らせる。

土師器（8 ～ 10）　8 はミニチュアの椀。器壁が薄く指頭圧痕が残らない優品。9 は手づくねのミニチュア土器で椀形か。10 は短頸壷。口縁部が短く上に立ちあがる。

なお、他に埋土中から第 178 図 7 の異形石器が出土している。

109 号竪穴住居跡（第 137 図、図版 66）

調査区の中央からやや北西寄りに位置する小型の竪穴住居跡で、西側で 108・110 号住居跡を切る。北壁中央に内接型のカマドをもつ。主軸は概ね南北をとるが、わずかに 5 度ほど東へ振れている。長さは南北 2.56 m、幅は東西 2.90 mのおよそ正方形のプランをなし、残存する壁の深さは 8



第 137 図　109 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）

cmほどで残りが悪い。床面からは貼床の下層からいくつかのピットを検出したが、深さや位置から明確に柱穴と判断できるものは確認できなかった。埋土は単層で貼床をもち、直上に硬化面を形成する。出土土器は古墳時代前期と 7 世紀代の 2 時期のものが混在するが、古い資料は下層の 110 号住居跡に由来するものとみられ、切り合い関係から 7 世紀初頭の住居跡と位置づけておきたい。

カマド（第 137 図、図版 66）

住居跡の北壁中央に付設された内接型のカマドである。支脚穴と考えられるピットがカマドの中心で確認されるが、上へ伸びる煙道の付設スペースを考えると住居跡の壁に近すぎる感がある。住居跡自体浅く残りが悪いことや、正方形に近くもやや東西に横長のプランを踏まえるならば、北壁が緩やかに立ち上がって当時のカマド上面は現在確認できるよりもやや後方に伸びていた可能性を考えたい。支脚穴の前方には被熱硬化面が確認されるが、住居跡床面より下方で検出された。カマド内部から前方は凹んだ半地下の形になっていることが分かる。カマド内部の幅は約 40cm、残存する袖の長さは 80cmを測る。カマド埋土は大きく 3 層に分かれ、上から埋土、カマド崩落土、灰層である。灰層は不自然に厚い堆積を見せるが、固定するには不十分な浅さの支脚穴と関係している可能性がある。灰層の上には縦断面で確認できるように掛け口と考えられる崩落土の間隙がある。支脚穴から伸びるピットやカマド埋土の堆積状況を考えると、住居廃絶時に灰の清掃は行われず、焚口から支脚石を抜き取られた後に住居跡埋没時の土圧で潰れたものと考えられる。

出土土器（第 139 図）

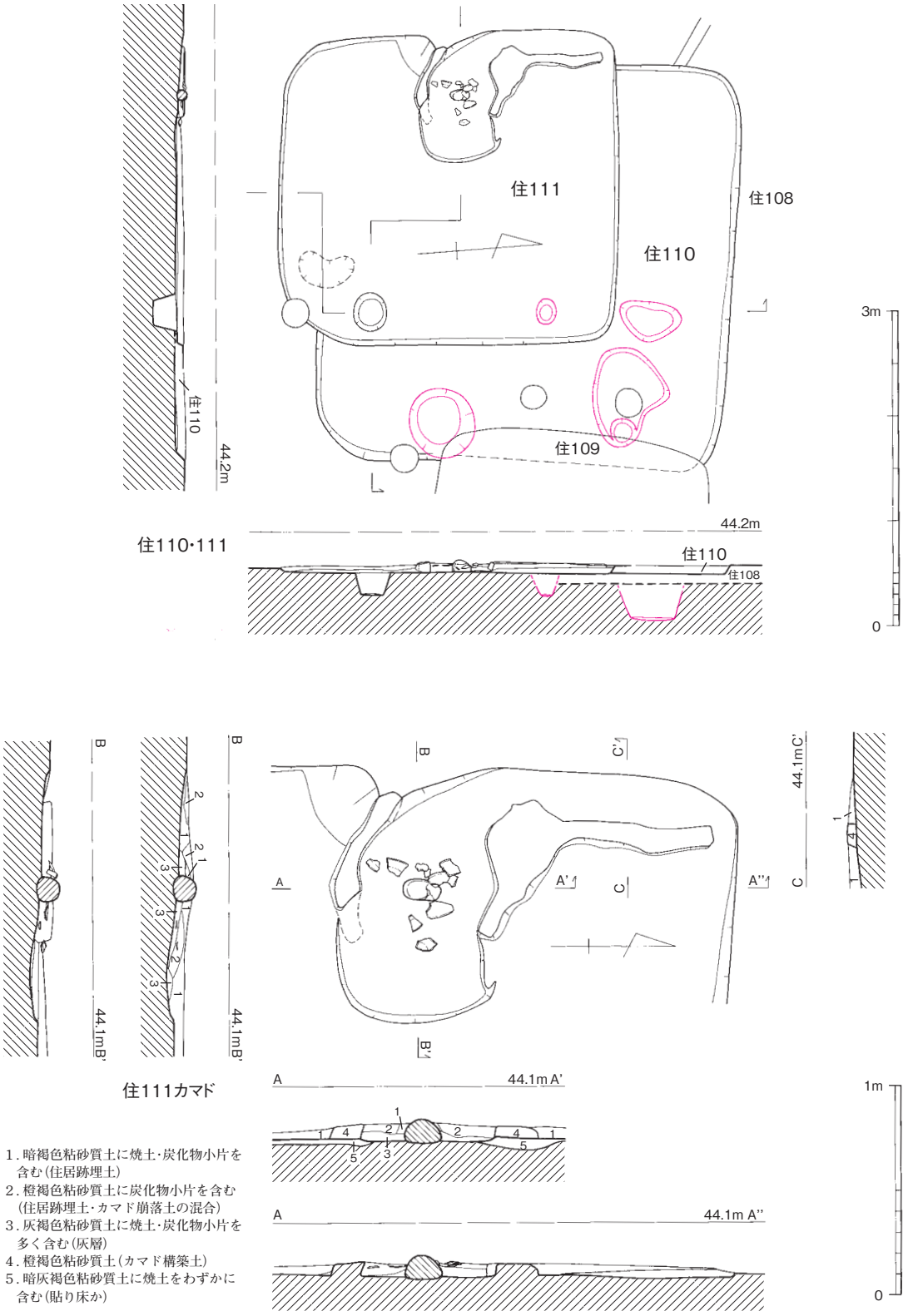
須恵器（11）　11 はカエリを持つ坏身。坏部はやや深い。

土師器（12 ～ 14）　12 は甕の口縁部片か。小片で全形は不明。13 は甕または壷の底部片。丸底球胴か。14 は直口壷の口縁部片。口縁部は直立気味に立ち上がる。器壁外面は縦方向、内面は横方向のミガキを施す。

なお、他に埋土中から第 177 図 1 の管状土錘が出土している。

110 号竪穴住居跡（第 138 図、図版 67）

調査区の西部に位置する竪穴住居跡で、東壁及び南西部をそれぞれ 109･111 号住居跡に切られる。北壁で 108 号住居跡を切るものとして調査したが出土土器からは本住居跡が古く位置づけられ、切り合い関係を誤認したものとして、本住居跡が古いものと修正したい。ただし、図面上は修正できないので当初の切り合い関係で図示している。注意されたい。主軸を南北にとると、わずかに 5 度



第 138 図　110･111 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）

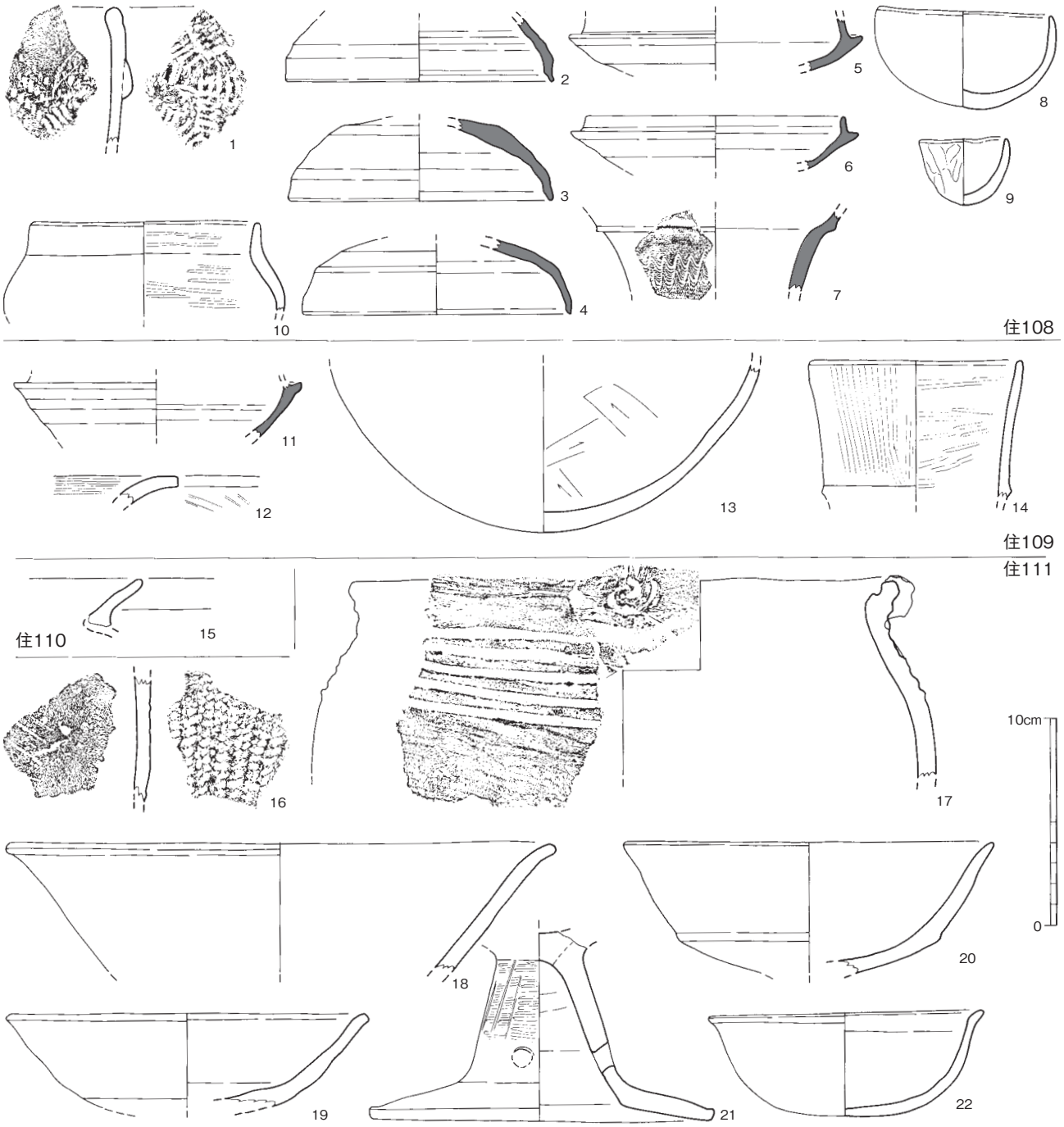
ほど東にふれる。南北に 3.78 m、東西に 3.80 mを測る略正方形のプランをもち、残存する壁の深さは 10cmに満たない。床面を精査していくつかのピットを検出したが、柱穴らしきものは確認できなかった。埋土は単層で、貼床をもつ。出土土器からは時期比定がやや難しいが前期の遺構か。

出土土器（第 139 図）

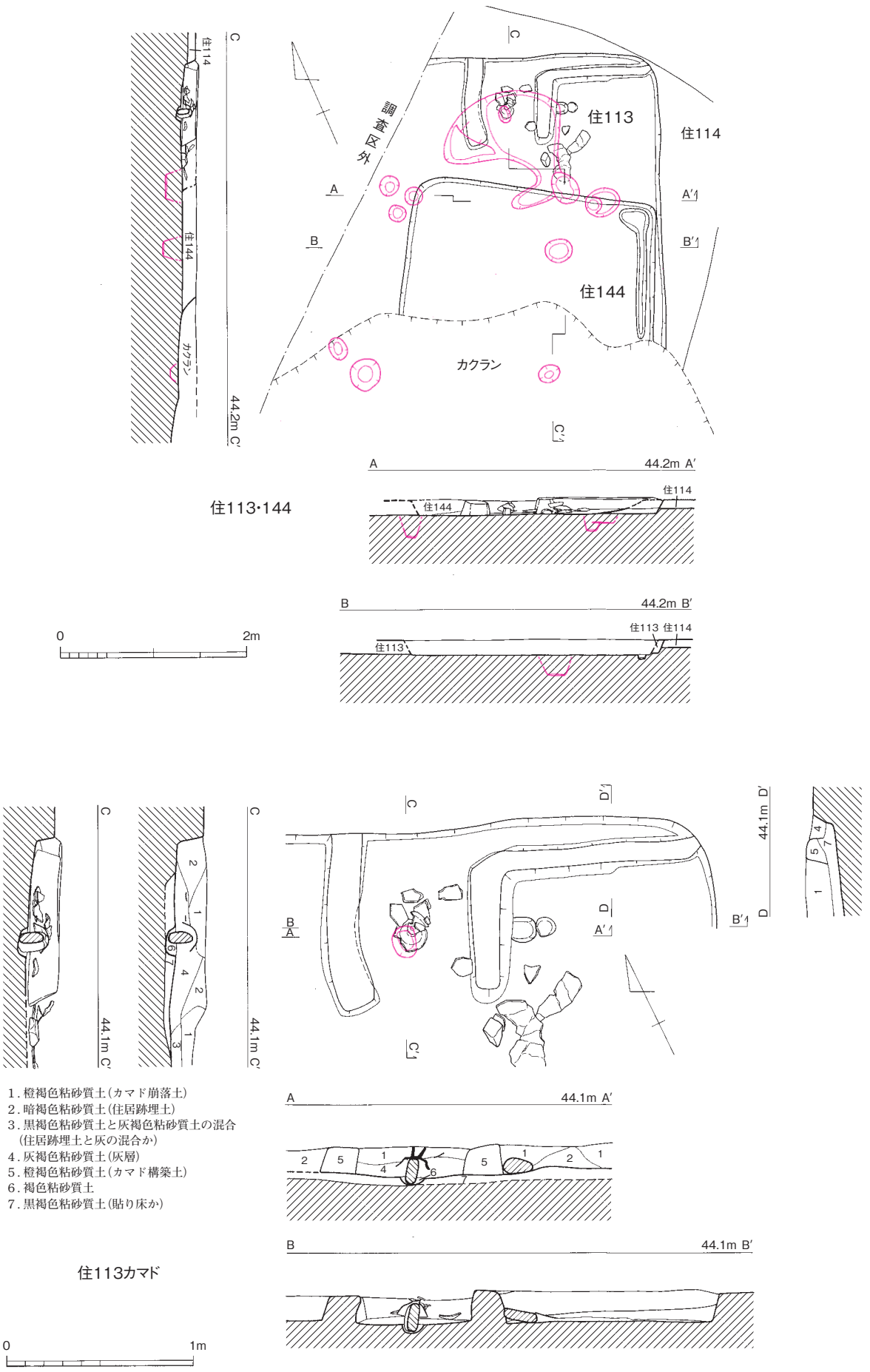
土師器（15） 15 は甕の口縁部片。小片で径は復元できない。頸部は明瞭に屈曲し、口縁部はやや波打ちながら強く開く。布留式に属し古墳時代前期の資料。

111 号竪穴住居跡（第 138 図、図版 67）

調査区の西部に位置する小型の竪穴住居跡で、110 号住居跡の南西部を切る。西壁中央にＬ字状



第 139 図　108 ～ 111 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第 140 図　113･144 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

のカマドをもつ。主軸は概ね東西をとるが、わずかに北にふれる。長さは東西 2.84 m、幅は南北 3.17 mのおよそ正方形のプランをなし、残存する壁の深さは 5cmほどである。床面を精査するも柱穴らしきピットは確認できなかった。埋土は単層で、貼床をもち、直上に硬化面を形成する。カマドを付設する西壁の中央から北西隅にかけては床を高くしているためか壁がほとんど削平され残っていない状況であった。出土土器と切り合い関係から、6 世紀初頭頃に位置づけたい。

カマド（第 138 図、図版 67）

住居跡の西壁中央に付設されたＬ字状のカマドで、煙道は向かって右側、北へと伸びる。左袖は西壁から外側に大きく開くように伸び、半ばで強く屈曲する。カマド内部中央に石が確認されるが埋まり込んでいる訳でもなく、高さから考えて、これが単独で支脚となると考えるには無理があろう。その周囲で高坏片が確認されていることを踏まえると、高坏を倒置した支脚の嵩増しである可能性が考えられる。いずれにせよ位置から考えて支脚に関係したものであろう。またカマド前方はやや住居跡床面から掘り下げられている。カマド内部の幅は約 60cmで、残存する袖の長さは 80 cmであるが、カマド前方の掘り込みや前述の石の位置からみて、さらに前方へと伸びる可能性がある。カマド埋土は 2 層に分かれ、上から埋土・カマド崩落土、灰層である。灰はカマド内部の石前方に薄く堆積しており、住居廃絶時に清掃はなされなかったようである。石の周囲に崩落土が見られないのはカマドが真上から潰れた際、掛け口であった所に埋土が流入した結果と見ることができる。またカマド後方はカマド崩落土が一部途切れる上に埋土と層序が逆転している。住居跡埋没時にカマドが押し潰され、煙道部や破損した箇所から埋土が流入したものと考えたい。

出土土器（第 139 図）

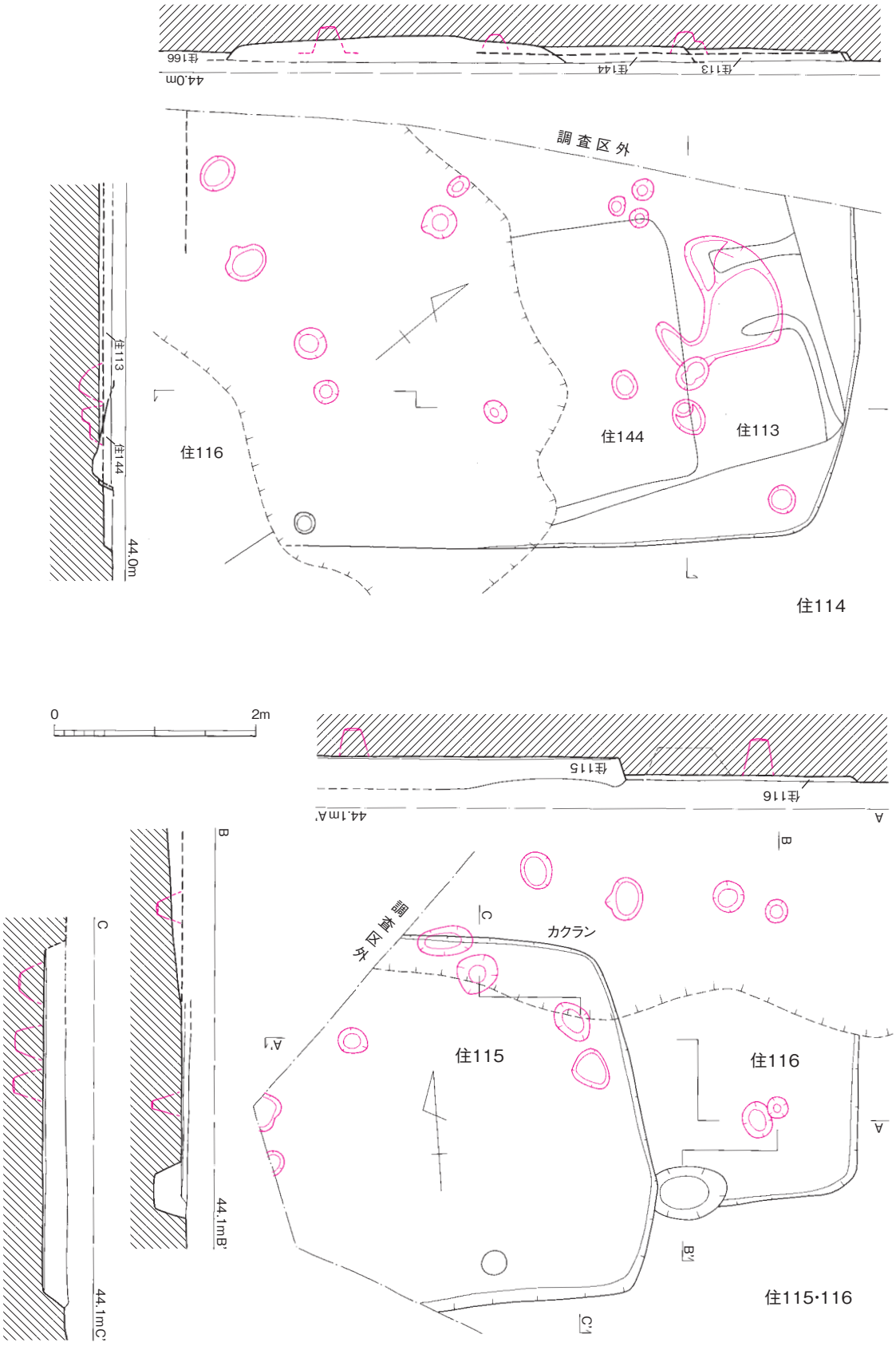
土師器（18 ～ 22） 18 ～ 21 は高坏。18 ～ 20 は口縁部片。18 は直線的に開き端部をわずかに外湾させる。19 は小形で、体部で湾曲し稜は形成しない。20 は体部中位外面に明瞭な段を形成する。21 は脚部片。接地部で明瞭に屈曲し開く。中位に 3 孔を穿つ。外面に細い原体で縦横に丁寧なヘラミガキを施す。22 は椀。底部はやや平底気味で、体部は強く湾曲し、口縁部は短く外湾する。

113 号竪穴住居跡（第 140 図、図版 68）

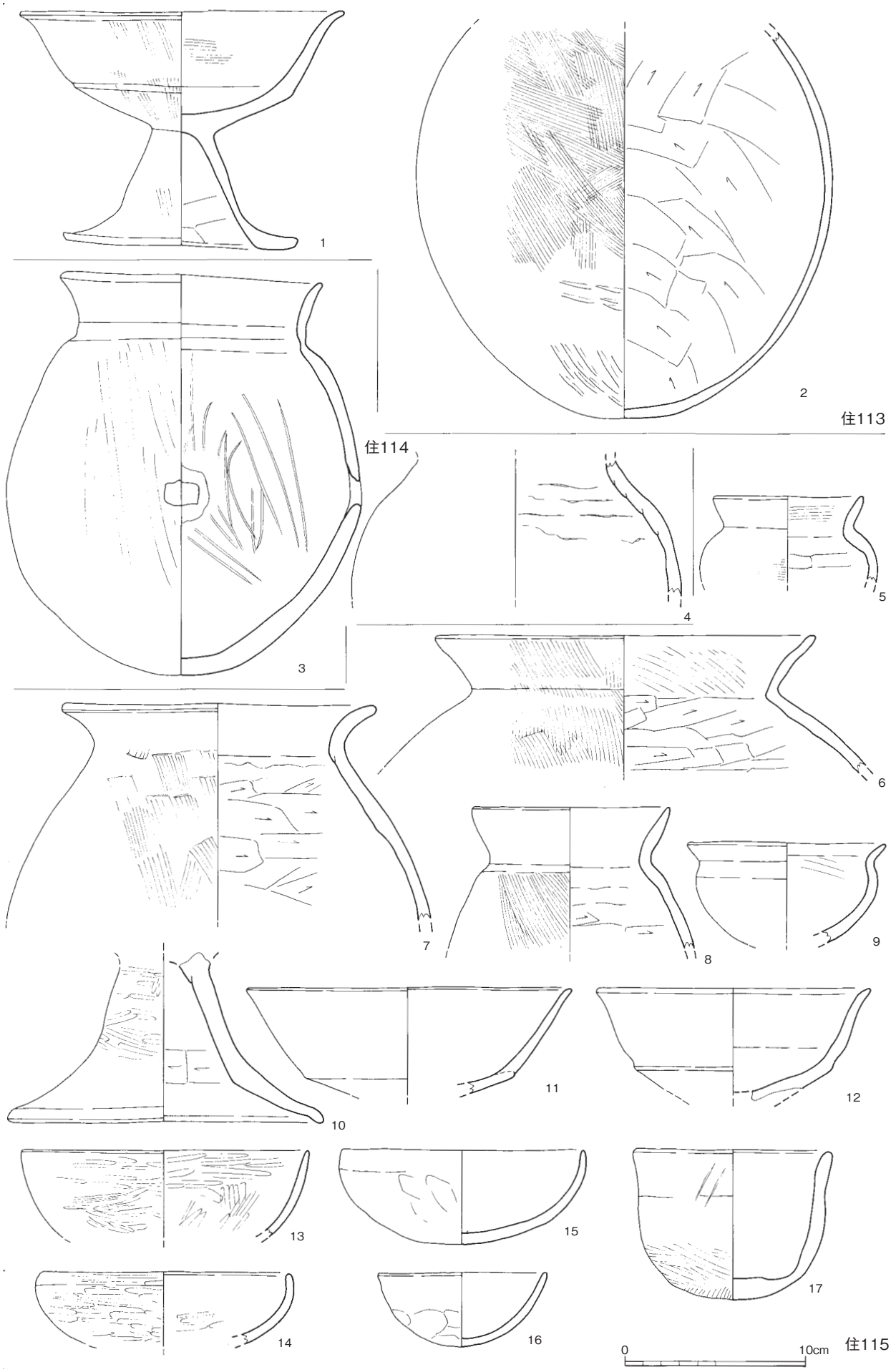
調査区西部端からやや北に位置する竪穴住居跡で、114 号住居跡を切る。また 144 号住居跡によって切られ、さらに南部を後世の撹乱によって破壊されている。また西側は調査区外へと伸びているため正確な規模は不明である。北壁にＬ字状のカマドをもつ。主軸は南北にとるが、20 度ほど東にふれる。カマドを北壁中央に位置づけると、一辺 3.2 mほどの小型住居となろう。残存する壁の深さは約 18cmで、柱穴は床面では検出できず下層での検出を試みた結果、いくつかの小ピットを検出したが、いずれも位置・深さから主柱穴と判断するにはやや弱い。竪穴部の埋土は単層で貼床をもつ。出土土器より、6 世紀初頭に位置づけられる。

カマド（第 140 図、図版 68）

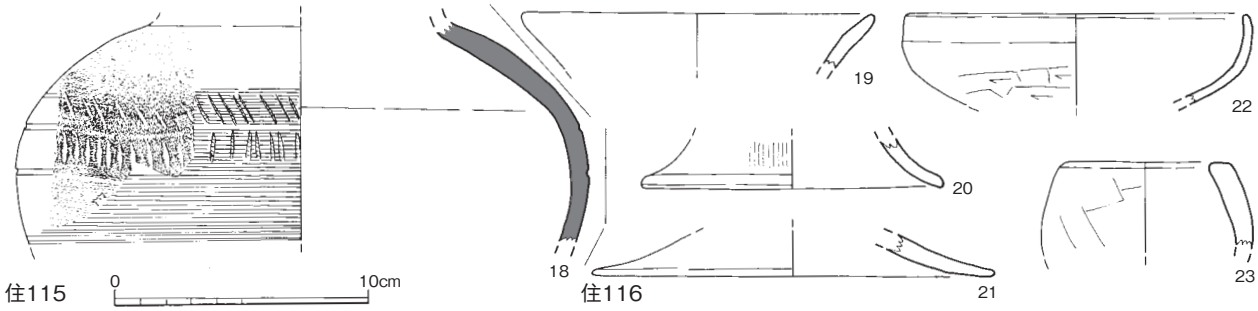
住居跡の北壁に付設されたＬ字状のカマドである。煙道は向かって右側、東方向へと伸びているが、住居跡の床面より高い位置に付設されており、住居跡隅部にむけて上っていく。カマド崩落土は竪穴部の中央部に向かって大きく広がっており、144 号住居跡の北壁に切られている。カマド内部中央には倒置された高坏が確認でき、当初これを支脚と判断した。しかし高坏を除去すると直下より石の支脚及びその掘方が確認された。層序をみると高坏は灰層の上方で出土し直上を天井部



第 141 図　114 ～ 116 号竪穴住居跡実測図（1/60）



第 142 図　112 ～ 114 号竪穴住居跡出土土器実測図、115 号竪穴住居跡出土土器実測図その①（1/3）



第 143 図　115 号竪穴住居跡出土土器実測図その②、116 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

の崩落土で覆われていることから、カマド崩落前から内部に存在していたことが分かる。そうすると高坏は支脚の嵩上げとして用いられていたか、カマド崩落前に掛け口から内部に逆さに落とし込んだかが想定される。石と高坏の間には粘土などの固定・接着材は認められない。カマド内部の幅は約 60㎝、残存する袖の長さは 95㎝である。カマド埋土は大きくカマド崩落土・埋土・厚い灰層の 3 層に分かれている。カマド崩落土と埋土はどちらも直接灰層上に堆積するが、基本的に崩落土が上位となっている。このことから、カマドは住居跡埋没時に流入土の土圧で崩落した可能性が高い。また住居廃絶時にカマド内の灰層は掻き出されていない。

出土土器（第 142 図、図版 76）

土師器（1・2）　1 は高坏。カマド内より出土した。坏部が深く、体部外面に段を形成する。口縁部はやや外湾する。脚部は強く開き、接地部でさらに屈曲して開く。2 は甕の胴部片。球胴丸底で外面をハケ目、内面をケズリ調整で仕上げる。いずれも 6 世紀初頭の資料か。

114 号竪穴住居跡（第 141 図、図版 68）

調査区西部端からやや北に位置する竪穴住居跡で、大部分を 113 号住居跡に切られる。西側は調査区外へと伸び、南部は撹乱によって破壊されている。撹乱下で南東側の壁の延長が確認でき、やや大型であることが分かる。遺存規模は東壁が 5.1m、北壁が 3.2m で、少なくともこれ以上の規模を持つ。軸は北東－南西にとる。残存する壁の深さは約 10㎝で、床面・撹乱内を精査するも柱穴は特定できなかった。埋土は単層である。切り合い関係より 5 世紀後葉以前に位置づけられるが、出土土器よりすればそれほど時期を上げるのは難しいだろう。5 世紀後葉に位置づけておきたい。

出土土器（第 142 図、図版 76）

土師器(3･4)　3 は甕。球胴丸底で頸部の締まりはやや緩い。口縁部は緩やかに外湾しながら伸びる。器壁内面に斜め方向の工具端部痕跡が残る。体部中央に、焼成後外から穿孔を施す。4 は壷の胴上位片か。頸部はやや緩やかに湾曲しつつ強めに締まる。体部内面に粘土帯接合痕跡をよく残す。

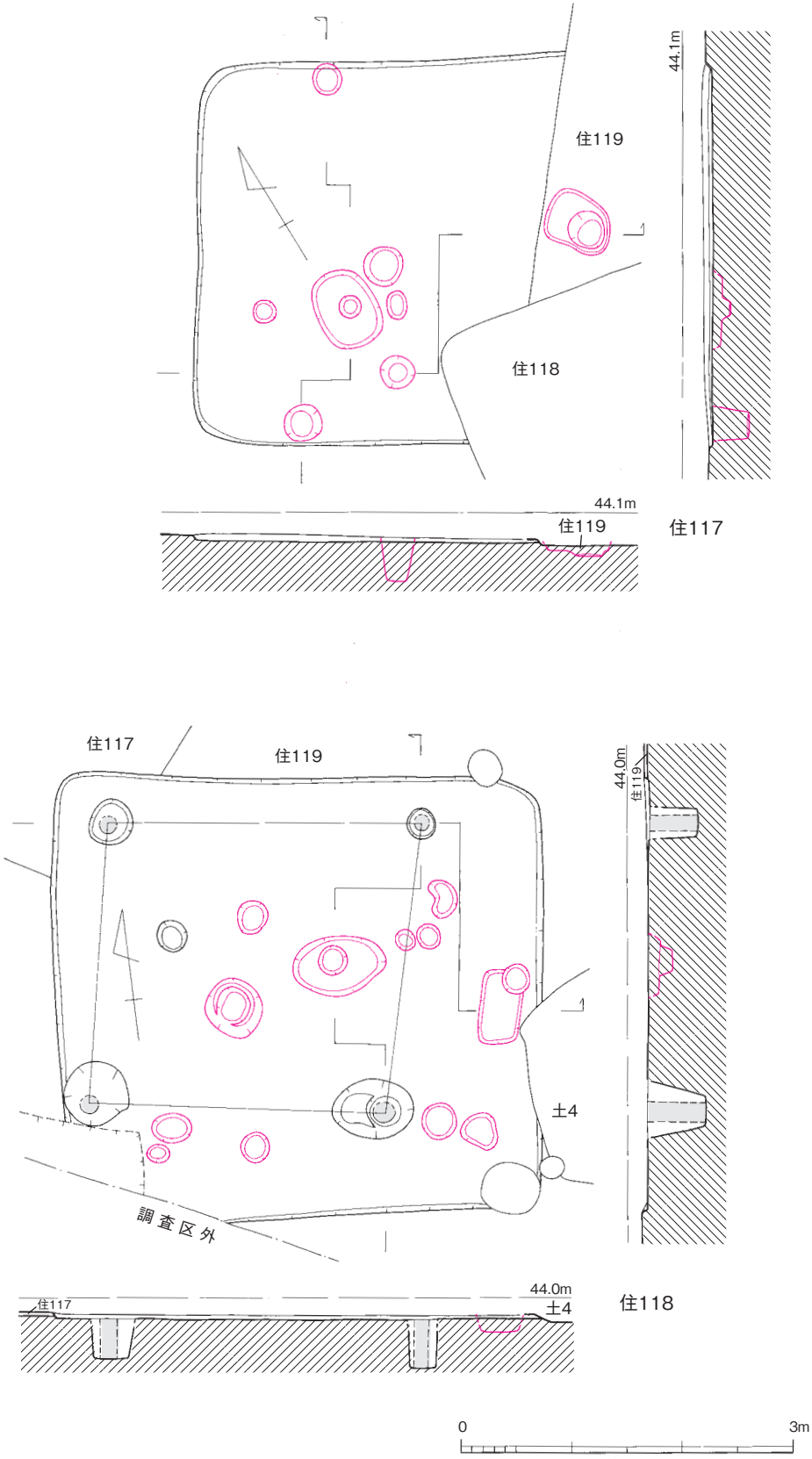
115 号竪穴住居跡（第 141 図、図版 69）

調査区の西隅に位置し、東側で 116 号住居跡を切る。北側は撹乱によって破壊され、西側は調査区外へ伸びる。軸はほぼ南北をとり、南北の長さは 3.46 mほど。東西の残存規模は少なくとも 3.9m をはかるが、東壁が大きくゆがんでおり、作図の際の間違いである可能性もある。撹乱下を精査したものの北壁の認定にやや疑問を残す。残存する壁の深さは約 22㎝で、床面から柱穴らしきピットは確認できなかった。埋土は単層である。出土土器から古墳時代前期後半に位置づけられる。

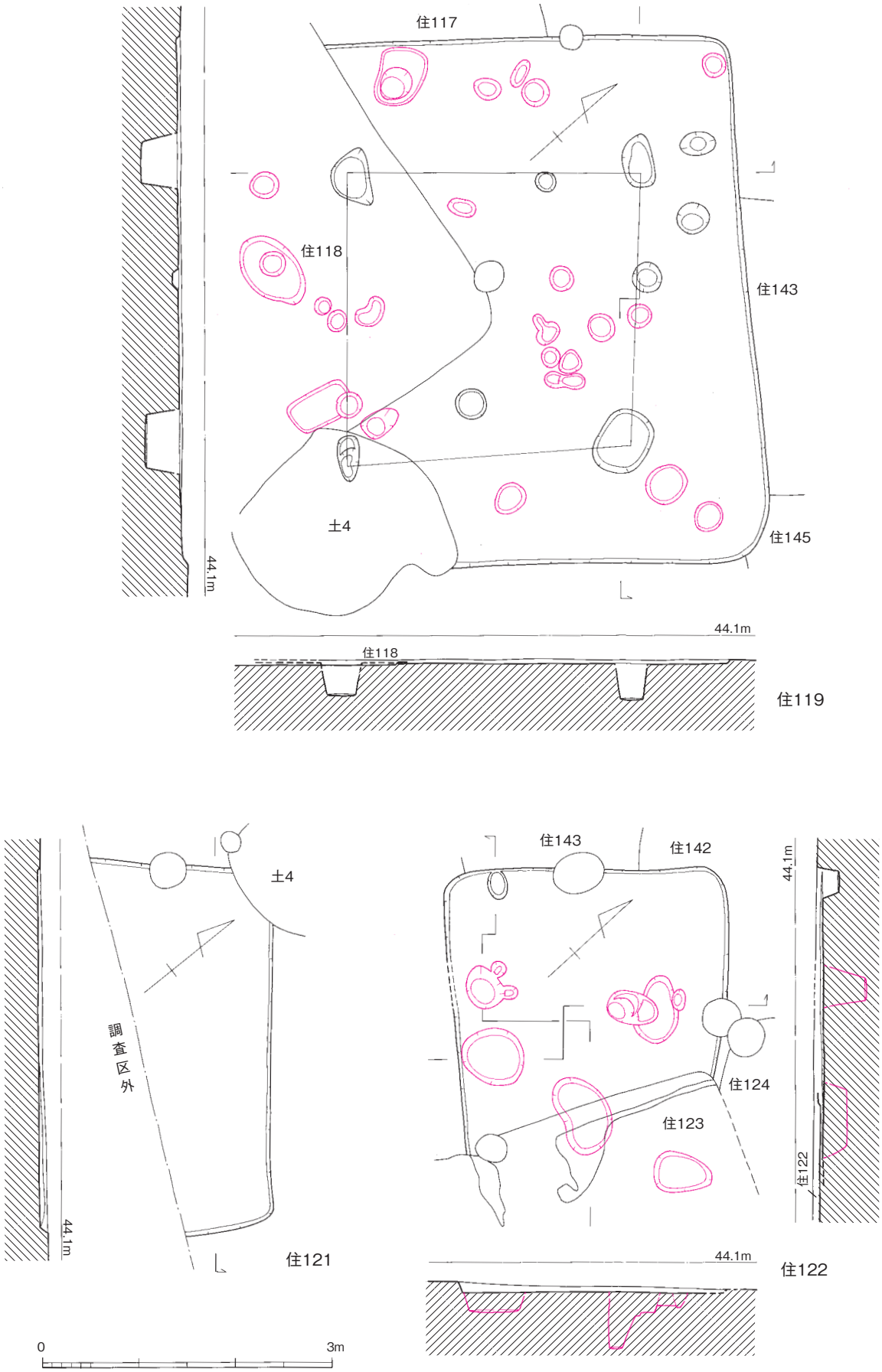
出土土器（第 142・143 図）

須恵器（18）　18 は長頸壷の胴部片か。肩部はややなだらかに下り胴部最大径外面に 2 条の沈線を刻む。沈線の間と上に短斜線文を連続させる文様帯を 2 条めぐらせる。

土師器（5～17）　5 は小型の壷。胴部は扁平で口縁部は短く開く。6･7 は甕。ともに頸部は強く締まる。6 は頸部内・外面に稜が形成され、口縁端部をわずかに上に湾曲させる布留式の甕で、混入か。7



第 144 図　117･118 号竪穴住居跡実測図（1/60）



第 145 図　119･121･122 号竪穴住居跡実測図（1/60）

は口縁部を肥厚させながら外湾させるもので6世紀代の資料か。8は長胴の壷の口縁部片か。頸部は強く締まり口縁部は開く。9は椀か。半球状の体部を持ち口縁部は短く外反させる。13～16は椀。13は底部から口縁部まで緩やかに湾曲する。14･15は口縁部をやや強く内湾させる。16は浅くやや尖底気味の資料。小形品。115は鉢か。丸底で口縁部がわずかに外反する。口縁部外面に二条の平行沈線を斜めに刻むが意図は不明。

なお、他に埋土中から第177図5の把手状土製品が出土している。

116号竪穴住居跡（第141図、図版69）

調査区の西隅に位置する。西壁は115号住居跡に切られ、北側は撹乱によって破壊される。主軸はほぼ南北にとり、南壁に床下27cmほど掘り込む壁際土坑をもつ。この土坑を南壁の中央と考えるなら、東西長3.32ｍほどの小型住居が復元できるが、土坑の南側が竪穴部外にやや張り出しており疑問も残る。壁の残存深さは5cmほどで、大きく削平されているとみられる。柱穴らしきピットは確認されなかった。埋土は単層である。出土土器から古墳時代前期に位置づけておく。

出土土器（第143図）

土師器（19～23）　19は小型甕の口縁部片か。小片で全形は不明。20･21は高坏の脚部。接地部付近の屈曲や強い湾曲はない。22は椀の口縁部片。口縁部付近でやや強く内湾する。23はタコツボ。

117号竪穴住居跡（第144図、図版69）

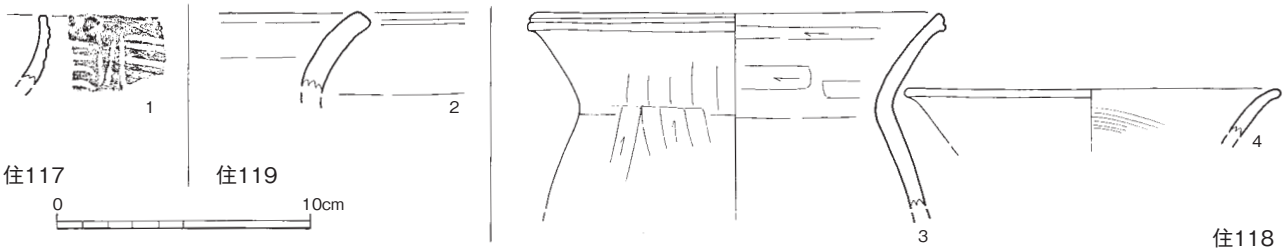
調査区の西部に位置する竪穴住居跡で、東側を118・119号住居跡によって切られている。主軸方位は北東－南西で、南北の長さは3.39ｍを測る。東西幅は検出規模で最大3.2mであるが本来の幅を推測する手がかりはない。残存する壁の深さは約5cmで残りが悪い。柱穴らしきピットは確認できなかった。埋土は単層である。出土土器から時期を決めることはできず、切り合い関係や住居構造などから古墳時代前期としておきたい。

出土土器（第146図）

縄文土器（1）　1は浅鉢の口縁部片か。口縁部は強く内湾しながら立ち上がる。器壁外面に沈線を縦横に配し文様とする。後期阿高式系の資料か。

118号竪穴住居跡（第144図、図版69）

調査区南西部に位置する竪穴住居跡で、北側で117・119号住居跡を切り、東壁の一部を4号土坑に切られている。主軸は東西にとるが､北に5度ほどふれている。長さは東西4.31ｍ､幅は南北3.90ｍを測る。残存する壁の深さは2cmにも満たず､西側は床も削平されていた。柱穴と考えられるピットが4箇所で検出されるも床面プランとずれがみられ、多分に不自然な感が拭えない。また東壁中



第146図　117～119号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

央から、貼床下で15㎝のピットが検出された。出入口に伴う壁際土坑の可能性もあるが規模も小さく違和感も残る。埋土は単層である。出土土器は土師器の小片ばかりで、時期を推測する資料には不足するが、一応古墳時代前期と考えておきたい。

出土土器（第146図）

土師器（3･4）　3は甕の口縁部片。頸部の締まりは緩く、胴部は長胴気味か。口縁部は斜めに開く。

119号竪穴住居跡（第145図、図版69）

調査区南西部に位置する。南側を118号住居跡・4号土坑に切られる。また西で117号住居跡、東隅で143号住居跡をそれぞれ切る。軸を南北にとると東に40度ほどふれる。竪穴部の規模は東西が5.36 m、南北は南壁が失われており判然としないが主柱穴の位置から復元すると約5.0 mを測り、正方形プランをなすものであろう。残存する壁の深さは2㎝ほどで、かろうじて床面が残存している程度である。柱穴と考えられるピットが4隅で確認され、4本主柱の住居であったことが窺える。埋土は単層である。出土土器は土師器の小片のみで時期比定には難があるが、住居構造や切り合い関係なども含めて総合的に判断し古墳時代前期の中に位置づけておきたい。

出土土器（第146図、図版69）

土師器（2）　2は甕の口縁部片である。緩やかに外湾しながら開く。小片で全形は不明。

121号竪穴住居跡（第145図）

調査区南部の端に位置する竪穴住居跡で、北隅を4号土坑に切られる。また南部の大半は調査区外へと伸びる。軸は南北にとると東に40度ほど振れる。東西長は3.74 m、南北幅は検出規模で1.9mを測り、残存する壁の深さは約5㎝ほどである。床面を精査するも柱穴らしきピットは確認できなかった。埋土は単層である。出土土器は土師器の小片のみで図示できるものはない。切り合い関係や住居構造から、古墳時代前期の中に位置づけておきたい。

122号竪穴住居跡（第145図、図版70）

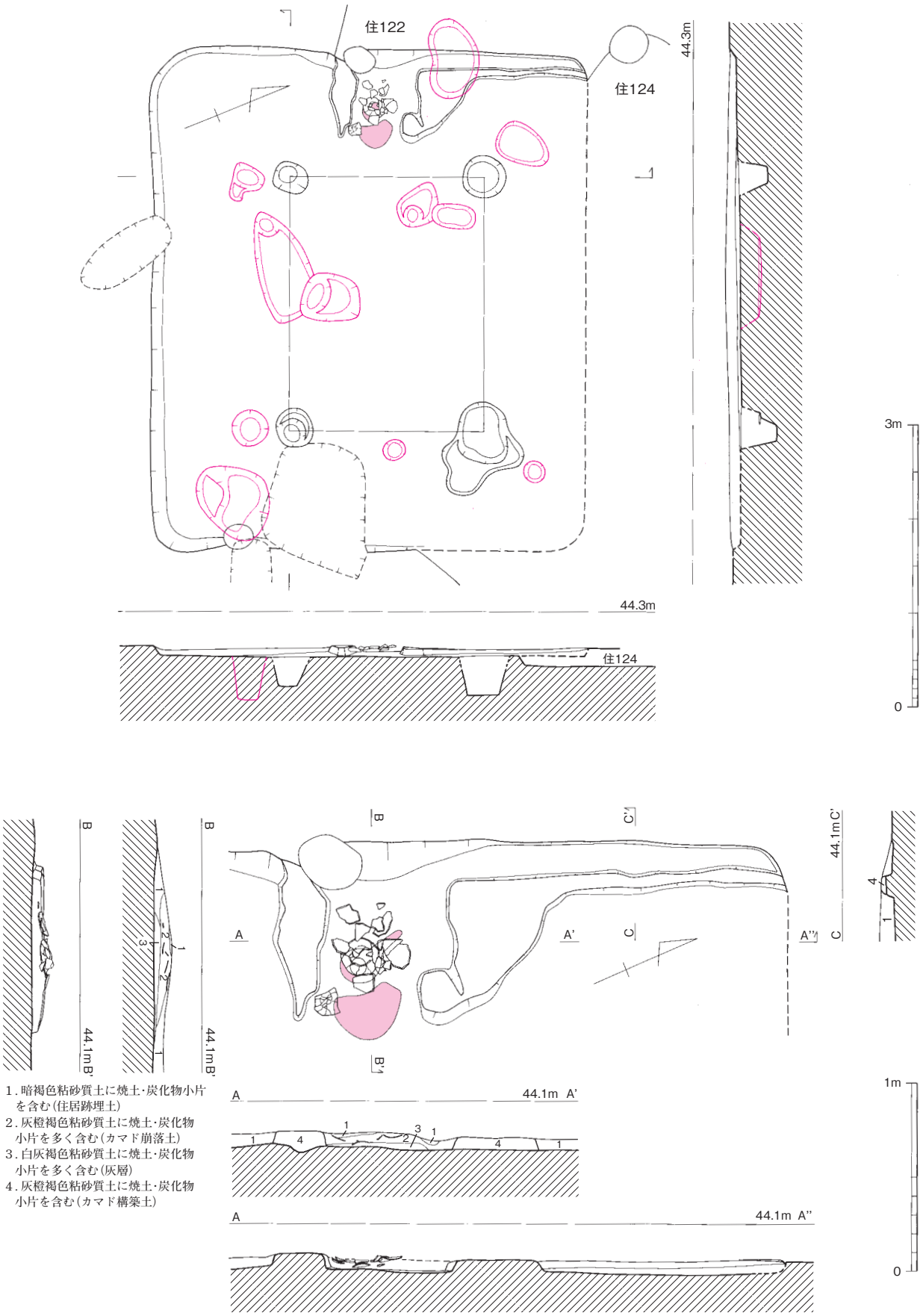
調査区の中央部からやや南の位置で検出された小型の竪穴住居跡である。北西側で142・143号住居跡を切り、南側は123号住居跡に切られている。軸はほぼ北西－南東にとり、南北2.84 m、東西は検出状態で最大2.9mをはかる。残存する壁の深さは約5㎝。主柱穴らしきピットは特定できなかった。埋土は単層である。出土土器から、古墳時代前期後半に位置づけておきたい。

出土土器（第148図）

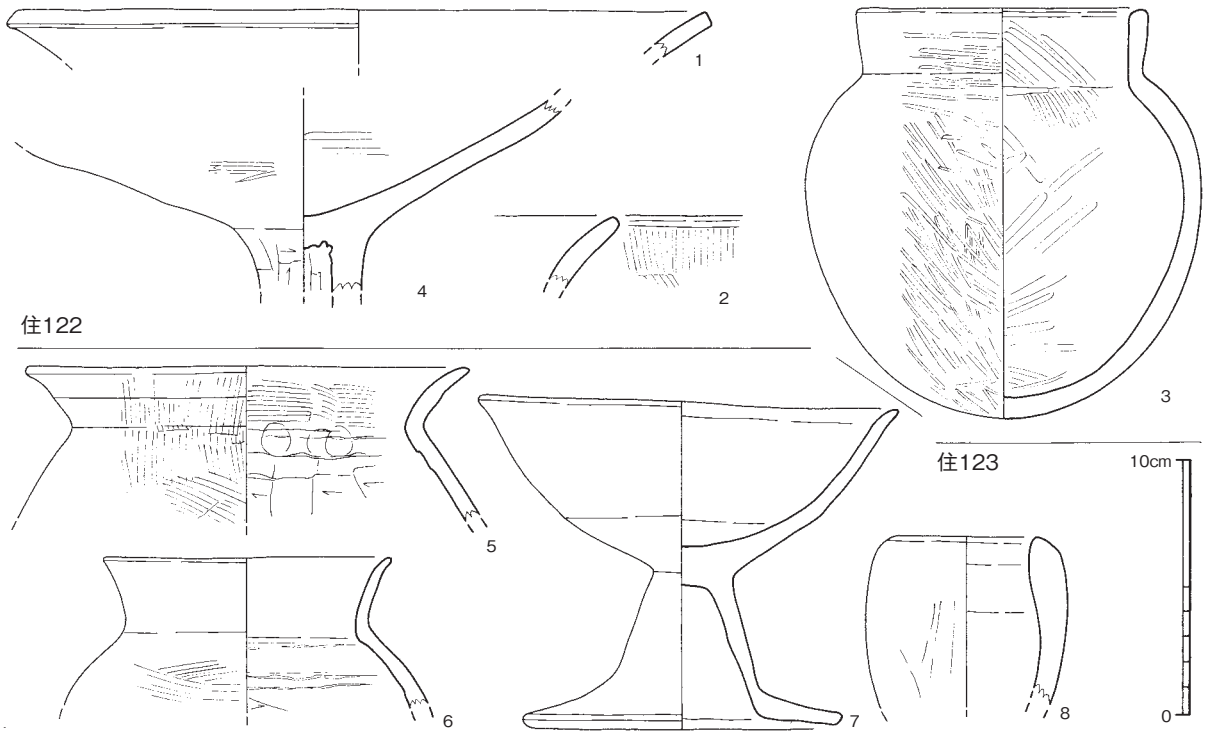
土師器（1～4）　1は甕の口縁部片。わずかに外湾しながら開く。2も甕の口縁部片か。やや立つ角度で開く。端部を丸く収める。3は短頸壷か。胴部は球胴で頸部はやや強く締まる。口縁部は直立気味に短く伸びる。器壁の内・外面を丁寧なヘラミガキで仕上げる。4は高坏の坏底部片。やや斜め方向に伸びる。

123号竪穴住居跡（第147図、図版70）

調査区の中央やや南寄りに位置する竪穴住居跡で、北部で122・124号住居跡を切る。124号住居跡とは埋土が酷似しており、境界が不明瞭であったため当初切り合いを逆に判断したが、後に



第 147 図　123 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）



第 148 図　122･123 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

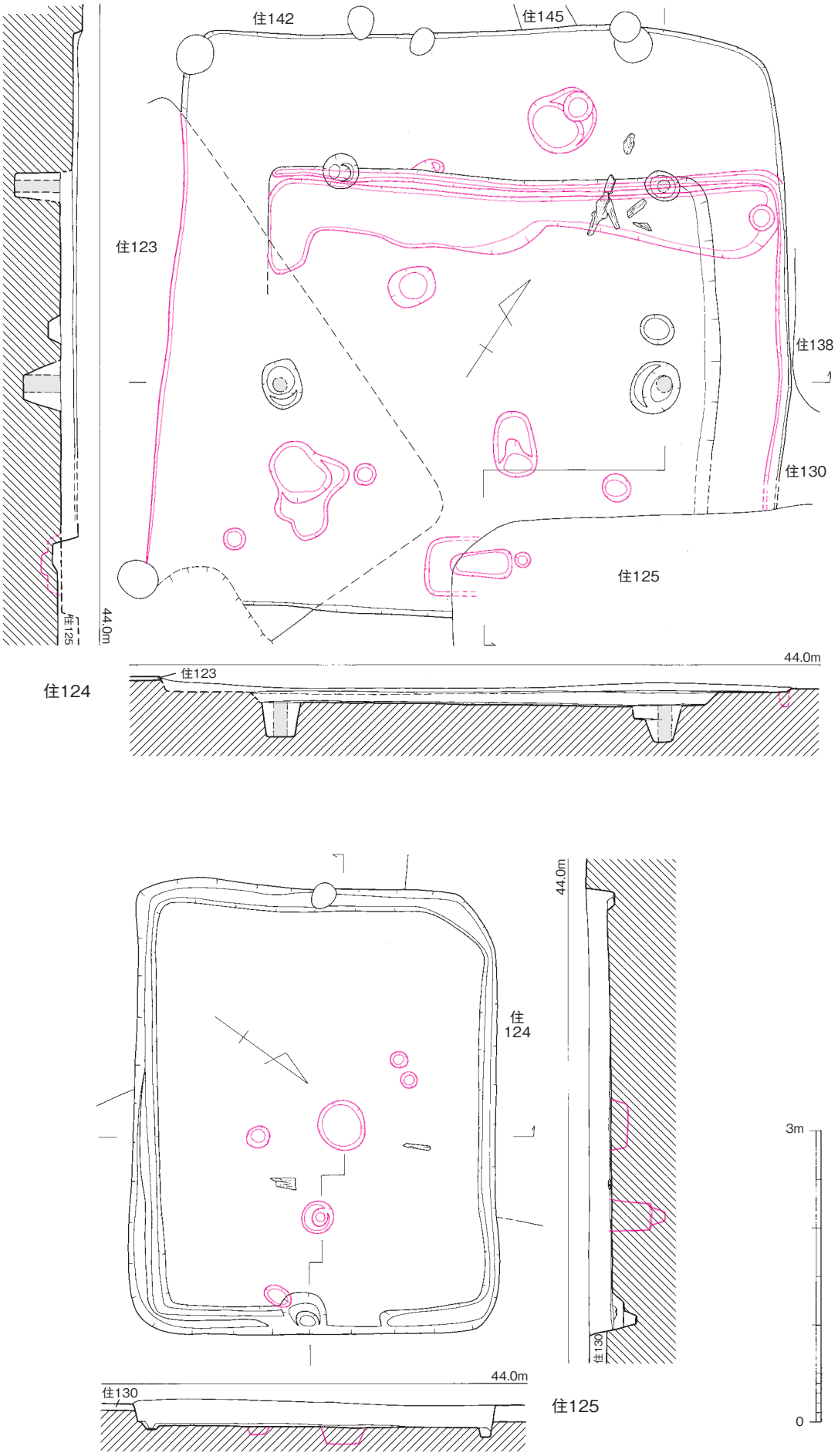
124 号住居跡からベッド状の遺構が確認されたため、124 号住居跡は古墳時代前期の遺構と考えられ、本遺構がカマドを伴い古墳時代中～後期の遺構であることから、当初想定していた切り合い関係が誤りであると判断した。以上のような調査経過をたどったため、北壁の大部分を誤って破壊してしまっている。西壁中央にＬ字状のカマドをもつ。西壁中央から北部隅にかけてはカマド・煙道を付設するためか床面が高く設定され、壁も緩やかに立ち上がるようで境界が明確でない。主軸は東西にとると北に 25 度ほどふれている。長さは東西 5.20 ｍで、幅は残された北西コーナー部より復元すると 4.48 ｍを測る主軸方向にやや長い長方形プランをなす。残存する壁の深さは 10 ～ 15 cmほどである。主柱穴と考えられるピットが 4 隅に確認された。埋土は単層で貼床をもち、直上に硬化面を形成する。出土土器から、5 世紀後葉に位置づけられる。

カマド（第 147 図、図版 70）

住居跡の西壁中央に付設されたＬ字状のカマドで、煙道は向かって右側、北方向へと伸びる。煙道部周辺の床面は北部隅に向かうに従ってやや高くなっていく。カマド内部の中心からは底から倒置された高坏（第 148 図－ 7）が若干浮いた状態で出土しており、これが支脚であった可能性が考えられる。高坏の前方には扇状に広がる被熱硬化面が確認できた。また高坏下においても径をほぼ同じくする環状の被熱硬化面が確認された。カマド内部の幅は 55 ～ 60cmほどで、残存する袖の長さは約 85cmである。カマド埋土は 3 層に分かれ、上から埋土、カマド崩落土、灰層である。灰はカマド内部の前側に薄く堆積しており上に崩落土、埋土が重なる。カマド外に崩落土は確認できないが形が不自然な右袖外側のコーナー部分は崩落土であった可能性もある。前述の堆積状況から考えると、住居廃絶時にカマド内の灰は清掃されていない。崩落土下に埋土が入り込んでいないことから、カマドは住居跡埋没時の流入土により一度に潰された可能性が高いと考えられる。

出土土器（第 148 図、図版 77）

土師器（5 ～ 8）　5 は甕の口縁部片。胴部は長胴気味か。頸部は明瞭に屈曲し内面に稜を形成する。



第 149 図　124･125 号竪穴住居跡実測図（1/60）

口縁部は外湾しながら開く。胴部内面に粘土帯接合痕跡をよく残す。6 は壷の口縁部片か。頸部は強く締まり屈曲する。口縁部は緩やかに外湾しながら上に伸びる。7 は高坏。カマド支脚に転用されたもの。坏部は深く、体部外面に段を形成する。口縁端部はわずかに外反する。脚は接地部で明瞭に屈曲して広がる。8 はタコツボ。手づくねの品。以上はおおよそ 5 世紀後葉代に比定できよう。

124 号竪穴住居跡（第 149 図、図版 70）

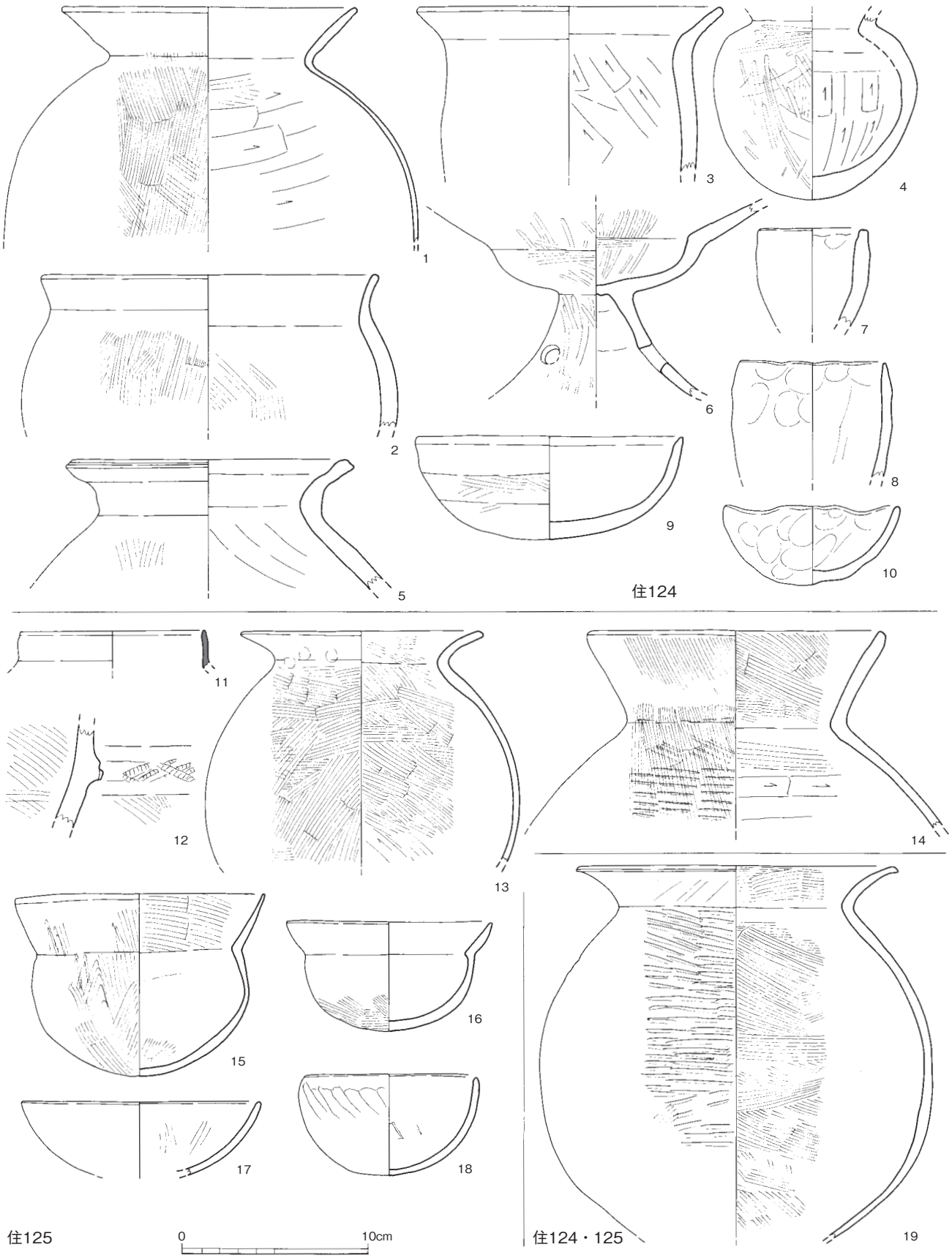
調査区の中央東寄りに位置する。西壁を 123 号住居跡に、南東隅を 125 号住居跡に切られる。また東隅で 130 号住居跡のベッドを、北西側の一辺で 142・145 号住居跡を切る。123 号住居跡とは埋土が酷似し境は不明瞭であったため切り合いは当初新古を逆に判断したが、前述の通り後に切り合い関係を訂正した。北壁側と東壁側にベッド状遺構が確認でき、誤って掘り抜いてしまったが西隅の観察から西壁側にも伸びていたものと推測される。南壁中央には深さ約 33㎝の壁際土坑らしき掘り込みが確認されたが、検出面が貼床下であること、壁からやや離れた位置にあることから疑問も残る。住居中央部には掘り込みの炉跡は確認されなかったが被熱硬化面を検出した。これが炉跡になるものか。主軸は南北にとるが、西に 30 度ほどふれている。長さは南北 5.88 m、幅は東西 6.38 m を測り、残存する壁の深さは約 20㎝である。ベッド状遺構の高さは床面から 12㎝ほどである。主柱穴は明確なものが住居跡東西に 2 箇所確認された。北側の隅にも 2 箇所ほど可能性のあるピットが確認されるが、やや小さい。ベッド状遺構は基本的に盛土で構築されているが北隅東側に明瞭な直線が確認でき、北隅部のみ削り出しによるものか地山面が露出していた。発掘時の判断ではコの字形のベッド状遺構をもつ 4 本主柱の正方形プラン竪穴住居跡として掘り進めた。しかし前述のベッド状遺構の境界の直下に同一方向の側溝が潜り込んでいたことや、北隅で地山が露出していること、柱穴の位置から考えて、2 本主柱で両側にベッド状遺構をもつ、長軸を東西方向に持つ竪穴住居跡があって、その上にさらに正方形の住居が重なっていた可能性も想定されよう。発掘時に判断できなかったことが遺憾である。埋土は単層。出土遺物から、古墳時代前期後半頃に比定できよう。

出土土器（第 150 図）

土師器（1 ～ 10）　1 ～ 5 は甕か。1 は球胴の上半部と強く締まる頸部、直線的に開く口縁部を持つ甕。体部外面を細かい目のハケ目、内面をケズリで調整する布留式系統の甕。2 は球胴で頸部の締まりが非常に緩い甕。口縁部は上方に開く。3 は体部がバケツ状になる甕。頸部は締まらない。口縁部は如意状に外反する。4 は小型の甕または壷の胴部。球胴丸底で頸部は強く締まる。5 は甕のような器形だが口縁部に小さな段があり、二重口縁壷が退化したものの可能性があろう。胴部内面を指ナデ調整で仕上げる。6 は高坏。体部下半は浅い半球状を呈し、中位で外に屈曲する。脚部は「八」の字状に開き、中位に 3 孔を穿つ。内・外面をヘラミガキで調整する精製品。7･8 はタコツボか。指頭圧痕を多く残しゆがみも大きい。9 は椀で、丸底で口縁部までゆるやかに湾曲する。10 は手づくねの小型椀。以上の資料は大半が古墳時代前期に属する。

125 号竪穴住居跡（第 149 図、図版 71）

調査区の東部に位置する竪穴住居跡で、北西側の一辺で 124 号住居跡を切り、北東部で 130 号住居跡を切っている。主軸は南西－北東にとり、長軸 4.43 m、短軸 3.60 m を測る長方形のプランである。当初は正方形の住居跡を想定したものの、掘り進み検出された全周する側溝などから再判断し、最



第 150 図　124･125 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

終的には西壁側がやや縮小して縦長の方形プランと判断した。側溝は壁際土坑と考えられるピットのある北壁中央部のみ途切れている。残存する住居跡の深さは約 22㎝。床面を精査するも柱穴らしきピットは確認できなかった。また住居跡東隅に長径 1 m、短径 70㎝ほどの楕円状の生粘土塊を確認した。内部及び直下から遺物は出土しなかった。床面より大分浮いた状態で検出されたことを考えると、住居廃絶後にまとめて捨てられたものであろうか。埋土は単層で、貼床をもつ。出土土器から、古墳時代前期に位置づけられる。

出土土器（第 150 図・図版 77）

須恵器（11） 11 はカエリを持つ坏身の口縁部片であろう。小片で全形は不明。

土師器（12 ～ 18） 12 は甕の胴部片。断面台形の突帯の上に×印を重複させながら連続させる刻み目を付す。13 は甕。胴部は球形で頸部は強く締まり屈曲する。口縁部は緩やかに外湾しながら強く開く。14 は直口壷として報告しておく。肩は張り頸部はしっかりと締まって屈曲する。口縁部は直線的に開く。15･16 は小型鉢。半球形の胴部と、やや締まり明瞭に屈曲する頸部、短く直線的に開く口縁部を持つ。17 は皿状の椀。18 は手づくね感のある小型椀である。以上の資料は古墳時代前期に属するものである。

124･125 号住居跡出土土器（第 150 図）

124･125 号住居跡の切り合い関係は遺構検出面では確定できず、数度にわたり検出面を下げることとなった。その際に出土した土器である。

土師器（19） 19 は甕。球胴で頸部はよく締まって明瞭に折れる。口縁部は緩やかに外湾しながら強く開く。体部外面にはよく平行タタキ痕跡を残し、内面はケズリの痕跡をハケ目調整でならす。

126 号竪穴住居跡（第 151 図、図版 71）

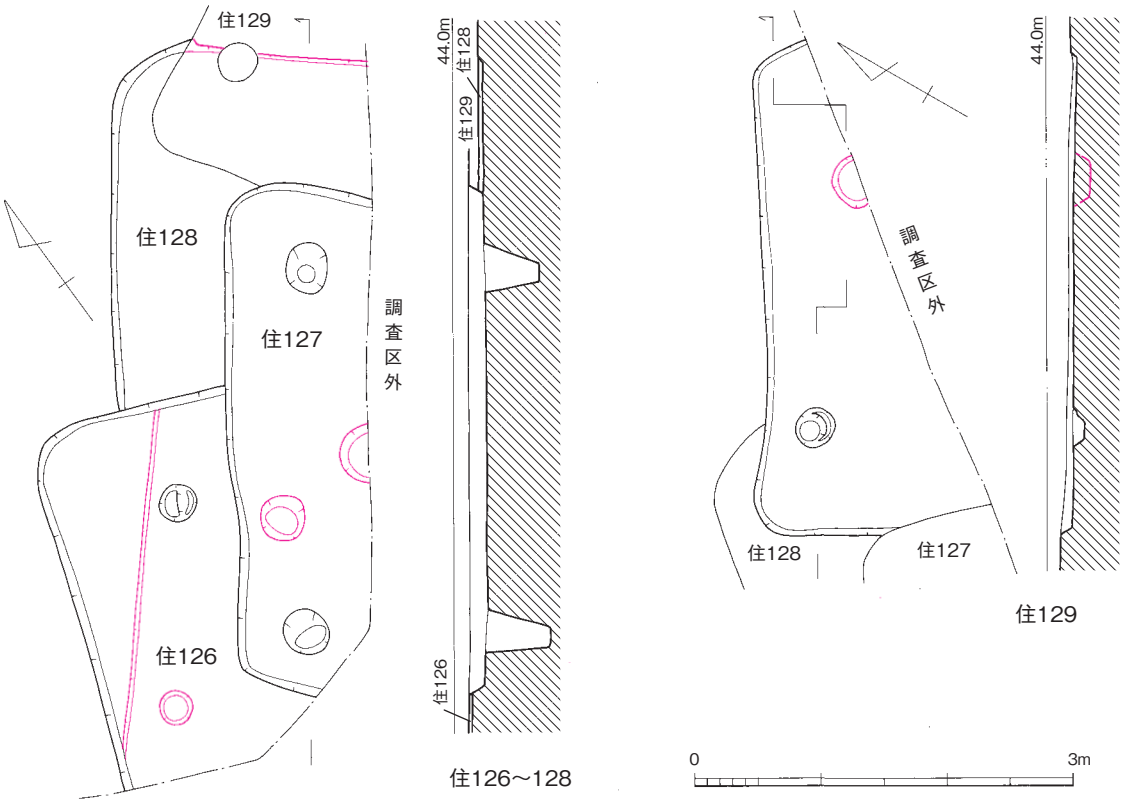
調査区南部隅に位置する竪穴住居跡で、東側を 127 号住居跡に切られる。また北壁で 128 号住居跡を切っている。南部の大部分は調査区外へと伸びているため規模は不明である。軸は南北にとると東へ 20 度ほどふれている。残存する壁の深さは 5㎝に満たない。柱穴は住居跡の全体が把握できないため特定できないが、4 本主柱の住居を想定した場合、柱穴の可能性のあるピットは北西隅で 1 基検出された。埋土は単層で、貼床をもつ。出土土器より古墳時代前期に位置づけられる。

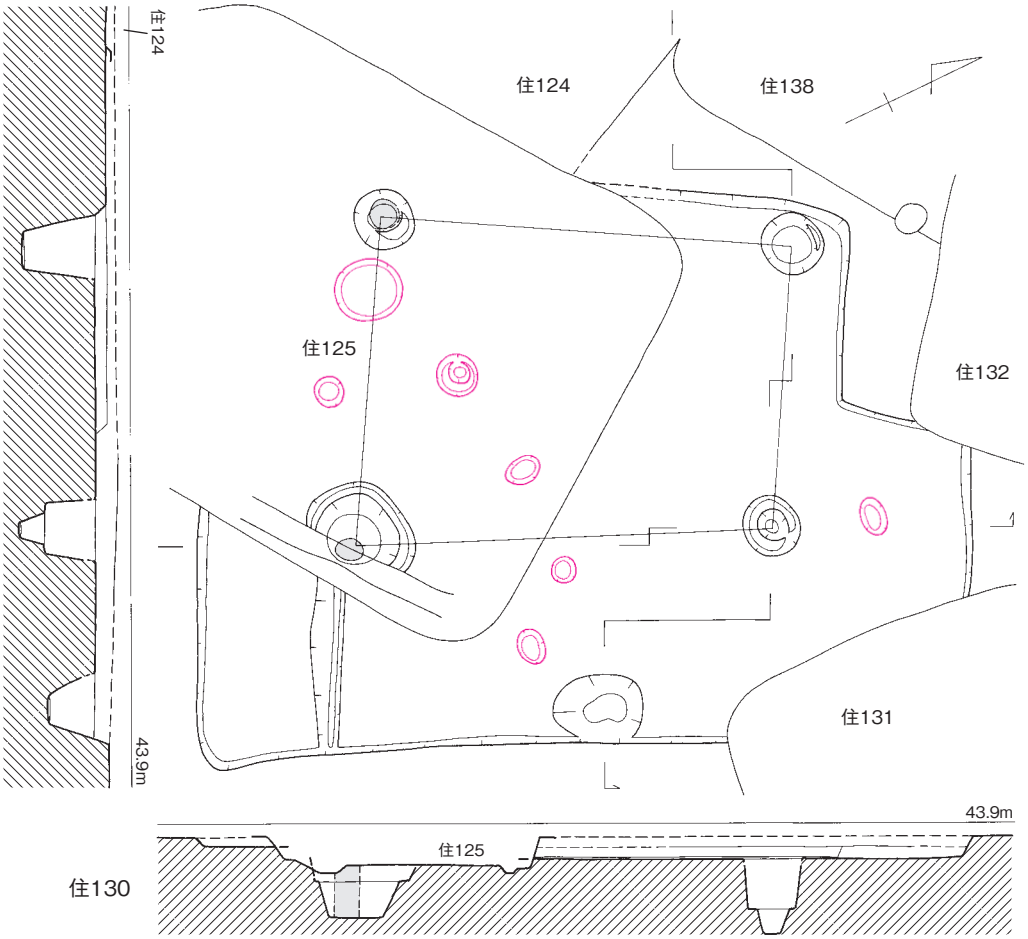
出土土器（第 152 図、図版 77）

土師器（10） 10 は小型の椀。体部は半球形で頸部はやや強く締まり屈曲する。口縁部はわずかに内湾しながら開く。

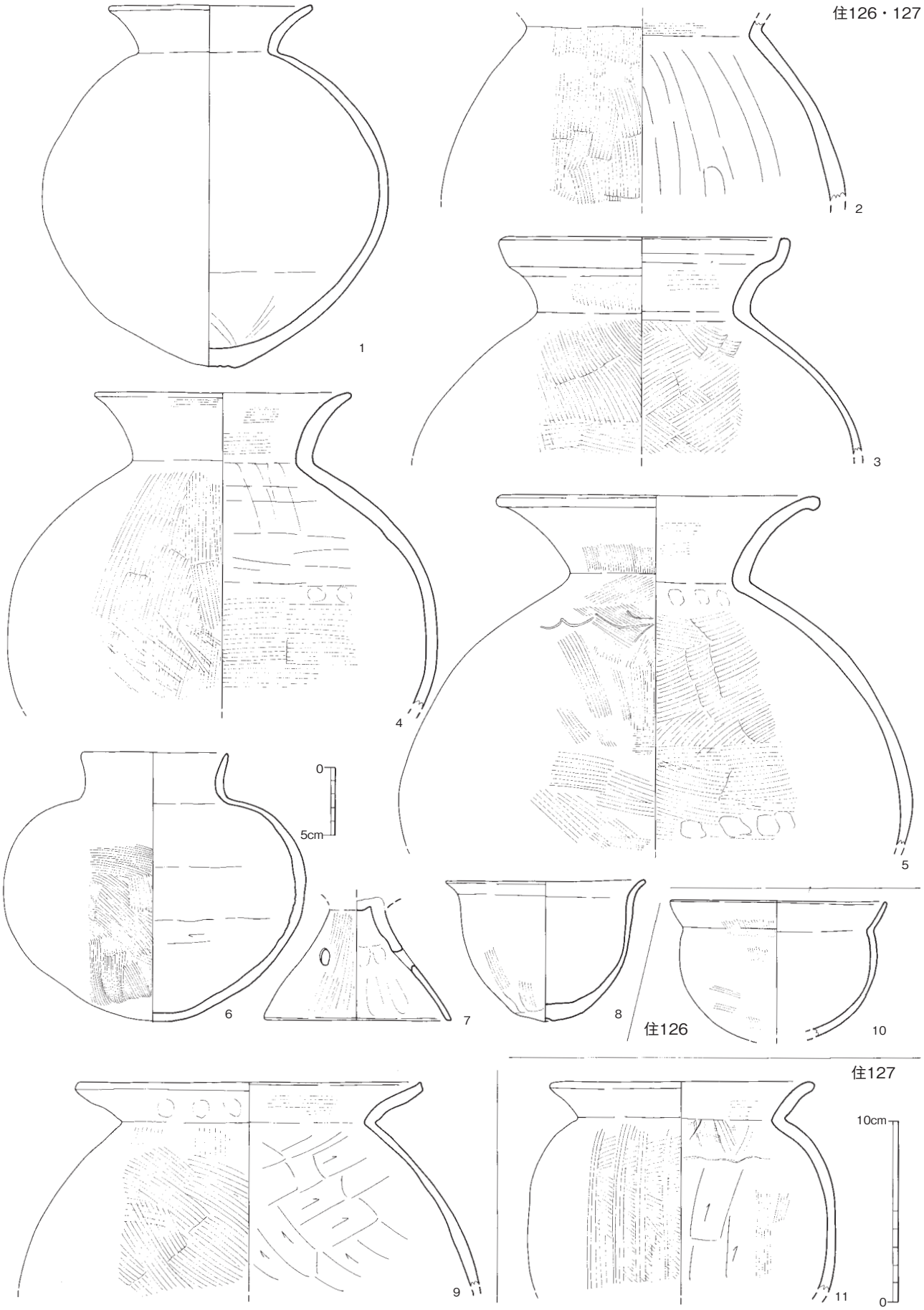
127 号竪穴住居跡（第 151 図、図版 71）

調査区の南部隅で検出された竪穴住居跡で、126 号竪穴住居跡の東部を切るほか、北側で 128・129 号住居跡を切っている。南東部の大部分は調査区の外に伸びている。軸はほぼ北東－南西にとり、北西辺の長さは 3.88 m で残存する壁の深さは約 15㎝。特定はできないが位置や深さなどから柱穴の可能性のあるピットが北隅・西隅に確認された。埋土は単層で、貼床をもつ。古墳時代前期の遺構である。





第 151 図　126 ～ 130 号竪穴住居跡実測図（1/60）



第 152 図　126･127 号竪穴住居跡出土土器実測図（6 は 1/4、他は 1/3）

出土土器（第 152 図、図版 77）

土師器（11）　11 は甕の胴上位～口縁部片。胴部は球形で頸部は強く締まり明瞭に折れる。口縁部は短く外湾する。

126･127 号住居跡出土土器（第 152 図、図版 77）

126･217 号住居跡は遺構検出面では切り合い関係が把握できず、検出面を数度にわたり下げて精査した結果切り合い関係を確定するに至った。その間に出土した土器を示す。

土師器(1～9)　9は甕である。球胴で頸部は非常に強く締まり口縁部は外湾しながら開く。2も甕か。頸部の締まりはやや弱いが明瞭に屈曲する。3 は二重口縁壷の胴上位～口縁部片。胴部は球胴で頸部はよく締まる。口縁部は弱く湾曲する。1･4･5 は直口壷。ともに胴部は球胴で頸部は強く締まり口縁部は外湾しながら開く。6 も直口壷か。体部はややつぶれた球胴で頸部は強く締まり口縁部は短く上に伸びる。7 は小型特殊器台の脚部か。「八」の字状に開き中位に 3 孔を穿つ。8 は小型の鉢。体部はやや深く口縁部は短く反転する。

128 号竪穴住居跡（第 151 図、図版 71）

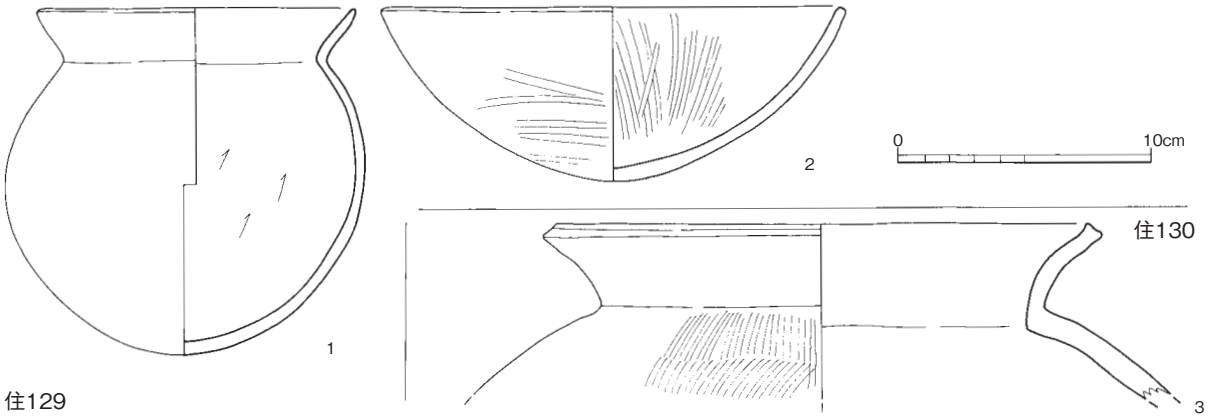
調査区の南部隅で検出された竪穴住居跡で、北部を 129 号住居跡に、中央から南部を 126・127 号住居跡に切られ、南側の大半は調査区外へ伸びているため、検出できたのは北西コーナー部付近のみで規模は不明である。軸はほぼ北東－南西にとり、残存する壁の深さは約 10㎝である。床面を精査するも柱穴らしきピットは確認できなかった。埋土は単層で、貼床をもつ。出土土器は土師器の小片のみで図示できるものはない。切り合い関係から､古墳時代前期後半以前の遺構であろう。

129 号竪穴住居跡（第 151 図）

調査区の南東部の端で検出された竪穴住居跡で、南西側で 128 号住居跡を切り、東側の大半は調査区外へ伸びている。軸は南北にとると西へ 30 度ほどふれ、北西側の一辺は 3.80 m を測る。残存する壁の深さは 5 ～ 10㎝である。床面を精査していくつかの浅いピットを検出したが柱穴は特定できなかった。埋土は単層で、貼床をもつ。出土土器より古墳時代前期後半の遺構である。

出土土器（第 153 図、図版 77）

土師器（1･2）　1 は甕で全形がわかる資料。球胴で頸部は締まり明瞭に屈曲する。口縁部はごくわずかに内湾しながら開く。2 は椀。体部は浅くわずかに尖底気味。



第 153 図　129･130 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

130 号竪穴住居跡（第 151 図）

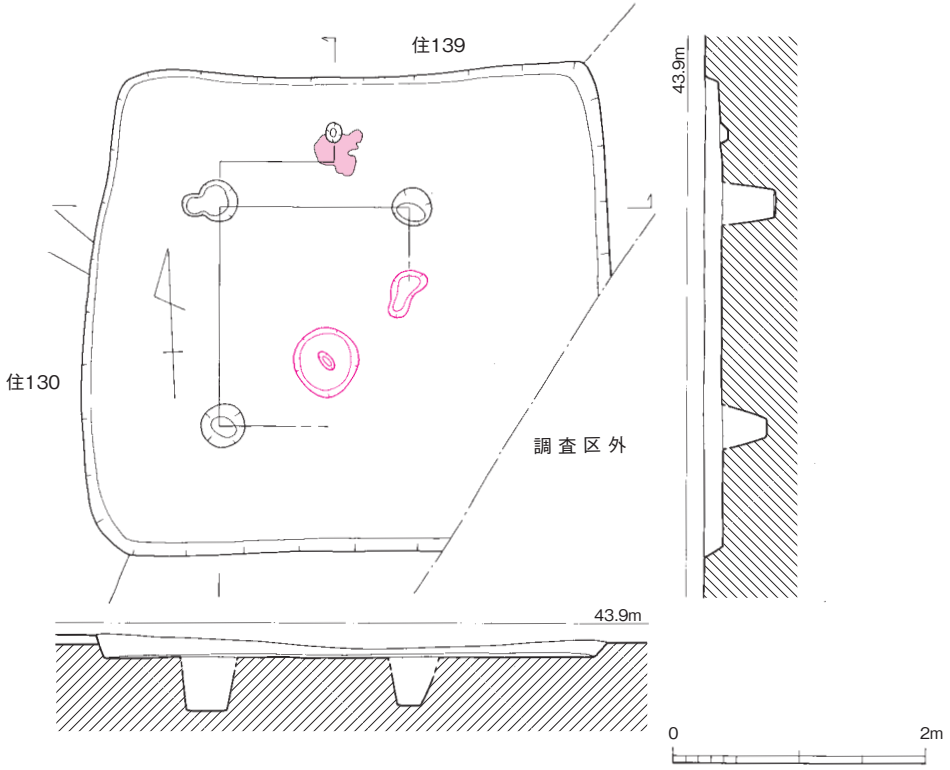
調査区の東部に位置する竪穴住居跡で、西壁は全て 124・138 号住居跡に切られている。また西側を 125 号住居跡、東隅を 131 号住居跡、北側を 132 号住居跡によって切られている。北壁西側から西壁・南壁に沿う「コ」の字形のベッド状遺構をもち、対面する東壁中央には深さ約 37cmの壁際土坑が確認された。出入口に伴うものと考えられる。主軸は東西にとり、北に 30 度ほど振れている。柱穴と壁との距離から復元して長さは東西 5.6 mほどと推定され、幅は南北 6.00 mを測るやや横長の方形プランをもつ。残存する壁の深さは約 18cmであり、ベッド状遺構の高さは床面から 10cmほどである。主柱穴は 4 箇所でそれぞれ確認され、4 本主柱であったことが分かる。埋土は単層で貼床をもち、直上に硬化面を形成する。出土土器より、古墳時代前期後半の遺構である。

出土土器（第 153 図）

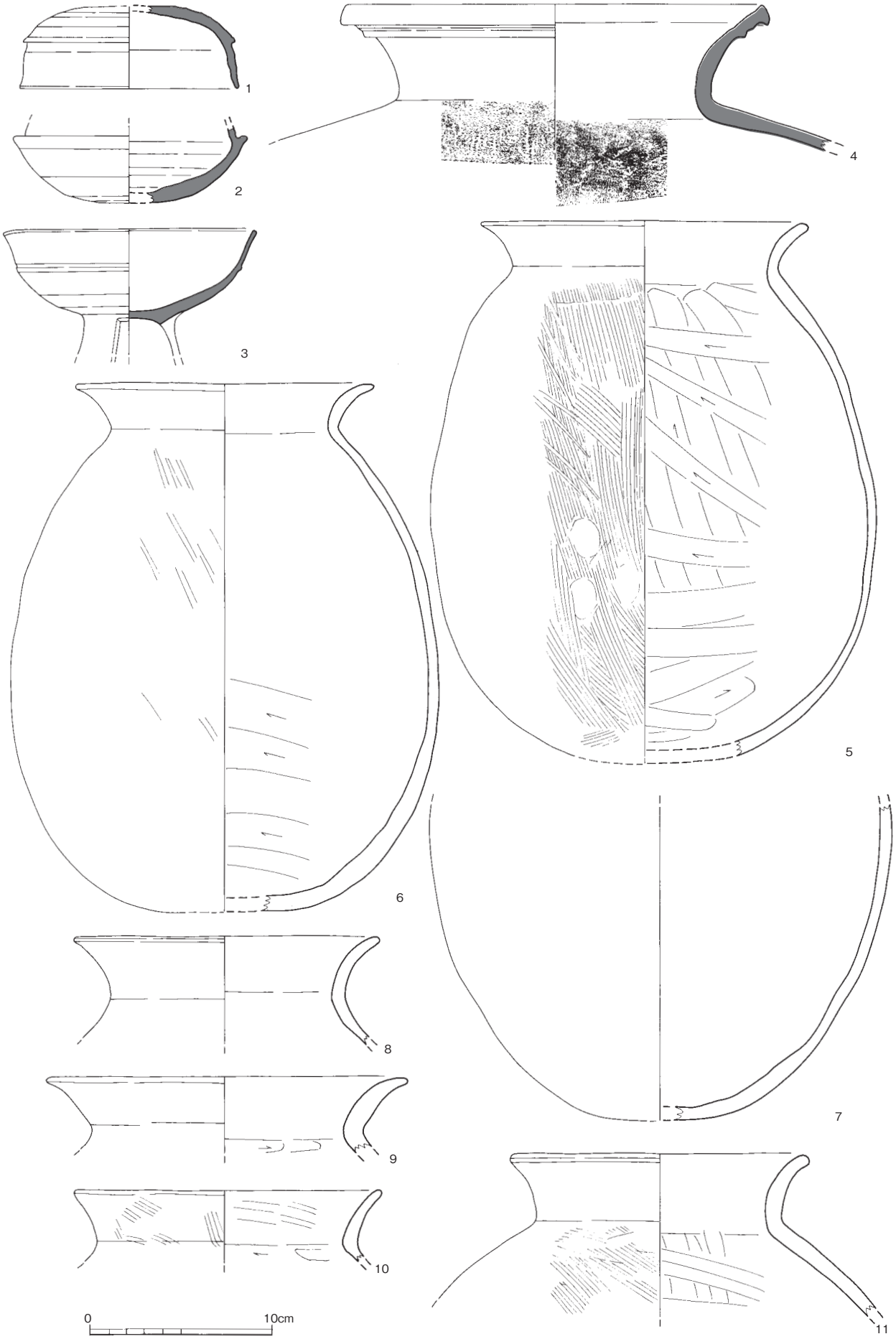
土師器（3）　3 は大型の甕の口縁部片。頸部は強く締まって明瞭に屈曲し、口縁部は外湾しながらやや斜め上方に立ち上がる。口縁端部をわずかに上に引き上げる。

131 号竪穴住居跡（第 154 図、図版 72）

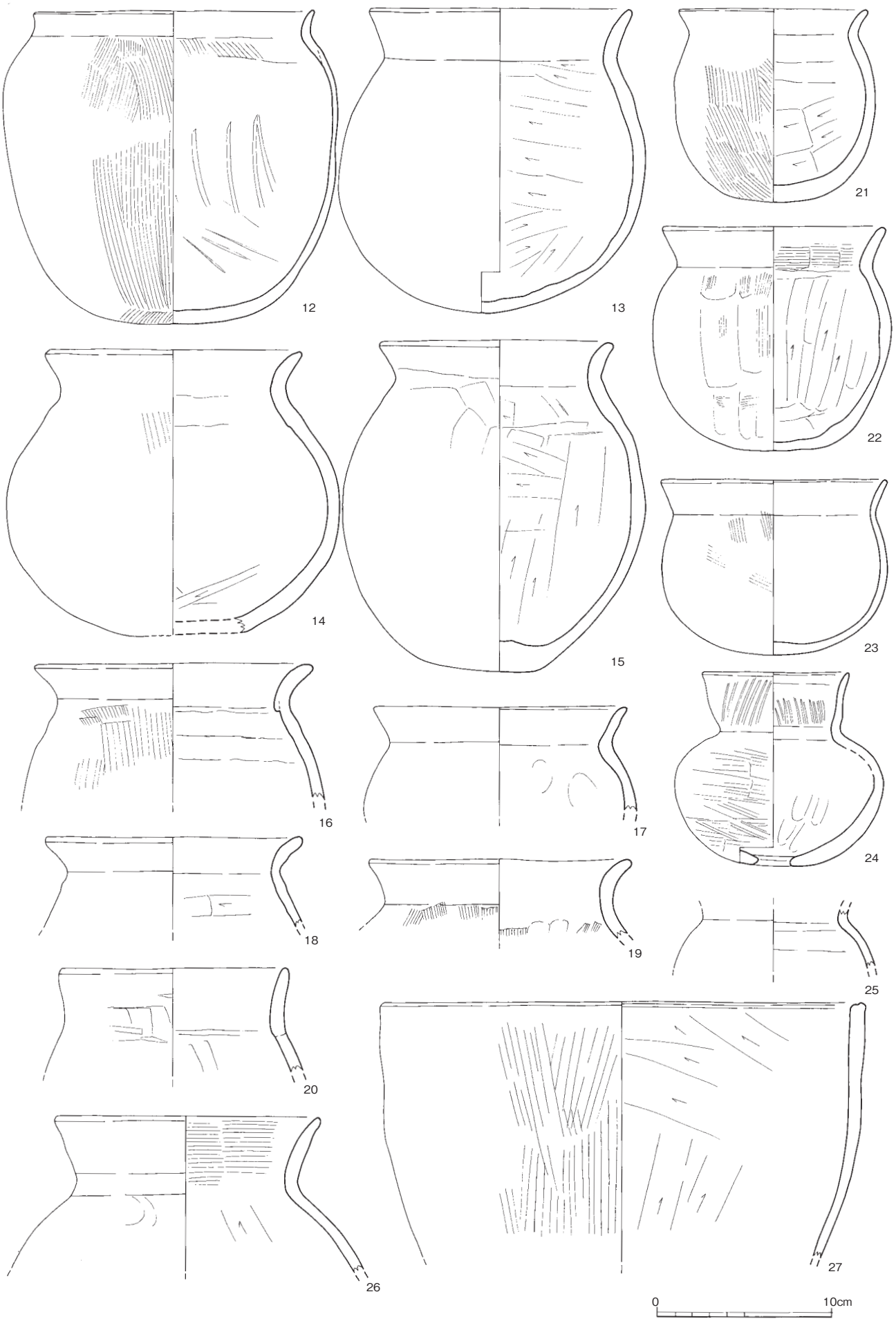
調査区の東部に位置する竪穴住居跡で、南西部・北西部でそれぞれ 130・139 号住居跡を切る。住居跡北東隅から東壁に沿って内部に石を含む粘土塊が一部確認された。当初は、東壁に L 字状カマドが付設されておりその煙道として判断するも、後にカマド本体が確認されなかったこと、及び粘土塊を断ち割り断面観察を行った結果からこれを棄却した。実際は北壁中央にカマドを付設していたようで、住居跡を掘り下げた後、支脚石、及びその前方に広がる被熱硬化面が確認された。主軸はほぼ南北方向にとり、長さは南北 3.63 m、幅は東西 3.99 mを測るおよそ正方形のプランで、残存する壁の深さは約 15cmである。柱穴は南東側を除いて 3 箇所に検出され、4 本主柱であったと



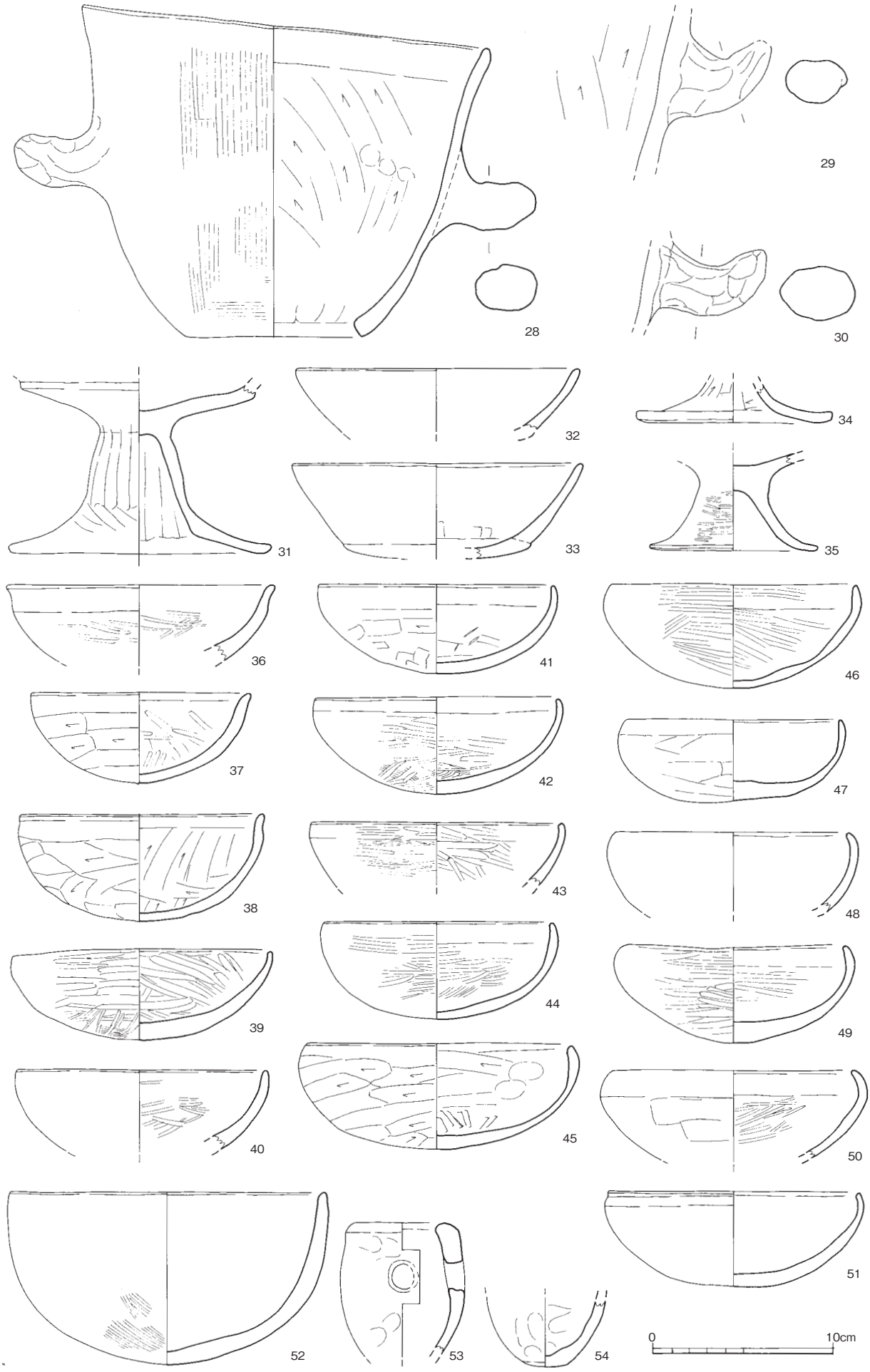
第 154 図　131 号竪穴住居跡実測図（1/60）



第 155 図　131 号竪穴住居跡出土土器実測図その①（1/3）



第 156 図　131 号竪穴住居跡出土土器実測図その②（1/3）



第 157 図　131 号竪穴住居跡出土土器実測図その③（1/3）

推定されるが、南東側の柱穴は見つけられなかった。埋土は単層で貼床をもつ。

カマドは、粘土が周囲に確認できず掘り飛ばす結果となってしまった。住居跡完掘直前に支脚石及び被熱硬化面を確認し、カマドの存在を認知した。支脚の位置から、内接型の可能性が高いと考えられる。住居跡の北東隅に数個の石とともにまとまって粘土塊が検出されたことから、住居廃絶時に意図的にカマドを破壊し北東隅へ片付けた可能性が考えられる。支脚石は、埋土中に混入した石と誤認して掘り下げ時に除去してしまったものの、元来は原位置を保って残っていた。被熱硬化面の範囲から復元して、カマド内部は最低 40cm、袖の長さは最低 75cmほどあったものと考えられる。出土土器から、6 世紀初頭に位置づけられる。

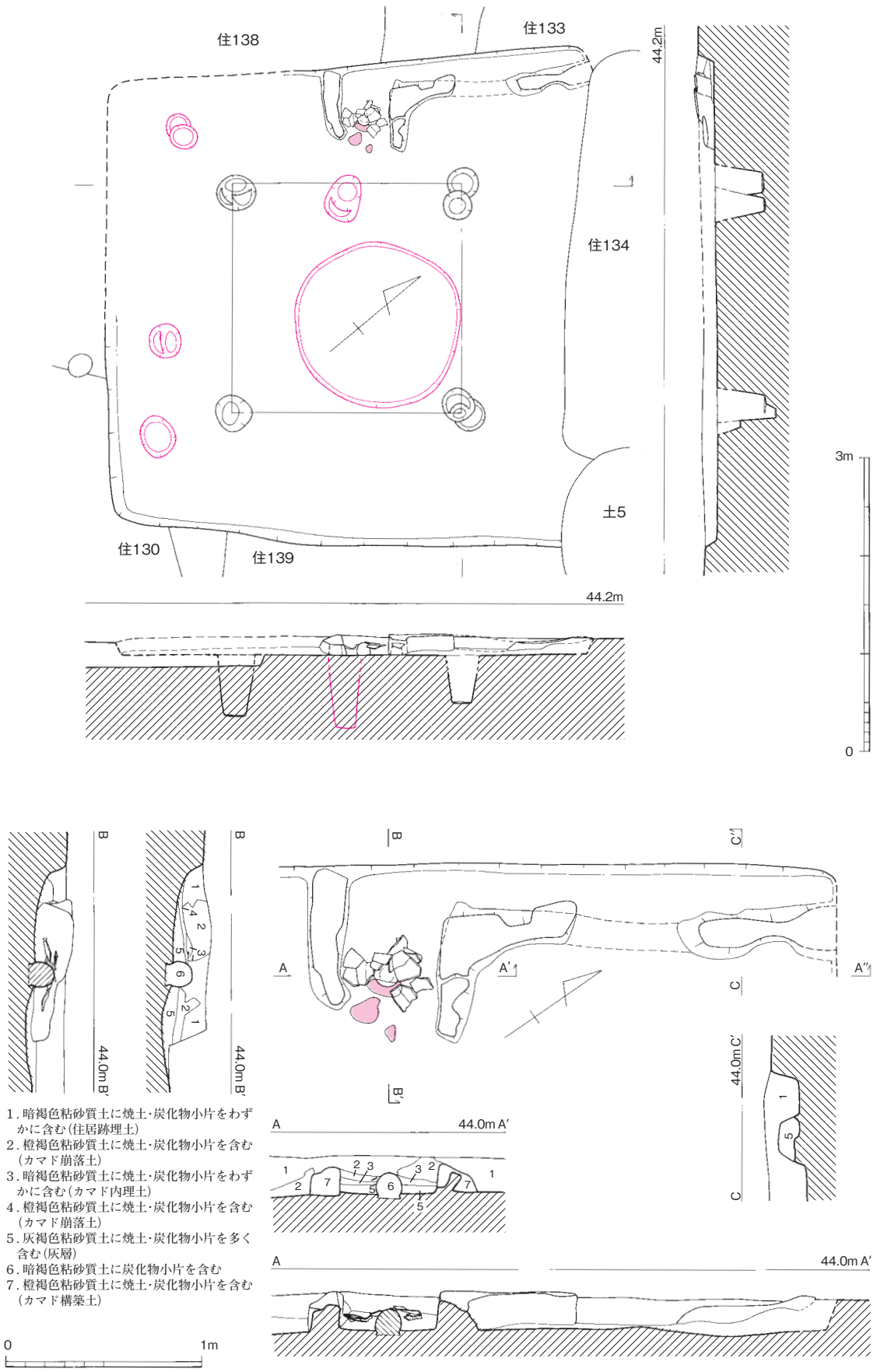
出土土器（第 155 ～ 157 図、図版 78）

須恵器（1 ～ 4） 1 は肩部外面に段を持つ坏蓋。天井部は平坦で、肩部は緩やかに湾曲し、口縁部はわずかに外反する。2 はカエリを持つ坏身。底部は丸く、カエリ部は外に強く突出する。口縁部は斜めに伸びるが上を欠損する。3 は高坏。坏部はやや浅めで口縁部は緩やかに外湾する。脚部は台形の透かし穴を開ける。4 は大甕の肩～口縁部片。肩は強く張り頸部は強く締まる。口縁部はやや短く、緩やかに外湾しながら開く。

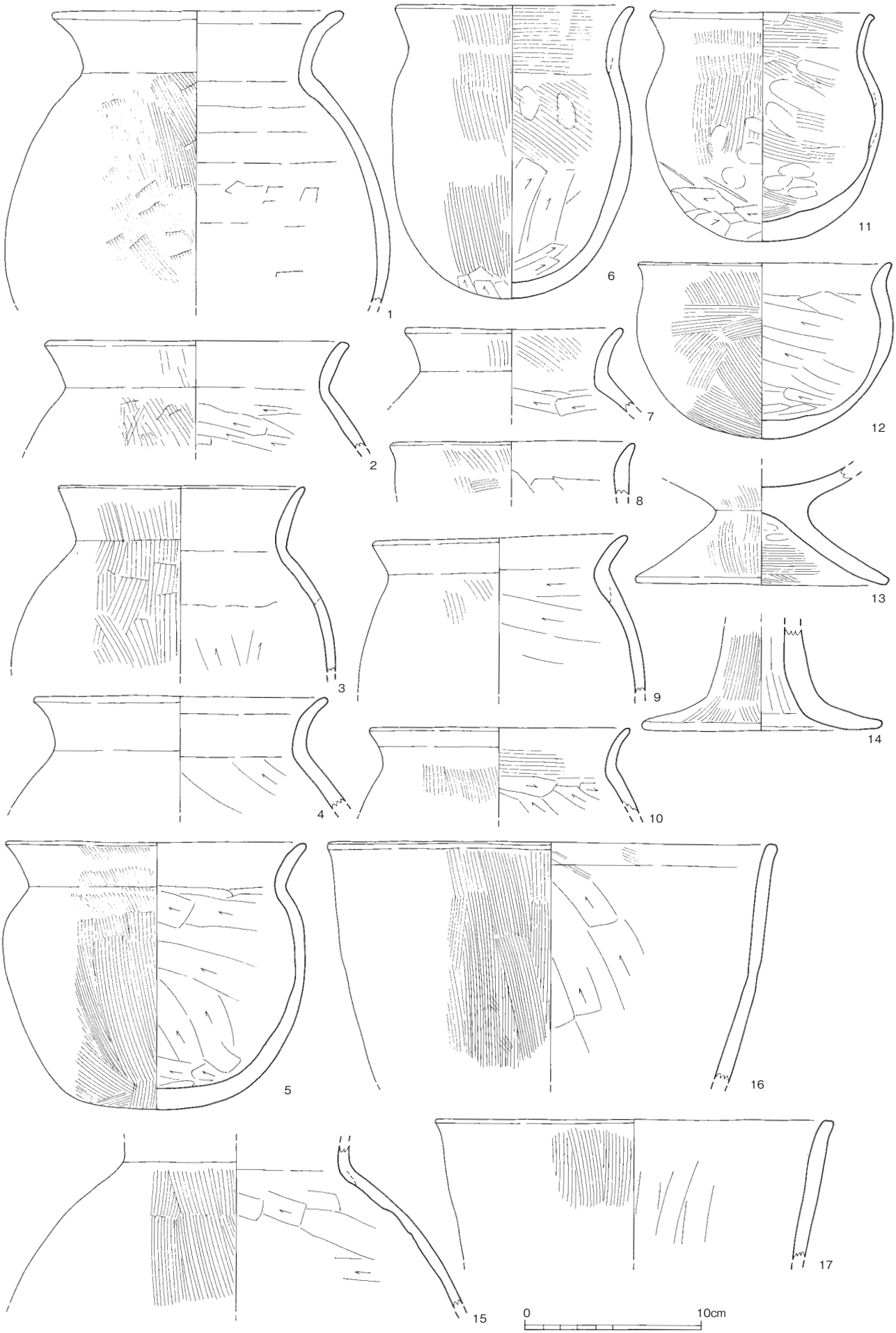
土師器（5 ～ 54） 5･6 は長胴の甕で全形がわかる資料。胴部はやや下ぶくれで肩が張らない。頸部は強く締まり口縁部は如意状に外反する。7 は同じ形状の甕の底～胴部片。8 ～ 11 は甕の口縁部片。頸部はやや締まり口縁部は如意状に外反する。一部肥厚させる資料も含まれる。12 ～ 20 は中型の甕。胴部は球胴あるいはややつぶれた扁平な形状。頸部の締まりは緩く、口縁部は若干肥厚させながら如意状に外反する。21 ～ 23 は小型の甕。中型の甕と同じ形状を持つ。23 は器壁が薄く器高が低い。鉢を志向するか。24 は小型丸底壷で直口壷。底部は焼成前に 1 孔を穿つ。25 は壷の肩部片か。26 はやや大型の直口壷の口縁部片とした。甕でもいいかもしれない。27 は甑。口縁部は直立気味に立ち上がる。28 は甑で全形がわかるもの。底部は大きな 1 孔。胴部は緩やかに膨らみ中位に把手を 1 対つける。口縁部はわずかに外湾しながら広がる。29･30 は甑の把手片。いずれも断面はややつぶれる。31 ～ 34 は高坏。31 は坏底部～脚部片。体部は屈曲部までが残る。脚部は接地部付近で屈曲して外に強く広がる。32･33 は坏部片。屈曲部の体部外面に段を形成する。34 は脚下位のみが残る資料。強く外に湾曲しつつ広がる。35 は脚付椀の脚部片。「八」の字状に強く広がり器高が低い。36 ～ 51 は椀。口縁部がわずかに外湾する 26 ～ 28、やや強く内湾する 41 ～ 47、強く内湾する 48 ～ 51 などのバリエーションがみられる。多くは器壁内・外面をヘラミガキで仕上げ、底部外面は板ナデで仕上げることが多い。52 はやや大型の椀か。半球状の器形を持つ。53･54 はタコツボ。体部中位に 1 孔を穿つ。手づくねで指頭圧痕をよく残す。

132 号竪穴住居跡（第 158 図、図版 72）

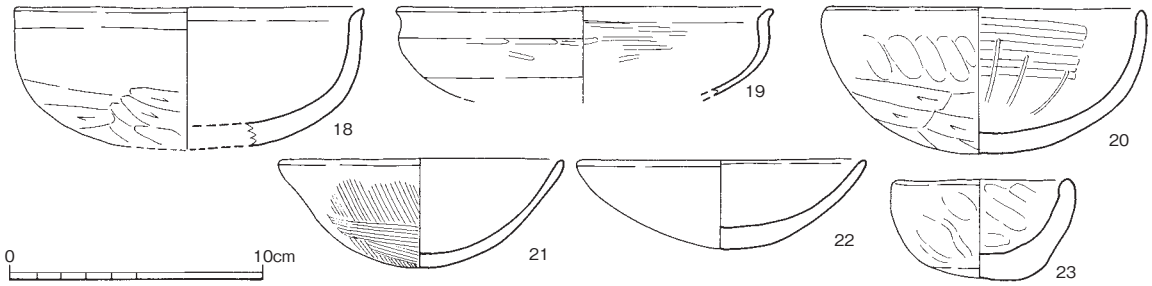
調査区の北東部で検出された竪穴住居跡で、北東側の壁を 134 号住居跡・5 号土坑に切られる。また南側で 130・138・139 号住居跡を切り、北側で 133 号住居跡を切っている。本住居跡を含め周辺の竪穴住居跡群の埋土は非常に似通っていたため、切り合いを間違い西隅を掘り飛ばしてしまった。北西側の辺の中央に L 字状のカマドをもつ。主軸は東西にとるが、北に 40 度ほどふれる。長さは東西 4.78 m、幅は南北 4.80 m で略正方形のプランとなる。残存する壁の深さは 15 ～ 20cmである。4 本主柱の住居跡で、柱穴と考えられるピットが 4 箇所で検出された。西隅の柱穴は 138 号住居跡



第 158 図　132 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）



第 159 図　132 号竪穴住居跡出土土器実測図その①（1/3）



第 160 図　132 号竪穴住居跡出土土器実測図その②（1/3）

の柱穴と重なっているものとして理解している。また、貼床を掘り下げる段階において、床面よりおよそ 5cm下で住居跡中央に土坑が検出された。縁取りのように環状に粘土が散在していたため確認できた。約 5cmと非常に浅く、埋土が住居の埋土や貼床と同質の土であったため、本来は住居を切る土坑であった可能性もある。埋土は単層で貼床をもつ。出土土器から、6 世紀前葉に位置付けられ、切り合い関係上も矛盾はない。

カマド（第 158 図、図版 72）

住居跡の西壁中央に付設されたＬ字状のカマドで、煙道は一部壊れているが、向かって右側、北の方角へと伸びる。煙道部周辺は住居隅に行くに従って、住居跡全体に比して床面を高くしていく。これは煙道を自然な形で住居外へと伸ばすためのものと考えられる。カマド内部の中心には小型の甕を倒置しており、これが支脚であろう。口縁部は一部が床面に埋没していたが、埋めるための掘り込み等は検出できなかった。甕の内部には埋土と同質の土が充填されており、縦半分は被熱硬化面と同じ橙色へと変色していた。おそらくカマドの焚き口側で熱を受けたためであろう。支脚前方には部分的に被熱硬化面が確認される。カマド内部の幅は約 45cmである。残存する右袖及び被熱硬化面の範囲を踏まえると、左袖は前側が壊れており、本来は最低 85cmほどあったと考えられる。カマドの埋土は 4 層に分かれ、埋土、カマド崩落土、カマド内埋土、灰層である。灰層の存在から、住居跡廃絶時にカマド内の清掃は行われていない。またカマド中央に壁体崩落土が認められないのは掛け口であった部分がそのまま真下に崩れ落ちたためであると考えられる。灰層上には比較的薄く壁体崩落土及び埋土と同質の土が堆積している。その上にさらに壁体崩落土、埋土の順で堆積する。このことからカマドの崩落は少なくとも 2 段階あったことが窺える。住居廃絶後しばらく放置している間にカマド後部の内側が多少崩れ、また焚き口・掛け口などから土が流入する。その後住居跡が埋没する際に土圧でカマド全体が崩れたものと考えたい。カマド前方部は構造的に最も弱いため、放置段階で崩落した可能性も高い。

出土土器（第 159･160 図、図版 80）

土師器（1 ～ 23）　1 ～ 11 は甕。1 ～ 4 はやや大型の資料。1 はわずかに長胴気味の球胴で、頸部は強く締まり内面に稜を作る。口縁部は緩やかに外湾しながらやや長く開く。3･4 もこれに近い器形の甕であろう。2 は口縁部がやや短く外反するもの。5 は器高が低くややつぶれた形状の甕。頸部の締まりは緩く口縁部は緩やかに外湾する。6 ～ 19 はやや長胴の甕で中～小型品。6･8 は頸部の締まりが非常に弱い。口縁部は緩やかに外湾する。7･9･10 は頸部がやや締まる。口縁部は如意状に外反する。11 は小型の甕。器形は 5 によく類似する。12 は鉢か。球胴で頸部はやや締まり口縁部はごく短く外湾する。13･14 は高坏か。ともに脚部で全形は不明。15 は壷型土器の肩部片であろう。球胴か。頸部は強く締まり内面に稜を形成する。16 は甑。口縁部近くまでわずかに内湾しながら

直線的に開き、口縁部はごくわずかに外反させる。17 も同様の器形の甑か。18 ～ 23 は椀。18･19 は口縁部をごく短く外反させるもの。20 は半球形の器形を持つ。21･22 は体部が直線的に開き尖底気味の器形。23 は手づくねの小椀である。

なお、他に埋土中から第 179 図 1 の不明鉄器が出土している。

133 号竪穴住居跡（第 161 図）

調査区の北東部で検出された竪穴住居跡である。132･134 号住居跡に切られ、147 号住居跡を破壊する。また 135 号住居跡とも 134 号住居跡を介して重複関係にあり、本住居跡が古い。主軸方位は 134 号住居跡と重複し北東－南西方向にとる。北側は調査区外に広がっており、東側は破壊されているため規模は不明。残存する壁の高さは 15㎝ほどである。134 号住居跡の床面下層から検出した 3 基のピットのうち最も東側の 1 基が、本住居跡に伴う柱穴の可能性があろう。出土土器と切り合い関係から古墳時代前期後半に位置づけたい。

出土土器（第 162 図）

土師器（1） 1 は二重口縁壷の口縁部片。屈曲部より上が残る。上方に直線的に伸びる。

134 号竪穴住居跡（第 161 図、図版 73）

調査区の北東部で検出された竪穴住居跡である。北西部は調査区外に伸び、135 号住居跡に切られる。南隅を 5 号土坑に切られる。一方で、南壁で 132・139 号住居跡を切る。主軸はおよそ北東－南西にとり、南西辺の長さは 4.04 m で、検出した南北幅は最大 2.9m ほどである。残存する壁の深さは約 20㎝。柱穴の可能性のあるピットは、貼床下層から検出した 3 基のうち南隅の 1 箇所を指摘できるが、住居跡の半分以上が調査区外に広がっているため、詳細は分からない。埋土は単層である。出土土器からは古墳時代前期後半に位置づけられ、切り合い関係上も矛盾はない。

出土土器（第 162 図）

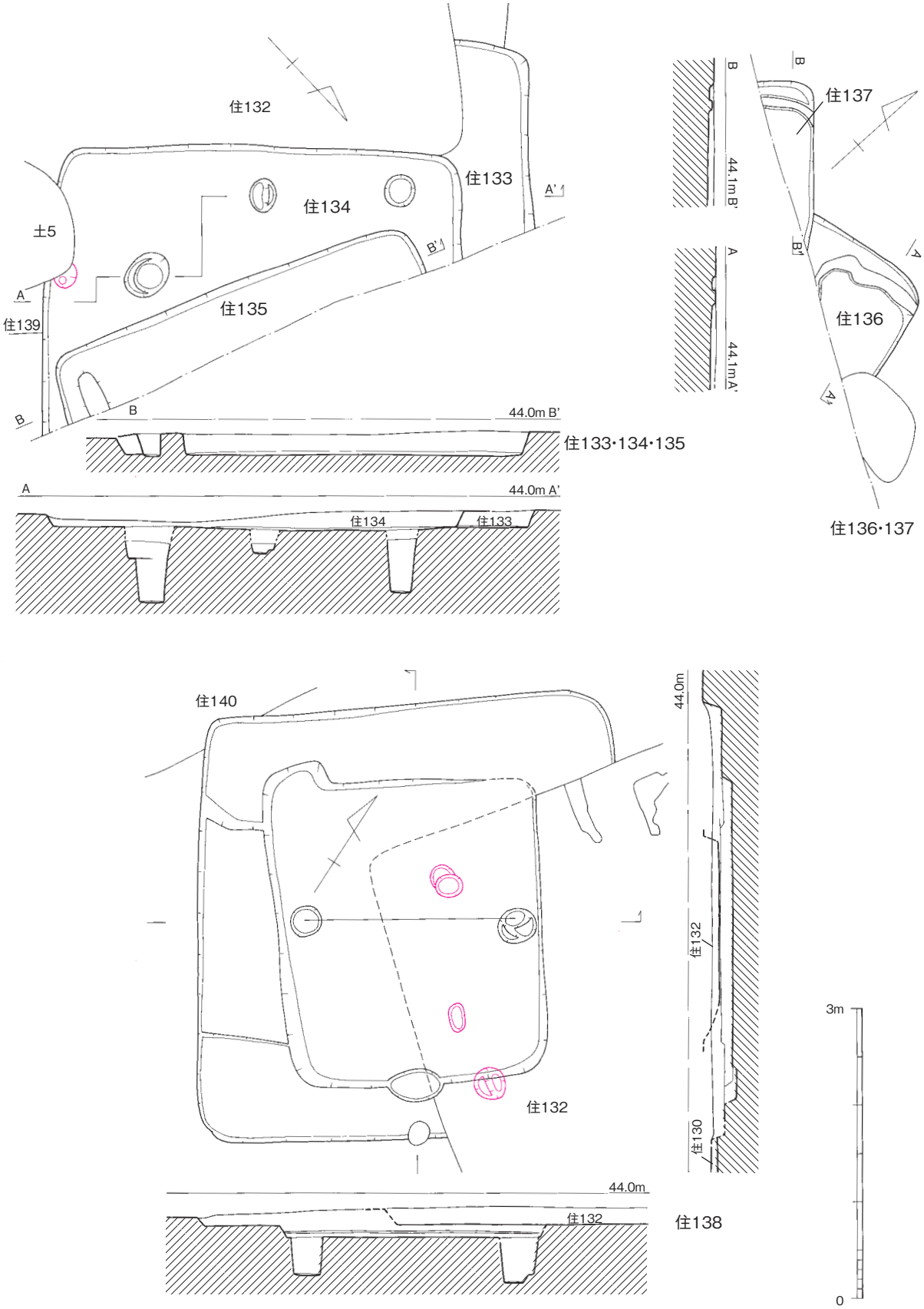
土師器（2 ～ 6） 2 は甕の口縁部片か。わずかに外湾しながら強く開く。3 ～ 5 も甕の口縁部片。頸部は強く締まり口縁部は緩やかに外湾しながら開く。5 は端部をわずかに上方につまむ。6 は手づくねの椀の底部片か。

135 号竪穴住居跡（第 161 図、図版 73）

調査区の北東部で検出された。埋土は隣接する 134 号住居跡と酷似しており境界は不明瞭であったが、東側にわずかに伸びる粘土塊を L 字状カマドの煙道端部と判断し 1 つの住居跡として認定した。ただしそうすると珍しい東壁付設のカマドとなるため少々疑問が残るところではある。調査区内に南壁が確認されるが大半は北側の調査区外にあり、柱穴などは不明である。主軸は東西にとり、南に 20 度ほどふれる。長さは南北 3.9 m を測り、残存する壁の深さは約 20㎝。埋土は単層である。出土土器には古墳時代前期のものがあるがカマドを持ち古墳時代後期～古代の遺構か。

出土土器（第 162 図）

土師器（7 ～ 9） 7 は甕の口縁部片。頸部は強く締まり、口縁部は外に開く。端部を上方につまむ。8 は椀の口縁部片か。非常に浅い。9 は高坏の脚部。下方で明瞭に屈曲する。屈曲部付近に 4 孔を穿つ。



第 161 図　133 ～ 138 号竪穴住居跡実測図（1/60）

136 号竪穴住居跡（第 161 図）

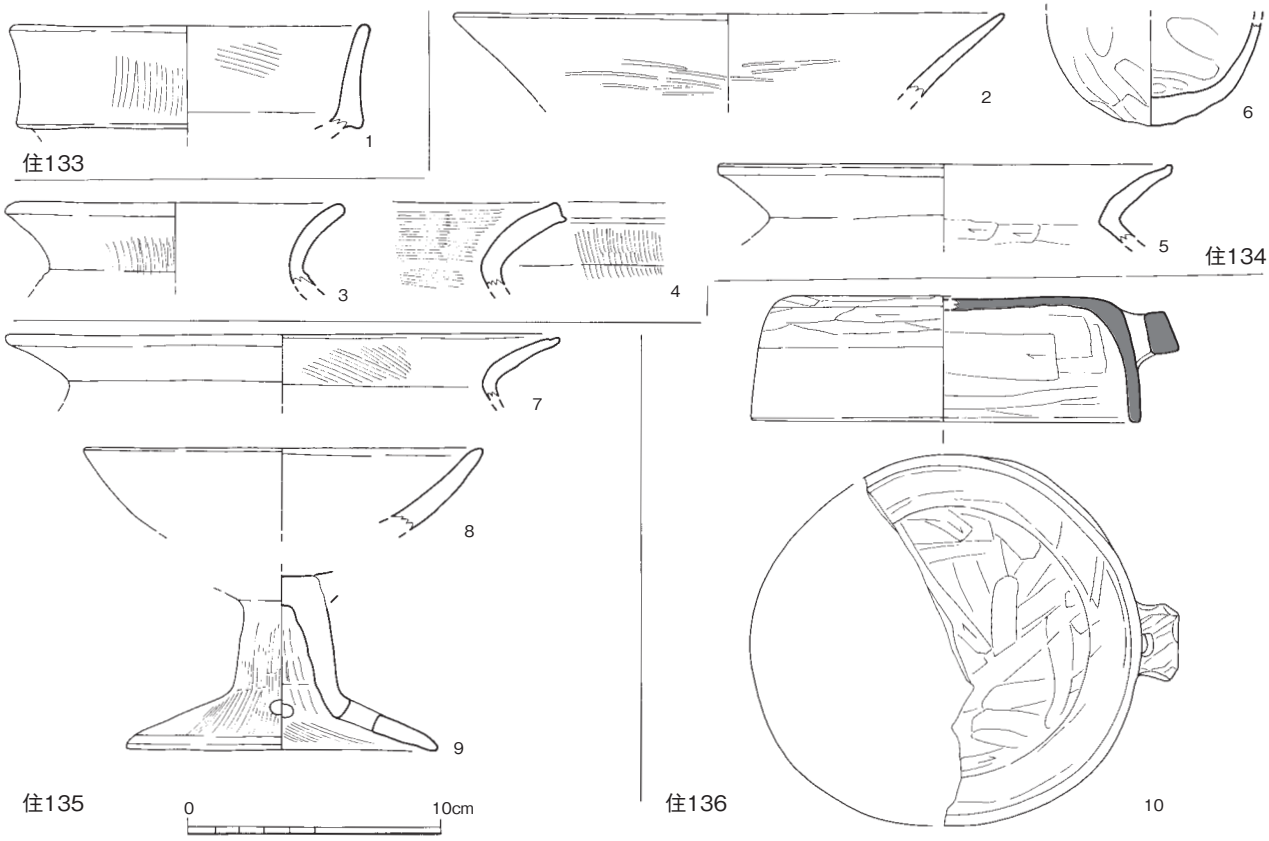
調査区南部の端で検出された竪穴住居跡である。137 号住居跡に西側を切られ、東側はピットに切られている。住居跡の大半は調査区外に伸びており、北東部の隅がわずかに確認できるのみで、規模・柱穴は不明である。北壁にＬ字状カマドをもつようで、煙道部がわずかに残存しており、屈曲部の位置から調査区の境界線上にカマド本体がある可能性が高い。これを北壁の中央とするならば本住居跡は幅 2.50 m前後の小型の住居とみることができる。主軸は南北にとるが、西に 15 度ほどふれる。残存する壁の深さは 5cmに満たず、残りが悪い。埋土は単層である。出土土器はやや特殊な蓋が 1 点図示できるが時期を決める手がかりとしては評価しづらい。Ｌ字状カマドを持つことから 5 世紀後葉～ 7 世紀前葉の時間幅で考えたい。

出土土器（第 162 図、図版 80）

須恵器（10）　10 は壷の蓋であろう。天井部は平坦で、肩部で強く屈曲して口縁部は直角に下がる。径 5mmの円孔を穿つ耳が 1 つ認められるが、本来は対称の位置に 1 対つくもの。天井部の内・外面を板状工具やヘラ状工具を用いたランダムな方向の強いナデで調整する。焼成は硬質で胎土は暗灰色を呈するが、器形からは朝鮮半島からもたらされた可能性が示唆される。

137 号竪穴住居跡（第 161 図）

調査区南部の端で検出された竪穴住居跡で、東側で 136 号住居跡を切る。大部分が調査区外に伸びており、北部の隅のみが確認された。そのため規模や柱穴は不明である。北西コーナー部付近より、西壁に沿って南に伸びる粘土の帯があり、おそらくＬ字状カマドの煙道構築粘土と推測される。



第 162 図　133 ～ 136 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

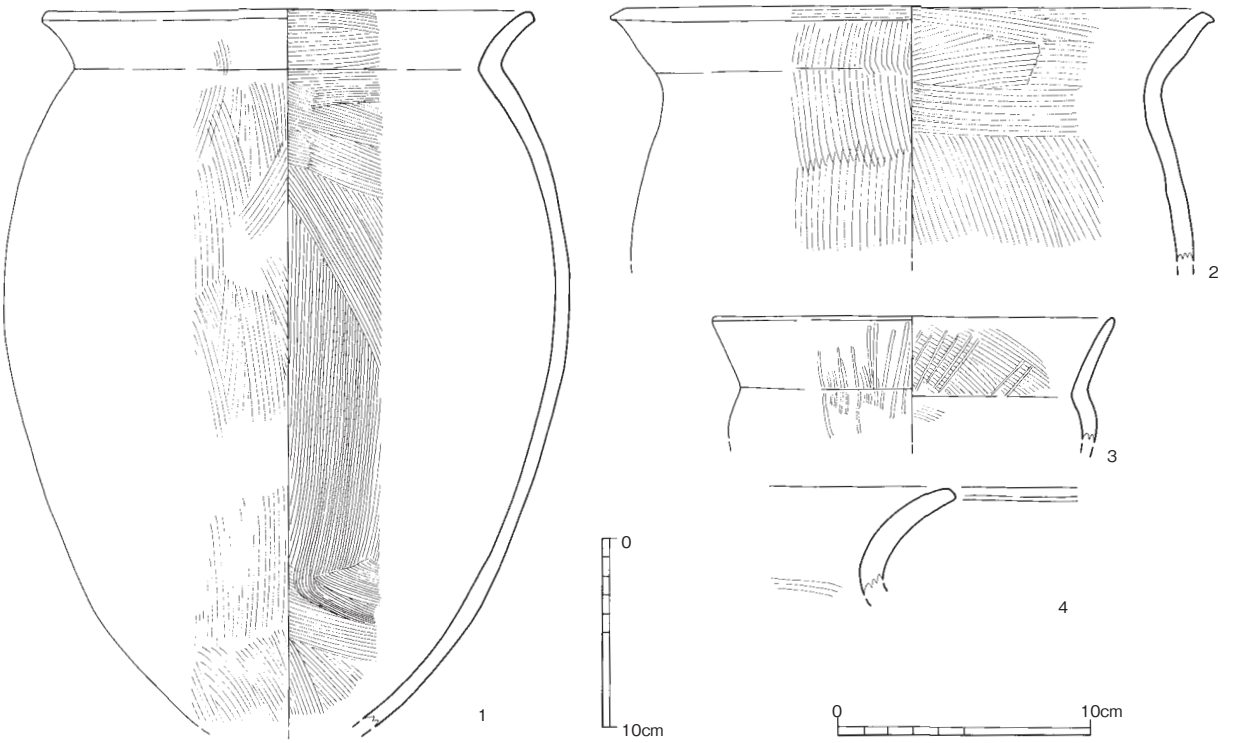
これより、西壁にカマドを持つ住居跡と推測される。主軸はおよそ北西－南東にとり、残存する壁の深さは約5cmで残りが悪い。埋土は単層である。出土土器はほとんどない。136号住居跡に後出し、古墳時代後期以降、カマドの形状から7世紀前葉以前。

138号竪穴住居跡（第161図、図版72）

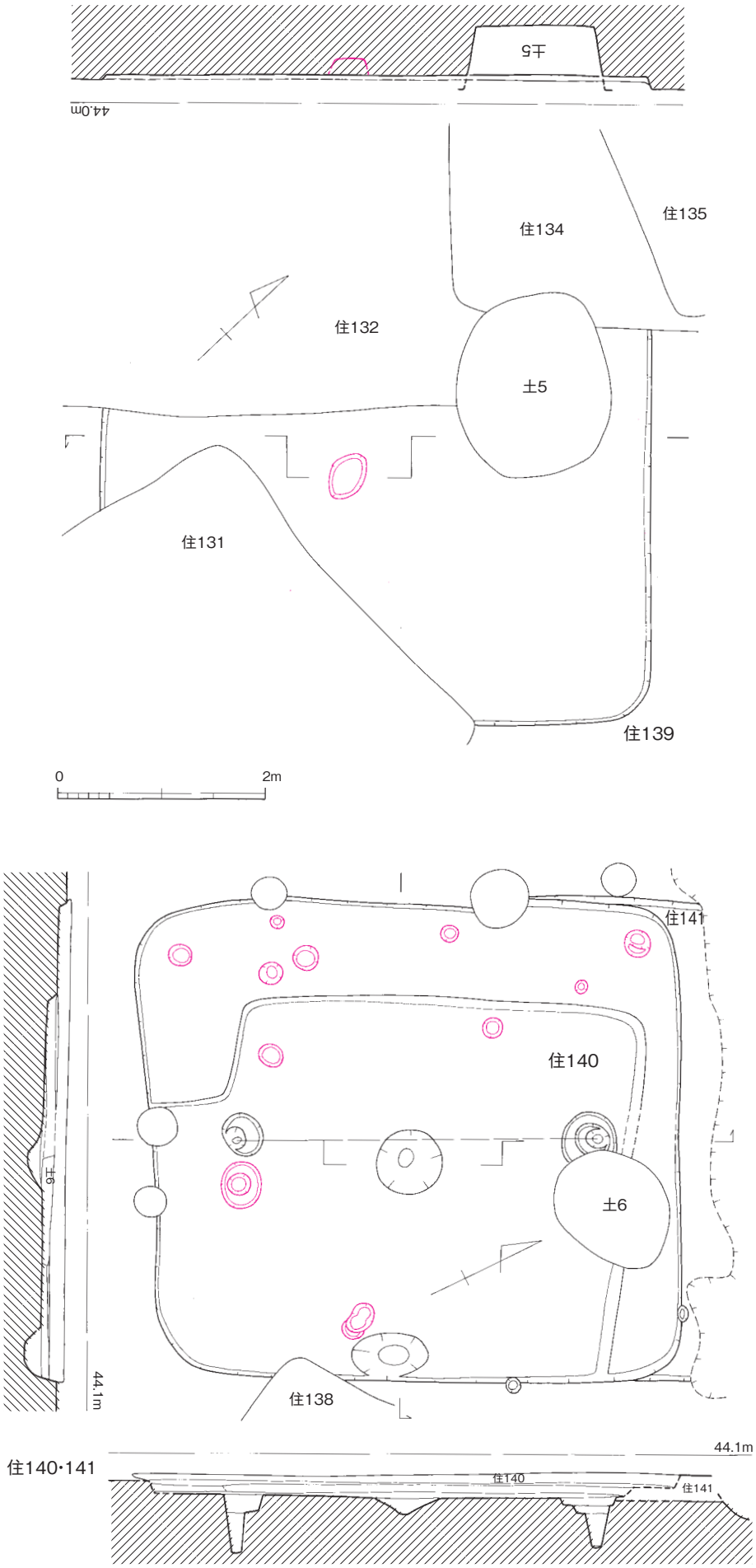
調査区の東部北寄りに位置する竪穴住居跡である。周辺にはベッド状遺構やカマドをもつ住居跡が密集しており、埋土が酷似して境界を判断するのが困難であった。本住居跡も当初は、132号住居跡に切られる中型の住居跡と、132号住居跡を切る一回り小さな新しい住居が入れ子状に重なっているものとして判断した。しかし床まで掘り下げた後、明確な柱穴が内側の正方形内の両端に確認され、その位置取り、及び柱穴埋土が他のベッド状遺構をもつ2本主柱の竪穴住居跡のものと類似していたことから、最終的に1つの住居跡として判断した。切り合い関係については、本住居跡と132号住居跡の構造から、132号住居跡が本住居跡を切るものと最終的に判断したが、調査の時点ではこれが認識できず、132号住居跡の北西コーナー部を破壊してしまっている。ベッド状遺構は少なくとも西壁･北壁において明確なものが存在し、東壁にも伸びていたであろうことが窺える。南壁については、正方形プランを想定しベルトの断面観察を行って線を引いたが、ベッド状遺構の有無についてはやや疑問が残る。主軸は南北にとるが、西へ30度ほどふれる。長さは南北4.40 m、幅は東西4.18 mを測り、残存する壁の深さは約22cmである。ベッド上遺構の高さは床から10cm前後であったものと考えられる。主柱穴は前述の通り両側のベッド上遺構脇に確認され、2本主柱の住居であったことが分かる。北東側の柱穴は132号住居跡の柱穴と重なっている。埋土は単層である。出土土器や住居構造から古墳時代前期前半頃に位置づけられる。

出土土器（第163図、図版80）

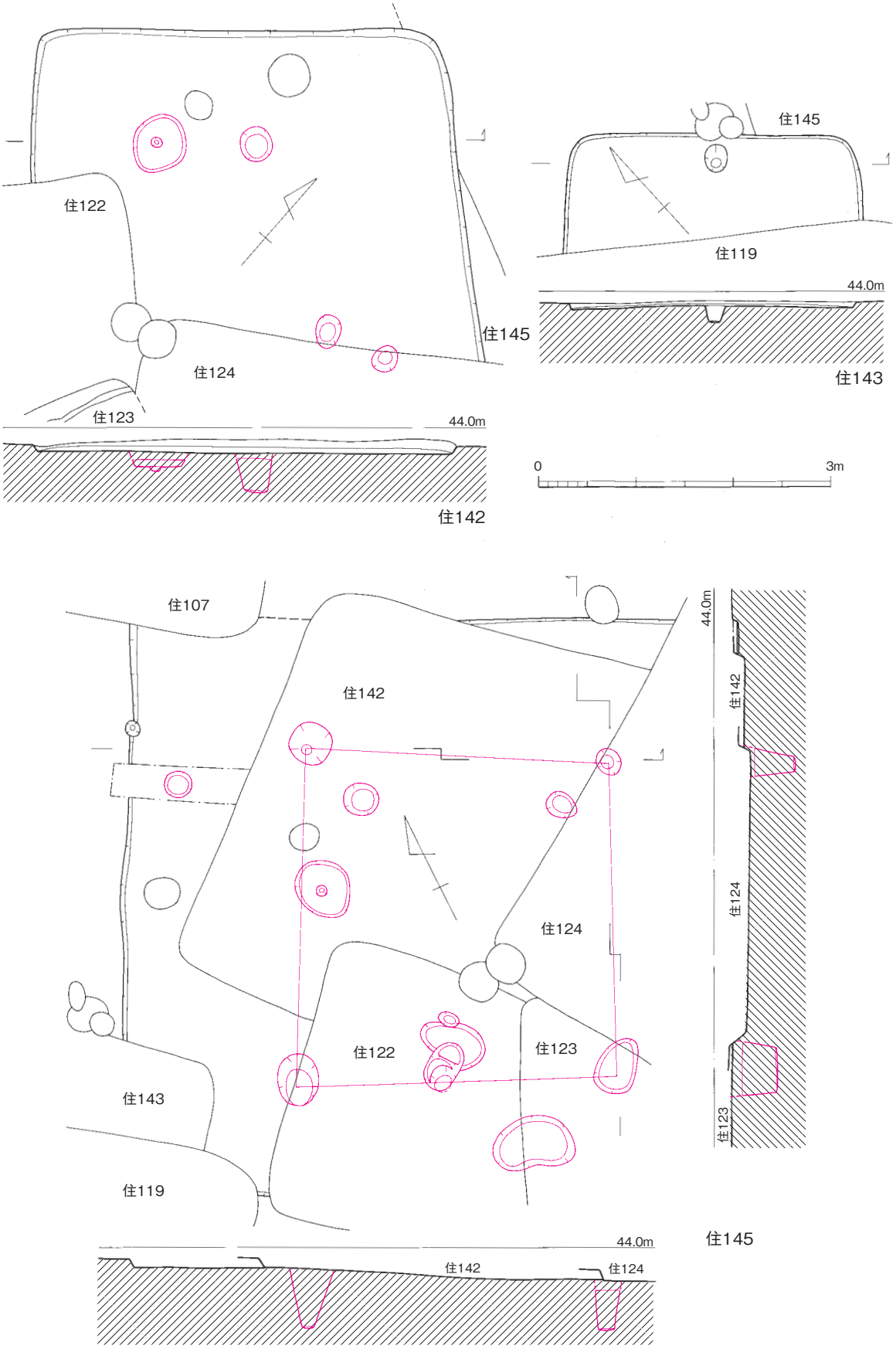
弥生土器(1)　1は甕で底部を除き前期がわかる資料。胴部は長胴で肩がやや張り頸･口縁部は「く」



第163図　138号竪穴住居跡出土土器実測図（1は1/4、他は1/3）



第 164 図　139 ～ 141 号竪穴住居跡実測図（1/60）



第 165 図　142・143・145 号竪穴住居跡実測図（1/60）

の字状に外反する。

土師器（2 ～ 4）　2 は甕の口縁部片。頸部の締まりが不明瞭。3 は鉢の口縁部片。屈曲部から斜め上方に開く口縁部が残る。4 も甕の口縁部片か。外湾しながら開く。

132･138 号住居跡下層出土土器（第 167 図、図版 80）

132･138 号住居跡付近において、床面の下層や 132 号住居跡の西側などに地山とやや異なる土が広がっており、これを掘削したところ土器が出土した。しかし、削平を受けていて残りが悪く、遺構として把握するに至らなかった。おそらく弥生時代の竪穴住居跡か土坑が存在したのであろう。出土土器を紹介しておく。

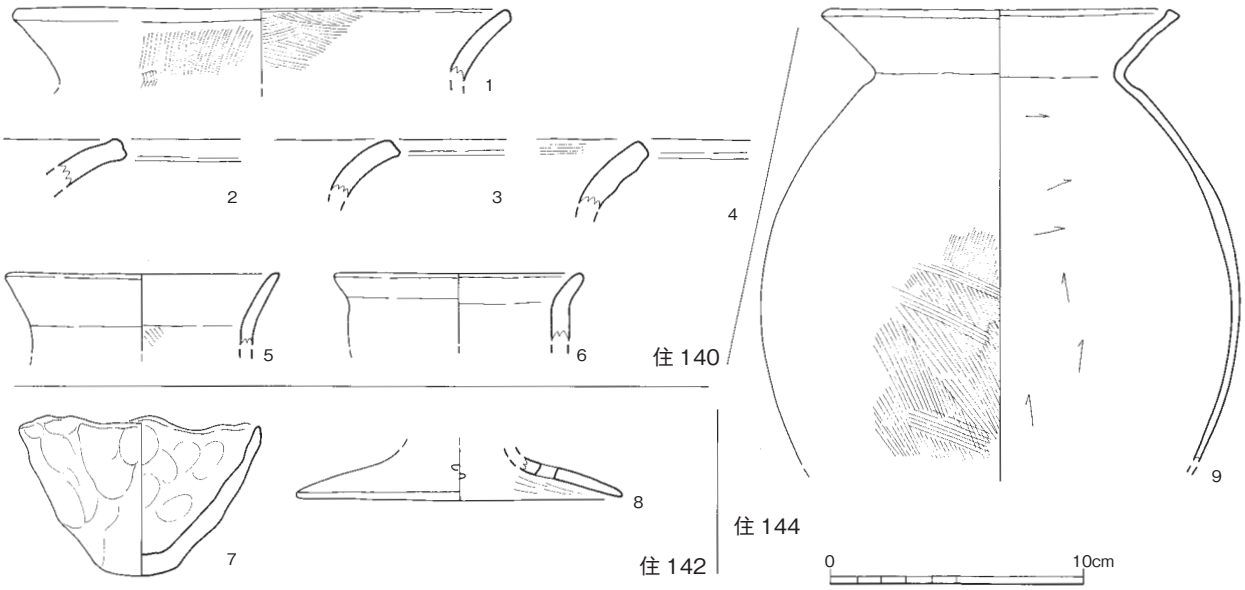
弥生土器（1 ～ 6）　1･2･4 は短頸壷である。肩部がやや張り、頸部は強く屈曲する。口縁部は直立気味に短く伸びる。4 は底部が残り、小さなレンズ底。3 はやや退化した小型の「く」の字口縁甕か。5 は甕の口縁部片。胴部上位の膨らみは弱い。口縁部は屈曲して開く。6 は高坏の脚部。長く伸びながら緩やかに外湾する。下位に 3 孔を穿つ。

139 号竪穴住居跡（第 164 図）

調査区の東部隅に位置する竪穴住居跡で、南隅は 131 号住居跡に切られ、北西部を 132・134 号住居跡･5 号土坑によって切られている。軸は南北にとると西へ 40 度ほどふれる。東西の長さは 5.20 m で、検出できた南北長は最大で 3.7m である。残存する壁の深さは約 10㎝。主柱穴は床面を精査するも確認できなかった。埋土は単層である。出土土器は土師器の小片が少量あるが図示できる資料はない。切り合い関係から前期後半以前の遺構。

140 号竪穴住居跡（第 164 図、図版 73）

調査区の中央部からやや北東に位置する竪穴住居跡で、南東部で 138 号住居跡に切られている。また北壁で 141 号住居跡を切っている。南壁西側から西壁・北壁に沿う「コ」の字形のベッド状遺



第 166 図　140・142・144 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

構をもつ。ベッド状遺構は盛土によって構築されており、上面全体に硬化面を形成する。北東側のベッド状遺構は一部が柱穴とともに6号土坑に切られている。さらに住居跡中央に被熱硬化面を伴う土坑、東壁中央には壁際土坑が確認された。前者は炉、後者は出入口にともなうものか。主軸は東西にとるが、北に25度ほどふれる。長さは東西4.50 m、幅は南北4.98 mを測るやや横長の方形プランで、残存する壁の深さは約20cmである。主柱穴は南北両側に確認され、2本主柱の住居であったことが分かる。埋土は単層である。住居跡の構造から古墳時代前期と考えられ、出土土器にも大きな齟齬はない。

出土土器（第166図）

土師器（1～6）　1～4は甕の口縁部片。いずれも小片で全形は不明。わずかに外湾しながら開く。5･6は小型の甕か。いずれも口縁部付近の小片。頸部の締まりは悪く、口縁部は短く開く。

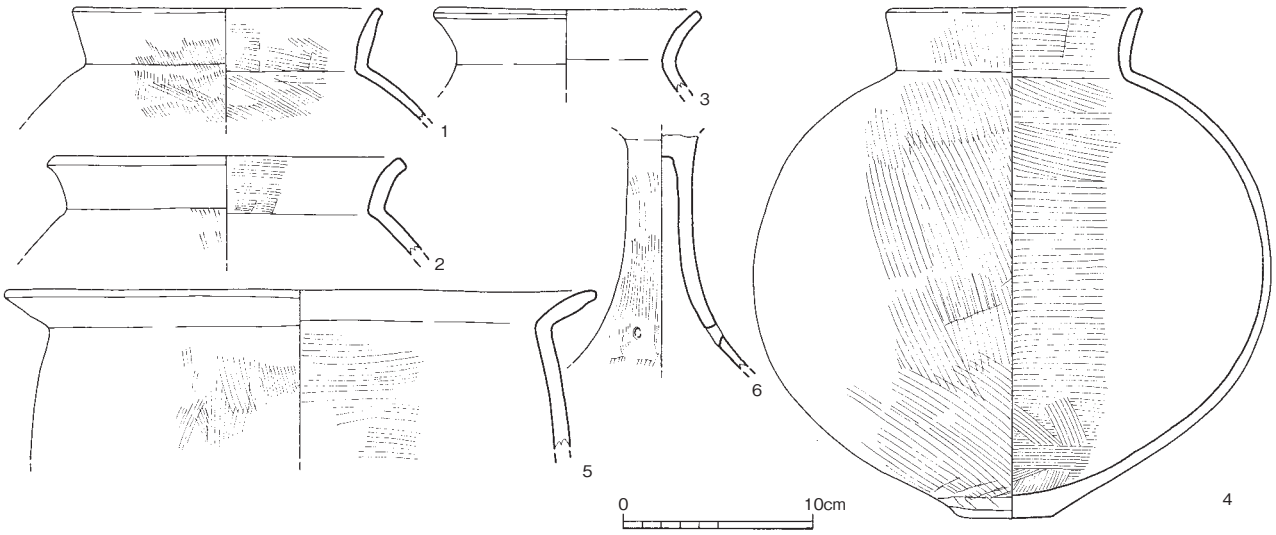
なお、他に埋土中から第179図3の雛形鉄斧が出土している。

141号竪穴住居跡（第164図、図版73）

調査区の北部に位置する竪穴住居跡である。140号住居跡及び後世の撹乱によって大部分を破壊されているため、詳細は不明である。140号住居跡と埋土が同質であり、北部の撹乱の壁面観察により当初は長方形プランの140号住居跡の延長として捉えていた。しかしトレンチによる断面の観察によって140号住居跡の北壁が確定したため、これとは別の住居跡として認定した。南側は140号住居跡に破壊され、北側は撹乱を介して調査区外にのびるため、東西幅のみ判明し、4.52mをはかる。残りは悪く壁は数cmを残すのみである。検出範囲が狭く主柱穴等の施設は調査できなかった。出土土器は土師器の小片が少量あるのみで図示できる資料はない。切り合い関係から古墳時代前期以前に位置づけられる。

142号竪穴住居跡（第165図）

調査区の中央に位置する竪穴住居跡である。145号住居跡を切り、122･124号住居跡により南側を大きく破壊される。主軸方位は北西－南東で、幅は4.30m、長さは検出できた範囲で最大3.4m



第167図　132･138号竪穴住居跡下層出土土器実測図（1/4）

ほどをはかる。中央北寄りに主柱穴となり得る深さを持つピットを1基検出したが、これに対応するピットを検出できなかったので、主柱穴とは断定できない。仮にこれを主柱穴とすれば、2本主柱の住居跡となろう。出土土器や住居の構造、他遺構との切り合い関係などからみて、古墳時代前期後半の遺構と判断される。

出土土器（第166図）

土師器（7·8）　7は手づくねの椀。底部がやや尖底で体部は立ち上がる。指頭圧痕を内・外面に多く残す。8は高坏の脚部片。下位で明瞭に屈曲するものであろう。4孔を穿つ。

143号竪穴住居跡（第165図）

調査区の中央やや南西寄りにある。19号住居跡により南西側を大きく破壊されている。また145号住居跡を東壁で切る。主軸方位は北東－南西方向で、規模は幅が2.96m、長さは検出規模で最大1.1mほどを測る。残りは悪く、壁はごく浅い。床面から小ピットが1基検出されたがごく浅い。出土土器は土師器の小片がわずかにあるのみで時期は判断できない。切り合い関係から古墳時代前期以前の遺構と考えられる。

144号竪穴住居跡（第140図）

調査区の西部に位置する竪穴住居跡である。113号住居跡の調査時に、住居跡に付設された橙褐色のカマド崩落土が直線的に途切れていたことから、この部分で113号住居跡を切り込む、これよりも新しい住居跡として認定した。埋土自体は113号住居跡との弁別が非常に困難であり、埋土の続く西方向の壁に関してはやや疑問が残る。南側は撹乱に切られる。軸を南北にとると東に30度ほどふれており、東西の長さは2.54 mである。出土土器には古墳時代前期の資料があるが切り合い関係上は6世紀初頭以降の遺構。

出土土器（第166図）

土師器（9）　9は甕・やや長胴気味で、頸部は強く締まり明瞭に屈曲する。口縁部は波打ちながら開く。布留式に比定でき古墳時代前期の資料。

145号竪穴住居跡（第165図）

調査区の中央で検出された竪穴住居跡である。北西隅を107号住居跡に、南西隅を119·143号住居跡に、中央から東半にかけてを122～124·142号住居跡により切られており、これらのすべてに先行する、一帯では最も古い住居跡である。残りは非常に悪く、壁の高さは数cm程度で、部分的に失われている。主軸方位は北北東－南南西にとる。主柱穴となり得るしっかりとした深さを持つピットが4本、略方形に配されており、これと残された壁との位置関係から本住居跡の規模を復元すると、南北長が6.1m、東西幅が6.7mほどの規模となり、かなり大型の住居跡が想定できる。出土土器はごくわずかで、図示できるものはない。切り合い関係から、古墳時代前期後半以前の遺構と考えられる。

（3）土坑

調査区内から、3基の土坑が検出された。形状、規模ともに共通性は低く、調査区内での位置関係も規則性はみられず、その性格はよくわからない。1基が古墳時代前期、1基が古墳時代後期以降に属し、1基は所属時期不明。

4号土坑（第168図、図版74）

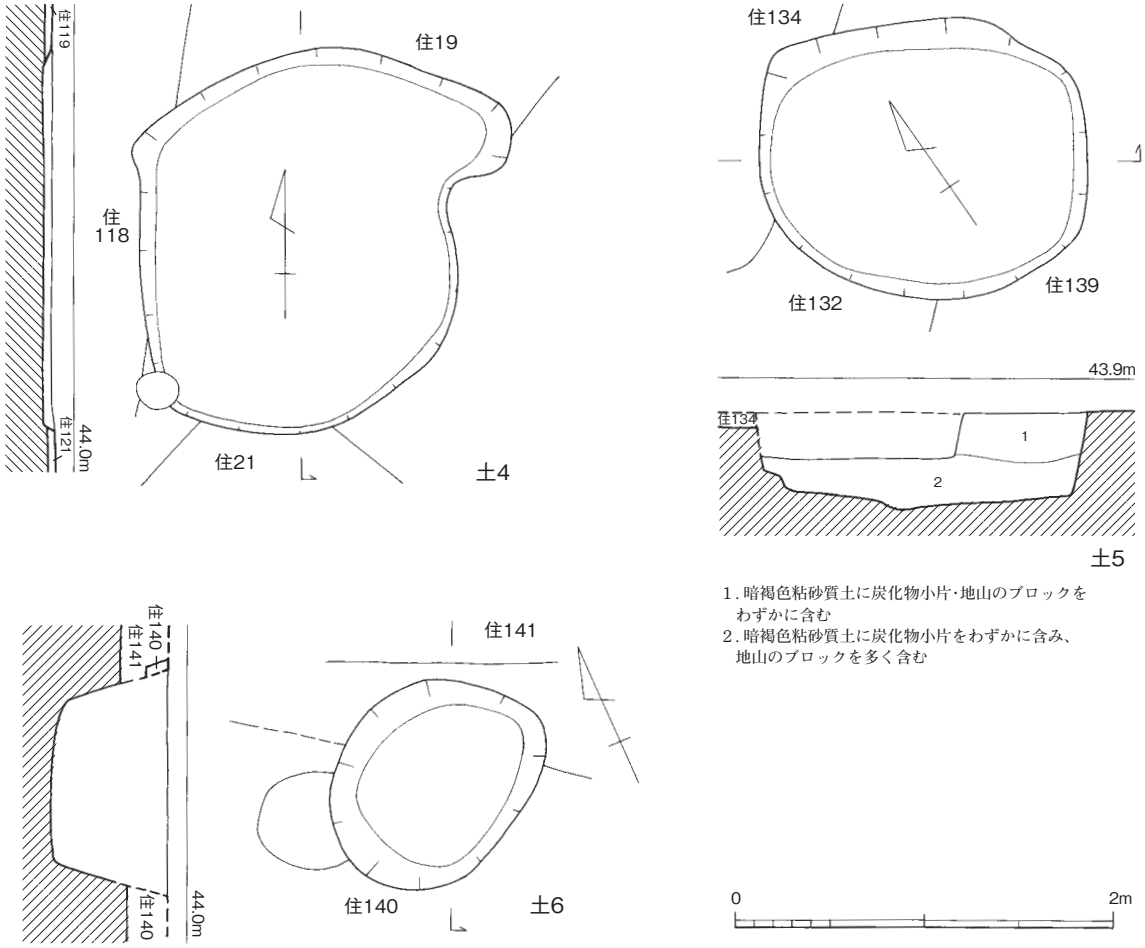
4号土坑は調査区の南部で検出した。118･119･121号住居跡と切り合い関係にあり、最も新しい。検出面において、径は長軸2.04 m、短軸1.68 mであるがやや歪な平面形をもつ。底は地山に石が埋まり込んでいたりと凹凸が目立つ。残存する壁の深さは5cmほどで、周囲の住居跡と同様に上部の大半を削平されているとみられ、残りが悪い。土坑の性格は不明である。古墳時代前期か。

出土土器（第169図）

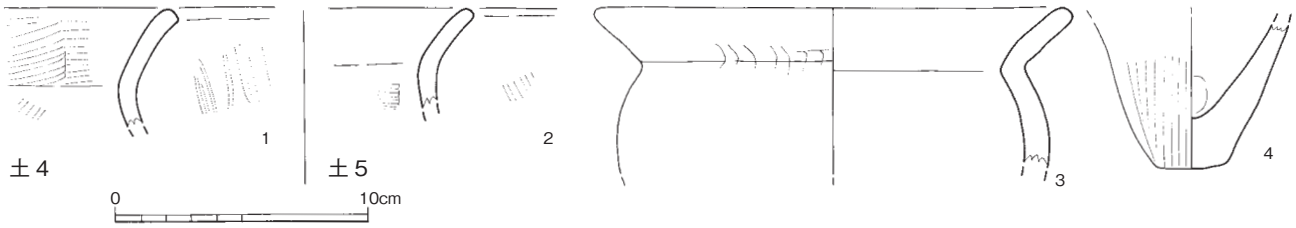
土師器（1）　1は甕の口縁部片。「く」の字に屈曲する。

5号土坑（第168図、図版74）

調査区の東部で検出した。132・134・139号住居跡と切り合い、最も新しい。埋土は周辺の遺構埋土と似通っており、132・134号住居跡の完掘後に確認したが、部分的に残された土層ベルトより切り合い関係を再確認し、本遺構が最も新しいものと確認した。以上のような調査経過を経たため、西側半分は上部を掘り飛ばしてしまった。平面形は北西－南東に長い楕円形で、検出面で長軸



第168図　4～6号土坑実測図（1/40）



第169図　4･5号土坑出土土器実測図（1/3）

1.72 m、短軸 1.48 mを測る。残存する壁の深さは約 50㎝である。断面は台形をなし、底面・壁面ともに直線的で勾配の強い立ち上がりをみせる。埋土は明瞭に 2 層に分かれ、どちらも暗褐色粘砂質土であるが下層がやや明るい土色を呈する。また上層に比して下層は黄色の大小の地山ブロックを多く含んでいる。土坑の性格は不明である。切り合い関係から、古墳時代後期以降か。

出土土器（第 169 図）

土師器（2 ～ 4）　2 は甕の口縁部片。「く」の字に屈曲する。3 は鉢の口縁部片か。肩がやや強く張る。頸部はよく締まり明瞭に屈曲する。口縁部はわずかに外湾しながら広がる。4 は甕の底部片か尖底気味に収める。

6 号土坑（第 168 図）

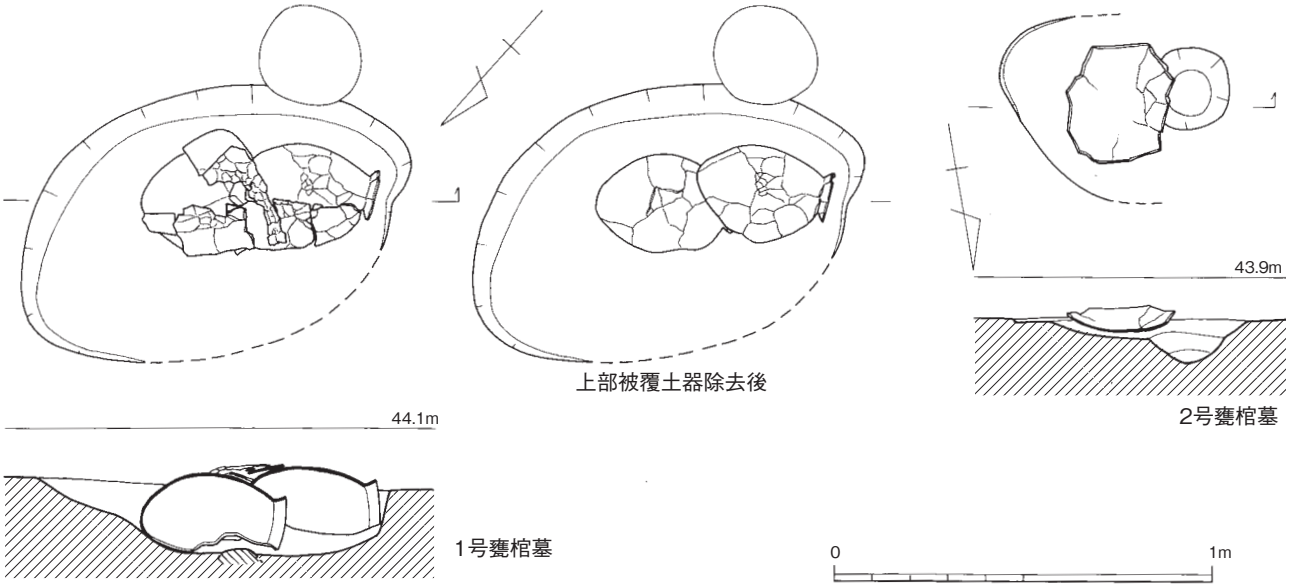
6 号土坑は調査区の北部で検出した。140 号住居跡を切り、北側のベッド状遺構と柱穴の一部を破壊する。140 号住居跡の完掘時に確認されたものであるが、部分的に残された土層ベルトより切り合い関係を再検討し、本遺構が新しいものと確認した。よって上部は掘り飛ばしてしまった。平面形は北東－南西に長い楕円形で、やや小型である。検出面で長軸 1.24 m、短軸 0.96 mを測る。残存する壁の深さは約 62㎝で、埋土は住居跡の埋土に近い暗褐色土の単層である。土坑の性格は不明。出土土器はない。切り合い関係から、古墳時代前期以降。

（4）甕棺墓

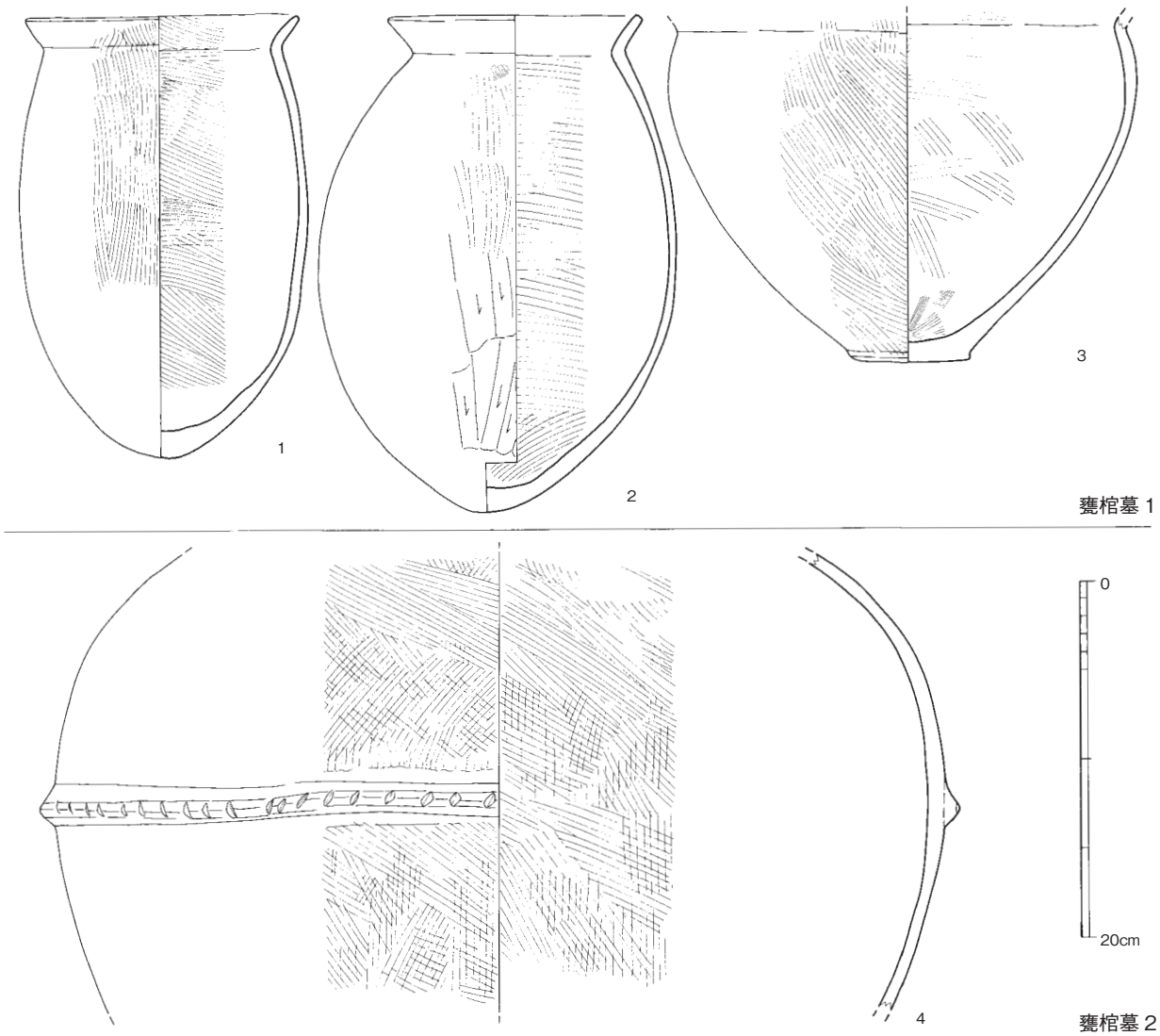
調査区の南部で 2 基検出した。削平が著しいこともあるが、完形の甕や壷を合わせ口で用いる通常の甕棺墓とは異なるので甕棺墓とするにはやや迷いもあったが、一応ここではそのように報告しておく。いずれも弥生時代後期末の遺構である。

1 号甕棺墓（第 170 図、図版 75）

調査区の南部で検出された遺構である。掘方は検出面で長軸 1.10 m、短軸 0.70 mを測るおよそ楕円状の土坑である。残存する壁の深さは、西側は 2 ～ 5㎝ほどで非常に浅く掘方も途切れているが、土器の下で段差になって落ち込み、棺体周辺の東半分が約 20㎝と最も深くなる。甕棺墓としたが実際には棺という遺体を入れる容器として成立しておらず、縦に分割した甕の破片をうつぶせにして重ねたものである。順序としては、まず甕形土器を縦に割ったものを土坑床面と水平に同じ向きで重ねる。この時点で掘方底部の段差に立てかけるように被せており、西は掘方の段差で、上部と東は甕で覆われている。その上から西側で口を合わせるように被覆、さらに重ねた隙間を隠すように土器片で覆っている。土器の下には指先大の小石をわずかに含んだ暗褐色粘砂質土が隙間な



第 170 図　1･2 号甕棺墓実測図（1/40）



第 171 図　1･2 号甕棺墓出土土器実測図（1/4）

く入っていた。掘方埋土及び土器下から遺物は出土していない。類例を知らないため断定することはできないが小児棺の一種であろうか。また掘方からわずかに西側の地山上で、赤色顔料が粒状に散在して認められた。分析の結果、ベンガラであった。周囲に他の遺構は確認できず、本遺構に関連している可能性が高い。葬送儀礼に際して振りまいたものか。

出土土器（第 171 図、図版 81）

弥生土器（1 ～ 3）　1･2 は甕。1 は細身で尖底の甕。2 は胴の張りが強い甕。ともに口縁部は「く」の字に屈曲する。3 は鉢の胴部片。底部はレンズ状を呈し、胴部上位がよく膨らむ。屈曲部までが遺存する。やや古手の資料である。

2 号甕棺墓（第 170 図、図版 75）

調査区の南東部にある。117 号住居跡の床面を掘り下げた際に確認された。したがって 117 号住居跡よりも先行する遺構である。残りはきわめて悪く、ごく浅いくぼみの中にかろうじて甕の胴部片が皿状に残されているのみであった。したがって甕棺墓であるという確証はないが一応甕棺墓として報告する。なお浅い皿状の土坑の底面に浅いピットが検出されたが、本遺構に伴うものかどうか定かではない。

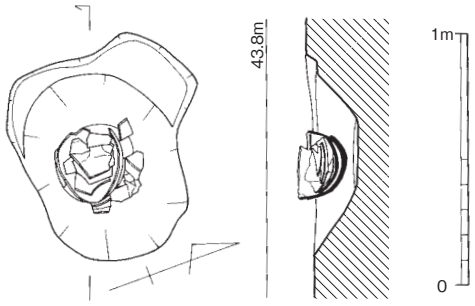
出土土器（第 171 図、図版 81）

弥生土器（4）　4 は甕あるいは壷の胴部片。肩部が強く張り、胴部最大径付近に断面三角形の刻目突帯を 1 条めぐらせる。

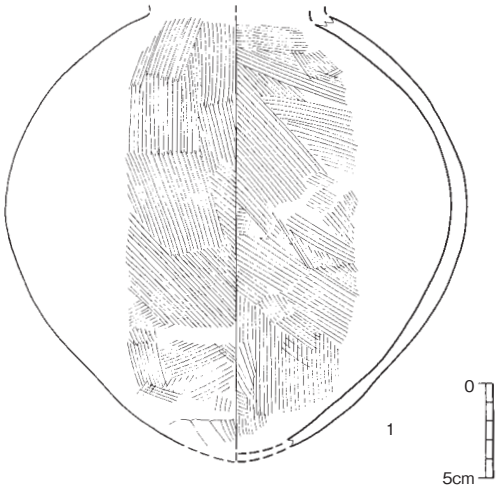
（5）その他の出土遺構

1 号土器埋設遺構（第 172 図）

108 号住居跡の中央部より検出された遺構である。108 号住居跡の貼床層を掘り下げ中に下層から土器が出土したので、精査したところ、皿状の土坑中央部に土器を埋設した遺構を検出した。埋土には少量ながら炭化物が含まれており、竪穴住居跡に伴う炉跡の可能性があるが、本来これに伴ったと考えられる住居跡や関連遺構は上層遺構により削平されるなどして全く見つけることができなかった。出土した土器より、古墳時代前期の遺構であろう。



第 172 図　1 号土器埋設遺構実測図（1/30）



第 173 図　1 号土器埋設遺構出土土器実測図（1/3）

出土土器（第 173 図）

土師器（1）　1 は甕の胴部片。底部は欠損するがややとがり気味か。球胴で頸部はよく締まる。

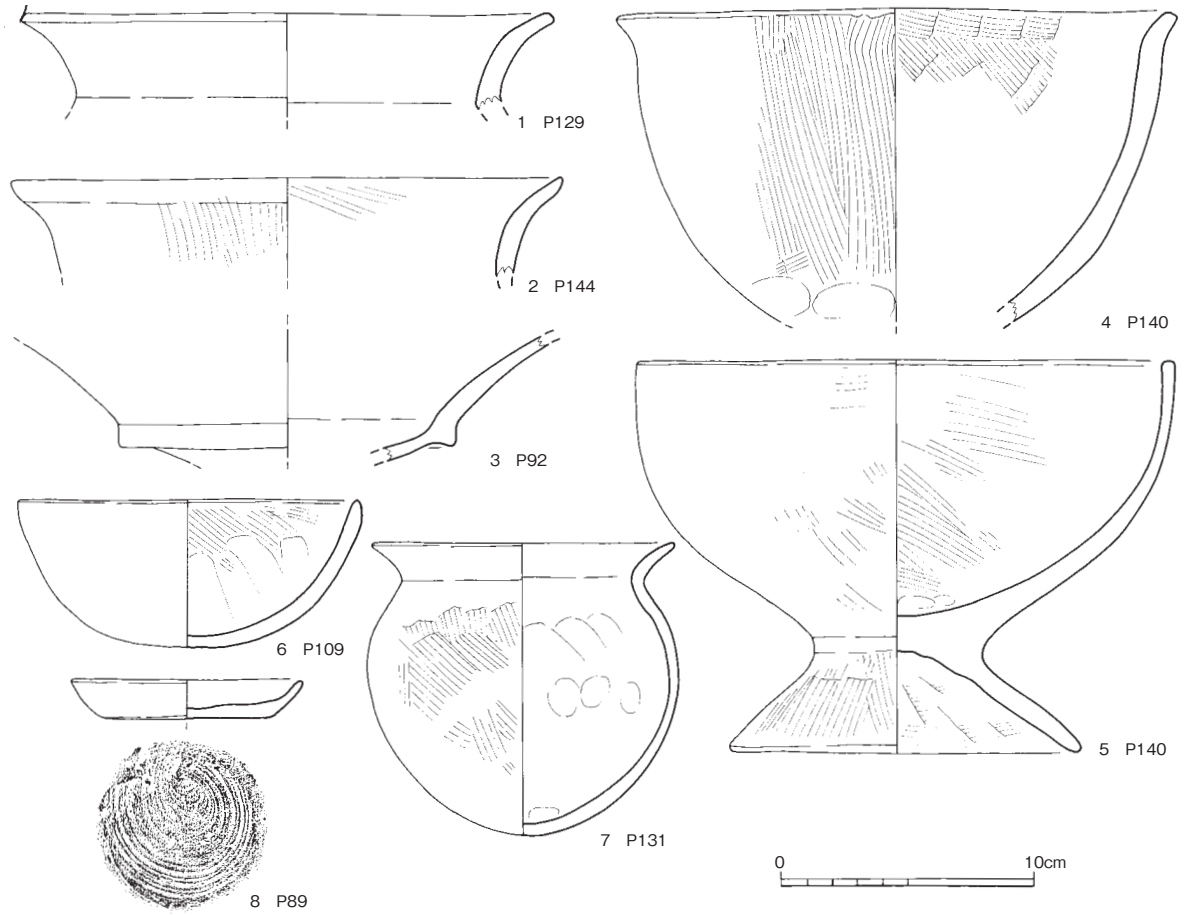
ピット（第 131 図）

Ⅱ区では多くのピットが検出された。本来は複数が組み合わさって何らかの遺構の一部分を形成するものであろうが、組み合わせを見いだすことができなかったため個別の遺構としては報告せず、出土位置を全体図に示すのみとする。出土土器のうち、図化に耐える資料のみ以下に紹介していく。

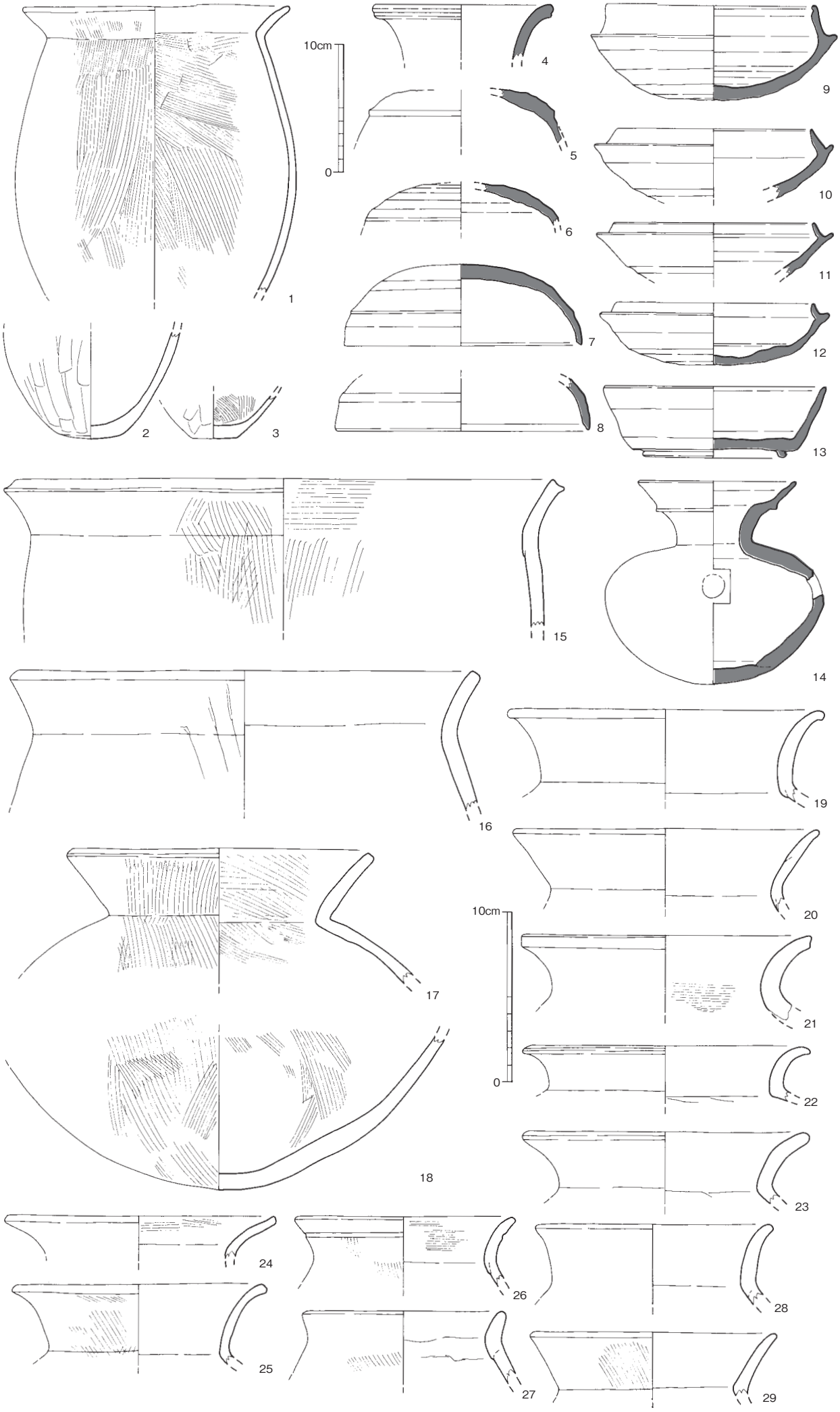
出土土器（第 174 図、図版 81）

土師器（1 ～ 7）　1 は甕の口縁部片。「く」の字に屈曲するものである。端部を四角く収めるやや古い形状。ピット 129 出土。2 も甕の口縁部片か。緩やかに外湾しながら開きわずかに端部を上に引き上げる。古墳時代前期の資料で、ピット 144 出土。3 は高坏。口縁部外面に強い段を形成するもので古墳時代前期の資料か。ピット 92 出土。4 は鉢。半球形の胴部と短く外反する口縁部を持つ。5 は脚付椀。脚は低く、強く広がる。坏部は半球形でやや大きい。これらは古墳時代前期の資料で、ピット 140 出土。7 は小型甕。全形がわかる資料で、底部は尖底気味の丸底、胴部は球胴で頸部はやや締まり、口縁部は外反する。ピット 131 出土。

土師質土器（8）　8 は土師質の小皿である。底部は平坦で、糸切り痕が外面によく残る。口縁部はごく短く斜めに広がる。中世期の資料か。



第 174 図　Ⅱ区ピット出土土器実測図（1/3）



第 175 図　Ⅱ区包含層等出土土器実測図その①（1 ～ 3 は 1/4、他は 1/3）

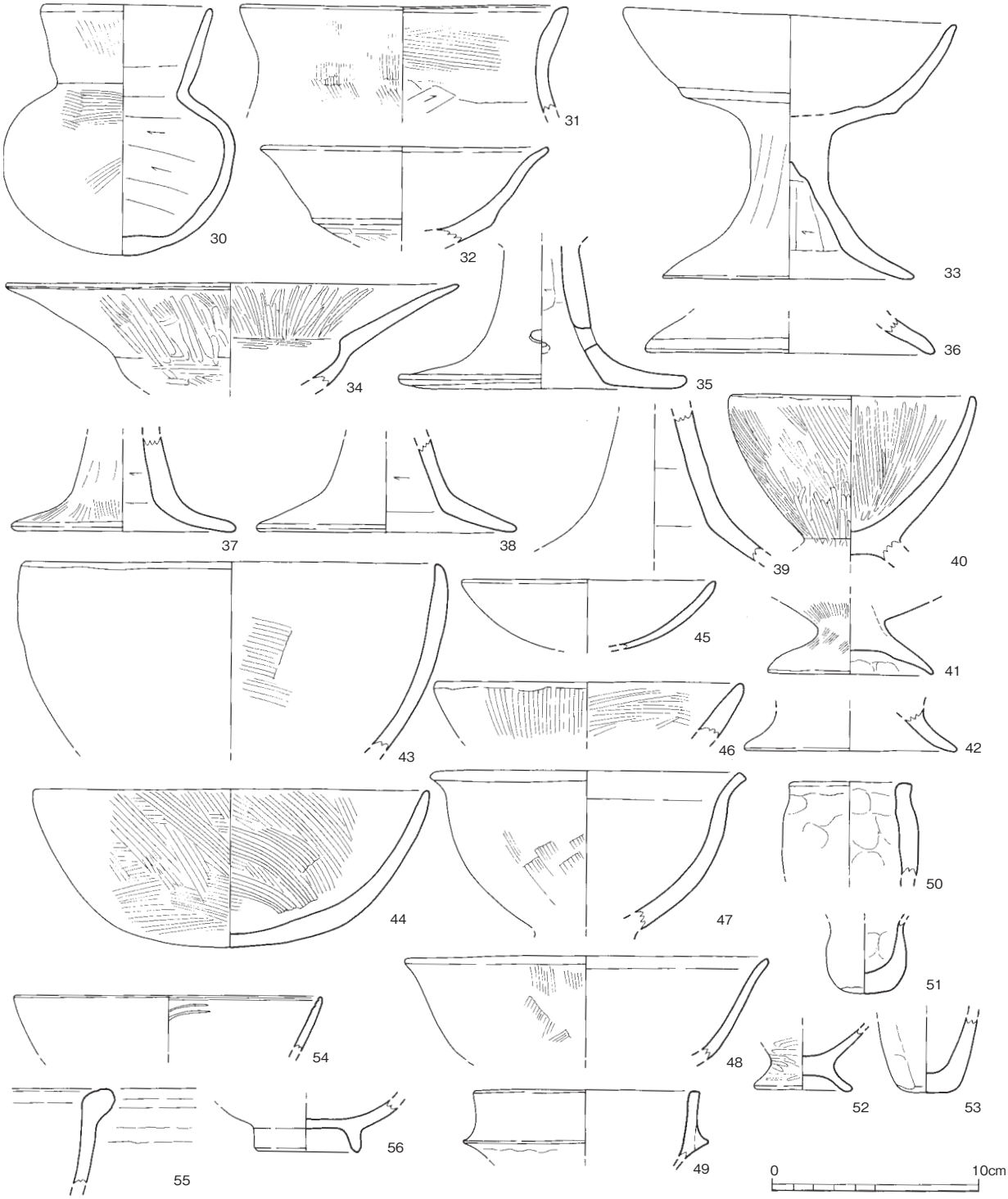
（6）その他の出土遺物

Ⅱ区包含層等出土土器（第 175･176 図、図版 81）

Ⅱ区の表土はぎ中、遺構検出中に出土した所属遺構不明の土器、あるいは撹乱中から出土した土器などをまとめて報告する。

弥生土器（1 ～ 3） 1 は口縁部が「く」の字状に屈曲する長胴甕の胴上位～口縁部片。2･3 は甕の底部片で、ともにレンズ状底を呈する。

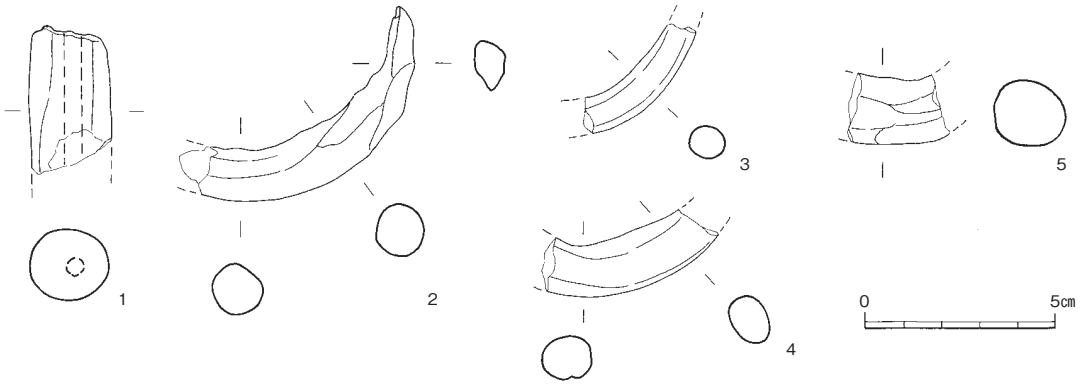
須恵器（4 ～ 14） 4 は壷の口縁部片。斜めに立ち上がり口縁部付近で強く外湾する。口縁端部に沈線を 1 条施す。5 ～ 8 は坏蓋。5 は肩部に段を持つ坏蓋。天井部は丸い。6 ～ 8 は天井部から口



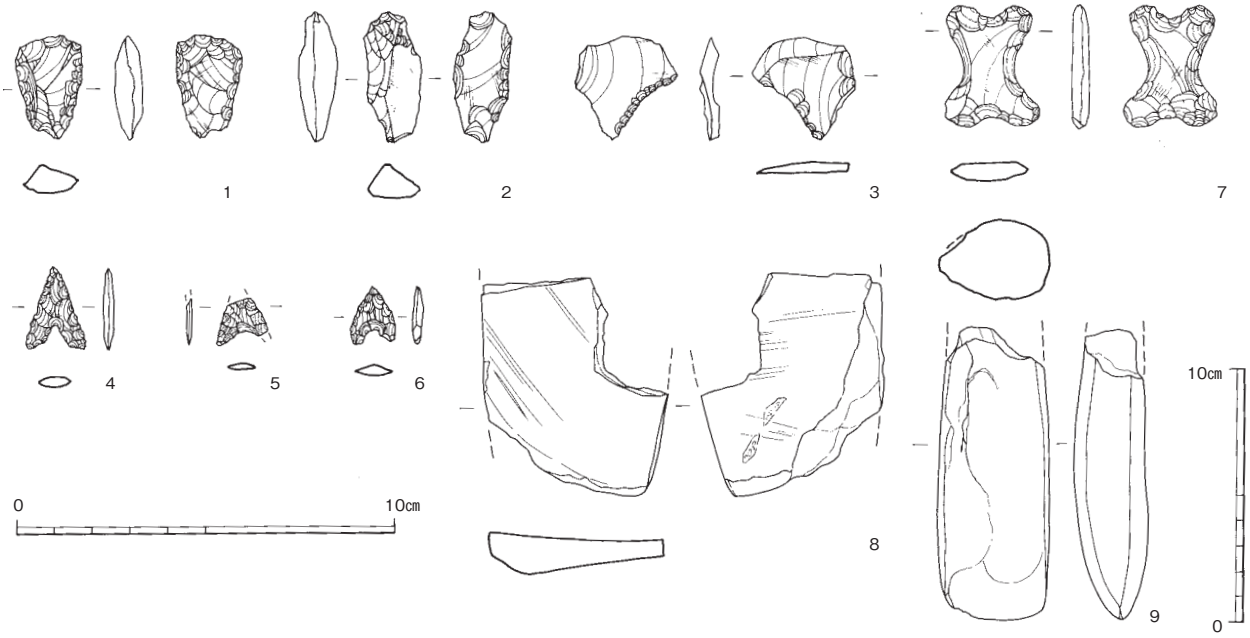
第 176 図　Ⅱ区包含層等出土土器実測図その②（1/3）

縁部まで緩やかに湾曲する坏蓋であろう。9 ～ 12 はカエリを持つ坏身。9･10 は口縁部が直線的に内傾しつつ伸びる。11･12 は口縁部が短くなる。13 は高台を持つ坏蓋。底部は平坦で口縁部はわずかに内湾しながら開く。14 は瓶。胴部は扁平で中位やや上に 1 孔を穿つ。頸部は強く締まり、屈曲して外反する。口縁部は段を呈する。

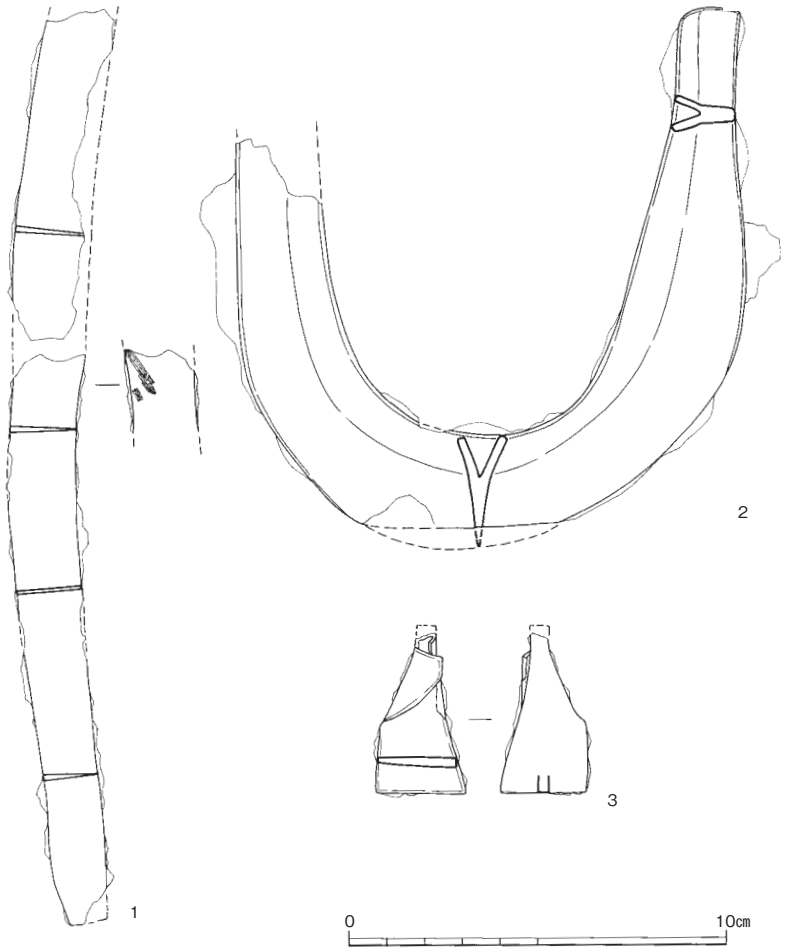
土師器（15 ～ 53）15 は甕または甑の口縁部。頸部はほとんど締まらず、口縁部は緩やかに外湾しつつ上に伸びる。16 も甕の口縁部片で、「く」の字状に屈曲する。17 は短頸壷か。頸部が強く締まり口縁部は斜めに広がる。18 は壷または甕の底部片。大きな球胴か。19 ～ 29 は甕の口縁部片。頸部は明瞭に屈曲し、口縁部は如意状に外反するものが多い。24 は端部を上に引き上げる布留式系の資料。16 は外面に沈線を 1 条めぐらせる。27 は肥厚しながら短く外反する。30 は小型の直口壷。胴部はわずかに扁平な球胴。頸部は強く締まり口縁部は短く直立気味に開く。31 は甕の口縁部片か。ほとんど締まらず緩やかに外湾する。32 ～ 39 は高坏。32･33 は杯部中位外面に段を持つもの。34 は坏部下半が椀状になり、屈曲して開く資料。35 ～ 39 は脚。35･37 から 39 は下半で明瞭に屈曲して外に強く開くもので、35 は屈曲部上位に 4 孔を穿つ。38 は屈曲部内面に強い稜が形成される。40 ～ 42 は脚付椀。40 は椀部の資料である。内・外面を丁寧なヘラミガキで仕上げる。41･42 は脚部である。43 は大椀か。半球形の口縁部のみ残る。44 も椀。口径が大きく平底気味。45･46 は皿



第 177 図　Ⅱ区出土製品実測図（1/2）



第 178 図　Ⅱ区出土石器実測図（9 は 1/3、他は 1/2）



第 179 図　Ⅱ区出土鉄器実測図（1/2）

状の椀か。47 は椀あるいは鉢。半球形の胴部と短く外湾する口縁部を持つ。48 は椀または坏の口縁部片。49 は土師器模倣坏身または二重口縁壷の口縁部片。直径が小さく坏身か。カエリを持つ。50 はタコツボか。51 ～ 53 は手づくねのミニチュア土器で、51 は甕、52 は脚付椀、53 は椀か。

陶磁器等（54 ～ 56）54 は越州窯系青磁の椀。内面に二条の沈線で文様を描く。55 は土鍋か。口縁部を玉縁状にする。56 は陶器の椀で、唐津焼か。釉は白灰黄色を呈する。

Ⅱ区出土土製品（第 177 図、第 5 表、図版 82）

Ⅱ区から出土した土製品を紹介する。2 ～ 5 は甑の把手片とも考えたが,塔田琵琶田遺跡出土の甑の中には類例がなかったので、用途不明の土製品の一部として紹介しておく。

土製品（1 ～ 5）　1 は管状土錘。太さは 2.1cm と太い。孔径は約 4mm。109 号住居跡出土。2 ～ 5 は、強く湾曲して先端をとがらせる細い把手状の土製品のそれぞれ一部。2 ～ 4 は 107 号住居跡出土、5 は 115 号住居跡出土。

石器・石製品（第 178 図、第 6 表、図版 82）

Ⅱ区から出土した石器・石製品を紹介する。打製石器のほか、磨製石斧と砥石がある。

打製石器（1 ～ 7）　1 はスクレイパーである。2 辺に押圧剥離を施し刃部を作り出す。2 は縦長の剥片の 1 辺に押圧剥離を施すもの。石錐の刃部が破損したものの可能性もある。3 も剥片の 1 辺に

押圧剥離で刃部を作り出す。いずれも姫島産黒曜石製で、遺構検出中の出土。4～6は石鏃。いずれも平面三角形の凹基鏃で、5は安山岩製、ほかは姫島産黒曜石製で、いずれも遺構検出中の出土。7はトロトロ石器と呼ばれる異形石器。安山岩製で108号住居跡出土。

磨製石器等（8･9） 8は砥石。出土時に手鍬で打ち欠いて破損した。厚さが最大1cm、薄い箇所では5mm程度と薄く、研ぎ減りが著しい。安山岩製で目が細かく仕上げ砥か。9は片岩製の磨製石斧。上部は破損している。107号住居跡出土。

金属器（第179図、第10表、図版82）

Ⅱ区から出土した鉄器類をまとめて報告する。3点のみである。

鉄器（1～3） 1は薄い板状の鉄器。平面形状はわずかに湾曲し、内側が尖るが、刃部としてはやや頼りない。裏面に木質が付着する箇所がある。何らかの装飾に用いられたものか。132号住居跡出土。2はU字形鋤先。断面「Y」字状に成形する。107号住居跡出土。3は雛形鉄斧か。刃部は研ぎ出さない。肩部を折り曲げて成形する。140号住居跡出土。

（8）小結

以上、Ⅱ区の調査成果を見てきた。簡単に概括しておきたい。

Ⅱ区で検出した主な遺構は竪穴住居跡39棟、土坑3基、甕棺墓2基である。

竪穴住居跡には古墳時代前期・古墳時代中～後期のものがあり、本調査区では古墳時代前期の竪穴住居跡が主体を占めていて計27棟を数える。一方、古墳時代中期後半以降の竪穴住居跡は12棟とやや少ない。調査区内から出土した土器に古代の資料がほとんど含まれないことから、本調査区においては古代の遺構は存在しないと考えられ、12棟のすべてが古墳時代中期後半～後期（7世紀初頭に比定される1棟を含む）のものと考えられる。

合わせて、古墳時代前期の甕棺墓を2基検出したことも収穫であった。第2次調査Ⅰ区ではおそらく古墳時代前期に属するとみられる石棺墓を1基調査しており、集落内に墓が点在する状況が垣間見える。いずれも成人を葬るサイズとは言えず、乳幼児～小児を集落内に点的に埋葬する当該期のあり方を踏襲するものであろう。

古墳時代中期後半～後期に属する竪穴住居跡のほとんどから、カマドあるいはその痕跡が見つかった。カマドはいくつかの例外を除き西または北側の壁の中央に作り付けられており、塔田琵琶田遺跡群における一般的なカマドの向きを踏襲する。また、カマドの構造がある程度判明する11基のうち8基がL字状カマドで、L字状カマドの採用率がかなり高い点は注目される。

合わせて、本調査区での鉄器出土量の少なさも6次調査Ⅰ区と好対照である。これは鉄器を豊富に有すると考えられる古墳時代中～後期の遺構が本調査区においてはまばらであったことと関連するかもしれない。同じく古墳時代中～後期の遺構が少ない第5次調査Ⅰ区の成果と合わせて、6次調査の報告の中で検討したい。

本調査区の南側には第2次調査Ⅲ区が、東側には第2次調査Ⅱ区が、北側には第5次調査Ⅰ区・第6次調査Ⅱ区が広がっている。本調査区の成果のみでは塔田琵琶田遺跡群における一連の調査成果を分析することは難しい。何度も述べるように、東九州自動車道関係で行われた塔田琵琶田遺跡群の調査を総覧して、第6次調査の報告に合わせて詳細な総括を行うこととしたい。

Ⅳ　総括

1　竪穴住居跡出土炭化物の年代測定結果

伊藤茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtatidze・小林克也 (1)

(1) 株式会社パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

はじめに　福岡県豊前市に位置する塔田琵琶田遺跡第 4 次から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

試料と方法　試料は、Ⅰ区の 3 号住居跡から 4 点（試料 No.1：PLD － 29440、試料 No.2：PLD － 29441、試料 No.3：PLD － 29442、試料 No.4：PLD － 29443）、14 号住居跡から 3 点（試料 No.5：PLD － 29444、試料 No.6：PLD － 29445、試料 No.7：PLD － 29446）、39 号住居跡から 1 点（試料 No.8：PLD － 29447）、1 号土坑から 1 点（試料 No.9：PLD － 29448）の、計 9 点の炭化材である。

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-29440	調査区：Ⅰ区 遺構：3 号住居跡 試料 No.1 遺物 No. 炭 1	種類：炭化材 試料の性状：部位不明 器種：丸材 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-29441	調査区：Ⅰ区 遺構：3 号住居跡 試料 No.2 遺物 No. 炭 2	種類：炭化材 試料の性状：部位不明 器種：丸材 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-29442	調査区：Ⅰ区 遺構：3 号住居跡 試料 No.3 遺物 No. 炭 3	種類：炭化材 試料の性状：部位不明 器種：丸材 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-29443	調査区：Ⅰ区 遺構：3 号住居跡 試料 No.4 遺物 No. 炭　北側	種類：炭化材 試料の性状：部位不明 器種：板材か 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-29444	調査区：Ⅰ区 遺構：14 号住居跡 試料 No.5 遺物 No. 炭　南側	種類：炭化材 試料の性状：部位不明 器種：丸材 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-29445	調査区：Ⅰ区 遺構：14 号住居跡 試料 No.6 遺物 No. 炭　東側	種類：炭化材 試料の性状：部位不明 器種：板材 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：0.1N, 塩酸：1.2N）
PLD-29446	調査区：Ⅰ区 遺構：14 号住居跡 試料 No.7 遺物 No. 炭	種類：炭化材 試料の性状：部位不明 器種：丸材 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-29447	調査区：Ⅰ区 遺構：39 号住居跡 試料 No.8 遺物 No. 炭	種類：炭化材 試料の性状：部位不明 器種：板材 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-29448	調査区：Ⅰ区 遺構：1 号土坑 試料 No.9 遺物 No. 炭	種類：炭化材 試料の性状：部位不明 器種：細枝状 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

第 3 表　放射性炭素年代測定試料と処理

いずれの試料も、最終形成年輪は残っていなかった。発掘調査所見によれば、3 号住居跡は古墳時代前期、14 号住居跡は古墳時代後期と考えられており、39 号住居跡、1 号土坑は時期不明である。測定試料の情報、調製データは第 3 表のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた 14C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、14C 年代、暦年代を算出した。

結果　第 4 表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ 13C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した 14C 年代を、第 180 ～ 182 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

14C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。14C 年代（yrBP）の算出には、14C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した 14C 年代誤差（± 1 σ）は、

測定番号	δ ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
PLD-29440 3 号住居跡 試料 No.1	-31.71 ア 0.22	1577 ア 22	1575 ア 20	428-436 cal AD (6.5%) 447-472 cal AD (20.9%) 487-535 cal AD (40.7%)	421-541 cal AD (95.4%)
PLD-29441 3 号住居跡 試料 No.2	-28.36 ア 0.28	1564 ア 21	1565 ア 20	430-492 cal AD (58.1%) 513-516 cal AD (2.5%) 530-538 cal AD (7.6%)	425-545 cal AD (95.4%)
PLD-29442 3 号住居跡 試料 No.3	-28.82 ア 0.22	1558 ア 21	1560 ア 20	431-492 cal AD (57.9%) 530-542 cal AD (10.3%)	426-553 cal AD (95.4%)
PLD-29443 3 号住居跡 試料 No.4	-30.74 ア 0.23	1635 ア 20	1635 ア 20	392-424 cal AD (68.2%)	350-367 cal AD (3.0%) 380-432 cal AD (82.1%) 491-531 cal AD (10.3%)
PLD-29444 14 号住居跡 試料 No.5	-29.24 ア 0.20	1604 ア 21	1605 ア 20	410-432 cal AD (24.4%) 490-532 cal AD (43.8%)	401-475 cal AD (47.9%) 484-536 cal AD (47.5%)
PLD-29445 14 号住居跡 試料 No.6	-30.96 ア 0.21	1632 ア 21	1630 ア 20	391-427 cal AD (68.2%)	350-367 cal AD (2.4%) 380-434 cal AD (76.9%) 460-467 cal AD (0.9%) 488-533 cal AD (15.3%)
PLD-29446 14 号住居跡 試料 No.7	-27.27 ア 0.22	1603 ア 21	1605 ア 20	411-433 cal AD (23.5%) 489-532 cal AD (44.7%)	402-475 cal AD (47.4%) 484-536 cal AD (48.0%)
PLD-29447 39 号住居跡 試料 No.8	-29.58 ア 0.20	1678 ア 21	1680 ア 20	345-398 cal AD (68.2%)	264-274 cal AD (2.5%) 331-415 cal AD (92.9%)
PLD-29448 1 号土坑 試料 No.9	-28.27 ア 0.20	1855 ア 22	1855 ア 20	127-214 cal AD (68.2%)	86-229 cal AD (95.4%)

第 4 表　放射性炭素年代測定・暦年較正の結果

測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の 14C 年代がその 14C 年代誤差内に入る確率が 68.2％であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

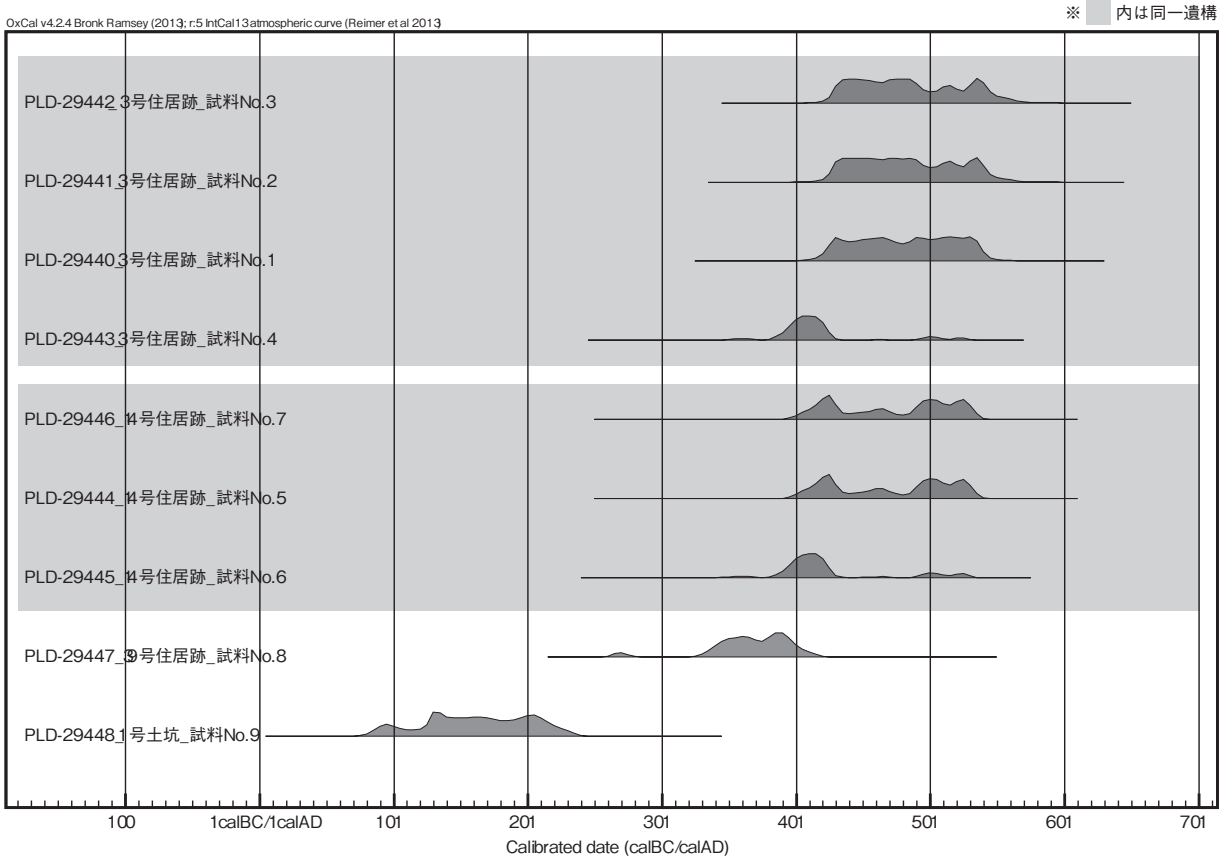
暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された 14C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、および半減期の違い（14C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

14C 年代の暦年較正には OxCal4.2（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、1 σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された 14C 年代誤差に相当する 68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ暦年代範囲は 95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は 14C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

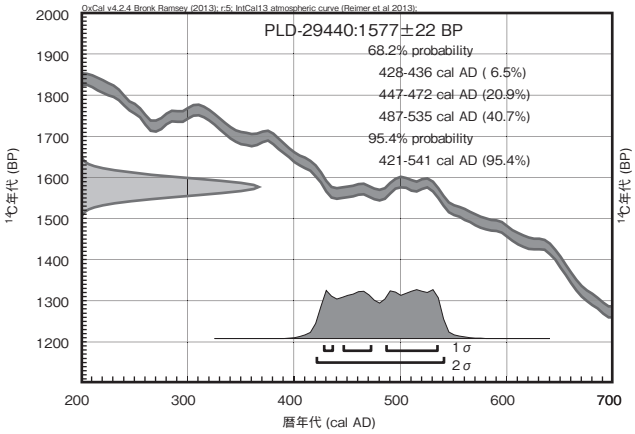
考察　以下、2 σ暦年代範囲（確率 95.4％）に着目して、遺構ごとに結果を整理する。

3 号住居跡の試料 No.3（PLD － 29442）は 426 － 553 cal AD（95.4%）、試料 No.2（PLD － 29441）は 425 － 545 cal AD（95.4%）、試料 No.1（PLD － 29440）は 421 － 541 cal AD（95.4%）で、5 世紀前半から 6 世紀中頃の暦年代を示した。また、試料 No.4（PLD － 29443）は 350 － 367 cal AD（3.0%）、380 － 432 cal AD（82.1%）、491 － 531 cal AD（10.3%）で、4 世紀中頃～ 6 世紀前半の暦年代を示した。いずれも、古墳時代中期～後期に相当する。

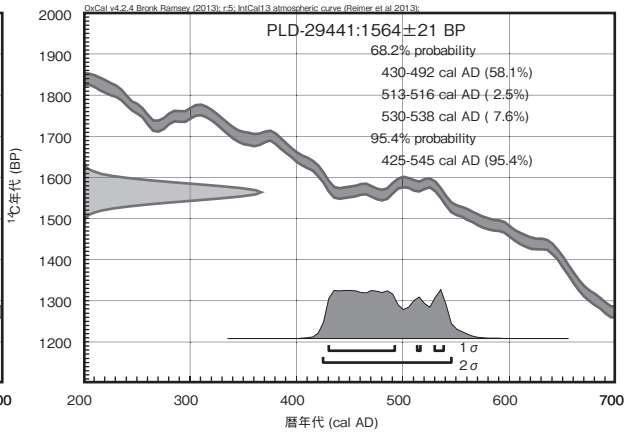
14 号住居跡の試料 No.7（PLD － 29446）は 402 － 475 cal AD（47.4%）および 484 － 536 cal AD（48.0%）、試料 No.5（PLD － 29444）は 401 － 475 cal AD（47.9%）および 484 － 536 cal AD（47.5%）で、5 世紀初頭～ 6 世紀前半の暦年代を示した。また、試料 No.6（PLD － 29445）は 350



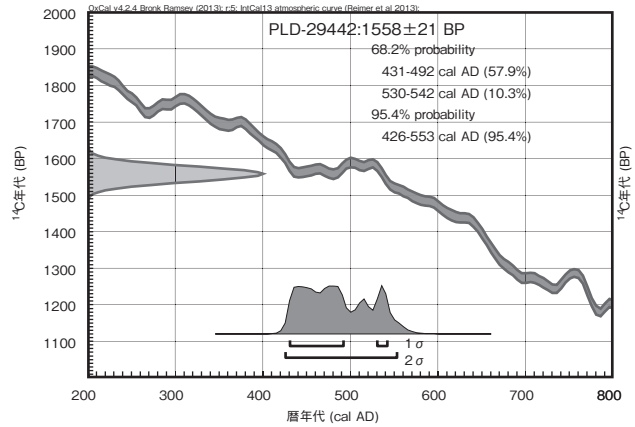
第 180 図　分析結果（マルチプロット図）



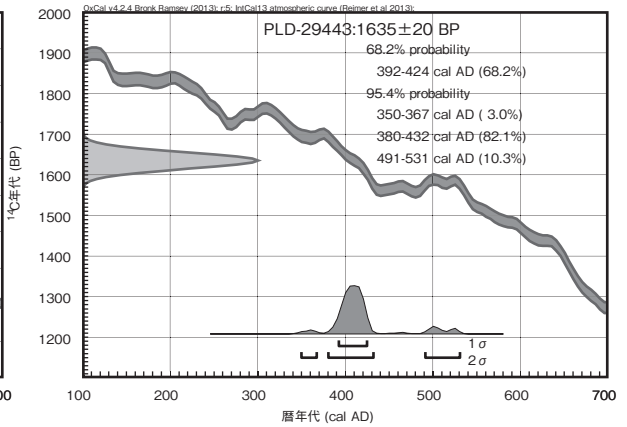
試料 No.1：3 号住居跡出土　炭 1



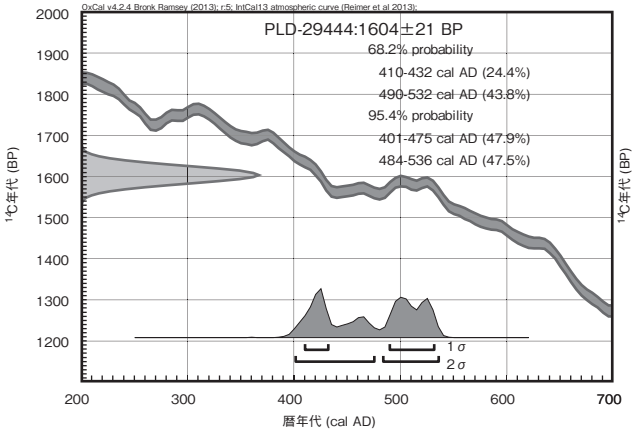
試料 No.2：3 号住居跡出土炭化物　炭 2



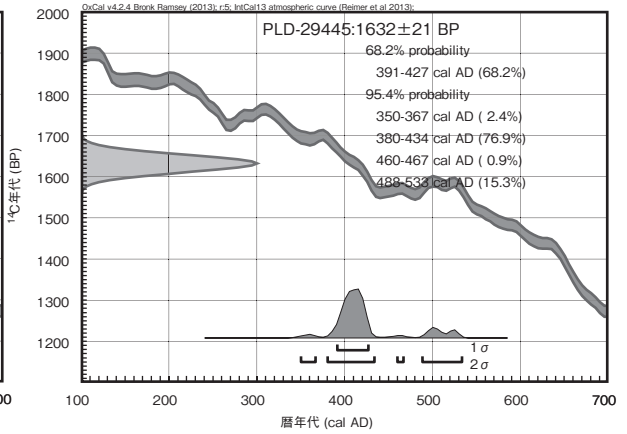
試料 No.3：3 号住居跡出土　炭 3



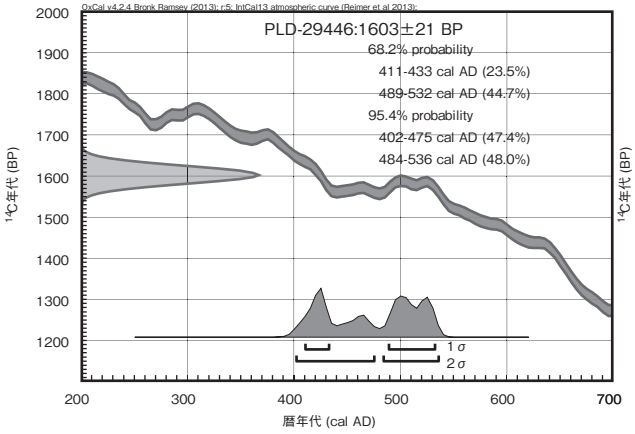
試料 No.4：3 号住居跡出土　炭 4



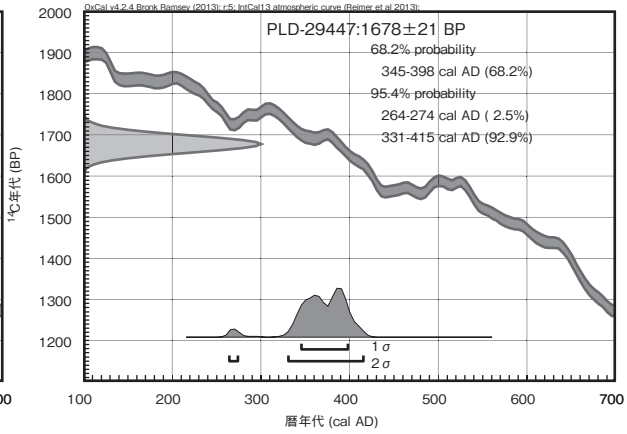
試料 No.5：14 号住居跡出土　炭（南側）



試料 No.6：3 号住居跡出土　炭（北側）



試料 No.7：14 号住居跡出土　炭（東側）

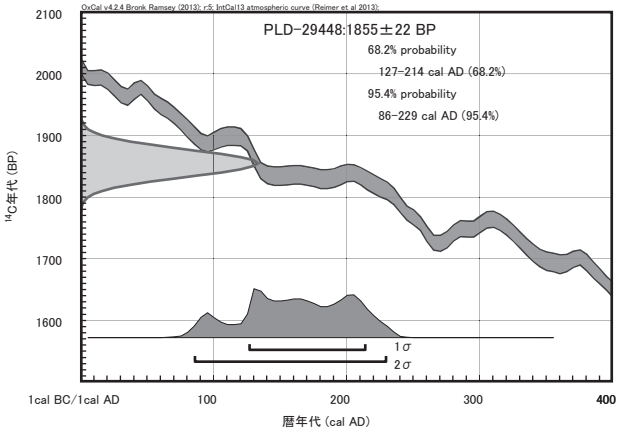


試料 No.8：39 号住居跡出土　炭

第 181 図　暦年代較正結果その①

－ 367 cal AD（2.4%）、380 － 434 cal AD（76.9%）、460 － 467 cal AD（0.9%）、488 － 533 cal AD（15.3%）で、4 世紀中頃～ 6 世紀前半の暦年代を示した。いずれも、古墳時代中期～後期に相当する。

39 号住居跡の試料 No.8（PLD － 29447）は 264 － 274 cal AD（2.5%）および 331 － 415 cal AD（92.9%）で、3 世紀後半および 4 世紀前半～ 5 世紀前半の暦年代を示した。これは、古墳時代前期～中期に相当する。



試料No.9　1号土坑出土　炭

第 182 図　暦年代較正結果その②

1 号土坑の試料 No.9（PLD － 29448）は 86 － 229 cal AD（95.4%）で、1 世紀後半～ 3 世紀前半の暦年代を示した。これは、弥生時代後期に相当する。

今回の試料は、いずれも最終形成年輪を測定できていない。木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料はいずれも古木効果の影響を受けていると考えられ、実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりも新しい年代であると考えられる。

【参考文献】

Bronk Ramsey, C.（2009）Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51（1）, 337 － 360.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の 14C 年代編集委員会編「日本先史時代の 14C 年代」: 3 － 20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.（2013）IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55（4）, 1869 － 1887.

2　放射性年代測定結果の評価

小澤佳憲・小林啓

（1）はじめに

塔田琵琶田遺跡第４次調査出土炭化物の放射性炭素年代測定にあたっては、測定により得られた炭素年代を遺構の評価に生かすために、その資料がいかにして遺跡中に埋没するに至ったかを検討しておくことが重要であると考えられる。このため、個々の資料の樹種を同定し、材の本来の用途を推測する手がかりとし、それが埋没に至るまでのあいだ遺跡の中でどのように用いられたのかを検討することとした。検討にあたっては、まず小澤が炭化物の出土状況や採取した炭化物の観察から材の形状を調査し、次いで小林が樹種同定を行って、双方の検討結果をつきあわせて材の性格を検討することとした。

（2）分析手法

取り上げ　炭化材の形状については、出土時の観察が重要になる。発掘調査時の出土炭化材の取り扱いに際しては、まずそれがどの程度の長さであるか、また断面形状はどうなっているかに注意し、材の形状を①丸材、②角材、③板材、④その他細材等に分類した。その上で、残りのよい部分をできるだけ原形をとどめる形で取り上げた。取り上げたあとは乾燥させ、付着した泥等を除去し、炭素年代測定用資料と樹種同定試料をできるだけ近接した箇所より採取した。

同定　炭化材の樹種同定は以下の手順で行なった。まず、目視及び実体顕微鏡により炭化材の木取りを観察して３断面（木口・柾目・板目）の位置を特定した。その後、３断面をメス等により平滑な面を割り出し、木材組織の観察箇所を調整した。

木材組織の観察には、超深度マルチアングル観察システム（KEYEVCE VHX-D500）及び走査型電子顕微鏡（日本電子 JSM-6010PLUS/LA）を使用した。観察は資料に応じて約 50 ～ 2000 倍の元で行ない、同定根拠となる組織構造や解剖学的形質について確認を行なった。観察結果は参考資料等と比較して樹種を同定した。

同定結果を第５表に示す。

（3）炭化材の評価

３号住居跡出土炭化材　３号住居跡出土炭化材のうち炭１～３は、直径 5cm以上の丸材であった。炭化前の木材の直径はおそらく 10cm内外以上はあったものとみられる。これらはいずれもクスノキ科のシロモジ節と同定された。シロモジは落葉低木～小高木で、高さ５～ 6m、幹の直径は 15cm に達し、材は比較的強く折れにくいとされる。本州西部から九州に生息し、半日陰の環境を

資料No.	調査区	出土遺構名	採取時注記	遺構の時期	材の形状	樹種同定結果
1	Ⅰ区	３号住居跡	炭１	６世紀初頭	丸材	シロモジ節（クスノキ科）
2	Ⅰ区	３号住居跡	炭２	６世紀初頭	丸材	シロモジ節（クスノキ科）
3	Ⅰ区	３号住居跡	炭３	６世紀初頭	丸材	シロモジ節（クスノキ科）
4	Ⅰ区	３号住居跡	炭４	６世紀初頭	板材か	同定不能
5	Ⅰ区	14 号住居跡	炭　北側	５世紀後葉	丸材	ヤマビワ（アワブキ科）
6	Ⅰ区	14 号住居跡	炭　南側	５世紀後葉	板材か	ハマビワ（クスノキ科）
7	Ⅰ区	14 号住居跡	炭　東側	５世紀後葉	丸材	シイ属（ブナ科）
8	Ⅰ区	39 号住居跡	炭	８世紀代か	板材か	アワブキ（アワブキ科）
9	Ⅰ区	１号土坑	炭	古墳時代前期前半	その他細材	シイ属（ブナ科）

第５表　樹種同定結果

好むといい、古墳時代においては遺跡周囲の雑木林の構成樹種の１つであった可能性が考えられる。あまり太くならず軟質だが、比較的強靱で折れにくいという性質から、古くは雑用材として用いられ、しばしば杖に加工されたという。しかし、直径15㎝であれば古墳時代の竪穴住居の主柱材としても十分利用は可能であろう。以上から、これらについては竪穴住居の主材として用いられた可能性を考えておきたい。

14号住居跡出土炭化材　14号住居跡出土炭化材は樹種がそれぞれ異なり、5はヤマビワ、6はハマビワ、7はシイ属と同定された。ヤマビワとハマビワはともにビワという名がつくが、葉がビワに似ているだけで属する科は異なる。ヤマビワはアワブキ科の常緑の小～中高木で高さ10m、直径30cmまでに生育するというが、比較的柔らかいようで建築部材には適さないとされる。一方ハマビワはクスノキ科の常緑小高木で、高さ７ｍほどであまり太くならないものが多いとされる。ともに耐陰性に強く雑木林の構成樹種としてしばしば群集を構成するとされ、遺跡周囲で採取することができる樹種であろう。シイ属は中高木で比較的堅いことでよく知られ、建築部材としてしばしば用いられる。板材として出土したハマビワは建築部材であれば周辺材であろうが、丸材として出土したヤマビワとシイ属は主材として利用された可能性が考えられる。ヤマビワについては軟質で建材には適さないとされるためやや難しい部分もあろう。

39号住居跡出土炭化材　39号住居跡から出土した炭化材はアワブキと同定された。アワブキは落葉小高木で樹高10ｍに達するが、幹はそれほど太くならないとされる。ヤマビワ同様周辺の雑木林の構成樹種と考えられる。材は割れやすく狂いが生じやすいことから建築部材としては不適とされる。板材であり、建築部材であれば周辺材、あるいは燃料などの利用方法が考えられる。出土時は比較的大きな材であり、建築材（周辺材）として評価してもよいのではないかと考えられる。

1号土坑出土炭化材　1号土坑出土の炭化材はシイ属と同定された。出土状況における材の形状が細枝状であることから、燃料などに用いられるはずのものが混入した可能性が考えられる。

（4）年代測定結果の評価

3号住居跡出土炭化材　3号住居跡出土のNo.1～3は、年代測定の結果いずれも5世紀前半～6世紀中葉とされた。これはあくまで分析試料に炭素が固定された年代を示し、材の部位（中心か周辺か）によって伐採時に近い年代が得られるかそれより古い年代が得られるかが変わるが、3点とも近い年代が得られたこと、炭化材の太さが直径5㎝程度であり樹齢数百年の古木ではないと考えられることから、伐採時期に近い年代が得られたと考えられよう。遺構の埋没時期は出土土器から見て6世紀初頭であり、試料No.1～3はいずれも伐採からそう離れていない時期に廃棄され、埋没したといえる。これらは材の形状から竪穴住居の主材として利用された可能性を指摘したが、やや軟質であり主材としてはあまり主たる樹種ではないともされる。したがって、竪穴住居の主材として利用されつつも長期間転用されることなく廃棄されたという分析結果と比較的整合するものと理解できよう。

14号住居跡出土炭化材　14号住居跡出土の炭化材5～7のうち、5はヤマビワで建材には不適、6は板材で建材であるとしても周辺材と考えられるのに対し、7はシイ属の丸材で、住居の主材として十分に評価できよう。これらの試料の炭素年代測定結果であるが、6が4世紀中葉～6世紀前葉で4世紀後葉～5世紀前葉に可能性のピークがあるとされたのに対し、5と7はほぼ同じで5世紀初頭～6世紀前葉という結果となった。6は4世紀後葉～5世紀前葉の可能性が80％程度を示し、この時期は集落が一度廃絶する直前にあたる。一方出土した14号住居は集落が断絶したのち再開

した時期に属することから、断絶前の集落から古材を引き継いで利用したと考えるよりは、断絶前の集落に由来する古材が付近に埋没しており、14号住居を埋め戻す際に周囲から古材が混入した可能性を考えたい。

一方、5と7はほぼ同じ時期の伐採で、かつ住居の埋没時期からそう離れていない過去に伐採されたことが判明した。このことから、これらは同じ使用目的のために同じ頃伐採され、使用後に同時に廃棄された可能性が考えられる。特に7は住居の主材として評価しうることから、樹種は異なるが、特定の住居の建築のために伐採され、使用されたものとみたい。5は特にやや軟質で建築主材としては不向きとされ、早い段階で廃棄されたことも首肯できる。7が転用されなかった理由は不明だが、主材はある程度セットで用いられ、廃棄された可能性も考えたい。

39号住居跡出土炭化材　39号住居跡出土炭化材は4世紀前半～5世紀初頭と測定された。住居跡の埋没時期は共伴土器から8世紀代と考えられ、かなりの開きがある。39号住居跡はSX－02谷状落ち込み遺構の埋没後にその上に建てられた住居であり、調査時にはやや床面を下げすぎている。このことから、下層のSX－02埋土中にあった炭化材を39号住居跡出土と誤認したか、あるいは住居の埋め戻し時にSX－02など周囲の古い遺構埋土に含まれていた炭化材が混入したかのいずれかと考えたい。

1号土坑出土炭化材　1号土坑出土の炭化材9については、1世紀後半～3世紀前半という測定結果が示された。形状が細枝状であり、伐採から大きく離れていない時期が得られた可能性が高い。1世紀後半～2世紀は較正曲線が不規則的に変化する時期にあたり、測定結果の幅が広くなってしまったが、おおよそ遺構の埋没時期である古墳時代前期前半と整合する測定結果となっていると評価できよう。

3　おわりに

以上、塔田琵琶田遺跡第4次調査の結果について報告してきた。4次調査Ⅰ・Ⅱ区は遺跡の中でも特に遺構分布密度が高い地点であり、またこれまでほとんど確認されていなかった古代の遺構がまとまって出土するなど、古墳時代前期～古代までの長期間の遺構が著しく重複する状況であった。このため、調査は難航し、各所で掘り間違えや遺構の部分的な破壊などを生じさせてしまった。担当者として忸怩たる思いである。

しかし、こうした中で得られた成果は極めて貴重である。L字状カマドの確認数は国内でもトップクラスであり、また古代前半期の隅カマドを持つ竪穴住居跡がまとまって検出された例も付近では少なく貴重な調査成果を示すことができた。出土遺物においても、鉄器の出土量は付近の同時期の集落の中では群を抜いた多さで、また滑石製玉類等の製作痕跡を示す未製品の出土からは、滑石製玉類製作技術の復元も十分可能である。

今回の調査で得られた貴重かつ多様な成果について、本来であればここにおいてしっかりとした考察を行うべきであろう。しかし、塔田琵琶田遺跡の調査成果についてはまだ3･5･6次調査の報告を残しているし、同じ集落の一部と考えられる西ノ原遺跡第5次D区、時末遺跡第1･2次調査区もある。集落の全体像を評価するにはこれらの調査成果の報告を含めて分析する必要があることは言うまでもない。そこで本冊では、4次調査に関連するごく一部の調査成果に焦点をあてて分析を行うにとどめた。調査担当者として、一連の調査成果を分析し、遺跡を地域史の中に位置づけ、評価を行う責を有することは十分に承知しており、これについては本シリーズ第27集にあたる『塔田琵琶田遺跡第6次』のなかで果たしていくこととしたい。

調査区	番号	カマド・炉跡	主軸方位（カマドがある場合はカマドを主軸とする）	規模 長さ（長軸）	規模 幅（短軸）	時期	備考
Ⅰ区	1号住居跡	カマドか（南壁）	南―北	(4.0m)	(3.2m)	6世紀代	
Ⅰ区	2号住居跡	L字状カマドか（南壁）	南―北	(4.0m)	(3.4m)	6世紀中葉	
Ⅰ区	3号住居跡	カマドか（東壁）	東―西？	3.34m	2.6m+	6世紀初頭	
Ⅰ区	4号住居跡		北―南？	4.36m	4.04m	後期か	
Ⅰ区	5号住居跡	カマド（西壁）	西―東	5.22m	3.9m+	6世紀前葉	
Ⅰ区	6号住居跡	カマド（南壁）	南西―北東	3.86m	3.32m	7世紀中葉	
Ⅰ区	7号住居跡	カマド（西壁）	北西―南東	3.40m	3.42m	7世紀後葉	
Ⅰ区	8号住居跡			3.48m	3.02m	6世紀中葉	
Ⅰ区	9号住居跡	カマド（南壁）	南―北	3.32m	2.6m+	6世紀後葉	
Ⅰ区	10号住居跡	隅カマドか（南西角）	南西―北東	3.00m	2.04m	7世紀後葉か	
Ⅰ区	11号住居跡	カマドか（北壁）	北―南？	2.2m+	2.48m	7世紀前葉	
Ⅰ区	12号住居跡	カマド（北壁）	北東―南西	4.42m	4.22m	6世紀後葉	
Ⅰ区	13号住居跡	L字状カマド（西壁）	西北西―東南東	5.48m	5.28m	5世紀後葉	
Ⅰ区	14号住居跡	L字状カマド（西壁）	西北西―東南東	3.96m	(4.0m)	5世紀後葉	
Ⅰ区	15号住居跡	L字状カマド（西壁）	西―東	(7.8m)	7.44m	6世紀前葉	
Ⅰ区	16号住居跡	カマドか（東壁）	北東―南西	3.76m	3.74m	6世紀後葉か	
Ⅰ区	17号住居跡		北東―南西	5.10m	5.30m	6世紀中葉	
Ⅰ区	18号住居跡	隅カマド（北東角）	北東―南西	2.70m	2.08m	9世紀代	
Ⅰ区	19号住居跡	カマド（北壁）	北東―南西	2.68m	3.48m	8世紀後葉	カマドの東側に土器埋納
Ⅰ区	20号住居跡		北東―南西	2.90m	1.6m+	6世紀前葉	
Ⅰ区	21号住居跡	カマド（北壁）	北―南	4.52m	(4.5m)	6世紀中葉	
Ⅰ区	22号住居跡	隅カマド（南西壁）	北西―南東	3.32m	2.14m	8世紀代	
Ⅰ区	23号住居跡	隅カマドか（南西角）	北西―南東	2.56m	1.56m	7世紀後葉～8世紀代	
Ⅰ区	24号住居跡	隅カマドか（南西角）	北西―南東	2.68m	2.46m	7世紀後葉	
Ⅰ区	25号住居跡	カマドか（北壁）	北北東―南南西	3.76m	3.64m	7世紀後葉以前	
Ⅰ区	26号住居跡	隅カマド（北西角）	北西―南東	3.36m	3.20m	7世紀中葉	
Ⅰ区	27号住居跡		北東―南西	3.06m	3.02m	7世紀前葉か	
Ⅰ区	28号住居跡		北東―南西	4.84m	4.28m	6世紀中葉以前	
Ⅰ区	29号住居跡		北北東―南南西	2.7m+	1.0m+	6世紀前葉以前	
Ⅰ区	30号住居跡	隅カマドか（北東角）	北東―南西	3.32m	4.02m	7世紀前葉か	
Ⅰ区	31号住居跡		北北東―南南西	4.20m	4.06m	5世紀後葉	
Ⅰ区	32号住居跡		北―南	3.80m	3.6m	5世紀後葉以前	
Ⅰ区	33号住居跡			2.3m+	1.0m+	6世紀初頭	遺構の大半が調査区外で全形不明
Ⅰ区	34号住居跡	隅カマド（北西角）	北西―南東	3.02m	3.04m	7世紀前葉	
Ⅰ区	35号住居跡	カマド（東壁）	北西―南東	2.58m	3.02m	7世紀中葉	
Ⅰ区	36号住居跡	隅カマド（北西壁）	北西―南東	3.40m	3.42m	8世紀前葉	
Ⅰ区	37号住居跡	L字状カマド（西壁）	西北西－東南東	6.44m	6.0m	5世紀後葉	
Ⅰ区	38号住居跡	L字状カマド（西壁）	西北西－東南東	4.32m	1.2m+	5世紀後葉	
Ⅰ区	39号住居跡	隅カマド（南西角）	東―西	2.74m	2.92m	8世紀代か	
Ⅰ区	40号住居跡			5.00m	1.9m+	前期後半か	遺構の大半が調査区外で全形不明
Ⅰ区	41号住居跡	L字状カマド（北壁）	北西―南東	5.54m	6.00m	6世紀後葉	
Ⅰ区	42号住居跡		西北西－東南東	4.74m	(4.6m)	6世紀中葉～後葉	ベッド状遺構
Ⅰ区	43号住居跡	隅カマド（北東角）	北西―南東	3.40m	2.62m	7世紀中葉	
Ⅰ区	44号住居跡		北西―南東	6.68m	5.64m	7世紀前葉	
Ⅰ区	45号住居跡	カマド（北壁）	北西―南東	4.08m	3.50m	7世紀中葉	
Ⅰ区	46号住居跡	カマド（南壁）	南西―北東	3.48m	3.40m	6世紀後葉	
Ⅰ区	47号住居跡	L字状カマド（北壁）	北北東―南南西	3.08m	(3.1m)	6世紀中葉	
Ⅰ区	48号住居跡	カマド（南東壁）	南西―北東	3.02m	2.76m	5世紀後葉	
Ⅰ区	49号住居跡		北北東―南南西	3.24m	3.50m	8世紀代か	
Ⅰ区	50A号住居跡	カマド（北壁）	北西―南東	(4.0m)	4.34m	7世紀後葉	
Ⅰ区	50B号住居跡		北西―南東	(4.1m)	4.24m	6世紀後葉	
Ⅰ区	51号住居跡		北東―南西	3.58m	2.36m	9世紀代	
Ⅰ区	52号住居跡		北東―南西	5.28m	5.22m	6世紀中葉	
Ⅰ区	53号住居跡		北東―南西	(4.0m)	(3.4m)	5世紀後葉	
Ⅰ区	54号住居跡		東―西	4.42m	3.56m	5世紀前葉	ベッド状遺構
Ⅰ区	55号住居跡	カマド（北壁）	北―南	2.40m	2.80m	8世紀代	
Ⅰ区	56号住居跡	L字状カマド（西壁）	西北西－東南東	5.26m	5.30m	7世紀前葉	
Ⅰ区	57号住居跡		北北西―南南東	6.04m	6.10	6世紀代	
Ⅰ区	58号住居跡			0.85m+	1.30m+	不明	遺構の大半が調査区外で全形不明
Ⅰ区	59号住居跡			1.8m+	1.2m+	不明	遺構の大半が調査区外で全形不明
Ⅰ区	60号住居跡		北東―南西	7.02m	6.96m	5世紀後葉	
Ⅰ区	61号住居跡	隅カマド（北西角）	東北東―西南西	3.22m	3.18m	6世紀中葉	
Ⅰ区	62号住居跡	カマド（西壁）	北西―南東	4.02m	5.34m	8世紀	中央部に土器埋納
Ⅰ区	63号住居跡		北東―南西	4.26m	(3.5m)	前期後半	
Ⅰ区	64号住居跡	L字状カマド（西壁）	北西―南東	3.3m+	4.42m	7世紀中葉	
Ⅰ区	65号住居跡	カマドか（西壁）	北西―南東	5.26m	5.46m	6世紀中葉	
Ⅰ区	66号住居跡			3.38m	1.2m+	6世紀前葉以降	遺構の大半が調査区外で全形不明
Ⅰ区	67号住居跡		北北東―南南西	(4.2m)	4.80m	6世紀前葉以降	
Ⅰ区	68号住居跡		北西―南東	4.26m	3.1m+	前期か	ベッド状遺構
Ⅰ区	69号住居跡		北西―南東	(4.9m)	3.76m	7世紀前葉か	
Ⅰ区	70号住居跡	L字状カマド（北壁）	北西―南東	4.0m+	3.76m	6世紀前葉以前	上層遺構に破壊され全容不明
Ⅰ区	71号住居跡			2.8m+	1.4m+	6世紀中葉以前	
Ⅰ区	72号住居跡		北西―南東	2.84m	2.3m+	6世紀中葉以前	

第6表　調査区出土竪穴住居跡一覧その①

調査区	番号	カマド・炉跡	主軸方位（カマドがある場合はカマドを主軸とする）	規模 長さ（長軸）	規模 幅（短軸）	時期	備考
Ⅰ区	73 号住居跡	隅カマドか (北西角)	北北西―南南東	2.50m	3.0m	7 世紀代か	
Ⅰ区	74 号住居跡		北西―南東	2.82m	3.62m	7 世紀前葉	
Ⅰ区	75 号住居跡	L 字状カマド (西壁)	西北西－東南東	6.94m	6.86m	6 世紀後葉	
Ⅰ区	76 号住居跡	隅カマド (北西壁)	北東―南西	3.40m	3.12m	6 世紀中葉	
Ⅰ区	77 号住居跡	カマドか (西壁)	北西―南東	4.14m	4.22m	7 世紀前葉以降	
Ⅰ区	78 号住居跡	L 字状カマド (西壁)	西北西－東南東	6.46m	6.38m	6 世紀前葉	
Ⅰ区	79 号住居跡		北東―南西	3.74m	3.4m+	6 世紀前葉か	上層遺構に破壊され全容不明
Ⅰ区	80 号住居跡	カマドか (西壁)	北西―南東	(5.0m)	(5.2m)	6 世紀前葉か	
Ⅰ区	81 号住居跡	隅カマド (北西壁)	北東―南西	3.26m	2.72m	8 世紀代	
Ⅰ区	82 号住居跡		北東―南西	3.60m	3.78m	7 世紀前葉	
Ⅰ区	83 号住居跡	カマドか (東壁)	東北東―西南西	2.54m	2.48m	5 世紀前葉以降	
Ⅰ区	84 号住居跡	炉跡か (中央)	北北東―南南西	3.22m	1.8m+	5 世紀前葉以降	上層遺構に破壊され全容不明
Ⅰ区	85 号住居跡		北東―南西	4.50m	4.78m	7 世紀前葉以前	
Ⅰ区	86 号住居跡	L 字状カマドか (西壁)	北西―南東	3.66m	4.28m	7 世紀前葉	
Ⅰ区	87 号住居跡	カマド (西壁)	西北西－東南東	3.92m	4.22m	6 世紀後葉	
Ⅰ区	88 号住居跡	カマド (北壁)	北東―南西	2.88m	2.72m	8 世紀代か	
Ⅰ区	89 号住居跡	カマド (北壁)	北北東―南南西	4.52m	4.96m	6 世紀後葉	
Ⅰ区	90 号住居跡		北東―南西	4.10m	4.06m	7 世紀前葉	
Ⅰ区	91 号住居跡	カマド (東壁)	北東―南西	3.60m	3.24m	7 世紀前葉	
Ⅰ区	92 号住居跡	カマドか (西壁)	北西―南東	6.78m	6.24m	7 世紀前葉	
Ⅰ区	93 号住居跡	カマド (北壁)	東南東―西北西	(6.5m)	5.72m	6 世紀後葉	
Ⅰ区	94 号住居跡	カマドか (北壁)	北東―南西	4.32m	4.20m	6 世紀後葉	
Ⅰ区	95 号住居跡	カマドか (北壁)	北―南？	(5.2m)	(4.4m)	7 世紀前葉	
Ⅰ区	96 号住居跡		北―南？	2.56m	2.42m	7 世紀前葉以前	
Ⅰ区	97 号住居跡	カマドか (北壁)	西北西－東南東	2.72m	2.86m	6 世紀後葉以前	
Ⅰ区	98 号住居跡		北東―南西	3.72m	3.04m	7 世紀前葉以前	
Ⅰ区	99 号住居跡			2.5m+	1.1m+	7 世紀前葉以前	削平で大きく損なわれる
Ⅰ区	100 号住居跡			3.82m	0.3m+	前期以前	上層遺構に破壊され全容不明
Ⅰ区	101 号住居跡		北東―南西	5.58m	3.34m	前期か	ベッド状遺構
Ⅰ区	102 号住居跡		東―西	3.06m	2.48m	6 世紀後葉	
Ⅰ区	103 号住居跡	カマド (西壁)	東―西	3.88m	4.18m	6 世紀中葉	
Ⅰ区	104 号住居跡		北―南	3.98m	3.82m	前期後半	
Ⅲ区	105 号住居跡		北東―南西	2.0m+	1.4m+	前期後半	遺構の大半が調査区外で全容不明
Ⅲ区	106 号住居跡	炉跡か (中央)	東北東―西南西	3.84m	(4.6m)	前期後半	ベッド状遺構
Ⅲ区	107 号住居跡	カマド (北壁)	北東―南西	3.76m	3.42m	6 世紀中葉	
Ⅲ区	108 号住居跡	L 字状カマド (西壁)	北東―南西	6.16m	5.76m	6 世紀後葉	
Ⅲ区	109 号住居跡	カマド (北壁)	北北東―南南西	2.56m	2.90m	7 世紀前葉	
Ⅲ区	110 号住居跡		北北東―南南西	3.78m	3.80m	前期か	
Ⅲ区	111 号住居跡	L 字状カマド (西壁)	東北東―西南西	2.84m	3.17m	6 世紀初頭	
Ⅲ区	112 号住居跡	欠番					
Ⅲ区	113 号住居跡	L 字状カマド (北壁)	北北東―南南西	3.20m	(3.2m)	6 世紀初頭	
Ⅲ区	114 号住居跡		北東―南西	5.1m+	3.2m+	5 世紀後葉	上層遺構に破壊され全容不明
Ⅲ区	115 号住居跡		北―南	3.4m+	3.9m+	前期後半	遺構の大半が調査区外で全容不明
Ⅲ区	116 号住居跡		北―南	4.1m+	4.2m+	前期か	上層遺構に破壊され全容不明
Ⅲ区	117 号住居跡		北東―南西	3.39m	3.2m+	前期か	上層遺構に破壊され全容不明
Ⅲ区	118 号住居跡		東北東―西南西	4.31m	3.90m	前期か	
Ⅲ区	119 号住居跡		北東―南西	(5.0m)	5.36m	前期か	
Ⅲ区	120 号住居跡	欠番					
Ⅲ区	121 号住居跡		北東―南西	3.74m	1.9m+	前期か	遺構の大半が調査区外で全容不明
Ⅲ区	122 号住居跡		北西―南東	2.84m	2.9m	前期後半	
Ⅲ区	123 号住居跡	L 字状カマド (西壁)	東北東―西南西	5.20m	(4.5m)	5 世紀後葉	
Ⅲ区	124 号住居跡	炉跡か (中央)	北北西―南南東	5.88m	6.38m	前期後半	ベッド状遺構
Ⅲ区	125 号住居跡		南西―北東	4.43m	3.60m	前期後半	
Ⅲ区	126 号住居跡		北北東―南南西	2.8m+	1.5m+	前期後半	遺構の大半が調査区外で全形不明
Ⅲ区	127 号住居跡		北東―南西	4.10m	1.1m+	前期後半	遺構の大半が調査区外で全形不明
Ⅲ区	128 号住居跡		北東―南西	2.9m+	1.1m+	前期後半以前	遺構の大半が調査区外で全形不明
Ⅲ区	129 号住居跡		北西―南東	3.80m	1.9m+	前期後半	遺構の大半が調査区外で全形不明
Ⅲ区	130 号住居跡		北東―南西	5.60m	6.00m	前期後半	ベッド状遺構
Ⅲ区	131 号住居跡	カマドか (北壁)	北―南	3.63m	3.99m	6 世紀初頭	
Ⅲ区	132 号住居跡	L 字状カマド (西壁)	北東―南西	4.78m	4.80m	6 世紀前葉	
Ⅱ区	133 号住居跡		北東―南西	2.3m+	0.8m+	前期後半か	遺構の大半が調査区外で全形不明
Ⅱ区	134 号住居跡		北東―南西	4.04m	2.9m+	前期後半	遺構の大半が調査区外で全形不明
Ⅱ区	135 号住居跡	L 字状カマドか (東壁)	東南東―西北西	3.90m	0.8m+	前期後半	
Ⅱ区	136 号住居跡	L 字状カマドか (北壁)	北北西―南南東	1.3m+	(2.5m)	5 世紀後葉～ 7 世紀前葉か	遺構の大半が調査区外で全形不明
Ⅱ区	137 号住居跡	L 字状カマドか (西壁)	北西―南東	.7m+	0.6m+	5 世紀後葉～ 7 世紀前葉か	遺構の大半が調査区外で全形不明
Ⅱ区	138 号住居跡		北北西―南南東	4.40m	4.18m	前期前半か	ベッド状遺構
Ⅱ区	139 号住居跡		北西―南東	3.7m+	5.20m	前期後半以前	
Ⅱ区	140 号住居跡	炉跡か (中央)	東北東―西南西	4.50m	4.98m	前期	ベッド状遺構
Ⅱ区	141 号住居跡			1.7m+	4.52m	前期以前	撹乱等で大きく損なわれる
Ⅱ区	142 号住居跡		北西―南東	3.4m+	4.30m	前期後半	
Ⅱ区	143 号住居跡		北東―南西	1.1m+	2.96m	前期か	
Ⅱ区	144 号住居跡		北北東―南南西	2.54m	1.5m+	6 世紀初頭以降	
Ⅱ区	145 号住居跡		北北東―南南西	6.10m	6.7m	前期後半以前	切り合いにより大きく損なわれる

第７表　調査区出土竪穴住居跡一覧その②

調査区	番号	カマド・炉跡	主軸方位（カマドがある場合はカマドを主軸とする）	規模		時期	備考
				長さ（長軸）	幅（短軸）		
Ⅰ区	73 号住居跡	隅カマドか（北西角）	北北西―南南東	2.50m	3.00m	7 世紀代か	
Ⅰ区	74 号住居跡		北西―南東	2.82m	3.62m	7 世紀前葉	
Ⅰ区	75 号住居跡	L 字状カマド（西壁）	西北西－東南東	6.94m	6.86m	6 世紀後葉	
Ⅰ区	76 号住居跡	カマド（北壁）	北東―南西	3.40m	3.12m	6 世紀中葉	
Ⅰ区	77 号住居跡	カマドか（西壁）	北西―南東	4.14m	4.22m	7 世紀前葉以降	
Ⅰ区	78 号住居跡	L 字状カマド（西壁）	西北西－東南東	6.46m	6.38m	6 世紀前葉	
Ⅰ区	79 号住居跡		北東―南西	3.74m	3.4m+	6 世紀前葉か	上層遺構に破壊され全容不明
Ⅰ区	80 号住居跡	カマドか（西壁）	北西―南東	(5.0m)	(5.2m)	6 世紀前葉か	
Ⅰ区	81 号住居跡	カマド（北壁）	北東―南西	3.26m	2.72m	8 世紀代	
Ⅰ区	82 号住居跡		北東―南西	3.60m	3.78m	7 世紀前葉	
Ⅰ区	83 号住居跡	カマドか（東壁）	東北東―西南西	2.54m	2.48m	5 世紀前葉以降	
Ⅰ区	84 号住居跡	炉跡か（中央）	北北東―南南西	3.22m	1.8m+	5 世紀前葉以降	上層遺構に破壊され全容不明
Ⅰ区	85 号住居跡		北東―南西	4.50m	4.78m	7 世紀前葉以前	
Ⅰ区	86 号住居跡	L 字状カマドか（西壁）	北西―南東	3.66m	4.28m	7 世紀前葉	
Ⅰ区	87 号住居跡	カマド（西壁）	西北西－東南東	3.92m	4.22m	6 世紀後葉	
Ⅰ区	88 号住居跡	カマド（北壁）	北東―南西	2.88m	2.72m	8 世紀代か	
Ⅰ区	89 号住居跡	カマド（北壁）	北北東―南南西	4.52m	4.96m	6 世紀後葉	
Ⅰ区	90 号住居跡		北東―南西	4.10m	4.06m	7 世紀前葉	
Ⅰ区	91 号住居跡	カマド（東壁）	北東―南西	3.60m	3.24m	7 世紀前葉～前葉	
Ⅰ区	92 号住居跡	カマドか（西壁）	北西―南東	6.78m	6.24m	7 世紀前葉	
Ⅰ区	93 号住居跡	カマド（北壁）	東南東―西北西	(6.5m)	5.72m	6 世紀後葉	
Ⅰ区	94 号住居跡	カマドか（北壁）	北東―南西	4.32m	4.20m	6 世紀後葉	
Ⅰ区	95 号住居跡	カマドか（北壁）	北―南？	(5.2m)	(4.4m)	7 世紀前葉	
Ⅰ区	96 号住居跡		北―南？	2.56m	2.42m	7 世紀前葉以前	
Ⅰ区	97 号住居跡	カマドか（北壁）	西北西－東南東	2.72m	2.86m	6 世紀後葉以前	
Ⅰ区	98 号住居跡		北東―南西	3.72m	3.04m	7 世紀前葉以前	
Ⅰ区	99 号住居跡			2.5m+	1.1m+	7 世紀前葉以前	削平で大きく損なわれる
Ⅰ区	100 号住居跡			3.82m	0.3m+	前期以前	上層遺構に破壊され全容不明
Ⅰ区	101 号住居跡		北東―南西	5.58m	3.34m	前期か	ベッド状遺構
Ⅰ区	102 号住居跡		東―西	3.06m	2.48m	6 世紀後葉	
Ⅰ区	103 号住居跡	カマド（西壁）	東―西	3.88m	4.18m	6 世紀中葉	
Ⅰ区	104 号住居跡		北―南	3.98m	3.82m	前期後半	
Ⅱ区	105 号住居跡		北東―南西	2.0m+	1.4m+	前期後葉	遺構の大半が調査区外で全容不明
Ⅱ区	106 号住居跡	炉跡か（中央）	東北東―西南西	3.84m	(4.6m)	前期後葉	ベッド状遺構
Ⅱ区	107 号住居跡	カマド（北壁）	北東―南西	3.76m	3.42m	6 世紀中葉	
Ⅱ区	108 号住居跡	L 字状カマド（西壁）	北東―南西	6.16m	5.76m	6 世紀後葉	
Ⅱ区	109 号住居跡	カマド（北壁）	北北東―南南西	2.56m	2.90m	7 世紀前葉	
Ⅱ区	110 号住居跡		北北東―南南西	3.78m	3.80m	前期か	
Ⅱ区	111 号住居跡	L 字状カマド（西壁）	東北東―西南西	2.84m	3.17m	6 世紀初頭	
Ⅱ区	112 号住居跡	欠番					
Ⅱ区	113 号住居跡	L 字状カマド（北壁）	北北東―南南西	3.20m	(3.2m)	6 世紀初頭	
Ⅱ区	114 号住居跡		北東―南西	5.1m+	3.2m+	5 世紀後葉	上層遺構に破壊され全容不明
Ⅱ区	115 号住居跡		北―南	3.4m+	3.9m+	前期後半	遺構の大半が調査区外で全容不明
Ⅱ区	116 号住居跡		北―南	4.1m+	4.2m+	前期か	上層遺構に破壊され全容不明
Ⅱ区	117 号住居跡		北東―南西	3.39m	3.2m+	前期か	上層遺構に破壊され全容不明
Ⅱ区	118 号住居跡		東北東―西南西	4.31m	3.90m	前期か	
Ⅱ区	119 号住居跡		北東―南西	(5.0m)	5.36m	前期か	
Ⅱ区	120 号住居跡	欠番					
Ⅱ区	121 号住居跡		北東―南西	3.74m	1.9m+	前期か	遺構の大半が調査区外で全容不明
Ⅱ区	122 号住居跡		北西―南東	2.84m	2.9m	前期後半	
Ⅱ区	123 号住居跡	L 字状カマド（西壁）	東北東―西南西	5.20m	(4.5m)	5 世紀後葉	
Ⅱ区	124 号住居跡	炉跡か（中央）	北北西―南南東	5.88m	6.38m	前期後半	ベッド状遺構
Ⅱ区	125 号住居跡		南西―北東	4.43m	3.60m	前期後半	
Ⅱ区	126 号住居跡		北北東―南南西	2.8m+	1.5m+	前期後半	遺構の大半が調査区外で全形不明
Ⅱ区	127 号住居跡		北東―南西	4.10m	1.1m+	前期後半	遺構の大半が調査区外で全形不明
Ⅱ区	128 号住居跡		北東―南西	2.9m+	1.1m+	前期後半以前	遺構の大半が調査区外で全形不明
Ⅱ区	129 号住居跡		北西―南東	3.80m	1.9m+	前期後半	遺構の大半が調査区外で全形不明
Ⅱ区	130 号住居跡		北東―南西	5.60m	6.00m	前期後半	ベッド状遺構
Ⅱ区	131 号住居跡	カマドか（北壁）	北―南	3.63m	3.99m	6 世紀初頭	
Ⅱ区	132 号住居跡	L 字状カマド（西壁）	北東―南西	4.78m	4.80m	6 世紀前葉	
Ⅱ区	133 号住居跡		北東―南西	2.3m+	0.8m+	前期後半か	遺構の大半が調査区外で全形不明
Ⅱ区	134 号住居跡		北東―南西	4.04m	2.9m+	前期後葉	遺構の大半が調査区外で全形不明
Ⅱ区	135 号住居跡	L 字状カマドか（東壁）	東南東―西北西	3.90m	0.8m+	前期後葉	
Ⅱ区	136 号住居跡	L 字状カマドか（北壁）	北北西―南南東	1.3m+	(2.5m)	5 世紀後葉～ 7 世紀前葉か	遺構の大半が調査区外で全形不明
Ⅱ区	137 号住居跡	L 字状カマドか（西壁）	北西―南東	.7m+	0.6m+	5 世紀後葉～ 7 世紀前葉か	遺構の大半が調査区外で全形不明
Ⅱ区	138 号住居跡		北北西―南南東	4.40m	4.18m	前期前半か	ベッド状遺構
Ⅱ区	139 号住居跡		北西―南東	3.7m+	5.20m	前期後半以前	
Ⅱ区	140 号住居跡	炉跡か（中央）	東北東―西南西	4.50m	4.98m	前期	ベッド状遺構
Ⅱ区	141 号住居跡			1.7m+	4.52m	前期以前	撹乱等で大きく損なわれる
Ⅱ区	142 号住居跡		北西―南東	3.4m+	4.30m	前期後半	
Ⅱ区	143 号住居跡		北東―南西	1.1m+	2.96m	前期か	
Ⅱ区	144 号住居跡		北北東―南南西	2.54m	1.5m+	6 世紀初頭以降	
Ⅱ区	145 号住居跡		北北東―南南西	6.10m	6.7m	前期後半以前	切り合いにより大きく損なわれる

第 8 表　調査区出土竪穴住居跡一覧その③

調査区	出土遺構	挿図番号	図番号	遺物種類	遺物番号	遺存率	遺存長さ（cm）	長さ（cm）	直径（cm）	重さ（g）	備考
Ⅰ区	5号住居跡	117図	1	棒状土錘	Ⅰ－722	0.4	3.1		1.45		
Ⅰ区	7号住居跡	117図	2	棒状土錘	Ⅰ－711	1	6.5	6.5	1.75	21.32	
Ⅰ区	7号住居跡	117図	3	棒状土錘	Ⅰ－713	1	6.3	6.3	1.75	21.57	片端部に抉り
Ⅰ区	7号住居跡	117図	4	棒状土錘	Ⅰ－712	1	7.2	7.2	1.55	22.2	
Ⅰ区	7号住居跡	117図	5	棒状土錘	Ⅰ－710	1	6.6	6.6	1.85	22.31	片端部に抉り
Ⅰ区	18号住居跡	117図	6	棒状土錘	Ⅰ－714	0.6	5.1		1.85		
Ⅰ区	27号住居跡	117図	7	棒状土錘	Ⅰ－725	0.5	4.45		1.4		片端部に1小穴
Ⅰ区	34号住居跡	117図	8	棒状土錘	Ⅰ－717	0.4	3.5		1.35		
Ⅰ区	90号住居跡	117図	9	棒状土錘	Ⅰ－732	0.9	5.7		1.85		全長は遺存
Ⅰ区	50号住居跡	117図	10	棒状土錘	Ⅰ－726	1	7.3	7.3	1.75	27.5	
Ⅰ区	64号住居跡	117図	11	棒状土錘	Ⅰ－720	1	6.65	6.7	1.75	22.64	
Ⅰ区	50号住居跡	117図	12	棒状土錘	Ⅰ－728	1	6.8	6.8	1.75	22.31	
Ⅰ区	50号住居跡	117図	13	棒状土錘	Ⅰ－727	0.6	4.7		1.75		
Ⅰ区	50号住居跡	117図	14	棒状土錘	Ⅰ－719	0.2	2.2		1.7		
Ⅰ区	包含層等	117図	15	棒状土錘	Ⅰ－1738	0.6	4.5		1.05		
Ⅰ区	包含層等	117図	16	棒状土錘	Ⅰ－1763	0.4	2.7		0.9		
Ⅰ区	包含層等	117図	17	棒状土錘	Ⅰ－1767	0.5	4.2		0.95		
Ⅰ区	包含層等	117図	18	棒状土錘	Ⅰ－1739	0.4	3.3		1.05		
Ⅰ区	包含層等	117図	19	棒状土錘	Ⅰ－1757	0.8	5.3		1.2		
Ⅰ区	包含層等	117図	20	棒状土錘	Ⅰ－1770	1	8.6	8.6	1.15	15.76	
Ⅰ区	包含層等	117図	21	棒状土錘	Ⅰ－1751	0.9	6.15		1.15		側面に1小穴
Ⅰ区	包含層等	117図	22	棒状土錘	Ⅰ－1734	0.7	5.8		1.15		
Ⅰ区	包含層等	117図	23	棒状土錘	Ⅰ－1771	1	7.4	7.4	1.15	12.51	
Ⅰ区	包含層等	117図	24	棒状土錘	Ⅰ－1747	0.7	5		1.25		
Ⅰ区	包含層等	117図	25	棒状土錘	Ⅰ－1760	0.4	3.3		1.05		
Ⅰ区	包含層等	117図	26	棒状土錘	Ⅰ－1732	0.5	3.7		1.25		
Ⅰ区	包含層等	117図	27	棒状土錘	Ⅰ－1733	0.5	3.9		1.2		
Ⅰ区	包含層等	117図	28	棒状土錘	Ⅰ－1765	0.3	2.9		1.1		
Ⅰ区	包含層等	117図	29	棒状土錘	Ⅰ－1735	0.6	4.7		1.25		
Ⅰ区	包含層等	118図	30	棒状土錘	Ⅰ－1769	0.4	3.6		1.2		
Ⅰ区	包含層等	118図	31	棒状土錘	Ⅰ－1764	0.6	4.5		1.15		
Ⅰ区	包含層等	118図	32	棒状土錘	Ⅰ－1762	0.5	4.2		1.15		
Ⅰ区	包含層等	118図	33	棒状土錘	Ⅰ－1784	1	6.6	6.6	1.7	22.31	
Ⅰ区	包含層等	118図	34	棒状土錘	Ⅰ－1744	1	6.7	6.7	1.85	22.31	
Ⅰ区	包含層等	118図	35	棒状土錘	Ⅰ－1742	1	6.6	6.6	1.85	24.31	
Ⅰ区	包含層等	118図	36	棒状土錘	Ⅰ－2034	1	7.5	7.5	1.65	22.31	
Ⅰ区	包含層等	118図	37	棒状土錘	Ⅰ－1743	1	6.8	6.8	1.9	22.91	
Ⅰ区	包含層等	118図	38	棒状土錘	Ⅰ－1750	1	6.8	6.8	1.45	25.06	
Ⅰ区	包含層等	118図	39	棒状土錘	Ⅰ－1775	1	6.8	6.8	1.45	17.91	
Ⅰ区	包含層等	118図	40	棒状土錘	Ⅰ－1774	1	6.7	6.7	1.8	21.12	
Ⅰ区	包含層等	118図	41	棒状土錘	Ⅰ－1781	1	6.7	6.7	1.7	22.78	
Ⅰ区	包含層等	118図	42	棒状土錘	Ⅰ－1783	1	6.9	6.9	1.6	21.48	
Ⅰ区	包含層等	118図	43	棒状土錘	Ⅰ－1782	1	7.2	7.2	1.55	22.83	
Ⅰ区	包含層等	118図	44	棒状土錘	Ⅰ－1773	1	7.2	7.2	1.55	22.91	
Ⅰ区	包含層等	118図	45	棒状土錘	Ⅰ－2032	1	7.2	7.2	1.5	19.03	
Ⅰ区	包含層等	118図	46	棒状土錘	Ⅰ－2033	1	7.5	7.5	1.6	26.72	
Ⅰ区	包含層等	118図	47	棒状土錘	Ⅰ－1761	1	7.8	7.8	1.75	29.96	
Ⅰ区	包含層等	118図	48	棒状土錘	Ⅰ－1758	0.9	7.2	(7.8)	1.45		
Ⅰ区	包含層等	118図	49	棒状土錘	Ⅰ－1731	0.6	5.3		1.55		
Ⅰ区	包含層等	118図	50	棒状土錘	Ⅰ－1749	0.5	4.3		1.8		
Ⅰ区	包含層等	118図	51	棒状土錘	Ⅰ－1745	0.7	5.1		1.75		
Ⅰ区	包含層等	118図	52	棒状土錘	Ⅰ－1754	0.6	4.5		1.5		
Ⅰ区	包含層等	118図	53	棒状土錘	Ⅰ－1741	0.3	2.9		1.65		
Ⅰ区	包含層等	118図	54	棒状土錘	Ⅰ－1737	0.3	3.1		1.75		
Ⅰ区	包含層等	118図	55	棒状土錘	Ⅰ－1746	0.3	3		1.6		
Ⅰ区	包含層等	118図	56	棒状土錘	Ⅰ－1777	0.3	3		1.5		
Ⅰ区	包含層等	119図	57	棒状土錘	Ⅰ－1766	0.5	4.5		1.55		
Ⅰ区	包含層等	119図	58	棒状土錘	Ⅰ－1776	0.5	4.2		1.45		
Ⅰ区	包含層等	119図	59	棒状土錘	Ⅰ－1752	0.5	4.6		1.45		
Ⅰ区	包含層等	119図	60	棒状土錘	Ⅰ－1759	0.5	5		1.55		

第9表　調査区出土土製品等一覧その①

調査区	出土遺構	挿図番号	図番号	遺物種類	遺物番号	遺存率	遺存長さ（cm）	長さ（cm）	直径（cm）	重さ（g）	備考
Ⅰ区	包含層等	119図	61	棒状土錘	Ⅰ－1772	0.5	4.7		1.6		
Ⅰ区	包含層等	119図	62	棒状土錘	Ⅰ－1755	0.4	4		1.55		
Ⅰ区	包含層等	119図	63	棒状土錘	Ⅰ－1736	0.8	6.3		1.45		
Ⅰ区	包含層等	119図	64	棒状土錘	Ⅰ－1748	0.6	5		1.65		片端部に抉り
Ⅰ区	包含層等	119図	65	棒状土錘	Ⅰ－1740	0.3	2.8		1.5		
Ⅰ区	包含層等	119図	66	棒状土錘	Ⅰ－1768	1	9.7	9.7	1.45	25.99	
Ⅰ区	包含層等	119図	67	棒状土錘	Ⅰ－1753	0.6	5.1		1.95		
Ⅰ区	26号住居跡	119図	68	棒状土錘	Ⅰ－715	0.7	5.3		1.05		
Ⅰ区	包含層等	119図	69	管状土錘	Ⅰ－1700	0.8	5.4	5.4	1.85		
Ⅰ区	包含層等	119図	70	管状土錘	Ⅰ－1727	1	5.2	5.2	1.7	12.09	
Ⅰ区	包含層等	119図	71	管状土錘	Ⅰ－1714	1	4.9	4.9	1.65	12.67	
Ⅰ区	包含層等	119図	72	管状土錘	Ⅰ－1720	0.9	4.4		1.55		
Ⅰ区	包含層等	119図	73	管状土錘	Ⅰ－1723	0.9	4.2	(4.5)	1.6		
Ⅰ区	包含層等	119図	74	管状土錘	Ⅰ－1729	1	4.4	4.4	1.95	11.02	
Ⅰ区	包含層等	119図	75	管状土錘	Ⅰ－1717	1	4.3	4.3	1.65	9.05	
Ⅰ区	包含層等	119図	76	管状土錘	Ⅰ－1726	0.9	4.2	(4.4)	1.35		
Ⅰ区	包含層等	119図	77	管状土錘	Ⅰ－1701	0.9	3.9	(4.2)	1.7		
Ⅰ区	包含層等	119図	78	管状土錘	Ⅰ－1713	1	5.3	5.3	1.7	12.09	
Ⅰ区	包含層等	119図	79	管状土錘	Ⅰ－1712	0.9	4.5	(4.5)	1.65		
Ⅰ区	包含層等	119図	80	管状土錘	Ⅰ－1728	1	4.3	4.3	1.8	10.96	
Ⅰ区	包含層等	119図	81	管状土錘	Ⅰ－1711	1	4.4	4.4	1.6	10.22	
Ⅰ区	包含層等	119図	82	管状土錘	Ⅰ－1718	0.9	3.6	(3.6)	1.55		
Ⅰ区	90号住居跡	119図	83	管状土錘	Ⅰ－731	1	3.5	3.5	1.75	9.13	
Ⅰ区	包含層等	119図	84	管状土錘	Ⅰ－1703	1	4.8	4.8	1.65	11.69	
Ⅰ区	包含層等	119図	85	管状土錘	Ⅰ－1702	0.8	4.7	(5.0)	1.55		
Ⅰ区	90号住居跡	119図	86	管状土錘	Ⅰ－730	0.9	3.9	(4.3)	1.75		
Ⅰ区	包含層等	119図	87	管状土錘	Ⅰ－1715	1	5.4	5.4	1.65	12.96	
Ⅰ区	包含層等	119図	88	管状土錘	Ⅰ－1706	0.5	3.7	(5.0)	1.65		
Ⅰ区	包含層等	119図	89	管状土錘	Ⅰ－729	0.6	3.4	(5.4)	1.65		
Ⅰ区	包含層等	119図	90	管状土錘	Ⅰ－1730	0.5	2.7	(5.0)	1.65		
Ⅰ区	包含層等	119図	91	管状土錘	Ⅰ－1710	0.7	3.8	(5.0)	1.65		
Ⅰ区	包含層等	119図	92	管状土錘	Ⅰ－1704	1	4.9	4.9	1.15	6.3	
Ⅰ区	包含層等	119図	93	管状土錘	Ⅰ－1722	1	4.9	4.9	1.1	4.71	
Ⅰ区	包含層等	119図	94	管状土錘	Ⅰ－1705	1	4.55	4.6	1.25	6.18	
Ⅰ区	包含層等	119図	95	管状土錘	Ⅰ－1707	1	3.9	3.9	1.05	3.98	
Ⅰ区	78号住居跡	119図	96	管状土錘	Ⅰ－2030	1	3.5	3.5	1.35	6.2	
Ⅰ区	48号住居跡	119図	97	管状土錘	Ⅰ－718	1	3.3	3.3	1.15	4.8	
Ⅰ区	包含層等	119図	98	管状土錘	Ⅰ－1709	0.9	2.9	(2.9)	1.2		
Ⅰ区	包含層等	119図	99	管状土錘	Ⅰ－1719	1	3.1	3.1	1.1	3.34	
Ⅰ区	78号住居跡	120図	100	管状土錘	Ⅰ－712	1	3	3.0	1.2	4.64	
Ⅰ区	SX－02	120図	101	管状土錘	Ⅰ－1900	0.8	3.5	(4.2)	1.05		
Ⅰ区	包含層等	120図	102	管状土錘	Ⅰ－1721	0.7	3.5		1.2		
Ⅰ区	包含層等	120図	103	管状土錘	Ⅰ－1725	0.6	2.9	(5.0)	1.1		
Ⅰ区	包含層等	120図	104	管状土錘	Ⅰ－1724	0.9	4.6	(5.0)	1.1		
Ⅰ区	包含層等	120図	105	管状土錘	Ⅰ－1716	0.7	3.6	(4.8)	1.15		
Ⅰ区	26号住居跡	120図	106	管状土錘	Ⅰ－716	0.9	4	(4.2)	1.45		
Ⅰ区	包含層等	120図	107	管状土錘	Ⅰ－1078	0.6	2.9	(4.8)	1.1		
Ⅰ区	包含層等	120図	108	土玉	Ⅰ－1786	1	1.4	1.4	1.75	3.66	
Ⅰ区	10号住居跡	120図	109	土玉	Ⅰ－723	1	1.8	1.8	1.75	5.62	
Ⅰ区	出土地不明	120図	110	土玉	Ⅰ－2025	1	1.7	1.7	1.85	6.09	
Ⅰ区	包含層等	120図	111	土玉	Ⅰ－2037	1	1.2	1.2	1.1	1.67	
Ⅰ区	包含層等	120図	112	土玉	Ⅰ－2038	1	1.2	1.2	1.35	1.78	
Ⅰ区	10号住居跡	120図	113	土玉	Ⅰ－724	1	0.9	0.9	0.95	0.84	
Ⅰ区	97号住居跡	120図	114	土玉	Ⅰ－733	1	0.5	0.5	0.95	0.45	
Ⅰ区	包含層等	120図	115	土製模造鏡	Ⅰ－1788	1	2	2.0	4.55	27.17	
Ⅰ区	包含層等	120図	116	土製模造鏡	Ⅰ－1787	1	1.6	1.6	3.75	15.44	
Ⅰ区	包含層等	120図	117	土製勾玉	Ⅰ－2031	1	2.4	2.4	1.05	3.19	
Ⅱ区	109号住居跡	177図	1	管状土錘	Ⅱ－353	0.5					
Ⅰ区	SX－02	120図	118	ガラス小玉	Ⅰ－90001	1		0.5	0.11	0.10	
※　()内の数値は推定値											

第10表　調査区出土土製品等一覧その②

調査次数	調査区	出土遺構	挿図番号	図番号	遺物種類	遺物番号	遺存率	石材	最大長さ（cm）	最大幅（cm）	最大厚さ（cm）	重さ（g）	備考
4次	Ⅰ区	90号住居跡	121図	1	石鏃	Ⅰ－500235	1	姫島産黒曜石	4.0	2.5	0.9	6.0	
4次	Ⅰ区	56号住居跡	121図	2	石鏃	Ⅰ－500182	1	姫島産黒曜石	2.4	1.7	0.8	2.7	未製品か
4次	Ⅰ区	包含層等	121図	3	石鏃	Ⅰ－500164	1	姫島産黒曜石	2.1	1.2	0.4	0.6	
4次	Ⅰ区	39号住居跡	121図	4	石鏃	Ⅰ－500763	1	姫島産黒曜石	1.5	1.1	0.2	0.3	
4次	Ⅰ区	包含層等	121図	5	石鏃	Ⅰ－500177	0.8	安山岩	1.2	1.1	0.3	0.2	
4次	Ⅰ区	包含層等	121図	6	石鏃	Ⅰ－500187	0.9	姫島産黒曜石	1.5	1.4	0.3	0.3	
4次	Ⅰ区	包含層等	121図	7	石鏃	Ⅰ－500162	0.9	黒曜石	1.8	1.3	0.3	0.6	
4次	Ⅰ区	包含層等	121図	8	石鏃	Ⅰ－500166	0.5	黒曜石	1.1	1.0	0.2	0.1	
4次	Ⅰ区	包含層等	121図	9	石鏃	Ⅰ－500189	1	姫島産黒曜石	1.9	1.5	0.4	0.7	
4次	Ⅰ区	包含層等	121図	10	石鏃	Ⅰ－500236	0.7	姫島産黒曜石	2.0	1.1	0.3	0.4	
4次	Ⅰ区	包含層等	121図	11	石鏃	Ⅰ－500193	0.7	姫島産黒曜石	2.5	1.6	0.3	1.3	
4次	Ⅰ区	6号住居跡	121図	12	石鏃	Ⅰ－500179	0.9	黒曜石	2.3	1.5	0.5	1.0	
4次	Ⅰ区	包含層等	121図	13	石鏃	Ⅰ－500190	1	黒曜石	2.5	1.4	0.3	0.7	
4次	Ⅰ区	包含層等	121図	14	石鏃	Ⅰ－500229	0.8	姫島産黒曜石	2.8	1.3	0.5	1.0	
4次	Ⅰ区	包含層等	121図	15	スクレイパー	Ⅰ－500192	1	姫島産黒曜石	2.2	2.2	1.1	3.7	
4次	Ⅰ区	15号住居跡	121図	16	スクレイパー	Ⅰ－500181	1	姫島産黒曜石	1.1	2.1	0.2	0.4	
4次	Ⅰ区	包含層等	121図	17	スクレイパー	Ⅰ－500194	1	黒曜石	4.7	3.3	1.3	12.0	
4次	Ⅰ区	94号住居跡	121図	18	スクレイパー	Ⅰ－500237	0.9	安山岩	6.1	3.0	1.0	17.4	
4次	Ⅰ区	包含層等	121図	19	スクレイパー	Ⅰ－500191	1	姫島産黒曜石	7.4	4.2	1.6	39.2	
4次	Ⅰ区	包含層等	121図	20	スクレイパー	Ⅰ－500188	1	姫島産黒曜石	2.8	1.2	0.5	1.1	
4次	Ⅰ区	74号住居跡	121図	21	スクレイパー	Ⅰ－500180	1	安山岩	5.2	2.5	1.1	9.2	
4次	Ⅰ区	包含層等	121図	22	石匙	Ⅰ－500173	1	安山岩	2.6	4.7	0.7	5.3	
4次	Ⅰ区	包含層等	121図	23	石包丁	Ⅰ－500184	0.2	頁岩？	2.7	4.4	0.7	10.3	
4次	Ⅰ区	包含層等	121図	24	トロトロ石器	Ⅰ－500170	1	花崗岩質砂岩	9.8	4.6	1.6	98.7	花崗岩質砂岩の間に石英嵌入
4次	Ⅰ区	包含層等	121図	25	石斧	Ⅰ－500183	0.4	片岩	7.0	6.0	3.4	195.7	
4次	Ⅰ区	34号住居跡	121図	26	砥石	Ⅰ－500227	0.5	花崗岩質砂岩	8.3	4.0	3.5	108.9	仕上げ砥
4次	Ⅰ区	包含層等	121図	27	砥石	Ⅰ－500186	0.3	花崗岩質砂岩	5.6	4.3	3.7	87.6	仕上げ砥
4次	Ⅰ区	包含層等	121図	28	砥石	Ⅰ－500185	0.3	砂岩	6.6	4.7	3.0	86.1	荒砥
4次	Ⅰ区	19号住居跡	121図	29	砥石	Ⅰ－500228	1	砂岩	9.4	4.0	3.5	82.8	仕上げ砥
4次	Ⅰ区	81号住居跡	122図	30	台石	Ⅰ－500243	0.6		34.0	19.8	8.3	6,020.9	
4次	Ⅱ区	包含層等	178図	1	スクレイパー	Ⅱ－500174	1	姫島産黒曜石	2.7	1.7	0.8	3.3	
4次	Ⅱ区	包含層等	178図	2	スクレイパー	Ⅱ－500178	1	姫島産黒曜石	3.4	1.5	0.9	3.9	
4次	Ⅱ区	包含層等	178図	3	スクレイパー	Ⅱ－500167	1	姫島産黒曜石	2.7	2.7	0.5	1.9	
4次	Ⅱ区	包含層等	178図	4	石鏃	Ⅱ－500171	1	姫島産黒曜石	2.1	1.6	0.3	0.6	
4次	Ⅱ区	包含層等	178図	5	石鏃	Ⅱ－500161	0.6	安山岩	1.2	1.3	0.2	0.2	
4次	Ⅱ区	148号住居跡	178図	6	石鏃	Ⅱ－500176	1	姫島産黒曜石	1.5	1.3	0.2	0.4	
4次	Ⅱ区	108号住居跡	178図	7	異形石器	Ⅱ－500168	0.9	安山岩	3.7	2.4	0.5	4.2	
4次	Ⅱ区	包含層等	178図	8	砥石	Ⅱ－500281	1	頁岩	5.7	4.9	1.0	33.1	
4次	Ⅱ区	107号住居跡	178図	9	石斧	Ⅱ－500175	0.8	頁岩	11.6	4.5	2.7	253.8	

第11表　調査区出土石器一覧

調査次数	調査区	出土遺構	挿図番号	図番号	遺物種類	遺物番号	遺存率	最大長さ	最大幅（cm）	最大厚さ（cm）	孔径（cm）	重さ（g）	備考
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	123図	1	紡錘車	Ⅰ－50102	1	3.75		1.35	0.55	33.53	頭部片
4次	Ⅰ区	包含層等	123図	6	勾玉	Ⅰ－50001	0.2	1.60	1.50	0.65	0.20	1.65	
4次	Ⅰ区	包含層等	124図	13	垂飾	Ⅰ－50002	1	3.70	1.15	0.65	0.55	4.71	
4次	Ⅰ区	包含層等	124図	74	臼玉	Ⅰ－50003	1	0.40		0.20	0.15	0.05	
4次	Ⅰ区	包含層等	124図	75	臼玉	Ⅰ－50004	1	0.45		0.20	0.15	0.06	
4次	Ⅰ区	包含層等	124図	76	臼玉	Ⅰ－50005	1	0.35		0.15	0.15	0.03	
4次	Ⅰ区	包含層等	124図	77	臼玉	Ⅰ－50006	1	0.45		0.30	0.15	0.04	
4次	Ⅰ区	包含層等	124図	78	臼玉	Ⅰ－50007	1	0.50		0.25	0.20	0.04	
4次	Ⅰ区	包含層等	124図	79	臼玉	Ⅰ－50008	1	0.50		0.15	0.20	0.07	
4次	Ⅰ区	包含層等	124図	80	臼玉	Ⅰ－50009	1	0.40		0.25	0.15	0.05	
4次	Ⅰ区	包含層等	124図	81	臼玉	Ⅰ－50010	1	0.40		0.15	0.15	0.03	
4次	Ⅰ区	包含層等	124図	82	臼玉	Ⅰ－50011	1	0.45		0.25	0.15	0.06	
4次	Ⅰ区	包含層等	124図	83	臼玉	Ⅰ－50012	1	0.45		0.25	0.15	0.07	
4次	Ⅰ区	包含層等	124図	84	臼玉	Ⅰ－50013	1	0.55		0.35	0.25	0.09	
4次	Ⅰ区	包含層等	124図	86	臼玉	Ⅰ－50014	1	0.45		0.25	0.15	0.04	
4次	Ⅰ区	包含層等	124図	85	臼玉	Ⅰ－50015	1	0.70		0.45	0.25	0.3	
4次	Ⅰ区	包含層等	128図	181	板状素材	Ⅰ－50016		1.80	1.75	0.20		0.52	
4次	Ⅰ区	包含層等	128図	190	板状素材	Ⅰ－50017		1.25	0.80	0.25		0.17	
4次	Ⅰ区	包含層等	128図	191	板状素材	Ⅰ－50018		0.90	0.65	0.20		0.17	
4次	Ⅰ区	包含層等	128図	193	板状素材	Ⅰ－50019		0.70	0.55	0.20		0.09	
4次	Ⅰ区	包含層等	128図	184	板状素材	Ⅰ－50020		1.40	0.20	1.15		0.55	
4次	Ⅰ区	包含層等	128図	189	板状素材	Ⅰ－50021		1.20	1.35	0.25		0.28	
4次	Ⅰ区	包含層等	128図	187	板状素材	Ⅰ－50022		1.75	1.05	0.20		0.76	
4次	Ⅰ区	包含層等	128図	185	板状素材	Ⅰ－50023		1.60	1.05	0.20		0.45	
4次	Ⅰ区	包含層等	128図	182	板状素材	Ⅰ－50024		2.00	1.00	0.15		0.67	
4次	Ⅰ区	包含層等	128図	183	板状素材	Ⅰ－50025		2.45	1.95	0.30		1.00	
4次	Ⅰ区	包含層等	128図	195	板状素材	Ⅰ－50026		1.90	0.85	0.25		0.51	
4次	Ⅰ区	包含層等	128図	188	板状素材	Ⅰ－50027		1.25	1.20	0.25		0.55	
4次	Ⅰ区	包含層等	128図	192	板状素材	Ⅰ－50028		0.80	0.95	0.25		0.26	
4次	Ⅰ区	包含層等	128図	186	板状素材	Ⅰ－50029		1.05	0.70	0.25		0.33	
4次	Ⅰ区	包含層等	128図	194	板状素材	Ⅰ－50030		1.05	1.75	0.35		1.16	
4次	Ⅰ区	39号住居跡	123図	5	勾玉	Ⅰ－50031	1	3.20	1.75	0.60	0.20	4.97	未成品
4次	Ⅰ区	81号住居跡	124図	17	臼玉	Ⅰ－50032	1	0.45		0.20	0.15	0.05	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	127図	158	板状素材	Ⅰ－50033		2.40	2.55	0.20		2.11	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	124図	24	臼玉	Ⅰ－50036	1	0.40		0.15	0.15	0.04	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	124図	25	臼玉	Ⅰ－50037	1	0.40		0.45	0.20	0.27	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	109	板状素材	Ⅰ－50038		2.10	1.15	0.20		0.89	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	123	板状素材	Ⅰ－50039		2.45	2.10	0.30		2.08	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	124	板状素材	Ⅰ－50040		2.30	1.75	0.25		1.83	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	125	板状素材	Ⅰ－50041		2.20	1.70	0.30		1.78	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	126	板状素材	Ⅰ－50042		1.75	1.80	0.25		1.00	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	121	板状素材	Ⅰ－50043		2.20	1.50	0.20		1.14	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	122	板状素材	Ⅰ－50044		1.80	1.30	0.25		1.36	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	112	板状素材	Ⅰ－50045		1.20	1.40	0.25		0.74	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	113	板状素材	Ⅰ－50046		1.00	0.70	0.20		0.23	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	128	板状素材	Ⅰ－50047		1.65	1.05	0.25		0.66	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	141	板状素材	Ⅰ－50048		1.00	1.00	0.30		0.35	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	111	板状素材	Ⅰ－50049		2.00	0.80	0.20		0.61	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	115	板状素材	Ⅰ－50050		0.90	0.60	0.20		0.22	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	110	板状素材	Ⅰ－50051		1.65	0.30	1.00		0.76	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	120	板状素材	Ⅰ－50052		1.30	1.50	0.25		0.68	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	140	板状素材	Ⅰ－50053		1.75	1.30	0.25		0.87	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	130	板状素材	Ⅰ－50054		1.50	1.25	0.25		0.85	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	138	板状素材	Ⅰ－50055		1.00	0.70	0.25		0.19	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	142	板状素材	Ⅰ－50056		0.95	0.60	0.25		0.18	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	132	板状素材	Ⅰ－50057		1.55	1.45	0.35		1.36	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	127	板状素材	Ⅰ－50058		1.50	1.40	0.30		1.19	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	133	板状素材	Ⅰ－50059		1.65	1.40	0.30		1.06	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	134	板状素材	Ⅰ－50060		1.75	1.75	0.30		1.40	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	135	板状素材	Ⅰ－50061		1.55	1.35	0.25		0.90	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	136	板状素材	Ⅰ－50062		1.45	1.40	0.30		1.01	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	129	板状素材	Ⅰ－50063		1.10	0.90	0.30		0.44	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	143	板状素材	Ⅰ－50064		1.65	2.50	0.30		1.82	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	139	板状素材	Ⅰ－50065		1.75	1.75	0.55		0.92	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	131	板状素材	Ⅰ－50066		1.65	1.20	0.30		1.06	

第12表　調査区出土滑石製品・未整品一覧その①

調査次数	調査区	出土遺構	挿図番号	図番号	遺物種類	遺物番号	遺存率	最大長さ	最大幅（cm）	最大厚さ（cm）	孔径（cm）	重さ（g）	備考
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	137	板状素材	Ⅰ－50067		1.25	1.55	0.20		0.71	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	114	板状素材	Ⅰ－50068		1.00	0.70	0.15		0.16	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	117	板状素材	Ⅰ－50069		1.20	0.60	0.25		0.25	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	118	板状素材	Ⅰ－50070		1.20	0.45	0.25		0.25	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	116	板状素材	Ⅰ－50071		1.10	0.60	0.15		0.22	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（A区）	126図	119	板状素材	Ⅰ－50072		1.10	0.45	0.25		0.23	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（B区）	123図	10	有孔円板	Ⅰ－50073	0.8	2.55		0.35	0.15	3.43	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（B区）	124図	26	臼玉	Ⅰ－50074	1	0.45		0.15	0.15	0.03	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（B区）	124図	27	臼玉	Ⅰ－50075	1	0.40		0.15	0.15	0.03	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（B区）	124図	28	臼玉	Ⅰ－50076	1	0.45		0.25	0.15	0.06	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（B区）	124図	29	臼玉	Ⅰ－50077	1	0.40		0.20	0.15	0.04	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（B区）	124図	30	臼玉	Ⅰ－50078	1	0.45		0.25	0.20	0.06	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（B区）	124図	31	臼玉	Ⅰ－50079	1	0.45		0.25	0.15	0.08	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（B区）	124図	32	臼玉	Ⅰ－50080	1	0.45		0.25	0.20	0.05	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（B区）	124図	33	臼玉	Ⅰ－50081	1	0.40		0.30	0.15	0.05	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（B区）	124図	34	臼玉	Ⅰ－50082	1	0.45		0.30	0.15	0.08	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（B区）	124図	35	臼玉	Ⅰ－50083	1	0.45		0.35	0.20	0.10	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（B区）	124図	36	臼玉	Ⅰ－50084	1	0.55		0.35	0.15	0.17	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（B区）	124図	37	臼玉	Ⅰ－50085	1	0.45		0.25	0.20	0.07	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（B区）	124図	38	臼玉	Ⅰ－50086	1	0.50		0.35	0.15	0.07	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（B区）	124図	39	臼玉	Ⅰ－50087	1	0.45		0.25	0.15	0.07	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（B区）	124図	40	臼玉	Ⅰ－50088	1	0.40		0.25	0.20	0.06	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（B区）	124図	41	臼玉	Ⅰ－50089	1	0.50		0.30	0.15	0.14	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（B区）	124図	42	臼玉	Ⅰ－50090	1	0.45		0.30	0.15	0.11	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（B区）	124図	43	臼玉	Ⅰ－50091	1	0.45		0.20	0.15	0.04	
4次	Ⅰ区	住22	124図	88	臼玉	Ⅰ－50092	1	1.20	1.10	0.25	0.15	0.52	未成品
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（B区）	124図	44	臼玉	Ⅰ－50093	1	0.45		0.20	0.15	0.05	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（B区）	124図	45	臼玉	Ⅰ－50094	1	0.45		0.20	0.15	0.04	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（B区）	124図	46	臼玉	Ⅰ－50095	1	0.40		0.25	0.15	0.03	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（B区）	124図	47	臼玉	Ⅰ－50096	1	0.35		0.25	0.20	0.04	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（B区）	126図	147	板状素材	Ⅰ－50097		2.50	2.45	0.30		2.48	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（B区）	126図	148	板状素材	Ⅰ－50098		3.25	2.80	0.25		4.05	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（B区）	126図	144	板状素材	Ⅰ－50099		1.60	0.90	0.30		0.59	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（B区）	126図	145	板状素材	Ⅰ－50100		2.00	1.30	0.25		0.80	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み（B区）	126図	146	板状素材	Ⅰ－50101		1.30	1.05	0.25		0.48	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	124図	48	臼玉	Ⅰ－50103	1	0.45		0.25	0.15	0.07	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	124図	49	臼玉	Ⅰ－50104	1	0.45		0.15	0.15	0.04	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	124図	50	臼玉	Ⅰ－50105	1	0.45		0.20	0.15	0.06	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	124図	51	臼玉	Ⅰ－50106	1	0.45		0.20	0.15	0.06	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	124図	52	臼玉	Ⅰ－50107	1	0.45		0.20	0.15	0.05	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	124図	53	臼玉	Ⅰ－50108	1	0.50		0.20	0.15	0.07	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	124図	54	臼玉	Ⅰ－50109	1	0.45		0.15	0.15	0.05	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	124図	55	臼玉	Ⅰ－50110	1	0.45		0.25	0.15	0.06	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	124図	56	臼玉	Ⅰ－50111	1	0.45		0.15	0.90	0.05	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	124図	57	臼玉	Ⅰ－50112	1	0.45		0.20	0.15	0.05	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	124図	58	臼玉	Ⅰ－50113	1	0.35		14.40	0.20	0.03	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	124図	59	臼玉	Ⅰ－50114	1	0.45		0.25	0.15	0.04	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	124図	60	臼玉	Ⅰ－50115	1	0.45		0.20	0.15	0.04	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	124図	61	臼玉	Ⅰ－50116	1	0.40		0.20	0.10	0.05	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	124図	62	臼玉	Ⅰ－50117	1	0.45		0.20	0.15	0.04	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	124図	63	臼玉	Ⅰ－50118	1	0.45		0.20	0.15	0.04	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	124図	64	臼玉	Ⅰ－50119	1	0.45		0.40	0.15	0.04	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	124図	65	臼玉	Ⅰ－50120	1	0.50		0.20	0.15	0.08	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	124図	66	臼玉	Ⅰ－50121	1	0.40		0.20	0.15	0.03	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	124図	70	臼玉	Ⅰ－50122	0.5	0.50		0.10	0.15		
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	124図	69	臼玉	Ⅰ－50123	1	0.55		0.15	0.15	0.07	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	124図	67	臼玉	Ⅰ－50124	1	0.35		0.30	0.15	0.03	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	124図	71	臼玉	Ⅰ－50125	0.5	0.50		0.30	0.15	0.04	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	124図	68	臼玉	Ⅰ－50126	1	0.40		0.45	0.15	0.09	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	124図	72	臼玉	Ⅰ－50127	1	0.45		0.25	0.15	0.05	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	124図	73	臼玉	Ⅰ－50128	1	0.45		0.20	0.20	0.03	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	124図	87	臼玉	Ⅰ－50129	1	0.70	0.70	0.30	0.10	0.25	未成品
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	127図	177	板状素材	Ⅰ－50130		2.20	0.90	0.20		0.62	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	127図	167	板状素材	Ⅰ－50131		1.30	1.30	0.30		0.50	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	127図	166	板状素材	Ⅰ－50132		1.65	1.45	0.25		0.55	

第13表　調査区出土滑石製品・未整品一覧その②

調査次数	調査区	出土遺構	挿図番号	図番号	遺物種類	遺物番号	遺存率	最大長さ	最大幅（cm）	最大厚さ（cm）	孔径（cm）	重さ（g）	備考
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	127 図	163	板状素材	Ⅰ－50133		2.50	1.85	0.25		1.86	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	127 図	164	板状素材	Ⅰ－50134		2.55	2.20	0.25		2.19	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	127 図	160	板状素材	Ⅰ－50135		1.85	1.90	0.25		1.53	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	127 図	172	板状素材	Ⅰ－50136		2.40	0.30	0.30		3.63	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	127 図	170	板状素材	Ⅰ－50137		1.95	2.15	0.25		1.69	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	127 図	162	板状素材	Ⅰ－50138		1.95	2.80	0.25		2.82	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	127 図	168	板状素材	Ⅰ－50139		1.60	1.50	0.25		0.83	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	127 図	169	板状素材	Ⅰ－50140		2.30	1.15	0.30		1.39	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	127 図	161	板状素材	Ⅰ－50141		1.65	1.25	0.25		0.74	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	127 図	157	板状素材	Ⅰ－50142		2.50	4.05	0.30		4.66	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	127 図	149	板状素材	Ⅰ－50143		2.00	0.70	0.25		0.70	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	127 図	152	板状素材	Ⅰ－50144		1.80	1.00	0.25		0.72	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	127 図	151	板状素材	Ⅰ－50145		1.85	0.70	0.20		0.48	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	127 図	150	板状素材	Ⅰ－50146		1.70	0.60	0.15		0.42	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	127 図	154	板状素材	Ⅰ－50147		1.50	0.60	0.25		0.36	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	127 図	159	板状素材	Ⅰ－50148		1.75	2.10	0.20		1.29	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	127 図	153	板状素材	Ⅰ－50149		1.25	0.85	0.20		0.37	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	127 図	156	板状素材	Ⅰ－50150		0.70	0.50	0.15		0.09	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	127 図	173	板状素材	Ⅰ－50151		1.65	1.85	0.20		1.03	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	127 図	174	板状素材	Ⅰ－50152		2.90	1.50	0.30		2.17	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	127 図	178	板状素材	Ⅰ－50153		1.85	1.50	0.30		1.14	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	127 図	175	板状素材	Ⅰ－50154		1.10	0.80	0.20		0.29	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	127 図	176	板状素材	Ⅰ－50155		1.40	1.50	0.30		1.11	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	127 図	180	板状素材	Ⅰ－50156		0.95	0.80	0.30		0.27	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	127 図	171	板状素材	Ⅰ－50157		1.90	1.45	0.25		1.20	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	127 図	179	板状素材	Ⅰ－50158		1.20	1.10	0.30		0.51	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	127 図	155	板状素材	Ⅰ－50159		1.70	0.80	0.25		0.57	
4次	Ⅰ区	SX-02 谷状落ち込み	127 図	165	板状素材	Ⅰ－50160		2.20	1.20	0.25		0.72	
4次	Ⅰ区	包含層等	123 図	11	有孔円板	Ⅰ－50165	1	2.45		0.50	0.20		
4次	Ⅰ区	39 号住居跡	123 図	12	有孔円板	Ⅰ－50169	1	2.55		0.45	0.20	4.8	
4次	Ⅰ区	包含層等	123 図	4	紡錘車	Ⅰ－50172	0.5	3.45		2.20	0.80		
4次	Ⅰ区	包含層等	125 図	102	板状素材	Ⅰ－50195		3.50	1.80	0.20			
4次	Ⅰ区	包含層等	125 図	106	板状素材	Ⅰ－50196		2.80	1.70	0.30			
4次	Ⅰ区	包含層等	125 図	103	板状素材	Ⅰ－50198		2.20	0.85	0.25			
4次	Ⅰ区	包含層等	124 図	15	剣形模造品	Ⅰ－50199		3.7	2.05	0.35	0.15		
4次	Ⅰ区	包含層等	123 図	7	勾玉	Ⅰ－50200		3.35	1.20	1.70	(0.60)		未成品か
4次	Ⅰ区	87 号住居跡	125 図	94	板状素材	Ⅰ－50202		1.40	1.45	0.25		2.8	
4次	Ⅰ区	87 号住居跡	125 図	92	板状素材	Ⅰ－50203		1.50	1.80	0.30			
4次	Ⅰ区	87 号住居跡	125 図	90	板状素材	Ⅰ－50204		1.60	1.65	0.30			
4次	Ⅰ区	包含層等	123 図	8	有孔円板	Ⅰ－50205	0.8	4.25		0.40	0.20	14.1	
4次	Ⅰ区	包含層等	124 図	14	垂飾	Ⅰ－50206		3.30	1.25	0.55	0.20		未成品か
4次	Ⅰ区	包含層等	125 図	91	臼玉	Ⅰ－50207		2.25	2.10	0.25			未成品か
4次	Ⅰ区	包含層等	125 図	104	板状素材	Ⅰ－50208		2.50	1.65	0.30			未成品か
4次	Ⅰ区	81 号住居跡	124 図	16	垂飾	Ⅰ－50209		3.10	2.20	0.55	0.25	5.6	
4次	Ⅰ区	SX-01 谷状落ち込み	123 図	9	有孔円板	Ⅰ－50210	0.9	2.75		0.45	0.20	5.3	
4次	Ⅰ区	包含層等	125 図	108	板状素材	Ⅰ－50211		1.35	0.70	0.20			
4次	Ⅰ区	103 号住居跡	125 図	100	板状素材	Ⅰ－50212		1.80	2.00	0.20			
4次	Ⅰ区	103 号住居跡	124 図	19	臼玉	Ⅰ－50213	1	0.40		0.30	0.15		
4次	Ⅰ区	103 号住居跡	124 図	20	臼玉	Ⅰ－50214	0.9	0.45		0.20	0.15		
4次	Ⅰ区	103 号住居跡	124 図	23	臼玉	Ⅰ－50215	1	0.55	0.60	0.30	0.10		
4次	Ⅰ区	103 号住居跡	125 図	101	板状素材	Ⅰ－50216		2.15	1.50	0.25			
4次	Ⅰ区	103 号住居跡	124 図	22	臼玉	Ⅰ－50217	1	0.45		0.25	0.15		
4次	Ⅰ区	包含層等	125 図	105	板状素材	Ⅰ－50218		2.80	3.05	0.35		5.9	
4次	Ⅰ区	包含層等	125 図	107	板状素材	Ⅰ－50219		2.05	1.60	0.20			
4次	Ⅰ区	94 号住居跡	125 図	99	板状素材	Ⅰ－50220		3.10	1.60	0.25		2.6	
4次	Ⅰ区	94 号住居跡	125 図	98	板状素材	Ⅰ－50221		1.55	2.40	0.25			
4次	Ⅰ区	94 号住居跡	125 図	97	板状素材	Ⅰ－50222		1.45	1.35	0.30			
4次	Ⅰ区	87 号住居跡	125 図	89	板状素材	Ⅰ－50223		1.60	1.10	0.20			
4次	Ⅰ区	87 号住居跡	125 図	95	板状素材	Ⅰ－50224		1.45	1.60	0.20			
4次	Ⅰ区	87 号住居跡	125 図	96	板状素材	Ⅰ－50225		1.00	1.25	0.30			
4次	Ⅰ区	87 号住居跡	125 図	93	板状素材	Ⅰ－50226		1.00	1.20	0.25			
4次	Ⅰ区	P208	123 図	2	紡錘車	Ⅰ－50230	0.5	4.75		1.10	0.70		
4次	Ⅰ区	102 号住居跡	124 図	18	玉	Ⅰ－50231	1	0.45		0.20	0.20		
4次	Ⅰ区	包含層等	123 図	3	紡錘車	Ⅰ－50232	0.5	3.75		1.75	0.60		
4次	Ⅰ区	103 号住居跡	124 図	21	玉	Ⅰ－50233	0.9	0.45		0.25	0.20		

※　すべて石材は滑石あるいは滑石類似石材製（詳しくは本文参照）。板状素材など残存率が不明のものは空欄としている。

第 14 表　調査区出土滑石製品・未整品一覧その③

調査次数	調査区	出土遺構	挿図番号	図番号	遺物種類	遺物番号	遺存率	最大長さ（cm）	最大幅（cm）	最大厚さ（cm）	重さ（g）	備考
4次	Ⅰ区	SX－02谷状落ち込み	129図	1	鏃	Ⅰ－70021	0.9	14.5	2.8	0.3		
4次	Ⅰ区	包含層等	129図	2	鏃	Ⅰ－70044	0.2	3.8	2.6	0.3		
4次	Ⅰ区	13号住居跡	129図	3	鏃	Ⅰ－70040	0.6	4.3	3.0	0.4		
4次	Ⅰ区	包含層等	129図	4	鏃	Ⅰ－70014	0.2	5.2	1.6	0.2		
4次	Ⅰ区	包含層等	129図	5	鏃	Ⅰ－70013	0.9	6.8	2.8	4.0		
4次	Ⅰ区	包含層等	129図	6	鏃	Ⅰ－70008	0.8	6.7	3.1	0.5		
4次	Ⅰ区	包含層等	129図	7	鏃	Ⅰ－70037	0.6	6.5	1.2	0.4		
4次	Ⅰ区	67号住居跡	129図	8	鏃	Ⅰ－70022	0.7	8.0	1.3	0.6		
4次	Ⅰ区	7号住居跡	129図	9	鏃	Ⅰ－70012	0.3	5.6	0.5	0.5		
4次	Ⅰ区	75号住居跡	129図	10	鏃	Ⅰ－70060		3.0	0.7	0.3		
4次	Ⅰ区	包含層等	129図	11	鏃	Ⅰ－70018		5.3	0.8	0.4		
4次	Ⅰ区	SX－02谷状落ち込み	129図	12	鏃	Ⅰ－70003	0.5	4.8	0.8	0.8		
4次	Ⅰ区	包含層等	129図	13	鏃	Ⅰ－70032	0.3	3.4	1.0	0.8		
4次	Ⅰ区	包含層等	129図	14	鏃	Ⅰ－70047	0.3	4.5	0.6	0.4		
4次	Ⅰ区	3号住居跡	129図	15	鏃	Ⅰ－70046	0.4	3.3	0.4	0.3		
4次	Ⅰ区	51号住居跡	129図	16	鏃	Ⅰ－70050	0.4	3.8	0.4	0.4		
4次	Ⅰ区	包含層等	129図	17	鏃	Ⅰ－70034	0.3	4.4	1.0	0.4		
4次	Ⅰ区	19号住居跡	129図	18	鏃	Ⅰ－70051	0.3	4.4	0.9	0.5		
4次	Ⅰ区	包含層等	129図	19	鏃	Ⅰ－70033	0.2	4.1	0.8	0.5		
4次	Ⅰ区	包含層等	129図	20	鏃	Ⅰ－70026	0.2	4.3	0.7	0.5		
4次	Ⅰ区	包含層等	129図	21	鏃	Ⅰ－70030	0.3	5.6	0.8	0.6		
4次	Ⅰ区	包含層等	129図	22	鏃	Ⅰ－70005	0.4	5.8	0.6	0.6		
4次	Ⅰ区	40号住居跡	129図	23	鎌	Ⅰ－70017	0.7	2.6	17.7	0.4		
4次	Ⅰ区	包含層等	129図	24	鎌	Ⅰ－70049	0.4	0.7		0.3		
4次	Ⅰ区	6号住居跡	129図	25	鎌	Ⅰ－70016	0.4	2.6	10.9	0.3		
4次	Ⅰ区	31号住居跡	129図	26	鎌	Ⅰ－70020	0.8	2.5	15.2	0.3		左手鎌
4次	Ⅰ区	7号住居跡	129図	27	鎌	Ⅰ－70011	0.9	2.1	16.9	0.3		左手鎌
4次	Ⅰ区	包含層等	129図	28	鎌	Ⅰ－70010	0.7	3.4	16.5	0.3		左手鎌
4次	Ⅰ区	包含層等	129図	29	刀子	Ⅰ－70015	0.4	1.5	8.6	0.3		
4次	Ⅰ区	75号住居跡	129図	30	刀子	Ⅰ－70056	0.3	1.2	5.0	0.4		
4次	Ⅰ区	74号住居跡	129図	31	刀子	Ⅰ－70025	0.1	1.1	2.0	0.4		
4次	Ⅰ区	43号住居跡	129図	32	刀子	Ⅰ－70042	0.2	1.2	4.1	0.5		
4次	Ⅰ区	包含層等	129図	33	刀子	Ⅰ－70031	0.2	1.1	3.4	0.2		
4次	Ⅰ区	87号住居跡	129図	34	刀子	Ⅰ－70004	0.2	0.7	3.3	0.3		
4次	Ⅰ区	包含層等	129図	35	鋏	Ⅰ－70019	0.4	8.6	1.7	0.3		
4次	Ⅰ区	包含層等	130図	36	鉄鐸	Ⅰ－70028	0.7	4.3	1.9	0.1		
4次	Ⅰ区	包含層等	130図	37	鉄製紡錘車	Ⅰ－70057	0.7	(4.1)	5.5	0.4		
4次	Ⅰ区	包含層等	130図	38	鉄鑿	Ⅰ－70039	0.9	9.5	0.8	0.1		
4次	Ⅰ区	包含層等	130図	39	短刀	Ⅰ－70009	0.2	12.1	3.0	0.5		
4次	Ⅰ区	4号住居跡	130図	40	手鎌	Ⅰ－70023	0.1	2.4	3.1	0.2		
4次	Ⅰ区	包含層等	130図	41	手鎌	Ⅰ－70046	0.1	1.6	2.0	0.2		
4次	Ⅰ区	44号住居跡	130図	42	鉋	Ⅰ－70038	0.2	5.4	1.1	0.5		
4次	Ⅰ区	包含層等	130図	43	釘	Ⅰ－70035	1	7.1	1.0	0.5		
4次	Ⅰ区	包含層等	130図	44	釘	Ⅰ－70036	0.8	4.8	1.7	0.7		
4次	Ⅰ区	包含層等	130図	45	釘	Ⅰ－70052	0.4	3.7	0.8	0.5		
4次	Ⅰ区	包含層等	130図	46	指輪	Ⅰ－70045	0.8	1.5	2.0	0.3		
4次	Ⅰ区	包含層等	130図	47	鉄滓	Ⅰ－70054		2.5	3.4	1.6	9.40	
4次	Ⅰ区	包含層等	130図	48	鉄滓	Ⅰ－70055		2.9	3.4	2.1	16.3	
4次	Ⅰ区	包含層等	130図	49	鉄滓	Ⅰ－70053		3.0	4.0	3.0	36.6	
4次	Ⅰ区	包含層等	130図	50	鉄滓	Ⅰ－70006		2.6	3.4	1.5	6.85	軽い
4次	Ⅰ区	77号住居跡	130図	51	椀形鍛冶滓	Ⅰ－70027	0.5	8.3	12.7	4.4	341.2	
4次	Ⅰ区	包含層等	130図	52	鉄滓	Ⅰ－70058		4.5	6.6	3.9	148.3	
4次	Ⅰ区	包含層等	130図	53	鉄塊	Ⅰ－70059		3.3	4.4	3.3	42.4	
4次	Ⅰ区	包含層等	130図	54	鉄塊	Ⅰ－70029		2.2	1.6	1.9	8.9	
4次	Ⅰ区	49号住居跡	130図	55	鉄塊	Ⅰ－70007		3.9	2.4	1.4	15.4	
4次	Ⅰ区	包含層等	130図	56	鉄塊	Ⅰ－70048		4.4	4.5	2.0	39.3	
4次	Ⅰ区	包含層等	130図	57	鉄塊	Ⅰ－70041		4.8	3.4	1.6	31.52	
4次	Ⅱ区	132号住居跡	179図	1	不明鉄器	Ⅱ－70001			1.9	0.1		
4次	Ⅱ区	107号住居跡	179図	2	鋤先	Ⅱ－70024		13.7	3.7	0.2		
4次	Ⅱ区	140号住居跡	179図	3	雛形鉄斧	Ⅱ－70002		4.3	2.4	0.3		

第15表　調査区出土金属器一覧

調査区	出土遺構	石材	点数	合計重量（g）	備考	調査区	出土遺構	石材	点数	合計重量（g）	備考
Ⅰ区	1 号住居跡	黒曜石	1	0.5		Ⅰ区	包含層等	腰岳産黒曜石	1	2.9	
Ⅰ区	5 号住居跡	黒曜石	1	16.4		Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	9	32.6	大×4　中×5
Ⅰ区	6 号住居跡	姫島産黒曜石	1	15.3		Ⅰ区	包含層等	安山岩	1	5.7	
Ⅰ区	7 号住居跡	姫島産黒曜石	1	6.4		Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	3	4.4	中×1　小×2
Ⅰ区	7 号住居跡	チャート	1	3.6		Ⅰ区	包含層等	チャート	1	1.5	赤色
Ⅰ区	12 号住居跡	姫島産黒曜石	1	4.1		Ⅰ区	包含層等	石英	1	11.4	
Ⅰ区	14 号住居跡	姫島産黒曜石	1	1.9		Ⅰ区	包含層等	腰岳産黒曜石	1	1.5	
Ⅰ区	15 号住居跡	姫島産黒曜石	1	0.5		Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	1	2.1	
Ⅰ区	15 号住居跡	姫島産黒曜石	1	38.0		Ⅰ区	包含層等	腰岳産黒曜石	1	4.7	
Ⅰ区	26 号住居跡	姫島産黒曜石	2	3.3		Ⅰ区	包含層等	チャート	1	1.6	
Ⅰ区	38 号住居跡	姫島産黒曜石	1	8.4		Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	4	7.6	大×1　小×3
Ⅰ区	40 号住居跡	黒曜石	1	2.9		Ⅰ区	包含層等	腰岳産黒曜石	1	2.6	
Ⅰ区	41 号住居跡	姫島産黒曜石	1	0.8		Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	2	22.6	
Ⅰ区	41 号住居跡	姫島産黒曜石	1	0.6		Ⅰ区	包含層等	黒曜石	3	18.2	大×1　中×1　小×1
Ⅰ区	43･44 号住居跡	姫島産黒曜石	1	1.1		Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	6	15.7	大×1　中×3　小×2
Ⅰ区	51 号住居跡	姫島産黒曜石	1	1.2		Ⅰ区	包含層等	腰岳産黒曜石	1	0.6	
Ⅰ区	52 号住居跡	姫島産黒曜石	2	8.5		Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	3	8.8	大×2　小×1
Ⅰ区	54 号住居跡	姫島産黒曜石	1	1.6		Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	1	0.5	
Ⅰ区	55 号住居跡	姫島産黒曜石	1	2.0		Ⅰ区	包含層等	腰岳産黒曜石	1	5.8	
Ⅰ区	56 号住居跡	姫島産黒曜石	7	15.0	大×2　中×2　小×3	Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	3	5.4	大×1　小×1
Ⅰ区	56 号住居跡	腰岳産黒曜石	2	6.3		Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	1	4.7	
Ⅰ区	56 号住居跡	黒曜石	1	12.7		Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	1	2.1	
Ⅰ区	57 号住居跡	姫島産黒曜石	1	0.9		Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	1	8.8	
Ⅰ区	60 号住居跡	姫島産黒曜石	1	7.9		Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	2	6.1	
Ⅰ区	60 号住居跡	姫島産黒曜石	2	2.7		Ⅰ区	包含層等	チャート	1	62.7	特大　赤色
Ⅰ区	60･61 号住居跡	姫島産黒曜石	2	3.1		Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	6	35.2	特大×1　大×2　中×1　小×2
Ⅰ区	62 号住居跡	姫島産黒曜石	1	3.9		Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	4	10.5	大×1　中×1　小×2
Ⅰ区	65 号住居跡	姫島産黒曜石	1	0.3		Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	1	4.4	
Ⅰ区	65 号住居跡	姫島産黒曜石	4	4.5	中×1　小×3	Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	2	12.2	
Ⅰ区	65 号住居跡	腰岳産黒曜石	1	0.3		Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	1	5.3	
Ⅰ区	67 号住居跡	黒曜石	1	2.3		Ⅰ区	包含層等	腰岳産黒曜石	1	18.5	
Ⅰ区	73 号住居跡	姫島産黒曜石	1	0.3		Ⅰ区	包含層等	腰岳産黒曜石	1	0.4	
Ⅰ区	76 号住居跡	姫島産黒曜石	1	1.2		Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	2	19.8	
Ⅰ区	78 号住居跡	姫島産黒曜石	1	3.7		Ⅰ区	包含層等	腰岳産黒曜石	1	1.4	
Ⅰ区	78 号住居跡	姫島産黒曜石	2	7.6		Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	1	20.6	
Ⅰ区	79 号住居跡	黒曜石	1	2.8		Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	2	14.6	
Ⅰ区	82 号住居跡	姫島産黒曜石	1	1.6		Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	1	6.5	
Ⅰ区	83 号住居跡	姫島産黒曜石	1	1.9		Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	1	7.8	
Ⅰ区	87 号住居跡	姫島産黒曜石	1	0.5		Ⅰ区	包含層等	腰岳産黒曜石	1	2.4	
Ⅰ区	90 号住居跡	姫島産黒曜石	2	7.5		Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	1	1.7	
Ⅰ区	90 号住居跡	姫島産黒曜石	2	4.6		Ⅰ区	包含層等	腰岳産黒曜石	1	0.9	
Ⅰ区	101 号住居跡	姫島産黒曜石	1	1.6		Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	2	7.8	
Ⅰ区	P 59	姫島産黒曜石	1	22.4		Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	2	6.5	
Ⅰ区	P 64	姫島産黒曜石	1	8.4		Ⅰ区	包含層等	安山岩	1	1.0	
Ⅰ区	1 号掘立柱建物跡	凝灰岩	1	0.8	石包丁の石材か	Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	1	0.3	
Ⅰ区	1 号溝	姫島産黒曜石	1	4.3		Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	1	7.6	
Ⅰ区	SX － 02 谷状落ち込み	姫島産黒曜石	3	13.7		Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	1	4.3	
Ⅰ区	SX － 02 谷状落ち込み	姫島産黒曜石	1	4.1		Ⅱ区	106 号住居跡	腰岳産黒曜石	1	4.1	
Ⅰ区	SX － 02 谷状落ち込み	腰岳産黒曜石	1	1.2		Ⅱ区	107 号住居跡	姫島産黒曜石	1	1.7	
Ⅰ区	SX － 02 谷状落ち込み	黒曜石	1	4.6		Ⅱ区	108 号住居跡	姫島産黒曜石	3	2.0	小×3
Ⅰ区	SX － 02 谷状落ち込み	姫島産黒曜石	2	1.2		Ⅱ区	108 号住居跡	姫島産黒曜石	1	1.3	
Ⅰ区	SX － 02 谷状落ち込み	姫島産黒曜石	3	1.5	小×3	Ⅱ区	108 号住居跡	姫島産黒曜石	2	3.8	
Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	6	44.8		Ⅱ区	109 号住居跡	姫島産黒曜石	2	5.0	
Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	11	30.4		Ⅱ区	114 号住居跡	姫島産黒曜石	1	4.1	
Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	1	5.5		Ⅱ区	116 号住居跡	姫島産黒曜石	1	6.4	
Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	2	4.7		Ⅱ区	124 号住居跡	姫島産黒曜石	2	5.4	
Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	1	6.9		Ⅱ区	124 号住居跡	チャート	1	15.1	黄色
Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	1	31.3		Ⅱ区	125 号住居跡	姫島産黒曜石	3	12.6	大×2　中×1
Ⅰ区	包含層等	腰岳産黒曜石	1	0.7		Ⅱ区	125 号住居跡	腰岳産黒曜石	1	0.4	
Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	2	21.5		Ⅱ区	130 号住居跡	姫島産黒曜石	1	3.2	
Ⅰ区	包含層等	腰岳産黒曜石	1	0.8		Ⅱ区	131 号住居跡	姫島産黒曜石	1	6.1	
Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	1	0.7		Ⅱ区	132 号住居跡	姫島産黒曜石	2	9.8	
Ⅰ区	包含層等	腰岳産黒曜石	1	0.3		Ⅱ区	132 号住居跡	腰岳産黒曜石	1	1.8	
Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	2	9.1		Ⅱ区	132 号住居跡	姫島産黒曜石	3	18.0	大×2　中×1
Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	1	1.3		Ⅱ区	140 号住居跡	黒曜石	2	0.3	
Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	1	5.3		Ⅱ区	144 号住居跡	姫島産黒曜石	1	7.4	
Ⅰ区	包含層等	腰岳産黒曜石	1	0.7		Ⅱ区	140 号住居跡	姫島産黒曜石	1	7.8	
Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	5	18.1	中×3　小×2	Ⅱ区	P 113	姫島産黒曜石	1	0.5	
Ⅰ区	包含層等	黒曜石	2	6.6		Ⅱ区	包含層等	姫島産黒曜石	1	21.6	
Ⅰ区	包含層等	黒曜石	1	2.7		Ⅱ区	包含層等	姫島産黒曜石	12	34.6	大×7　中×2　小×3
Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	4	9.7	大×1　小×3	Ⅱ区	包含層等	腰岳産黒曜石	1	0.4	
Ⅰ区	包含層等	安山岩	1	5.4		Ⅱ区	包含層等	姫島産黒曜石	11	44.9	大×5　中×2　小×4
Ⅰ区	包含層等	石英	1	12.3		Ⅱ区	包含層等	黒曜石	2	9.5	
Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	4	14.2	中×3　小×1	Ⅱ区	包含層等	姫島産黒曜石	3	4.7	中×3
Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	2	11.3		Ⅱ区	包含層等	姫島産黒曜石	1	6.8	
Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	2	6.7		Ⅱ区	包含層等	腰岳産黒曜石	1	1.7	
Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	1	15.6		Ⅱ区	包含層等	姫島産黒曜石	1	1.0	
Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	1	3.2		Ⅱ区	包含層等	姫島産黒曜石	3	19.7	大×2　中×1
Ⅰ区	包含層等	石英	1	6.9		Ⅱ区	包含層等	腰岳産黒曜石	1	6.0	
Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	1	2.5		Ⅱ区	包含層等	姫島産黒曜石	1	1.6	
Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	1	2.3		Ⅱ区	包含層等	姫島産黒曜石	2	4.7	
Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	3	133.1	特大×1　大×1　中×1	Ⅱ区	包含層等	姫島産黒曜石	1	0.3	
Ⅰ区	包含層等	腰岳産黒曜石	1	0.5		Ⅱ区	包含層等	姫島産黒曜石	3	4.8	大×1　中×1　小×1
Ⅰ区	包含層等	腰岳産黒曜石	1	5.8		合計		姫島産	248	1141.1	平均重量 4.6g
Ⅰ区	包含層等	腰岳産黒曜石	5	10.5	大×1　中×2　小×2			腰岳産	37	125.4	平均重量 3.4g
Ⅰ区	包含層等	腰岳産黒曜石	1	1.2				その他黒曜石	17	79.5	平均重量 4.7g
Ⅰ区	包含層等	腰岳産黒曜石	1	4.1				安山岩	4	12.9	
Ⅰ区	包含層等	腰岳産黒曜石	3	36.9	特大×1　大×1　小×1			チャート	4	84.5	
Ⅰ区	包含層等	安山岩	1	0.8				その他の石材			
Ⅰ区	包含層等	石英	1	12.8		※石材の識別は肉眼観察による。また、同一遺構中からの出土分については便宜上出土日ごとに分けている。備考の石材サイズ（特大～小）は任意の基準による。					
Ⅰ区	包含層等	姫島産黒曜石	3	18.5	大×3						

第 16 表　調査区出土石器石材一覧

報告書抄録

ふりがな	とうだびわたいせきだい４じ（ほんぶんへん）
書名	塔田琵琶田遺跡第４次（本文編）
副書名	福岡県豊前市大字久路土所在の遺跡
シリーズ名	東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	26（上）
編著者名	小澤佳憲（編）、細石朋希、小林啓、（株）パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒838－0106　福岡県小郡市三沢 5208－3　（Tel：0942-75-9575，Fax：0942-75-7834） HP：http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/kyureki/
発刊年月日	2016 年（平成 28 年）3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
とうだびわた 塔田琵琶田遺跡６次	ぶぜんしおおあざきゅうろつち 豊前市大字久路土 94･114・115－1～5・116	40214	150156	33°35′17″	131°7′30″	20120413 ～ 20130327	4,000㎡	高速道路建設

所収遺跡名	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物	特記事項
塔田琵琶田遺跡４次	集落	弥生時代後期末 ～古墳時代前期	竪穴住居跡	土師器 鉄器 石器	
		古墳時代中期後葉 ～古墳時代後期	竪穴住居跡 土坑	土師器 須恵器 鉄器 石器 滑石製品等	Ｌ字状カマド 滑石製玉作り 鉄器生産 半島系須恵質土器
		古代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡	土師器 須恵器 陶磁器 鉄器	隅カマド

調査の概要	以前よりＬ字状カマドの出土が知られていた、塔田琵琶田遺跡群の第４次調査にあたる。 今次調査でもＬ字状カマドを持つ竪穴住居跡が多く出土した。また、朝鮮半島の資料と形態的特徴が共通する須恵質土器（甑・甕など）、土師器（甑など）が数点出土した。これらのことから、朝鮮半島からの渡来人との関係が大いに注目される。 また、古墳時代後期においては、滑石製玉作り関連遺物や鉄器生産関連遺物の出土があった。これらも渡来人との関係が疑われる資料であり、注目される。 古代においては、隅カマドを持つ小型の竪穴住居からなる集落を調査した。付近には同様の集落が点在する一方、掘立柱建物を主体とする同時期の集落もあり、双方の関係が注目される。

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード 2117104
登録年度 27	登録番号 004

塔田琵琶田遺跡第４次（本文編）

―福岡県豊前市久路土所在遺跡の調査―

東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告 26

平成 28 年 3 月 31 日

発行　九州歴史資料館

〒 838-0106　福岡県小郡市三沢 5208-3

印刷　久野印刷株式会社

〒 812-0023　福岡県福岡市博多区奈良屋町 3 番 1 号